

転生地球人が宇宙最強になるまで

桐山将幸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰もが、一生に一度は地上最強を目指すという。

では、多生を生きた者は、より最強への念を深めるに違いない。

その『座』がある世界に、その手段がある世界に生まれたのなら、尚更だろう。

これは、ドラゴンボール世界で『最強』を目指す地球人の男と、サイヤ人の女が繰り広げる物語である。

※ただし女はTS娘、男は範馬っぽい何かとする

目次

全編読了後推奨

【予告】 転生地球人が転生地球人と戦うまで | 1

本編

プロローグ：転生地球人が範馬を目指すまで | 5

第一話：転生地球人がサイヤ人と出会うまで | 12

第二話：転生地球人が吸血鬼と戦うまで | 21

第三話：転生地球人が大猿を二体作るまで | 36

第四話：転生TSサイヤ人が過去を振り返り飯に釣られるまで

58 |

第五話：転生地球人と転生サイヤ人が天下一をめぎすまで | 67

第六話：転生地球人が現地最強地球人（候補）と戦うまで | 76

第七話：転生TSサイヤ人が色仕掛けを跳ね除けるまで | 88

第八話：転生地球人と転生TSサイヤ人が雌雄を決するまで

99

第九話：転生地球人たちの天下一武道会が終わるまで | 112

第十話：転生地球人が宴会を楽しむまで | 127

第十一話：転生地球人が弟子入り試験を受けるまで | 151

第十二話：転生地球人が現地サイヤ人と戦うまで | 169

第十三話：転生地球人が意味深な教えを受けるまで | 179

第十四話：転生地球人が理不尽にキレるまで | 190

第十五話：転生地球人が転生TSサイヤ人の願いを知るまで

203

第十六話：転生地球人が才能を誇るまで | 213

第十七話：転生地球人と転生TSサイヤ人が願いを叶えるまで

第十八話：転生地球人と転生TSサイヤ人が再び天下一をめざすま

で

247

第十九話：転生地球人があの男と再戦するまで

259

第二十話：転生地球人が現地最強地球人（候補）と再戦するまで

272

第二十一話：転生地球人が異星人達の成長を見届けるまで

286

第二十二話：転生地球人が始まりを想うまで

302

第二十三話：転生地球人達が師匠と楽しく観戦するまで

319

第二十四話：転生地球人が決勝を闘うまで

333

第二十五話：転生TSサイヤ人が未来を託されるまで

351

第二十六話：転生地球人が力を望むまで

365

第二十七話：転生地球人が背負うまで

381

第二十八話：転生地球人が我儘を通すまで

399

第二十九話：転生地球人が多くを背負い戦うまで

414

第三十話：転生地球人がただ一つ背負うまで

429

第三十一話：転生地球人と転生TSサイヤ人が再会を誓うまで

447

第三十二話：転生地球人が魔なるものと相対すまで

461

第三十三話：転生地球人が摩訶不思議な冒険を終えるまで

480

第三十四話：二人がもう少し先の未来を見据えるまで

499

第三十五話：転生地球人が戦友の兄と出会うまで

522

第三十六話：転生TSサイヤ人が森へと帰るまで

544

第三十七話：転生地球人が空を見上げるまで

562

第三十八話：転生地球人がその名を証明するまで

581

第三十九話：地球人達が空からの敵に備えるまで	602
第四十話：転生地球人が侵略サイヤ人と戦うまで	627
第四十一話：転生地球人が愛を語るまで	651
第四十二話：転生地球人が星に願いをかけるまで	676
第四十三話：転生地球人が宇宙との戦いを始めるまで	703
第四十四話：転生地球人がその敵を見出すまで	718
第四十五話：転生地球人が戦隊で戦うまで	732
第四十六話：転生地球人が『戦い』と向き合うまで	758
第四十七話：転生地球人があの日进行うまで	778
第四十八話：転生TSサイヤ人が手を取って握るまで	806
最終話：転生地球人が宇宙最強になるまで	832
エピソード	866

全編読了後推奨

【予告】 転生地球人が転生地球人と戦うまで

【特報】

「『時の部屋』に異常……ですか」

「うむ……」

地球の神とソシルミがつかつかと、緩やかに曲がった神殿の通路を小走りに突き進む。

「時の部屋はこの星の時間を管理する施設、問題があるなら見逃せません……ですが、なぜ私に？」

「今回の異常はどうかやら、時の部屋の向こう……この星の時間流にあるようなのだ、そこへ入らねば調査も修正もままならん」

「ではなおさら、神様ご自身が向かわれるのが確実では」

「時間の流れに抗い、乗りこなすには神の技と強き力、そして高い純粋さを保った善の気、すべてが必要じゃ、今の地球でそれを兼ね備えた者は……」

「……善の気云々はともかく、私にしか適性がないのであれば、仕方ありません」

神は小さくうなずき――

「いや……」

冷や汗とともに、言葉をつないだ。

「これはまるで、おぬしを招いているようだ」

神が一つの小部屋の前で立ち止まる。

大小種類様々な時計盤に包まれた部屋――深淵なる神の秘術によって作られた空間。

「これよりおぬしは時間の旅をすることになる、くれぐれも迷うなよ、迷えば、時の亡者に……」

「分かっております、神様」

勇む愛弟子を前に、神は小さくほほえみ、その背に触れた。

白衣を着た範馬が、じろりと俺を睨む。

視線の高さは全くの同じ、否……その赤い瞳が持つ、虹彩のパター
ンまでも。

「偏袒右肩の……なるほど、お前はアエ家を追放された後、チャパ王
に師事した世界の私といったところか」

「……パラレルワールド、フューが飛び出してきたりしないよな」

「なに、やることは一つだ」

目の前の範馬、そう、おそらくは『アエ・ソシルミ』が、忌々しげ
にほくそ笑んだ。

その笑みの意味を問う前に、白衣の俺は両脚両腕を誇示するように
広げる。

「情報によれば、並行世界の融合を防ぐためには、すなわち、その起
点である我々を削減せねばならないということらしい」

そして、その範馬は、背ではなく――

「――『変身』」

自らの全てを、鬼へと変じさせた。

「……ただの情報を鵜呑みとは、科学的じゃないな」

「どうだっていいさ、科学より大事なものが、俺達にはあるだろう
？」

「ありやあ、範馬は範馬でもジャックハンマーつてどこか……、なあ
？ 師匠のお姉ちゃんのお弟子さんよ」

「妙な言い方をするな」

「つままない、……でも面白い、俺でも魔法使いになれば、お高く止
まるんだな」

亀甲を背負った範馬と、水晶玉にあぐらを組んだ範馬が隣り合って
戦場を見る。

争う鬼と、鬼を背負った男を見ながら……。

「名だたる科学者に師事し、ついには自らを改造した俺……本来俺が志したあり方からはかけ離れていると言わざるをえんな、魔法使いの俺が言うのもなんだが」

「ほんとだよ」

「……………」

上の重量を失った水晶玉が軽く浮き上がるのと、巨大な音を立てて亀甲が地面を割るのは、ほぼ同時だった。

【転生地球人が転生地球人と戦うまで】

銀河パトロール官給の光線銃をくるくると弄びながら、ソシルミがつぶやく。

「パラレルワールドの『アエ・ソシルミ』を集め、潰し合わせる……なんだか、どこかで聞いたような話だ」

答えて、ゆらりと『界』の黒布が動く。

「では、どこかで聞いたような結末が用意されているだろうな」

『界』のソシルミは、指輪の嵌った手を構え、じつとりと虚空を睨んだ。

「なあ……秘密をそつと聞かせてくれ、……『本当の俺』よ」

近日公開。

「全艦、ワープ『C』発令、超高次元跳躍を開始する」

白い軍服の、ソシルミではない男が、肉の艦橋で静かに命じた。

↓
は
じ
め
る

本編

プロローグ：転生地球人が範馬を目指すまで

インド風の豪華絢爛な王城、その中庭に配置された石の武舞台で、俺は一人の偉大な武道家と対峙していた。

「……俺が貴方に挑戦するのは、まだ早いと？」

「その通りだ」

その偉大な武道家とは、チャパ王。

彼は世界的な人気漫画であるドラゴンボールのサブキャラクター……いや、名有りモブの一人であり……俺の師匠だ。

天下一武道会を二度制したチャンピオンで、主人公の師匠やライバルたちにも一目置かれるほどの実力を持ちながらも、登場時期が遅く、世界レベルを遥かに超えた戦力を得た主人公を前ににあっけなくやられてしまう、という役回りの男が、5歳から8年間にわたって俺が仕えてきた師匠だった。

「そうは思いません、俺も武術を磨いてきた」

「おまえはまだ13歳だ、いかに恵まれた才能を持っているようと、それはあくまで同年代に対しての話に過ぎん」

「私も私なりに武を磨いてきましたよ、今では高弟の方々でも私に敵うものはいません」

武舞台の傍ら、俺とチャパ王の対面を見守っていた『高弟』たちがざわめき、俺に刺すような視線を向けてくる。

だが俺も、チャパ王も、彼らに一瞥もくれてはやらない。

「それだけではない、わたしはおまえが夜な夜な化け物どもと戦っているのも知っている」

「……バレていましたか」

「その程度のこと、気づかぬとも思ったか、師を甘く見るものではないぞ」

化け物とは、魔族とかモンスターとか呼ばれる夜の闇に潜んだ種族のことだ。

常人よりも優れた身体能力を持ち、人を食ったり拐ったりする奴らは鍛錬にもってこいの素材だった。

……俺の師匠であるチャパ王は、武術の神と謳われた亀仙人ですら高く評価せざるを得ないほどの実力を持っており、同門はおろか、モンスター相手の苛烈な戦闘を越えてもなお、勝利への絶対な自信を抱けない強敵なのだ。

「では、挑む理由もお分かりいただけただけなことでしょう、今なら師匠と互角以上に戦えると確信したのです」

「アエ・ソシルミ……いや、ソシルミ、おまえは……」

「……はい」

「いや、こうなれば最早言葉は無用か……構えろ！我が弟子ソシルミよー！」

チャパ王……師匠は俺に掛けようとした言葉を捨て、一礼の後、本気の構えを取った。

すると、傍らに控えた小僧が銅鑼のぼちを持ち上げ、礼を済ませた俺の顔には笑みが浮かぶ。

自分でも容易に想像がつく、恋い焦がれ、待ち望んできた戦いを前にした武術家がする壮絶な笑みだ。

闘気で二人の僧衣がはためき、裾がたなびく。

「……はじめー！」

——銅鑼の音が響く中、ついに戦いの火蓋が切って落とされた。

最初に仕掛けたのは、挑戦者である俺だ。

「シイッツ!!」

「ぬあー！」

俺が放つ刻み突き、すなわちジャブの一種を、師匠は腕の防御で防ぎきり、そのまま伸ばした拳に手刀を叩き込みにかかると。

それを察知した俺は逆に懐に飛び込みにかかり、飛び込み際に放った膝が師匠による迎撃の膝と激突し、潮時を感じた俺たちは互いに弾かれるように距離を取った。

未だに、銅鑼が奏でる響きは収まっていない。

「……腕を上げたな」

「師匠こそ、今ので仕留められるつもりだったのに」

本当に今ので仕留められると思っていたわけでもないが、かつて、第20回天下一武道会で見た師匠の動きは、今ほどのものじゃなかった。

……実力を出すに値するほどの敵が居なかっただけかもしれないが。

「ふん、全力も出さずによく言うものだ！」

「それはお互い様でしょう！」

今度は両者が同時に駆け出し、丁度武舞台の中央で衝突する、小手調べなどではない本気の衝突だ。

鍛え抜かれた肉体が激突し、擦過し、絡み合い、ねじり合い、弾き合う。

二人の足元もまた、拳にとって、自ら体全体にとって最良の位置取りを探りつつ、敵の攻撃を警戒し、隙あらば蹴撃をねじ込んでやろうと機会を伺い合っている。

だが、終わらせる！

「フツツ!!」

俺は一息に勢いを付けて地面を叩き、二度のステップで師匠の背後に回り込む。

「チェリアアツツ!!」

「つつああー！」

「今のを防ぎますか！」

そして、叩き込もうとした大ぶりのリアアット攻撃に、ギリギリのところまで反応した師匠が腕を合わせる。

だが、ダメージに体勢を大きく崩した師匠はそのまま後ろに転がり退く。

一瞬の猶予を与えられることで広がった視界の隅には、師匠の苦戦に慄く同門たちの姿が見えた。

皆、圧倒的な強さを持つていた師匠が押されていることを信じられないか、信じたくないといった様子だ、

「ぐ……あ！ さすがだ、ソシルミ……！」

「師匠こそ、今度こそ完璧に貴方を倒すはずが、これまで防がれてしまうとは」

「……おまえは本当にわたしを超えるつもりでいるらしいな」

「今更何を言うんです、もちろん入門したときからその気持ちは変わっていませんよ」

「ふふ……ふはは！ いい気分だぞソシルミ！ おまえのような弟子はここ20年いなかった！」

師匠は突然、笑いながら自らの弟子たちを愚弄し始めた。

「かつて、弟子たちはおまえのようにいつか私を倒すためと修行を重ねていた、だがそれも最初だけのこと、いずれ才能の違いと努力の不足を思い知り、わたしを倒すことを諦める、それどころか、今では最初から諦めている連中ばかりだ」

「……師匠」

「8年、人生の中では短い、少年にとっては半生全てを賭して、おまえはわたしを超えることを願ってきた、そして……今日、それが叶う」

「まだです、師匠！」

「そうだな……終わらせるぞ！」

師匠、天下一武道会を二度制覇した、地上最強の男はゆらりと立ち上がった。

そのまなざしは、まさしく現世界最強を名乗るにふさわしく研ぎ澄まされ、その緩慢に見える動作にすら、うかつに触ればただでは済まぬ気迫が立ち込めている。

そして、構えを取った、先程とは打って変わって小さな構え、手の動きのみに全霊を集中する、必殺の構えだ。

「行くぞー！」

「はー！」

師匠の手がゆらめき、神がかった速度で次々と打撃を繰り出す。

一撃一撃が必殺級にして、それぞれが致死のコンビネーションに繋がり、一つでも捌き損ねれば襲い来る拳の前に為す術もなく引き裂か

れる。

その素早い動きと揺らめきが生み出す残像が、手を八つに見せるとされる『八手拳』、実力を発揮する姿すら見せぬ水準の武道家にあつてなお、伝説として語られる絶技だ。

「——ッツツ!!」

「……………!!!」

二人の手が次々と交差する、一瞬たりとも気を抜くことの出来ない応酬の中で『お留守』の足に意識を向けることなど、できはしない。八手拳は足を捨てた生ぬるい技などではなく、同格以上の相手にさえ全力の対処を強いる終わりのない連撃こそが、この技の本質なのだ。

俺もまた、八手拳を持つて八手拳に相對する。

「拳が全く見えない……………」

「速さだけじゃない、凄まじい威力だ、音だけでわかるぞ!」

「まさか、師匠が押されて——」

同門たちのざわめきは拳の応酬の中に吸い込まれて解けてゆく。

師匠が拳を突きこめば、俺が平手で逸らす、俺が手刀を叩き込めば、師匠が甲で弾く。

逸れた一撃が互いの頬を裂き、腹を裂き、肩を打ち付け、やり取りを行う拳そのものもまた、またたく間に血を吹き出し、生傷を増やしていく。

果てがないようにも見えたその応酬は、時間にしてわずか数秒、200合を超えたほどで、限界を迎えた。

「噴ツツ!!」

「ガ……………」

俺の拳が師匠の胸元に突き刺さる。

師匠は崩れおち、そのまま俺の足元に倒れ込んだ。

「師匠」

「……………、降参だ」

「は、はい!試合終了!ソシルミの勝利です!」

もはや、歓声も、悲鳴も、どよめきすら上がらなかった。

皆が理解していたのだ、師匠と俺は完全に公正な果し合いを済ませたこと、そして、それは自分たちが目指すことすら出来なかった、師匠が望んだ師匠超えそのものであることを。

「ソシルミ……おまえの勝ちだ、わたしを倒したおまえには権利がある……」

「……………」

「この道場の後継者となりわたしの娘か孫娘を娶る権利、この道場を去って新たな流派を打ち立てる権利、このわたしを見限り、新たな師匠を見つけて強さを求める権利……わたしが与えられる限りの武道家としての栄光を、全ておまえに与えよう……」

師匠は俺の勝利を認めた。

……俺が師匠の教えを受け始めたのは5歳の時、俺の今の人生における生家、ア工家が、俺の圧倒的な身体的才能に怖気づき、半ば放逐の形で俺をこの道場に預けたことがきっかけだった。

それから8年間、俺はずっと、この男を超えることだけを考えて生きてきたのだ。

前世で読んだ漫画『ドラゴンボール』が教えてくれる宇宙の戦いを夢見るよりも先に、俺は師匠の見せた圧倒的な強さに惹かれた！

「師匠、俺は旅に出ます、より強い敵を探し、より強い師を探して、さらなる高みに登るためです」

「そうか、行くのか……」

師匠は淋しげに、しかし、誇らしげに俺を見つめている。

それに感極まった俺は、しゃがみこんで師匠の手を取った。

「……師匠、俺が強くなれたのは貴方のおかげです、俺がどこまで行っても、貴方の武術が一緒にいます」

それ以上の言葉はなかった、ただ、最強の座に俺んだ男と、それを破った挑戦者の間に芽生えた、何よりも堅い情だけがあった。

「ソシルミ、もう出るのか」

「ええ、ここに長居しても意味はありませんからね」

「……ところで、天下一武道会には出場するつもりなのか？」

次の天下一武道会は一年後、第21回……悟空たちの出場する天下一武道会だ。

「もちろん出ますよ、どんな猛者が現れるのか楽しみです」

「そうか、わたしもお前の活躍を楽しみにしておこう」

実のところ、俺は次の天下一武道会における有力な参加者を全員知っているのだが、それは言わないでおく。

「では、私は出発します……師匠も、お元気で」

「……………ああ、また会おう」

師匠に手を振ってチャパ王城の門を出る、これからは俺も唯一人の武道家として、この世界を生きていくのだ。

さあ、最初はどこに行こうか、いきなりカリン塔に行ってもいいし、近く迫った天下一武道会の下見も悪くない、亀仙人の元を訪ねてもよいし、しばらく諸国漫遊して武者修行をするのもいい。

……アエ・ソシルミ、エア味噌汁。

アエ家からは放逐されてしまった上、ソシルミも語呂合わせでしかない名前だが、俺はこの名が持つ意味を気に入っている。

俺はきつと、地上最強の生物を目指すため、この世界に生まれ直してきたのだろう。

門の外に向き直って見る道の先には、無限に広がる武術の世界が広がっていた。

↓つづく

第一話：転生地球人がサイヤ人と出会うまで

「ぎゃあああ!!」

山道の路肩、絹を裂くような悲鳴が宵闇に飲み込まれる。

夜目を凝らして見れば、ひとりの少女を取り囲む醜悪な怪物たちの姿があった。

「ぐへへ……若い女なんて食うのは久しぶりだあ」

「ここんとはあの猿のせいで夜中出歩くヤツなんていなくなっちゃったもんない……」

「おーおれ”ち”がみたい!」

一人の怪物が充血した目で少女の健康的な色をした首筋をねめつけ、彼女の血を飲むことを宣言すると、ほかの怪物どもも次々と『足』『目』『肝』『胸』と様々な部位を思い思いに求め出した。

自らの未来を悟った少女は叫ぶ。

「誰か助け——」

「ひゃひゃひゃ! 誰も来ねえさ!」

確かに、最寄の村からかなり離れたここは獣や虫の鳴き声もうるさく、助けなどとても期待できないだろう。

あの魔族たちも、それを期待して娘を浚ったに違いない。

だが、アテが外れたな。

「ツアツツ!!」

「ぐげえ!」

「リーブ! 一体どうし——あびゃ!」

俺は群れの端に居た魔族を不意打ちの飛び蹴りで粉碎した。

魔族どもは一瞬何が起こったのか把握できず棒立ちになる……こちらとしては絶好の機会だ。

俺はそのまま数体の魔族を殺しながら少女に駆け寄り、抱き上げる。

「ひゃっ」

「掴まっている、人質になられても面倒だ」

「は……はい……」

「きさま！ 何者だ！」

「ほう、聞いたことが無いのか？」

魔族どもの目が俺を睨む、こいつらは夜の闇に紛れる種族だ、夜目はよく利くだろう。

「魔族を襲うムキムキのガキ！ まさか……」

「……まあ、多分それで合っているぞ」

もっと気の利いた呼び方はなかったのか？

「実力差は明確だ、お前たちに勝ち目は無い、さっさと退散することだな」

「まぬけ！ 女なんぞ抱いておれたちと戦えるか！」

「なら、試してみたらどうだ？」

「え!?!」

魔族と少女の両方が声を上げた。

どちらも、俺が逃げるなりなんなりすると思っていたようだ。

確かに、人間を抱きかかえたままの戦闘となれば、少なくとも片手が塞がり、体幹の自由が利かなくなり、デッドウェイトを負い、敵の攻撃を命中させてはならず、高速戦闘においても制限を受ける。

が、俺にとって弱小魔族の相手をするには丁度いいハンデだった。

「ちくしょう！ これでもくらえ！」

「ひいっ！ 鉄砲!?!」

「ほうほう、そいつでどうする気だ？」

「くそーっ！」

魔族はオートマチック拳銃を抜き、俺の脳天に向けて発砲する、正確な狙いだが、この程度では俺にダメージを与えることすらできない。

俺は鉛玉を掌で掴み取ってから見せびらかしてさらに脅しをかける。

「これで分かっただろう、何度も言わせるな、お前たちに勝ち目は無い、自分のねぐらに帰れ」

「ひいひい!! おまえたち！ズラかるぞ！」

生き残った何体かの魔族は、隊長らしき拳銃持ちの号令で次々と逃

げ去って行った。

「……ふう、魔族狙いで夜歩く習慣が凶らずも功を奏したってところか」

「い……いつもあんなのと戦ってるんですか？」

「ああ、もっと数が多くてでかい武器を持っている連中を相手にしたこともある」

「お強いんですね……なら、あの猿の怪物も……」

「猿？」

「……いえ、なんでもないです」

猿というのは少々気にかかる単語だ、俺はそのまま聞き出そうとするが、少女は疲労のあまりそれどころではないらしく、俺を村まで案内すると、家に帰ってそのまま眠り込んでしまった。

少女を見送り、その両親の感謝攻勢を振り切って家を去ると、村人の一人、宿屋の女将が少女の礼をするため俺を泊めたいと申し出てきた。

「これが一番の部屋の鍵だよ、……だけど、この辺りで旅のお客さんとは珍しいね」

「旅人が少ない？ この村は交通の便がそれなりに良いはずだが、まさか魔族か、それともあの子が言っていた猿の影響なのか？」

「……あんたはよっぽど遠くから来たみたいだね、魔物なんてここいらじゃどこでも出るよ、怖いのはあの山の猿の方さ」

「山の猿、猿型のモンスターの群れか？」

「いんや、群れだったら軍隊が出て倒してくれるさ、一匹だよ、……めちゃんこでかい一匹の猿だ」

女将は一種忌々し気に、一種愉快そうに、山に出る化け物の話を始めた。

「……この世界に居るでかい猿、というと、俺には一つしか思いつかない。

「その化け物猿は夜だけ出るのか？」

「なんだ知ってんのかい、そうさ、恐竜よりもでっかい見上げるほどの大きさで、ヘンテコな鎧を着た猿の化け物が出るのさ、本当に時々

だがね」

「時々、それは満月の日か」

「こりゃ驚いた、全部知ってるんじゃないかい」

間違いない、その山に出現するのは大猿、サイヤ人が満月の光を浴びた際に変身する巨大な怪物だ、鎧とは……サイヤ人が着ている戦闘服だろう、あの戦闘服なら、大猿になっても千切れずに残り、元に戻った後多少伸びる程度で形を維持出来る。

「通ってきた村で似た話を聞いたただけだ、しかし、物騒なことだな」

「うんむ、人を襲いはしないが、変な光を吐いたり大暴れで山を崩したり好き放題さ、おかげであの山には入れんようになったし、この村には人が寄り付かん、うちの連中はもうみんな慣れちゃまって、満月の日には大猿見物なんてしに行く有様だがね」

「……次の満月は明日だったな」

「明日も泊っていくかい？」

俺は答えを濁して、この村の周りの地理について尋ねてから部屋に戻った。

……翌朝、俺は朝飯を済ましてすぐに飛び出し、猿が出没するといふ山に出発する。

山と村は数キロ離れているが、もし猿が俺の考えている大猿なら、村からでもぼつちりと姿が見える程度の距離に、その山はあった。

「完全に荒れ果てた山だな、しかも所々に踏みしめられた跡や山崩れの傷跡がある」

誤解されがちだが、人間が居る領域の山というものはもとより『自然』なものではない。

人間が丹念に収奪し、整備し、山が生産する生物的な資源を有効活用できるように手を加えるものだ。

この山はかなりの長期に渡って放置されたため、人間が変化させた部分と自然の息吹がせめぎあっていびつな生態系を構築している。

間違いない、ここが例の山だろう。

「おそらくはここにサイヤ人が……しかし、なぜだ？」

戦闘民族サイヤ人は10年近く前にその拠点である惑星ベジータもろとも大半が消滅している。

尤も、宇宙種族が惑星一つの壊滅だけで即座に死滅するなどということはなく、何らかの原因で他星に居たサイヤ人が多数生き残っているのだが……。

「この星に存在するサイヤ人はただ一人、カカロットだけのはずだ」
ドラゴンボール、この世界の主人公であるカカロット、後に孫悟空と呼ばれる男は、その父バーダックによって地球に逃され、武術の達人孫悟飯に育てられた。

それ以外に地球にやってきたサイヤ人は居ないはずだし、凶暴で強力なサイヤ人の存在はすぐに発覚し大騒ぎになるだろう。

もしかすると自分と同じく、この世界に転生してきた人間かもしれないし、なんらかのバタフライ・エフェクトで現れた人物や、俺の知らない外伝などの人物かもしれない。

……いずれにしろ、今のうちに調べておく必要がある。

「……破壊痕や食い残しの骨はこの周囲に集中している……サイヤ人の住処はこの辺りか」

サイヤ人はその頑健な肉体を維持するためか、大量の食事を必要とする傾向にある、その食欲たるや、制圧した地域で異星人の食料を略奪するどころか、その異星人そのものを貪り食うほどだ。

果実などでは山がいくつあろうと足りはしない、獣や恐竜、巨大魚などを狩って食わなければその胃袋を養うことはできないだろう。

「しかし……、この骨は異様だ」

恐竜も、獣も、全て頭か胴体の骨が粉碎されている。

最初は風化ゆえのものかとも思ったが、まだ組織の一部が残っている真新しい死体でも粉碎されているのだ。

サイヤ人はどうやら、全ての獲物を撲殺しているらしかった。

更に異様なのは、死体の肉がほとんど失われているにも関わらず、焚き火などの痕跡がなく、地元住民もそれについて証言していないことだ。

「……エネルギー弾で肉を焼いているのか？」

俺が死体を詳しく確かめようとしたその瞬間、ガサ、と、茂りきつた藪が蠢く。

周囲に獣の気配も匂いもしない中、この状況で動くものはただ一つ。

「サイヤ人か！」

「!!」

反応した！

そして、その直後、聞き覚えのない……いや、『よく聞き慣れた』奇妙な音が響く。

これは気を溜める――

「……ぎ……がぐ……!」

「ま、待て!! こんな森の中でぶっ放すんじゃない!!」

「ぐ……ああ!!」

気体とも、液体とも、固体とも、プラズマとも違う、しかし実体を持った光る塊！

藪の中で一瞬光を放ったそれは亜音速で俺に迫り、横っ飛びで辛うじて避けた俺の服を焦がし、背後の木を爆裂させて消滅した。

喰らえば危ない、だが、避けられる一撃だ……もしかしたらわざと避けられるように、威力か速度を絞ったのかもしれない。

だとしたら、まだ対話の道もあるはずだ。

「……俺に戦う意思はない、攻撃をやめて姿を見せてくれ」

「……」

攻撃されたからと、うかつに戦闘を挑むようなことはしない。

敗北が死に繋がらないのであれば圧倒的な実力差の前に砕け散るのも一興だが、無謀な戦いで命を散らす趣味はない。

地上最強の生物を目指すと言っても、このパワーバランスがあまりにもくつきり出る世界では、猪武者ではいられないのだ。

「どうした、俺は丸腰だ、ここにはただ、お前が何者なのか探るためだけに来た」

「………シッ、シ、ッシ」

数回、息が口を擦る音がする、笑い声か、何かの合図か、俺が警戒

を深めようとしたその時、その『音』は、突然形を持った。

「し、しんじられうか、しんじられるか、そんなこと！」

……音はどうやら、サ行の声を出そうとして失敗した結果出たものらしい。

ようやく出たその声は非常にたどたどしい、というか、完全に呂律が回っていない。

「どうやら、大分長い間人との接触を避けてきたようだな」

「そ……そうら、そうだ……かくえ、かくれてた」

その一方、言語の使用と理性の働きは完璧だ。

他所からやってきて自分の正体を探る謎の武道家に対して正しい警戒心を持っているし、しっかりと言葉を聞き取って、自分なりの言葉で返しているのだから、頭脳は完全な状態と見るべきだろう。

しかし、人と会いたくないというのは妙だ、サイヤ人なら地球人などいくらでも手玉に取れる、軍隊だって敵じゃないはずだ、それにもそも……

「隠れてたとは言いが……近隣の村々では大猿の噂が立っているし、この山は半ば禁足地の扱いだ」

「うわさ……みらえ、みられてたのか……」

「自分が何者なのか自覚しろ、巨大な、火を噴く化け物だぞ、数十キロ先からでも気付く」

「……………」

大猿の身長はまちまちだが、大体10メートルから40メートルといったところだ。

10メートル寄りなら鋼鉄ジグあたりの大きさだが、40メートル寄りならウルトラマンやゲッターロボに匹敵する巨大なサイズになる、それが暴れまわりエネルギー波を発射したらちよつとした戦争だ。

しかも話を聞く分には、自分が大猿に変化していることを自覚しながら、繰り返し大猿に変身していたらしい。

頭脳に問題はないという考えを訂正すべきか？

「とにかく姿を現せ、お前が少女だろうと幼女だろうとサイヤ人な

ら、地球人の俺を恐れる意味はないだろう」

「……わかった」

そう、少女、幼女。

サイヤ人（仮）の声は幼い女のそれだった。

昨日の夜に助けた村娘は14程度だったが、それよりも更に幼い。

俺の目の前に現れた少女の姿は、見立てでは12歳程度、顔立ちも体格も、声の印象に違わぬあどけなさを漂わせたものだった。

黒髪、黒い瞳、日本人同様の淡褐色の皮膚に、しつぽ、旧式のフリーザ軍戦闘服、これぞまさにサイヤ人と言った出で立ちだ。

「まず、自己紹介と行こうか、俺はソシルミ、一応『アエ』という名字があるが……、5歳で親に捨てられてからは、この名字が嫌いだ、名字では呼ばないでくれ」

「……ソシルミ……そしる……み……みそしる……？」

「そうだ、アエ・ソシルミ、今は13歳だ、ただソシルミと呼ぶか、地球人とでも呼ぶといい」

俺の名を聞いたサイヤ人は首を傾げて何やら怪訝な顔をしたが、すぐに立ち直って自らの名を伝えてきた。

「プリカ……プリカだ、としては……わかあ、わからない、たぶん……じゆうにさい」

「……実にサイヤ人らしい名前だ」

「そういうお、そういうのは、やめろ」

「なんだ、褒めたつもりだったんだがな」

「うれしくな——む？」

まだ話は途中だというのに、サイヤ人は急に黙り込み、きよろきよろと周りを見渡し、聞き耳を立て始めた。

俺もその後を追って周囲の気配を探るが、ぼんやりとした違和感に包まれるばかりで、明確な何かを感じ取ることはできない。

……どうやら、長くこの山で暮らしているこいつならではの感覚があるようだ。

「……何が起こった？」

「まだ、わからない、でも……いきもも、……いきものがうるさい、

きようりゆうがきたときみたいだ」

「脅威が迫っている……というわけか、俺のことではなさそうだな」
しばらく二人で固まっていると、『脅威』はわかりやすい形で目に飛び込んできた。

……というか、物理的に飛び込んできたのだ、弾丸が。

「うわっ！」

「フツ!! ハアツ!!」

俺は自分たち二人に向かって放たれた弾丸を手のひらで弾き飛ばす。

サイヤ人は反応すら出来ていない、どうやら、地球生活が長すぎて鈍っているようだ。

感覚を研ぎ澄ますと、感じ慣れた不快な感触が俺の精神を撫でる、これは……。

「魔族の襲撃だ、すぐに次が来る、お前は隠れている」

「お、おれもたたかう！」

サイヤ人は俺が差し出した庇う手を跳ね除け、戦闘態勢に入る。

その足には武者震いとは思えない震えが走り、その恐怖に引きつった笑みには隠しきれぬ戦意が滲んでいた。

サイヤ人で、少女。

初対面でエネルギー弾を撃ち込みながら、手加減をする。

恐怖を抱きながら、戦いを望む。

山奥に10年近く潜伏しておきながら、大猿に変化し続ける。

どうにもちぐはぐさの否めないこのサイヤ人との出会いは、一体何を意味しているのだろうか。

↓つづく

第二話：転生地球人が吸血鬼と戦うまで

「があ!!」

サイヤ人が叫びながら放った光弾はまっすぐ進み、着弾地点から周囲10メートルの魔族と地形を消し飛ばす。

それは溜めて溜めて放つ必殺技などでは全くない、手のひらにぐっと力を込めるような動作を挟むだけで、簡単にエネルギーの塊が作られ、放たれてゆく、それが一分間に数回のペースで繰り返されていた。

「シャッツ！ トアッツ!!」

一方、俺は俺たち二人に向かって迫りくる魔族の刃をへし折り、首をねじ切り、飛来する弾丸を弾き飛ばす役割、いわゆる前衛の戦士の役割を負うことになっていた。

取り決めがあったわけではない、しばらく続いている戦いの中で、自然とそのような役割分担が、俺たちの中で生まれたのだ。

「城には入れるな！ ガキどもをぶっ殺せ!!」

そう、戦いは長く続き、戦場は奴ら魔族の拠点である、不気味な城の足元に移動していた。

しかし、魔族ども、うかつな奴め。

「ヘッ！ 自分から居場所を教えてくれるんじゃないやあ世話ねえな！」

「ひっ……ぼげっ！」

俺は腕を振り回してがなり立てる隊長格の懐に飛び込み、その首に水平チョップを叩き込んで、頸椎を破壊する。

いかに人間より強靱な化け物といえど、天下一武道会優勝クラスの師匠を上回る實力を持った俺の前では常人と大差ないのだ。

「おい、プリカ！ そろそろ陽が沈むぞ！ 奴らキリがないが……

このまま朝までやるか!？」

「があ！ ……お、おれはこのままでもいい!!」

「そうか、それも結構！」

隊長格を失ったことで一瞬浮足立った魔族に対しサイヤ人……プリカは猛烈な勢いでエネルギー弾をぶちこんでいく。

最初、俺を相手にああまで力を込めて放った一撃が木一本へし折つ

て終わりだったのが嘘のようだが、プリカの凄まじさはそこだけではない。

「死ね!!」

「ちっ！ あたるか！ があっ!!」

「ぎええ!!」

プリカは機関銃を抱えて飛び込んできた翼のある魔族の弾丸をすんでの所で回避し、そのままエネルギー弾で魔族を撃墜……というか爆散させた。

驚くべきことだが、プリカは初めて銃を見たあの森での戦いから半日しか経っていないというのに、もう魔族が放つ機関銃の弾を見切り始めている。

流石に、俺のように放たれた弾丸を放たれた後から弾くような練度には達していない、だが……これが、戦闘民族サイヤ人が持つポテンシャルか。

俺の体が、戦慄とも武者震いとも、単なる興奮ともつかない震えを起こす。

「きえろ!! だっ！ ぐがっ!」

「絶好調のようだがスタミナは持つのか？」

「へいきだ!」

幼い顔に戦意を滾らせ、プリカは俺のなけなしの心配をあっけなく否定した、実際、かなり血色がいいので、大丈夫なのだろう。

……あの森での戦いは、実のところあっけなく終わった。

頭に血が上って復讐戦を挑んできた魔族の集団は、俺の武術とプリカのエネルギー弾、それと力任せの『殴り飛ばし』や『えぐり取り』などを前に、手も足も出なかったのだ。

だが、その戦後、ごく小さな会話が俺たちの中で交わされ、それが俺とプリカをこの不気味な城に駆り立てたのだ。

『そ、ソシルミ、……こいつあ、こいつらはなんだ?』

『魔族、魔物、化け物、呼び方はなんでもいいが面倒な奴らだ、夜にだけ出てきて、人間を襲う』

『いまは、あさだ』

『ああ、昨日の夜、その村の娘を拐って食おうとしてたんで俺が追っ払ったんだ、その復讐ってわけだろう、げに恐ろしきは食い物の恨みってわけだな』

『……ソシルミ、こいつら、どこからきたんだ？』

数時間後、俺とプリカはこの城の膝下で魔族と戦っていた。

魔族の根城が、あの山からほど近い、この不気味な山脈地帯であることはすでに十分目星をつけていたのだ。

しかし……この山脈、どこかで見たような覚えが……。

「ぎぎぎっ!!」

「げえっ！ げえっ！」

「にー！ にげうー！ にげるな!!」

俺が戦いながら思考の海に潜ろうとしていると、突然、飛行型の魔族が数体、霧の上に向かって飛び立ち始めた。

城に報告に行くつもりか、と思って見上げると、何やら上空を飛ぶ航空機が一つ。

「まずいぞー！プリカ！」

「く、くそ!!」

プリカは歯噛みしながらエネルギー弾を魔族に向けて投げつける。

しかし、距離があつて中々当てることができないでいるうちに、魔族どもはその小さな航空機に集り、墜落させてしまった。

航空機を墜落させた魔族どもは、ゆうゆうと飛び去り、数匹は城へ、数匹は急降下して落ちる航空機を追ってゆく。

「だめだ！ くそ！」

「まだ奴ら落ちた機を狙ってやがる！ 生き残りに止めを刺す気だぞプリカ！」

「そ……そうか！ ぐ……があー！」

大きく気を溜めて放たれたエネルギー弾は、落ちていく機体を追いかけていた魔族を完全に消し飛ばす。

数発でカンを掴んでしまったプリカの凄まじさを更に褒めたいところだが、俺もエネルギー弾を撃てれば、当たらずとも牽制にはなった……いや、まず殲滅が間に合つて、あの航空機が犠牲になることは

なかったはずだ。

そう考えているうちに、航空機は山頂にほど近い山肌に激突してしまっただ。

「……………あそこに行く」

「クルーが生きてるとは考えにくいが…………」

「いく」

プリカは悲痛な顔持ちで墜落現場行きを宣言した。

浮かぶ表情は、魔族に対する義憤、そして、自らが周辺住民にかけた迷惑を、魔族討伐をもって償おうとしたのであろうその意思が踏みにじられた痛みだ。

「分かった……………だが、気にするなよ、魔族はいくら倒してもキリがない、どう戦ってもどこかで犠牲が出る」

「……………そうか」

俺はプリカの肩に手を置き、のけられつつ、一応慰めてやる。

こいつは俺の慰めを真に受けることは出来なかったようだが、俺が慰めているということくらいは、どうやら伝わったようだ。

……………そして、魔族が粗方片付いた無人の山を駆け上って墜落現場にたどり着くと、驚くことに中に乗っていた人間は生きていた。

「人に、服を着たブタに、……………なんだこれ」

「……………!!!」

いや、こいつらの正体を、俺は知っている!!

人、中華風の服装の青年は、ヤムチャー！人民服を着たブタはウーロン!!この……………よくわからない生き物はプーアルだ!!

全員、『ドラゴンボール』の初期レギュラーだ!!

「……………と、とにかく……………こいつらが起きるのを待つぞ、魔族が来ても面倒だからな」

「わ、わ、わかった……………、いきてるなんて、すごいな……………うん……………」
そして、この三人が目の前に居ること、ようやく思い出した!

この山脈地帯は、『悪魔の手』、そして『魔神城』!

初期の劇場版作品『魔神城のねむり姫』の舞台だ!

『魔神城のねむり姫』は劇場版でも初期の初期、確か二作目の劇場版

で、原作における亀仙人の弟子入り課題である『ピチピチギヤルを連れてくる』を改変し、『ピチピチギヤル』を『魔神城の悪魔に囚われたねむり姫』に限定し、悟空とクリリンは弟子入りのために魔神城へ向かう……というストーリーに仕立て直したものだ。

はつきり言って、俺はこの作品がアニメドラゴンボールの中でもトップクラスに好きだ。

『魔神城のねむり姫』は見どころに溢れた良作である。

まず、初期ドラゴンボールらしいとも言えるが少し毛色の違う、SFファンタジー的な魅力を持ったギミックが目を引く。

更に、『Z』以降の作品にありがちな間延びやこじつけの少ないすつきりとした構成と、バランスの取れたギャグとアクション、シリアス要素に加え、シチュエーションや演出に合致したBGMに、しっかりとアクの濃いボスキャラの『ルシフェル』を中心とした、コミカルながらもシリアスにも適合したキャラクターが魅力を与えている。

特に、俺のイチオシはそのボスキャラである、魔物の親玉『ルシフェル』だ。

普段は紳士的なリーダーとしての振る舞いと整った顔立ちを見せながら、いざ獲物や『憎き太陽』を前にすると残虐な本性を顕にし、顔は恐ろしい『モンスター・ダンディ』とでも言うべき風貌へと変化するといった、二面性を持ったキャラクターであり、映画内では、紳士と怪物を激しく往復しながら野望の成就へと邁進する姿を見せた。

ルシフェルは悟空やクリリンが同時攻撃をしかけても底すら見せずにあしらう格闘戦能力と、ビーム弾の発射能力に加え、かめはめ波を放たれた後にあつさり回避する俊敏性と、登場時期を間違っているんじゃないかと思わせるスペックを持っていたが、何より凄まじいのはその野望だ。

なんと、月光を利用して凄まじいパワーを持った宝石、『ねむり姫』を覚醒させ、それを使った大砲で太陽にビームを打ち込んで破壊しようという、シリーズ序盤にあるまじき凄まじい野望を持っている。

……初期作だけあって、出自不明の魔物の類が跋扈しているなど後期の作品との整合性はあまり取れていないのが玉に瑕といったところ

ろだが、そこは広い視野、温かい目で見るほかないだろう。

総括すると、初期ドラゴンボールの雰囲気と比較的精密にトレースしつつ、独自の魅力的な要素もふんだんに盛り込んだ作品。

それが、俺にとつての『魔神城のねむり姫』だった。

「ソシルミ、おい、ソシルミ」

……まさかねむり姫が……こいつは面白いが、太陽が吹っ飛ぶのは少し困るな。

「おい、ソシルミ、こいつらおきそうぞぞ」

「む、すまん、少々もの思いにふけていた」

と、そこまで思い出したところで、ジト目のプリカが俺の服のシワを掴んで呼びかけてきた。

どうやら俺が記憶の海に沈んでいる間に、ヤムチャたちは完全に意識を取り戻しつつあるようだ。

「う……うう……ここは……」

「……！ おきた!!」

「目が覚めたか」

「お、おまえたちは……ま……魔物!？」

ヤムチャはガバッと起き上がり、傍らに居たプーアルを庇うように立ちふさがった。

「お前らを襲った連中は俺たちが倒したよ、俺たちは魔物を退治しにきた武道家だ」

「……に、人間……なのか?」

「ああ、俺はソシルミ、こいつはプリカだ」

「オ、オレはヤムチャだ、ここは遊園地と聞いて来たんだが……」

「ちがう、まものの、すだ」

プリカの無慈悲な宣告に、ヤムチャはショックを受けた様子だったが、すぐに別の重大な事実に気が付き、周りを見回す。

「ブ……ブルマがいない! ソ、ソシルミ! 髪の毛の青い女の子を見なかったか!? オレと同じ位の歳なんだが……!」

「そういうえば、魔物が最初にこの飛行機を襲った時、一人誰かが引つ張り出されていたような気がするが……」

嘘だ、俺の視力は優れているが、日が沈みかけ、霧の立ち込める中、上空の航空機にへばりついた数人の人影が何をしていたかまでは分からない。

ただ、原作でブルマは空を飛ぶ魔物に拐われ、ヤムチャたちとはぐれてしまったということ覚えていたただけだ。

「そ、そうか！ おい！ プール、ウーロン！ 起きろ！」

「……むにゃ……なんだよヤムチャ、まだ夜じゃねえか」

「そうですねよヤムチャさま、夜ふかしは健康によくないですよ……」

「寝ぼけてる場合か！ ブルマが魔物に拐われちまったんだ!!」

俺もこの世界で13年は生きてきた身だ、獣人の類は見慣れているが……、『妖怪』と呼ばれるような激しい異形は中々見慣れない。

しゃべるブタと……何かよくわからない獣、目の当たりにしてみるとかなり異様で、それでいて面白いものだ。

こいつら『妖怪』は全く別のものに変身する能力を持っていて、その能力まである程度コピー出来たり、武道家でもないのにふわふわと空を飛んだり、シリーズ序盤の登場だけあって中々謎の多い種族である。

と、物思いにふけている間に、ヤムチャは二匹への説明を終えたようだ。

「助けに行きましょう！」

「じよ……冗談じゃねえ！ オレは帰るぞ！」

「おまえも来い！ 第一、それで帰ったらおまえ……後でブルマに殺されるぞ？」

「わ……分かったよ……行けばいいんだろ……ちくしょう……」

「よし、じゃあまず、ウーロンは適当な魔物に化ける、プールはお面にでも化けて、変身できないオレの変装を助けるんだ」

「はい！ 変化！」

「げっ……マジで行くのかよお……オレはそんなに長く変身出来ねえから、城に入る時な……」

プールは善良な従者、ウーロンは姑息な隣人、ヤムチャはごく普通の気のいい兄ちゃんと言ったところか。

姑息と言つても、根っからの邪悪さを持っているわけではないのだろうが……まあ、魔物のはびこる城に突入すると言われたら誰だつて断りたくもなるだろう。

と、忍び込む算段を立て始めた三人を眺めていると、プリカが小さく俺に問いかけてきた。

「……………ソシルミ、こ、これかあ、これから、どうする？」

「ふむ、こいつらに同行するか、代わりにブルマ……………という女を、助けに行きたいのか？」

「い……………いや……………、しんぺやつ、しんぱい、だけど……………」

プリカはどうにも、ブルマ救出に対しては及び腰のようで、ここ数時間はなりを潜めていた舌つ足らずも息を吹き返してしまっている。

さつきまでああも戦意を滾らせておいて急に何をしおらしく……………と思つたが、もしかしたら、急に周囲に人間が増えてストレスを感じているのかもしれない。

俺としては、貴重な『ドラゴンボール』への合流の機会だし、優秀な武術家であるヤムチャや悟空たちの活躍を見たいという気持ちもあるし、何かの拍子に救出が間に合わず、ブルマが死んでしまう危険性も鑑みれば、ぜひともヤムチャたちに同行を申し出たいところだが……………。

同行者としては先客にあたるこいつ、プリカが嫌がるなら、俺はこいつと共に、別行動をとつてもいい。

「では、俺たちだけで突入して助けに行くか？ 俺はそれでも構わんぞ」

「うう……………、ああ……………」

俺が譲歩してやると、プリカは頭を抱えて、深く悩みだした。

10年近くも山奥で潜伏するだけの理由がある苦悩だ、簡単に答えが出るものでも、ないのだろう。

苦悶の声を上げながらフラワーロックのようにくねくねするプリカを、俺はだまって見守るしかない。

「な、なあ……………さつき、あんたらが一緒に来てくれるって、言つてたよなっ。」

「ああ、俺は構わんが、こいつが嫌と言えはばどうにもならん、主戦力はこいつだしな」

「な！・なあ！・ あんたら強いんだろ!? 頼むから付いてきてくれよ!!」

ウーロンは情けなくプリカにすがりつく、プリカはうつとおしそうにしつつも、振り払うわけでもなく、更に苦悩を深めてうなりとうねりを増している。

「やめろウーロン！」

「またエツチなことを考えてるんだろ！」

「え!? あ、そう言えば結構やわからか……ぶぎやつ！」

プーアルの指摘によってウーロンがスケベ心を出した瞬間、猛烈な勢いで横っ腹に打撃が突き刺さり、1メートル吹っ飛んだ。

「イ……イテテ……何すんだよちくしょう……あ！」

「どうしたウーロン! ……あ! シ……シツポ！」

「本当です! シツポがあります！」

「何だ、こいつにシツポがあるとそんなにおかしいか」

「いや……友達にシツポが生えたヤツがいて、めちやくちや強いんだ、こいつもシツポが生えてるなら、魔物をぶっ倒せるくらい強くてもおかしくないのかもな……」

ウーロンを弾き飛ばしたのはプリカ自身のシツポだった。

それも、姿勢を崩さずに打撃を加えて弾き飛ばしたらしく、プリカ自身はまだ頭を抱えている。

まあ、突然初対面の、それも異種族の男に性欲を向けられて気持ちのいい女兒はそう居ないだろう、サイヤ人であっても、多分それは同じだ。

「う……うう……」

「大丈夫か」

「お、おれは……へいきだ」

そう言ってるが、顔を覗いてみるとかなり赤い。

「まあ、お前が無事と言うならいいが……さっさと決めないと、手遅れになるぞっ。」

「い……い……い……」

プリカは真っ赤なまま同行を承諾した、俺が真性のロリコンだったから大興奮の絵面だが、そこまでではないのでただかわいいただけだ。

兎にも角にも、急がなければブルマの命、ひいては地球そのものが危うい。

俺たちはすぐさま、魔神城に乗り込むことにした。

岩山の洞窟を利用して作られた魔神城の内壁を閃光と爆炎が貫いてゆく。

バルカン砲を持った魔物たちが駆けつけるも、密集した陣形をエネルギー波で貫かれ、まるでカトンボのように墜落、あるいは爆散する。

数少ない命中コースの弾丸すらも、俺の手によって弾き飛ばされ、接近する陸上の魔物は俺とヤムチャの手によって防がれるので、魔物たちはなすすべもない。

「があ!! だあ!!! うぐああ!!!」

「あの女の子……なんてやつだ! かめはめ波のような技をどんどん撃つなんて!」

そう言いながらも、ヤムチャは俺たちに襲いかかってくる魔族の剣を避け、蹴り飛ばして撃退した。

俺が三体殺す間に一体倒す、くらいのペースだろうか、実力伯仲とは言えないが、素手で魔族を倒せる時点で達人に変わりにない。

魔神城に乗り込んだ俺たちは、これまでと同じフォーメーションのまま、防衛対象に二匹を、前衛にヤムチャを加えて戦っている。

ヤムチャはと言うと、プリカの撃つエネルギー波の凄まじさに驚愕しっぱなしのようだ。

「プリカだ、威力は話に聞くかめはめ波ほどではないと思うが……あの連射性は凄まじいものがある」

「ああ……だが、ソシルミ、おまえも凄まじい使い手だな、オレよりも若く見えるが……」

「13だ、あんたは見たところ16くらいか?」

これも、実際は知っているだけだ。

「そ……それでオレより強いのか……」

「ズルいなんて言わないでくれよ？ 俺もそれなりの修羅場をくぐってきたし、鍛錬だつてしてきたんだ、多分俺より才能のあるやつだつてこの世界にはゴマンと居るだろうしな」

「ゴク……」

さて、ヤムチャは俺の腕を見てビビっているようだが、この世界の普通の感覚というやつを知っている俺にとっては、ヤムチャの実力は眼を見張るものがある。

師匠の道場でもヤムチャに勝てるのは高弟の一部と師匠、それに俺くらいのものだろう、……俺が言うのもなんだが、16歳でたどり着けていい領域では決してない。

間違いなく、この時代の地球人でも指折りの才能を持っているし、強さそのものも、かなりの上位に入るだろう。

そう考えているうちに、周囲の様相は様変わりし、ほとんど洞窟のままだった壁は、石レンガや各種の装飾で彩られたものになってきていた。

「……と、話している場合ではないようだな、周囲の壁の内装が本格的になってきたぞ」

「そろそろ城の中心つてことか……!」

「ああ、連中はブルマをその場で食い散らかさずにわざわざ持ち込んだんだ、おそらく、城主に捧げるためだろう、生きているならそこに居るはずだ」

「待つてろよブルマ……!」

『魔神城のねむり姫』の本来のスジでは、プーアルの変化を活用していつの間にか潜り込んでいたヤムチャだが、今回は俺たちの助力によって完全に勢い付き、魔物たちを蹴散らしている。

「!! あの扉、でかいぞ、ぶつとばせプリカ!」

「うっ……があ!!!」

「くっ……!」

「うっひゃああああ!!」

プリカが放ったエネルギー弾は扉をぶち壊し、向こう側の部屋を露

出させた。

その、吹き抜け構造の大フロアの中には大量の怪物たちがウヨウヨしており、その中央付近には天蓋付きのベッドのようなものが配置され、更に、椅子にくくりつけられた女の子……ブルマ、更に、この城の主であるルシフェルとその従者の姿がある。

従者は、今まさにブルマの血を吸い出そうとしていた注射器を取り落し、ルシフェルは忌々しそうにこちらを睨んだ。

「何者だ!!」

「俺たちは旅の武道家だ！ 先程この城に奪い去られた少女、ブルマの身柄を預かりに来た！」

「い、一体何が……ヤムチャ!？」

「ブルマ!!」

ブルマは首だけを動かしてこちらを見ると、自分の恋人……ヤムチャの姿を確認して、希望を取り戻した顔になった。

ヤムチャもまた、恋人の窮地と生存を目の当たりにして闘志をみなぎらせている。

「き、きさま!! まさか魔族狩りのガキか！」

「狩ってたつもりもないが、まあ多分それで合ってるんだろうな

……プリカ！ ヤムチャ！ 行くぞ！」

「わかった！」

「よっしや——うわあ!？」

ヤムチャはもちろん、プリカもまた、救出対象を前にいきり立っているようだ。

だが、そうして俺たちが突入しようとしたその瞬間、けたたましい音と共にフロアの反対側で爆発音が響き、爆炎の中から小さな影が2つ飛び込んできた。

「うわあああああ!!」

「な……また新手だと!？」

2つの影は宙を舞い、フロアの中央、天蓋付きのベッドにも見える祭壇に向かって放物線を描いて飛んでいく。

俺の目は、その影の片方に釘付けになる。

尻にシツポ、背中に赤い棒……如意棒！

あどけない顔に、独特すぎる髪型、無邪気で戦いが好きな、優しいサイヤ人！

そうだ、あれこそがこの世界の主人公！

「ぐ……悟空!?!」

「そ、孫くん!?!」

「!!」

そう、あれこそが、俺の前世における最大のヒーロー！

孫悟空だ！

天蓋に落下した悟空たちを見送った俺は、なるべく冷静を装って、わざとヤムチャに尋ねる。

「……アレがお前達の、シツポの生えた友達か！」

「そうだ！ こりやツイてるぜ！ もうひとりの方は知らないが、あいつまで居るならもう安心だ！ 待ってるよ！ ブルマ!!」

そうだ、もう一人の名はクリリン、孫悟空の終生の友であり、地球人としてはトツプクラスの実力と、戦士たちの中で有力な人格者としての立場を得ることになる。

……そうだ、元の歴史での純粹地球人最強、それは、俺にとって一つの『越えるべき壁』……あるいは、『抜かれてはならないライバル』なのだ。

と、俺が無駄に対抗意識を燃やしている間にも、ヤムチャは全速力でブルマの方に駆け込む……というか、ほとんど飛び込む形で突撃していく。

恋人を救わんとするその熱意は当然あつてしかるべきだが……今はやばい！

「やめろヤムチャ！ 親玉はお前が敵う相手じゃ——」

「ぎゃあーつ!!」

「——お、遅かったか……!」

ブルマに向けて一直線に飛び込んだヤムチャは、そのままの勢いでルシフェルに蹴り飛ばされて明後日の方角にすっ飛んでいった。

あの叫びようだと思えばいいだろうが、厄介なことになった！

「……くそ！ 妖怪どもは魔物にでも化けてやり過ぎている！」

「わ、わかりました……変化！」

「変化！ ま……間違えて俺たちをぶっ飛ばしたりしねえよな……」

「プリカ、ヤムチャを頼む、俺はブルマを拾いに行くー！」

「わ……わかった！」

だが、その瞬間、更に事態を混乱させる出来事が発生した。

不気味ながらも厳かな気配を纏った城に相応しくない轟音、これは自動一輪のエンジン音……そう、これは……！

「人呼んで、いただきランチ!!」

「またしても侵入者だと……!!」

「くそっ！ ねむり姫をかえせ！」

一輪を駆る金髪の女……ランチが、魔族を蹴散らして天蓋に飛び込み、巨大な宝石……『ねむり姫』を盗み取った。

ランチ、ドラゴンボールシリーズ初期の準レギュラーキャラで、くしやみをきつかけにして、黒髪の色々とゆるい乙女と、金髪の粗暴な盗賊の人格がスイッチするという性質を持っている。

『魔神城のねむり姫』でも、その特徴によってストーリーを大きく動かしていたのだが……こう、目の前に現れてみると厄介だ！

そして、あまりに目に毒な格好だ！

「ルシフェルさま、城のすべての兵士を集めました」

「よろしい！ 祭壇の間を封鎖し、あの小娘とガキどもを捕らえろ！」

「ルシフェル、お前の相手はこの俺だ!!」

この城の中で、ルシフェルに対抗できる戦力はおそらく俺とプリカしかない、そのプリカをヤムチャ救出にあててしまった以上、俺がルシフェルを抑えるしかないのだ。

ルシフェル、出身地すら定かではない、太陽を嫌い吸血行為を行うこと以外一切不明のこの男は、現時点では地上最強の候補に上がる程の実力を備えている。

立ち上る妖気は、これまで撃破してきた魔族どもとは全く比べ物に

ならない。

「きさま……アエ・ソシルミ！」

「俺の名を知っているとは光栄だな、光栄ついでに、お相手願おうかツツ!!」

「魔族狩りめ……きさまは許さん!!」

俺が構えを取ると同時にルシフェルもまた、顔を端正なものから厳しい怪物のそれへと変え、臨戦態勢に入った。

この場の武道家としては一枚劣る位置にいるヤムチャだが、その実力はまさしく本物、それをあつさりと破ったルシフェルの戦闘能力の高さも、実感と理性、両方で感じられる。

——だが、俺にとつては脅威を感じるより強敵を目の前にした喜びの方が大きいのも、また事実だ。

俺のこの思いは、こいつが俺にとつて、まだ勝利の見込める相手だから湧くものなのか？

その問いは、戦いの火蓋が切って落とされた瞬間に四散した。

↓つづく

第三話：転生地球人が大猿を二体作るまで

俺とルシフェル、互いの距離は10メートル。

二人が殴り合うなら、少々狭い間合いだ。

「夜な夜なわれら魔族を襲い、部下たちを殺すだけでは飽き足らず、よもやこの日まで嗅ぎつけて来ようとは！」

「今は違うが、普段の戦いはこちらから襲っているわけではない、ただ都合のいい修行相手がそつちから向かってくるんでな、利用させてもらっているだけだ」

「減らず口をオ!!」

両手を振り上げ躍りかかって来るルシフェル、その速度は下手な自動車を上回り、その瞬発力は肉食獣を凌駕している。

俺はルシフェルに飛び込み、振り下ろさんとする両腕の軌道の内側に両手突きを叩き込む！

「チャアツツ!!」

「ぬうア!!」

空中で大きく体を捻り、突きを回避するルシフェル、互いに隙を作る格好となったが……俺はこの程度では引き分けにはしない！

すかさずルシフェルの無防備な胴体に、渾身の頭突きを叩き込む！

「ムンツツツ!!」

「がっつ!?!」

「ちよつとは応えたか、ルシフェル!」

「舐めるなよガキ! げあああああ!!」

ルシフェルは腕を振り回す予備動作の後、エネルギー弾を俺に向けて射出する……が、完全にテレフォンパンチだ。

「そんなものが当たるか!」

「おのれエ!!」

更に乱射されるエネルギー弾を避けていくと、ついにしびれを切らしたルシフェルは再び俺に向かって突撃してきた。

だが、あの魔物じみた幼稚な飛びかかりではない、武術の冴えを感じる鋭い連撃だ!

「げええあああ!!」

「シイイイツツツ!!」

拳と拳、手刀と手刀、貫手と貫手を交わすと分かる、こいつの、人間……地球人とは全く違う作り、全く違う頑健性と膂力が、だ。

鍛錬によつて化け物と同等以上の実力を得た俺だからこそ、鍛錬とは違う次元での肉の出来が、分かる。

だが、俺もまた、『人を超えた肉』を持つべき名を持つ男。

「チエリアアツツツ!!」

「ぐがっ!!」

交わし合う連撃の中に一瞬の隙間を見出し、胴回し回転蹴りを叩き込んだ。

こいつを食らつて無事で済む武道家も、魔族もいなかった!

「げあああ……、きさま、地上の人間とは思えん……!」

「俺程度なら地上にだっていくらでもいる、それに、俺だってまだ天上の存在には敵わん」

「あの胸糞の悪い神のことか!」

……頭からなんとも言い難い色の血を垂らしつつも、変わらぬ殺気で俺を睨みつけるルシフェルに俺は笑みを深め——その瞬間、飛来した魔族の頭部によつて、戦いは強制的に引き裂かれた。

「ツツ!」

「く……! おのれ! きさまをやるのは後だ!!」

「待て!」

ルシフェルは猛烈な勢いで俺から逃げ去る……違う、あれはランチへの攻撃だ!

「ぎええええええい!!」

「チッ! クソ……!」

ランチは流石の一輪捌きでルシフェルの突撃を躲す……が、ルシフェルはそのまま強引に姿勢を変えて壁を蹴り、ランチを狙い続ける!

さらに、ランチは悟空とクリリンにまで追跡され始め、ランチを追跡する三者は魔族を巻き込みながらそれぞれで衝突まで始めてし

まった。

「このままじゃマズい……!」

「ちよ……ちよつとアンタ! このヒモほどいてよ!」

俺がルシフェルを追いかけようとすると、今度はブルマが自分を縛るヒモ（としか表現できない、自律的に動いているフシすらあるよくわからない紐状の拘束具だ）をほどけと迫ってきた。

チンタラ解いているヒマはないので、手刀で切り裂いておく。

「シャアツツ!!」

「あ……あんた、すごいじゃない」

「大丈夫かブルマ!!」

「ヤムチャ!!」

……どうやらプリカはヤムチャの救出に成功したらしい、ヤムチャが居れば状況は楽になるが、ブルマを一人で任せることはできないだろう。

そう考えていると、連続した爆発音が響き始めた、これは……プリカだ!

プリカはエネルギー波を魔族に向けてまき散らしながら、一番の『大物』であるルシフェルに躍りかかった。

「があああ!! ぐがあ!!」

「ええい! うつとおしいガキめ!!」

「ぐぎつ……!!」

が、ルシフェルの技量は完全にプリカを上回っており、身体能力も押し切れるほど優れてはいない。

「あいつまでやられちまうのか……!」

「あ、あの子そんなに強いのか?」

「正直、オレや悟空以上かもしれない……」

ブルマはまた絶望的な雰囲気を漂わせ始めた、表情の変化が激しい女だ。

状況は膠着しつつも混乱し続け、ルシフェルに弾き飛ばされたプリカも即座に起き上ってまた魔族どもにエネルギー波を撃ち込み始めている。

悟空とクリリンも、ルシフェルにねむり姫を渡すことの危なさに気付いたのか、ランチから奪うことよりも、ルシフェルを止めることに重点を置くようになったようだ。

悟空は素直で軽快な動きでルシフェルを引つ掻き回し、クリリンは戦闘の流れを読んで、的確に攻撃を打ち込んでいる。

もちろん全部弾かれているのだが……、単純な身体能力以上の才能の片鱗を俺に感じさせるに十分な立ち回りだ。

だが、このままではまずいだろう、魔族の増援は更にやってくる可能性があるし、俺たちの体力だって限界ではない。

更に、懸念事項はあった。

「お……おい、この城、このままだと崩れちゃうんじゃないのか？」

「ひっ……！ 私たち生き埋めになっちゃうじゃない！」

「そ、そうだ！ 早くズラかろうぜ！」

聞き覚えのあるつぶれた声に足元を見ると、ウーロンとプーアルが合流している。

魔族からさらに何かに変身して難を逃れたのだろう。

……この魔神城が潰れれば『ねむり姫』の覚醒は防がれ、太陽の破壊も防げる、俺にとっては喜ばしいことだ。

だが、この乱戦のまま城が崩壊すれば、混乱の中で何が起こるのか予測できない！

「おい、誰か、月がどの方向に出ているか分かるか？」

「こ、こんな時にいきなり何を聞くのよ！」

「この事態を何とかするために、月が必要なんだ」

「……この城の座標と月の公転周期から考えると………あつちよ」

ブルマは何やら端末を操作すると、すぐに天井の一点を指差した。流石大天才ブルマ、もしかしたら分かるかも、とは期待していたがまさか計算で導き出してくれるとは。

俺はプリカに向けて叫ぶ。

「プリカ！ あそこの天井を撃て!!」

「んあ!? ……がああああ!!」

プリカはおとなしく俺の言うことを聞いてくれたようで、エネルギー波が指定した座標をぶち抜く。

すると、天井はあつけなく破壊され、ブルマの予言した通りに月が現れた。

……悟空が一度も大猿に変身していない『ねむり姫』ならではのやり方だが、うまく行ったようだ。

「何事だ!!」

「オイオイ、派手にやるじゃねえか!」

「なんだ、天井が吹っ飛んじまつ……………」

「ぎ……………」

「お、おい…………どうしたんだよ、悟空」

……予定通り、悟空が月を目撃してくれた。

すかさず、俺は月を見たまま立ち尽くすプリカに飛びつき、その目を胴体でがつつりと隠す。

つまり、頭を抱きかかえる形だ。

「だが、お前はこれ以上見るなツ!」

「ぐうあ…………!」

「お前まで化けたら收拾がつかん!」

「う…………うあ…………」

髪を逆立たせ、今まさに大猿への変身を遂げようとしていたプリカだが、なんとか変身プロセスの解除に成功した。

俺が死ぬ少し前にやっていた映画では、満月を見たサイヤ人に『あまり長く見るんじゃない、大猿になるぞ』というセリフがあったが、実際、大猿になる前に目視をやめさせれば変身を防げるようだ。

「……………!!」

「悟空は完全に化ける、さっさと逃げるぞ! その坊主頭も付いてこい!」

「ぼ、坊主頭じゃない! クリリンだ! 悟空は一体どうしちゃったんだよ!」

「い……………いったい何が起こってるんだ!」

「理由は後だ、それと、悟空のやつには『自分が大猿に化けた』なん

て、絶対に伝えるなよ!」

「大猿ですって!」

ああだこうだ話している内に、悟空は本格的に巨大化し始め、すでに見上げるほどの身長になっている。

「な……何だあいつは!」

「う……撃て! 撃てえー!!」

「グオオ!!」

魔族は大猿にビビったり、ビビるあまり発砲したりしているが、まるで効果がない。

足を止めて攻撃する魔族たちは大猿に叩き潰されて仕留められてゆく。

「プリカ! 立って逃げろ、だが、絶対に月は見るなよ!」

「わ……わかった、くそ……」

大猿がもたらす圧倒的な破壊力と混乱、それに魔族がぶちまける各種の火器の炸裂を尻目に、俺達はフロアから逃走する。

そんな俺達を追いかけ、ランチの一輪が並走してきた。

「おい! てめえ、ありやあなんなんだ!」

「ランチか! 後で説明する、とにかく今は逃げとけ!」

「アホか、そんなんで納得できるわきや……きや……ぶえつくしよ
い!」

「あ」

横を向いて話したことで髪の毛が顔の前にかかったのだろう、そのまま髪の毛はランチの鼻をくすぐり、くしゃみを誘発してしまった。くしゃみをしたことにより、ランチの髪色は金髪から黒髪へと変わったが……困ったことに、黒髪のランチは軽快に一輪を乗り回したりできないのだ。

「きやあ~~~~!!」

「く、くそツツ!」

「ひゃっ! あの……私どうしてこんな……」

案の定ランチは一輪をコカして激しく振り落とされた。

俺は空中に居るままのランチを抱きかかえ、そのまま更に走る!

「その説明も後だ！ とにかく逃げるぞ！」

俺たちが完全に城の外に逃げると、それとほぼ時を同じくして、悪魔の手、すなわち魔神城を構成する山の一本が完全に倒壊し、砕け散った。

……そして、その中から、巨大な大猿の化け物が姿を現す。

けたたましい吠え声を上げる大猿は、全滅した魔族の代わりに俺たちをターゲットにしているようだ。

「アレ、どれだけ離れば見えないと思う？」

「……もういうな、くそ」

ランチを下ろした俺が軽くからかっていると、プリカは若干顔を赤くしてうつむいてしまった。

「魔物を倒せたのはいいが……アレはどうすればいいんだ!？」

「そ……そうだけ……! このままじゃあオレたちまでペシヤンコになっちまう！」

「そうですよ！」

「あいつ……道理でめちゃくちゃ強いわけだ……!」

全員様々な反応で大猿と化した悟空の脅威を感じているようだが、俺は全くもって冷静である。

その理由は、至極単純だ。

「おい、その妖怪、どっちか剣に化けろ、形はなんでもいいが、切れ味はこだわれ」

「へ？」

「よしブタの方、ウーロンだったか、お前が剣に化けろ」

「な、なんでオレなんだよ！」

「……特に理由はない」

まあ、実際のところ、ウーロンとプーアルどっちに無理強いするのが罪悪感が少ないかという点、ウーロンというだけなのだが。

「お、おい、一体何をするんだ？」

「ヤツのシッポを切る、連中はシッポが無ければ変身できないんだ」

「なんでそんなこと知ってるのよ!？」

ブルマのツツコミはあえてスルーして、ウーロンの頭を掴む。

「ぎ、化けろ、どうせ俺たちが助けなきやお前は『ペシヤンコ』だからな」

「わ……わかったよ……化けりやいいんでしょ！ まったく！ 変化!!」

ウーロン渋々と変化し、なんだかドラゴンクエストにでも出てきそうなやたらとでかい曲刀になってみせた。

俺はウーロン刀を構え、大猿へと走り出す！

「なっ！ こ、殺されるぞ！」

「……あいつはへいきだ、たぶん」

「た……確かに、すごい速さだわ！」

俺の走行速度は時速100キロをゆうに上回り、それを引き出すまでに2秒とかからない！

宇宙規模の戦いに繰り出すには心もとない速度だが、目の前の大猿、つまり、動きの鈍重なデカブツ相手には——

「ガアアアアアア!!」

「——こいつ一本で十分ツツ！」

「ぎゃあああああ!! お助けええええ!!」

ゾン、あるいは、ザク、とでも表現すべきか、ウーロン越しに伝わる小気味のいい感触は、俺が悟空の股をくぐり抜け、すれ違いざまにシツポを切り裂いた感触だ。

背後では、大猿がみるみるうちに縮んで元の悟空に戻るのを感じられる。

「いっちょ上がり！」

「て、てめえ！ 無茶苦茶やりやがって！」

「安心しろ、俺は武器もある程度は使える、どんななまくらだろうとへし折るようなへまはしないさ」

「誰がなまくらだ！ 誰が！」

ぎゃあぎゃあとうるさいウーロンを解放してやって、俺はまた考える。

我らがヒーロー、未来の宇宙最強戦士はすっぱんぽんでぶつ倒れた

はまだ。

こいつが大猿と化して（俺が化けさせて）ぶち壊しにぶち壊した山は、岩と瓦礫になってしまった。

魔族どもを5000年間ずっと太陽から守り続けた城の一角は完全に消え去り、その大半がああホールに集まっていたであろう城の魔族も、この瓦礫の下に埋もれたのだろう。

「奴らも奴らだが、こうなってみると哀れなもんだ、やりすぎかもしれない」

「こいつら、まものだぞ、ひと、たべたり……するんだろ」

ふと漏れた言葉に、いつのまにかやってきたプリカが応じる。

振り返ってみると、ウーロンと悟空はブルマたちと合流し、何やら大団円のような雰囲気醸し出していた、プリカはそこから抜け出して、わざわざ俺に話しかけに来たらしいが、少し名残惜しそうだ。

ドラゴンボールファンの俺としては、あの大団円をいつまでも眺めていてよかったが、瓦礫に向き直って話を続ける。

「いや、まあ、奴らは人食いだし、しょうがないって言おうにも、食う時割と楽しんでるし、いい奴なはずもないんだが……」

「じゃあ、いいだろ」

「そうも割り切れん、あいつらにだって、何か可能性はあったんじゃないかと思うし、付き合い長い分、俺だってちよつと寂しいんだ」

「……わからん」

「俺もわからん……、俺はあいつらが食い散らかした女子供だって見てきたんだがな」

もちろん、生き残りが俺や人間に襲いかかったら、俺は躊躇なく、それ喜んで戦うに違いない。

『勝利か……糞でも喰らえ！』ってほどでもないが、後味が悪い、何かを根こそぎぶち壊すつてのは、俺の性に合わないだろう。

「なあ、あんたら乗ってくかい？」

「カプセルあるわよ、貨物室になっちゃうけどね！」

と、一通り悩み終えた所で、向こうから声がかかった。

どうやら、俺たちを人里まで連れて行ってくれる、という申し出ら

しい。

少し懸念事項があるのを除けば、俺は是非連れて行ってほしい……
というか、あの連中と合流したい、という気持ちだが……。

「……………」

「お前は嫌か、プリカ」

プリカはまた服の裾を掴んで、俺を止めようとする。

まだ人間と関わるのを受け入れきれないらしい、というか、俺はい
いのか？

「こいつは嫌みたいだ、俺もヤボ用があるんでな、ここに残る」

「なあミソシル！ おめえもいつしよに来いよ！ オラたち亀仙
人ってじっちゃんに修行付けて貰うんだ！」

「弟子入り課題には失敗しちゃったけどね……」

悟空が俺を誘っている、それは俺にとって何より優先すべ……。
布地が引つ張られる感触。

「……………やめてくれ」

「あー、すまん悟空、俺はここに用事がある、近々武道会には出るか
らそつちで会おう！」

（ここまで強硬に（ただ甘基準）止められてしまうとどうしようもな
い……だが、応じてやったというのに、こいつが布を掴む力が変わら
ないのはどういことだ？。

「そつか、よくわかんねえけど、またな、ソミシ……ソシ……ミソシ
ル！」

「ああ、またな！」

そう言つて、悟空たちはブルマが出した航空機に乗りこんだ。

「またなー！ ミソシルー！」

「ありがとねー！ 西の都に来たときはうちに寄つてもいいわよー
！」

「ブルマを助けてくれてありがとなー！」

「オ、オレはひどい目にあつたぞー！」

「プーアルもちゃんと言わないと駄目だよ……、ありがとござい
ましたー！」

「せよーならー」

航空機はみるみるうちに高度を上げ、東の空へと飛び去ってゆく……。

俺もいずれはあいつらと共に冒険したり、しのぎを削ったりしたいものだ。

……さて。

「では、俺たちも用事を済ませよう」

「……おれがいやだから、のこったんじゃないのか」

「それもまあ、あるが……何より大事なものがこの瓦礫の下に埋まっているだろう」

「だいじなもの……あー」

「そう、ねむり姫だ、太陽を消し飛ばすエネルギーが秘められた宝石を野放しにはしたくない」

プリカが止めなければ放置したのか、と自分でも思うが、探す手間を考えつつ悟空たちの誘いということ鑑みると……うむ！

またしてもプリカはジト目……というかほとんど睨むように見ているが、しようがないことなのだ。

「おれはしらなかつた！ そんなものほつとくな!!」

「防げただんだからいいじゃないか、さあ、探すぞ」

俺は強引にごまかして、探索を始める、瓦礫をどかす作業は重労働だが、なあに、これも鍛錬だと思えば軽いものだ。

そして俺たちはねむり姫の探索を始めたが……それは、案外簡単に見つかってしまった。

夜が白む頃、大きな岩を二人でどけた俺たちの目の前に、そいつは姿を表したのだ。

「……ソシルミ、これか？」

「ああ、間違いない……ねむり姫だ」

俺はそれに歩み寄って掴もうとしたが、突如現れた別の『手』が先にそれを掴む。

手の出どころは宝石の真下、傷だらけの、青白い手だ。

「なッ！ ……まさか、生きていたのか！」

「げえああ……、きさま、ソシルミ!!」

ねむり姫を掴み取った手はそのまま地面から伸び、更にもう片手が地面に手を突き力を込めると、ついにその頭と胴体が姿を現した。

「ルシフェル!!」

「きさま……よくも……!」

ルシフェルは、トレードマークであったサングラスは割れ、スーツはボロボロで、体中に傷を作っている。

更に全身が土煙にまみれた、見るも無残な有様だ。

「ねむり姫を渡せ、俺はお前らの野望さえ阻めれば、後はどうでもいい」

「きさま……どこでこのねむり姫の事を知った?」

「さあな、言い伝えと言ったところか」

ルシフェルは怪訝な顔をしたが、すぐに、憎しみと無念に溢れた、全く違う表情を作る。

「……われわれが故郷からやってきた時、このねむり姫はただの兵器だった」

「故郷だと?」

「きさまら人類の科学力ではわかるまい、5000年をかけ2つの天体を周回する我らが故郷、魔凶星のことは……」

魔凶星!!

それは、ドラゴンボールZに登場した、魔族の故郷とされる天体だ。

「魔凶星だと!」

「知っているようだな、我々の故郷のことを」

「それも言い伝えだ」

「……まあいい、魔凶星は偉大なパワーを持った惑星であり、そこを故郷とする我々は星がもたらすエネルギーによって繁栄を享受していたが、1つだけ大きな悩みがあった」

「ソシルミ、こいつ、いったい……」

「……続ける、ルシフェル」

この話は聞かなくてはならない、魔族とは一体何なのか、それは、あの時代を生きたドラゴンボールファンにとって、最大の謎であるから

だ。

「きさまがよく知る通り、魔族は太陽の光に弱い、瘴気を作り出して星全体を覆い隠そうとも、その襲いくる大災害を防ぐ有効な手段にはならなかった」

「それで、太陽を破壊するという、大それたアイデアが出現したのか」

「月光が持つ澄み切ったエネルギーは、我らの体を焼くことがなく、莫大なエネルギーを安全に蓄える絶好の手段だった……5000年間、この地上で暮らさなくてはならないことを、除けば」

ルシフェルの目が鈍く輝く、残虐なだけの魔物の目ではない、強い意思を秘めた目だ。

「あの頃、最も強い力を持つ一族であったわれわれは、ねむり姫とそれを活かすための機材を持って地球へ降下した……われわれ魔族が地球を支配できぬ理由も理解せぬままに」

「太陽など、隠れればいい話だろう」

「……太陽光は隠せばいいというものではない、太陽のエネルギーを吸った大地はそれ自体がわれわれにとって毒を持つ、その上、力の源である魔凶星から遠く離れたわれわれは、力を失い、知性までも消失していった」

「しゃべる魔族が少ないのはそのせいか！」

「きさまが殺してきた部下たちは魔凶星でも最も優れた一族の若者だった!! 本来ならば、この星にわれらの文明を築き上げる入植者となるはずだったのだ!!」

ルシフェルは叫ぶ。

「理性まで失ってしまいながらもわたしに従い続けたかれら、それに……わが旧臣までも、き……さ……ま……ら……!!!」

「ソシルミー！」

「許さん!!!」

叫ぶ勢いのままに、ルシフェルは自らの首にかけたペンダントを、軽くひねる。

ガチリと音を立てて回ったその瞬間、空間に莫大な妖気が満ち溢れ

た！

「——ツツツ!!」

「うあつ!!」

「げあああ!!!」

一瞬、地面が炸裂したのかと思う程の勢いで、ルシフェルは天高く飛び上がった。

そして、空中で静止し、傾き始めた月に向かって『ねむり姫』を掲げる。

「月光よ!! ここに集い、われらがねむり姫を目覚めさせよ!!!」

「何ッ!？」

瘴気（と呼ぶしか無い、赤黒く光るもやだ!）がルシフェルから吹き出し、月光を収束させ、ねむり姫へと強引に注ぎ込む。

……まさか、こんな形でねむり姫を覚醒させるとは！

「……ルシフェル、一体その力はなんだ!」

「われらが故郷、魔凶星の土だ!! 太陽を破壊した後、神とあの若造を殺すために取っておきたかったが……ここできさまらを葬る!!」

ルシフェルが放つ妖気はボロボロになる以前の数十倍に膨れ上がっている!—

魔凶星の最接近時、魔族の力は平常時の数千倍にも高まるが……まさか、その土にまで力があるとは！

「まさかそんな隠し玉が!!」

「太陽が上がるまであと僅か、それまで、きさまらを颯るのに使わせてもらうぞ!!」

瘴気がルシフェルを撫でると、体と服の傷が一瞬にして癒える。

更に瘴気は膨れ上がり、俺たちをドーム状に包み込んだ。

「つ、つきが……!」

「これできさまらの頼みの綱である月光は失われ——」

ルシフェルは一瞬にしてプリカの目の前に現れ、手をかざす。

「なっ!!!」

「——わたしも太陽を気にする必要はなくなった、ということだ!」

そのまま放たれた『デコピン』によつて、プリカは地面に叩きつけられる形で吹っ飛び、倒れ込んだ。

「……絶好調って感じだな、ルシフェル」

「なに、全盛期の力には遠く及ばんさ……それでも！」
突如、背中に打撃。

「——ツツツ!!」

「きさまらを蹴り殺しにするには、十分すぎるほどだ！」

「ガハ……ツ!!」

俺の後ろに回り込んで、おそらく、蹴りを放つたのだろう。

それを理解したのは打撃から一秒後、感覚ではなく理性による推測であつた。

「お……お前の吐く裏話に興奮したのが運の尽きつてどこか？」

「わたしの部下たちを次々と殺し、あわや太陽破壊の使命までも破壊しかけたきさまにはふさわしい末路だ！」

「殺しはしたが、別に襲っちゃいけないと言つただらう……俺は……

——グゲエツツ!!」

「まだ言うか！」

ルシフェルは俺の背を踏みながら更にいきり立つ。

折れた数本の骨が体の中で無作為に暴れまわり、内蔵が押しつぶされてゆく。

だが、俺は瓦礫に肘を突き立てるのも、口を開くのも、やめはしない。

……別にこいつに話す義理もないし、見逃してもくれないだろうが、誤解されたまま死ぬのはシヤクだ。

「俺は、修行相手が……欲しかったただけだ！ 強くて俺を殺しに来る、思う存分戦える相手が……！」

「それで何人殺した!!」

「グブツツ!!」

横腹を蹴り飛ばされ、俺は数メートル転がる。

圧倒的な脚力だが、更に問題なのは、これがこいつにとって全く本気なんかじゃない、むしろ、弱つちい生き物を潰さないように、気を

使ってすらいるってことだ。

「げええええい!!」

「——ガボツツ!!」

ひとしきり転がり終え、立ち上がろうとする俺に向かってルシフェルは更に蹴り込んでくる。

ルシフェルを注視していたにも関わらず、その足も、ルシフェルの動きも見えなかった。

俺は更に転がった先で、なおも立ち上がろうと試みる。

「ゲ……ゲボツ……お、覚えちゃいない……俺を殺しに来るなら人間でも良かったし、仮にお前たちが俺から逃げていたなら夜に散歩くのもやめただろう……」

「減らず口を……!」

体の痙攣を抑えながら、ゆっくりと立ち上がる。

無様な、どうしようもない悪あがきだ、試合なら降参すべきだろう。

立ち上がっても、どうしようもないに違いない。

俺はなんで立ち上がるんだ?

口は、更に本心からの『減らず口』を吐き続ける。

「お……俺はお前たちのことが嫌いだから殺してたんじゃない、楽しかったんだ、お前達と戦うのが」

「では、これも楽しいのか!!!」

ルシフェルの手に、エネルギーが収束していく、俺には使えない技だ。

ヤツが持つエネルギーを考えれば、全く話にならない、小さなエネルギー……そして、俺にとっては致命的な威力を持ったエネルギーの塊。

それが俺に向かってくる。

「死ね!!」

「ツツツツ!!!」

——とつさに、手を前に伸ばして、気付く。

これは防御姿勢ではない、受け止めるための手だ!

そうか、俺は、ことここに至って――

「……死んだか」

「楽しいぞ、ルシフェル！」

「何い!？」

エネルギーが炸裂する爆炎が俺を包み、だが俺は生きていた。

「絶対的な力の差、隙を突こうにも、甘くない技量、俺には使えないエネルギー技、どれを取ったつてくそつたれだ、俺は試合ならともかく、死ぬ戦いで格上に挑む趣味はない! ……はずだった!」

「何をした! 何を言っている!？」

「だが、こんな戦いも悪くない、特に、ずっと前から知っていた、遠くに存在を感じていた……そして、今こうして、予想外の力を俺に見せてくれる、こんな、相手なら……!」

自分にも、なんで生きているのかは分からない。

だが、俺が何を言っているのかは、自分で理解しているつもりだ。

「く……くそつ!!」

「ゴバツ……! ハア……ハア……そうだ、お前のような男を相手に、届きようもない果てを見せつけられて、届かない果てに向けて自らを極限以上に高め、それでもなお嬲られる! 遥かな先を見るのは!!」

俺はルシフェルの軽い蹴りで吹き飛びながらも、今度は着地を遂げる。

そうだ、分かっているつもりだった、俺は師匠を倒して地上最強の人間に近づいたが、世界にはとんでもない強者たちが居るということは、知っていたはずだ。

しかし、俺にとって、いつの間にか実際立たされた強さが、全てになっていたのかもしれない。

だからこそ、それを打ち破る、自分の何十倍も強い敵を前にして、俺は――

俺はルシフェルを正面から見据えて、腕と足を広げて構える。

笑みはもう、抑えきれない。

『『わくわく』してくるな!』

「……!! ちっ、太陽がもう上がる……きさまらに付き合っている場合ではない!!」

ルシフェルは巨大なエネルギー弾を作り――

「消え去れ、アエ・ソシルミ、そして、プリカとやら!!」

「つれないな! ルシフェル!!」

俺は倒れたままのプリカの前に立ちふさがる。

ついに放たれたエネルギー弾は、俺たちを飲み込み――

「……フン、くたばったか……次は太陽だ! やつにも引導を渡してやる!」

……………。

……………。

……………。

裾を掴まれる感触に目を開くと、倒れた俺を覗き込む顔が見えた。

「……ソシルミ……いきてるか?」

「なんとかな」

なぜ俺が生きていたのかは分からない。この土壇場になって、俺は気の扱いに目覚め、二度に渡るルシフェルの攻撃を、なんとかしのぎきった、としか説明のしようがないだろう。

……違う、本当なら、こんなことで防げはしない。

「ヤロウ……よっぽど焦っていたのか……それとも、まさか手加減したのか?」

「どういうことだ、ソシルミ」

「いや、関係ない……夜が明ける、ルシフェルのやつはあの塔にある大砲を使って、何がなんでも太陽をぶっ飛ばすに違いない」

瘴気は晴れ、白んだ空と地の境目からは、すでに朝焼けが滲んでいる。

「もう、まにあわない、おれたちじゃかてない」

「勝つ手段はまだある! ……残月はまだ、登っているんだ」

「ごんげつ……」

俺は薄ぼんやりと空に残った月、残月を指差す。

「奴に対抗出来るのはお前の化ける大猿だけだ……！」

「……………だめだ、ソシルミ」

プリカは無念そうに頭を振って俺の意見を拒絶する。

「おれはおおぎるのとき、なにがなんだかわからなくなる、あばれるだけだ」

「なら、俺をぶつ殺した後、奴が塔に居ること、太陽をふつとばす大砲を思い出せ！」

「むちやくちやをいうな!!」

ほとんど泣き叫ぶような否定だが、引くわけにはいかない!

……もう、俺は意識をつなぎとめるだけで精一杯なのだ。

「ムチャでも何でもいい! 地球を守るんだ!!」

「ちきゆうを……」

「そうだ、お前だけが……」

限界だ。

「お前が、地球を……！」

「ソシルミ!!」

ソシルミが完全に意識を失い、その体の力が完全に抜けるとともに、プリカはゆつくりと立ち上がる。

ほとんど虚脱状態のようにふらつき、傷も決して浅くはなかったが、彼女はそれでも座り込もうとは思わなかった。

隣りにいるこの男は、異星人である自分に星の命運を託すため、自分よりよほど多く戦い、よほど多く斃られた身でありながら自分を庇い、ついには斃れたのだ。

「……………ざんげっ」

地平線の彼方には太陽の頭が覗いている。

月は、沈みつつあった。

「……………!!」

少女は自らの意思で月を見る。

その胸にあるのは使命感、そして傍らで眠る戦友を傷つけることへ

の恐怖だ。

「ガアアア!!」

だが、大猿となってしまうえばそれら人間らしい感情はすべて消え果てる……それでも、残るものはあった。

「グルル……ガア!!」

自分にとつて、もつとも破壊すべきはあの魔神城!

その大砲だ!

大猿の心中からは芽生えかけた友情も善意も何もかも消え、しかし、男が育んだ猛烈な戦意だけは生き残り、なお、増幅された。

強大なエネルギーと数十メートルの肉體、この星最強の怪物の一体が、今、その唯一の『敵』を狙い、立つ!

目撃者は上がりつつある太陽と、沈みつつある月。

地球の命運を握る戦いが、人知れず始まろうとしていた。

「……! なんだ!? この振動は……まさか!」

「ギャオオオオ!!」

「まさかソシルミに庇われ、生きていたのか大猿!」

ルシフェルは砲座を自動モードにセットし砲門から大猿迎撃に飛び出す。

「わたしの手で太陽を討つはずが……ぬかったか」

「ガア!!」

大猿は口にエネルギーを収束させ、ビームを放つ、それは最も原始的で、かつ効率のいいエネルギー発射方の一つだ。

地上の物質では決して防げぬエネルギーを前に、今度は自らが庇う側に回ったルシフェル!

「げあ……ぎええええい!!」

「グオオオオオ!!」

本来の歴史よりも数年早い、地球上でのエネルギー波衝突!!

エネルギーの鏝迫り合いは周囲の地盤をも揺るがし……ガゴ、という鈍い音とともに、城を支える岩山が揺らいだ。

「な——!」

「グオオオオオ——グガ!!」

5000年の悲願、部下たちの死を背負ったルシフェルの魂は、それ故に一瞬……岩山と播らぎを共にした。

その瞬間を、大猿は、戦闘民族サイヤ人の究極の形は、決して見逃さない！

「ぎ……ぎよああああ!!」

「……グオー！」

ルシフェルが完全に光に飲み込まれるのと、大砲が放つ光が明後日の方角に消え去るのは、ほぼ同時だった。

大砲がその力を失い、暴走の果てに爆裂するのを全く意に介さない大猿の目は、自らの敵が完全には消え去らず、原型を留めて宙を舞っているのをしっかりと捉えている。

エネルギーを体内で高め。

『そもそも割り切れん、あいつらにだって、何か可能性はあつたんじやないかと思うし、付き合い長い分、俺だってちよつと寂しいんだ』
口に収束させ。

『理性まで失ってしまいなながらもわたしに従い続けたかれら、それに……わが旧臣までも、き……さ……ま……ら……!!』

『だが、こんな戦いも悪くない、特に、ずっと前から知っていた、遠く存在を感じていた……そして、今こうして、予想外の力を俺に見せてくれる、こんな、相手なら……!』

狙いを定め――

『ヤロウ……よつぽど焦っていたのか……それとも、まさか手加減したのか?』

――そして。

『魔族は太陽の光に弱い、瘴気を作り出して星全体を覆い隠そうとも、その襲いくる大災害を防ぐ有効な手段にはならなかった』

『お前が、地球を……!』

.....。

.....。

.....。

暖かな日差しが、俺のまぶたを貫く。

ちつとも寝足りない、いや、これは気絶の後の……そうだ！

「プリカは……！」

そこまで言つて、俺はそのセリフの下らなさに気が付き、笑い出した。

「ハ、ハハハハ!! やり遂げた！ じゃなきやあ、太陽は上がつてない!!」

黄色い太陽が俺を見下ろして、やはり、笑っているように見えた。

さあ、俺がやることは一つだ、あの増えた瓦礫の山からこの星の英雄を引っ張り出し、朝飯で労つてやらねばなるまい。

この人生始まって以来の、ゴキゲンな朝飯だ。

↓つづく

第四話：転生TSサイヤ人が過去を振り返り飯に釣られるまで

高揚感。

望むがままに手足を振るい、力を解き放つ。

誰にも遠慮することなく暴れ狂い、誰にも恥じることなく敵を屠る。

人生始まって以来の快楽を、追体験していた。

だが、その歓びの中に、ただ一つ影が差す。

影は言う、『あの敵を倒せ』、『あの敵も哀れだ』。

影の望みに従って敵を倒し、影の望みに従って、その敵を哀れんだ。まずい、この影は、一体——グギョルルルルル

「うわあ!!」

オレは突然の轟音に飛び起きる。

何かに襲われたのかと思っただけで周りをみると、そこには呆れ顔の子供が居た。

「……俺は、自分の腹の虫で起きる人間を初めて見たぞ」

「え、あ!？」

オレは後ずさりをするが、何かが体にまとわりついていてうまくいかず、倒れこんだ。

こんなに人の顔が近くに見えるのはこの人生始まって以来、初めてかもしれない。

そう、『この人生』でだ。

オレは21世紀日本からこの世界に転生してきた、いわゆる転生者だった。

しかも前世は男だ、人間でも男でもなくなった体に混乱していたのも、もう一昔前の思い出になっている。

(正直まだ違和感はある……)

「二応、傷の手当はしておいたし、朝飯も用意した、あと布団を引きずるのはやめてくれ」

「ふ、ふとん……きず……ソシルミ!?」

「なんだ、寝ぼけていたのか、そう、俺はアエ・ソシルミだ」

「あ、ああ……」

アエ・ソシルミ、この、若干赤い髪の少年は、オレが住んでいた山にやってきて、魔族との闘いに巻き込んだ張本人だ……オレもノリノリだったけど。

オレが戸惑っていると、ソシルミは器と、スプーンを差し出してきた。

中に入っているのは、茶色い汁に白い塊の入った……違う、この匂いは!

「そしる、そし、み、みそしる」

「やはり知っているか、まずこれで体を温めろ、お前は長らく原始人だったからな、味は薄めておいたぞ」

「い、いや……もらうのは……」

流石に、ほとんど初対面の人間、それも、オレにとっては少し警戒している相手に、ご飯を貰うわけには。

だが、オレが突っ返そうと手を伸ばした途端、腕に何か冷たい感触が走った。

「うひゃ!?!」

「よだれを顎から垂らすやつも初めて見たぞ、腹が減っているなら食え」

「………わかった」

完全に押し切られた。

オレは器、いや、お碗を受け取って、味噌汁を嗅ぐ。

味噌の匂いは、何年も嗅いでいないと少し臭いが、それ以上に懐かしさと空腹感が勝った。

軽くお碗を持ち上げて味噌汁を啜る。

「ずず………んぐつ、がぶつ」

「うむ、いい飲みっぷりだ」

「ぐく……ふう……、あつ」

……つい、飲み干してしまった。

お椀は完全にからっぽになり、具すら残っていない、どんだけ夢中でかつこんなんだ、オレは。

「そう寂しそうに器を見るのはやめろ、もっとやる、飯もおかずもあるぞ」

「おれ、みてたか？」

「まるで絵に描いたような『もうない』だ」

「………わかった、もらう」

「おお、拗ねるかと思ったが、割と素直だな」

どうやらこの少年は、オレを同年代かそれより下の、見た目通りの少女だと思っているらしい。

多分、オレが未だにうまく言葉や話し方を思い出せずに、変なしやべり方をしているせいだと思う。

「さあ食え、おかわりは十分ある」

「ご飯、キャベツ、卵と肉……ベーコンエッグ、焼き魚に添え物。

「ごきげんな朝飯だ。」

……いや、ごきげんな朝飯って、名前といい攻めすぎだろこいつ！

「い、いただきます？」

「めしあがれ、俺はもう食ったから、遠慮することはないぞ」

言われなくても、遠慮なんてする余裕はもうない。

オレはどンドン、出された料理を食べていく。

「がぶっ……むぐ……」

「やはりいい食いつぶりだ、さすがはサイヤ人」

「ん！ おまえ、そういうえば、むぐ、サイヤじんって、しってるんだな」

「ああ、まあ、俺にもいろいろある……そうだな、情報源は明かせないが、軽く自己紹介と行こうか」

そうやって、ソシルミは身の上話を始めた。

5歳の時に親に捨てられたとか、そのせいで『アエ』って苗字が嫌いだとか、チャパ王（確か、天下一武道会で悟空たちに倒された武術

家だ)のところで修行していた、とか。

オレが何度かおかわりをしながら食事を終える頃にソシルミの自己紹介……というか、身の上話は終わった。

「……それで俺は、もつと強くなるために、道場の跡継ぎをケツて旅を始めたというわけだ」

アエ・ソシルミ、こいつの名前はどうか考えても、『エア味噌汁』だ。前世の人気漫画のラスボスが、漫画の主人公……自分の息子との最終決戦の最後に出した、技(?)の名前。

それより大分前に読むのをやめた俺は詳しいことは知らないけど、結構賛否両論だったと聞いた覚えがある。

こいつの、赤黒い髪の色、筋肉質な体、太くて鋭い眉毛は、その親子の何かを受け継いでいるように、オレには見えた。

「たたかうのがすきなんだな」

「知識も好きだぞ? ……さあ、次はお前の番だな」

「おれもするのか……」

「言いたくない所は言わなくてもいい、俺もそうした」

「……わかった」

そう言って、ソシルミはニカッと(ニタツと)笑う。

出会ったばかりの相手と身の上話の交換をしたがる、すさまじいアクトイブさと、お互いに秘密があることをわざわざ口に出して言って遠慮しようとする思慮深さ、オレはこいつのことが余計にわからなくなった。

「おまえがいうとおり、おれはサイヤじんだ、わくせいベジータでうまれて、ここにきた」

「飛ばし子というやつか」

「……わからない、おやのかおをみたのは、とばされるまえだけだ、ずっとねてた」

オレは生まれてからずっと、奇妙なカプセルの中に押し込められていた、起こされたのは3歳ごろで、しかも、すぐに一人用のポッドに乗せられ、地球に向けて飛ばされたんだ。

だから、ここがドラゴンボールの世界で、オレがサイヤ人だってこ

とに気付いたのも、その時だった。

「サイヤ人は育児カプセルの中で幼児期を過ごすというが、それか」

「……それかもしれない」

「歯切れが悪いな、サイヤ人のくせに、知らないのか」

「おれはまだこどもだった」

実際、オレは惑星ベジータでのことをほとんど知らないし、覚えていない、『飛ばし子』とか、『育児カプセル』とか、言われても困る。

「……おぼえてるのは、あそこがどこか、ここがどこか、おれのなまえが、プリカってことだけだ」

「そうか、……それで、お前はなぜ、あんな山奥にずっと籠もっていたんだ？」

ソシルミは、オレがあまり聞かれたくなかったことを聞こうとしてくる、というか、これが一番聞きたいことだし、だからこそ、ボカしてもいい、なんて言ったんだろう。

オレは少し悩んでから、答える。

「おれは……とめられない、じぶんではおさえられないものがこわくて、あそこにいたんだ」

「闘争本能か、お前は戦闘中も、数度暴走しかけていたからな」

「……そうだ」

オレはサイヤ人の本能をちつとも制御できない、狩りのときも力任せに仕留めたりしてしまうんだ、人間相手にそれをやったら、絶対にマズい。

「そのために野人の生活を10年も続ける根性があるんだから、大したもんだ」

「そんなにたいへんじゃない、たべものはあったし、みずもあった」
ソシルミはオレが暴力を振るわないために隠れていたと思ってくれたみたいだけど、オレが山の暮らしに耐えられたのは、それだけじゃない。

オレにとって本当に怖いのは闘争本能よりも、原作の歴史を変えてしまつて、悟空たちが戦いに勝てず、地球が滅んでしまうことだ、それを防ぐためと思って、なんとか昨日まで耐えてきたんだ。

「衣食住のうち食しかまともにならないじゃないか、風雨を凌ぐのは木陰に乗ってきたポッドだろう？ 服にしたって、あの戦闘服一着でよく持たせたな」

「これはけっこう、あらえばきごこちが………あれ？」

戦闘服を触ろうとして気付く、いつもの硬いような柔らかいような感触がない。

代わりにオレの体を包んでいたのは、オレの体には合わない、大きなシャツだった。

「え!? あ、お、おれのふくー！」

「手当のために脱がせたまま、洗った、獣と、魔族の返り血と砂埃でベトベトだからな」

ソシルミは物干し台にひっかけた戦闘服を指差す、オレが何度洗っても取れなかった汚れがピカピカに……じゃない、なんで物干し竿が……じゃない！

「か、かってにおれの、ふくを、あ、ちがう、ぬがせて！」

「なんだ、恥ずかしいのか」

「あ、あ、あたい、あたりまえだ！」

「野人、いや、サイヤ人のくせに、そこは嫌なのか……」

嫌に決まっている、他人の、それも12歳の少女の裸を何だと思っているんだ、いや、オレは本当は違うんだが、いや、それでも今は少女で。

「こ、この、くそっ！」

「騒ぐなよ、緊急避難じゃないか、それより続きを教えてください、なんで俺に付いてきたんだ？」

「そ、それは……おおぎるが、めいわくだったから、おまえにきいたまぞくを、たおして……」

「……罪滅ぼしをしたかった、ってわけか」

「そうだ」

「なんとなく分かつちやいたが、そんなもんか、まあ、村人たちにも結構楽しんでたヤツは居たみたいだし、あまり気に病まない方がいいぞ。」

ソシルミはオレを慰めるけど、オレはそれをうまく受け取れない。オレは大猿になることについて、かなり……油断していた。

「そんなこといっても……やっぱり、だめだ」

「今更何を言うんだ、村を攻撃する魔族をぶっ潰して、地球まで救ったんだ、罪滅ぼしは完璧以上に終わってるはずだろう？」

ソシルミはまた、ニカツともニタツともいえる変な笑い方をする。オレはなんとか笑い返すけど、うまく笑えているかは分からない。笑い方なんて忘れたし、そもそも、あの戦いだって、本当は悟空たちがなんとかしてたかもしれないんだ。

「そっか」

「その通りだ、素直に受け取っておけ」

……それは受け取るにしても、うかつに悟空たちと関わってしまった事実は消えない。

オレがそうやって悩んでいると、ソシルミは更に、オレに突っ込んできた。

「なあ、プリカ、この近くの適当な場所に家を立てて、しばらく住まないか？」

「な!? お、おまえ！ なにいつてるんだ!」

「そこで修行……いや、特訓するんだ」

「……おれに、きをおしえてほしいのか」

「そうだが、違う、俺もお前に教えたいことが山ほどある」

何を言い出すのかと思いきや、戦いが大好きなこいつらしい提案だった。

気の扱いを知りたいだけじゃなく、オレにまで武術を教えたいらしい。

強敵、それか、スパーリングパートナーってやつが欲しいのか？

「おれをつよくしてどうする」

「理由はいくらでもあるだろう、教えてもらう対価を支払えるし、いいライバルが手に入る、ルシフェルみたいな野郎が出てきたら一緒に戦えるし、なにより、お前みたいなのが眠ってたらもったいない」

「さいごだけおかしくないか」

「なにより、って言っただろう、一番大事だ」

「……へんなやつだ」

まるで、漫画の主人公、いや、こいつがオレの考えている通りの存在なら、あえてそう振舞ってるのかもしれないけど。

「お前にとつても利益はあるぞ、オレという優秀な武道家を相手に衝動を発散できるし、本能を抑える役にも立つはずだ」

「いや、おれは……」

誘い文句はどれも魅力的だけど、こいつと一緒にいたらどれだけ原作を変えることになるかわからない。

しかも、オレ自身、まだあんまりこいつを信用できないんだ。

「当然、修行中はオレが飯を作る、お前が満腹になるだけ作るぞ」

「!!」

一瞬、オレの体全体に衝撃が走る！

いやいや、流石に飯に釣られ……。

「かつ丼に、カレー、シチューに唐揚げ、俺は栄養学は最低限気を使つて、後は好きに作る主義なんだ」

「……!!」

脳裏に前世で食った料理たちのビジョンが浮かぶ。

必死に消そうと頭を振つても、どうしても離れない……。

「考えてもみろ、社会に適應できるのかお前は、獣のエネルギー焼きや、果実なんかを食う生活に戻りたいのか？」

「う、うあ……」

オレは元の生活に戻る想像をする、でも、まったくビジョンが浮かばない。

「お前は10年もよく頑張った、これからは文明の保護を受け、よい生活をするべきだろう」

「ぐお……、わ、わかった……」

ついに承諾してしまった。

9年間の野生児生活は、予想以上にオレを追い詰めていたらしい、いや、これもサイヤ人の運命か……？

ソシルミは上機嫌で、修行場所の選定のため、と言ってヘリコプ

ターを飛ばそうとしている。

オレにできるのは、このよくわからない男が原作を変えないように努力すること、そして、ロリコンじゃないのを祈ることだけだ……。

↓つづく

第五話：転生地球人と転生サイヤ人が天下一をめざすまで

「出るぞ！」

「でない！」

「何故だ！」

「なんでもだ！」

小さな食卓を挟み、少年と少女が押し問答をしている。

険悪な雰囲気の流れているようにも見えたが、彼らにとって、この問答は十数回繰り返した日常の出来事であった。

「……飯が冷める、とりあえず食うぞ」

「そうだな」

よって、彼らはすぐに食事を始めることも出来るのだ。

「天下一 武道会是世界最大の武道大会だ、参加者だって負傷を覚悟して来ている、お前が腕を試し、強者との戦いを楽しむにはもってこいじゃないか？」

どんぶりいっぱいシチューをレンゲのような大きさのスプーンで持ち上げながら、ソシルミが問いかける。

「オレはいやだ、でない」

「戦いに興味がないわけではないだろう、この4ヶ月あえてお前との正面戦闘を避けてきたのも、天下一 武道会で雌雄を決するためだぞ！」

「でないといったらでない、オレはるすばんしてる」

シチューを鍋からお玉で飲みながら、プリカが厳しく突っぱねると、ソシルミはあどけなさを残す顔をゆがめ、わざとらしく困り顔を見せてみる。

「どうしても嫌か？ この星最高クラスの武道家たちが覇を競い合うんだぞ、きつとあの悟空やクリリン、ヤムチャたちも参加するはずだ！」

「う……いい、いやだ！」

逡巡するもきっぱりと拒んだプリカを前にソシルミは完全に諦め、シチューをかつこみ始めた。

「今日のところは引き下がるか……、さて、訓練を始めよう」

「あさめしがシチューってのは、うまいけどおかしくないか？」

「なあに、消化出来るのだから問題ない」

……ソシルミとプリカが同居、もとい特訓を始めてから、はや4ヶ月の月日が経過していた。

160センチ台であったソシルミの身長はめきめきと伸び、今では170台に手が届きそうなほどに成長している。

一方、プリカは全く変わらないままだ。

「うむ、今日もいい天気だ」

「あめふってるぞ」

「休業日和じゃないか、視界が狭まり、足元がおぼつかず、息も詰まりそうだ」

二人が一般的なドーム状のカプセルコーポレーション製家屋から出ると、外はまさに土砂降りの大雨であった。

腕を広げてざあざあど降りしきる雨を浴び、雨空を見上げるソシルミに、プリカはしかめっ面だ。

「かぜひくぞ」

「なに、この程度じゃそうそうひかんさ、さあ、今日はどっちからやる？」

「オレがやる、おまえはぜんぜん、エネルギーをおぼえないからな……オレがわるいのもかもしれないけど」

「構わん、これはこれで、いい訓練になる！」

そう言うと、ソシルミは一息に走り、家屋から数十メートルの距離を取って、腕を広げる。

「さあ来い、プリカ!!」

「はあ……、オレもすこしは、えんりよしてるのにな……」

プリカはごく軽く嘆息すると、苦笑いのような顔を浮かべて、手を前にやった。

エネルギー波の構えだ。

「いくぞ……ぐ……があ!!」

「グウツツ!!」

手に収束したエネルギーは弾丸もかくやという速度でソシルミに向かう。

だが、ソシルミはそのエネルギーを両手で抑え込み……爆裂!

「ハア……ハア……ツッ! 次だ!」

「が……ぐ!!」

間髪入れず、おかわりを宣言するソシルミ、応じるプリカ。

ソシルミの手は衝撃で赤みがさし、ツメにはコゲがつき、見ると、火傷のような生傷がちらほらと付いていた。

対するプリカは、冷や汗を流し、ソシルミの手を見ている。

「ま、まだやるのか、これ!」

「当然だ!!」

そう、これこそが、ソシルミが『気』を習得するために考案した訓練であった。

元はと言えば、プリカに教わろうとしたところ、『バーつとやるんだ!』『こう……力を……』という曖昧極まりない講義を始めたのが、事の発端。

教わることに限界を感じたソシルミは、『エネルギーを出す所を見せろ』『撃っている腕を触らせろ』と要求し、気の習得に努めたが……次第にエスカレートし、ついには直接気弾攻撃を受ける過激な訓練に至ったのだ。

「次イッツツ!!」

「があ!!」

この過激な訓練を数十から百数セット行った後、ようやく、彼らは基礎体力訓練に移行する。

「武には、それが無ければ他の全てもないのと同じ、必須栄養素というものがあるツ! その一つは体力だツ!」

「オレもおまえも一日はしてもへいきじやん……」

「さあ、走るぞツ!」

若干体育会系気味のソシルミについて走るプリカ、だが、彼らはた

だ走っているわけではない。

「ソシルミ……タイヤのなかにド、ドロはいつてきたんだけど……！」

「鍛錬のタシだッ！」

そう、彼らの背後には数十個のタイヤが鈴なりに引きずられ、その訓練効果を飛躍的に高めているのだ。

「おーばーわーく……」

「壊れないギリギリは見極めているッ！」

こうして各種の基礎鍛錬が行われると、ついに、ソシルミからプリカに与えられる、本題のトレーニングに入る。

それは……。

「もつと右腕を上げろ、よし、そのままキープ、重心のブレは自分で戻……、背が曲がっている！ 戻せ！」

「くおお……」

「よし、その調子だ、……このまま3分維持するぞ」

雨に体を叩かれながら、片足を上げ、胴体を軽く前屈し、両手を別々の方向に突き出す奇妙な姿勢のプリカ。

それに対して容赦なく叱咤を飛ばすソシルミもまた、片手で逆立ちをしたままもう片手と両足を大きく反らし、奇つ怪な姿勢を取っている。

「お……おもい……」

「しよがないだろう、お前の筋力に対して、体が軽すぎるんだ」

「せ、せめてうでたてふせとかに……」

「キツイなら、意味があるということ、大満足だろう」

「うああ……」

そう、二人の体の各所には、巻きつけ、引つ掛け、様々な形で、錘が配置されており、しかもそれぞれの重みが異なることよって、バランスを取ることをより難しくし、体幹への負荷を高めているのだ。
……こうして、二人の訓練は進み、日々は過ぎてゆくのであった。

数か月後、天下一武道会当日、開催地であるパイヤ島は多くの武

道家や観客、普段からの観光客でごった返していた。

多種多様な人種、装束の人間に、獣人、更には言葉を喋る以外ほぼ獣のような人種までもが集まり、街道を埋め尽くしている。

……その路地裏では、胡坐を崩したように座るプリカをしゃがんだままのソシルミが覗き込んでいた、どちらもシャツにジーンズのラフなスタイルだ。

「うあ……………」

「大丈夫か？」

「だめだ……………」

「…………もう受付開始時刻だ、行くぞ」

「わ、わかった……………」

見るからに疲弊した様子のプリカと、それを気遣いつつも行動を再開しようとするソシルミ、彼らに一体何が起きたのだろうか。

「まさか人酔いまでするとは、少しは慣らしておくべきだったか」

「いうな…………くそ……………」

何のことはない、単純に、長年人と会っていないかったプリカは天下第一武道会当日のパイヤ島の人混みを前に人酔いを起こしたのだ。

しばらく休んで回復したプリカだったが、会場に向かうため大通りに出ると、そこはやはり人、人、人の大喧騒である。

再び人酔いが悪化し始めた。

「うぷ」

「吐くならエチケット袋を出すぞ」

「い、いや……………」

数度立ち止まりながらも会場にたどり着いた二人だったが、到着と共にそれまでのいたわりムードは霧散し、再びいつもの問答が始まった。

「さあ、お前も登録するんだ」

「み、見るだけって言っただろ……………」

「むう、強情だ」

そう、プリカが強情にも大会参加を拒んでいたのにも関わらず、二人そろってパイヤ島にやってきたのには、理由がある。

『さあ、明日は天下一武道会だ!』

『オレは出ないからな』

『では、観戦だけでも』

『……ほんとうに、見るだけでいいのか?』

『いいとも!』

……つまり、強情さに押し切られて、条件を緩める代わりに引つ張り出されたということだ。

「オレは出ないからな……!」

「えー! お前出ねえんか!?!」

よたよたのプリカを相手に往生際悪く押し問答を続けようとするソシルミの背後から、聞き覚えのある声が響いた。

振り返ると、ソシルミとプリカにとっては見覚えのある二人の少年の姿があった。

「む、この声は……久しぶりだな、悟空! それにクリリン! 見ただけで分かるぞ、腕を上げたな!」

「オツス、なあ、ミソシルも出ねえんか?」

「俺は当然出る、だがこいつは観戦だけと言って聞かなくてな」

「うーん、オラ以外のシツポのあるやつは初めてだから楽しみにしてたんだけど……あ、オラいまシツポねえんだった」

「オ……オレはちよつと助かるかも……」

プリカの人酔いでパンクしかけの神経は、悟空の失望がのしかかった瞬間、限界を迎えた。

「あ、い、いや……、オレも、出るよ……」

「ほんとか! やたっ!」

「では、俺が代筆しておこう」

その隙を逃さず、一気に受付登録を済ませるソシルミ。

本来の主人公と現在の主人公、図らずも二度目の共同作戦である。そして、ソシルミが代筆を終える頃、悟空の背後からスーツ姿の老人が現れた。

「悟空、この人たちは誰なんじゃ?」

「魔神城に行ったとき一緒に戦ったんだ! ミソシルと、えつと

……」

「プリカだ、無駄だと思うが言っておくぞ、俺はソシルミだ」

「そうだ、ふたりとも！ このじいちゃんはオラの師匠の亀仙人つてんだ！」

「ぴーす」

のんきにVサインを出すサングラスにヒゲの亀仙人。ソシルミとプリカは一旦固まってから、挨拶をする。

「……お初にお目にかかります、武天老師様」

「こ……こんにちは、むてんろうしさま」

「わしのことを知っておるとは感心なおなごじやのう」

「じいちゃんはすげえんだぞ！」

(知っている……いや、見て分かる、立ち姿に一切ブレがない、俺や師匠、ルシフェルでも、ここまでの極まり方はしていないぞ！)

そう言いたげに悟空を一瞥して亀仙人に向き直るソシルミを、亀仙人もまた見つめていた。

「ふむ……悟空、クリリン、この武道会、心してかかることじゃ」

「もちろんだよじいちゃん！ ミソシルもプリカもめっちゃ強いんだ！」

(オ、オレ、あの子がビームを撃ってきたら死ぬかも……)

(亀仙人、いや、ジャッキー・チュンに、悟空、クリリン、そしてプリカ、粒ぞろいだ、そのうち何人と戦えるかはわからんが、めいっばい楽しまなければ)

(さ……参加する気はなかったのに……！)

集った武道家たちの想いはそれぞれなれど、実力は天下でも指折りの者ばかり。

第21回天下一武道会の幕は今まさに、開かれつつあった。

「……ようやくだ、俺の憧れはようやく成就する」

「ししようが、むかしゆうししようしたんだったな」

「その通り、俺も見ていた」

第20回天下一武道会はこの俺の師匠、チャパ王の独壇場であった。

現代でも有数の武道家や競技者たちがどれだけ必死になっても、師匠の体に触れることすらできずに武舞台から弾き飛ばされてゆく光景が、今でも俺の脳裏に焼き付いている。

……それすらも決して本気の技ではなく、その師匠の本気を、俺は叩き潰したのだ。

誰が何と言おうと、負けるわけにはいかない。

師匠の伝説は、俺という弟子の出現によつて、輝きをそのままに、終わるのだ。

「おい、そろそろよせんはじまるぞ」

「分かっている、先に行ってくれ」

「ん」

パタパタと、ジャージ姿のプリカが去る。

……少なくとも、ここから見える観客席と、周りに見える範囲の参加者の中に師匠の姿は見当たらない。

だが、いくつか『読んだ』顔はあった。

「げっへっへ……優勝はいただきだぜ……」

闘志をみなぎらせる、悪臭を放つ闘士バクテリアン。

「ウフ？」

今からめぼしい選手たちに色目を使う、色気で惑わす女格闘家ランファン。

「……………」

静かに佇むナム。

「オ、オレだつて腕を上げたんだ……あー！」

しきりに周囲を見回すヤムチャ……あ、目があった。

……ともかく、今大会、第21回天下一武道会は、粒揃いとは言えないものの、優秀な戦士たちが集つていると言えるだろう。

俺は、偏袒右肩にした僧衣の布に隠した右腕に力を込める。

服の中で、ほんのわずか腕が光るのを感じる、……8カ月の鍛錬の果て、楊海王まがいの真似までして、かすかに手に入れたこの力。

これが、今大会における俺の運命を決める事になると、俺は直観していた。
↓つづく

第六話：転生地球人が現地最強地球人（候補）と戦うまで

天下一武道会はこの惑星上でも随一と言えるほどの権威を持った武道大会である、にも関わらず、その参加者は従来より増加したと言われる第21回においても139人と少ない。

その原因は、天下一武道会のシステムの過酷さにある。

「俺たちはどうやら、予選では当たらないらしいな、……あいつらも居なければいいんだが」

「うん」

「ああ、あいつらとは、本戦でやりたい」

「……そうだな」

プリカの少し投げやりな同意を背中に受けながら、俺は予選について考えを巡らせる。

天下一武道会はそもそも意図的に強引な試合日程を組んでいるフシがある、何しろ、トーナメント形式の予選、本戦をぶっ続けでやるのだから、正気ではない。

（この時代にはまだ発達していない）総合格闘技では日程一日のトーナメントというものも行われるが、天下一武道会の過酷なルールでこの日程は明らかに無茶だ。

そこをあえてこの無茶な日程を通すのは、こんな日程に平然と乗ってくるような超人のみを絞り込む意図があるのではないだろうか。

「だが、この仕組みだと、美味い戦士が予選落ちする危険があるだろうに……」

「トーナメントって、そういうものだろう」

「まあ、そうだがなあ」

ともかく、予選はもう始まろうとしている。

予選の舞台は本戦とほとんど変わらないサイズの四角い競技台、材質は……おそらく、ゴム質の塗料を塗ったコンクリートだ。

本戦の石畳といい、試合をするには危険極まりないシチュエーション

ンだが、この厳しさが、この大会の超人性を高めているとも言えるかもしれない。

「予選第二試合……………」

……………そして、ついに俺の試合だ。

第1試合の相手は……………」

「ぐへへ…………… おめえがオラの相手か……………！」

「バクテリアンかあ……………」

バクテリアンかあ……………」

「あの……………試合、始めてください」

「へへ……………！ やる気がねえならさっさと——」

「捨ツツツ!!」

俺は『縦にした水平チョップ』をやつの眼前で放つ。

すると、極大の風音と共に、バクテリアンの体がぶわつと浮き上がり……………競技台の数メートル先に墜落した。

「うわわっ……………れれ?」

「……………体を洗って真面目に鍛えろツツ!!」

臭いのはどうだっていい、……………いや、気持ち悪いから扇いでぶつ飛ばしたんだが……………ともかく、俺はこいつが嫌いだ、ギミックに頼り切りのやる気のない武道家など。

苛立ちのままに隣の競技台を見ると、プリカは翼竜ギランのグルグルガムの拘束を正面から受け、それをぶつ千切ってから殴り飛ばしている。

「プリカのやつは愉快にやってるようだな……………」

「あ、あの、次の試合がありますので……………」

「おっと、すみません」

競技台から降り、俺はプリカと一度合流する。

「お前ならあれくらい、見てからでも避けられただろう」

「……………見てみたくなったんだ、なんか出すから」

「まるで俺のような事を言うが……………、あんな身体機能頼りの技、見てどうなるんだ」

そう言うと、プリカは黙り込んだ、拗ねたという雰囲気でもないが、

会話はそこで途切れた。

その後は何事もなく予選は進行し、本戦に出場する8人の武道家が選出された。

今は、本戦トーナメントにおける各人の配置を決めるくじ引きの最中だ。

……共に予選を勝ち抜いたクリリンとヤムチャは『案の定上がったきやがった!』とでも言いたげな顔で俺たち二人を凝視している。

「えー、まごごそら選手……」

「それは『ソングクウ』です」

「オラかー!」

姓名が揃った名前は少ない、間違えるのも無理はないが……仮にも司会進行役が間違えるのはどうなんだ?

「ソシルミ選手」

「1番だ、クリリン、君と戦うことになるな」

「そ……そうですね……!」

「いい試合にしよう」

「は、はい……」

少し目をそらすふりをして様子を見てみると、クリリンは見るからにビビりつつ、なんとか自分を奮い立てようとしているようだった。

まあ、修業で散々力と腕を上げたとはいえ、目の前であの大猿のシツポを一刀両断する所を見せられては、恐れなくなる気持ちも分かる。

と、そういうやっている内に、クジは終わり、残るはルール説明を残すのみとなった。

試合順は、以下の通りだ。

第1試合：俺（ソシルミ）VSクリリン

第2試合：ランファンVSプリカ

第3試合：ヤムチャVSジャッキー・チュン

第4試合：ナムVS悟空

……最初の試合からクリリン、勝ち抜けばプリカ、最後は、悟空か、

ジャッキー・チュンこと亀仙人。

俺にとつちやあ、万々歳な試合行程だ。

「以上のように決まりました、試合は時間無制限の一本勝負、勝負が決まるのは、武舞台から落ちてしまった場合、『まいった!』と言った場合、ダウン後テンカウントを取られた場合です」

「禁則事項はないのですか?」

「武器の使用、防具の着用、急所攻撃、つまり、目や急所への攻撃は禁止となります」

「なあ! きゆうしよつてなんだ?」

「キンタマのことだ」

「お、おいソシルミ!」

「きやつ?」

ああだこうだと言っているが、要するにこれは『致命的な後遺症を残すことはするな、美学に反したことをするな』という最低限のお達しだろう。

これがスポーツの大会ではなく、武道の大会である以上、下手にルールを多くしても戦鬪の純粹さを損なうだけ、というわけだ。

……実際、元の歴史でもまじめなスポーツの大会なら非紳士的行為で失格になるような行為が頻発しているが、咎められたのは武器の使用くらいだ。

「ねーねー! 昼メシは!」

「あなた試合前にゴハンを食べるんですか?」

「オラは食うっ!!」

「で、では彼に昼食の支度を……」

「我々もご相伴に預かりたい、食うよな、プリカ、俺が作った飯以外は久しぶりだろう?」

「あ、ああ……うん」

周りの選手たちとアナウンサー、係員たちが『こいつらマジか』という目で見ているが、試合前の補給は重要だ。

「それでは第1試合の始まりです!! 両選手、入場してください!!」
まず、ゆつくりと歩み出たのはソシルミであった。

弱冠14歳にして170センチの長身を少しもぶらさずに突き進み、乱雑に切りそろえられた赤茶の短髪と纏った僧衣を風に揺らす彼の肉体には生傷が刻まれ、その奥に潜む莫大な筋肉を彩っていた。

唇は一文字に結ばれ、しかし、確かな闘志の炎が、瞳の奥に滲んでいる。

「……がんばれよ、クリリン!」

「う、うん……!」

追って武舞台に登ったのは、クリリンだ。

とても高いとは言えない背のてっぺんには見事に剃られた坊主頭、額には6つの焼印が出家者としての証を示す。

山吹色の道着は不安そうに揺れ、しかし、その胸は、初めての晴れ舞台に高鳴っていた。

年齢は同じく、14である。

「こちら、ソシルミ選手、クリリン選手、なんと、どちらも同じ14歳、お二人ともお寺の出身に見えますが……」

「こ、こいつオレと同じ年なのか……!? あ、い、いや……、前は多林寺にいましたが、今は武天老師さまの元で修業しています」

「な! なんと、あの武術の神と謳われた武天老師さま!」

「え、ええ……」

観客席から、大きな歓声とどよめきが上がる。

武術の神と謳われ、弟子にはあらゆる格闘術において右に出るものなしとまで語られる孫悟飯を持つ武天老師の名声は、年齢300を超えてなお陰りを見せていなかった。

「まさかあの方が生きて、いや、新しいお弟子さんをとっていらっしやるとは……、おっと、失礼しました、それでは、ソシルミ選手はどちらの道場のどご出身で?」

「ああ、俺は——」

「——そやつのはわたしだ」

観客席から飛び込んだ声に、会場の誰もが振り向く。

その先には、立ち上がった浅黒い男、筋骨隆々の肉体を包む黄色い僧衣に、縮れ毛のその姿は、天下一武道会にまで足を運ぶ格闘技マニアであれば、確実にその名を知っている、その男は。

「ぜ、前優勝者、チャパ王!？」

「もつとも、わたしは既に『かつての』師でしかないかもしれんがね、何しろ、おまえはわたしを倒してそこにいるのだ」

「……そんなこと、あろうはずがございませぬ、師匠、私は今でも、もし別の師に仕えようとも、貴方の弟子ですとも」

「なんと……! ソシルミ選手が前優勝者のお弟子さんで、しかも師匠であるチャパ王を既に破っているとは! これは驚愕の事実です!」

「ま……マジかよ……!!」

「へえ、あいつそんなすげえヤツだったのか!」

ざわめき出した観客をよそに、チャパ王はニヤリと笑って座り直し、その弟子であるソシルミもまた、ニタリと笑ったまま、クリリンに向き直った。

「ま、まさか、お二人があこの武術の神、武天老師さまと前優勝者チャパ王のお弟子さんだとは……! これは、第1試合からとんでもないことになってしまいました!」

「……それで、試合開始の合図はまだですか?」

「は、はい! 第1試合、はじめっ!!」

小太鼓、続けて銅鑼。

会場を揺らすその響きは、試合開始の合図だ……が、両者、互いを見据えたまま固まり、にらみ合いの形とる。

「……(くり)」

(クリリンは大分腕を上げた、見て分かる)

不安げに揺れながらも、一切重力に負けぬ立ち姿。

自分への恐怖に怯える足は、いつでも地面を蹴り飛ばし、その体を持つ総力を叩き込む準備を完了している……そう、ソシルミは理解した。

だが、その恐怖は擬態ではない、強靱に鍛え上げられた身体と気概

が、怯える心を支え、追い越しているのだ。

「チエイツツ!!」

「うわあっ!?!」

ソシルミが放つ不意打ち気味のローキックに、飛び上がったの回避で対処するクリリン。

これも随意的な判断ではない、半ば反射的に体が回避しているのだ。

「へエ……!」

「最初に仕掛けたのはソシルミ選手、鋭いケリですが、クリリン選手、なんなくかわしました!」

「え、あれ?」

「次行くぞ」

「へ?」

クリリンが自分が成した素早い回避に驚く間もなく、ソシルミは次々と四肢を突き込む。

だが、今度はクリリンも回避せず……その全てを、腕で受け止めた!

「まさか、ここまでとは……!」

「な、なんだよニヤニヤしやがって!」

「こつちの話だツツ!!」

「ソシルミ選手、猛攻です! クリリン選手は全て受け止めていますが、今のところ防戦一方! 逆転の手段はあるのかーっ!?!」

最初は手足を突き出すだけの動きだったものが、次第に、体幹より生み出される力を最大限に活用する大きな動きへと変わりつつある、それはソシルミの攻撃の事であり、クリリンの防御の事でもあった。

「はははははツツ!! ……チエリアアツツ!!」

「うわあーっ!」

激しい連撃の最中、ソシルミが放った一発の突きがクリリンを弾き飛ばす。

クリリンは咄嗟の受け身で辛うじて武舞台からの脱落は防いでも

の、彼の窮地は、誰の目にも明らかであった。

「おおーつと！　ここで、ソシルミ選手の一撃が炸裂！　クリリン選手、絶対絶命です！」

「さあ、どうしたクリリン！　亀仙人の修行はその程度かッ！」

「く、くそ……！」

（ソシルミめ、敵の底を見ようとする悪いクセは治っていないようだな……）

クリリンの目には、ソシルミが人生始まって以来の強敵に見え……否、実際そうだった。

魔神城での決戦から8ヶ月間、クリリンは亀仙人の修行をこなしながら、必死にあのソシルミの雄姿に追いつき、今では、当時のソシルミと同等の力まで手にしている。

だが、13〜14歳の8ヶ月はソシルミにも平等に流れ、結果的に、パワーバランスは左程変わることがなかったのだ。

クリリンは考える。

（くそ……！　こいつは力は悟空なみで、技も多林寺の師範よりずっとすごい！　正面からじゃ、どうやっても……）

クリリンは懐に忍ばせたパンティに意識をやるが、すぐにかぶりを振って否定した。

（いや、あいつはこんなのに釣られるタイプじゃないよな……、何か、何かしないと……！）

「来ないならこちらから行くぞツツ!!」

「くっ！」

ソシルミの更なる連撃！

クリリンの防御も進化し、防御と回避だけの単調なものではなく、逸らし、弾き、攻撃を刺し込もうとする技巧的なものへと変じつつあるが、それでもなお、実力差を埋めることはできない！

（流石『地球人最強』の卵、亀仙人の修行に本人の才覚が加わっているのか、素晴らしい成長速度だ！）

（ダメだ、全然当たらない！　こうなったら、イチかバチかだ！）

満身の力を込めたパンチを放つクリリン、だが当然、コンビネー

シヨンのない大技は防がれ、ソシルミの腕を一瞬痺れさせて終わる――その一瞬で、クリリンは武舞台の端にまで飛び退いた。

「むッ!」

「たあーっ!!」

そして、そのまま遙か上空までジャンプ!

「あいつ、一体なにを……」

「いかに飛び上がろうとも、敵を拘束せねば有効な一撃は放てまい、武天老師の弟子、一体何を考えているのだ? ……いや、まさか!」

「わかったぞ! クリリン!」

クリリンは上空で姿勢を立て直すと、武舞台を眼下に見据え、横倒しになった体の正面に腕を突き出す。

「まさか、『あれ』を!」

「か……!」

「やはりそうかッ!!」

突き出した腕を、揃えたまま脇腹に引き込む、その動作を知っているのは、この会場でも、今まさに技を受けようとしているソシルミを含め、数えるほどしか居ない。

伝説の技!

ソシルミは試合時始まって以来、最大の笑みを浮かべ、クリリンを見上げる。

前世から焦がれ続けたその必殺技を前に撤退を選ぶ理由など、彼にはないのだ。

「め……は……め……! 降参しろソシルミ! うっぞ!」

「そのまま来いッツ!!」

「なっ……!?! くそっ! オレはどうなっても知らないからな!」

クリリンの掌に青白い『気』が収束する、高められたそのエネルギーの破壊力は、山をも吹き飛ばすだろう。

だが、ソシルミは動じない、一切動かないまま、空高く舞い上がったライバルを見据え続ける。

「……波あーっ!!!」

「――ッツツ!!!」

天から真つ直ぐ武舞台に突き刺さった光の柱を前に、観客は息を飲み、アナウンサーは叫ぶ！

「信じられませんっ！ あの武天老師さまにしか使えないと言われていたかめはめ波を、わずか14歳のお弟子さんが使うとはっ！……ソシルミ選手は大丈夫でしょうか」

「はあ……はあ……」

もうもうと土煙が立ち込める中、静まり返った会場にクリリンの荒い息遣いが聞こえる。

「ま、まさか消えさってしまったのでは……!?!」

「勝手に殺すな、……ものの試しで受けるには、少々きつい技だったかな」

「あ……ああっ!!」

煙の中から、土埃に濡れた赤茶の髪が現れる。

僧衣はちぎれ、擦りむいたような生傷と焦げ目を晒したソシルミがそこに居た。

「く……とりやあーっ!!」

「焚ッッ!!」

ソシルミは、クリリンの突撃を回し蹴りで弾き飛ばす。

そも、突撃に勢いはまるで無く、試合の雌雄が決したのは誰の目にも明らかであり――

「――場外！ クリリン選手場外！ 力を使い果たしたクリリン選手、決死の突撃も甲斐なく、やられてしまいました……しかし――」

アナウンサーは大きく息を吸って、叫び続ける。

「まったく、素晴らしい試合です！ 天下一武道会、第1試合、勝者はソシルミ選手です!!」

どつと観客が湧き、勝者と、敗者の健闘を称える。

観客のコールに、申し訳程度の愛想を振りながら、ソシルミは驚嘆していた。

(まさかこの時点で、クリリンがかめはめ波を習得している……いや、実戦レベルで使えるとは)

ソシルミが記憶する歴史において、クリリンがかめはめ波を放つの

は3年後、この次の天下一武道会での出来事だった。

だがそれは覆された、目の前のクリリンは、14歳の時点で見事にかめはめ波を放ってみせたのだ。

『魔神城のねむり姫』は本来の歴史とはズレた映画だ、実際、続編の『摩訶不思議大冒険』の内容は第21回天下一武道会から、第22回天下一武道会、それにピッコロ大魔王編までのちゃんぽん、……とすると、クリリンがこの時点でかめはめ波を撃つていても不思議はない)

……そう結論づけたソシルミであったが、実際の所、それは間違いであった。

(せっかく武天老師さまにかめはめ波を見せてもらったつのに、カッコわりいなあ……)

師匠と、兄弟弟子が使うという必殺のかめはめ波。

それを使えないという恐怖、更に、魔神城で見せつけられた少女のビーム乱射。

更に、自分たちでは妨害がやつとであったルシフェルと互角にやり合い、圧倒的な強さを持った大猿に自ら飛び込みシツポを切断した男の勇姿。

それが、クリリンを歴史以上の鍛錬へと駆り立てていたので。

「……クリリン！」

消沈するクリリンの目の前に、傷だらけの手が差し出される。

顔を上げるとそこには、たった今戦いを終えたばかりのライバルの姿があった。

「最高の試合だった、ありがとう」

「……、こちらこそ」

ソシルミがかけたのは、礼だった。

一瞬、クリリンは言葉に詰まりながらも、なんとか礼を返して、その手を取った。

「次の武道会でもやろう、今度も俺が勝つ」

「ば、ばか言え！ オレが勝つぞ！」

ソシルミはかめはめ波を受け止める瞬間以上に深く笑みを浮かべ

て、クリリンを引き上げた。

天下一武道会、『世界で一番強いヤツ』を決める大会は全7試合。奇しくもこの世界を象徴する願い玉と同じ数を持ったその大会の初戦がここに終結し……次なる激戦の火蓋が切って落とされようとしていた。

↓つづく

第七話：転生TSサイヤ人が色仕掛けを跳ね除けるまで

「それでは第2試合、プリカ選手対ランファン選手を始めさせていただきます！ 本大会でも珍しい女性選手同士の試合に、注目が高まっています！」

アナウンサー（審判、司会進行兼任だ、人手不足なのか？）が、オレたち選手を紹介する。

……でも、オレたちは女、でくくるには大分離れすぎているだろ、と心の中で突っ込んだ。

「よろしくね、プリカさん？」

「……よろしくおねがいます」

互いに、儀礼的な感じで軽く下げた頭を上げる。

ランファンは試合の場にも関わらず、かなりしつかり化粧をしてきている……それも、ケバい感じじゃなくて、男受けを狙ってる感じの綺麗な化粧だ。

対するオレは、サイヤ人らしいボサツとした髪に、服もダボついた芋ジャージ……極めつけには、中身が男ときている。

「特に、プリカ選手は弱冠13歳、本大会ではおそろしいことにクリン選手とソシルミ選手もひとつ上の14歳ですが、それにしても、すばらしい才能です！」

オレは小さく頭を下げてから、ランファンを見る。

ヒラヒラしたタンクトップにゆったりとしたズボン、ここまでは武道家らしい格好……でも、首から上は化粧のきいた顔に、風にたなびくもつさもさのパーマで、戦う感じじゃない。

……ランファンは、自分の色気とか弱さを武器にして戦う？ 武道家だ。

「ふうん……」

「……なんですか」

オレの視線に気づいたランファンは、何やら、不思議な声を上げる。

でも、試合前の選手が、相手選手を見るのに不思議はないはずだ。そう思っていると、ランファンは更に、なにか意味深な笑みをかけてきた。

「うふ？」

「それでは第2試合……はじめっ！」

「があっ!!」

銅鑼の音と共に、オレは飛び出す、弱いからには手加減しないといけないけど、こいつの武器である色仕掛けは、多分オレにはやってこない。

初手は飛び込み気味の正拳突き、一般人相手なら必殺の威力だ！

「ひゃっ……っ？」

「う、うわっ!?!」

「おーっと、プリカ選手、体勢を崩してしまっただーっ！」

な、なんて声を出すんだ、この人！

まんまと引つかかってしまったオレは、空中で体勢を崩し、数メートル転がりながら着地する。

すれ違いざま、ランファンはほんの少し頭を振りたくって、オレの鼻先に髪の毛をかすめさせる、くそ、香水のいい香りだ。

「はあ……はあ……」

「きえええいっ！」

「うおっ！」

振り返ると、そこには回し蹴りの足！

防御する必要のないランファンの追撃を前に、オレはとっさに飛び退き……ここは武舞台の端だ！

オレはまるでトムとジェリーのように腕を振ってバランスを取る！

「く……くおお……！ ふうー！」

「プリカ選手、なんとか持ち直しました！ どうやら、ランファン選手の手大人の色気に惑わされているようです！」

「うふ？」

ランファンは再びかわいい子ぶりっ子の構えを取っている。

こ、こいつ……!!

弱いからと遠慮していれば、女でもそれにつけ込んでくるのか!

「ほう……、圧倒的な強さの差も、見た目と振る舞いが伴えば武器となるか」

「あの選手は本来、女の色香で男を惑わすことを武器にしているのです、女のプリカに通用させているのは、応用力として見るべきでしょうか」

「そうか、いや……うーむ、何か別のものがある気がしないでもないが……」

武舞台の外では、ソシルミとチャパ王が何やらこちらを見て愉快そうに話している。

あいつら、好き勝手人の試合(?)を論評しやがって……!

「く、くそっ!」

「あら、いけませんよ、女の子がそんな言葉を使っちゃ……?」
詰め寄ってくるランファン!

オレは体勢を立て直すため下がるが、傍から見れば完全に逃げていく形だ。

「ぬああ……っ!」

「ちよああっ!!」

「くおっ!」

完全に追われる側になってしまった、くそ、なんてこった。

まさか、ランファンがオレにまで色仕掛けを試みるなんて!

「どうしたの? プリカちゃん、来ないなら……っちから……?」

「ぐう……!」

ランファンはしきりにズボン越しの尻や乳をアピールしてくる、まさか、オレの中身が男だと知っているんじゃないのか!?

……なんだかイライラしてきた、うまく試合を運べていないからだろう。

こいつは多分、弱いなりに、相手のペースを崩す試合については一流の経験を積んできたに違いない。

「落ち着けプリカ! お前は女じゃないか!」

「ソシルミ!?!」

そうだ! 女であるオレに色仕掛けなんて通じない!

容赦しなくていいなら、完全にこっちのもんだ、オレは体ごと突っ込んで、ランファンに回し蹴りを叩き込む!

「ぐがあ!!」

「うぎやあーっ!」

「ランファン選手場外! 第2試合はプリカ選手の勝利です! 見事に誘惑を断ち切り、勝利を勝ち取りました!」

……終わった。

せつかくの原作キャラとの戦闘だが、オレの心がすり減るだけの結果に終わった。

オレはとぼとぼと控室に戻る、この疲れ切った様を見て、誰もオレが勝ったとは思わないだろう。

控室に戻ったオレを、僧衣を新しいものに着替えたソシルミが迎える。

「よう、お疲れ様」

「……すぐくつかれた」

「コーラを飲むか、安心しろ、炭酸入りだ」

ソシルミが差し出してきたコーラを一息に飲み干す。

「瓶コーラ特有の香り高さが心地良い。」

「くはあ……!」

「いい飲みっぷりだな、よし、そろそろ第3試合だ、見に行こう」

「わかった、次はなんだ」

「ヤムチャとジャッキー・チュンだ」

……すぐ終わる試合だ。

内容はもうよく覚えていない(というか、ドラゴンボール無印の序盤なんて前世でも深く覚えていなかった)けど、確かものすごい勢いで瞬殺されて終わる。

まあ、この時点のヤムチャはただの山賊だ、ジャッキーこと亀仙人と勝負になるわけがない。

「しろでたたかったときのおとこか」

「その通り、ジャツキーは……知らん名だが、見るからに只者ではない」

オレは知らんぷりをして、あえてうろ覚えを装っておく。

「おまえでも知らないのか」

「うーむ、俺もそれなりに詳しいつもりではあるんだがなあ」

ソシルミはジャツキー・チュンの名を知らないらしい、当然、亀仙人がその場ででっちあげた選手のジャツキーが知られているはずもないが……。

そして、てつきり、オレはソシルミがチャパ王と観戦するのかと思っていたが、ソシルミは武舞台脇の壁の上に飛び乗って、オレを呼んできた。

「観戦しよう、悟空たちが黙認されているなら、近い歳の俺達が許さない道理もあるまい」

「いや……それはそうだけど……」

確かに、悟空とクリリンは壁によじ登って観戦している（原作でもそうだった記憶がある）けど、ソシルミは完全に居直って、鉄骨の上のデールマンのようにくつろいでいる。

係員も何か言う様子がないし、いいのかもしれない……オレは仕方なく、壁に飛び乗った。

「よし、座れ座れ、もう始まるぞ」

「あまりよるな」

ソシルミはオレを側に座らせようとするけど、オレはちよつと離れた場所に座った。

まだ子供とはいえ、半裸のマツチヨマンは威圧感がすごいんだ。

「それでは第3試合、ヤムチャ選手対ジャツキー・チュン選手を開始します!! 無名同士の対決となりますが、それだけに目を離せません！」

「ヤムチャは有名な山賊だが、それでも全国的に言えば泡沫か」

「けっこうつよいのにな」

あの時見たヤムチャは、ソシルミ程じゃなくても、それなりに魔族とやりあえるだけの実力を持っていた。

……ソシルミは、今のヤムチャの実力には興味がないみたいだ。

「それでは、はじめっ！」

「はあーっ!!」

最初に仕掛けたのはヤムチャだ、大ぶりに蹴り込むヤムチャの動きは、魔神城で見たのよりも大分早い。

でも、ジャツキーには全く通じなかった。

ジャツキーは、ヤムチャの連続攻撃をわざわざ『ひよい』『よっ』などと口に出しながら避けている。

「……ジャツキーの技術力に、ヤムチャは一切ついていけないようだ」

「はやさじゃないのか」

「ヤムチャは動きが荒い上に無駄な力みが多い、技の速さや連続行動には自信があるようだが、アレでは格下にしか通じんだろう」

「……そんなもんか」

オレの目には、ただ避けているようにしか見えなかったが、ソシルミほどのウデがあれば、見えるみたいだ。

……もちろん、二人の動きは完全に目で見た上で、その意味を見切れるかの話だから、オレがヤムチャと戦ったら、何も感じ取れてなかったって、攻撃が当たる前に殴ればいいんだけど。

それでもなんとなく悔しい。

「ヤムチャ選手、ジャツキー・チュン選手の軽快な動きを前に手も足も出ていません！ このままやられてしまうのかーっ!」

「く……くそっ！」

「少々動きが速いのはええが、技が出るまでの時間と動きが大きすぎるわい」

ソシルミがドヤ顔でこつちを見る、こつちみんな。

「こうなったら！ 狼牙風風拳を——」

「ほいっ」

狼牙風風拳の構えを取ろうとしたヤムチャの目の前に、高速移動したジャツキーが現れる。

一応オレにも見えるけど、凄まじい速さだ。

ソシルミを見ると、最早オレすら眼中にないらしく、ジャツキーの一挙一動を見逃すまいと目を見開いている。

「なっ……い！」

「はっ!!」

そのままジャツキーが腕を振るうと風が起き、そのままヤムチャは武舞台の果てへと飛んでいった。

「場外! ヤムチャ選手場外! 天下一武道会第三試合は、正体不明の達人、ジャツキー・チュン選手の勝利です!!」

「……まあ、こんなものか」

「それ、どつちに言ってるんだ?」

「ヤムチャだ、力と技の出し方は鍛え上げたようだが、肝心の戦闘については疎かになったようだな」

なんとなく分かってきたけど、ソシルミは戦い方を鍛える気のない相手にはとことん厳しい。

口から吐くグルグルガムを必殺技として使うギランにも冷たい目を向けるし、さつきはバクテリアンも許せないと話していた。

「第三試合はあの悟空と、ナムだ、あいつは多分、俺に近い戦い方をするはずだが……」

「だが?」

「悟空の相手をするには少々力不足だ」

ソシルミはナムにも厳しい視線を向ける。

俺の知っている歴史でのこの二人の戦いは、結構いい感じの試合になったはずだけど……。

「だめなのか」

「見て分かる、悟空とナムでは、足腰の鍛え込み方、戦術の才能、全てが段違いだ」

自信満々って顔だ。

しばらくすると、例によって選手紹介からの、試合開始の合図……が終わった途端に、悟空が凄まじい勢いで飛び出した!

「とりゃあーっ!!」

「いっ!」

ナムは一瞬驚いて、反応しようとするけど……間に合わない。
そのまま悟空の頭突きに跳ね飛ばされて、観客席の壁まで吹き飛んだ。

「……まさか、あそこまで鍛え込んでくるとはな」

「え？ あれでおわり？」

「見ただろう、これで終わりだ」

ソシルミは悟空の活躍を喜んでいる一方で、チラリとナムを見て、一瞬眉をひそめた。

「次は俺達の試合だ、……俺はトイレに行く、係員には伝えておくから、お前も行きたいなら済ませておけ」

「いらない」

「サイヤ人は代謝系の余裕が大きくていいな、あそこまで補給しておいて、全く平気か」

面倒な言い方だけど、要するに、食いだめが効いて、出す方も長く我慢できる、と言いたいらしい。

こいつは回りくどい言い回しや難しい言葉をあえて使っている気がする。

「めいわくだからはやくいってこい」

「オーケー」

……さて、こいつが居なくなれば、オレもちよつと用事がある。

色黒の男が天下一武道会の控室からいそいそと出ていく。

男の名はナム、ついさつき、この世界の主人公である『孫悟空』に（元の歴史よりも大分あつさり）敗れた選手である。

去る理由の一つ、天下一武道会における優勝がなくなったことにより、彼の目的である、渇水に苦しむ故郷を救済するための大金が得られなくなったからだ。

オレは物陰から、彼を見守る。

「なんて、アイツのマネをしてたっけしようがないか」

正直言っ、あのナムの行く末が気になって気になって仕方ない。
元の歴史では救われたナムが、（多分、オレたちのせいで強化され

た) 悟空に瞬殺されたことで、もし救われなくなってるなら、オレはなんと少しでも、ナムにあの事を教えなきやいけないんだ。

そうこうしている内に、ナムはどんどん会場から離れてゆき、オレの不安はどんどん高まっていく……!!

「ナムさんとやら、残りの試合も見んと帰るおつもりか?」

「はい、わたしは……」
きた!

亀仙人来た!これで救つる!

これで、ナムは水は豊富な地域でカプセルに詰めて運搬すればいいということに気付き、故郷と彼は救われる!

「ほ……」

「……ふう」

一瞬、オレのついたため息と、誰かの息がかぶった。

周りを見るが、誰も……いや、印象的な半裸のマツチヨマン、ソシルミがナムを見てから、きびすを返して武舞台の方に向かい始める。

ソシルミはこつちには気付いていないみたいだけど、一体、トイレに行かずにここで何を……いや、違う。

あいつは、ナムを見張っていたんだ。

「ごくうにやられただけのあいつを、どうして?」

そうだ、いくらソシルミがバトルマニア(戦闘が好きだけじゃない、戦闘に対してあいつは少々マニア気質だ)と言ったって、流石に、あいつがめちやくちや興味を持ってるオレとの試合をトイレでごまかしてまで、ポット出の弱い武道家を見張ろうなんて思わない。

まして、問題を抱えてることすら知らないあいつが、救われたかどうかを確かめるなんて。

「まさか、あいつ」

亀仙人は心を読んでナムの村に迫る危機を知った、それと同じことが出来る?

出来るはずがない。

未来人? じゃあ、どうしてナムの危機なんてめちやくちやローカルなことを知っていて、しかも今までスルーしてきた?

「……違う」

転生者だ。

オレと同じく、別の世界で一度生まれて、『ドラゴンボール』を読むか見るかして、死んで、この世界に生まれ変わった人間だ。

……これまで、全く疑わなかったってわけじゃない、でも、確信は持てなかった。

いや、持ちたくなかったのか？

「もしそうだったら、オレはどうすればいいんだ」

この8ヶ月と、その前の戦いで、オレはソシルミに結構世話になった。

あいつがおかしなやつだけど、いいやつなのも知ってる、その上で……じゃあ、どうするんだ。

既に元の歴史は変わり始めてる、変わったたら、何が起こるかわからない、そんな世界で、オレは一体、あいつにどう接すればいい？

しばらく考えていたが、オレは係員に呼ばれて、武舞台まで戻ってきた。

隣には、同じく出場を待つソシルミがいる。

「なあ、プリカ、少し賭けをしないか？」

「かけ？」

「何、俺はお前と戦えればそれだけで楽しいが、お前はそうじゃないだろ……だから、ちよつとしたお遊びだ」

藪から棒に、ソシルミは妙な事を言ってきた、……でも、賭けといつても、オレには賭けるものはない。

まさか、オレの体を、とか言うんじゃないかな、と思ってソシルミを見ると、妙に澄んだ目で、いつものニヤケ面で、言葉を続けてきた。

「この世界には、どんな願いでも叶えてくれるという7つの珠があるらしい、もしそれを手に入れた時、先にどちらが使うか、ってのはどうだ？」

「……ほんとうにあるのか、そんなの」

「あるんじゃないか？」

オレには、こいつが分からない。

オレがどうこいつに接したいのかも、もう分からない。

ドラゴンボールは欲しい、でも、こいつがくれるとして、集めさせていいのかも分からない。

「じゃあ、いい、それでいこう」

「やる気を出してくれるなら、俺も焚き付け甲斐があるというものだ」

戦いに迷いを持ち込まないのがいいメンタルなら、オレのメンタルは最低最悪だ。

目の前のこいつをどうしたいのかも知らないまま、殴り合おうっていうんだからどうしようもない。

……でも、オレの中のサイヤ人の血は、こいつと戦いたがっている。

オレの持つ、地球人の魂は……こいつの事を、もっと知れど、叫んでいる。

否応なしに、高鳴る鼓動に答えるように、オレたちの戦いの火蓋は、今まさに切って落とされようとしていた。

↓つづく

第八話：転生地球人と転生TSサイヤ人が雌雄を決するまで

「少々の休憩をはきみましたが、ついに始まります、天下一武道会第二回戦!! 第5試合は、ソシルミ選手対プリカ選手です!」

近年稀に見る粒ぞろいの天下一武道会!

観客の興奮はここにきてピークに達し、アナウンスに呼応する観客たちの歓声はまるでライブ会場のように高まっていた。

「よろしく、プリカ」

「ああ……ん?」

小麦色の肌、赤茶けた短髪、黄色のシンプルな袈裟を片方はだけた、筋骨隆々、しかし容姿端麗の少年、ソシルミが合掌の礼を行う。握手かと伸ばした手を遠慮がちにひっこめたのは、赤いジャージに、黒いボサついた髪、13歳にしては幼げな少女、プリカだ。

「なんだ、握手しておくか?」

「いらん」

プリカは少々気恥ずかしくなり、顔ごと目をそらした。

「確か、お二人は修行仲間だとか、仲がよろしいようですが、試合はまじめに行ってくださいね?」

「俺は、こいつと共にいた8ヶ月、この日だけを待って鍛錬に励んできた」

アナウンサーは、いらぬ詮索を恥じ、ソシルミに小さく謝罪をする。いくらかの観客は選手たちの関係に感じるものがあつたのか、ああだこうだとヤジを飛ばしたり、友人とあれは出来ているだのいないだのわあわあど騒ぎ始めた。

(いや、まさか……しかし、やつも色を知る歳、齢14の男女が一つ屋根の下修行に励むとなれば……いや、考えるべきは……)

「へえ! あいつらが一緒にきたえたなら、あんどきよりもつとずっと強いってことか!」

「オレはもう体験済みだけどな……」

「あやつ、見込みのある武道家だと思っとならたら、あんな歳でいい思
いしおって……！」

……わあわあと言っているのは、観客だけではなかった。

「……さわがれるのはきらいだ」

ついでに、勘違いされるのも。

そうプリカは脳内で付け足したが、それを口にすることそのものが
気恥ずかしかった。

「俺は、ヤツらが想像してるのよりずっと強くお前に焦がれてきた
んだがな」

「あっそ」

プリカは少し頬を掻き、目を逸らしたが、すぐに眼を鋭く尖らせ、
まっすぐソシルミを見つめなおす。

対するソシルミもまた、戦いの始まりの気配を、強く感じ取った。

これは単に、楽しむためのものでも、勝利を得るためのものでもな
い、これは……相手を見極めるための戦いになる。

互いに、そう確信していた。

「アナウンサー、そろそろ頼む」

「はい、それでは第5試合……はじめっ!!」

(そうだ、見極めるべきは、あやつらが如何なる仲か、ではない、自
ら選んで8ヶ月も修行場を共にした戦友との間に、皮一枚、距離があ
るのか——!)

銅鑼の音と共に、まるで両方から引きちぎれるギリギリの力で引つ
張ったゴム紐のように、二人が激突する!

「カアアツツ!!」

「がああ!!」

観客だけではない、多くの武道家にすら、一瞬、武舞台の中心が炸
裂したように見えた。

「いいパワーだッ! 無駄もないじゃないかツツ!!」

「ぐが!! 教えたのは、おまえだっ!」

「どういたしましたッツ!!」

初撃は互いに渾身の右パンチ。

試すように放たれた、しかし、必殺の一撃の威力を完全に相殺し、次弾を装填する二人！

「ぬんツツ!!」

「ぐぐああ!!」

「両者、ほとんど足を止めての打ち合いです！ 武舞台の外にいるわたしにまで、圧力が伝わってきています！ すさまじい威力！」

放たれる拳、肘、腕！

間髪入れずに挟まれる膝、足、脚、だが、この二人、目の前に或る敵が放つ一切を、奇襲とは見做さぬ気概と気迫がある！

「なんてやつらだ……！ あの時より、断然ウデを上げてやがる！」

「オレと戦った時もまだ本気じゃなかったのか……！」

「プリカってやつ、前はもつと別な戦い方だった気がすんだよなあ……」

「ほう、前はどんな戦い方だった？」

一瞬、悟空の目に戦闘知性の輝きが灯ったのを、ジャツキー・チュンは見逃さなかった。

「あいつ、前はもつとゆらゆらぴよんぴよんする奴だったんだけど、今はどっちかつつーと、オラのじいちゃんみてえな戦い方なんだ」

「……つまり、おぬしら亀仙流と同じか」

「んー、そうかもしんねえ」

一瞬、ヤムチャの目が疑念に揺らぐ、だが、武舞台の向こうに、見知った禿げ頭を発見したことによって、彼の脳から『ジャツキー・チュン』亀仙人』の図式は消え去ることになった（実際に彼が目撃したのはナム演じる偽亀仙人である）。

——試合が動いたのは、その直後である。

（やはり、プリカと正面から殴り合うには技量が足りない）

人知の及ばぬ領域での差し合いの中、ソシルミは静かに焦っていた。

自分が育てた少女は、予想通りの強敵に仕上がりに……予想通り、自分よりも遥かに強い。

「があ!! ぐがあ!! だあ!!」

「——ツツツ!!」

振り下ろされるクローの手首を弾き、フックを躲し、抜き手の脅しで回し蹴りの初動を潰す。

そこに寸分の狂いもない、自ら自負する、存在すら怪しい『範馬の血』を裏切らぬ才能に、飽くなき鍛錬と実戦で築き上げた経験が力を与えているのだ。

……だが、そこにも限界はあった。

「ツツアアア!!! チェリアアツツ!!」

「ぐぶつ……ぐがあ!!!」

ソシルミの反撃が突き刺さるも、跳ね起きる勢いのままに、攻撃を再開するプリカ。

そこには一切、息をつく暇すらもない、それは両者同じ……いや、本来、連続して攻勢を掛け続けているプリカこそ、疲弊して然るべきところだ。

「グツ……ヌウツツ!!」

「だあつ!!!」

「ソシルミ選手、汗が垂れてきたか! 一方のプリカ選手はまだまだ元気! 跳ね返されても次々と技を繰り出してゆくー!」

——が、ここに、種族の差が現れる。

(圧倒的な体力をバックボーンにした、地球人の速攻戦術よりも更に激しい攻め手、これを無限に続けられては、俺の体力が持たなくなる……!)

「どあつ!! ぐあ!!」

「よ、よくは見えませんが、ソシルミ選手ほとんど防戦一方です!

プリカ選手の凄まじい攻撃に、ソシルミ選手追い込まれていくー!」

圧倒的な体力、頑健性、代謝能力、心肺能力、脳内分泌物!

戦闘民族サイヤ人と地球人の違いが力の差以上にソシルミを追い詰める!

そして、一瞬、0コンマ一秒にも満たぬ一瞬、ソシルミの防御が緩む瞬間が、ついにやってきた。

「ぐ……ぬうツツ……!!」

「っ!! があ!!」

一瞬を見逃さぬことこそが卓越した戦闘者の条件である、プリカはその一瞬に向け腕を伸ばし――

「――待っていたアツツ!」

「えっ……!?!」

獣の反射神経、ソシルミにそれ以上を語る時間と精神の余裕が残っていたならば、そう語っていたであろう。

範馬を名乗る者が持つ、達人の技巧にも勝る究極の力!

それだけはサイヤ人にも届きうる、ソシルミの確信は、真実であった!

「おーっと、ソシルミ選手、プリカ選手の服を掴んだ! 掴みました、これは……」

服を掴み、勢いをそのままに引き込む。

足を払いながら、自分も後方に倒れ込み、慣性と位置エネルギーを活かして、敵を放り投げる、その技は。

「……巴投げだあつ! 巴投げです! プリカ選手場外へ飛んでゆく!!」

(やつは入門当時から力や技で勝る相手を倒すのが得意だった……これは勝負ありか?)

もつとも、力でも技でも、数年もすればやつに敵う者はいなくなつたが。

チャパ王はそう心中で続けながら、ソシルミが力で勝るライバルを手にしたことに深く安堵し、自らがその世界に及ばぬことに歯噛みしていた。

「く、くおお……ぐがあ!!」

一方、巴投げを受けたプリカは、空中で猫のように回転して無理やり姿勢を立て直し、エネルギー弾を地面に発射。

その爆風で武舞台への復帰を図る!

「……………そう、うまくは行かんかツツ!!」

「うあつ!?!」

「ソシルミ選手、戻ろうとするプリカ選手に容赦ない追い打ちです、

しかし、今のかめはめは波のような技は一体……!?!」

武舞台に飛来するプリカに向けて、ソシルミは追い打ちの回し蹴りを叩き込もうとする。

が、プリカはその瞬間、ソシルミに向け両手を突き出す。

突き出した両手は、親指と人差指、中指を突き合わせ、ダイヤ型に隙間を開いた――

「――きこうほ――」

「ツツツツ!?!」

馬鹿な、ありえない、あの技は、しかし、貯めが、時期が、違う、撃てない!

ゼロコンマ一秒の戦いの中で、更に細切れになった一瞬の思考を言葉に直すならばこうであろうか。

一瞬躊躇したソシルミは、すぐにそれを――何故行われたのかすら理解せぬまま――牽制と看破し、技を再開する。

「我^ガツツツ!!」

「どがあっ!!!」

技に合わせて放たれるエネルギー弾!

ソシルミはすんでの所で防御体勢を取る……が、エネルギーはそのまま武舞台に激突し爆散する。

その激しい爆裂を前に一瞬、アナウンサーはひるんで隠れ、観客たちの視界も塞がれた。

「プリカ選手、煙幕です、技で煙幕を張りました、全く見えません!!」

「目くらましか、こすい手だ、お前の本分でもないだろう」

「こつちのせりふだ、男らしいふうで、ゆだんもすきもない!」

ソシルミにとっては意外なことに、対戦相手は正面から現れた!

プリカは両手を繰り出す、軽く広げた両手は、これを掴め、そして力比べをしろ、という挑発行為に他ならない。

明らかに力で勝る相手の挑戦を前に、ソシルミは一瞬も躊躇することなく、その両手にまっすぐ手をかざし、掴んだ。

「男らしさを見せろと、いいともー!」

(やっぱり、こいつは試合じゃ勝ちに来るけど、挑発……いや、挑戦

されたら乗ってくる)

プリカは考える。

難しい精神構造だが気のいいこの男は、しかし、自分や世界に対して多大な脅威をもたらす存在だ。

「おまえ、さっきのわざ、なんだか分かったんだろ」

「……ああ」

「あのわざを知ってるおまえは、このせかいをどうする気なんだ」
プリカが、決死の思いで口にした、その言葉。

余りにも迂遠なその言葉選びには、果てしのない恐怖と躊躇が詰まっている。

誤っていたら、自分をもっとも危惧していた事態を招きかねない、逆に、正しくても、その後どうするべきなのか皆目検討もつかない。

その言葉を前に……ソシルミは、笑った。

「とつくにござんじなんだろ？」

「っー」

「俺はこの世界で範馬になる、宇宙最強の男になる、ただそれだけだ」

笑み、意識されたその笑みは、唇を歪め、口角を持ち上げた、まさに範馬の笑みであった。

「て、てめえ！」

「男と産まれたからには、つてなツツ!!」

あまりに能天気、あまりに軽率な戦闘狂!

怒るプリカが罵声を放とうとするのと同時に、ソシルミは掴んだ腕を起点に柔の技を仕掛ける!

「っああ、っ! くそっ!!」

「チツ、そう上手くは行かねえかッー」

プリカは強引に体をねじり、ソシルミから距離を取る。
心中は、穏やかではない。

「く、くそ、……なんでわらってる!」

「楽しいからだ、それ以上あるか!」

「オレはたのしくない!」

輝きがプリカの両手に現れる。

ソシルミにとつては幾度となく受けた技……しかし、いつも、手加減で守られていた技だ。

更なる笑みが浮かぶ。

「け、煙が晴れて参りました……プリカ選手、力を溜めております!!
ソシルミ選手、まさか再び正面から受けるつもりかー!？」

「ご明察ですツツ!!」

「ぐっがああ!!」

数メートルの距離を置き、二人が激突する!

一撃でも戦車を跡形もなく破壊できる威力のエネルギー弾の連射を前に、ただひたすらに腕を交差させ、繰り返される衝撃に耐えるソシルミ。

「グ……ヌウツ!!」

一撃ごとに皮膚が焦げ、裂け、張り詰めた肉に痛みが走り、骨がきしむ。

……だが、耐えられる。

耐えられるのであれば進む、進んでライバルを掴み、今度こそ武舞台の外に投げ飛ばしてやる、いや、もっと凄まじい技を使ってもいい、思いつかないが。

ソシルミは能天気であり、戦闘狂であった。

「プリカ選手、かめはめ波に勝るとも劣らない凄まじいパワーの攻撃です!! しかし、ソシルミ選手突き進む! 怯みません!」

「……………ツツ!!」

「ぐがぐぎぐげ……………!!」

滴る血も蒸発させながら、迫るソシルミ。

初めて生きた相手に向け全力で撃ち込む連続のエネルギー弾に、プリカの理性もまた揺るがされつつあった。

ソシルミに向けて殺到する攻撃が、一瞬止まる。

「むッ、なんだプリカ、もう……………ツツ!？」

「……………!! があっ!!」

留まった半秒分のエネルギー、数倍の直径に育ったそれが、ソシル

ミに突きつけられていた。

(これは……かめはめ波以上かッ！ まずこのままでは防げん！
防げたとしても次はない、かくなる上は……ッッ！)

「ソシルミ選手、手を前にかざします、おーっと、手が光り始めました、ソシルミ選手もああいっただ技を使うのでしようかーっ！」

「むう……あのような技はワシも見たことが……、いや、どこかで……」

ジャツキー・チュンが小さく唸る。

「ぐあっ!!」

突き出された輝く両手に、エネルギー弾が激突！

その瞬間、エネルギーの炸裂は、武舞台に命中した時のそれを遙かに上回り、観客席にまで激しい閃光と爆風を吹き荒らした！

「凄まじい爆発ですっ！ プリカ選手の大技が、ソシルミ選手に命中しました！ ソシルミ選手、大丈夫ですかーっ！」

爆炎の中から2つの影が現れる、一つは、エネルギーを放ったままの姿勢で硬直したプリカだ。

目は見開かれ、自分が放った技の威力に驚嘆するような、慟哭するような、それでいて、一種恍惚感を匂わせる表情のプリカが煙から現れた。

そしてもうひとつ……ソシルミは、命中地点から数メートル後退し、腕をだらりとぶら下げていた。

(……未完成の技、プリカの全力にどこまで通用するか試してみるつもりだったが、まだまだ不安定……か！)

「オ、オレのかめはめ波でも無事だったソシルミが、あんな……！」

「でも、ミソシルはまだまだやる気だぞ！ 全然リキが収まってねえ！」

ソシルミの目はららんと輝き、被弾のショックが収まらぬ腕の制御をなんとか取り戻そうとしている。

足のすくみを武者震いに責任転嫁し、ソシルミは武舞台を踏みしめ、まっすぐ前を、プリカを見据える。

「さあ、続行つづきを」

「……なんで、そこまでやろうとするんだ」

尚も不敵に笑い続けるソシルミに、プリカが問いかける。

これ以上、友を傷つけない、これ以上、暴力を振るいたくない。そう叫ぶ心の声が、誰の耳にも聞こえそうな、悲痛なつぶやきだった。

「とんでもなく楽しくて、しかも更なる強さを俺に与えてくれる、そんな戦いを途中で辞める意味が、むしろ存在しない」

「それで、うちゆうがほろんでもか」

「滅びない、俺達と一緒に戦えばいい、仲間たちと切磋琢磨し、敵に立ち向かうんだ」

一瞬、プリカの脳裏に、もつとも幸福と言えるそのビジョンがよぎり……それが、精神のもつとも奥深くに潜む、鬱屈した感情の源泉に触れた。

「ソシルミっ!!!」

「な、なんだッ!」

「ぐ、が、がああああああ——」

雄叫びのままに大口を開けるプリカ、その喉奥には、とてつもないエネルギーの収束が起こりつつあった!

(サイヤ人お得意の口ビームか! 威力はあの大玉とは比べ物にならない、直撃すれば死ぬ、受けきれないか、俺が避ければ観客が死ぬ、なんて技を使うんだ、こいつ、正気を失っているのか!?)

プリカは正気を失ってはいない、だが、狂っていた、怒り狂っている。

口からのエネルギー波、それは、彼女がこの地球に降り立ってから10年近くの間、ずっと側に、心の片隅に感じていた技だった。

(ソシルミめ、なぜ怒りを買ったのかは皆目見当も付かぬが……やっかいな女を友に選んだものよ)

それを使わせたのは、その10年、溜りに溜まり続けた、留めに留め続けた、彼女自身の激情の爆発、そしてそれを誘発したソシルミに他ならない。

「い、いかん! あのお嬢ちゃん、観客ごとぶつとばすつもりか!」

「ま、まさか、そんな威力の攻撃なのですか!? ひ、避難! 避難してください!!」

「ミソシルもやる気だ!」

逃げ惑う射線上の観客、それに武舞台の影に隠れるアナウンサーをよそに、対面する二人の時間だけは、穏やかに、そして激しく経過してゆく。

プリカのエネルギーの高まりに呼応するように、ボワ、とエネルギーがソシルミの腕を包み……腕の痺れが和らぐ。

(こうしているうちは少しだけだが、マシつてところか……! 気が生命のエネルギーならば、ダメージを受けた場所に回せば治療効果も見込める……なんてのは、都合が良すぎか)

大方、集中力の高まりでコントロール力が上がっているのだろう。ソシルミはそうアタリを付け、少し動く腕を、先程よりも薄れた輝きを携えて、プリカを見据える!

「……盤面この一手だ、俺に下がる選択はねえ」

「——ぐあが!!」

閃光!

それが、観客が感じたすべて、そして、ソシルミが最初の一瞬に感じた情報であった。

次の瞬間、ゼロコンマ、ゼロ、ゼロ、ゼロ一秒を満たすか満たさぬかの瞬間、極限まで高まった集中と戦闘知性が生み出した幻覚かも知れぬその一瞬に見えたのは、光の束!

収束したエネルギーが、口腔の奥、遙か丹田から生み出される奔流によって、猛烈に吐き飛ばされるその瞬間を、ソシルミの意識はたしかに目撃した!

(あの一撃で、俺の頭は冷えた、そして……新たな力もまた、俺の前に現れた!)

前に構えた腕を、閃光に向けて差し出す。

その動きは、迅速でありながらも、極めてゆったりと緩慢で……あらゆる精密機械よりもお滑らかであった。

「消^キエエツツ!!」

「がっ……!?」

だが、2つの光が衝突する瞬間、あらゆる穏やかさは消え失せた!!
もつとも偉大なる僧の合掌よりもなお穏やかな腕の動きは、一瞬にしてガトリングガンの回転よりも激烈なものへと変ずる、その目的は一つ!

「す、すごい光です! 何も見えません!」

「ソシルミめ! やりおったわ!!」

観客が見たたった一つの閃光、それは、プリカがエネルギー波を発射する瞬間の閃光……そして、ソシルミが、その技を打ち破り、粉碎し、かき消した閃光であった!!

「あ、あやつ、回し受けて技をかき消しおった!!」

「な……なるほど! ジャッキー選手によると、ソシルミ選手は光を使った回し受けて、あの技に対抗したようです! なんとという技の応酬でしょうか!!」

愉快そうに笑うチャパ王、その才と度胸に戦くジャッキー・チュン。観客に、たまらず控室から飛び出した武道家たち、彼らは閃光に目を焼かれながらも、この戦いの行く末をなんと見届けようとしていた。

「ブッハア……!! ……アアツツ!!」

「ぐっ!」

自身ですら、試合前には想像だにしていなかった最大の技を放った選手二人!

ソシルミには最早、得意の軽口を叩く余裕すらもない、プリカもまた、限界まで追い詰められつつあった!

技の余韻も残心も投げ捨て、突撃するソシルミ!

「——ツ!!」

「げがあっ!!」

だが、プリカは怒りに狂わされた中で、覚えていた、目の前の男が、この馬鹿が土壇場で奇跡を見せる男であることを。

消えかかった理性と引き換えに極限まで研ぎ澄まされた戦闘知性
がその事実を捨て置くことはない!

「——があ!!」

「ツ!?!」

エネルギー弾、最後の一発は手の中に握り込み、最後の奇跡を打ち破るために。

「……………喜^キイツツ!!」

「あっ…………!?!」

次に驚くのは、プリカだった。

ソシルミの腕もまた、光を携えたまま、握り込まれた拳は、まさしく必殺の威力。

「激突!! 二人が激突!! 吹き飛んだのは——」

「が……………」

衝突音から数秒遅れて、落下音。

飛距離に対してごく軽いその落下物のシルエットは、シツポの生えた少女。

エネルギーの塊を、エネルギーと拳が貫いたのだ。

(二つの要素だけで勝負しなきゃならんなんてことは、元からない、腕力も、気も、技も、全て使えばいい、手にしたすべての合算が、まじりつけなしの、俺の力だ)

「プリカ選手場外! プリカ選手場外!! 天下一武道会、第5試合、勝者はソシルミ選手です!!」

殴り抜けたままのポーズで、ソシルミの体がゆっくりと崩れ落ち、片膝を付いて荒く息をつく。

「俺も、気くらいは、使ってやる」

↓つづく

第九話：転生地球人たちの天下一武道会が終わるまで

全身が痛い。

生傷とあざ、それに火傷。

二人の強敵がもたらした多数の打撃、それに、『気』によるダメージは俺の心身を容赦なく蝕んでいる。

特に傷ついているのが、両手だ……その、包帯とテーピングに包まれた腕をなんとか持ち上げ、俺はバナナを掴む。

「ガプ……ミチ……」

そして、口に運び、食う。

それだけの作業が非常に億劫だが、腹が減っている。

バナナを一本、二口で食い尽くしたら、次はおじやに手を出す、三角食べだ。

「グプ……ムチャ……」

わざわざホイホイカップセルで持ってきた甲斐があるというものの、俺の消化能力は『超人的』なレベルだが、それでも、これほど短時間に補給を済ませるなら、このメニューが一番だ。

かつこむようにおじやを食べ、梅干しを口に含み、タネだけ出す、それを繰り返し、数杯のおじやを食べ尽くした。

続けて、炭酸を事前に抜いた1リットル瓶のコーラを、一息に飲み干し、流し込む。

「朝と、しあいまえ、これでさんどめのめしだな」

「ゴク……体力を使いすぎたからな、食わねば仕方ない」

呆れたように、プリカが突っ込んでくるが、コンディション悪化の原因は、キズだけではない、体力の多大な消耗もあるのだ。

クリリンとプリカとの派手な殴り合いに、試合で消費される集中力、さらに、あの気を使った光る手の技。

俺の体は試合のダメージと疲労もさることながら、エネルギーの枯渇にも晒されていた。

「すぐしあいが始まるぞ、だいじょうぶか?」

「今のうちに食べて、決勝戦までのインターバルの10分を消化に

費やす、問題ない」

これは、グラップラー刃牙、第一話、そして、最大トーナメント決勝戦直前に行った補給だ。

刃牙ならそれが可能だった……だから俺もやる。

……あまり賢いとは言えない理屈だが、実際にこの食事法は俺の体に適合し、何度もここ一番の試合に向けた活力を与えてくれた。

「よし……と——」

「ほんとうにバキが好きなんだな、バキの世界に生まれかわってればしあわせだったのに」

「暴言か同情か、判断に困る言い回しだな」

「どうしようでいい」

突然投げかけられた言葉を反芻し、俺はしばし考える。

一瞬、会話が止まると、会場から漏れ聞こえるアナウンスや叫び声、打撃音、悟空とジャッキーに、観客の叫び声の数々。

俺は強く、とても強く興味を惹かれるが……回復が優先だ。

ともあれ、プリカの問いに対する答えを、俺は持っている。

「それも……良かったかもな、地上最強を目指しても笑わないやつが居てくれる世界、地上最強を目指す道筋がある世界、そういう意味じゃ、ここもあそこも同じだ」

「ここでも、いいのか」

「宇宙規模の戦いってやつもワクワクするだろう？ それに、ドラゴンボールは漫画もアニメも、一応通しでは見たくらいのファンだ、俺が死ぬまでの分だがな」

「オレも、死ぬまでは見てた」

俺達の間には微妙な雰囲気が出る。

まるで喧嘩別れになってもう会えない友人との思い出を話しているようでこそばゆく、気まずい。

だが、もう会えない相手、読めない漫画の思い出が……俺達に強い憧れと、戦う力をもたらしているのも、確かだった。

停滞した空気を破るべく、俺はプリカに、ちよつとした質問をする。

「なあ、プリカ、お前は悟空と亀……いや、ジャッキー・チュン、ど

「ちらが勝つと思う?」

「さあ……、うーん、ほんとうはギリギリで、ジャッキーがかつたら? じゃあ、悟空じゃないのか? 強くなってるし」

「俺はジャッキーが勝つと思う」

質問と言いつつ自分の中では完全に答えの固まった結論は、下の歴史の踏襲だった。

前の試合で歴史を変えつつ勝利すると豪語してみせた俺にしては謙虚というか、虫がいいような答えだが、俺はこれに確信を持っている。

「それは……どうしてだ?」

「あの悟空が育つてくるのを見ていたんだ、より強くなっているに決まっている、第一達人だ、筋力の差が少し広がったくらい、なんとかしてくれるだろう」

「……まあ、たしかに」

若干納得したような、腑に落ちないような感じで首をかしげるプリカ。

俺は更に押しの一手を加える。

「それに——」

「それに?」

「あの方も武道家だ、最高の対戦相手が直ぐ側で育ってるのに、黙って見てたなんて考えられん」

「そりやおまえのせかいの話だろ」

「……かもな、いや、別に俺は板垣世界出身ってワケでもないが」
だが、今ここにいる俺は、確かに格闘士たちへの憧れを持って産まれ、成長してきた俺だ。

俺にとつて最初の師はチャパ王だが、師匠への鮮烈な憧れを迎え入れる魂を育てたのは、格闘士たちだったのだろう。

……そう、会話を止めて感慨に浸っていると、にぶい地響きと、次いで観客たちの悲鳴が聞こえてきた。

これは明らかに——

「——大猿だ」

「じゃあ、もうすぐか」

「もうすぐだな」

どうやら、俺が切ったしつぽはちゃんとこのタイミングで（ギラン戦でのピンチがなかったにも関わらず）生えてくれたらしい。

ピンチに対応してしつぽが生えるのは合理的な生態と言えるだろうが、しつぽは生えるまでどこに格納されていたのだろうか。

そう考えながら試合に想いを馳せていると、何やら、眉を潜めたプリカがしきりに俺の体を見てくるのに気付いた。

「なんだ、見飽きただろう」

「そ、そんなに見たおぼえはない！」

「じゃあ今見るといい、包帯越しだがな」

どうして見てくるのかは分かっているが、軽口は叩きたい。

……プリカは、俺のケガとダメージを心配している。

確かに、客観的に見れば、一般人なら軽く入院しなくてはならないレベルだろう……だが、俺は試合に出なくてはならないし、出たいのだ。

それを態度で示すため、俺は大きくサムズアップをした。

「なあに、こんなのはどうってこと……グッツ!!」

「どうってことないはずないだろ」

……サムズアップした直後、その腕を両手でガシツと握られた、いや、正確にはもっと優しく、気を使った触り方だ。

それでも痛いくらいなんだから、もうやるな、と、プリカは言いたげだ。

じつと目を合わせて黙っていると、根負けしたのか、プリカはそつと手を離れた。

「おまえの体はボロボロだ、まだ息だつてとどのいきつてない」

「フウツ……、やっと分かるようになったか、ヨガを仕込んできた甲斐があるというものだ」

「あれヨガだったのか……じゃない！ ジャツキーだつて試合のつかれはのこる、でも、おまえは……」

「なんだ、心配しているのか？ 勝てないことをか？ それとも、試

合で死ぬことか？」

この心配は、あまり真面目に取り合いたくない。

友人の心配を無下にしたくないからなのか、試合を避ける気持ちが起こることを恐れているからなのか、自分自身では、全く区別が付かないが……。

とにかく俺は、無理に話を切ろうと、胸を張って笑い……キズが開いた。

「ツハハ、……ツツウ、出る前に負ける事考えるバカいるかよ、なんてな」

「……いつか死ぬぞ」

「お前が生き残って蘇らせてくれ、俺は烈海王みたいに喉元に噛み付いたりほしないで置いてやるから」

これは冗談だが、本心だ、こいつなら、俺を蘇らせるくらいのはしてくるだろう、試合の約束もある。

だが、負ける気と同じく、死ぬ気は毛頭ない、戦って勝ちに行くだけだ。

……でも俺は、真剣勝負の結果死んだって、別にそれを永遠の負けということにして、復活を拒む気はさらさらない。

最初から蘇る事ができると知っているとただではなく、勝負は一度きりと決める気がないからだ

『……月が………風情も………なんということ………』

ナレーターが、月がどうたらとしきりに叫んでいる。

……理由は、見なくても、詳しく聞かなくてもわかった。

「ジャッキーが、月をけした」

「……寂しいか？」

プリカは無くなった月を見上げるように、視線を空にやっている。微妙な表情だ。

「もうばけなくてすむ」

「そうか」

『生まれながら』ではないにしろ、サイヤ人として、月には思い入れがあるのだろう。

確かに、表情は少しほっとしているが、それだけではないのも感じる……まあ、『神様』が修復すれば月は戻ってくるのだが。

しばらくすると、仮設更衣室付近でこそごとと悟空のお色直しが行われ、試合は再開された。

「そろそろ、終わりだな」

「ああ」

『……ジャツキー……かめはめ波が……』

『かめはめ波が……なったのか……』

『孫選手……飛ん……』

試合は、どうやら歴史通りに進んでいるようだ。

消耗したジャツキーは最早かめはめ波を使えない。

だが、悟空は紙一重の差で一発の余力を残し、その一発を囷とする策でジャツキーを武舞台外にはじき出す……が、それはジャツキーの必死の抵抗で失敗する。

そして、最後の瞬間、試合を決着させるには正面衝突しかないと思った二人は激突し……。

『カウントを……ワン……スリー……エイト……』

腹の底に響くような巨大な衝突音。

そして、ゆつたりと、同時にダウンした二人のカウントが響いてくる。

「……ジャツキーの勝ちか」

「そうみたいだ」

『勝っちゃったもんねーっ!!』

ダブルノックアウト時の引き分けを防ぐため、天下一武道会では『先に起き上がって勝利宣言した者の勝利』という単純なルールが設けられている。

……元の歴史では決勝戦だったため、『優勝したもんねーっ!!』であったが……なるほど、決勝でなければこうなるのか。

「おまえの言ったとおりになったな」

「まあ、当たってくれてよかった」

「……なんだ、やっぱりじしんないんじゃないか」

「いいや、ジャツキーの勝利が覆らなくてよかった、というだけだ」
俺がそう言ってみせると、プリカはまたもや怪訝な表情をした。

折角の師弟対決なんだ、一度くらいは師匠に花を持たせてやつても……まあ、いいじゃないか。

俺は勝ったが。

しかし、プリカは俺が言い返そうか悩んでいる間に、再び俺に刻まれたダメージを確認し始めている。

「自分でやつといてなんだけど、すごいな」

「内出血の数ならお前も負けていないだろう、むしろ、俺に攻撃を弾かれまくった分、酷いんじゃないか？」

「……そういえば、すごいあざだ」

そう言うと、プリカはジャージの袖や裾をめくり始めた。

12、13歳にしては少々幼い体のあちこちに痣や擦過傷、裂傷が残っている。

地球人基準でなら、健康的な範囲を少々踏み越えているが、サイヤ人であればちよつとやんちゃした程度のキズだろう、問題はない……が、今、別の問題が起こりつつある。

「傷を確認するのはいいが、向こうに人が来ているぞ、流石に寺では肌を隠せ」

「うわっ！」

プリカは自分の行為に無自覚だったようで、焦って服を戻す。

寺の係員はどうやら、ジャツキーの勝利と、試合のインターバルについて教えに来たようだった。

「ソシルミ選手！ 試合10分前です！」

「ありがとうございます ……さて、俺は本格的に休ませてもらう、ここからでもベストを尽くすのは、最低限の礼儀ってやつだからな」
10分間、回復と消化に適した体位を取り、十分に瞑想することができれば、このコンディションも多少はマシになる。

それが俺の、亀仙人とこの武道会に対する最後の礼儀だ。

だが、プリカはそんな俺に、何か話があるようだった。

「おまえの……その、めいそのの前に、いっただけ聞かせてくれ」

「なんだ？」

プリカは俺の瞑想に対する熱意を理解しているようで、申し訳無さそうな表情をしているが……それでも聞きたいことならば、付き合ってもいいだろう。

俺が聞き返すと、プリカは少し喜色を浮かべ、それから、純粹な疑問の表情で、思ってもみない問いを投げかけてきた。

「どうして、しあいでおレのしっぽをつかまなかった？」

『『どうして』、と来たか』

試合中、そんなことは全く気にもとめなかった。

プリカも同じだからこそ、今まで聞いてこなかったのだろう。

実際、俺にとって、この質問は悩むまでもなく答えられるものだった。

「どうせ効かない、効いても、俺の望む戦いには邪魔なだけだ」

「……だからって、気にもとめないなんてことがあるか？」

「無我夢中だったんだよ、楽しかったんだ、それでいいだろう」

少々照れくさいが、理由はそれだけではなかった。

「あと……お前がサイヤ人としての誇り……だとか、を持ってたりしたら、うっかり掴んだまま引っこ抜いてしまったりで、それを台無しにしたくはなかった……、駄目だ、これではまるで天内だな」

「天内……ばきか、もうぜんぜんおぼえてないけど」

「……要するに、敵を壊すのに容赦しちやいけないってことだ、……だが、まあ、これは俺の我儘ってことにしてもいいだろう、お前と決別したくはなかった」

「べつによかったのに」

「今となつちやそうかもしれないが……で、お前はどうかだ、楽しかったからか？」

一瞬、俺の言うことを飲み込みきれずに固まったプリカを指差し、『しっぽのことを忘れた理由だ、試合中、言わなかったし、意識的にかばう様子もなかったからな』と言ってやると、プリカは軽く頭をかきながら、目をそらして答えた。

「……楽しかったよ、嫌になるくらい」

俺としては、この答えに大満足と言わざるを得ない。

わざわざ鍛えて連れてきた甲斐があったというものだ、悟空には礼を言わなくてはならんだろう。

……そして、俺は瞑想に入る。

天下一武道会決勝戦、ジャッキー・チュンとの戦いに備えて。

「——ッッ」

起き上がる、周りを見回して索敵する、敵はいない！

だが備えなければ!!

立ち上がって、そう——

「おきたか、ソシルミ」

「……………」

「せんしっぱいねおきだ、まだ二分もたっていないけどな」

……俺はもう一度、周りをじっくりと見る。

俺が寝ているマットの横には、新品の芋ジャージを着こなし、あぐらをかいたプリカ。

周囲にはいくつかの医薬品類、衛生材料、跳ね除けた布の色は、白。

ここは武道会場に設営された、仮設の救護室だ。

「ああ、起きた」

「まだ悟空たちはかいじょうだ、今おきればおいつけるとおもう、立てるか」

「……多分、大丈夫だ」

「そうか」

マットから抜け出しながら、腕を杖に立ち上がる……少し痛い、問題はない。

気絶明けには慣れているが……今回ののは、最悪のコンディションと
いうことを差し引けば、これはかなりいい部類に入るだろう。

最高の目覚めだ、気絶明けにしては。

「流石だな、ジャッキーは」

「ああ、たしかに……つよかったな、ジャッキー」

「強さじゃないさ」

天下一武道会、決勝戦。

数分前まで俺が戦っていた試合は、無残な結果に終わった。

試合直後から始まったジャツキーの攻め手に対応しきれないままに、『弟子譲り』の連続残像拳によって翻弄され……最後は、裏拳をギリギリで弾かれての、裸絞だ。

「試合は一瞬だった、だが、多くのことが……分かった」

「ソシルミ、そのボロボロの体じゃむりだった」

プリカは俺を慰めようとしているようだが、俺が言いたいのはそういうことではない。

「違う、そのボロボロの男がどれだけの実力者で、どれだけの余力があったか……やつは分かっていたはずだ、それなのに、裸絞なんかを選んだ」

「……おまえをたおすだけなら、別のわざでも、よかったか」

「そうだ、蹴り飛ばせばいい、殴り飛ばせばいい、俺だって抵抗はするが……裸絞よりはマシだろう」

「むきずでたおすためか」

「そうだろうな……、ナメられたというよりは、達人ぶりに、流石と
言うべきだろう」

そう言わざるを得ない。

「それで、どうするんだソシルミ、まだみんな、外にいますとおもうけど」

「いや、先に師匠を探す、挨拶だけでもしなければ」

「まあ……そうだな、そっちが先か」

俺達は手当してくれた寺の医師に礼を言って、武道会場を飛び出し、駆け足で寺とその周囲を回った……が、どうにも、師匠は見当たらない。

悟空たちもまだ亀仙人と合流できていないようだが……。

「なあ、その……『やつはもうわたしの手をはなれたいちにんまえのぶどうかだ、よけいな口出しはむようだろう……』とか、そんなかんじでもう帰っちゃったんじゃないのか？」

「いや、あの方はどちらかと言うと目立ちたがりだ、俺の試合を見た
だろう?」

「……たしかに」

俺達の脳裏に、高らかと声を上げアナウンスに割り込む師匠の雄姿
(?) が浮かぶ。

武にすべて捧げつくすストイックな武道家像とはかけ離れた、鍛え
上げた武によって得た富や名声、立場を恥じることなく自らの糧と
し、武を高める……そんな男が、俺の師匠だ。

「まあ、あの方はそれでいいんだ、あれで、武に対しては真摯だから
な」

「そこがだいじか」

「一番大事だ」

それから、しばらく回つても師匠は見つからず、俺達は諦めて悟空
たちと合流することにした。

人もまばらになりはじめた寺の一角で、悟空とその仲間たちが亀仙
人を待っているのは、遠目にでもはつきりと分かる。

「おーい、皆、いつぞやの城攻め以来だな!」

「ミソシル! プリカ! おまえらすっげえ試合だったな!!」

「ありがとう、当たれなくて残念だった、次の武道会かどこかで、お
前ともやりたいな」

「オラもだ!」

俺が悟空との試合を予約していると、ブルマが横から口を挟んでき
た、どうやら、試合の感想らしい。

「孫くんもクリリンもヤムチャも、あなたたち二人も、大したものよ
ね、私は全然見えなかったわ」

「皆大分鍛え上げていたからな、正直関心したよ」

悟空、クリリンは言うに及ばず、試合中はあまり褒める所がないよ
うに言っていたヤムチャも、ウデの伸びそのものはかなりのものだっ
た。

俺も更に修行の質と量を高めて対抗しなくては、次の武道会どころ
か一線級の座すら怪しいだろう。

「でも、残念だったわね、あんなボロボロのまままで戦ったんじゃ勝てつこないでしょ？」

「そーだよなー、相手のじいさんはピンピンしてやがるんだもん」ブルマとウーロンが次々と俺に同情する、が、別に俺はあの戦いを悪く思っちゃいない。

「それは相手も同条件だ、勝負は時の運で、運も実力の内、強いて言うなら……今度は全力で戦っても戦闘能力を残せるように鍛えるだけだろう」

「わしは逃げちゃってもいいと思うがのう」

突然飛び込んだ反論に振り返ると、そこには髭面の老人、ジャツキー・チュンの姿が……まだ着替えてないのか？

「ジャツキー選手！」

「どうしても無理なら逃げればいいんじゃないや、おかげでわしはえらい苦労をしたわい」

「どうも、やさしく仕留めていただいて……感服しております」

「えーのえーの、あのままへたに倒しても、おぬしは満足しそうになんないからの」

「いえ、そんな……」

ジャツキー・チュンか、亀仙人か。

その老武道家は、俺の中にある何かを……見とがめたようだった。

「一生懸命戦うっちゃうのは楽しいもんじゃが、だからこそ、戦いを通じて何を得たいのか、しっかり見極めんといかん」

「……ありがとうございます」

「え、えらく素直じゃのう……、まあええ、わしも帰るわい」

今の忠告は……とりあえず、受け取っておくしかない。

『戦いを前にして過度に興奮してしまい、そのせいで勝てない試合に臨んだ』などと思われるのも心外だが……、ジャツキーの忠告には、それ以上の何かの意味が含まれている気がしてならなかった。

「なんだ？ あのじいさん、勝ったからって偉そうにさ」

「ウーロンったら、お年寄りにそういうこと言うもんじゃないわよ」

「ブルマの言う通りだ、相手はあれで、あの悟空に勝つくらいの達人

なんだからな」

「そうだぞー」

「チエツ」

ウーロンが割を食う形でジャツキー・チユンへの追求は終わり……しばらくすると、今度は俺の師匠、チャパ王がこちらにやってきた。

「師匠！ もう居ないものかと諦めていました……」

「ああ、少し話し込んでいてな、それは悪いことをした」

「いえ、師匠……師匠がお顔を見せてくださったにも関わらず、あまりいいところをお見せ出来ずに、申し訳ありません」

「おまえはよく戦った、それに……いいライバルを持ったな」

師匠はちらりとプリカに視線をやる。

「そやつに教えたのは武術のさわり、それとヨガといった所か？ わたし自らが育てたいほどの才能だな」

「オ、オレをつれてきたいのか？」

プリカはちよつと嫌そうだ。

まあ、俺に教わっておいて、今更師匠に教わるというのもないというの……うのはそこまでおかしい考え方でもないが……。

「本式で教わるのは意味がある、顔を出してみたらどうだ？」

「やめてやれソシルミ、そやつはわたしより、おまえに教わりたいたい言っているんだ」

「なっ!？」

その瞬間、プリカの顔が真っ赤に染まって、わなわなと震え始めた。

……流石に助けに入るか。

「師匠、それを言いたくてやったんでしよう」

「ふははは……!？」

「……くう」

放っておくとこれだ、笑えない冗談をほいほいと投げ込んでくる。これ以上放っておくと更にいじられそうだ。

「私だってヨガは一人前ですし、こいつの癖もわかってます、私が教えますよ、いいですね」

「ほう……ヨガを手取り足取り……」

「似合っていないですよ、そのわざとらしいエロオヤジ面」

このままだと罫が明かない、まさか弟子の活躍を見て結構浮かれているのか？

だとしたら責任がある、というか少し嬉しいが……。

そう考えていると、遠くから聞き覚えのある老人の声、これは！

「やっほー」

「武天老師さまー！」

「おや、さっきの二人に、チャパ王もおるのか、こりやあ大所帯になつたのう」

「はい、みんな貴方をお待ちしていたんです」

「な、なんか恥ずかしいわい……」

「ジジイが照れたって誰もうれしくねえっての！」
今回ばかりはよく言った、ウーロン。

「ともあれ、悟空、クリリン、ふたりともよう戦った！」

「へへ、オレはともかく、悟空は惜しかったよなあ、ソシルミもボロボロだったし、うまく行けば優勝出来たかもしれないのに」

「いやー、ジャツキーのじいちゃんはずっとやそつとじやなんとかならねえよ」

「そうじゃー！ 世の中には強い奴らがまだまだ沢山おる！ 武の道に終わりはない、むしろこれからが本番じゃー!!」

「うんっ!!」

「はいっ!!」

……そう、ここからが本当の、本当に長い武の道の本番だ。

隣のプリカも、今日という日を忘れずに刻み込んでいることだろう。

「よしっ！ では、よい試合のご褒美と、健闘を祝して、夕飯をたらふくごちそうしてやろうー！」

「やたっ!! オラもう腹減ってしようがねえ！」

「おまえたちも一緒に来るか？ ええ店を見繕ったる、そこの二人とチャパ王も、今日はわしのおごりじやー！」

「代わりにわたしやプリカちゃんのおしり触らせろーとか言わない

でしょうね……」

ブルマが疑いの目を向けているが、今回ばかりは大丈夫だ、きつと。プリカもそれを疑っていないようで、特に身の危険を感じている様子はない。

「私達は一緒に一緒に一緒に……というか、実はもう目星つけてあったりして」

「では、わたしも、弟子と食事をとるのは久しぶりですから、楽しみです……なあ、ソシルミ」

「ええ師匠、私もこの1年、話したいことを色々見つけてきました」
こうして、俺達の天下一武道会は幕を閉じ、俺の一年の旅、そして、プリカの孤独の12年に、ようやくピリオドが打たれたのであった。

↓つづく

第十話：転生地球人が宴会を楽しむまで

我々が駆け込んだ DELICIOUS 菜館はその名の通り中華料理に近いスタイルの料理店だ。

『元の歴史』でも悟空達は同じようにこの料理店へと駆け込み、食材を食い尽くして店を看板にしてしまったわけだが……歴史に詳しい俺はそんなヘマはしない。

しっかりと、俺とプリカが食う量を見越した規模の予約をかけてあるのだ、そうとう訝しまれたが、古巣の名を出してなんとか納得させた。その甲斐あって、俺達の前に並ぶのは満漢全席もかくや、量で言えば勝るほどのごちそうの数々だ！

「なー、もう食べていいか!？」

「悟空、意地汚いぞ」

脂つけの多い料理は、戦いに傷ついた我々の体を大いに癒してくれるだろう、元の歴史における亀仙人の気遣いが光る。

所狭しと並べられた肉まん、豚の丸焼きなどなど、高カロリー高タンパク高脂肪の料理から吹き上がる蒸気、香りは店内に充満しており……。

「そういうクリリンも、よだれが垂れておるぞ」

「そ、そうですか……? えへへ」

我々成長期の武道家にとって、耐え難いほどの食欲を喚起していた。

プリカも、必死に耐えてはいるがもはや本能に破れそうである。

「それでは、我慢できんようじゃし……ゴホン、みんなの健闘を祝して、乾杯じゃ!」

「「かんぱーい!!」」

ビールを掲げた亀仙人の号令とともに、皆一斉に手に持った茶色の液体を飲み始めた。

当然ながら、ほぼ全員烏龍茶である。

締まらないが、ほぼ全員未成年で半分以上が武道家の集まりだ、酒はご法度と言うほかはない。

……が、亀仙人の他にもうひとり、ビールを天高く掲げる男の姿。
「師匠、いくら成人と言っても、武道家で、しかも仮にも仏に仕える身の貴方がビールはないでしょう」

「かたいことを言うなソシルミ、おまえも飲め！」

「私は未成年で武道家です」

腕を伸ばし、はつきりと『NO』の姿勢を取る、こればかりは師匠相手でも譲れん。

「飲まず嫌いはよくないぞー？」

「好き嫌いではありません！」

「すつげえ嫌そうだな……、クリリン、あれってそんなにマズいのか？」

「お酒は子供は飲んじやいけないだよ、体に悪いんだってさ」

そう言う悟空とクリリンはシエフが北京ダックを削ぐ端から食らい付くしている……シエフも神業だが流石に悟空の胃袋には敵わない、シエフは今にも豚を奪われそうだ。

そして、師匠はなおも俺にビールを突き出してくる、……これは……臭い。

「ソシルミ、おまえそんないやそうなかおもできるんだな……」

「全く……、じゃあ、プリカちゃんはどうかね？」

「オレものまない、あとちゃん付けやめろ、かぞえてないが、13は行ってる」

そう言うプリカは手のひらより大きな肉まんを実にうまそうに齧っているが、正直、その小動物のような姿は、武道家として、範馬としての観察力が無ければ13にも見えない。

「まあまあチャパ王、そのくらいにしようじゃないか、みんな、もう食べ始めとるしの」

俺も手頃な蒸籠をたぐりよせ、汁の滴るような焼売を頬張り始める。

期待に違わず、たつぷりの油と水分に乗った旨味が口いっぱい広がってゆく……、旨さを追求して作られた料理は実に久しぶりだ。

「孫悟空くんもえらい食いつぶりだな……、まさか、同じしつぽの生

えたプリカくんもあんなに食うのか?」

「あそこまではくわない」

と、言うプリカの周りにはすでにいくつか食べつくされた蒸籠が広がり、悟空も北京ダックを待ちきれずにいくつもの皿をカラにしている。

……正直五十歩百歩なのだろうが、俺にはプリカが五十歩の側であることが分かった。

「むぐ、私がたらふく食わせていますからね、食いだめがあるのでしよう」

「ほう……8ヶ月も一緒に修行してただけはあつて、よく分かっておるようだな」

師匠は俺達の関係に興味津々のようだ、ワザワザ箸を置いてまで、身を乗り出してくる。

「それで、二人はいつ出会ったんじゃ? わしも気になるのう」

「わたしも興味がある、わたしに勝ってから今日まで、どうしていたのだ? プリカくんとは、いつ?」

「むぐ……、ゴクン! ミソシルがオラたちと会う前のはなしか!」
食うことに夢中だった悟空たちも箸を動かす手を緩め、俺とプリカに興味の目を向けてくる。

「そう言えば、ここに居るのは皆、ほとんど初対面だったな」

「わたしに至っては完全に初対面だ……、ソシルミとの縁は一番深いかな」

俺は新たに卵の絡んだスープを飲み干し、続けてお茶を飲んで口を洗いながら、まだ湯気を漂わせる丸焼きを手繰り寄る、食べるのは中断しない、久々の外食なのだ。

語らねばなるまい……、俺(たち)のこれまでを。

「まず、知らない奴らもいると思うから言うが、俺は師匠の道場で育った、生まれは……まあ、今はいいだろう」

「ソシルミの素晴らしい才能を恐れた両親が手放したのだ、今頃、歯噛みしているだろうな」

「……師匠、風情つてもものがあるでしょうに」

思えば、俺は最初から目をかけられていたのだろう。

師匠が俺に期待していたのは、成長した俺との対決だろうか、それとも……。

「ははは、隠す意味もあるまい、偉大な武道家には、ありがちなことよ」

師匠はバシバシと俺の肩を叩く、慰めというよりは、純粹に、当然のことだと思っっているのだろう。

……若干だが、あの対決の時より腕が太くなっている？

「うーむ、まあ、そうではあるのでしょうか……」

「それで、最初に会ったときはどんな子だったの？」

「うむ……、疎まれるほどの力を見せろと伝えたら、かなり派手なパフォーマンスを見せてくれたな」

どうということなんだ、とばかりの視線が俺に集まってくる。

「飛び上がってみたり、そこらの石を持ち上げてみたりだな、行き倒れはごめんだ、俺なりに必死だった」

「わざと駆け回ってみせて、おまえを捕らえようとする小僧を打ちのめした事は言わんのか？」

「師匠」

「はっはっは、武勇伝には事欠かんというのに、語らんのでは片手落ちだな」

若気の至り、とまで言う気はないが、五里霧中だった時期のことだ。

「昔から血の気が多かつたってことね」

……どちらかというと理性的な武道家というキャラで通しているつもりだというのに。

「そんな子供の頃から強かったのか……、オレはその頃、まだ多林寺にも入ってなかったかも」

「オレは……盗賊になる前はフラフラしてたからなあ……」

クリリンにヤムチャ、亀仙人の修行を受ける前からそれなりに強力な武道家であった二人にも、それ以前の歴史はある。

ヤムチャは盗賊、クリリンは多林寺の修行者……その以前は？

明かされなかった歴史に興味がないではないが、俺は更に話を続け

ることにした。

「ともかく、俺は弟子として入門を認められ、修行に励み始めた」
「最初っから鍛えるのが好きな子供なんてそうはおらんものじゃ、いい弟子を拾うたのう」

見た目ほど子供というわけでもない……と、内心で言いつつも、何か鶏のような味のする揚げ物に齧りつく。

油、甘み、塩味と、妙に単純な味のするものに興味を惹かれる……それはつまり子供舌か。

「クリリン！ これめっちゃうまいぞ！」

「ん！ 本当だ！」

同じ料理に悟空たちも食い付いているからには、これは子供向けということだろう。

精神が肉体に引つ張られるという言葉は良く聞くものだが、ここまで卑近な例を突きつけられると、人間の好みというものの儂さを感じざるを得ない。

「若い頃から鍛えすぎるのも、筋肉で骨が締め付けられてよくないと聞くが……」

「情報が古いわよヤムチャ、それは子供がムチャして鍛えたら体が耐えられないってだけ」

「なら、ソシルミはへいきだな、こいつほどがんじょうな人間はいない」

「おめーみてえなのに言われてもなー」

「こらウーロン、女の子になんてこというんだ！」

男女の違いなどよりサイヤ人と地球人の違いの方が遥かに大きだろうが、プリカがどう思っているのかは分からない。

「それにしても、あんた、孫くんに負けず劣らずへビーな人生送ってるのね……」

「へビーってなんだ？」

「とっっても辛いつてことよ」

ブルマは新しい料理にがつつきながらとぼけた質問をする悟空に呆れながらも、自分も箸を動かし始める。

それをきつかけとしてか、出し抜けにウーロンがぼやいた。

「オレも南部変身幼稚園を追い出されてからはそりやもう苦労してなあ……」

「ウーロンのは女の先生のパンツを盗んだからじゃないか！」

ウーロンは自分に突き刺さる冷たい視線をぐまかすように、俺に話を戻そうとする。

「し、しっかし、おめーもよくやるよなあ、小さい頃からずっとだろ？」

「言っちゃなんだが、俺には才能ってやつがある、鍛えれば鍛えるほど強くなれるんだ、試合の相手だっていくらでもいる、こんなに楽しいことはない」

8年という月日は、武の道の中では、そう長くない……俺には俺の苦悩があつたわけだが、ここまで修練を重ねることが出来た一番の理由は、この優秀な肉体の伸びしろと、将来訪れる戦いへの期待があつたからだ。

「試合の相手がいるのはちよつとうらやましいなあ、じいちゃんが死んじまつてからはオラずっと一人で鍛えてたもん」

「む……孫くんも、ソシルミに負けず劣らず波乱万丈のようだな」

「ああ、じつちゃんは満月の夜に出てくる怪物に踏み潰されちまつたんだ」

各種食材が落ちる音、水音、箸がテーブルに当たる音、最後に、グラスが床に激突する音。

温まりかけていた空気は一瞬で絶対零度まで凍りついた。

「む……むう、それは気の毒な……」

「ま、ちゃんとじいちゃんの形見の四星球は残ってるから、オラ今度集めに行くんだ！」

亀仙人と師匠はビールを取り落とし、プリカは食べかけの肉まんを持って凍りついている。

……流石にこれは、唯一事情を知っていた俺ですら動けん、どうすればいいのだ。

「そ、そ、それで、ソシルミくんは、どうして、チャパ王さんの道場

から出ることにしたの？」

ブルマが声を上ずらせながらも、わざとらしく身を乗り出して聞いてくる、流石は大発明家にして大富豪だ。

その一声でようやく我に返った皆は集まってきたウェイターさんたちに甲斐甲斐しく世話されながら礼を言っているが、当の悟空はのほほんとしている。

このニブさが気持ちのいい男だというのはわかっているが、衝撃的だ……。

「う……む、道場はそれなりに居心地がよかった、試合に付き合ってくれる先輩方もいたし、給仕のおぼさんの飯はうまかった」

「多林寺も、今思うと先輩がたが沢山いたつけ、ちゃんと仲良くできればオレももつと強くなれてたのかなあ……」

師匠の見つめる先には、俺が食い尽くした皿の山がある。

まだ腹は満杯ではないので、まだ食うが。

「それじゃあ、どうして出ていったんだ？ そのまま修行を続けて、師範にでもなればよかつただろ？」

「師匠超えは夢だったからな、それを果たした後は地上最強を狙うつもりだったし、師匠を倒して飛び出すしかなかった」

俺は意気を示すように、持ったままだった骨付き肉を一息に噛み砕き、麦茶で飲み干す。

追って、プリカが肉まんを食べ尽くし、そろそろと皆も食事と飲酒を再開し始めた。

「ともかく、こいつが散々ぱら他の弟子をいじめてくれたおかげで、随分修行がはかどったわ」

「道場内の私闘を黙認してください、感謝しておりますよ」

「わしらとは随分違う師弟関係じゃの……」

師匠は、俺との最後の決闘では、わざわざ俺を過剰に持ち上げて悪者にし、他の弟子を焚きつけるマネまでした。

互いに高めあい、互いに奪い合う。

始めはただ与え、後には争う。

亀仙人は呆れたような顔だが、俺達の師弟関係は、これでいいのだ。

俺は亀仙人に意識を向けつつも、師匠をちらりと見る。

「師匠は私を丸々太らせて食べるつもりだったのですよ」

師匠もまた、俺をちらりと見た。

「最後の餌はわたしか？」

「何を言いますか、弟子が師匠を食うなど、……腹が裂けるまで食わせてやっただけですよ」

「わかっているとも、……最高の馳走であったぞ、ソシルミ」

俺達は劇がかった口調で互いにふざけあうと、そのまま大笑いした。

一通り笑ってみると、悟空はその間に数皿開けているし、亀仙人はウエイトレスの尻を触ろうとしてブルマに叩かれている。

「ああ、そうだソシルミ……おまえはどうしてプリカと一緒に居ることにしたんだ？」

師匠は唐突にそう言うのと、大きく身を乗り出してきた。

胸板でカラのジョッキを弾き倒しそうになっているが、そんなサービスカットはいらん。

「詳しいことはこれからですが……最高の素材が腐りかけていた、貴方と同じですよ、惜しかったんです」

「本当にそれだけか？」

「それだけですよ」

実際のところ、語ったことは真実だが……、まあ、プリカが『同郷』の人間であれば、とりあえず一緒に居るのが早いと思ったのだ。

「新しい師匠か修行場でも探していると思っていたが、まさか女を拾っておるとはなあ……」

「ある程度、師匠の目星は付いていましたが、プリカを教えるなら自分でやりたかったのです」

「目星つてのは、武天老師さまか？」

「チャパ王を倒すような達人を弟子に迎えたところで、わしが教えることはなさそうじゃがの」

「ご謙遜を、お弟子さんを見る限り、ソシルミにもまだ伸びしろはございませう」

師匠は弟子二人の鍛え方をよく観察して、俺の練り込み具合と比較しているようだ。

「心身の鍛錬もさることながら、亀仙流には、かめはめ波の他にも素晴らしい気の術や武術の知識があると聞きます」

「技はわしがたまたま持つておるだけじゃ、盗むのは自由じゃが、技とは自分と今の実力に合ったものを自ら編み出し、見つけるものじゃよ」

「……ご忠告、ありがとうございます」

俺は一息に烏龍茶を飲み干して、再び話し始める。

「それで、プリカと出会ったのは旅の中、山奥で魔族に襲われながら、一緒に戦ったのがきっかけだ」

「山奥って……孫くんはおじいさんと一緒に山で暮らしてたらしいけど、プリカちゃんも誰かと一緒にいたの？」

「……オレはずっと一人でくらしてた、いつから居たのかも、わからない」

「オラもいつからじつちゃんどこに居たのか覚えてねえんだよなあ、じつちゃんもあんまし話してくれねえし」

「確か、ソシルミくんは孫くんのこと、結構知ってたわよね」

ブルマが厄介なパスを投げてきた、自業自得とはいえ、言葉に詰まる。

「……ああ、古い伝説で知っていた、人間の祖先は猿だと言うし、時々、先祖返りで猿らしい人も生まれるのかもしれない」

「しっぽだけ？」

「妙な話だが、それくらいしか説明の付けようがない」

さて、今の話、プリカは明らかな嘘だが、悟空のは本当だろう。

サイヤ人が惑星制圧のために子供を送り込む『飛ばし子』は通常、言葉覚えて程度の子供に行われるが、悟空（そしてプリカ）は足腰が立った程度で送り込まれてしまっているため、惑星ベジータでの記憶はほとんどない。

その上、悟空は性格が変わるほど強く頭を打っているため、記憶喪失の疑いがある。

「もしかしたら、どっかに悟空の仲間が住んでる国があるのかも……」

「ははは、そんな国があったら、もうとっくにこの世は悟空の仲間のものじゃないか？」

「怖いと言わねえでくれよ……」

ヤムチャはそろそろ満腹に近づいてきたようで、烏龍茶を飲みながら笑っている、クリリンとウーロンはまだ手前に皿があるのに、肝を冷やして箸が止まってしまった。

二人が思い浮かべる想像図を一笑に付すヤムチャだが、実際、少し前まではそんな連中の星があったのだからたまらない。

「オラやプリカみてえなのがたくさん居るなら、試合し放題だなー」

「俺も、そんな国があるなら行ってみたいものだ」

楽しいに違いない……悟空やプリカのようなサイヤ人ばかりが居る国なら、だが。

「それで、オレたちと会ったあの城でのことは、プリカと会ったすぐ後なんだよな」

「ああ、一気に本拠地を叩けば、あの周辺への迷惑も減ると思ったかな、全滅させる気まではなかったんだが……」

「あいつらはたくさんの人をころしてた、オレたちもおそってきたし、やるしかなかった」

「戦えば必ず敗北する者がいるのだ」

「そうは言っても、中々割り切れんものよ、あ、そのビール取って」

「お注ぎしましょう、いやあ、武天老師さまも結構いける口ですな」

地上最高峰の武道家にして指導者たちも安酒をかつくらつていれば威厳も何もあったものではない。

とはいえ……、多少はラクになった。

「お兄さん、そっちの豚の丸焼き、こっちにもお願いします、ああ、自分で取り分けますから、シェフはいいです」

「ソシルミ、骨まで食うのはよせと前に言っただろう」

「効率的なカルシウムの摂取にはコレが一番です」

実際にはジャック・ハンマーごっこだ。

「そういえばミソシル、おまえ、城がぶっこわれたあと、プリカと二人で何してたんだ？」

「そりゃあ二人でやることといったら……アイタツ！」

ついに豚がブルマにぶたれ、手に持った豚の丸焼きが落ちた。

……豚、食べていいのか？ 人が猿を食うのと同じだろうか……いや、人も猿はあまり食わないが。

「ハア……城の財宝を漁っていたんだ、修行には何かと入用だからな……特に、食材が」

「オレをみるな」

プリカの前には、やはり大量の皿がうず高く積み重なっている、一応ウェイターさんが回収しているのにも関わらず、食い尽くす方が早いのだ。

「む？ その時から一緒におると決めとつたんか？」

「ほう……」

師匠組が一気に色めき立つ、言われるかもしれないとは思ったが、がつつきすぎだ。

というか悟空と俺達本人以外は全員興味ありげである。

「さつきも言っただろう、皆が期待しているような気持ちじゃないさ」

「お、おまえ本当にドライだな、もうちよつと、強く否定したり、恥ずかしかつてみたりは……」

「俺がそんなタマに見えるか？」

「じゃあ一体どういうことなのさ！ こんなかわいい女の子を……イテツ！」

今度はヤムチャにぶたれた。

「相変わらず、素直ではないなあ」

「そうそう、『かわいい女の子が一人寂しく暮らしてるから、我慢できなかつたんだ』くらい言えないとモテないわよ？」

「無いと言っているだろう」

「うーん、オレもここまでひていされると、さみしいような……」「ほらー！」

まさかこいつまで乗るとは！

「はあ、実を言うと、俺もそういう気持ちはありましたよ、こいつだってそれなりに整った顔をしていますし、女の子ですからね」

プリカは『信じられん、何を言っているんだこいつは』とでも言いあげな顔でこちらを見る、そもそもお前が先に乗ったんだらうが。

「……まあ、その後は知つての通り、8ヶ月ずっとヨガや基礎鍛錬、それに、気の扱いの練習に費やした」

「その間のことを聞きたいのだが……本当に何もなかったのか？」
すでに酔いどれに片足突っ込んだ師匠はテーブルに半ば体を預けるように肘を付いたまま、こちらに身を乗り出してくる。

「しつこいですよ師匠」

「いくらソシルミのししようでもおこるぞ」

「はっはっは」

笑つてごまかそうとする師匠をプリカは睨み続ける。

「まあ、プリカくんがそうでなかったとして、おまえも早いところ、相手を見つけないといかんで、私の娘でもいいが」

「師匠の娘さんって、もう全員おぼんじゃあないですか」

「人の娘をおぼんとはなんだ！ ……おぼんだな」

師匠はさすがごと引き下がり、おとなしく骨付き肉の軟骨を齧り初めた。

「……さて、俺達の話を一しきり終えたあたりで、俺も聞きたいことがある。」

今後の動向に関わる、極めて重要な情報を得たいのだ。

「……ところで、悟空、お前はどうかやってこの連中と知り合ったんだ？」

「むぐ？ ああ、ブルマがオラのじいちゃん、の形見の四星球を取りに来たんだ」

「四星球ってのは、全部で7つあるドラゴンボールってお宝の一つね」

「ドラゴンボール、聞いたことのある名前だな、7つ集めれば、どんな願いでも叶うという珠だ」

「あら、見た目によらず博識ね」

実際はカンニングだが、一応、道場の蔵書をあたって、その存在を再確認していた。

ブルマはもう食べるのを完全にやめていた……まあ、俺やサイヤ人二人はまだまだ食う。

「オラはブルマについてって、一緒にドラゴンボールを探すことにしたんだ」

「大変な旅だったわよ、スケベな豚とかが襲ってきたり……」

「誰がスケベな豚だ！」

「本当のことじゃない、……ま、そんな旅の中で、ヤムチャと出会えたんだけどね」

ブルマはヤムチャの腕を取ってイチヤイチャし始めた。

「それで、悟空、他にはどんなことがあったんだ？」

「ん、ああ、亀仙人のじっちゃんとのウリゴメを助けて筋斗雲をもらったりしたな」

「牛魔王の城が燃えとるのをなんとかしてくれっちゅうて、わしを呼んだりもしたの」

「ああ、そうだ、牛魔王のおっちゃんもいた！」

……どうやら、映画『ドラゴンボール』のルートは通っていないらしい。

ドラゴンボール原作の映画作品として最初の作品にあたる『ドラゴンボール』は、漫画版初期の内容を混ぜ合わせつつ、一つの筋に仕立て直した作品であり、以前遭遇したルシフェルの所属する『魔神城のねむり姫』の前作、その次に放映された『摩訶不思議大冒険』とともに、初期三部作とでも言うべき、原作の筋を変えながらも内容をなぞっていく作品群を形成している。

これら三作は、ドラゴンボール初期の冒険を別の形で描き出し、独自の世界観を作り上げているという点で非常に楽しいものだったが、今の俺にとっては、あまりに漫画版と違う歴史をたどったこれらが歴史に混ざること、未来予測が困難になってしまう点が恐ろしくもあつた。

一応、それらの舞台となる『グルメス国』と『ミーファン国』が存在していないことは把握していたが……。

何より恐ろしいのは、今話題に出た牛魔王の娘、チチが将来悟空と結婚し、彼を支えるという重要な歴史がなくなり、同時に、その息子であり強力な戦士である孫悟飯の存在までもが消滅してしまうことだった……。

一応、杞憂に終わった、と言っていいだろう。

「牛魔王と言うと、悪名、武名共に高いフライパン山の主だな」

「へー、チャパ王のおっちゃんも知ってるんだ」

「燃え盛る城の財宝を守り続けていると聞いたが……、そうか、解決したのか」

師匠は何やら感慨深そうにビールを煽っている。

この世界に浸透した伝説がつい最近終わったのだから、感じるころもあるのだろうか。

「ん？ どうだ、おまえも腹が膨れてきただろう、そろそろ一杯……」

「結構です」

師匠でもこれは譲れん。

「それで、そのあとはどうしたんだ？」

「ああ、ほとんど集まったところで、ピラフってやつ仲間、ドラゴンボールを盗まれちゃったんだ」

ピラフ大王、ドラゴンボールにちよろちよろと出てきては、世界に爪痕を残したり残さなかったりする高いテクノロジーと世界征服の野望を持った小悪党だ。

「それで？」

「ピラフに囚われてしまったところに、魔物が来たんだ」

ヤムチャが非常に気がかりなことを言った。

俺は思わず、食べかけの肉まんを放り出して聞き返してしまう。

「魔物だと？」

「まものがそこにもでてきたのか!？」

俺に続いて、プリカも声を荒げた。

俺達が知っている歴史にない流れを恐れるのは当然のことだが、それは今に始まったことではない。

あのルシフェルの登場、ルシフェルが登場しているにも関わらず、初期三部作の内容がほぼ反映されていない流れそのものが、もはや未知なのだ。

「恥ずかしい話なんだが、オレたちはあの青いチビ……ピラフに誘き寄せられ、ドラゴンボールを奪われてしまったんだ」

「どんな願いも叶う珠とやらが奪われてしまうとは、穏やかなことではないな」

世界征服の願いが何を意味するのか、俺にはどうも分らない。記憶を消すことができるなら、忠誠を誓わせる事もできるのだろうか、それとも、王の座がすぐ変わるだけなのだろうか。

……戦闘力が数千あれば直接の干渉は防げる地球のドラゴンボールでも、悪用の手段はいくらでもあるのだ。

「ま、ウーロンがなんとかあいつらの願いが叶うのを防いでくれたから、そうはならなかったんだけどな」

「くっだららない願い事だね！」

「くだらないとはなんだ！」

「女の人のパンツだなんてくだらないに決まってるじゃないか！」

「おまえ、そんなものを願ったのか！　どんな願いもかなうのに!?!」

「そうよ！　『みんなをあの城から出してくれー!』とか言えば全部解決だったのに!」

再び、ウーロンに冷たい視線が降り注ぐ。

だが実際、ファインプレーだ、世界の救世主かもしれない。

「ウーロン、あの剣の使い心地といい、やるときはやるじゃないか」

「へん、男に握られたことだなんて思い出したくもないやい」

俺はウーロンに、席をまたいでお茶を注いでやるが、やはり『男のお茶なんて飲めるか!』と叫んで突っぱねられてしまった。

……鍛えた変身能力者が武器に変身するという戦い方は案外、ありなのかもしれない。

俺はあまり武器を使うつもりもないが、使う戦士は使うだろう。

「魔物が来たのは、その後か」

「うん、あいつら、どんどん爆弾を使って、オラたちを閉じ込めてた檻も、城もぶっ飛ばしちまった」

確か、最初に閉じ込められた牢は、かめはめ波で穴が開くような石壁の外壁近くの部屋だったはずだ。

本来の歴史ではその後、金属製の檻に移され、どうしようもなくなったところで、悟空が大猿と化し、牢が壊れるのだが……その歴史は俺が彼らと出会った時点ですでに失われていたのだ。

俺は、もう一度烏龍茶を煽る、こういう時は酒飲みが羨ましい。

「オレたちはギリギリのところ、筋斗雲に乗った悟空に引っ張ってもらって脱出できたんだが……」

「あいつら、ピラフのヤローを襲ってきたつのに、オレたちにまで襲いかかってくるんだもんなあ」

ウーロンはうんざりした感じで肩を落とす。

……『ピラフを襲った？』

「待て、どうして魔族の襲撃がピラフ目当てだとわかったんだ？」

「あいつら、『ピラフを倒せー！』って、ぎゃんぎゃん叫んでたわよ、ピラフの方も戦いながら……ええと、『我がメシヤキ……なんとか』のカタキだとか何とかって」

「メシヤキ族だど!？」

メシヤキ族とは、俺が死ぬ少し前に開示された設定で、滅んでしまったピラフの出身部族だ。

ピラフはその部族の王子であったが、王が世界征服を目論んで始めた最初の戦いで部族は壊滅、ピラフは財宝を持って落ち延び、それを資金に武装を蓄えていたという。

「知っておるのか、ソシルミ」

「ええ、かつて存在し、今は滅亡してしまった王政の部族、ということまでですが」

「ミソシルはなんでも知ってたんだなあ」

「オレももつと勉強しようかなあ……」

「うむ、よく学ぶこともこれからの人生には大事じゃからの」

オタク知識が歴史知識に化けるとは、人生何が起こるか分からないものだ。

横を見ると、プリカが『なんだそれは』とばかりに凝視してきている……が、ここで話すわけにもいかん。

「しかし、俺が居るときでさえ魔族相手は苦戦していたというのに、よく切り抜けたな」

「ピラフのでっけえロボと悟空たちが一緒に戦ったんだ、あいつら、人のこと閉じ込めといて、イザとなったらあてにしやがってさ」

「それ、あんたが言える話？」

「ウーロンのことはいいから、つづきをはなしてくれ」

ついにプリカから催促が入った、食べるのに夢中かと思われたが、この話題は見逃せないようだ。

「オラとヤムチャ、あとピラフのでっかい乗り物で魔物をやっつけた」

「やっつけたあと、どうした」

「ピラフはオラたちもやっつけようとしたんだけど、なんか、駄目だったみたいで逃げてった」

「弾切れよ、調子に乗ってぶっ放してたみたい」

なんともピラフらしい幕切れだ。

さて、悟空たちは話し終わって一息ついて飯をがつついている、ヤムチャも落ち着いたようで、ちまちまと箸を動かし始めている。

俺もゆったりしたいところだが……新しい情報が多すぎて疲れてきた。

「その後、わたしとヤムチャ、それにウーロンとプーアルは西の都にあるわたしの家に来たわ」

「オラは亀仙人のじいちゃんに修行付けてもらいに行ってたんだ！」

「そこで、オレと一緒に弟子入りの課題で魔神城に行つて、あとはソシルミが話した通りだ」

「わたしたちはこのスケベじいにてーマパークだつて騙されて行つたのよね……！」

拳を握りしめるブルマを前に、亀仙人はビールを置いて汗を流しながら弁解しているが、意味が通った言い訳はできない、武術の神と言えど、ギヤルの拳には敵わぬようだ。

それを愉快そうに眺める師匠を横目に見ながら、俺はそろそろ箸を置き、俺にとつて本題と言える話題に入ることにした。

「しかし……ドラゴンボールか、俺も一つや二つ、願いたいことはあるのだが……」

「不老不死ならやめといたほうがいいぞい、つまらんからな」

「いえ、私は修行に使う設備や資金などを」

「げ、現金なんだか真面目なんだかわからんやつじゃのう……」

そもそも亀仙人は不老不死ではないはずだが……。

なにはともあれ、悪人を襲撃するなりなんなりで稼いでもいいが限度があるし、そもそも悪人とはいえ、収奪のために襲うのであればどちらがケダモノなのかわかったものじゃない。もう手遅れかもしれないが。

……俺やプリカ、悟空の目の前に大量に並んだ皿、このような暴食を行うにも、金は重要なのだ。

「神龍にまで願って手に入れる設備か……」

「あら、トレーニング道具くらい、いくらでも作ってあげるわよ？」
ヤムチャがボソツと言った言葉に反応するブルマ、非常に羨ましいと言うほかはない。

「じゃあミソシル、オラこれからドラゴンボール集めるから、それ使わせてやろうか？」

「……いいのか？」

「うん、なくなっちゃうわけじゃねえんだから、また探せばいいしな！」

「かつるいわねえ……」

悟空は快活そのものの笑みを浮かべて、俺へのドラゴンボール提供を約束してくれた。

俺は最後の一皿、胃袋を洗う温かいスープを飲み干そうと器を取るが、先にクリリンが口を挟んだ。

「む、武天老師さまやチャパ王さまはこういうのって、お止めになられたりは……」

「ズルっこいとかかの？ フツの日常で働きながら鍛えるのも、めっちゃんこ金持ちで鍛えるのも変わらんわい、……そもそもわし、ソシルミの師匠とかじゃないし」

「戦いで奪おうと神に願おうと、金は金だ、金稼ぎを修行にするのは自由だが、訓練効果は当然本腰入れた修行に劣る」

「ということらしい、お前も噛むか？」

そう聞いてやるが、クリリンは大金に怯えたのか、身を固くして首を振った。

俺は諦めるそぶりを見せ、スープを啜り直す。

「こいつはかりにもてらの子だ、そんな、金のはなしをするな」

「金の話は大事だろう、武道人生にも金は大事だ、金があれば武名を穢す行為もせずに済む」

「か、仮ってなんだよ仮って！」

魔神城の財宝がなければ、俺達も各地を放浪し、どこかで用心棒になるか各地を荒らし回り野の獣を狩って生きる野人二人組になっていただろう。

お金は大事だ、腹いっぱい食べようではないか。

「ミソシルはドラゴンボール集めに付いてくるんか？」

「それは魅力的だが……俺には少し用事がある」

ある意味、俺にとって真のドラゴンボール集めとも言える大事な用事だ。

「用事って何よ、ドラゴンボール使わせてもらうんなら、一緒に集めるのが道理ってモンじゃない？」

「オラは後からでもいいぞー！」

「では、後から合流させてもらおうとしよう……なにせ、まずこの手を休ませなきゃならんからな」

俺は両手をばつと持ち上げる、布が七部で肌が三部、残った肌にも軽い傷と炎症。

プリカが目をそらす気配を感じるが、とりあえず気にしない。

「う……、それはしょうがないわね」

「気色悪っ！ さっさと引つ込めろよ！」

「ウーロン！」

最後の最後でウーロンが正しいことを言った。

俺はすみやかに手を机に乗せ、そのまま、悟空に頭を下げる。

「ドラゴンボールのこと、プリカ共々よろしく頼む」

「う……、よろしくたのむ」

「おう！」

「なんでプリカちゃんまでなのよ」

「い……いちばんくうのは、オレだから……」

目を逸しながら言うプリカ、これは約束を果たすという真の目的を
ごまかす動きか、それとも大食いを恥じてのことか。

まあ、サイヤ人が大食いを恥ずかしくても仕方あるまい。

そう思う俺をよそに、ゆったりと食い続けていたプリカはそつと箸
を置く。

……一方、悟空はまだ食う構えだ。

「これもうひとつちょうだい！」

「すいません、皆様よくお食べになるもので、もう食材の方が……」

「そっか、ま、腹八分目って言うもんな」

金を手に入れたら、その金でもいいから腹いっぱい料理を食わ
せてやろう。

俺がそう決意する中、最後に粘り続けていた二人が食べ終わったこ
とで必然的に宴は終わり……。

「け……計算が長く、おまたせしました、しめて94万ゼニーです」

「……………」

（武天老師様、お出しします、お納めくださいッ!!）

1ゼニーの価値は平成末期における日本円の1.5倍程度である、
つまり、94万ゼニーは概算すると147万円程度になる。

元の歴史では足が出なかったので、はみ出した分は確実に俺達だ。

（わたしからも、少ないですが……!）

（や、やめい！ 伊達に仙人やつとらんわい！ 金くらい気にせん

でええ!!)

(私はドラゴンボールに願います、お気になさらずツツ……!!)

(武術の神と弟子に払われては面目が立ちませんっ!!)

俺と師匠は奮戦の甲斐あり、なんとか締めて45万ゼニーを押し付けることに成功。

こうして、下らないが意地をかけた小戦争は幕を閉じた。

——そして、ついに本当の終わりの時間がやって来る。

「俺達は一晩、島でゆっくりしてから発つことにした、宿は近いから、このまま帰るよ」

「オレはソシルミといっしょだ、悟空、またこんど?」

「ああ、また今度な!」

まだ俺が始めようとしていることが把握しきれていないプリカは疑問符を浮かべながら再開を誓うが、悟空は旅の中で俺と会うことを確信しているようだった。

俺は視線を悟空からクリリンに移す。

「クリリン、次の武道会でもやろう、俺が勝つ」

「次はオレだ! ……へへ、また会おう!」

「オレも今度は二回戦に行けるようにしないと……!!」

「そこはドーンと、優勝するって言っちゃいなさいよ!」

ヤムチャも今まで見た人間の中では確実に10本の指に確実に入る人材なのだ。

次こそ、Z戦士の伊達じゃないところを見たい。

「師匠もお元気で、そのうちに顔をお見せします」

「ははは、またわれわれのケツを叩きに来るのか?」

「師匠とも、またお手合わせしたいものです」

本心だ、師匠にもまだまだ伸びしろがあるし……あれはあくまで卒業試験だ。

全力を出し合う戦いであったが、それ故に、俺達は全力という枷に縛られていた。

……師匠と挨拶している間に、悟空は着替えで預けていた如意棒とドラゴンレーダーを亀仙人から取り戻している。

「じゃ、オラもう行くよ、早い方がいいからな！」

「悟空が行くのはいいが、ソシルミたちはどうやって付いていくんだ？」

「む、それは……考えてなかったな」

実際は考えているが、カバーストリーのない不自然な手段しか手元にはない。

「あんたもたまには天然じゃないポカもやるのね……、はい、これ」「これは……レーダーか？」

「カンがいいわね、それはドラゴンレーダーって言うの、ここをこうすると、ドラゴンボールの場所が出て……」

ブルマは丁寧にドラゴンレーダーの使い方を教えてくれた。

ボタンで電源と範囲の広さを調整するだけの簡単な操作だが……これ、どうやって地球全土をサーチして平面に表しているんだ？

「なるほど、これを持っていれば、ドラゴンボールを集めている悟空の場所も分かるというわけか」

「そういうこと、念の為にもう一つ作っておいてよかったわ」

「ん、じゃあオラはもう行っていいんか？」

「そうらしいな、では、旅の途中で！」

「おう！……筋斗雲!!」

悟空が呼ぶと、黄色い雲の塊が空の果てから現れ、悟空の目の前にやってきた。

亀仙人は筋斗雲を知らないであろう俺達のために説明をしてくれているが、俺はすでに知っているし、乗れない人間が『心が清くないと乗れない』と言うのは一歩間違えば自爆ではないだろうか……。

「ばいばーい!!」

「達者でのー！」

「またなー!!」

「元気でねーっ！」

各々が別れを告げる中、悟空を乗せた黄色い雲は、再び空を裂いて彼方へと消え去って行った。

天下一武道会は終わり、主役は新たな冒険の旅へと向かう。

俺達もついていかなければ、ならない。

山腹に建った見晴らしのいいホテルは、天気が良い日なら、パパイヤ島の控えめな夜景に彩られた南国の風情と、波が打ち寄せる美しい海岸と海を楽しむ事ができる。

天下一武道会で客が増えるのを想定しつつこのホテルを予約したのは、実に6ヶ月前のことだ。

「……やっぱり、オレもつれてくる気だったのか」

「ははは、まあ、最悪一人で来たさ」

「その気はなかっただろ」

皆と別れた俺達は、チエックインを済まし、風呂まで入った。

後は寝るだけだが……並んで夜景を見ながらコーラをあおっている、階級がないから多少の体重の増減は許容範囲内なのだ。

折角南国に来たのだから、旅の風情というやつを味わっておくのも悪くないだろう。

「連れてきたかったのさ、『同郷』のヤツが、思うところあって引きこもってたなら、ほっとけないしな」

「オレの力だけを見てひろったってのは、うそか」

プリカの表情は見えないが、俺の答えを欲しているのは分かる。

「ああ、嘘だ、色々あるがな、サイヤ人が暴れたら困るし、色々な意味で、お前を助けたかった」

「よけいなお世話だ」

『ほんとにそうか？』

「うるやん」

俺はコーラを再びあおって、大きく伸びをする。

「そろそろ眠い、次の予定を話すぞ」

「きずをなおして、ドラゴンボールさがしをてつだうんじゃないのか、せんずもらうとか言わないよな？」

「少し違うな、この程度はすぐ治るが……ドラゴンボールを使うには、歴史では死ぬはずのボラを生き延びさせなきゃならんだ」

「ボラ……ああ、ウパのおやしか」

ウパとボラはカリン塔のお膝元を守るカリンガ族の親子だ、今回集められるドラゴンボールは、道中で悪役に殺されてしまった、ボラの蘇生に使われることになる。

「そうだ、死ねば、復活にドラゴンボールを使うことになる、俺達にとつちやそこが難問だ」

「じゃあ、まもりに行くのか」

「……いいや、違う」

「？」

プリカはまた、大きく首をかしげてみせた。

俺もまだ出来るかどうか分からないが、ここまでの旅で、この作戦のための情報は集めてきている。

……次の冒険も、楽しくなりそうだ。

↓つづく

第十一話：転生地球人が弟子入り試験を受けるまで

「ならん!! わたしは弟子など取っていないし、取る気もない!」

「何卒、お願いします、弟子入りをお認めください!!」

平伏する俺の望みを、見向きもせず断る男は、ピンクの男性向けチャイナ服に身を包んだ辮髪の男。

この男こそ、当代随一の武道家の一人であり、世界一の殺し屋、桃白白だ。

俺達の弟子入り志願は無残にも切つて捨てられ、桃白白は今まさに門をくぐり、屋敷に帰ろうとしている……。

「ええい、取っていないと言っているだろう、それにきさまら、天下一武道会で名をあげておいて、今さら弟子入りなどしてどうなる!」

「天下一武道会では、亀仙流の弟子と拳を交わしました」

桃白白の動きが止まった。

「……ほう?」

「亀仙流の弟子たちは、技術こそ未熟ながら、相当な鍛えこみよう、摩訶不思議な技まで兼ね備えておりました」

「それで、あのおいぼれを不?戴天の仇とみなすわたしたち鶴仙流に頼りたいと」

何とか、桃白白の興味を引けたようだ、亀仙人との対立は兄の問題とはいえ、流派レベルでの対抗心はあるのだろう。

「結果的には、おっしゃる通りです、強力な鶴仙流は亀仙流以上に強力な流派であると、聞き及んでおります」

「………ならん! そもそも、それなら直接、鶴仙流の道場へ向かえばよからう! もっとも、二人の高弟を仕上げている兄者は、きさまらなど相手にせぬだろうがな」

二人の弟子……天津飯とチャオズか。

しかし、逡巡させることはできたものの、拒絶を破るには及ばない……か。

「私は桃白白様に手ほどきを頂きたいのです」

「何故、わたしにこだわるのだ?」

「私と、ここにいるプリカは、魔物どもを相手に腕を磨いてまいりました」

「城を一つ落としたのだろうか？ それは聞いた、だが、それがどうわたしへの弟子入りに関係がある」

「試合でない、実際の戦いをもってその武名を轟かせる、桃白白様の武を、私達に」

桃白白は、大きくなった。

「うっむ、どうしよっかな……」

「何卒」

「なにとぞ」

「——いや、わたしは弟子を取らん……だが」

「……」

「だが、鶴仙流に入門する資格はあるかもしれん、兄者にとりなしてやろう、足はあるな？」

「どうやら、俺達は桃白白のお眼鏡にかなったらしい……鶴仙流の同門としてなら面倒を見てくれるということだろうか。」

「そうでなくては意味がないのだが。」

「ともあれ、プリカと二人で、もっともらしく頭を下げる。」

「は、もちろんです」

「ありがとうございます」

……なぜ、俺達は完膚なきまでに悪役であり悪人である武道家、桃白白に必死に師事しようとしているのか。

それは、今日の早朝、天下一武道会の翌日に遡る。

ホテルの朝、朝飯としておじやの余りを食い尽くした俺達は、チエックアウトの準備を進めていた。

「なあ、ソシルミ、なんかいそいで出たいじじようがあるのか？」

「ハッキリ言えばある、レッドリボン軍編は、非常に短いんだ」

レッドリボン軍編の旅は単行本数巻分もあるのだが、その多くがダンジョンの攻略と戦闘であり、移動時間はすべて筋斗雲の高速移動で済ませてしまっている。

「いや、というか、明日には聖地カリンが桃白白に攻撃される」

「……そんなにみじかかったつけ」

「短いんだ、ダイやジョルノも真っ青と言った所だな」

プリカは食後の歯磨きをしている、サイヤ人とはいえ、歯のケアは重要だ……虫歯菌は幼少期のキスや口移しで感染するというが、実際どうなのだろう、実は要らないのか？

俺はすでに朝のヨガまでを終え、手の包帯を替えている。

「グペツ、……ふう、それじゃあ、はやくカリン塔に行かないと」

「カリン塔には行かない、いや、行くとしても最後の手段だ」

「？」

俺はポイポイカプセルでダンスを出した、このダンスには俺の道着、それにプリカのジャージの替えが無尽蔵に入っている。

「ほら、パジャマ用は汚さないんだろ？ 運動用はこれでよかったよな」

「ん、ああ」

「しかし、お前もそろそろまともな普段着を買ったらどうだ」

「そういうのには……きょうみがない」

「ジャージはお洒落以前だろう」

「……そういうおまえも、いつもカンフーズボンにシャツだ」

プリカは若干目をそらし、バツが悪そうに俺に水を向けた。

「今はバキーパンツと言うのだ」

「……？」

カジュアルなバキーパンツに、しっかりした作りのポロシャツ。

成長期だが、大きさはぴったり丁度、無礼でない程度には決まっている。

俺の私服の中でも、どちらかと言えば、よそ行きの部類の、このチョイスは……。

「よし、では、今日の作戦を説明しよう」

「二人でレッドリボンぐんをぜんぶたおすとか言わないよな」

「それも愉快そうだが、もつと愉快的な作戦だ」

プリカは壁の影で着替えながら、チラチラとこちらを見てくる、例

によってジト目だ、俺がいつでも余計なことを言うやつだと思ってるのか？

「桃白白に弟子入りし、レッドリボン軍への仕事を貰う、あるいは同行するのが作戦の最終目標だ」

「はあ!!？」

「大きな声を出すな！ 隣の部屋に迷惑だろう」

「な!! ……にかんがえてんだ、おまえ、桃白白って、どんだけきしがかわると思ってるんだ！」

わざわざ手で声を抑えながら、プリカが問う。

「落ち着け、俺にだって考えはあるんだ」

「……いや、ムリだろ」

「何、簡単なことだ、悟空とボラに牙を剥くのはあくまでレッドリボン軍、桃白白はナイフにすぎん」

「ナイフをにせものにすれば、なにもできないってことか」

「その通り、その偽物に、俺達になる」

プリカは一瞬考えるようなそぶりを見せたが、すぐに頭を振って、まくしたてた。

「……いや、あほか！ ない！ 悟空がたたかえなきやれきしがある！ つよくなれなきやまける！ しかも、おまえのさくせんはなんにもほしようがないだろ!!」

「もつともな疑問ばかりだ」

「はあ……はあ……」

あまりのことに驚いたのか、着替えを一気に終わらせて、こちらに來ながら、プリカは息を切らしている。

「——勝負は時の運、悟空と桃白白の戦力差は埋まったが、埋まったことによって生じる危険もある」

「とどめをさすと？」

「ありえないことじゃない、油断がなくなれば被害も増える可能性がある」

「う……うーん」

今度は腕を組んでうつむいている、動きが多いのは心身が活発な証

抛だが、若年の体が影響しているのだろうか。

「俺達も、悟空も、今から修業を行って桃白白を撃退するにはあまりにも時間が足りない」

「……わかった、でも、でし入りにしっばいしたらどうなる？」

「諦めて引き下がる、もし攻撃されたとしても、二人揃っていれば撤退程度は可能だろう」

「そのあとは」

問うプリカを前に、俺はドラゴンレーダーを突き出す。

……いくつかの光点が集中している箇所が、一つ。

「ジェット機で突入して、お前のんちや砲でここを爆撃する、雇い主が消滅すれば桃白白は出てこない」

「んちや砲いうな」

「だがまあ……これは、無茶な手だ、あまり使いたくはない、巻き添え被害も考えられるしな」

「れきしもかわる、ゲロが死ぬかも」

「だが、歴史の改変を防ぎつつボラの死を防ぐにはこれが一番いい手段だ、桃白白の戦い方も、事前に学べるかもしれん」

「うしろがほんねにきこえる」

「否定はせんが……」

また唸つてから、プリカはことの本質に触れる質問をした。

「……まず、今回のドラゴンボールにそんなかちがあるのか？ ドラゴンボールなんて、いつでもいいだろ」

確かにドラゴンボールの使用機会はいくらでもある……、俺はこの作戦の実行目的をもう一つ隠している、気恥ずかしかったのだ。

「ボラの死を防げる、ウパはみなしごにならない、あと、服屋のおやじも助かるな」

「人が死ぬのがいやなのか」

「防げるなら防ぐべきだ、特に善人の死ならな」

「……たしかに」

ドラゴンボールで復活などということとは、基本的に最後の手段だ。

……別に俺は、命の尊さなど高らかに叫ぶタイプではないが、今回

は（成功さえすれば）得しかない作戦と言えるだろう。

プリカも、『急にまともなことを言いやがって』とばかりの目で見たあと、納得した様子を見せてくれた。

「俺達はドラゴンボールを得る、歴史の不確定要素を取り除く、人死にを防ぐ、カリン塔へは後で誘導すればいい」

「桃白白のいどころはわかるのか」

「あの男は自らの存在を隠しちやいないからな、旅の途中にしつかりリサーチ済みだ」

「じゅんびがいいな……」

こうして、俺達は桃白白への弟子入りを求めるため、屋敷へ向かったのだ。

ジェット機をゆるゆると飛ばす俺達三人が鶴仙流の道場に到着した時には、既に日が傾き始めていた。

周囲は印象的な岩に囲まれ、まさしく、中華風の達人がいそうな気配が漂っている。

門番は桃白白の姿を見るや否や平伏し、その紹介であればと、俺達も道場に入る許しを貰えた。

「ここに来るのも久しぶりだわい」

「門下生の方々が相当いらっしやいますね」

「亀仙流と比べているのか？」

実際、亀仙流の『時折気に入った弟子を拾い上げてみっちり鍛える』体制とは全く違う、老若男女問わず、様々な実力の弟子たちが鍛えており、今は午後の鍛錬に精を出しているようだ。

後年、弟子の一人が立てることになる天津流の、少林寺的なむささは見られない。

「いえ、多種多様で面白い、と」

「一般の入門者であれば、入門の条件は才能があることのみだ」

俺達は一般では済まないの、才能だけでは済まされない、ということか。

「鶴仙流が求めるのは亀仙流のような生ぬるい精神論ではない、力

と、それを求める心だ」

「どちらも備えております」

……桃白白と言えど、俺達が殺し屋に師事することに完全に積極的であるとは思っていないだろう。

面従腹背を認めてでも力ある弟子を求めるのは、長寿を持った者が持つ余裕なのだろうか。

「……それを今から見せてもらう、そろそろ兄者の部屋だ、娘の方は黙りこくったままだが、挨拶はしろ」

「ソシルミがなにもかもはなしてしまっただけです」

のんびりと見物している間に、鶴仙人が居る奥の部屋の前までたどり着いた。

「ツツ!!」

扉の前に立った途端、凄まじい威圧感が俺を襲った、隣のプリカも同じく冷や汗をかいている。

一方、桃白白は一瞬ぴくりと眉を動かし、そのままドアに手をかける。

「ノックくらいせえ、桃白白」

「気付いているならばいいだろう」

——壁の向こうからこちら側の動きを察知する程度は容易い、とでも言いたげに、しわがれた、しかしハリのある声が響く。

桃白白は結局、兄の声をものともせずそのままドアを開け、俺達を部屋に入れた。

「わたしの兄でこの道場の主、鶴仙人だ」

「ソシルミと申します」

「プリカです」

「フン、結局勝手に開けおって……で、この二人が弟子入り志願という天下一武道会出場者か」

部屋は、いかにもな中華風に装飾された社長室、と言った風情だった。

その主である鶴仙人は……小柄な老人だが、見るからに老いてなお止まない野心をたたえた面構えと、溢れ出す闘気。

鶴仙人はそれらを威厳たつぷりに保ったまま、俺たちを睨めつけた。

「……なるほど、それなりにやるようじゃの、じゃが、桃白白から聞いたとは思うが、わしは今、有望な弟子を二人仕上げておる、おまえらの相手をしておるヒマはない」

「その弟子、あの天津飯とチャオズに匹敵する力を持っているとしたらどうだ？」

「桃白白！ きさま、わしの弟子が『準優勝』と『ベストフォー』のガキごときに……」

「おい、ソシルミ……そのニヤケ面、戦いの気配がすればすぐそれか」

桃白白は、恐らく俺に『弟子』との試合の意思を問おうとしたのだろう。

だが、こちらをちらりと見ると、すぐに俺の意思を察し、若干呆れ顔で鶴仙人に向き直った。

（なあ、俺そんなにニヤけてるか？）

（おまえほどわかりやすくニヤけるやつ見たことない）

「おい!!」

「はい、鶴仙人様」

「ソシルミとやら、わしの高弟と戦い、力を示してみよ……どーせ、大したことはないがな！」

鶴仙人は……溢れる威厳にそぐわない意地の張り方だ。

一方、桃白白はこうなることが最初から分かっていたような感じで構えている。

「承知しました、必ずや、貴方のお眼鏡に適う力をお見せしましょう」

「だが、ソシルミ、おまえは手をケガしているが大丈夫か？ 試合は別にそのプリカでも構わないだろう」

「この程度はかすり傷、ちよつとテーピングすれば戦えます」

……実のところまだ痛い。

「こいつはたたかえるならなんでもいいんです」

「そのようだな」

プリカと桃白白は何やら合意に至って頷き合っている。悪役の仲間になりたくないんじゃないか……！

俺達が桃白白について試合場に向かうと、そこは既に人払いがなされ、居るのは俺とプリカ、鶴仙人兄弟に、更にもう二人だけだった。その二人とは……言うまでもない、天津飯とチャオズだ。

「鶴仙人さま、あの二人が弟子入りを志願しているという……」

「そうじゃ、おぬしら二人のどちらかがあの男の方、ソシルミと戦い、実力を見極めろ」

「では、わたしが」

「チャオズでよかろう、よいなチャオズ」

チャオズ。

第22回天下一武道会で初登場した鶴仙流の高弟、鶴仙流の技に加えて、一種の超能力を持っており、それらを利用した戦闘を行うのが最大の特徴だ。

三年後までに相当腕を上げたのでなければ、今の俺には扱うことすら出来ない技術を少なくとも3つも持っていることになる……かなり楽しみな相手と言えるだろう。

「うん、鶴仙人さま、やれます」

「チャオズがいいならいいんだが……」

そのチャオズと、俺がやる、やつの全盛期と言える天下一武道会の三年前に！

「試合形式は天下一武道会と同じでよかろう、場外と戦闘不能、降参で勝負は決まる」

「異存ありません、今すぐにでも」

「わしに力を見せたい、というよりは……ただ戦いたいだけかの、まあええわい、チャオズ、武舞台に上がれい」

「はいっー」

さて、あちらが上がるならばこちらも、と、俺が中庭に足を踏み出そうとすると、プリカが裾を掴んだ。

「なんだ」

「いいのか？ チャオズとたたかって、またキレたりしないよな」

「……？」

「こりゃー！ 何をくつちやべっておるか！ さっさと上がらんか！」

ともあれ、俺とチャオズは武舞台へ上がり、合掌礼をする。

「始めいっ!!」

鶴仙人の号令がかかったのはその直後、ノーモーションでチャオズが来襲したのも、その直後であった。

チャオズの動きはなめらかで、まるで滑るように……ではない、チャオズは舞空術で滑っている！

「ツツツエエイ!!」

「うわっ!!」

腰丈ほどの相手の突撃に対し最も有効な策はタイミングを合わせた蹴撃である。

俺は先輩に散々やられて難儀したものだが、チャオズはこれに反応して進路を後方に変更、次いで手で受け、着弾の衝撃をゼロ近くにまで軽減した。

「これが音に聞こえる舞空術かッ！」

「まさか、チャオズの突撃をさばくなんて……！」

「舞空術のことを知っておれば、あの程度予想がつくわい！」

実際この技のことは漫画で知っていたので、俺は何も言えん……だが、鶴仙人の言うこともまた、事実だ。

『地面への蹴り』を介さない舞空術による突撃は変幻自在とも言える一方、意思が直接動作に繋がるため、わかりやすい、分かっていればどうとでもなるのだ。

……これを受けていても千日手になるだけだな……ならば！

「こちらから行くぞツツ!!」

「!!」

今度はこちらから、チャオズと同じく正面衝突の体勢で飛び込む。勢いそのままの蹴り込みを、軽く浮きながらのガードで弾き、足の

外側を抜けて側面に回り込もうとするチャオズ。

が、そこは俺の腕の射程圏内である、すくい上げるアッパーを前に、再びチャオズは後退を余儀なくされた。

「むむ……」

「なるほど、浮くつてのは中々厄介だな、手応えがない」

回避、受け流し以前に、打撃の衝撃が完全には伝わらないのだ。

有無を言わさぬレベルの打撃か、カウンター気味の打撃であれば通じるだろうが、チャオズは慎重だ。

どちらかと言うと子供っぽい調子乗りのイメージがあるチャオズだが……ふむ。

「こうもビクビク戦われちゃあ、こつちも気が萎えてくるぜ」

「ソシルミがでかいから、こわいんだろ」

「なにいつ！」

「こ、これ、乗るでないぞチャオズ！」

鶴仙人の制止は間に合わず、チャオズは自分の足で地面を蹴り、更に舞空術で加速する！

「てーいつ!!」

「蛇ツツツ!!」

弾丸並の速度に加速したチャオズの飛び蹴りを躲してカウンター……を、狙うも、着弾の一瞬、チャオズはほんの少し舞空術の方向を変え、そのまま足で俺の腕を弾いた！

「ツツ!!」

「とりやつ!!」

チャオズの本命は、残った片足によるサッカーボールキック！

空中攻撃の自由度を侮ったつもりはないが……!!

「——ツハア!!」

「……なんとかふせいだか」

腕を捌かれてから着弾するまでの一瞬、俺の体は前進を選択した。舞空術を使用しているとはいえ、質量差は歴然、タツクルで体勢を崩せば、技は中途半端なものに終わる。

「一瞬のやり取りは大得意だからな」

「フン、蹴りが効いとらんわけでもなからうに」

確かに、苦し紛れながら放たれた蹴りは俺の腹部に炸裂したが、威力は削がれている。

痛いものは痛いのだが……面白くなってきた、変幻自在というやつは悪くない。

第22回天下一武道会の三年前という前提で甘く見ていたが……これは楽しいことになった。

「では、今度は俺の手番か？」

「へへん、もうおしまいだよー！」

チャオズは俺の反撃を待たずして高度を上げ、飛び上がれば場外になる位置に陣取る。

本来の歴史では、第22回天下一武道会で見せた戦術だ。

格闘戦で戦うには手強しと見たのか、それとも、腕を見せつけたいだけか？

「確かに、浮いていればこちらは攻撃できないな」

「ボクはできるー！」

チャオズは位置を保ったまま、指を掲げて『光らせる』、その指から感じるほのかなプレッシャーは、プリカのエネルギー弾やかめはめ波と同質のものだ。

すなわち、気の力！

「どどん!!」

「シイッ!!」

大ぶりの回避にはなったが、危なげはない。

ビームに近いが、着弾点で爆発する性質上、上から撃たれば小さく避けるのは難しい。

ずいぶん舞空術と食い合わせがいい技だが、そのように調整しているのだろうか、俺にはそれが出来るのかもわからないが。

「へん、どんでん行くぞー！」

「やってみろー！」

俺が挑発した次の瞬間から、降り注ぐどんでん波の雨！

溜め動作もないこの連射力こそがどんでん波最大の特徴と言えるだ

ろう……が、当たらなければ意味はない。

「チャオズのどどん波をああも簡単に……!」

「氣の流れどころか、指の動きまで読まれた上でホイホイ撃って
ちや、当たるもんも当たらんわい」

「こりやー！ 余計なことを言うでないわー!」

クリリンも恐らくこれで避けたのだろうが、チャオズのどどん波は
ほとんどテレフォンパンチだ。

……とはいえ、反撃手段もなく、連続回避を強いられるこの状況は
こちらにとつても、苦しいものがある。

「くそー!」

「フウ！ どうした、俺はピンピンしてるぞツ！ 当たる攻撃を
もってこいッ!」

「うう……鶴仙人さま!」

「ぐぬ……、いいじやろう、やってしまえチャオズ!」

あちらもしびれを切らしていたらしい、鶴仙人が何らかの許可を出
すと、チャオズは慎重に降りてきた。

そして、俺の間合いを見計らいながら、手を振り上げ――

「やっ!!」

「――グツツツ!!!」

腹痛!!

これが、チャオズの超能力か!!

「ていつー!」

「ムウツツ!!」

辛うじて体勢を保つが、単調な蹴りに対処すらままならない。

「へへっ、おなかを押さえなくていいのか!？」

「これでもヨガを修めた身ツツ!!」

この程度の苦痛は……消えないが、根性で我慢だ!

チャオズの蹴撃は激しさを増してゆく、天内悠は飛び上がったの攻
撃で対戦相手を苦しめたが、自分で浮いているのとは完全にレベルが
違う。

「とりやっ! おりやっ!」

「……ッ!!」

ただ腕を伸ばせば避けられ、そのまま蹴られるのみ、効果はない。かくなる上は、最大威力の一撃を!

「ツアアッツ!!」

「へっ!?!」

「あやつ気を使えるのか!?!」

—— 『輝く手』の貫手で、奴の足を叩き潰す!

その決意と共に力を込めたその瞬間、俺を苛んでいた腹痛が失せた。

今なら!

「ダアッ!!!」

「あっ!!」

包帯越しに鈍く光った腕が、チャオズの両足をしっかりと掴んだ。このままひねるか、叩きつけるか、どちらにしる逃がす手は——

「そこまでえ!!!」

「ッ!」

「は、はい!」

「鶴仙人による試合終了の合図。」

それと同時に、俺の手と……チャオズの指に蓄えられていた光が薄れ、消える。

「もうよい、おぬしの実力はわかった」

「では……」

「早合点するでないわ、桃白白、確か、近々、一つ仕事を請けると言っておったの」

「ああ、レッドリボン軍からな」

「その仕事、あやつらにやらせてみい、やり遂げたら、合格とする」……これは、望外の展開かもしれない。

俺はチャオズの足を開放し、一礼してから、鶴仙人に向き直る。

「お任せいただけるのであれば」

「よいか、桃白白」

「あそこは大口だ、失敗したら信用問題になるぞ」

「その時はこやつらを始末してから、安売りでもしてごまかせばよからう、そのときは天津飯にも手伝わせる、よいな天津飯」

「はっ！……それが終われば、彼らが同門に加わるのですか」

天津飯は、こちらを見ながら感慨深そうに呟いた。

この世界でも、超人的な能力を手に入れる事ができる武道家はあまりに少ない。

近い年代の同門は得難いものだ……裏切ることを前提に弟子入り志願した身で言うのもなんだが、少し罪悪感が湧く。

「合格したらじゃ、合格したら！」

「ボクが先輩かあ！」

チャオズもすつかり浮かれている、プリカはわざと真面目ぶった表情をしてみ上げる感情をごまかしているようだ。

「しあい、たのしかったか」

「ああ、いい試合だった」

「それならよかった」

舞空術、どどん波、超能力、それに鶴仙流の体術にそれを使いこなす技巧、存分に堪能させてもらった。

……プリカには何か含むところがあるようだが、それはここで話すことでもないだろう。

そう思っていると、桃白白がこちらにやってきた。

「ふむ……、おまえたち、わたしの代理として出るには、その格好はそぐわないな」

「確かに、都会風ではありませんが」

「……都会はそんなのが流行っているのか？」

流行っていない。

「余所行きの道着を貸す、着替えてくるがよい」

更衣室の中、仕切りの向こうではまだプリカが着替えているが、俺は着替え終えた。

俺に与えられた道着は、桃白白のそれに近い、典型的なカンフー道着で、胴体の色は青。

そして、胸には『鶴』の文字……所属する気のない団体の制服というのは少し倒錯的だな。

「十分動きやすく、多分頑丈……念の為に後で慣らしておくか」

「おい、そっちは終わったのか」

「終わったぞ」

「……そうか」

しばらくくすると、ぐそぐそと布を放る音がして、仕切りの影から、プリカが姿を表した。

袖なしでズボン付きのチャイナ、それとカンフーの間の子といった感じだろうか、赤い胴体の真ん中には、やはり鶴の一字。

「大本が同じだけはあつて、匿名希望選手に近いスタイルだな、ビキニアーマーじゃなくてよかった」

「……さすがにそれだったらきかない」

想像したのだろうか、プリカは肩を抱き、ただでさえかなり渋めの顔を、更に嫌そうに歪めてみせた。

「ノースリーブはいいのか」

「いいというか……まあ、いいけど、こんなガキの体になんも感じないだろ」

と言いつつも、若干顔が赤い。

着替えた服をホイホイカプセルにまとめてみると、桃白白がドアを叩く。

「おい、そろそろ着替え終わっただろう……レッドリボン軍から連絡だ、そろそろ出発しろ」

「はい、承知しました……乗り物はあのジェットでよろしいですか？」

「いいだろう、少し遅いが仕方あるまい、先方は明日までに着けばよいと言っていたからな」

「あれでも最新型ですよ」

ドアを開けながらそう反論してみるが、桃白白はニヤついてみせる

ただだ、自分の方が早いと言いたいのだろう。

桃白白は、小さな紙切れを俺に渡して、そのまま意味深に背を向けた。

「座標と無線周波数、それに合言葉だ」

「処分はいかがいたしましょう」

「合言葉だけは念入りに始末しろ」

「承知しました」

ただ単にレッドリボン軍か桃白白のセキュリティのレベルが低いのか、それとも……。

やってみる価値はあるか。

「桃白白様」

「なんだ、もう行っていいぞ」

「いえ……レッドリボン軍のことで」

俺があえて小声気味に言うのと、桃白白はぎろりと振り返った。

「レッドリボン軍がどうした」

「いえ、あの集団のことでは、よくない噂を聞きます」

「……悪名高かろうと、むしろ付き合いやすいだろう」

「彼らは、我々武道家を上回る人型ロボットを作ろうとしているとか」

「お、おい」

プリカが制止するが、ここで止まる理由はない。

「それを聞いて、わたしにどうしろと？」

「いえ、噂は噂ですので……お気に留めて頂ければ」

「……へん、ござかしいやつめ」

桃白白は、ぷいっと視線を外して、そのまま歩き去った。

数分後、俺達は空にいた……座標が示す基地までは、そう遠くない。

「お、おい!! あれはなんだ!」

「下心だよ、ちよつとしたな」

「オレは……あいつらのなかまになる気はないぞ!」

「だが、鶴仙人一派が仲間になる可能性はある」

椅子を蹴られた。

「ま、まあ待て、この作戦の結果襲撃される可能性を考えたら、あそこを布石を打っておいてだな……」

「こんなさくせんはいらない、うまく桃白白をたおせば、れきしもかわらないし、あんさつしやがたおれば人も死ななくなるだろ」

「……確かにそうだ」

うまく考えが纏まっていない。

俺は人死にを防ぎたいわけでもなく、歴史を変えたくないわけでもない……のか？

「強いぶどうかかなかまになつてくれるかもしれないと思ったら、とまらなかつたんだな」

「そうかもしれん」

「まるで悟空だ」

俺が悟空？

戦闘バカって部分くらいしか、共通点がないように思えるが。

「そういうことにしておけ、今回はつきあつてやるから」

「俺は悟空ほど、我儘を聞いてもらえる功績をあげちゃいない」

「あげた、ちきゆうをすくつただろ」

。

「ありがとな」

「ん、よろしい」

↓つづく

第十二話：転生地球人が現地サイヤ人と戦うまで

「きみたちの実力を証明するため、そこにいるブルー將軍を倒してくれたまえ」

レッドリボン軍基地の一室にて、レッド総帥とブラック補佐による、俺たちの『試し割り』が行われようとしていた。

「またおまえがやるのか」

「やりたくってウズウズしてるなら代わるぞ」

「だれが！」

ブルー將軍。

レッドリボン軍でも随一の実力者で、ドラゴンボール世界における『超能力戦士』の走りともいえる存在である。

「あなた、ちよつといい顔してるからって調子に乗りすぎじゃない……!?!」

「色目をつかうのはやめろ、俺にそういう趣味はない、あつても手加減はせんがな」

「つれないのね、まあいいわ……それはわたしも同じなもの！」
仕掛けてきた！

初手は飛び上がったの蹴り込み、上方からの攻撃は手と足の筋力差を中心とした様々なメリットを持つ。

その有利は、上昇、対空、着地時に払う隙を多くの状況で上回っているが……!

「跳トツツ!!」

「れれっ!?!」

「ブルー將軍より高く飛びおつた!!」

天井に縛られた遅いジャンプを捕らえることなど容易い。

俺はブルーより素早く、そして半回転しながら飛び――

「て、天井に張り付いた!?!」

「これが軽功ってやつだッ!」

実際はヨガのしなやかさで天井に粘りつくように着地しただけだが、俺の有利は絶大!

そのまま頭を掴み、立ち上がる勢いで強烈な頭突きを叩き込む！

「がっ……！」

「素手ではこんなところか、軍人なんだろう、武器でも使ったらどうだ？」

無論、ただの挑発だ。

ブルーは素手での格闘に自信を持っている、それは多分、自らの美意識を満足させるほど磨き上げた体への信仰だ、武器など使いはしない。

着地してしばし頭を押さえていたブルーは、起き上がって啖呵を切った。

「ナメるんじゃないわよっ!!」

「では見せてもらおうかツツ!!」

俺はあえてブルーを注視する……と、来た!!

ブルーの目が小さく煌めくと、俺の目を通じて『力』が流れ込み――

「――なるほど、『これ』でいいんだな」

「あ……あれえ!?!」

「総統、まさかやつはブルー將軍の超能力を!?!」

「鶴仙流には超能力者も居ると聞いた覚えがある、対処は知っているということか……」

当たらずとも遠からず。

これはチャオズ戦を参考にして編み出した『輝く手』の応用……『光るめだま』とでも言ったところか。

「わ、わたしの超能力が……!?!」

「捨ツツツ!!」

俺は動揺するブルーをドアの外に向け激しく蹴り飛ばした。

この世界の特殊能力は実力差が大きすぎる相手には通用しない。

そして、その特性は、おそらく気の干渉によってもたらされるものだ。

ならば、気を高めることによって超能力を無力化することも可能ということだろう。

「ブ、ブルー將軍をいとも簡単に……」

「よろしい！ ブルーに止めをさしてしまえ！」

手応えはあった、ブルーは最早動けまい。

元の歴史では、ブルー將軍は作戦失敗の罪で死刑判決を受けた後、助命と引き換えに受けた桃白白との試合で敗死したが、この歴史では俺がその役目を担ったことになる。

……このまま適当に煙に巻けば、俺達が殺さずともよいのだが……必然的に、そのままブルーは処刑されるだろう、それではつまらん。

「プリカ、追撃は任せた」

「……わかった」

ブルーは窓の外、かの有名な『柱』に、抱きつくようにめり込んだままケイレンしている。

「ずいぶん可愛らしいが、あれで大丈夫なのかね？」

「侮るなかれ、奴は臂力の一点においては私以上でございます」

「ほう……、それは楽しみだわい」

プリカはゆつくりと柱に近づくと、そのままぞんざいに柱を蹴り碎き、ブルーのめり込んだ部位だけを取り外した。

そして、槍投げの構えを取り――

「――があっ!!!」

「おおっ！」

「な、なんとっ！」

俺の期待通り、ブルーの乗った柱を地平線の果てにぶん投げた。

「……十分な力があると、お分かり頂けましたか？」

「あ、ああ……」

「もちろんだ、きみたちには、ドラゴンボール獲得の邪魔をしているこの子供を殺し、持っているオレンジ色の玉を奪ってもらいたい」

「承知しました……吉報をお待ちください」

一時間後、俺達はレッドリボン軍基地から聖地カリンに向け、ジェットを飛ばしていた。

既にカリン塔が見え始めて久しいが……その先端は常に空の果て

にあり、神殿はおろか塔の頂上すら見えない。

「さて、ここまでは計画通りだな」

「ブルーしようぐんを投げ捨てるのはけいかくなかったぞ」

「やってくれたのはお前じゃないか」

「……おまえがやらせたんだろ、しんでももしらないけどな」

あそこまでお膳立てすれば分かるか……でも、やってくれたのはプリカの厚意だ。

ブルー將軍は元の歴史でも相当タフな人物だったが、悟空が強化されてなお、元の歴史と同じルートを通れるほどタフなら……まあ、アレで生きていても不思議はない。

「死んだならそれまでだ、アイツもそれだけのことはやってたんだし……まあ、ありがとな」

「……おまえ、なんでもそれですますつもりじゃないだろうな」

「そのようなことがあるはずがございません！」

「はあ……」

ため息をつかれた。

ともあれ、そろそろカリン塔だ。

俺達は機体を塔からほど近い、墜落したレッドリボン軍機が作った森の裂け目に着陸し、徒歩で塔へ向かうことにした。

「手筈を確認するぞ、まず、俺が悟空に喧嘩を売る、適当にぶつかつてからは流れで、カリン塔での修行を提案する、これでいいな？」

「……ちよつとムシがよすぎる気がする」

「この世界ではこれくらいが適正じゃないか？」

「まあ、だいぶおおらかみただけど……おまえ、悟空と戦いたいだけだろ」

俺がわざとらしく目を逸らすと、プリカはまた小言を言い出した。

「オレもまあ……戦いたってのはわかるけど、悟空をへたにいじつたらなにがおこることやら」

「だからこそワクワクするだろ、あのパワーッ！　みなぎる活力ッ！」

「……やる気はともかく、パワーはあれ、たぶんオレの方がつよい

ぞ」

「妬いてるのか？」

「はいはい、それでいいが、あんまりやりすぎないようにな」
天下一武道会で暴れ倒して満足したのか？

そうこう話しているうちに、ウパとボラのテントが見えてきた。

……三人、悟空、ウパ、ボラが並んで、何やら話しているが……まあ内容はいい、さっさと作戦を進めてしまおう。

「よう悟空、久しぶりだな」

「ミソシル！ おめえもこつちに来てたんか!？」

「おう、だが……うーむ、参ったことになってな」

ボラが立ち上がり、一歩前に出た。

「ミソシルとやら、お前から強い殺気を感じる、一体この聖地カリンに何をしに来たのだ？」

「俺の名はソシルミ、悟空が勘違いして覚えているだけだ」

「そ、そうか、すまない……」

後ろから『何をやっているんだ』とばかりの視線が飛んできている、マジにならなくては。

「悟空、俺はレッドリボン軍からお前を抹殺する依頼を受けた」

「抹殺？」

「ぶちのめしてくれって頼まれたのさ、金でな」

「つまり戦うってことか！」

……ズレた納得だが、まあこれでいいだろう。

「あの軍隊の仲間ということか……!」

「抹殺対象は悟空だけだ、お前は関係ない」

「聖地カリンを守るのが私の役目だ！ なにより、恩人を見捨てるわけにはいかん!!」

ボラは傍らの槍を取って構え、こちらを睨みつけた……確かに、元の歴史での桃白白戦もそんな展開だったな。

やる気はなかったんだが、これはこれで悪くない展開だ。

何せ、一人しか敵が居なければ、戦闘種族二匹の闘争本能が満足し
そうにない。

「プリカ、お前は悟空とやりたくないだろ、ヤツを相手しろ」

「……おしつける気か」

「悪くない相手じゃないのか？」

「いや、そう……かも、しれんが……」

真剣にボラを値踏みしている様子のプリカ、小悪魔的な雰囲気というよりは、望まないシチュエーションで出てきたおやつを前に悩んでいる感じだ。

一方、殺気をみなぎらせた実力者二人に値踏みされるボラは緊張し、悟空はワクワクしている。

……もう始めてもいいんじゃないか？

「なんだ、やんないのか？」

「やるともツツツ!!」

悟空の何気ない誘いをきっかけに、戦いの火蓋は切って落とされた。

まずは小手調べ、水平に飛び込みながらの蹴り込みだ。

「へへ、やつぱりキックか！」

「予習済みってか、光栄だなツツツ!!」

低身長相手のローキックはくり返し使ってきた戦術だが、有効性が損なわれることはない。

にも関わらず、悟空はたやすく手で防ぎ、飛び退く形で完全に威力を殺してみせた。

チャオズがやったのと同じで、より精度が高い！

「向こうもおっ始めてるようだな……」

「ボラのおっちゃんの槍は全然当たってねえみてえだ」

地力の圧倒的な違いに加えて、おそらくサイヤ人の血が対武器、対大物の素質を与えているのだろう。

実力差があらうと当たれば痛手を負うであろうボラの槍を楽しげに避けている。

「さて、俺も仕事だ、続きをするぞ」

「おっっー！」

今度は真面目に拳を使った攻撃を。

そう思つて腰を落とした瞬間、背後に猛烈な殺気を感じ、腕を払う……が、空を切る！

「むッッ」

俺は更に腰を落とし、そのままの勢いで前方の『悟空』を巻き込んで転がり、再び立ち上がる。

「残像拳かッッ!!」

「うーん、当たると思つたんだけどなあ……」

前の瞬間まで俺が居た場所をかすめるように落下しながら、悟空が言う。

……まずいな、対処はうまく行つたが、見えなかつた。

「面白エ技だな、お前が俺に見えない速度で駆け回れるとも、思ねえが……」

「へへっ、きゅつと力入れて飛ぶんだよ、自分にも周り見えねえから、動かれると駄目みてえだけどな！」

見稽古で一瞬で習得してしまうあたり、悟空の才能は大したものだ。

……俺もやってみるか！

「——ッ！——ッッ!!」

「ひゃくっ！」

技の原理そのものは想像がついていた。

武道家は常に意識せざるを得ない、自らの実力の限界と制御可能な限界の差を、『無視』するのだ。

「——是^セッッッ!!」

「っ!!」

消え去つた視界が戻る、振り下ろした腕の先には何も無い。

俺はその瞬間、更に『飛び』、元の場所へと帰る。

地面には俺が駆け抜けた回数^の二倍、いや、三倍の傷跡が刻まれていた。

「ま、こうなるか」

「避けてやったのにちつともスキがねえんだもんなあ……」

なんのことはない、悟空は俺が飛ぶのに合わせ更に飛び、その応酬

が繰り広げられ……。

「……駄目だこりゃ、ラチがあかん、真面目にやろう」

「……そうだなー」

飛び回ってもお互いに見えなくなるばかりで何も利益がない、体力をムダに消耗して、楽しくもない。

そのうち気配かヤマカンがあたって殴れるかもしれないが、そこまでやる気も出ない、いや……俺が負けるだけだ。

互いに構えを取り、戦いは振り出しに戻った。

「があっ!!」

「くっ……!」

向こうから飛んできたボラの折れた槍が突き刺さる音が、開戦の合図だ。

同時に飛び出した俺達は、中心より僅かに俺寄りの地点で激突した。

「ツツ!!」

瞬間、伝わってくるのは莫大な臂力と鋭い打撃力!

プリカの言う通り、力こそあいつに劣るものの、長年鍛えた武術の冴えは明らかに悟空が上か!

打拳の鋭さ、連続攻撃には練度が如実に現れる……格闘技術だけで言っても、俺に匹敵するだろう。

「はははツツ!! やっぱり、わかりやすいのもいい!!」

「オラも好きだー」

拳を14、足を7、胴体が2、交差する頃にはその戦い方までもが伝わる。

打撃を捌き、捌かれ、組み付き、躲される、それを何度もやれば、嫌でも分かってくるのだ。

——そして理解した、悟空の戦いは『思い付き』だ。

「嘖ツツ!!」

「よつとー!」

「シィッ!」

飛び上がった悟空に放つ上段蹴りが、体の『くねり』で回避される。

そこに貫手を叩き込めば、腕で防ぎつつ、わざと吹き飛んでいった。……動物的な直観と理性的な洞察力の組み合わせだった『思い付き』の繰り返し、それが悟空の力なのだ。

「野生児ってよりも愉快なインテリだな、お前は」
「？」

「わからんでもいいさッ!!」

俺はあえて腕を広げ、大きく広げた構えを取る。

溢れる獣性を、抑え込むでも飼いならずでもなく生まれながらに、あるがままに受け入れているからこそ、戦闘中も冷静になれるのだから。

——この体の衝動と力を受け入れた俺と、似ているようで違う、俺のヒーロー。

それが、夢をそのままに、ここにいます。

「来いッッ!!」

「おうっ!」

次に飛び出した俺が放つ横なぎの腕を飛び上がって避ける悟空。

俺は放つ勢いのままに倒れこみ、回転蹴りを繰り出す、が、なんなく回避された。

牽制のつもりは毛頭なかったが、二の太刀は残してある。

「ムンッッ!!」

「ひゃっ!」

前転する形で立ち直った俺と、未だ空中に留まっている悟空の変則的な空中戦!

「——ッッッ!!」

「たたたたたっ!!!」

悟空は文字通り地に足の付かぬまま、五体全てを使って俺の拳を捌く。

激しい戦いに袖は破れ、包帯が外れて開いた傷跡から血が溢れ始めた。

……このまま行けば勝敗は五分……いや、もつと悪いか?

ならば、俺にとって、これがさしあたり最大のチャンスとなる!!

「この好機、仕留めさせてもら——ッッッ!?!」

かくなる上は『八手拳』をもって一息に——そう思った瞬間、強烈な悪寒が俺の背筋を駆け抜けた。

「へっ!?!」

「が——」

次いで轟音、これは『噴射炎』の音だ。

距離は次第に近づき、数は多数。

これは……。

「ミサイルかッッッ!!」

多連装ミサイルランチャーから放たれたであろうそのミサイル群は、バラけつつもまっすぐカリン塔の足元へ向かって来ている。

威力は高いが、十分に回避は可能、ここに居る四人全員、受けてもケガで済む……が。

テントの中から覗く小さな影を見て、ボラが叫ぶ。

「ウパ!!」

「あ、あわわ……」

↓つづく

第十三話：転生地球人が意味深な教えを受けるまで

炎と煙を撒き散らしながら迫るミサイル多数。

外見からすると接触信管、素手ではリーチの足りないそれに対処するため、折れた槍を掴む。

「フンツツ!!」

三度回して手になじませ、ひらひらと紐の揺れる石突（槍の尻）を穂（刃）に見立て、槍術と棒術と間の子にした技で扱う。

よい木、よい品だ、折れているのが惜しまれる。

「良しツツ!!」

俺は猛然とミサイルに向かって駆け出し――

「よしっ!」

「悟空」

隣には、同じく如意棒を構えて飛び出す悟空の姿があった。

……頬が緩む、いや、こわばって釣り上がるのを禁じえない。

「俺は塔の側を守る!!」

「オラは反対だなっ!」

悟空と俺は勢いをそのまま、それぞれ別方向に駆け出し、ミサイルの迎撃にあたる。

さて、いかに強力な武道家といえど、近代兵器の爆発を正面から食らえばただでは済まない。

これは元の歴史で桃白白が悟空相手に手榴弾を使用し、しかもそれを返された爆発で痛手を負っていることから明らかだ。

「――ツツ!!」

俺は棒をゆらりとミサイル群に突きつけ、信管を刺激しないギリギリの力で叩いてゆく。

正直言うと、この類のミサイルの性能は魔族どもとの闘いでさんざん体験済みだ。

「なんとという腕だ、あのミサイルを簡単にさばくとは……!」

「ばくはつしないように気をつかつてるのか……」

一方、悟空は如意棒を数十メートルに伸ばして振り回し、ミサイル

を次々破壊してゆく、この距離ならば爆発は届かないと直感したのだろう、戦闘民族故の判断力か。

ミサイルを全て破壊し、一息つこうとしたところで、プリカが大声を上げた。

「……う、うわっ、ソシルミ！」

「今度は何だ……むっ!?!」

焦った様子のプリカが空に向けて指を突きつけている。

その先には、ものものしい機関砲とミサイルポッドを構えた戦闘ヘリの姿があつた。

「あ……あの軍隊のマークだ……!」

「レッドリボン軍だとツツ!?!」

<<<その通りよ!!>>>

ヘリのスピーカーから、けたたましい音量でカマの声が流れた。

「ブルー將軍ツツ!?!」

<<<さっきぶりねえ! 今で死んでくれていると思ったのだけど、ちよーつと甘すぎたかしら!?!>>>

「うそだろ、まだいちじかんだぞ!?!」

タフって言葉はブルー將軍のためにある。

いや、現実逃避をしている場合ではない、なんという早い復帰だ。俺は槍を後手に構え、ヘリに突きつける準備をする。

「また出やがったな! 今度こそやつつけてやる!」

<<<おだまり! あなたとその二人が手を組んでいることはすっかり聞かせてもらったわ! あなた達全員の首とドラゴンボールがあれば、わたしはレッドリボン軍に戻る!>>>

「……先に着いて森で聞いてた、と、ヘリは大方、元部下あたりから奪ったものか」

プリカは、努めて冷静にする俺を一瞬、恨めしげな顔で見たあと、それを振り払うようにぎゅっと瞬きをした。

俺だって、ここまで早く因果が巡ってくるとは思っていなかった、プリカもきつと、そうだろう。

だが……こうなってしまったからには、立ち向かうしか、ない。

<<<ご明察、逃げられちゃ元も子もないから、様子を見ていたのよ、でも……そのガキが居る限り、誰も逃げられないわ……!>>>

「……息子のことか」

その場全員の意識が一瞬、ウパを向く。

ブルーは俺たちを仕留められると思っっている、そして、懸念は恐らく、筋斗雲での離脱だった……ということなのだろう。

「逃げられない？ 弱点が欲しかったただけだろう、ガキ三人相手に臆病なことだ」

「オレたちがただのガキってのはむりだろ」

<<<悔しいけどその通りね、でも、結果は変わらないわ!!>>>
その瞬間、ヘリのミサイルポッドと機関砲が同時に火を吹く!

「げげっ!」

「クツツ!!」

やつの言う通りなのはシャクだが、実際、ウパは俺達にとって最大の弱点だ!

大量のミサイルがウパに向かって放たれば俺はそれを迎撃せざるを得ない……にも関わらず!

「機関砲ツツ!!」

分間数百発の重機関砲弾は確実に対処せねば命に届く威力、的確な狙いで放たれるそれは俺と悟空の迎撃を鈍らせ――

「ウ、ウパっ!」

「父上!」

一瞬時が止まる。

俺と悟空は届かない、プリカとボラは睨み合っている、ウパが自分で助かるのには期待出来ない……!!

この場で対処出来るのは――

「――ぐっがあ!!」

次の瞬間、プリカのエネルギー弾が、ミサイルを爆発すら許さず完全に消し飛ばして森の中へ消えた。

「おっさん! ……オレたちのことはあとで話す、ウパをたすけるから、みのがしてくれ」

「……分かった」

なんとかプリカが取りなしてくれた……ということなのか？

攻勢に耐えつつも疑問を抱えた俺をよそに、プリカは未だに攻撃を続けるヘリへと気弾を放ち始めていた。

「があ!!」

「悟空！ そのウパって子供を守れ、今度は俺が前に出るツツ!!」

「わかった!」

兵器が相手で更に守るものが居る状況、最早戦い方にこだわる意味もない!

俺は石突を使って地面の小石をミサイルに向け弾き飛ばし、誘爆させる!

「な、なんと腕だ……!」

「くそっ! ソシルミ、ヘリがよけた! あいつビームをよける!

つがあ!!」

「何イツツ!？」

見ると、ヘリは気持ち悪いほどの超高速で動き回り、放たれ続けるエネルギー弾をスイスイと躲している!

エースどころではない、明らかに性能を上回る挙動だ。

「超能力か!!」

<<おほほ、これまたご明察、あんたたちがどれだけ強くなったって、わたしが操るヘリには敵わないわよ!>>

「があ!!」

プリカは回避を計算に入れ、わざと狙いを甘くしたエネルギー弾を連射しているが、やはり、ヘリは難なく避けてゆく。

単独での攻撃は不可能か……!」

「クツツ……!」

「ソシルミ!」

俺の脇腹を機関砲弾が掠め、服越しに血がにじみ出た。

この程度の射撃であれば、何時間だろうと迎撃に支障が出るはずもないのだが……!

「……まるでへんかきゆうだ……!」

「変化……また超能力かッツ!!」

<<<もうわざわざ言わなくなったっていいんじゃない!? それでも、すぐ気付けたのは褒めてあげるわ!>>>

弾丸の速度や軌道を少しずつ変える事ができれば、迎撃するのは遥かに難しくなる。

「ガキ相手に大人気ねえこって!」

<<<フン、何がガキよ、天下一武道会本選出場者と分かってたらわたしも最初っから本気だったわ!>>>

——今のブルーに一切の遊びはない、逆に言えば……これまで遊んでいたとも言えるだろう。

美しい肉体や莫大な権力ではなく、自らの全能力と、その身の丈にあつた兵器!

「ソシルミとやら!」

「カリンガ族のおじさんッツ!」

「……わたしの名はボラだ、何か事情があつて奴らを裏切つたのか?」

「悟空に差し向けられる暗殺者となり替わり、一戦交えた後レッドリボン軍を倒す、それが俺達の計画だった!」

「二戦交えた理由が分からんが……とにかく、これを使えっ!」

そうボラが叫ぶと、後ろから飛来する棒状の物体あり……槍だ!

俺は新品の槍をしっかりとつかみ取り、折れたものと持ち替える。

「期待通りの槍だ、素晴らしいッツ!!」

<<<何話し込んでんじやってんのよっ!>>>

次いで飛び込む機関砲弾をすべて刃先の曲面で滑らせ、誰もいない方向へ逸らす!

「灘神陰流ッツ!」

「たますべ……いやしゆうちゆうしろ!!」

暫し、俺を盾、プリカを矛とした砲撃戦が続く。

被弾はなし、されど、こちらからの命中弾もなし。

戦況は完全に膠着状態……が、そろそろか。

「ミソシル! ウパ逃がしてきたぞ!」

「よしッ！ 同時攻撃を仕掛ける！ 悟空、プリカ、俺に続けッ！」
俺はボラをチラつと見て、しかし言及はせず、武器を構えた。
悟空は如意棒を取って突撃する構え、プリカは掌にエネルギーを貯め始めた。

><<何度来ても無駄よ、無駄！ 人質が居なくなつたつて——>

「茶番は終わりにするぞッッ!!」

「おう！」

「……があ!!」

先陣を切つたのは、プリカの放つ大玉かつ高速のエネルギー弾。

弾丸に匹敵する速度の二連撃をへりは難なく躲す……が。

「躍ッッッ!!」

「いいぞミソシル！」

回避座標を予測しての突撃、弾丸をすべて弾き返しながらのそれの前に、へりは更に強引な動きを強いられる。

超能力を絞り出しているのだろう、ガラス越しにブルーのゆがんだ顔を見ていると、瞬間、その歪みが更に増し、視界に赤が掠めた、如意棒だ！

「てりゃああ!!」

「集団戦というのものなかなかオツなものだが……これで終わりだ!!」

気合と共に、槍を、一直線に奴のへりに投げつける……その瞬間、更にへりが急上昇した!!

<<<や、やった——>>>

「——むん!!」

腹の底に響くような唸り声を上げたのは、へりの真下へと回り込んだボラ。

『大地に向かって垂直に力を込められたなら』そんな格闘者、スポーツマンたちの願いを実現するような『地球拳』ならぬ『地球槍』は俺の放った槍を上回る速度でへりを串刺しにし……。

<<<あ、あら……?>>>

メインローターをシャフトごと粉碎されたへりは真つ逆さまに落下。

ついでに、燃料タンクに引火し、ブルーを飲み込んだまま炎上を遂げた……。

「いきてるかな」

「……これで生きてたら恐ろしいが」

俺とプリカは目を見合わせ……なんだか笑ってしまいそうで、同時に目をそらした。

ともあれ、あらゆる意味で想定していない戦いだっただ、危機は去ったのだ。

戦いが終わり、周りを見渡すと、かなりの大惨事だ。

ミサイルの破片に、機関砲弾の弾痕、極めつけには、燃え盛るへりコプターの残骸。

「散らかしたものだ」

「なに、元から奴らの武器でこの聖地は荒らされていた、息子が助かってよかったよ」

残骸を見て一種の感慨に浸る俺に向け、ボラは慰めのような言葉をかけた。

「……俺達が持ち込んだ災いですよ」

「ソシルミ、息子を助けてくれてありがとう」

元は二人を守るための策だったが、結局、その先で新たな危険を負わせてしまった。

別に気に病むというわけでもないが、それは事実だ。

「ソシルミ、受け取っとけ」

「きみもだ、プリカさん」

「こちらこそ」

……微妙に取り残された。

「分かった、分かった、どういたしまして、ありがとう……ございます」

「感じわるいぞ」

「ミソシルも素直じゃないことがあるんだなあ」

悟空にまで突かれるとは……まあ、いいか。

ボラを助けられたんだ、それでよしとして、今は笑っておこう、朗らかに。

「そのゆうじろうっぽいわらいかた、ふつうにキモいぞ」

……………。

小さく、控えめに腹鳴の音。

「ちちうえ、お腹がすきました」

「む……そう言えば、飯がまだだったな……どうだ、三人とも、一緒に食べるというのは」

続けて、サイヤ人二人の腹が同時に鳴った。

「いいのか!」

「いや……足りないだろ、たぶん」

「蓄えは十分にあるつもりだが……」

「ご馳走にはなりますが、こつちでも用意しますよ、この二人も俺も、とんでもなく食いますから」

「それは見ものだな……ところできみはもしや、このカリン塔に――」

瞬間、俺達の背後、燃え盛るへりより、突き刺さるような殺気……

否、気配!

「ま、まさか!」

「く……くそお……!」

そこには怪我と火傷にまみれ、軍服がビリビリに破れながらも無事へりの残骸から脱出したブルーの姿が!

……いや、本当に生きているとは。

「ほんとうに生きてたのか……」

「悪い!? ……今日の所は引き上げてあげるわ、でもいつか、あなたたちを――」

「――いいとも、傷を癒やし、身を寄せる場所を見つけ、鍛えて

こら」

「ソシルミ!」

「あれで生きてるならいいじゃないか、ダブルジョパデーだ」

「いちじふさいり？ ……わかった、いや、このばで正しいことばじゃないけど」

プリカは引き下がった、だが、残る三人は……。

「あやつは聖地をけがし、息子を人質にとるような卑劣な戦いを行つた、このまま行かすわけには……」

「いいんじゃないかなあ、あいつもう軍には帰れないんだろ？」

「……ちよつと、かわいそうですね」

「おまえまでそう言うのなら……」

こうして、ブルーは最後まで俺達を警戒し、捨て台詞らしき憎まれ口を10回ほど吐いた後、森の向こうの、どこかへと消えた。

聞き慣れたジェットエンジンの動作音。

背後からは食べ尽くした食器のかき鳴らすカチャカチャという接触音。

自動操縦の機体をプリカに任せた俺は、しばし睡眠を取ろうとしていた。

「オレたちのドラゴンボールはまだ先だ、ねるじかんはあるだろうけど……」

「三日間もあんな環境で寝食していたんだ、サイヤ人のお前にとつちやその程度かもしれないが、俺にはこたえた……ちよつとだけな」

「いじをはらなくてもいい、分かったから、ねてろ」

聖地カリンの一件から三日、俺達……二人と悟空は、カリン塔で修行に明け暮れていた。

今は修行を終え、ドラゴンボールを探すためと称し、悟空と二手に分かれて飛行中である。

俺達は顔が割れているし、余計な改変を防ぐためにも、レッドリボン軍基地は悟空だけに任せることにしたのだ。

「しかし、それにしても充実した修行だった……!」

「でも、さいごにカリンさまが言ったことだけは分からなかった」

「アレか」

三日間の訓練の終わりに、カリン様は俺達二人にだけ、意味深な言

葉を残していた。

『おぬしら、もつと自分の心に素直になつてみたらどうじゃ?』

『オレはともかくこいつは素直だぞ』

『どつちも全然素直じゃないの、ま、よく考えておくことじゃ』

……カリン様は俺達の心は読めない、その理由は他人には決して開かせぬ秘密をかかえるためだろう、と言っていた。

しかし、仙猫にもなれば、読めずとも若者が将来何にぶつかるくらい、わかるといふことなのだろう。

「さあな、全く分からん」

「なげだすなよ、多分、これも修行だろ」

「……いや、分からんな、それより、ドラゴンボールに動きはないか?」

「動き?」

プリカが首をひねって聞き返す、俺は分かっていると思っていたんだが……。

「あのドラゴンボール、レッドリボン軍も悟空も持っていない一つは、ピラフ大王が手にする予定のボールだ」

「は!?!」

「落ち着け、俺もあのボールをただ奪い取ろうなんて考えちゃいない、それをすれば、占いババ編がなくなってしまうからな」

ピラフ大王が特殊な遮蔽ケースに隠したドラゴンボールを探してもらうため、占いババが用意した戦士たちと悟空たちが戦う、その歴史を変えてしまえば……俺には特段アメリカットがないが、気分が良くなかった。

「孫悟飯、じいちゃんとのさいかいもなくなるか……」

「それはあんまりだからな、今回は監視にとどめて、ピラフ大王には……いや、待てよ?」

「おい、何を思いついたんだ」

「いや……、これは本当に慎重にならないといけない案件だが……」
「おかしな歴史改変はやめろ、今回だって結構痛い目を——」

その瞬間、大きな揺れとともに、コックピットがアラートに包まれ

た。

俺は目をこすり計器を……見るまでもなく飛び込む、『エンジンからの反応消失』の警告表示！

燃料流出中、火災発生、これは……考えるまでもない、墜落する！！

「メーデーを発信、いや、それより脱出の……」

「ソシルミー！ まどみろ、あっち！」

プリカの体越しに見える窓の向こう、並行して飛行する航空機一つ。尾翼に大きく描かれた『鶴』。

「キャ、キャノピーの上!!」

「——天津飯ツツツ!!」

小型ジェットのカヤノピー上に身を低くして張り付き、こちらに向けてる指は輝き……。

「来るぞ、どどんばだ!!」

「脱出する、忘れ物はないかツツ!」

「きいてるばあいかーっ!!」

俺がレバーを引いた次の瞬間、俺達は下方数十メートルで、乗っていた機体の残骸が降りかかりつつあるのを感じていた。

……厄介なこと以上に、こいつは危険だ。

薄皮の張った脇腹の傷が疼くのを感じながら、俺とプリカはパラシュート無しで地上へと降下してゆくのであった。

↓つづく

第十四話：転生地球人が理不尽にキレるまで

ねえ、秒速5300センチなんだって。

人間が高高度から落下するスピード、秒速5300センチメートル。

「物体が大気中で落下する場合、大抵は落ちきる前に重力加速度と空気抵抗が拮抗した終端速度に達する、この場合は時速190キロ前後といった所だな」

「……バカ！ うえみろうえ！　すぐ天津飯がくるぞ!!」

そこには終端速度の数倍の速度で落下……いや、下に向け飛行する天津飯とチャオズの姿が!!

「もうあそこまで飛べるのかツツ!!」

「うれしそうにしてるばあいか！　どうする!」

「おい待て、俺の策だって無尽蔵じゃ……」

「早くしろ！　もううつぞ!!」

プリカはエネルギーをチャージし始めた、まずい、ここで戦うのはなるべく避けたい……奴に勝っても負けても大惨事だ。

「じゃあどうする!」

「……よし、下に向かってゲロビだ、爆炎に紛れ逃れるツツ!!」

「ゲロビいうな!」

「いいから早くしろ!　間に合わなくなっても知らんぞ!!」

俺がひとしきり急かすと、プリカは嫌々ながらも口にエネルギーを集中させ始めた。

「つがあああああ!!」

「下は荒野、こうでもしなくちゃ撒けないが、爆発で逃げるんなら、被害が小さくて好都合だ」

追いついた天津飯たちが何やらこちらを見て慌てているが、もう遅い。

「お、おい、きさまら何を——」

「ぐっ……があああ!!」

「うわっ……!」

大地を貫く閃光、次いで爆炎！

慣れた俺でも一瞬たじろく気の奔流を前に、俺はプリカをしつかりと抱きとめ、ホールドする。

「な、なんだ!？」

「爆発が来る、俺達が散り散りになつちや元も子もないからな……、さて、プリカ……!？」

君はどこに落ちたい？

小さな二人乗りのジェットは乗り心地こそ良くないが、快速だ。

逃げることや、追うことに都合がいい。

「あの車、ピラフのじゃないか？」

「……そう見えるな」

本来の歴史における二回目のドラゴンボール集めは、レッドリボン軍とのボール争奪戦と、その決戦の最中、レーダーから消失したボールの所在を知るため、格闘好きの占い師、占いババの用意した戦士と試合を行う占いババ編の二つに分けられる。

「とんでもないハードスケジュールだったが、どうにかたどり着いたな」

「わざわざオレたちが来るひつようはなかっただろ」

「まあ、少しやりたいことがあつてな」

その消失した最後のボールは、件のピラフ大王が特殊ケースに隠し持っている。

「……どうやら、この歴史でもそれは変わらないらしい。

「ともかく、これでこの旅は終わりを迎えるわけだ」

「……まだ、あの二人のことはおわってないぞ、どうするんだ」

「それは……どうにかするとも!」

椅子を蹴られつつ、俺は飛行機をピラフの車の前方数十メートルの所に着陸させる。

……すると、焦って急停車した車から、顔を青く……いや、元から青い小さなモンスター型地球人と、犬（獣人ですらない完全な犬に見

えるが、人のような振る舞いをしている！)、それに、若い女が飛び出した。

「なにするんだ！ 危ないだろう!？」

「それにそのちっこい方、なんて格好してるんだ！ 破廉恥だぞ!？」

「ちっこい……おい、プリカ、お前そんなに妙か？」

「い、いや、ちよつとやぶれてるけど……」

……あの爆発によって、俺達の衣服は大分激しく損傷してしまった……が。

結局、天津飯の追撃を完全に振り切ることは出来ず、着替える暇もないまま、古いババの館での戦いを終えた悟空たちと合流し、再び別れることになったのだ。

「確かに、お互い結構ひどい有様だ」

「……そういわれてみると、ちよつと動きにくいな」

そう言っつて、プリカはかなり激しく破れていた足の布をびりびりと引きちぎり始めた。

「な、な、なーっ!」

「ピラフさま! この女ヘンタイです!!」

「い、今頃の子はすすんでるんだな……」

ピラフ一味はしばらく何やら騒いでいたが、ひとしきり騒ぎ終わると、今度はなにやらヒソヒソと話し始めた。

しかし、丸聞こえだ。

「ピラフさま、シユウ、これ、これ!」

「ドラゴンレーダーに六つの……まさか、ドラゴンボールを集めていたのはあのガキじゃなくて……」

「いや、譲り受けたんだ、合意の上でな」

「も、もらえるものなんだ……」

三人そろつてあんぐりと口を開けている、まあ、確かに、人間が抱く欲望をあらかた実現させてくれるようなアイテムを譲るなど、考えにくいことだろう。

「さて、そつちから気付いてくれたなら話が早いな、君達のドラゴン

ボールをくれないか？」

「だ、誰が渡すか！」

「そうだそうだ！」

「ソシルミ、むりそうだぞ、当たり前だけだな」

一戦交えて負けてから奪われるよりはマシンだと思っただが……弱いものいじめのようになるのも気分がよくない。

「シユウ、マイ！ こうなったら……やるぞ！」

「はい、ピラフさま！」

「それい！」

考えているうちにピラフ一味はそれぞれホイホイカップセルから口ポットを出し、乗り込み始めてしまった。

「ふはははは、この新型ピラフマシンで返り討ちにしてドラゴンボールを頂いてくれるわ！」

「これで公正な決闘になったな、存分にぶちのめしてやろう」

「……え？」

「おいソシルミ、ちゃんと手加減しろよ」

ピラフマシン！

それはピラフ調理用のキッチン用具……ではなく、ザ・メイ○ング辺りに出てくるような大量生産用の工業機械……でもなく、ピラフ一味が乗り込み戦う準人型メカである！

……結果的にピラフが焼けるマシンであることは間違いないのだが。

「ピラフさま……こいつらなんか全然こたえてないみたいですよ……っ。」

「そんなわけあるか！ 合体して一気に仕掛けるぞ!!」

「お、さっそくやるのか！」

プリカはなんだか嬉しそうだ、物見遊山気分なのか？

それとも、散々逃げ回り数々の名シーンを見逃してきた身としてはピラフマシンすら嬉しいのか？

三体のピラフマシンがぎこちなく合体する様をまじまじと見るプリカ、正直間が持たない。

「はっはっは！ これできさまらもお終いだ!!」

「覚悟しろ！」

「さ、早くかかってこい、案外楽しいかもしれないからな」

「そんないいかたないだろ、せつかくのメカだぞ」

ピラフマシンはいきり立って俺達に襲い掛かってくる！

最初の一撃は……パンチだ！

遅くて弱いそれを、プリカはゆっくり手を伸ばして掴んだ。

「な、なにいく！」

「やっぱりさつさとカタ付けた方がいいだろこれ」

「な……なめるなよ!!」

「火炎放射器起動！」

ピラフマシンは尻尾から火炎を放射！

輝く手を使うまでもない、ただの回し受けでいい。

「マ・ワ・シ・受け、見事だろ……」

「じぶんで言うなよ」

「なんとということだ……まさかピラフマシンが……!」

「まったく通用しないなんて……!」

「に、逃げましょうピラフさま！」

「馬鹿もん！ ここまで来てそんな無様なことできるかあ！」

合体ピラフマシンは逃げようとするマシンと戦おうとするマシン

で動きが統一できなくなり、終いにはバツタリと倒れた。

勝負ありといったところだが……久々の快勝が、これか。

「すまんソシルミ……ちよつと遊びすぎた」

「なんだ藪から棒に……あ」

プリカが見上げる先には、航空機から飛び降りた2つの影があった。

……またお出しました。

「きさま、ソシルミ！ 今度こそ逃がさんぞ！」

キャノピーが開くとともに浮遊して飛び出した三つ目がかなり立
てる。

後ろからはキョンシーじみた小柄……天津飯とチャオズだった。

「む……おい、そのマシーンに乗った三人……人？ おまえたちは一体何者だ？ どうしてソシルミと共にいる!？」

「わたしはピラフ大王だ!」

「シユウ!」

「マイ!」

天津飯はにつつき俺の傍に現れた訳のわからない三人に対し並々ならぬ苛立ちと疑念を感じているようだった。

「オレは、わが師である鶴仙人さまを裏切り、鶴仙流の得意先であるレッドリボン軍を破壊するのに協力したそのソシルミとプリカを処断しに来た、邪魔立てするなら許さんぞ!」

「へん、知らん名前ばつか並べおつて! おまえたちこそわたしのドラゴンボール集めの邪魔じゃい!」

「そうだそうだ!」

「もういい、きさままらも殺す!」

「ピラフ大王は関係ない! はつきり言つて無関係だ!」

「やめとけて、こいつらなんか殺してもあんまいいことないぞ!」

「やはり仲間か……!」

あ。

「お、おい! きさま、どういうことだ!？」

「逃げろピラフ大王ツツ!」

「は、はあっ……!？」

ピラフがもたもたしている間にも、天津飯とチャオズは指先へとエネルギーを溜めつつある!

「プリカツツ!!」

「もうはじめてる!! があ! ぐあ!!」

……同時にエネルギーを貯め始めたプリカのエネルギー弾が二人を掠め、射撃より一瞬早く、敵の体制を崩した。

ピラフマシンから数メートル離れて着弾した2つのどどん波は地面をめくりあげ、ピラフマシンを更にすっ転ばしながら10メートルほど吹き飛ばした。

「言わんこつちやないツツ!!」

「ふん、あの程度のポンコツに加勢させるつもりだったのか？ 舐められたものだけ」

「ちがうって言うてるのになあ……」

げんなりしているプリカ、だが俺達にはそんなヒマはない。

天津飯達の指先へは再びエネルギーが蓄積し——

「どどん!!」

「どどん!!!」

「チイツツ!!」

どどん波の釣瓶撃ち!

逃亡の中で散々苦しめられてきた技だ、地面を巻き込んだ爆発は回避を困難にする上、敵は空中!

「つつあああ! ソシルミ! どうする!」

「適当に撃ちながら避けとけツツ!」

「ふん、逃げるだけしか出来ないなら、とつと諦めたらどうだ!」

「そうだぞー!」

安い挑発を繰り返す鶴仙流コンビに対し、俺達は徹底的に相手をせず、ひたすら回避を選び続ける。

舞空術すら使えず、片方は気弾技すら使えない、不利は確実……だが、テレフォンパンチのどどん波が当たらないのは、数日前に証明済みだ。

「どうした、ちょっとくらい飛び上がってみせたらどうだ、届く距離だけだぞ?」

「その手にや乗らねえよ、黙って無駄玉撃ってたらどうだ?」

「……減らず口を!」

「よけいなこというなよ!!」

更に連射速度が上がったどどん波が俺達を襲う!

売り言葉に買い言葉、掟破りの逆営業だが、どうやらうまく行ったらしいー!

「どどん! どどん!! どどん!!!」

「フンツツ! シイツツ! ハアツツ! ……ハア!」

更に激しくなる釣瓶撃ちをひたすら避け続ける……全てを完璧に避けられるわけでもなく、少々苦しいが、こちらが苦しいときは敵も苦しい!

俺達の服の破れが激しくなり、擦過傷が増え、無事な地面がなくなる頃には、天津飯たちの息も上がり始めた。

「ハハハツツ!! どうしたツ、ハアツ、ちつとも当たらないなツツ!!」

「はあ……はあ……きさままらこそ、息が上がっているぞ!」

「天さん、二人で殴ればあいつらなんて——」

——食いついた!!

狙い通り、というには泥臭かったが、これでなんとか対等な戦いに……。

そう思った瞬間、聞き慣れない噴射音とともに飛来する飛行物体が一つ!

「ミサイルだと!?!」

「ピ、ピラフ!!」

顔の付いたミサイル、ピラフマシンに搭載されたそれが、天津飯たちに向けて一直線に飛び込んでゆく!

「く、くたばってしまえ!!」

「特に三つ目の方!!」

「馬鹿アツツツ!!」

天津飯が見向きもしないままに放ったどどん波がミサイルを消し飛ばした。

「あ、あわわわわ……」

「ふん、大人しくしていれば死なずに済んだかもしれんものを!」

「天さん!」

「ああ、やってしまおう」

輝きを高めつつある二人の指がピラフマシンに向け——

「——ツツ!!」

「がああつ!!!」

——その瞬間、プリカが猛然と駆け出し、ピラフマシンの前に

飛び出した！

「待てプリカッツ!!」

「ぐああああ!!」

ピラフマシンの射線に割り込んだプリカの体が一瞬光に包まれ、煙を吹きながらその場に力なく落ちた。

「ひ、ひいっ!」

「ふん、やはり重要な仲間だったようだな」

……プリカは倒れたまま動かない。

「ど、どうしてこいつ……」

「優しいのさ、多分な」

関係ないやつが死んでいるのを見逃すことなんて出来っこない。

それは俺と同じ、だが……違う。

「チャオズ、止めを刺してしまえ」

「うん!」

こいつは元の歴史を守りたいはずなのに、俺に付き合って、歴史を捻じ曲げてまで何人もの命を救ってくれた。

何でもかんでも生かそうとするだけの俺と違って、本当に優しいんだ。

「……………プリカ」

プリカは起き上がらない。

……チャオズが、プリカに指を向け、ゆっくりと力を溜めてゆく。プリカを殺すために。

「我アッツツ……………!」

「えっ——」

俺は飛び上がるように駆け出し、傷付いたプリカに向けて降りつつあるチャオズの足を掴み。

「墮ッツツツ!!」

一気に地面に向けて叩きつけた。

「げぼっ……………!」

「チャオズ!!」

俺の手で地面に叩きつけられたチャオズは、プリカと同じで動かな

くなつた。

……俺は何をしている？

「……仲間の心配をしている場合があつたら俺を真似てみたらどうだ」

「ぎ、きさま……よくもチャオズを……」

天津飯は俺を睨み殺さんばかりだが、俺が天津飯に向ける表情も、自分では見たくないほどに歪んでいるのを感じる。

傍らに転がるチャオズは白目を剥いて、小さく痙攣していた。

「ハハハハハハツツ!! 天津飯！ どうしたその顔は、目にカブトムシでも入つたのか!？」

「ぎ、きさまーっ!!」

天津飯の怒りは頂点に達した、師を裏切り、兄弟弟子を虫の息にした俺に対し、本気の憎悪を向けている。

夢にまで見た『Z戦士』に白目まで剥かせても、俺は平気であるのか？

夢にまで見た『Z戦士』にそんな顔を向けられてもなお、俺は。

「シイツツツ!!」

「はっ!!」

滑るように着陸し、そのままの勢いで拳を突きつける天津飯に、俺は『輝く手』の打撃を合わせる。

俺は、全く平気だった。

一切、天津飯の痛みを受け入れる気が湧いてこなかった。

「くっ……!」

「手加減はもう無しだ、逃げも隠れもしない、貴様と決着を付けるツツツ!!」

「ん、こいつ……!」

俺はゆっくりと構えを取る。

本気の構えだ、両手両足を広げ、体全体を前傾し、全神経を敵への攻撃へ向ける。

「ぼ、防御を捨てただと!？」

「必要ない、貴様一人仕留めるだけならばな」

……待てよ？

「いや、仕留めたらまずいか、優秀な武道家だからな、死なせるのは損だ」

「き、きさま一体、何を考えているんだ……？」

「いかん、チャオズもだ」

完全にやり過ぎだ、こんなことをする気はなかった。

こうなるのを防ぐために、これまで必死で逃げ回ってきたはずだ……。

「きさま……まさか、この戦いは本意ではなかったとでも言うつもりじゃないだろうな！」

「もつと、器用にやれると思っていたんだが」

「何を——」

「——アア、ツツツ!!」

右手、輝く手のクロー。

左手、同じく、手刀。

「な……！」

「今のを防ぐか、流石は鶴仙人様の直弟子だな」

バツ字にガードした奴の手についた五本と一本の切傷、そこからダラダラと溢れる血を見て、笑みが湧く。

いかん、これ以上の戦闘をするわけにはいかない、そう思いつつもやめる事ができない。

「ぼ、防御が……」

「防げてるだろ？」

俺は血を払うように指を擦り合わせて、気を紛らわせようとする。

……カリン様に修行を受けた成果が如実に現れていた、元からの健脚は『飛ぶ鳥を落とす勢い』へと、繰り返される塔登りは散々鍛えた指に更に磨きをかけた。

「天津飯、やっぱりお前は強いな」

「何を偉そうにっ!!」

「あいにく、これは『生来』でねツツ!!」

激しく突き込まれる天津飯の拳が持つ力は、俺と同じ程度でしかな

い。

だが、その威力は……純粋な地球人とは異なる身体構造の恩恵で、更に強力だ。

「結局、ここに来てても不利か、ホームだったのに肩身が狭いな!」

「さつきから一体何を言っている!!」

「こつちの話だツツ!!」

ああ、だが、それでも!

止めなくてはならない戦いでも、仲間と、倒すわけにはいかなかった大事な憧れの一人が俺の手で倒れていても!!

「俺は——」

「うおおお!! くたばれえええい!!」

「ぐ……、な、何だ……!?!」

雄叫び、機械音、視界に割り込む炎。

俺とは無関係の方向を向いて体を庇う敵、敵が見せた一瞬の隙!

「……はっ!」

「フンツツツ!!」

思考よりも早く、俺の拳は天津飯の脇腹を射抜いていた。

それは、考えうる限り最高のクリーンヒット、最高のタイミングで突き刺さり……。

「か、は……」

「ぎ、ぎまあみやがれ!」

あっけなく天津飯の意識を彼方へと飛ばし、うづくまる暇も与えず打ち倒した。

……この終幕をもたらした火炎放射の下手人は言うまでもない。

「ピラフ貴様……!」

「こ、こいつはわしを殺すと言ったが……お、おまえは言っていないから……殺さないよな?」

「ピラフさま、様子がおかしいですよ、さつきとズラかり——」

その瞬間、ピラフマシンを一筋の閃光が貫いた。

「——ツツツ!!?」

「フン」

爆炎の中だというのに、やけに通る鼻息の音が、俺を揺さぶる。

「やってくれたな、ソシルミ」

ピンク色の道着に、立派な口ひげ、リボン結びのみつまみ。

傍らに突き刺さった柱。

「ここ数日で随分腕を上げたではないか」

桃白白だ。

↓つづく

第十五話：転生地球人が転生TSサイヤ人の願いを知るまで

桃白白!!

『元の歴史』と呼ぶべきいくつかの歴史で、一度孫悟空を破りながらも結果的に敗北を喫する立場にあった最強の殺し屋！

その身体能力と体捌きは通常の達人を遥かに超えるレベルにあり、エネルギー技であるどんな波も容易に使いこなす猛者だ。

だが、警戒すべきは単純な戦闘能力ではない。

カリン塔での修行を終えた俺にとって、桃白白そのものの戦闘能力は格下と言うほかないが……、武道家として積み重ねてきたであろう数百年と、殺し屋としての20年の経験によつて重ねられた『本気』は脅威に値する。

元から劣勢とあらば兵器の使用をためらわない桃白白が、状況から察するに、俺達の現在の實力を知った上で挑んできているのだ

その脅威度は計り知れないレベルに達している——

「——随分と暴れたな、ソシルミ、プリカ」

「ほとんどは我々ではありませんがね」

猛烈な圧を飛ばす桃白白に相對しながら、俺はちらりと、倒れたままのプリカに意識をやる。

プリカはまだ目覚めない……もしこのまま戦闘に巻き込めば、命は……！

「フン、……おぬしらには支払ってもらわねばならん」

「……！」

「殺し屋としての上客と信用の喪失、賠償金はしめて15億ゼニー、さらにその門弟二人の慰謝料、10億、25億ゼニー、耳を揃えて返せ」

「!？」

「は!？」

「……と、言いたいところだが、なに、そんなことを言いに来たので

はないわ、ほれ、おまえが撒いた『保険』だ、見てみる」

桃白白はホイホイカプセルをこちらに放る。

煙が晴れた地面に転がったのは、頭だった。

「こ、これは……」

サングラス、赤茶けた短髪、一文字に結ばれた口、咬筋（エラ）のはった輪郭、これはまさしく……！

「アーノルド・シュワルツネツ——！！」

「メタリックだ！ メタリック軍曹！！ そう書いてあった！！ よいな！！」

「あ、はい……」

メタリック軍曹。

レッドリボン軍の基地『マッスルタワー』に配備されていたロボツト（人造人間と呼ぶべきか？）だ。

少なくとも元の歴史では、圧倒的な巨躯と人間を上回る頑健性で悟空に食い下がるも、かめはめ波であっけなく破壊されていた。

「おまえの言っていた通りだな、レッドリボン軍はこんなものを……」

桃白白はさらにもう一つホイホイカプセルを投げた。

すると、大量のターミネー……メタリック軍曹の生首が出現する。

「……わんさか作っておった、本部の残骸には新型の設計図もあったぞ？ もう燃やしてしまったがな」

「お手が早い」

「くそまじめな武道少年がわざわざ小賢しい真似をしてまでやりたかったことを見定めたかったのよ」

「それで、ご満足頂けましたか？」

また小さく鼻を鳴らして、桃白白は答えた。

「全部じゃないがの、まあええわい、兄者には話を通しといたが、ノコノコ顔出したらぶっ殺されるかもしれんから気を付けとけ」

「………注意しておきます」

「うむ、わしはこのまぬけ二人を連れて帰る……ああそうそう、本気で殺し屋やる気なら面倒見るぞ、上納金はたんまりいただくがな」

「分かってて言ってるでしょう、暫く血を浴びる予定はありませんよ」

「そりゃあ、残念じゃわい」

桃白白はニヤリと笑って、天津飯とチャオズを彼らが乗ってきた小型機の後部座席に（つまり一つの席に）ねじ込むと、そのまま乗り込んで空の彼方に消えた。

……大分気疲れたが、俺にはまだ仕事が残りと残っている、まずはプリカを救命せねば。

「おい、プリカ、生きてるか？」

もちろん、意識はなくとも、生きていることは見て分かった。

だが……大分重症だ、『気傷』とでも一括すべきか、火傷や擦り傷、切傷のようなダメージは全身にわたって刻まれ、その影響でショック症状まで発生しているようで、顔色もひどい。

……脱臼や小規模な怪我への処置程度なら武術の範疇として学んだが、流石にこれは俺にはどうしようもなかった。

「虎の子だが、仙豆を使うか……」

あの時、カリン様に無理を言っただけ粒だけ仙豆を貰ってきたのだが、早速使う羽目になってしまった。

外傷と体力の消耗に対しては無類の効果を発揮する仙豆なら、この大けがも跡を残さず治るだろう。

さすがに、こんな大量の傷がそのまま跡になってはかわいそうだし、仕方がない。

「意識がない相手に仙豆を飲ますには……三つ手段があるな」

水で流し込む：水はあるが、そもそも可能なのか？

指でねじ込む：一番安全に思える策だ、首の骨が破壊されていても通用する

口移し　　：論外

「よし、ねじ込もう」

右手人差し指と中指で仙豆をつまみ、左手で口を開けさせる。

わずかに苦しそうな顔をするがそれは見ないふりをして、仙豆を舌の向こうに配置、そのまま中指でぐーっと押し込んでゆく。

プリカは意識がないまま顔をさらに歪めるが、救命措置であるため無視、仙豆が押し戻されないようにしたまま、声帯（男ならのどぼとけだ）のあたりをぐつと押し込み……。

「ぐぼっ!! がぶっ!!」

「~~~~~ツツツ!!」

噛まれた!!

そしてその一瞬後には、俺は腹部を蹴り上げられ……すんでの所で回避に成功した。

「げっほ、げっほ!! あ、あが……!?!」

「うまくいったか!」

プリカの肌にあった傷跡の数々はなく、全身の血色も元に戻っている。

異常と言えば、俺の指がねじ込まれた喉くらいのものだろう、よかった。

「プリカ、無事治療は成功したようだな」

「ひ、ちりよう……? せんづ、仙豆か?」

プリカは喉を抑え、若干よだれを垂らしながらこつちを向いた、うむ、意識も正常に回復したようだ。

「そうだ、あまりに酷かったからな」

「……天津飯とチャオズはどうなったんだ」

「あの後俺はキレちまって、奴らをぶちのめした……その後、桃白白が来て、連れて行った」

「桃白白……あれがきいたんだな、でも、たおすのはナシだったはずだ」

いつものジト目より少し厳しいプリカの追求の目だが、しばらく耐えていると、収まってしまった。

「なんだか元気がない。」

「ああ、そうだプリカ、お前、やっぱり足破りすぎだ」

「ん……?」

プリカは、自分の格好を改めて見て俺の発言を確かめようとしているようだ。

……『匿名希望選手』風のノースリーブのカンフー服は、足部分がなくなったことで、そのままチャイナドレスへと変貌を遂げていた。

「う、うわあつ!!」

「これじゃピラフでなくても一言言いたくなるのも仕方あるまい、向こうでジャージに……」

「……ピラフ!」

「あー!」

急いで確認したピラフマシンは大きく破損し、内部のピラフ一味もかなりの重傷を負っている!

俺達は着替えも何もかもほっぽり出してピラフマシンをさらに砕き、内部のピラフたちを救出した。

……一番軽傷なのは上部にいたピラフ、次にシユウ、一番ひどいのはマイだ。

「とりあえずピラフを起こす、仙豆はなくてもいいだろう、水のホイポイカプセルをよこせ」

「あ、ああ」

「目を覚ませ、この水流でーツ!!」

大量の水を叩きつけると、ピラフは無事(?)目を覚ました。

目を覚ましたピラフが行ったことはまず状況確認、周囲を見渡し……俺達をスルー……壊れたピラフマシンもスルー、そして、自分の子分二人が隣に横たわっているのに気付いて、叫ぶ。

「シユ、シユウ!! マイ!! お、おまえたちい!!!」

ピラフは救急セットか何かを探そうと自らの車を探すが……その車は戦闘中にどどん波で爆破され、完全に見る影もない。

「あ、あわわ……」

「おい、ピラフ、手を出せ」

「な……なんじゃきさま……ま、豆?」

「仙豆だ、一人一粒、どんな怪我でも治す力がある」

俺が親指でプリカを指してやると、ピラフ大王はその持ち前の頭脳で事態を把握したようで、血相を変えて俺に躍りかかってきた。

「それをよこせ!」

「くれてやると言っているんだ、早くしないと死ぬぞ」

「う、うおお！ シュウ！ マイ!! 今助けるからなあ!!」

体格相応の甲高い声で叫びながら、なんとか部下に仙豆を飲ませようとするピラフ大王。

それを見物していると、プリカは特に文句を言うでもなく、小さくつぶやいた。

「これで三つ、仙豆はそんなにもらってないよな」

「まあな、カリン様がケチってより、有事でもないのにふんだくった俺達が悪いんだが……」

プリカは特に、責めている気配もない。

「なんだ、元気がないな」

「……ちよつとつかれただけだ、おまえらしいよ、すぐに仙豆をあげるなんて」

「俺も鬼ではないのさ」

……正直に言っつて、俺はあの暴れの違和感がまだ心のどこかに残っていた。

だからこそ、あえて寛大になってみせて、いつもの……何でもかんでも生かそうとする俺に戻りたかったのかもしれない。

「ピ、ピラフさま！ これはいったい……!」

「おおー！ シュウ！ 早くマイも治療するぞ!!」

「ど……どういうことですか!?!」

そうこうしている間に、ピラフ大王はシュウを復活させ、次いでマイにも仙豆を飲み込ませていた。

二人して口移しするか悩んで体をくねらせている、キモい。

「さて、ピラフ大王、無事で済んでよかったなあ」

「ああー!」

「いやあ、俺は全く、感動してしまったよ、まさかドラゴンボールと引き換えにでも、俺の使っていた万能薬を欲しがるなんて!」

「……え?」

『ドラゴンボールも世界征服の野望もいつかは叶う、しかし、優秀な臣下をみすみす死なせたとあっては、たとえドラゴンボールに復活

を願おうとも、その罪をあがなうことはできないだろう、第一、わたし自身がわたしを許せなくなる』だったか？ さすがは大王を名乗るだけある、メシヤキ族も最後にこんな王を持って幸福だろう」

「そ……そうなんですか!？」

「ピラフさま……そんなにわたしたちのことを……!」

ピラフ大王は顔面蒼白になり(元から青いが)、俺を驚きの目で見つめてくる。

「い、いや、わたしは……」

「素晴らしいことだが、約束は約束だ、このドラゴンボールは俺が頂いたよ、次はあんな邪魔が入らず、公正な争奪戦ができるとうれしいものだね」

そう言いながら、ピラフマシンから抜き取ったドラゴンボールをかかげる。

ピラフ大王はそれを見て歯噛みしながらも、俺への恩と恐怖、そしてせっかくなしい雰囲気になっている子分に水をさしてしまうことへの恐れとが重なり合って、動けないまま、俺がドラゴンボールをしまい込むのを見送った。

「さて、これにて一件落着……と、言いたいところだけど、ピラフ大王、ちよつといいかな」

「な、なんじゃい!」

「後でちよつと話がある、すぐにどっかに行ったりしないでくれ」

「言われんでも乗り物がないわい……」

ピラフはそういつて大破した車とピラフマシンを交互に見た。

もしかして、あれらとこのドラゴンボールがやつらの最後の財産だったのか？

カンカンと金槌が金属を叩き、キュリキュリとネジとネジ穴が擦れ合う音が続く。

ピラフは俺が飛行機の工具箱から貸してやった道具を巧みに使つて、見事にピラフマシンのサンコイチ(イツコイチか?)修理を進めていた。

「流星はピラフ大王、見事なもんだ」

「すごいうでだ、自分がつくったきかいとはいえ、ああもかんたんに組み合わせて、新しいものをつくってる、たぶん、もうピラフの中にはせっけいずがあるんだろう」

プリカは俺以上に驚いているようだ。

「ネジの大きさも、多分さいしょからませやすいようにそろえてあるんだろう、でも、それでせいのが下がったりはしてないはずだ」

「大分、マシンに詳しいな」

「ま、まあな」

少し恥ずかしげに目を逸したプリカは、すぐに作業の見物に戻った。

早く着替えに行け、と言ってやるべきか？

そうこうしているうちに、ピラフマシンはガシガシと両足を動かした、起動テストのようだ。

「見ろ、あしもうでも左右でちがうのに、なめらかに動いてる、でんしせいぎよがすごいのか、たつた今ちようせいしてるのかも分からないけど、どつちにしてもピラフのぎじゅつはすごいぞ」

「……随分楽しそうだな」

「オレは……その……、鳥山メカがすきだったんだ、それに、自分でもメカをいじってた」

「前世は工学畑だった、というわけか……」

「アラレちゃんも、ドラゴンボールも、ドラゴンクエストも、クロノトリガーもすきだった」

いつもの思い出話だ。

そう思った俺が、また自分の身の上話でもしようかと思った、その時。

「なあ、ソシルミ」

「何だ？」

「オレはしようじき言って、ちきゆうじんの男にもどりたいんだ」

「……はっ」

わざわざ弱い地球人の……男。

男!?

「くくくくッッッ!」

「う、うわっ、なんだよ!」

「お前、男だったのか!」

「は!」

今度驚いたのはプリカだった。

いや、驚きたいのはあくまでもこっちだ!

「前世男で、今は女!」

「そ、そうだよ、……さて、今まで、言っていなかったか? 言っていない、きづくくらい……」

「サイヤ人の種族特性でアマゾネスぎみの……『オレ女』……かと」

「おまえ……あのデリカシーのかけらもないけど、オレが女だと思っただけ……?」

……。

「戦闘民族サイヤ人はそんなことでイチイチ恥ずかしがったりしないと思っただけ!」

「してただろ!」

「……思えば、結構」

「こっちはちっこいこの体で天然ボケのハンマユージローもどきとおっかなびつくりくらしてたつてのに……!」

「酷い言い草だ、全部事実だが」

——俺がそう言って会話を区切ると、プリカも俺と張り合うのをやめ、こっちに向き直って真剣な表情を作った。

「オレはちきゆうじんにもどって、西の都あたりで平和にくらしたい……ドラゴンボールをくれ、ソシルミ」

「まさか、お前がそんな事を願っているとは……」

プリカはずっと俺と一緒に戦い、その戦いを楽しみ、戦果に一喜一憂してきた。

俺はプリカを仲間として、ライバルとして、共に戦う戦士として、そして……。

「オレにボールをくれ、ソシルミ、じさつしようって言ってるんじゃない」

ない、ただ、戻りたいんだ、いいだろ？」

「……プリカ」

↓つづく

第十六話：転生地球人が才能を誇るまで

「プリカ……お前は、ずっと嫌だったのか？ 武道家として戦うのも、俺とこうして旅をするのも」

8ヶ月の時と、幾度かの死線を共にし、拳で語り合った戦友、プリカ。

俺はずっとこいつを根っからの女だと思い込んできたし、サイヤ人として扱ってきた、俺が英雄漢であるのと同じように。

俺が、範馬であるのと同じように。

「いやだった、わけじゃない」

「なら、性別だけ直せばいい、そうじゃないのか……？」

「ちがう!!」

プリカが声を張り上げる、小さい体に全く見合わない、気が弱い人間や獣なら気絶でもしてしまいそうな大声だ。

あまりの大声にピラフ一味が驚き、マシンごと倒れたのを見てプリカはトーンを下げた。

「オレは、地球人になりたい、サイヤ人ではだめなんだ」

「何が駄目なんだ、言っちゃなんだが、サイヤ人が地球人に劣っている点なんて何一つない、あつたとして、十二分にカバーできるだろう」

「サイヤ人のままじゃ、戦いはやめられない、オレは……メカをやりたい」

「……前世と同じように」

「もつとだ、この世界ならもつとすごいことだってできる、ピラフやブルマほどのてんさいじゃないけど、それでも……」

サイヤ人の力、戦いへの適性、それが自らの夢の障害になる、ならば……そんなものは無い方がいい。

プリカは本気で、そう思っているようだった。

そんなはずはない、力があって、より健康なサイヤ人は科学研究にだって向いているはずだ。

俺がそう言おうとした時……空の彼方から、更なる来訪者が現れた。

「……ブルマたちか？」

「いや、あれは……見覚えがある、ウチの、タンドール王国の国有機だ」

「ウチ？」

ぐんぐんとこちらに近づいてきた機体は、荒れ果てた地面の状況を見て数度躊躇を見せた後、思い切った様子で、比較的無事な地面……俺達の目の前に着陸した。

「う、うわっ!？」

「お、おお!!」

強引な着陸に驚くプリカ、喜ぶ俺。

その違いは、俺はその機体の中にいた人物の正体を知り、プリカにとつてはいつでもよかつたことが原因つた。

機体から飛び降りる影、俺より20センチほども大きく色黒で、光加減によつてはその目を見ることすらできないほど堀の深い男！

「ラパータツツ!!」

「お久しぶりです、先輩!!」

「いやあ、ずいぶんデカくなつたなあ!!」

ラパータ！

それは、『タンドール王国』、俺の出身国でありチャパ王が治める国の名と同じく、元の歴史を知るプリカですら知らない名前だ。

……それもそのはず、ラパータは一介の門下生であり、俺の道場時代の後輩なのだから。

「先輩もお強くなられたようで、みんな、話を聞いて頑張ってますよ!!」

「そうか！ いずれ一度顔を見せる、楽しみだ！」

「師匠がまた先輩とみんなを比べてバカにしたときはヒヤつとしましたけどね……」

「またやったのかあの人……、まったく、わざとやってるんだか、クセなんだか、大事に思ってるのは確かなんだから素直にしてやればよいものを」

盛り上がる俺達をよそに、プリカはポカンとしている、というか、突

然盛り上がり始めた俺を見て驚いているようだった。

「プリカ、紹介しよう、こいつはラパータ、俺の弟弟子だ、見ての通りとんでもなくデカくていかついが、優しいやつでな」

「先輩！ 初対面の人にそういうのはやめてくださいよー！」

「あ、ああ、よろしく……？ オレはプリカ、ソシルミとはしばらくいっしょにしゅぎょうしてた」

紹介を終え、積もる話に花を咲かせようかと思っていた俺だが、まだラパータの要件を聞いていないことを思い出した。

「そうだ、ラパータも何か用事があるんだよな、というか、どうしてここが？」

「それが、お師匠さまから使いを仰せつかりまして……」

ラパータは懐からドラゴンレーダーを取り出して見せた。

「……師匠もそれ貰ってたのか」

「はい、師匠の伝言をお伝えします、『わたしの知己が治める国が恐ろしい敵に襲われている、ラパータに地図を持たせるから、向かって助けてやってくれ、ドラゴンボール制覇おめでとう』……だそうです」

「恐ろしい敵……師匠がわざわざ伝えてくるということは、俺達でなければ立ち向かえないということか」

「そうではないかと……」

「師匠の頼みで、人命がかかっているとあらば見過ごせん、すぐに向かおう」

俺が地図を受け取ると、プリカは少しだけ迷う様子を見せた後、俺と同行する覚悟を決めたようだった。

だが、それなら、俺はここを離れる前に、一つだけラパータに頼み事をすることになる。

「ラパータ、頼み事がある、あそこの顔が青いのはメシヤキ族という滅んだ一族の王子なんだ、保護してやってほしい」

「保護……道場にですか」

「そうだ、話は通してないが……まあ、お前が口数少なくにじり寄ってやれば従うだろう」

「それ、保護じゃなくて拘束じゃないですか……」

「はっはっは」

どちらかという気弱な部類に入るラパータは、自分の容姿と強さを利用して人を拘束するのに拒否感を抱いているようだ……が。

「彼等を抑えておくことは彼等自身にとつても、我々にとつても必要だ、頼む」

「……はあ、分かりました」

まあ、ラパータなら悪いようにはしないだろう。

そうプリカに言い含めて、俺達は一路、地図に記された国に向かうのであった……。

薄暗い、神殿と洞穴を組み合わせたような穴ぐらの中、俺はいくつものきらめきに囲まれていた。

きらめきは、槍であり、剣であり、そして、我が戦友の放つ光である。

「ツアアツツ!!」

「つがああ!!」

俺の蹴撃が腹にめり込んだ敵は力なく倒れ込む。

プリカの爆撃の風圧を浴びた敵はなすすべなく吹き飛び、倒れ込んでゆく。

「おい、お前は俺の不殺に付き合わなくてもいいんだぞ」

「はあ……はあ……オレがやりたくてやってるんだ!!」

次いで、プリカはつとめてゆっくりとしたパンチを敵に叩きつけ、その意識を奪った。

……俺達が相手にしている『敵』、それは魔族だ。

「たたんじまえ!!」

「シユラさまのジャマをするやつは許さねえ!!」

この国に、はるか昔から存在する『魔界の門』、本来はそうそう開くことのないはずのそれがあある時から開きっぱなしになり、それ以来、毎夜魔族たちが侵入してくるようになった。

それは、魔界の武道家にして有力者、シユラによる地上への侵略……否、挑戦である。

王はたまらず、各国に救援要請を出し……唯一応じる事ができたのが、俺達だった。

「ぐがあ!!」

「ダアツ!」

門を越えて襲い来る魔族を叩き伏せ、逆に門に侵入してからはや数十分、だが、俺達の間で交わされる会話はほとんどなく、さっきのやり取りが一番長かった程。

理由は分かっている、ギスギスしているのだ。

「キリがないな、どうする、閉所でゲロビをぶつ放すわけにもいくまいが!」

「ぜんぶなぐつてたおせばいい」

「……投げやりだな、だが、やってもいいツツ!」

同時に、しかし別の方向に駆け出した俺達は、それぞれの場所で魔族を叩き始めた。

矢を避け、払い、剣を折り、槍を掴んで逆に振り回す。

そして、武器を失った魔族のドテツ腹なり、脳天なりに一撃を叩き込んで意識を奪い、後は運を天に任せるのだ。

「こ、こいつら強えっ!」

「シユラさまは来られないのか!」

「どうした、元気がねえなあ魔族ども、一方的な分捕りじやなきやあそんなもんかツツツ!」

「てめえ!!」

こいつらの習性、身体的特徴は、その知性が全体的に高いことを除けばほとんどルシフェル配下の魔族と変わらない。

宇宙からやってきたあいつらと地上のこいつらが変わらないというのも、不思議な話だが……。

「……があ! ……はあ、はあ ……つだあ!!」

「プリカめ、荒れてやがる」

遠目に見えるプリカの姿は、普段の気持ちよさそうにエネルギーをばらまく姿と違って、どこことなく苦しそうに見える。

というか、苛ついているのだ。

「何度も言うがこれは俺の趣味だ、付き合わなくてもいい!!」
「うるさい!!」

……知性ある魔族はなるべく殺さない、門を閉じれば戦わなくていい、俺は戦い始める前にそう言った、言ってしまった。

結果、プリカは意地を張っているのか、それに追従し、しかも、無理に手加減をしているものだからフラストレーションを溜め始めている。

一方で、それを言い出した俺は気楽なものだ、なぜなら――

「へっへっへ、よそ見していいのか……へれ?」

「よそ見はお前だったな、『いつちよ上がり』だ、間抜けめ」

――楽しいのだ、手加減した攻撃を叩き込んで敵を無力化し、全力を振るい一つも敵を殺さない手段を模索し、時には、技術を用いて敵の意識を奪う、その過程と結果そのものが。

今も、360度回した腕の先で3体の魔族の脳を揺らし、仕留め、悦に浸っている。

「こ、こいつ強え!」

「先にあのアマからやるぞ!!」

「馬鹿めツツ!!」

俺はプリカの方に向かおうとした魔族の後頭部を小突き、なじる。はつきり言ってプリカは今、俺より強い、実力を発揮出来ていなかろうと、戦う姿を見れば肌で感じるのだ。

その一方、初めて会った時から増した心の余裕は同情心を養い……2つの成長が衝突してしまっているのは、傍目にも、明らかだった。

「蛇^ダツツツ!!」

「ぶげえーっ!!」

「く……くそ……! シュラさま、いや、メラさまとゴラさまさえ来てくだされば……!」

さつきから、魔族どもはしきりに首魁である『シュラ』、そして2つの知らない名前を呟いている。

俺達がいい加減疑問に思い始めるころ、魔族の群れがザッと裂け、向こうから二人の影が現れた。

「待て、きさまら、通行証を持たぬものが門を出入りすることは許さん!!」

その人影の一つ、半裸に兜の出で立ちで、棍を携え、青みがかつた男が叫んだ。

体高は目測で4メートルほどの大男、どう見ても魔族だった。

「現在、お前たちと俺達は戦闘状態にある、一般の法は適用されん!!」

「この法は神と閻魔、魔界のお偉方が決めたもの、通行証も神か閻魔が発行する、きさまの勝手になるものではないわ!!」

「では、このあらくれ共はその通行証を持っているのか!？」

「ぐぬ……!」

俺の反論を前に青色の男……ゴラは押し黙り、続いて、もうひとり
の女、普通の背格好に、ピンク色の肌と髪色が目立つ女……メラが言う。

「下がらなければ痛い目を見てもらうことになる!」

「下がるわけにはいかん、我々は助けを請われてここに来たのだ!!」
俺がそう一蹴すると、青い巨漢、ゴラがいきり立ち、こちらに棍を振りかぶって――

「――ごが!!」

「が……うぐ……!？」

みぞおちに『飛来』したプリカの正拳突きによって、うめきながら
仰向けに転がる。

……この時点で、俺は完全にこいつらの正体を思い出していた。

アニメオリジナル回の登場人物、魔界の門番、メラとゴラ。

魔界にさらわれた姫を助けるために侵入した悟空を引き止めるも、
シユラを倒すという目的の一致によって協力することになる……そんな
な役回りの二人だ。

「ゴ、ゴラ!？」

「……俺達はシユラを打倒し、魔界の門の勝手な通交を止めるため
に来た、戦闘は本意ではない」

「イヤミかソシルミ」

「今のは示威行為の部類に入る……ということにしておこうか」
なんとも締まらない。

「俺はソシルミ、こいつはプリカ、王の依頼によって、シユラを打倒し、門を封印するためにやってきた」

「……本当にシユラさまを倒すつもり？」

「何も殺すわけじゃない、『呪い』を解くには打倒するだけでいい、そうだろうか？」

「そこまで知ってるとはね……、いいわ、付いてきなさい」

「メラさま!？」

踵を返し、俺達を誘導することにしたメラ、それに驚きながらも手を出せないゴラ……と、その他魔族たち。

魔族の階級社会を垣間見る事ができ、非常に興味深いと言えるが……俺達は文字通り、魔物の巢へと入り込むことになった。

燃え盛る篝火、松明、石造りのおどろおどろしい建築物、武舞台、そして、君主の座すべき玉座。

魔族たちが住まう魔界の行政府はそのような有様だった……武舞台が中心地にあるとは、よほどの武術狂いと見える。

「ほう……きさまが」

「その通りだ、シユラ、門を開放……いや、閉鎖しろ、俺達は種族間戦争などやりたくない」

シユラ、魔族たちに共通する尖った耳に、青みがかった肌、道着を着込んだその姿は、まさしく魔界の武道家だ。

有力者にして武道家、武道家にして有力者である奴は、魔界と地上との間に存在する『門』に呪いをかけた、それを解く条件こそが――

「――ならば、わたしを倒すことだ、あの呪いはわたし自身でも解くことはできないが、どんな手段でも、どの程度でも、わたしを打倒すればたちどころに解かれる」

「決闘の申し込みか？」

「武道家だろうか？ まさか集団戦で決着をつけようなどと言い出す

つもりでもあるまい」

「分かった、受けようじゃないか」

「おい、ソシルミ！」

「この魔族ぶどきに囲まれた所で痛くも痒くもない……が、それでは完全に魔界との全面戦争になってしまう。

「地上に兵士を差し向けておきながら、人を傷つけさせず略奪だけで済ませておいたのは、武道家を招き寄せ、こうして戦うためだったんだろう？」

「その通り、きさまも目的は同じようだな！」

「……いや、殺し合いを避けるなど、単なる戦う理由付けにしかならないだろう。」

「どちらか、武舞台に上がれ、きさまらが勝てば大人しく兵を引き、奪った物も返してやろう、残っている分だけだがな」

「俺がやる」

「……オレがやったほうがしようさんは高いんじゃないのか？」

強敵と戦う機会をこの俺が逃すはずもない。

「……今まさに相棒が捨てようとしている優位性、それを実際に捨ててしまう前に、なんとしてでも上回るため、悔いを残さぬため……俺にはそのチャンスが欲しいのだ。」

「俺がやりたいのさ」

「わかった、見てる、かってにしろ」

「どうやら、決まったようだな」

俺達は眼下に広がる丸い武舞台へとそれぞれ飛び降り、相対した。周りを見渡せば、首領の戦いを見ようと集まってきた大小様々な魔族どもが俺達を囲み、酒やら何やらをかつくらっている。

「こいつら、ちゃんと文明があるんだ」

「試合をするためだけに統制の取れた軍事作戦を行うとは、文明的なんだか野蛮なんだか、分かったもんじゃないがな」

とはいえ、二人の心はここにきて一つになった。

迂闊に殺さなくてよかった……と、もちろん、こんな手段で収めることが出来ないなら、殺し合いもやむなしな事態ではあるのだが。

「それはそれ、これはこれ、さあ、試合を楽しむとするか……よろしくお願いします」

俺は眼前のシユラに、合掌礼をする。

シユラは道着をはだけ、ネット状の下着が見えた状態である、奇しくも、両者、偏袒右肩だ。

シユラもまた一礼をし……次の瞬間には、互いの蹴撃が交差した！

「ムンツツツ!!」

「ふはっ！」

期待通り、とでも言いたげに笑うシユラ、威力は互角……だが、奴には俺の持たぬ手がある！

奴は俺から離れるや否や、ゆっくりと座禅を組み――

「――ういたっ!?!」

「シユラさまは呪術の天才、試合中に浮くくらい当然よ」

メラはさも当然であるかのように言うが、試合中に浮かれたら溜まったものじゃない。

天内悠の例を再び挙げるまでもなく、浮いている奴とは戦いにくい、踏ん張りも足さばきもクソもない、浮いてしまっているのだから、完全に自由な足を、こちらの自由な場所に叩き込む事ができる。

「……また舞空術か、厄介なものだ」

「よもや、卑怯とは言うまいな」

「まさかツツ!!」

魔族らしくニタリと笑うシユラに、同じく、範馬らしくニンマリと笑い返す。

相手が何を使おうと知ったこっちゃやない、武術の舞台に何を持ち込もうと知ったこっちゃやない、そこには相手を必ず倒すという意味と、自らの抱く誇りがあるだけだ！

「トアツツツ!!」

「あ、あれは……分裂?!」

俺の残像拳を見て驚くゴラに、メラは自らも驚きながらも説明してやる。

「残像だ、今も使える人間がいるとはな」

！
浮遊には自由の力があるように、接地にはフットワークの力がある
そう考えて放った残像拳を前にしても、シユラは落ち着き払ったま
まだ。

「ツツツ!!! ツアツツツ!!」

「ム!! フン!!」

ある時は死角から、ある時は正面から放たれる油断を許さぬ連続攻
撃、だが、シユラはこの俺の攻撃を受けつつも、巧みにダメージを抑
えてゆく。

しかし、この程度で余裕を保てるなどと、甘い考えを持つシユラで
も、それを許す俺でもないはずだ。

「むん!!!」

そう思っていると、シユラは掌に力を蓄え、それを塗りつけるよう
に両腕に広げ――

「まず――ツツ!!」

「はあっ!!」

衝撃波!

全身を襲うそれを前に、俺は体を屈めて防御を敷く、残像拳のフツ
トワークなどは完全に消し飛び、その瞬間!

「ふん!」

「くくくくツツツ!!!」

胸部に打撃、否、『掌から直接放たれ、防御を貫通した衝撃』!!

「ツカ、……カハ……!」

「ソシルミ!!」

「その程度で止まるタマか、来い!!」

「………応ツツ!!」

周囲からは俺達の姿がかき消えて見えただであらう。

俺は残像拳の勢いをそのままにシユラに向け打拳を叩き込み、シユ
ラはそれを受け、数メートルも瞬間的に飛び退いた。

「……ふん、効いているのはフリだけか」

「化け物や異星人と一緒にするな、俺はただの人間だぞ」

「ただの人間にそんな力があるか、はあ!!」

再びの衝撃波!

俺は戦いが全力のスパートに入ること確信し、『輝く手』を衝撃に向けてかぎす——その瞬間だった。

「くっ!!」

「きやあつ!!」

「ぐえーっ!!」

シユラ、そして周囲の魔族どもが一斉に悲鳴を挙げる。

「お、おい、メラ、ゴラ、なにが起きたんだ!?!」

……プリカは事態を飲み込めないようだったが、俺には、たった今何が起きたのか、はつきりと分かった。

「そうか、魔族は強い光を嫌う……!」

「きさま、ソシルミ!!」

「なんだ、シユラ」

「よもやきさま、卑怯とは言うまいな」

シユラはこちらをまつすぐ見据え、叫ぶほど強く、しかし、ゆつくりと問いかけた。

俺は答える。

「……まさか」

俺は笑って、シユラも笑う。

そして再び、シユラは浮かび、俺の手は光りだした。

「さあ、続きだツツツ!!」

「オウ!!」

俺の輝く抜き手を、奴は衝撃を纏わせた腕で弾く。

一合で分かる、輝く手の光は、奴の目を眩ませるところか、光への sensitivity によって俺の攻撃を受ける助けとしているのだ。

「簡単に弱点でマイっちまうようじゃ、武道家とは呼べんわな!」

「その通り!!」

——ただ、撃ち合う、全身全霊で。

たったこれだけのこと、道場ではいつもやっていたはずの普通の……戦いが、今や、はるか遠くの、貴重なものであるように感じられる。

だが、このレベルですら、俺にとっては……。

「クッ……！」

「どうした、こんなものではないだろう!!」

プリカには今、力で引き離されている、技では勝っているが、いつまで続くか知れたものではない。

そして目の前の敵、シユラもまた……。

「やっちまえー！」

「よっしやー！」

魔族どもが囁し立てる、そうだ、俺は押されている、力で互角であろうとも、身体構造そのものが違うのだ。

俺の戦力の伸びは悟空とプリカ……サイヤ人に及ばない、タフネス、頑健性で言えば、地球人以外のすべての種族に劣ると言ってもいい、サイヤ人はたやすく限界を越え、先に進んでいくのだろう。

だって、オラは人間だから。

そんな台詞が、脳裏をかすめた。

「……どうした、ソシルミ、そんなものか？」

「そう見えるかッッ!!」

少し前までは乾坤一擲であった、そして、今は安定して攻防に用いることができる『輝く手』は、結局、目の前の敵が持つ『衝撃』の技、そして感知能力と拮抗し、その力を発揮できずにいる。

「グウ……！」

「地上の戦士がここまでのレベルに達しているとはな、だが、それももう終わりだ！」

「ソシルミ!!」

追い詰められた俺に、プリカが叫んだ。

「おまえはどんな敵でも、どたんばで、すごいわざで倒してきた!!」

そうだよな、地球人でも、若くても!!」

「プリカ……」

「きさまらも地上人らしく、ああいう馴れ合いをするんだな」

「……馴れ合いではない」

道場を飛び出してから……いや、プリカと出会ってから、俺は何回

有利な戦いを経験してきた？

数えるほどもない、出会った時のプリカすら、俺の手には余っていた、ルシフェルも、悟空も、亀仙人も、鶴仙流の二人も、俺にとっては皆、手に余る強敵だ。

俺にはもつたいたい程の、強敵だった!!

「きさま、構えを……」

「ああいうのは、信頼と呼ぶんだぜ」

腰を低く落とし、半身に構える。

左腕を胴体を庇う形で曲げ、肩は持ち上げ、顎の守備に回す。

右腕は発射体制、ガッツポーズに近い形に曲げ上げた、その構えは。

「ばき……」

「範馬だからって勇次郎気取る意味はねえさ、俺は刃牙でもいいし、ジャックだっていい、最高だ」

「なんだ、そっちの流派の話なら、後で……」

「いや、もう済んだ、言いたかったただけだ、さあ、続きをやろう、シユラ」

——サイヤ人が限界を超えるなら、俺は奇跡を起こしてやる。はんま
俺の腕も、足も、一切は光らず、ただ自然体のように構える俺を、シユラは見つめ……。

ゆっくりと、迎撃の構えを取った。

「ソシルミ!!」

「シユラツツ!!」

俺達は極めて、ゆっくりと、互いに向け近づく。

俺は新たな技を使うため……そして、シユラはそれを受けるため。そして、互いの影が重なるその瞬間——

「——ツツツツ!!!」

「しっつ!!!」

限界を超えて加速された俺の拳が、シユラに迫る。

その刹那、互いに交差する意思。

打拳の威力が足りない、速度だけはあっても、これでは意味がないだろう？

そう問うシユラに、笑み、いや……笑みを形にすら出来ない刹那の中、意思のみで笑いかけ……。

閃光が、空間を包み込んだ。

「め……目があ……い！」

「バカ、あんな光るやつは戦いなんてまつすぐ見るからだ！」

ボクシングは地面を蹴る格闘技なんだ。

そう、この構えの主である範馬刃牙は言った。

ある者は足から力が現れるといい、ある者は丹田から現れると言う、ある者は力など幻想であり、勁こそ全てと言う。

「……ぐ」

「シユラさま!!」

「シユラ!!」

防御を掻い潜り……否、防御が為される直前に叩き込まれた拳によって、シユラの体がゆっくりと武舞台に沈む。

……どのように言語化を図ろうと、武道家のやることは一つ、拳を最大に加速し、最後の瞬間、その激突の威力を敵に押し付ける、ただ、それだけだ。

シユラは仰向けのまま、呻くように呟く。

「……あの光に回す力を全て体の武術に必要な部分のみに回し、強化したのか」

「そうだ、足から順に力の集中点をずらし、拳に到達した瞬間に炸裂させた」

新たな技、これまで、かすかな片鱗しか見えなかった技を、俺は土壇場で創り、形にしてみせた。

俺が名乗る範馬、それは、最強を得てもなお飽きたらぬ、進化への渴望を抱き続ける血液。

正真正銘最強であった『あの世界』ではなく、『この世界』、弱小種族の若輩である俺がそれを持っているのならば……それはどんな頑健性より、気の高まりより優れた才なのだ。

「あの男、そんな技を……」

「試合の中じゃ、使う気配さえ見せなかつたのに！」

「それがソシルミだ、オレも前、ああやってやられたよ」
プリカは何やら嬉しそうにしている、試合相手自慢はいつだって楽しいのだ。

魔族たちは首魁の敗北に恐怖するもの、試合に興奮するもの、首魁の敗北が気に入らないものでそれぞれ三分の一ずつと言ったところか。

「……ありがとうございます」

俺が合掌礼をすると、シユラもまた、無言で礼をした。

まさか、魔族の狼藉を鎮圧に来て、こころも清々しい試合が行えるとは。

「あれから8ヶ月、腕を上げたとはいえ、聞きしに勝る強さだな、アエ・ソシルミ」

「アエは要らない、捨てた名だ……いや待て、俺はそこまで名乗った覚えは……」

「……魔神城を破壊し、ルシフェルを打倒した男、正直、きみが来てくれるとは……期待以上だった」

↓つづく

第十七話：転生地球人と転生TSサイヤ人が願いを叶えるまで

『ルシフェルを倒した』、目の前の魔族は、たしかに俺をそう称した。……思えば、特段強く混乱すべき事態ではない、魔族同士なのだ、何らかのネットワークや監視があってもおかしくは、ない。

「確かに、『俺達』が奴の野望をくじいた……魔族であるお前達からすれば、忌むべきことかもしれないがな」

「われら魔族の者と奴らとは太古の昔に別れた存在、方針も違えば、今更かける情けもない」

とんでもない爆弾発言だが、今騒いでどうにかなるようなものではない、俺たちは黙って、続く言葉に耳を傾ける。

「もののついでだ、一つだけ言わせてもらおう……おまえたちはメシヤキ族の末裔を飼おうとしているらしいな」

「ピラフ大王のことか、奴は危険な天才科学者だからな、保護が必要だ」

シユラは一瞬、『カマトトぶりやがって』とでも言いたげに唇を歪めてみせた。

「やつはかの『片割れ』の所在を知る者、何をしでかすか分かったものではない、ゆめゆめ用心を怠るな」

「シユラさま!!!」

ついにゴラだけではなく、メラまでもが声を張り上げると、シユラはようやく、潮時を感じたようだった。

「さて、そろそろお暇させてもらおうか」

「おいおい、一晩くらい泊まっていけばいいのに」

「魔界の一晩の長さを知らんからな」

「地上と同じだよ、……ま、正直に言えばもう荷は用意して、すぐにも発てるようにしてある」

シユラがわざとらしく腕を降ると、軍装の魔族たちがどんどん荷車を引いて地上方面に出発してゆく。

「シユラ、また戦おう」

「ソシルミ、いずれ機会は来るよ」

この、天井知らずに強さの上がつていく世界、違う種族の俺達。再会できる保証も、再会した時、実力が伯仲している保証もなく。それでも、俺達は確かに、再戦の約束を交わしたのだ。

俺達は、一抹の不安、変わりゆく、否、すでに変わってしまったこの世界への恐れを抱きながらも、あの国を去り、やっと家に戻っていた。

……天下一武道会から今まで、一週間足らず、だが……何もかもみな懐かしい。

俺の家、俺達の家、8ヶ月暮らした、ホイポイカプセルの仮宿……。
「思えば、8ヶ月間も互いの事を全く知らないまま暮らしてきたんだな」

「……見て見ぬふりをしてきただけじゃないか？」

「確かに、俺はお前の才能に酔いしれ、お前と自分を鍛え上げることだけに夢中だった、いずれ来る戦いの日に備えてな」

「オレはあのとき、まだ戦う気はなかったんだけどな」

視線が刺さる、少しくらい浸つてもいいじゃないか。

「お前は別に死ぬってわけじゃない、友人としては、今後ともよろしく頼む」

俺はそう言つて、あえて少し出し抜けに、ドラゴンボールを入れた包みを、プリカに差し出した。

「……いいのか？」

「ああいいとも」

わざと調子を外してみせたのは、それ以上何を言えばいいのか分からなかったから、辛かったからだ。

……それでもドラゴンボールを渡したのは、最後にプリカを超え直せたと思ったから、そして、友人の真摯な願いを、これ以上拒みたくはなかったからだ。

「わかった、なんでくれたのかはわからないけど、おまえがくれるっ

てなら、もらうよ」

かくして、人気のない広野の真っ只中にて、神龍召喚の儀式が行われるのであった。

「いでよシエンロン！　そしてねがいをかなえたまえ!!」

ぶわっと腕を広げたプリカが叫ぶ、割とノリノリだ。

ドラゴンボールはその叫びに答えて強く輝くと、エネルギーのようなものと同時に、龍の体を吹き出した！

「お、おお……!」

「いかにもご利益がありそうだ」

空中でとぐろを巻いた赤目の東洋龍が、こちらを睨めつける。

神龍!!

あらゆる人間の望みを聞き、『神より強い力の持ち主に干渉する』こと、『同じ願いを二度叶える』こと以外ならばほぼなんでも成してみせる、神の龍！

「さあ、願いを言え、どんな願いでも一つだけ叶えてやろう……」

「プリカ」

「……ああ」

俺はプリカを促す。

野人同然の生活を営むプリカを見つけたあの日から、今日まで。

修行に明け暮れた日々、天下一武道会、ボラの命を救うために駆け抜けた数日間の戦い。

その全てが、今では懐かしく思える。

「どうした、願いはまだか」

俺が物思いにふけっていると、神龍が困惑の声を上げた、願いを言うべきプリカが、何やら悩み込んでいるのだ。

「おい、プリカ、神龍が困っている」

「………なあ、ソシルミ」

「なんだ」

「いや、ちょっといったん、ねがいはほりゆうにできないかな」

プリカは気恥ずかしそうに頭を掻き、ここ数日分の葛藤を何もかも

無にするような一言を放った。

「ここに来てかア……!」

「……すまん、やっぱ、まだ、このままやってみたい」

何らかの理由で心変わりして、今はこの体が嫌ではなくなった、ということなのか？

「オレにもよくわからん、でも、今戦うのがいやじゃないなら、もうそれでいい……これでもいいか？」

「いいか、つてもなあ、お前の願いじゃないか、お前が決めればいい」「そうだよなあ……」

俺の戦いをもう一度見て、何か思うところでもあったのだろうか。そう思っていると、上空から響き渡る声。

「お、おい……願いはまだか……?」

まさか、『神龍放置』を俺達がやらかしてしまおうとは……!

「す、すまん! っつかいもどつてくれ!!」

「わかった……次はちゃんと願いを決めてから呼び出してくれ……」

——と、こんなわけで僕の初めてのドラゴンボール体験はクソミソな結果に終わったのでした……。

俺の龍玉を見てくれ、コイツをどう思う。

すごく……じいちゃんの形見です。

ということ、神龍を見送った俺達はまず、四星球を悟空に返そうとした……が。

亀仙人にあたってみても、悟空はもう新たな旅に出してしまったの一点張りだ、まあ追う程のことでもないのだが。

さて、そうなる次につきべきことは、ラパータに拉致させたピラフの始末を付けることである。

「シユラはピラフ大王が『片割れ』の場所を知っていると聞いていたな、これは恐らく、ピッコロ大魔王のことだろう」

「地球のかみさまの、悪の心がぶんりしたのが、ピッコロだいまおう、だったよな」

「……そこからか？ いや、俺が言いたいののは、シユラがピッコロ大魔王の顛末と、ピラフ大王のことを知ってるのは不思議だつてことだ」

「元のれきしと、まぞくとか、ちがうものがしつかりまざりあって、このれきしが出来てるつてことか」

よく分からないけど、みたいな口ぶりのくせに理解度が高い。

「そうだ、最早この歴史は元の歴史とは言い難い……だから、俺はもう、変えてしまってもいいと思う」

「何を、かえるんだ？」

「ピッコロ大魔王が暴れば万単位どころじゃない死者が出る、俺はそれを防ぎたい……ピラフを抑え、ピッコロの封印を永遠のものとする」

「……本気、か」

問いかけるというよりは、俺の『本気』を悟り、どう対応すべきか測りかねている、といった様子だ。

「やることはこの間と変わらん、人死にを防ぎ、その分、俺達が奔走する」

「しあいでおまえが言ったみたいに、オレたちでちゃんとたおせば……」

「ピッコロ大魔王と地球の神の命はリンクしている、元の歴史ではピッコロが死に際にすべてを受け継いだ子を産卵することで事なきを得たが……作戦として選ぶには不確定すぎる」

神、そして神が作り出したドラゴンボールを失うのはこの星の未来にとつてかなり致命的だし……第一、神も一人の命、勝手に犠牲にするわけにはいかない。

そのようなリスクを孕んだ不確実な手段に頼らずピッコロ大魔王による被害を防ぎたいのなら、手っ取り早く確実な手段は封印を盤石のものにすることだろう。

それはピラフ大王を抑えることで達成できる。

「……わかった、オレも……それでいい」

「じゃあ、ピラフ大王は俺が丸め込もう、なるべく、穩便に済ませた

い」

あの会話から数時間後、俺は懐かしきタンドール王国の王宮へとやってきていた。

細長くしたピラミッド、あるいは多段の五重塔のような石造りの建築物群に、似つかわしくない物々しげな兵器やカプセルコーポレーション印の半球建築物が散らばっている。

まさしくインドのカオスの様相を呈する王宮の片隅、厳重警戒の区画に、ピラフ大王が軟禁されている家があった。

「よう、ピラフ大王、調子はどうだ」

「げえーっ！ きさまはあの時の!!」

「そうだ、あの時の男、ソシルミだ」

外から見れば作りは急ごしらえに見えたが、中は素晴らしい豪邸だ。

調度品も上々、がなりたてるピラフ大王達も肌ツヤよく、服装もころなしかリッチに見える。

「お、おまえ何しに来たんだ!!」

「三人とも、そういきり立つのはよしてくれ、俺はただ、いい提案をしに来たんだ」

「わしたちをこんな所に閉じ込めといてよくそんなことを言うな！」

「だが、あの頃より良い暮らしをしているじゃないか」

「ぐ、わしだって故郷に居た頃はなあ……!」

故郷、メシヤキ族……ルシフェルの一派に滅ぼされたという国。

ピラフ大王の世界征服は、その国が健在だった時に父が抱いた野望らしいが……。

「その故郷、自分の国を、自分の力で立ち上げてみないか？」

「な、なんじゃと!？」

「師匠……チャパ王陛下には俺から話を通す、タンドール王国の食客としてその腕を振るい、財力とコネクション、技術力を蓄え、折を見て旗揚げするのだ」

「そんなことが出来るのか!？」
食いついた!

部下二人は『信頼できないですよこんなやつ!』とか『でも追い出されるよりいいかも……』とかいかにも子分らしいことを言っているが、これはトップ会谈なのだ。

「お前が望めば出来るとも……男一代の野望なのだから、自分の力でやってみたくはないか?」

「わ、わしは……」

「だが、一つだけ、俺から言っておきたいこともある」

その瞬間、友好的な雰囲気をあえて消し去り、俺は最高の宿敵、あるいは最悪の好敵手を睨むものと同じ目、同じ気合を、三人にぶつける。

「海底に眠る魔王に手を出すな、奴はお前の手には負えない、誰の手にも負えない、世界が滅ぶだけだ」

「ひい……!」

「きやつ……!」

「クウン……」

……瞬間、溢れ出るアンモニア臭3つを、嗅がないふりする慈悲が俺にもあった。

「師匠には伝えておく、後はお前達次第だ、強制するようで悪いが……元より敵同士なんだから、勘弁してくれ」

震えるピラフ大王たちを捨て置き、俺はタンドール王国を去った。アメもムチもやったのだ、これで改心、いや、『おかしな手段』に頼らない世界征服を志してくれればいいのだが……。

なにせ、ピラフ一味のやらかす失敗は文字通りケタが違うからな。

再び帰ってきた我が簡易住宅。

夕方に差し掛かる頃、飯が炊けるのを待つ俺とプリカは机の片側に並んで座り、大学ノートを前に語り合っていた。

「と、いうことで、文字全体についてはともかくとして、数字そのものは一般的なアラビア数字と変わらない、位取り記数法ってやつだな」

「デシマル……10しんすうか、分かりやすいのはいいけど、あんちよくだな」

「五本指二本腕の種族が開発したってことだと思うが、流石に俺もこの文字の起源は知らん」

俺達が一体何の話をしているのかというと、この世界の文字について講釈、授業をしているのだ。

「文字と言葉がたくさんあるのにほとんど全部かざりで、ふつうに使われるのはほんごっぽい言葉とアルファベットくらい……どうなってるんだ？」

「俺も知らんと言っただろう」

プリカと再び暮らし始めた俺達の生活には、これまで通りの『飯食って鍛錬して飯食って鍛錬して飯食って風呂入って寝る』のルーチンに、『勉強』が追加されていた。

というのも、工学をやりたいプリカはまず文字やこの世界の常識なんかを学ばねばならないが、流石に何もかもジュニアスクール向け教材で学ぶのも嫌だし、こんな辺鄙な場所に教師を呼ぶわけにもいかない……ということで俺が面倒を見ることになったのだ。

「8年ずつとしゆぎようしてたとか言うわりに勉強できるんだな」

「俺は一応、師匠の後継者として見込まれてたりするからな」

「……なんかくやしーい」

「戦鬪馬鹿は頭がいいと相場が決まっているのさ」

自分で言うなよとばかりのジト目……うむ、中身が男と分かっていてもかわいいものはかわいい。

というか、本人は馴染んでいないと言っていたものの、12、3年（実際の年齢は分からない）も暮らしていればそれなりの振る舞いも身についてくるものだ。

『それ』に慣れないということかもしれないが。

「まあ、宇宙のどこでも使える言葉なんて、神かドラゴンボール以外の原因はそうそうないだろう」

「……それならむしろちいきやしゆぞくごとに言葉もあるってのがふしぎだけど……サイヤ語もあるのかな」

「城攻めのすぐ後、買い出しのついでにお前が乗ってきたポッドを見分したが、その文字は俺にも分かったぞ」

「あれ、けつきよくどうしたんだ？」

俺は普段使いのカバンを広げ、一つのポイポイカプセルを取り出して見せる。

そして、家の外に向けて投げ出した。

「持ってきたのか」

「捨てておくわけにもいかないだろう？」

それもそうか、と合点の言った様子のプリカとともに、庭に出したポッドを見る。

ポッド、いわゆる『一人用のポッド』、他には『アタックボール』と呼ばれることもある一人用の丸形宇宙船だ。

俺はプリカと共にポッドの前に立ち、別に保管していたリモコンを使ってハッチを開け閉めしてみせる。

「ほとんど認証もなく簡単な操作で開いたり閉じたり出来る、多分、その気になればこのままどこか別の星に行けるぞ、このまま出発した場合、到着地は惑星ベジータ跡地だろうがな」

「……この大きさでこうせいかんこうこう、それにれいとうすいみんが出来るとて思うと、やっぱりすごいな」

「一体何で動いているのやら、ブルーオーラムか？」

「なんだそれ」

銅と同じタンク係数を持つ宇宙の金属……と言っても伝わらないだろう、実際それで動いているのかも知らん。

銀河パトロールジャコでは宇宙の主要なエネルギー装置がそれで動いているという設定だった……はずだ。

「そういや、お前はスカウターを船内に放置していたな、使う気はなかったのか？」

「もじも分からないのにスカウターをいじってもろくなことにならないだろ」

「スカウターは盗聴の危険性もある、使わないのは正解だった」

と、前置きした上で、俺にはまだ言うべきことがある。

「だから、文字が分かるようになったからと言って、迂闊に触るんじゃないぞ」

「わかる?」

「さっきまで勉強していた文字、あれは宇宙じゃ大々的に通用している文字だ、フリーザ軍も使っている」

「……おまえ、そういうのは先に言え!」

「サプライズというやつだ、ははは」

あれこれ駄弁りながらポッドの中を検分する、久々に異星テクノロジーに触れるプリカの表情は真剣そのもの……鍛錬の時よりも真剣だ。

プリカもなんだかんだ言って、文字が少し分かるのが嬉しいらしく、内部の文字をなぞっては笑みを浮かべている。

「読める……読めるぞ……!」

「かっつにアフレコすんな」

むっとした様子のプリカがこちらを向くのと同時に、船内のあちこちが光り始めた。

「うわっ! な、なんかスイッチ押したか……?」

「いいや?」

その直後、機械音声が小さな船内に響いた。

《プリカ、生年——フリーザ軍隷下：惑星ベジータ王軍所属兵士、兵種：飛ばし子》

「オ、オレのことか……?」

《肯定する、星の制圧が完了したならば、惑星ベジータへの帰還を……》

「待て、まだ星の制圧は完了していない、それより、コンピューター、現在を地球の太陽暦で750年——月——日とし、おっと、12月刻みで各月の日数は……としたとき、プリカの生年月日はいつだ」

「おい、ソシルミ……?」

戯れに近い俺の呼びかけに、船はわざとらしくチカチカと点滅し、ビーブ音を鳴らす。

ほんの一秒にも満たない思考時間の後、コンピューターは答えをはじき出した。

《閏日を四年に一度として概算し、737年——月——日、現在満12歳》

「結構、コンピューター、電源オフ」

俺が命じると、ポッドは速やかに電源を落とし、ハッチも眠るように閉まっていった。

この日付は……。

「……数日後か」

「いや、なんでわざわざあんなこと……」

「聞けたら嬉しいじゃないか、これで誕生祝いだって出来る」

「する意味あるのか……?」

「もちろんあるとも! 師匠に連絡してパーティーを開き、お前の誕生日を祝ってやるツツ!!」

プリカは気恥ずかしい……というよりは困惑した表情で俺を見上げた。

かくして、プリカの13回目の誕生日、そして恐らくは初めての誕生日パーティーが決定したのである。

「ハッピーバースデートゥーユー! ハッピーバースデートゥーユー!!」

ひたすらに明るく、しかし野太い声の大合唱。

ハッピーバースデートゥーユーはこの世界でも相変わらず誕生日を祝うのに定番の曲だ!

「ハッピーバースデー……ディア、プリカ!!」

「ハッピーバースデーツツ!!」

「……あ、ありがとう」

10人と少しの会場が異様な熱気と拍手に包まれと、やたらと大きいケーキに突き刺さった無駄に豪華なろうそく13本の火が次々とプリカによって吹き消されていく。

周りを見渡せば、プリカに師匠、ラパータと先輩数人、それに炊事

役のおばちゃん、更にピラフ一味が満面の笑みで祝っていた。

「おめでとうプリカちゃん！ ま、あたしやあんたのことなんも知らないけどね！」

「そ、それはご法度ですよローティさん！」

「硬いぞラパーター！」

師匠がガンガンとラパーターの背中を叩く、人体同士がぶつかり合っているとは思えない音だ。

テーブルの反対側を見れば、プリカが先輩（俺が時折『高弟』と括っていた人達だ）に絡まれている。

「プリカちゃん！ 天下一武道会じゃソシルミと大接戦をやらかしたんだってな!!」

「どうだ！」「オレたちと！」「試合してくれないか!!」

「オレたちからの誕生祝いだ！」

武器術の達人チャルク先輩に、双子の兄弟ケララ先輩に、パタラ先輩が気色の悪いマッスルポーズでプリカに迫る。

「い……いや、オレはいいです、そういうのはソシルミと……」

「もうやって散々な目にあつた！」

「見ろ！」「ボロボロだ！」

先輩たちの顔はあざだらけ、全身は擦り傷だらけ。

当然、やったのは俺である、道場に帰るなり襲われたので仕方ない。

「ソシルミ以外の弟子はみんなこのざまだ、わしは弟子選びに失敗したのかもしれない……！」

「師匠またツツ!!」

「まあまあチャパ、その辺にしとこうじゃないか」

またしても愚弄を始めた師匠と止めにかかる俺の間に挟まり、非常に馴れ馴れしく仲裁に入ったのは、なんとピラフ大王だった。

「しかしだな、ピラフよ……」

「おまえはちよつと部下を急かしすぎるんじゃない、こういうのはもつとだな……」

「また始まった……」

「ピラフさま、結局王様と仲良くなっちゃいましたね」

そういうことなのだ。

どうにも、師匠とピラフ大王は王者同士何やら気が合ったらしく、ピラフ大王のテクノロジーを軍備や民生に活かすための事業のために日夜走り回っているという。

「ま、これで『あの』心配はなくなったってことでいいだろう」

「これだけまんぞくしてて、ぶちこわしにするようなやつらじゃないか……」

ピッコロ大魔王の復活を防ぐ、俺達、いや、俺が腹案として抱えていたその計画はもはや完全に達成された。

同時に、俺は腹にどすんと来るような緊張感を覚える……変わってしまった歴史に、自分の手で止めを刺した感触だ。

プリカも隣で、じわりと冷や汗を流した。

「おい、ところでソシルミ、プリカ、ドラゴンボールの使いみちは決まったのか?」

「ドラゴンボールならプリカにやったんですが、こいつ土壇場で使いたくないって言い出しまして」

「ソシルミは返すと言ってもうけとらないし、悟空に返そうにもどこにいるのかわからないし……」

「……ぐぬぬ」

最後のはピラフ大王が恨めしそうに呻く音だ、まだ未練があるらしい。

プリカはそんなピラフを見て、思い出したかのように話しかけ始めた

「ピラフ、おまえ、この国でけっこういろいろやってるんだってな、ちよつと聞かせてくれ」

「企業秘密だ!」

「ピラフ、そう言わずに教えてやってくれ、誕生日プレゼントの代わりでも思ってたな」

「チャパが言うなら仕方ない……よし、祝いに聞かせてやろう」

……ピラフとプリカの話は専門用語が多すぎて俺には理解できない、俺はただのオタクであって技術者じゃないのだ。

まあ、大半はプリカも理解できていないようだが。

「ソシルミー！」「プリカちゃんには知られてしまった！」「久しぶりにやろう！」

「ま、まだやるんですか!? さっきやられたばっかじゃないですか!!」

「なに、ラパータ、試合と不意打ちは別腹だ」

「というか先輩方も俺も、やりたいだけだが。」

俺はわざとらしくゆっくり立ち上がり、先輩達を睥睨する、ついでにラパータの腕を掴む。

「え……」

「お前も来い、久々に揉んでやる」

「あ……ああ!!」

先輩と一緒にラパータを引きずって修練場へ向かうと、道中でどんだんパーティー未参加の連中が集まり、終いには大行列が出来上がっていた。

ある先輩は俺を憎み、ある先輩は俺を愛し、後輩たちも同じだった、その全てが、俺を叩き伏せようと目をぎらつかせている。

「これじゃあ誰の誕生祝いだか分からねえが……いい日にや祭りが付き物だツツツ!! 全員まとめて来いツツツ!!!」

いい汗を流した、ついでに血も流したが、流させた血の方が何倍も多いからよしとしておこう。

……チャルク先輩が剣を持ち出してくるのは予想外だったがな。

俺がひとつ風呂まで浴びて帰ってくると、ケーキ含め料理は食らい付くされ……一皿だけ残っていた。

「なんだ、食わんのか」

「……いや、たべる」

残されていたのは、丁度『プリカちゃん誕生日おめでとう』のチョコプレートプレートが付いたピース、プリカ本人に与えられた部分だった。

食欲が無いのかと思えば、料理の方は道場の大食らい共がヒク程

食っている、しかし……浮かない顔だ。

「理由を聞いてもいいか？」

「なんだ、おまえにしては気を使うな」

「誕生日会だったのに、当の本人がケーキを食わないんだ、これで気を使わずなんとする」

「……ちよつと、こつちこい」

そう言うとプリカは俺の手を引き、部屋の隅に引っ張っていく。

隅に付くと、チラチラと辺りを見渡してからひそひそ話のように俺の頭を近づけさせた。

「あのな、たんじょうびって言っても、オレは、ただ産まれて、地球にとばされただけだ」

「愛されてないから、誕生日も意味ない、つてことか」

「そこまでは……いや、そうだな」

プリカは小さく目を伏せた。

……確かに、もつともな悩みだ。

「なあプリカ、俺は『アエ』という名字を捨てた……いや、捨てられた、だから今じゃ名乗っていない」

「おまえもすてられたのは同じだった？」

「違う……俺はアエの家捨てられたが、それでも、範馬とか、別の名字を名乗っちゃいない、つてことだ」

「たしかに……そうだな」

プリカはとりあえず暗い雰囲気捨ててみせ、興味深げにこちらを覗く。

「……別に転生がなくてもこの俺は捨てられていただろう、異常な才能のある子供だったからな……でも、それでも俺は祝福されて生み出されたんだ、その事実を捨てる気はない」

「おまえはそうかもしれないけど、オレは……」

「飛ばし子だからか？」

「ああ」

「それも違うと思うがな、本来、お前の年じゃ飛ばし子なんてありえないんだ」

プリカは目を丸くした、赤ん坊が送り込まれるんじゃないのか、と言いたげだ。

「本来は言葉をすっかり覚え、侵略行為が可能になってから送る、お前は話を聞くと3歳程度だろうか？」

「……まさか」

「おそろくな、お前は悟空……カカロットと同じ、滅びゆく惑星ベジータから逃された子供だ」

間違いなく愛されていた、言外にそう伝えたと、プリカは黙りこくって、うつむいた。

「だから、今日はお前が産まれた日だ、俺も、お前が産まれてきた事を祝う、間違いなく俺にとつても、祝うべき日だからな」

「おまえ、自分がなにいつてるのかわかってるのか？」

プリカがこころなしか震える声で言う。

……笑いをこらえてやがるツツ!!

「いや、すまん……ちよつと、さすがに……!」

「俺がたまに良いこと言ってみればこれか!」

「ぶっ……はははは!」

「笑うな~~~~!!」

とは言いつつ、俺も笑い始め……俺達はひとしきり笑って。

それから席に戻り、プリカはすっかりケーキを平らげた。

「プリカが何か思いつめていたが、それはもういいのか？」

「済みましたよ、ま、こいつも孤児ですから、思う所あるんでしよう」

「本人のめのまえで言うなよ」

「そうか……、プリカ、来年も、再来年もここで誕生日を祝おう、ここはソシルミの家みたいなものだ、だから、おまえの家でもある!」
いやそのりくつはおかしい。

二人の心が一つになったのを感じたが、師匠の言葉は確かに手放しで賛同したくもある。

「らいねんか……」

「ここがプリカの家かはともかく、俺も、誕生日くらいはちゃんと来ますよ」

「ふふ、いつそ、来年はこちらから出向いてもいいな……まだホイポイカプセルの家に住んどののか？」

「あまり不満はないので」

「いかな、放浪なら放浪、定住なら定住、しつかり腰を据えてこそ、鍛錬にも身が入るといふものだ」

俺と師匠がそのまましばらく駄弁っていると、プリカが突然、俺の肩を叩いてきた。

「なあ、ドラゴンボール、たんじょういわいってことでさ、使っちゃっていいか？」

「元からやると言っただろう、何を願う気だ？」

「それがな——」

神の龍が再び天を衝いて現れる。

全能なる神龍に対し、願いたいことはいくつもあるが、今の願いはたった一つ。

「にしのみやこに家をくれ！ 大きくて、オレたちがなんばいも強くなっても使えるしゆぎようばと、こうさくせつびとじつけんしせつのととのったごうていだ!!」

「たやすいことだ……」

シエンロンの目が赤く、一瞬だけ輝く。

「願いは叶えてやった……家の鍵を受け取れ、では、さらばだ」

神龍は俺達の目の前に箱を落とした、プリカはそれを拾い……そのままジャンプして四星球を回収する。

これで悟空への義理は果たせたといいだろう。

「……は……」

「中身は……家の鍵と住所、それに権利書だな」

書類をよく見てみれば、不動産税が掛からないよう、特段の配慮までしてくれているらしい……楽な願いへの配慮だろうか、単にサービスがいいのか……。

一度待たせたというのに、律儀なことだ、ありがたい。

「じゃあまず、この家をたたまないとな」

「向こうには庭があるみたいだし、カプセルにして運べばいいさ」
誕生日を来年も祝う、再来年も祝う、これからも暮らしていくため
に……プリカは家を願った。

「さあ、行こうじゃないか、我が家に」

全能なる神龍に願うにはあまりに大それた願いかもしれない、だ
が、俺達が今願うにはもってこいの、切実な願いだ。

「とりあえずの目標は三年後の天下一武道会、悟空も天津飯も、お前
も……全員食ってやる」

「負ける気はないぞ、オレもほんきでやる」

「……嬉しいな、これほど嬉しい日はそんなにない」

「なんだ、きゆうに」

プリカは茶化すように笑い、俺はいつものものにやけ面を作った。

↓つづく

第十八話：転生地球人と転生TSサイヤ人が再び天下 一をめぐすまで

見上げる程の巨体に見合わぬ超高速の拳が俺を狙う。

「セアツツツ!!」

俺を狙う拳を手刀でいなし、肩で腕を弾き、『つかむ』。

肩と首で掴むことで自由になった腕は敵の腕を握り、その関節をあ
らぬ方向に――

「――ツツツ!!」

手応えなし、敵は強靱な腕のしなりで俺の関節技をはねのけた。

その『安直な力づく』に応報してやろう、そう思った瞬間、もう片
腕だけを捻った打撃が俺の胴体に……。

「ツアツツ!!」

……腕ジャブだけよりなお早く、俺の脚が奴に突き刺さる。

「傷一つなし、か、なるほどな」

俺の蹴り、本気ではないにしろ、尋常の武道家が喰らえば文字通り
真つ二つ、否、それ以上となる威力のハイキックを持ってしても、敵
の体、ボディには傷一つ付かない。

「ダメージ、ナシ」

「皆まで言うな、お前の仕留め方は、ちゃんと考えてやるから」

――俺が相対していたのは、ロボットだ。

鋼の鎧に身を包んだ、全高3メートルほどの、丸みを帯びた人型ロ
ボットが、俺の敵だった。

「ガガ、マツサツ!」

「……怒る機能なんて積んであるのか?」

「コンビネーション”ツ”、シドウ!!」

「ウオツツ!」

格闘戦を続けるロボットの腕から、次々と弾丸とレーザー光線が乱
射される!

「こりゃあ剣呑なツツ!!」

突然の奇襲にすんでのところに対応し、弾丸を逸し、レーザーを躲すが……ほんの数本だけ髪の毛が飛んだ。

『あの頃』より黒さを増した赤茶の髪は、あのあこがれの範馬勇次郎に似たものになったと言える。

背丈も、185センチと、あの冒険の頃から、15センチも伸びていた。

「な、るほど……ツツ!!」

「マツサツ!!」

「あんまり好きな言葉じゃないが、お前の動き、いや……『作り』は、見切ったツツ!!」

俺はロボに向けて突撃し、向けられた銃口、腕を軽く掴み、ひねる。敵の関節は柔軟であり、簡単に曲げたくらいじゃ壊れない”ことは既に感覚でも推測でも分かっている”、が、これが何より有効なこともまた、俺は直感していた。

「トアアツツツ!!」

軽くひねり、『真つ直ぐ』にした腕を蹴飛ばす!

すると、奴のボディと腕は見事にめり込み合い、その隙間から火花と炎が散った。

「マツサ………ガピッ」

「……さて、こんなもんか」

この広く、頑丈な部屋はロボットの流れ弾にも、ロボットの炎上にもびくともしない。

だが、そんな上等な部屋をも揺らすものが、次の瞬間、飛び込んできた。

「うわあああああ!! 鉄人拳七号くくく!!!」

「うるさいぞプリカ! 戦わせたんだから壊されて当然だろうがツツ!!」

少しボサついた髪、ジャージ……ではなく作業着に包まれた体はあの頃より少しだけ大きく、それでも、涙目の顔はほとんどあの頃のまままだ（俺の顔は体と同じくゴツくなった）。

プリカは声変わりの来ない高い声で更に叫ぶ!

「そ、それでも少しは手加減とかあるだろ!!」

「なら搭載兵器も手加減しろ! あれじゃ完全に殺人装置だ!!」

ここは、いつぞや神龍に願った我が家の地下格闘訓練室、戦っていたのは、プリカが作った格闘ロボだ。

ピラフやポッド、それに残骸を漁って手に入れたレッドリボン軍の技術をうんうん言いながら吸収した甲斐あって、凄まじい戦闘力を誇る……まあ、一般人標準での話だが。

「ぐう……!」

「……それよりいいのか、残骸が燃えてるぞ」

「うわああああっ!!」

プリカは残骸に突撃して助け出そうとし……それ自体が燃えているので当然うまく行かない、完全に気が転倒している。

「どけッツ!!」

「あ、消火器……」

化学実験用の多用途消火器を持ち出した俺が、そのから騒ぎにケリを付けたわけだが……。

プリカは怒り、騒ぎ疲れたのか、今度は落ち込み始めてしまった。

「オレの鉄人拳七号……」

「次はもつと強い天使のようなロボットに生まれてこいよ……待ってるからな……俺ももつともつと腕を上げて……」

蹴られた。

「七号は六号の反省で関節の動きが持つサスペンション機能を高めた機体だったのに……」

「柔軟に曲がる一方で、動きのブレは異様は小さかったからな、軸線を合わせて叩けば潰せるんじゃないかと、やったら出来た」

「……じゃあ、動作性を過信して関節そのもののショックアブソーバーを減らしたのが原因か、でも、そこを強化すると今度はスパー스가――」

プリカは何やらぶつくさどと呟きながら、俺に工具類と清掃用具を持ってくるよう命令する。

またやぶ蛇になるのも嫌なので素直に従ってやると、今度は小さく

礼を言って、消火剤を拭き取りながら、機体の分解を始めた。

「……………ブラックボックスは多分無事だな……………真水……………は要らないか、泡消火だし……………」

作業中のプリカは独り言が多い（それはお互い様だが）、それに、相変わらず、鍛錬の時より真剣だ。

それはシャクだが、真面目なのはいいことだ、今回はあつさりど撃破されたこのロボットも、進歩し続けられればいずれ戦闘や鍛錬に役立つ日が来るだろう。

俺は休憩がてら、しばし作業を眺めて……………それから、格闘訓練室の壁に付いたボタンを押した。

その途端、SF映画のように壁が開き、ガシヤガシヤと音を立てて鍛錬器具の数々が姿を表す。

我が家の訓練室はなんでも揃っている。

言葉尻を取られるまでもなく、本当に、既存の武術鍛錬に使うようなものはなんでも揃っているのだ。

「万国の武器が真剣と木剣で取り揃えられ、俺達が蹴つても壊れないサンドバッグに木人椿、無尽蔵の巻藁に瓦……………いたれりつくせりだ」

「実験室の方も、買ったら何億じゃきかない機械がスペアパーツ付きで……………そろそろしてたぞ」

「流石だな、神の龍は」

「……………使い方としては、めっちゃくだらないと思うけどな」

俺は訓練室を回る、回っているだけで楽しいが、使えばもつと楽しい。

格闘技術において、当てる学ぶという事は極めて重要だ、それが出来る、出来ないの差は天と地程に大きい……………はずなのだが、一箇所鍛錬が足りない程度のデイスアドバンテージ、すぐに潰してしまうのがこの世界の武道家だ。

それは俺にとって恐れであり、安心でもある。

「シツツ!! ダアツツ!!」

はつきりと言ってしまったえば、俺はまだ、舞空術を会得していない。

「なんでおまえはかめはめ波とか、舞空術とか練習しないんだっけ？」

「まだ無くてもやれるからな、地上戦が主流の今のうちにやれることをやっておきたい」

下積みは大事、という教条的な思考にとらわれているわけではなく、あくまで今延ばしたい技術が地上戦なのだ。

「お前の方はどうだ、鉄人拳の様子は」

「フレームと、一部内骨格は再利用できそうだ」

「それは作り直せばいいだろ、データと今後の話だ」

プリカは短く押し黙った、見ると、むっとしたような、何かに呆れたような顔だ。

それから、しようがない、とでも言いたげに振り払って、思い出すような、考え出すような素振りをしてみせた。

「とりあえず、色気は出さずにショックアブソーバーを真面目に研究する、それと、軸を曲げられた時の対処はプログラミングだけじゃ限界があるから、明日辺り、モーシヨンキャプチャーに付き合ってくれ、おまえの動きを参考にしたい」

「武術の達人を真似るのは合理的だな」

「自分で言うな」

俺がわざとらしく笑ってみせると、プリカは努めて無表情を作る、こればかりはいつも変わらない。

会話が一段落し、今回やらなかった技もあるが、それを見せてやるか、次作った機体にかけて様子を見るか悩むな……と、考えていると、プリカは少し、何かの意趣返しをするかのような口調で、話しかけてきた。

「……技のこと、出来ないから棚上げにしてるとかじゃないよな？」

「失礼な、合理的な判断だとも」

……本当に正直に言えば、未だに空中浮遊、エネルギー放射の感覚がつかめないというのは、ある。

あまり考えたくはないが、気を体内で操る術を覚えた反動というか、クセのせいなのだろうか。

何にしろ、鶴仙人なり、神様なり、新たな師を見つけて本格的に学べるようになるまでは、棚上げでいいと……思うことにしている。

「舞空術よりかめはめ波より、俺は俺のオリジナル、そしてそれを支える基礎こそを磨く、今はそれでいい、俺の明日は、そこにある」

「競うな、持ち味をイカせ、か……」

「刃牙の台詞を覚えているのか、珍しい」

「おまえが何度も言うからだろ」

体内で気を操る技術、輝く手に、シユラ戦で会得した『気力大移動』
とでも呼ぶべき技、それらを既存の技術と組み合わせ、応用し、練り
上げ、完全に近づける。

それが俺の17歳、俺のエイジ753年だ。

俺がひとしきり鍛錬を終えて、飯の前のひとつ風呂……と考え始める頃には、プリカもまた、自分の『鉄人拳』の清掃、解体が済んだように、やり遂げた顔をしていた。

「ふう、どうした、先に入るのか？」

「……いや、お前が先でいい、俺はもう少しやってよう」

プリカの作業着は全身がススやオイルまみれで……顔や手まで少し黒い、いかにも『メカニックス娘』ルックになっていた。

萌え……なくもないし、プリカは全く気にしていないのだろうが、こちらとしては若干忍びない、何がというわけでもないが、あちらがどう考えていようと年頃の女の顔なのだ。

「ん、そうか？ 悪いな」

俺達の体は初めて出会ったエイジ749年から比べて大分変化していた。

まず、俺の体は180センチの大台に乗って久しく（正確には、ひと月前の計測で185センチだ）となり、体つきはゴツくなった、まだ黒光りはしていないが、幾分か範馬勇次郎……それと、師匠に似てきたと思う。

一方のプリカは、サイヤ人らしく、ほんのわずかしが成長しなかったものの……なんというか、性徴の方は進んできた。

「おい、出たぞー」

「分かった、少し待て」

「飯がつかえてるんだから、早くしてくれ」

考えながら、半ば手慰みのように整理体操をしているうちに、湯上のプリカが実験室へとやってきた。

……ジャージ姿のプリカの体は、あの頃の純然たる幼児体系から、若干丸みを帯びたものとなり、言いにくい乳も出てきている。

俺の視線に気づいたプリカは、いつもの訝し気な顔をした。

「なんだ？」

「特に何も無いさ」

あの冒険の終わり際、俺はプリカが（もとは）男だと知った。

その男だと思っっている友人の乳が出てくるという奇妙な体験をいつそ楽しんでみようかと思っただが、どうにも、一朝一夕で慣れることも、楽しむことも出来そうにない。

俺が内心の苦悩を押し殺していると、プリカはその様子を見て、さらに訝しむ。

「……いや、なんなんだ、流石に気になるぞ」

「サイヤ人の成長タイプは複数あると聞くが、女性の場合、成長が遅いタイプでも性成熟は比較的早期に始まるのか、あるいは、性成熟も含めて別のタイプがあるのか、と、考えていたのだ」

いかん、これでは何の誤魔化しにもなっていない。

自分で言った瞬間、そう思っただけだったが、プリカはどうやら、それでも誤魔化されてくれたようだった。

「うーん、確かに……、まだ今の姿を実際には見てないけど、二度目の天下一武道会で悟空が男っぽくなったって感じはないな」

「こればかりは、対面したときに見分するしかあるまい」

会いさえすれば、喉仏、骨格、その他もろもろの条件で容易に判別できる。

……俺がそう伝えようと、プリカは『じゃあ、その時教えてくれ』と言っただけで、納得した様子でダイニングへと向かっていった。

風呂場、ちよつとした旅館くらいはある大きな風呂場は、しかし、多くても数人で使うことしか想定していない設備規模だ、贅沢の極みというやつである。

石鹸、シャンプー、その他もろもろ、二人で共用だ、プリカは女として色気を出すつもりはないようだし、さりとして、強引に男らしさを演出してやろうと企んでいる様子もない。

「……知らない匂いのする風呂だ」

最近また変わりつつある自分の体臭、共用の石鹸の匂い、それと……同居人の体臭。

サイヤ人程でないにしろ鋭敏な鼻をごまかす事は俺自身にもできない。

重ねて言うことになるが、それを放っているのは友人、それも男だと思っている相手なのだ、さつきは目のやり場に困っていたが、今度は鼻のやり場、いや、心のやり場に困っている。

「なんだかなあ」

こちらはこれだけで調子が狂ってしまうのだが、これだけ大きな変化を前にしても、プリカには特に葛藤する様子などは見られない。

本人がそれでよいのであれば、こちらから触るべきことでもないのだろうか。

俺はというと、この『二度目の第二性徴』で得られた身体機能の拡張に大満足なのだ。

プリカは一体、この変化をどう思っているのだろうか、割り切ってしまうているのか、内心嫌がって、つとめて気にしないようにしているのか、それとも……受け入れているのか。

「おーい！ いつまで入ってるんだー！」

「わかったわかった、今出る!!」

……サイヤ人はいつでも空腹だ、どんな日でも力の限り食っているあいつだが、太る気配はない。

もしあいつが女性であることを選んだとするなら、最高の恩恵はこれかもしれない。

我が家の『台所』は実のところほとんど厨房だ。

例によつて一般家庭を遥かに上回る設備に、しかも炊事ロボットがあちこちを駆け回る金のかかった仕様（神龍への願いに金銭の概念があるなら）だが、こればかりは贅沢とは言えない、これくらいないと食事を賄えないからだ（元の歴史におけるチチはあの小さな家でどうサイヤ人に飯を食わせているのだ？）。

「……今日はやけに静かに食べるんだな」

「俺だつていつでも元気ハツラツつてわけじゃない」

「そつか」

俺は未だに、めずらしくウジウジと悩みを引きずっているのだ、本当にめずらしいことに。

「それに、いつでも話題があるわけじゃないさ」

とはいえ、食べる方はしつかりやる。

今日のメインはシチューだ……俺が作っていた頃と味以外何も変わっていないな。

「だが、そろそろ買い出しが必要だな、食材は特に」

「もう足りないのか？」

「献立が偏っている、恐らく材料切れが近い」

「……よく気付くよな、おまえ」

俺が鋭いのか、プリカが鈍いのか、こういう事に気付くのはいつも俺なのだ。

……が。

「じゃあ、明日、モーシヨンキャプチャーやる前にオレが買い出し行くよ」

「俺が行く、選びたいものもあるからな」

「ダメだ、おまえは金遣いが荒いんだよ、今日もフレームをイチイチ作り直せとか言ううしな」

俺が金遣い荒くマシンをいくつも持っているからこそ乗り切れた局面もあるというのに、なんて言い草だ。

俺は観念して、プリカに買い物を頼むことにした。

「じゃあ、おじやの材料とバナナ、あとコーラを買い込んできてく

れ、あと、分かっているとは思いますが、生物は少なめにしておけよ」

「なんで？」

「三日後は武道会だ、一日戦って、一泊して、往復も考えたら生ものは持たん」

「……もうそんな時期だっけ」

プリカはとぼけたように「……いや、本気で忘れていたな、これは。」

「ま、何にしろ、せつかく後顧の憂いなく戦えるんだ、目一杯楽しもうじゃないか」

「天津飯は多分、殺しにかかってくるけどな」

「なに、奴とて武人、戦いとなればその血の滾りとフェアプレー精神を抑えることはできない」

皮肉っぽい台詞で戦意を燃やし、ニヤついた笑みを浮かべる。

「……なあ、ソシルミ」

「なんだ？」

「やっぱり何かおかしいな」

「俺のどこがおかしいって証拠だよ」

「普段はそこまで露骨に前世のネットネタ使ったりしないだろう、やっぱりおかしい」

「……確かに、二人つきりとはいえ、ここまで使うことはそうなかった……かもしれない。」

気が動転して口走ってしまったているのか？

それとも、もしかしたら、気まずい気分を誤魔化すため、俺達が共有している、変わりようのない紐帯、つながりを確認したかったのかもしれない。

何にしても……。

「そうかもな、いちいち弱るなんて俺らしくもない、鍛錬も大詰めなんだ、しっかり気を張らないと」

「……おまえは結構、繊細だろ、キツくなったら言ってくれ」

「なんだ、急に優しいな」

「おまえに優しくするべき時が、今くらいしかないだけだ」
酷い言い草だ、いつでも優しくしてくれてもいいだろう。

優しくされても色々困ってしまうのだが。

「舞空術とビームの話なら、おまえは要らないくらいに鍛えこんであるよ」

「そういう優しさなら要らんぞ」

「最後まで聞け、……オレも、研究ばつかやってきたわけじゃない、おまえに秘密の必殺技くらい、用意してある……おまえもそうだろうか？」

「……ああ」

プリカが何を言いたいのか、何となく分かってきた。

「天下一武道会はオレたちの三年の集大成だ、オレも、楽しみにしてる」

「俺を元気付けるには武道か、安直だな」

「そうか？ 少しは元気が出たように見えるぞ」

プリカはニヤツと笑った、俺の『ニヤツ』とは少し、というか大分違う、嫌らしさのない笑みだ。

……不覚にも、少しドキツときた。

いや、中身がどうであれ、プリカは比較的整った容姿で、なおかつ健康的な武術少女でありメカニック少女だ。

俺が多少心揺れたとて、誰に責めることができよう。

すると、『お前、三年前は強引に引つ張り出してまで戦ったライバルがバツチリやる気を出してくれてるのに、なんて奴だ』と、心の声が、困った、少し勝てない……。

内心の葛藤を、しかめっ面気味のうつむき加減で抑え込んでいると、プリカはそれを不機嫌が続いているか、慰めきれなかったと見たのか、今度は、『あくまでおまえが面倒だから、付き合っつてやるんだ』とでも言いたげな、邪気を含ませた顔で笑った。

この下心が、今の俺には心地いい。

「よし、じゃあ、ダメ押しだ、これからもう何セットか、スパーリングに付き合っつてやる」

「大盤振る舞いだな、お前こそ何かあったんじゃないのか？」

「三年に一度の大会の三日前だぞ、気合を入れる理由を聞く必要が

あるか？」

俺を慰める、という目的すら覚えていないフリをして、プリカは立ち上がり、訓練室の方に歩きだして、手招きをする。

俺はひとまず、友人の優しさに誤魔化されてやることにしたのだった。

↓つづく

第十九話：転生地球人があの男と再戦するまで

「それでは両選手、武舞台へー」

改めて語るまでもないことだが、天下一武道会の予選は100をゆうに上回る数の武道家が4つのブロックごとに2つ、計8つの出場枠を競い戦う一大トーナメントだ。

俺は自らの出場枠を賭けた戦いの最終盤……つまり、予選決勝戦の武舞台へと上がっていた。

「よろしく願います」

「こちらこそ、あ、いえ、よろしく願いますー」

若干ぎこちない敬語で俺に挨拶を返すこの対戦相手。

まず目を惹くのが、俺より頭一つ分はあるかという巨体、次に、ワシヨルダーのレスリングユニフォームに包まれた濃密な筋肉、身だしなみの範疇で剃り込んでいるであろう体毛は、闘争に適した男性的な性質を予感させる。

「へへ、ちよつとアガがっちゃって、……いい試合にしましょう」

「そのつもりだ」

この男、俺の見立てが正しければ、かなりの実力者だ（常人の範囲では、と付け加えなくてはならないが）。

……その優秀な武道家が、前回準優勝者とはいえ17の少年を相手にこうもへりくだるのだから、何か並々ならぬ理由を感じさせる。

「はじめっ!!」

「どあっ!!」

「……ふむ」

敵の初撃、大振りのパンチを腕で防ぐ……大した膂力だ。

しっかりと体重が乗ったパンチであるし、なにより、大振りであるにも関わらず、こちらのリーチを冷静に計算して放たれているのが、いい。

「さ、さすが……!」

「いいパンチだ! もっと来いッッ!!」

「お……おす!!」

男は構えを変える、様子見から、敵を格上と認め、巨体が生み出す制空権を最大に活かしながら戦うスタイルへと。

膂力、リーチ、自らの持つ優位性を活かす戦いを練り上げ、いざとなればすぐにそれを切り替えることすら出来る冷静な戦巧者。

俺はこの武道家を知らない……が。

「以前、お前と戦ったことがある気がする」

「え？」

この俺も武道家の端くれ、一度戦った敵を忘れることはないのだ。

「おーい、ソシルミ、悟空たちと当たったりしなかつただろうなー!?」

「こっちは無事終わった、お前こそどうだ」

全試合終了後、解散しつつある予選会場の片隅に俺を見つけ、プリカが駆け寄ってきた。

俺はと言えば、あの後少し気になることがあって、わざわざ控室に行かず、ここに留まっていたのだ。

「またギラン、あとランファンと当たった、すぐ終わったけど……ん？」

「どうした？」

「いや、なんか話してたんだよな、そのやつと、邪魔だったら先に行ってるけど……」

プリカの言う『そのやつ』、それは予選決勝で俺と戦っていた、あの男だった。

「いえいえ、わたしはもうそろそろお暇させていただきま、観客席から試合を見させてもらいますよ！」

「そう言うなバクテリアン、どうせ第二試合だし、補給は試合前に済ませてきた」

「バ、バクテリアン!!?」

あんどりと口を開けてプリカが叫ぶのに対し、当の男、バクテリアンは、朗らかに笑って答えた。

「あ、やつぱ驚きますよね、この間なんか免許の更新に行ったら窓口が止まっちゃって……」

「え、いや、え!? バクテリアン!」

「二回も聞くことないだろ、こいつはバクテリアンだ」

プリカは目を丸くして、それからしきりに辺りを嗅ぎだし、首を捻った。

「……臭いがしない」

「ほら、俺がああ試合の時、『体を洗って真面目に鍛えろ』って言っただろ、今思うと大分失礼なセリフだったけど、真剣にとってくれたみたいで、な?」

バクテリアンが『いやあ、ああのセリフでこっちも憑き物が落ちまして』などと言っているのを聞きながら、プリカはまだ驚愕している。

「大分鍛え込んで、体も洗ってるもんだから、俺でも一瞬分からなかったんだ」

「一瞬って、結局わたしがああの、なんかよく分からない技で投げ飛ばされて負けた後じゃないですか、気付いたの」

「合気の技だ、持ち味を活かすのはいいが、もつと欲張って技術を学ぶのも大事だぞ」

「参考にします!」

バクテリアンはそのまま、2、3個のアドバイスを俺に求めた後、観客席の方へと歩いていった。

俺はその後ろ姿に、『ちゃんと歯医者に行けよ! 今からでも遅くないからな!!』とお節介をぶつけ……プリカがようやく人心地ついたのは、バクテリアンが完全に姿を消し、会場の人々がまばらになる頃だった。

「バクテリアンが……」

「元から怪力でならした武道家だからな、これからしつかり鍛え直せばもっと伸びるだろう、案外、次の武道会では本戦にも来るかもしれない」

「それはないと思う」

「……まあ、そうかもしれないが、夢を見るのは自由だろう。」

そう言い返そうかと思つてプリカを見ると、何やら、顔をほころばせてこちらを見ている。

「なんだ？」

「いやあ、楽しそうだなんて、おまえはずっと、工夫して戦うやつが好きで、強くなるうとするやつも好きだから、バクテリアンが強くなったのはめちやくちや嬉しいんだろ？」

「嬉しいとも、もしかしたら元の歴史じゃ起こらなかったかもしれないと思えば、特にな」

「そっか」

プリカも何やら機嫌が良さそうだが、まさか、気難しい同居人が上機嫌だから安心、とか考えているわけではないだろうな。

……俺がプリカにどう見られているのかはともかく、そろそろ控室に行かなくては、そう考えていると、数十メートル先からでもはっきり聞こえる、やけに通る大声が俺を呼んだ。

「よーうっ!! ミソシルー!!」

……間違つた名ではあるが。

声の方向を見れば、惑星ポポルのカエルの糞の色……もとい、山吹色の道着が3つ、駆け寄ってきている。

「おう、悟空、それにクリリンとヤムチャ、お前達もしつかり予選を通つたのか」

「オレは悟空と同じブロックでヒヤヒヤしたぜ……」

「案外見る目のあるのが裏にいて、いい選手が潰しあわんように組み合わせを操つてるのかもしれないな」

「ブロックごとの選手数がまちまちだから正確には計算しにくいけど、……えっと、完全に偶然で被らない確率は、今回なら2%弱くらい……、いや、もしかしたら0.24%ちよいか？」

「プ、プリカちゃ……さんつて、こんなに頭のいい子だったんだ……」

数学的な話を始めたプリカを前にクリリンがおびえている。

そう言えば、こいつらはまだたどたどしい言葉遣いしか出来ない頃のプリカとしか会っていないのか。

「元からこれくらいはできた、あんまり人と会わないから、言葉を忘れてただけだ」

「口が動かんせいで付いたぶつきらぼうな喋り方と突っ込みは後遺症として残ったがな」

「うるさい」

ほら早速出た！

「やめろ蹴るな！ 人前だぞー！」

俺がしばらくプリカにじやれつかれていると、見かねたのか、ヤムチャが助け舟？を出してくれた。

「そ、そういや、なんで今まで会わなかったんだんだろうな、オレたちもけっこう長い間、門の前にいたんだけど」

「ハア……ハア……：自家用機で島に来ていち早く会場入りしたからな、補給も済ませておきたかった」

「そりゃ、あんなに食うだもんなあ……」

「しかしソシルミ、食うと言えば、おまえ一段とデカくなったな、もう抜かされちまったか？」

「僅かに俺が上だろう、身長にさほど意味はないが」

ヤムチャが俺の背に感心する一方、クリリンとプリカは伸びなかった身長に歯噛みしているが、悟空はあっけらかんとした様子だ。

小さく強いファイターで居ることに慣れているのか、どうにもならないことを気にしないだけか。

何にせよ悟空が正しい、力も技も際限なく鍛えられるこの世界において、体格などいち要素に過ぎないのだ。

「……全員、大分腕を上げているな、見ただけでも鍛え込んだのが分かる」

「へへ、今度は負けないぞー！」

「オレだって次こそは二回戦に……！」

「オレも、今度は本気だ」

「今度こそオラが優勝しちゃうもんねー！」

「残念だがそれは叶わん！」

はつきりと宣言する大声！

そこに居たのは、見知った三つ目、そしてキョンシー。

「久しぶりだな、天津飯、それにチャオズ」

「きさま……ぬけぬけと、ソシルミ!!」

「なんか用か?」

天津飯はえらい剣幕だ。

……いや、師である鶴仙人を謀り、自らと相棒であるチャオズをぶちのめしたのだ、怒るのは当然か。

「……きさま! くそ、この大会への参加はあくまで亀仙流の打倒が目的だが、オレはきさまを許さん!」

「ボクもだ!!」

「上で話は付いたというのに、随分義理堅いことだ」

「なんとも言うがいい、決勝で待っているんだな!!」

それだけ言い残して、天津飯は控室へと消えてゆく。

しかし、決勝で、とは……自分で不正を告白しているようなものではないか?

……普通に聞けばただの捨て台詞にしか聞こえないか。

「ソシルミ、おめえあいつらに何かしたんか?」

「お前を殺してやるって言ってレッドリボン軍を騙したことがあっただろ、あの時一緒に騙した殺し屋が奴らなんだ」

「あ、あんなおつかない殺し屋たちをだましたのか……」

「前から思ってたけど、おまえたちって結構いい度胸してるんだな……!」

クリリンとヤムチャがドン引きし、プリカは『巻き込むなよ……』とばかりにこちらを睨む。

悟空はよく分からないまま楽しげだ、俺も笑っておく。

「わはははは!」

「はっはっはーっ!」

「はあ……」

ため息は言うまでもなくプリカのものだ。

さて、俺達も向かおう、もし予選でジャッキー・チュンが天津飯達に出会って未来を託していたりしない限り、俺にも再戦の機会が与え

られるのだ。

……今度こそは全力で挑み、そして勝つ！

武舞台に二人の男が上がる、一人は小柄で、一人は大柄。

一人は不自然なまでに白く、もう一人は黒い。

「さあ！ 天下一武道会、第1試合は、チャオズ選手対、チャパ王選手です!!」

どうしてこうなった。

「チャパ王選手は前々回である第20回とその前、第19回の優勝者で、今大会では8年ぶりの出場となりますが……」

「まだ衰える歳ではない、8年間鍛え上げたわたしの新しい戦いぶりをここにみるみなに見てもらおうつもりだ」

残り一つの柶を抑えたのは、なんとジャツキー・チュンこと亀仙人ではなく、我が師匠だった。

「頼もしいお言葉、ありがとうございます！ それではチャオズ選手——」

「——おまえ、ソシルミの師匠なんだって？」

「その通りだ」

「ソシルミ！ 今からおまえの師匠をぎったんぎったんにしてやる！ 見てろ!!」

チャオズは凄まじい剣幕で、屋根の上でプリカと座る俺に向けて叫ぶ（前回のように塀の上に座ろうとしたら叱られた）。

親子で罪を共有することはありえないが、弟子の罪を師匠に、というなら筋違いでもないのかもしれない。

……師匠が負けると決まったわけではないが、天下一武道会はルールのに武舞台上の過剰攻撃を防ぐことができないのだ。

「そ、ソシルミ選手と何やらただならぬ因縁がおありのご様子ですね……ありがとうございます」

何やら危ない臭いを嗅ぎ取ったアナウンサーがインタビュを急いで切り上げ、こちらを見る。

サングラス越しで視線は読み取れないが、どことなく問題児を見る

目のような……。

「赤勝て白勝て、とはいかないか」

「俺は試合結果を見守るだけだ、師匠に勝って欲しい気持ちはあるがな」

試合より、なぜ師匠がやってきたのが気になる。

俺が優勝できなかったから不甲斐なく感じた……なんてことも、今更ないだろう。

なにかの戦力になりたかった？

それはなおのこと『今更』だ。

「それでは第1試合……はじめっ!!」

俺が思案する間に、小太鼓と銅鑼が鳴り響き、戦いの火蓋が切って落とされた。

「むっ!?!」

先に動いたのはチャオズ——その手段は、舞空術を用いたホバリングでの高速接近。

はつきり言えば、武道家という人種に対してこれほど有効な技術はない、武道家が頼みにするフットワークも呼吸もなく、敵への攻撃を開始できるからだ。

「むん!!」

「……!」

が、その不意の筈である一撃を前に、師匠は一步下がり、タイミングを合わせてのパリングで弾き飛ばした。

俺は師匠にあの技を教えたことはないのだが……、攻撃の『意』を見抜きさえすれば、既存概念にはない技ですら見切ることが可能なのだろうか。

「チャオズ選手、不思議なステップです! 一気に踏み込んでチャパ王選手を攻めるーっ! おーっ!! チャパ王選手も負けじと攻撃を弾いたーっ!」

「あれ、おまえとの戦いと同じ技か」

「身体、気力、練度、どれを取ってもレベルが違う、俺への恨みか、元からか、大分鍛え込んできたな」

師匠はチャオズの苛烈な攻撃を捌き続ける。

チャオズに肉弾戦イメージはないが、それでも、鶴仙人の直弟子に
対し、五分五分……いや、それ以上の戦いをしてみせるとは。

「ふふ、きさまも3年前、ソシルミと一戦やらかしたと聞いたが、ど
うやら同じ『負け組』でも、おまえとわたしでは随分差があつたよう
だな」

「こ、この……本気で行くぞ!!」

「あ、ああ!! なんとチャオズ選手、浮きました! 浮き上がりま
したっ!!」

前代未聞の大技を前に、俺達含む数人を除き、全会場が沸騰する!

——しかし。

「浮いたからなんだというのだ、逃げてみせるか? それとも、足で
手を攻めるなら勝ち目があるとても?」

「いの!!」

師匠は一切動じない、チャオズの四肢をフル活用した攻め手を前に
一歩も引かず……。

「ほいつ」

「え、あ——げぶっ!!?」

チャオズからは師匠が突如消え、次の瞬間には打撃を叩き込まれた
……と感じるであろう、その一撃を持って、その応酬は終わった。

「さ……逆立ちです! チャパ王選手、一気に体を伏せ、逆立ちの勢
いでチャオズ選手を蹴り飛ばしましたー! チャオズ選手、空中で踏
みとどまる!」

「く、くう……」

うまい。

重力と体捌きによる体勢の変化を利用して、一方的に空中戦を仕掛
けられると思っている敵の精神的優位に漬け込んだのだ。

チャオズはダメージを残したままよろよろと上空へと上がってゆ
く。

「これでは互いに攻撃が出来ない、手詰まりだな」

「ボクはできる!」

わざとらしくかぶりを振ってみせた師匠の挑発に乗る形で、チャオズはどどん波へと移行……この流れは。

「おまえの試合と、同じ流れだ」

「まさか、そんな……」

チャオズは次々とどどん波を放つが、師匠には全く命中しない。

チャオズのどどん波はあの頃より静かで、それでいて早く、速く放てるようになったようだが、それでも、達人相手に命中を狙うには……。

「……そろそろチャオズが疲れてきたな、じゃあ、次は超能力か？」
プリカが小さく呟く。

その予言に従うように、チャオズはゆっくりと降下し……。

「はっ！」

「……今、何かしたのか？」

「え——」

超能力のために突き出した腕を捕まれ、武舞台へと真つ逆さまに叩きつけられた。

「不発……?」

「恐らく、師匠はヨガで内臓の動きを操作、あるいは痛覚と痛覚への反応を制御し、超能力を無力化したんだ」

「おまえはあの時そんなことしなかったよな？」

「できなかつたんだ、俺は天才とはいえ、当時14の若造……格闘技術はともかくヨガには限りがある」

「……エイト……ナイン……テン!!」

……俺達が評している間に、アナウンサーのテンカウントが終わり、チャオズの一戦敗退が確定した。

観客達は、序盤戦の盛り上がりを裏切るあっけなくかつ意味不明な終焉にブーイングを飛ばす者が半分、師匠の鮮烈な復活に興奮し歓声を送るものが半分。

俺は……。

「なんだったんだ、今のは……」

「見たまんまだろ、元の歴史とほとんど同じ流れで、対戦相手がクリ

リンじゃないくてチャパ王だったただけだ」

「いや、……そんな、まさか」

まさか、3年もあって、進歩したのは技術力と身体能力、気力だけ、なんてことが……。

「チャオズが何年経つても全然変わらないのは元からだろ、おまえの師匠が、一枚上手だったってことでいいじゃないか、そういうの好きだろ？」

「そうかもしれん、だが……」

だが、の後に続けられない理由は、プリカが正しいことを言っているからだ。

変わらない歴史だってある、バクテリアンが変わったのだって、ほとんど偶然じゃないか、と。

違う、俺が言いたいのは、そうではない。

言葉に詰まって、ほんの数秒か数十秒、黙り込んでいると、プリカが俺の肩を叩いた。

「おい、ソシルミ、師匠が呼びだぞ」

屋根の下を見ると、武舞台から戻ってきた師匠が俺を手招きしている。

どちらにしろ次は俺の試合だ、……降りなければ。

控室の片隅、指でボトルキャップをねじ切って、瓶を手渡す。

「はい、コーラ、炭酸入りです」

「入りって……、相変わらず炭酸抜きコーラなんて飲んどるのか」

「栄養効率が極めて良いですからね」

「……ロボットの抱えコックが居るのだから、好きな栄養素を組み合わせたドリンクくらい作れるだろうに」

師匠が呆れたように言うが、仕方ない、この炭酸抜きコーラが俺のゲン担ぎであり、出陣式なのだから。

この世界でしっかりしたスポーツドリンクが売り出されるようになって、俺は炭酸抜きコーラだ。

「それで、何の用です、どっちもですよ？　なぜ今更武道会にやって

きたのか、私を呼び出したのか」

「まずは今おまえと話す理由だな、……おまえは、あの試合をどう思った？」

「彼は3年前も私を相手に『あの試合』をやりました、私のヨガが未熟で、別の手段であの腹痛の超能力を克服したこと、実力差が彼に傾いていたこと以外はほぼ同じです」

「それか、その無様な顔のワケは」

「そんなに、ひどい顔をしていますか」

……バクテリアンの再起で盛り上がった気分が全部吹っ飛んだのは確かだ。

師匠の上達を喜ぶ気力すら、半ば奪われてしまった。

確かに、俺はひどい顔をしているのだろう。

「やつは技術と体力以外ともに進歩していなかった、だからおまえと同じ流れで、わたしにも負けた……それがおまえは、気に入らなかったのか」

「……流石、師匠」

自らの成長と、新たな技術の発見によって、目まぐるしく変わっていく『武道』に追いつき、追い越すことが、武道家の使命であり、本懐。

俺はいつからかそう思うようになっていたし、他人にそれを期待するようになるにも、なっていた。

「昔はそれほど人の成長に期待する男でもなかったのになあ……」

「人は変わるものです」

「だとすれば、強欲になったものだ、……悪く言っているんじゃないぞ?」

「でも、さっきのは勝手な期待でした」

一度負けたから強くなる、自分にそれを誓うのは人の勝手だし、尊いものだと思う。

だが、負かした相手がそれで強くなってくれることを期待するなど……。

「はっはっは、おまえもまだそんな殊勝なことが言えたとはなあ!」

「笑いごとですか、弟子が落ち込んでいるのだから、慰めるなり、ひっぱたくなりしたらどうです」

「そんなタマか」

「あいつには言ってもらえましたよ、繊細だってね」
師匠はまた大爆笑した。

「……ふう」

「それで、笑いに来たんなら、そろそろ試合なんでお暇させて頂きます、……その爆笑っぷり、少しは気休めになりました」

「ソシルミ、待て」

俺が立ち去ろうとすると、師匠はそれを引き止め、肩を掴んだ。

3年前の宴で触ったのより太い腕、3年前と8ヶ月に交わした拳よりごつい手だった。

「慰めるのもひっぱたくのも、ちゃんとやってやる、それをやりたんだ、だから、次の試合、必ず勝ってこい」

オレのリベンジが残っているというのに、先に負けるのは許さん。師匠はそう言って、俺の肩を優しく押した。

第二試合は、俺の試合だ。

俺と対戦相手が武舞台へと上がると、あちこちから歓声が上がる。単に試合に期待して興奮しているわけではない、それには、理由があった。

「いよいよ始まります、第二試合は、なんと前武道会第一試合のリベンジマッチ!! ……ソシルミ選手対クリリン選手です!!!」

そう、第二試合は、俺とクリリンの試合だった。

「今度は負けないぞー!」

クリリンの強い意気が心地いい。

「今度も楽しい試合にしようじゃないか」

かくして、かつての約束通り、再戦は叶ったのであった。

↓つづく

第二十話：転生地球人が現地最強地球人（候補）と再戦するまで

武舞台の中央で向かい合うクリリンと俺、観客達の歓声、そして、亀仙流の仲間達の声援が俺達を包む。

観客席には様々な人種が居た、人間、獣人、それと、種族名も分からないような連中（前世の設定本ではモンスター型とか呼ばれるやつだ）、その誰もが、俺達の戦いに注目していた。

「頑張れよー！ ちゃんと見ててやるからなー！」

「どっちも頑張りなさいー！」

「クリリンン！ それとソシルミー！ 頑張るんじゃぞー!!」

……亀仙人、もといジャッキー・チュンには、観戦より大会に出て欲しかったんだが。

それと、プリカ、何も言わずにニコニコしてるんじゃない、応援はどうしたんだ。

「ソシルミ選手、クリリン選手ともに現在17歳！ 前回大会より3年、成長期のお二人はあの頃よりだいぶ、大きくなりましたね」

「オレはソシルミに比べりゃ全然だけどな……もうちょいリーチが欲しかったぜ」

「このレベルの戦いにおいて肉体的な大きさは一要素にすぎん、図体がでかくて得するばかりでもないしな」

「なるほど、どちらも武道家らしいご意見です、……お二人が戦うのは3年ぶりということになります、何か意気込みなどは？」

クリリンが少し悩む姿勢を見せる中、先に口を開いたのは俺だった。

「あの日、クリリン選手を打倒した時、俺は大きな喜びを感じた、最高のごちそうを喰らい尽くして、満腹だった……そのごちそうがあの日より豪勢さを増して、趣向を凝らして今ここにある、これは最高以上の喜びと言っていないだろう」

「あ、ありがとうございます、ソシルミ選手」

「オ、オレも負けないぞ！ 今度こそ二回戦に行くんだ!!」
わざと脅すように語る俺に対し、クリリンは一步も引かず啖呵を切った。

その頬は僅かに釣り上がり……引きつつているのではない、笑みを浮かべている。

「いい試合にしよう、クリリン、……こうして一回戦でもう一度当たれるなんて、望外の幸運だ……よろしくお願いします」

「そ、そうだな？ あ、よ、よろしく」

一礼を終えた俺は、観客席で行儀よく試合を観戦する天津飯達、鶴仙流三人組を見やる。

天津飯は俺のわざとらしい軽口に歯噛みし、亀仙人は我が意を得たりとばかり、対戦相手であるクリリンは、困惑しっぱなしだ。

「それでは、試合を開始させていただきます……はじめっ!!」

アナウンサーの掛け声で銅鑼が轟き、俺達は一斉に駆け出す。

「覇ッッ!!」

「たっ!!」

初撃は、俺の放つ引き絞ったストレートのパンチ、クリリンはそれを両腕ガードで受け切るが、高すぎる威力、そして慣れないであろう高高度の一撃を前に衝撃を流しきれず、一步下がる。

「おーっと！ ソシルミ選手、始めから凄まじい一撃です！ しかしクリリン選手、これをうまくガードしました！」

「さ、さすがソシルミ、一発で効く……！」

「カマトトぶる気ならそのままぶっ飛ばしてやろうかッ！」

脅し、挑発、というよりは、誘いをかけると、クリリンはニヤリと笑って、下がったままの体勢から引き絞ったストレートを放つ。

今度は反対の構図！

「だあーっ!!」

「——ッッッ!!」

俺はその一撃を片腕で受け、もう片腕でバランスを取り、右足をクリリンへと叩き込む……瞬間、クリリンは太陽を背にしながら飛び上がり、武舞台の端へと着地した。

「あの頃のようにはいかんか」

「当然だ！」

言っておくが、俺は本気でやっている。

『純粋な素手での本気』であるが、掛け値なしの全力だ、それで、ここまで迫られているのであれば……。

「これで、3年で鍛えたかめはめ波もあるとなれば、厳しいかもな」

「おまえこそ、あの技、まだ使っていないだろ」

「あの技つてのはこれか？」

「出ました!! 前武道会で見せた、プリカ選手のビームを弾いた技です! まばゆく光る手! これを前にはかめはめ波もかたなしかーっ!?!」

実戦と鍛錬の結果、完全に使いこなせるようになった『輝く手』の必殺技。

俺にとっては既に日常で、クリリンにとっては驚異の技であり、脅威の技であろうそれは、エネルギー攻撃に対する有効な防御手段であり、打撃技の威力を飛躍的に高める手段でもあった。

そんな技をわざわざ誘うのは、『気に入らないタイミングで出ては困る』と言った単純な理由か、それとも……。

「じゃ、オレもいくぞっ!」

「応ッッ!!」

その瞬間、クリリンは手を揃えて後ろへやり、光を放ち始める。

かめはめ波の構え、だが、避けられる状況にないとはいえ、無策でかめはめ波を放てば――

「か……め……は……は……め……波!!」

「フンッッ!!」

「クリリン選手、かめはめ波……ソシルミ選手も回し受けで防ぐーっ!!」

――何一つ俺にダメージを与えず、かめはめ波は消し去られる。

だが、俺がかめはめ波を消し去り、再びクリリンを見た時……クリリンはそこにはいない!

「シツツツ!!!」

カンに従って裏拳を放つと、風圧だけが標的に当たる感触。

「くっ……!」

「ツアツツ!!!」

回避体勢のままのクリリンに、追ってミドルキックを放つ。

クリリンは添えて防御にするも……足は手を巻き込んで腹に入り、クリリンの体をふっ飛ばした。

「あなたのかめはめ波を目眩ましにするとは、なんとも贅沢な戦術ですな」

「技は技じゃ」

「ごもつとも」

「クリリン選手、空中で体勢を立て直し、なんとか場外は免れました!!」

師匠は亀仙人と並んで何やら戦術談義を繰り広げている、一方で、クリリンはダメージを残しつつも、闘志を新たにこちらを睨む。

「もう一度だっ!」

「受けて立とうツツツ!!!」

クリリンはかめはめ波の構えを取る……今度は飛び上がりながら。

「わざわざ不安定な空中に上がるとはなツツ!!」

「波ーっ!!!」

俺は手の輝きを強め、かめはめ波を防ぐ……今度は本気の威力!!

「ツツツ!!!」

「再びのかめはめ波です! さつきよりも強い!! ソシルミ選手、力をこめて防ぎます!!」

観客を気につけない全力のかめはめ波!!

いい!

クリリンの本気の威力、意思、それを前に俺は一瞬、防御に意識を奪われ――

「はっ……!」

「クリリン選手、手に力を貯めていきます……あ、あれはプリカ選手の技です! ビームを両手に!」

「何ッ!？」

かめはめ波を終え、落下するクリリン、両手には『気弾』!

「とうっ……たあーっ!!」

「む……!!」

そのまま放たれる気弾を『輝く手』の防御で到達前に爆散させる……が、爆散の衝撃と、それに耐えるための強張りの一瞬は――

「――きえええーいっ!!」

「グッ……!!」

「す、すげえ! クリリンが一撃入れたぞ!!」

一瞬の硬直を利用した全力の飛び蹴りが俺の腹に突き刺さり……俺は腹部へのダメージと共に、小さくたたたらを踏む。

エネルギー攻撃を防御するのに否応なく発生する一瞬の間、それに潰け込むため、あえて必殺のかめはめ波までも囷に使い、気弾を貯めながら接近するために必要な集中力の問題を、落下しながらの攻撃によって迂回したのだ。

「素晴らしい……!!」

「そ……それで済まされちゃ、困るんだけど……」

クリリンは息を荒くしながら、非難するというよりも、愚痴を言うようにつぶやく。

確かに、格上の相手に必死で一撃を加えたというのに、相手が痛がるだけじゃ、愚痴も言いたくなるだろう……が。

「済まないようにしてくれるんだろう?」

「当然だ!!」

――3年前、第21回天下一武道会で俺が打倒した二人の選手には、共通点があった。

それは、最大威力のエネルギー波を決め技として放ち、俺に防がれ、抵抗するもそのまま殴り飛ばされた、という単純な構図だ。

無論、クリリンもプリカも、その時できる全力の戦術で俺にあたったのであり、攻撃が成功してさえすれば、俺も危なかったのだが……クリリンは今回、その構図を打破することに、3年の月日を費やしたのだろう。

その成果は、今この武舞台の上に、表れつつあった。

「ハア……ハア……」

「ど、どうだ!」

「クリリン選手怒涛の攻撃! プリカ選手の技を完全に使いこな
し、華麗なコンビネーションでソシルミ選手を追い詰めます!!」

クリリンの攻撃は単なる気弾と格闘の連続攻撃から、波状攻撃、同
時攻撃へと形を変え、次々と俺の防御を貫いていく。

威力こそ低いものの、このまま戦い続けば……。

「お、おお! クリリンのやつ、これはいけるんじゃないか!」

ヤムチャの言う通り、俺は斃れるだろう……が。

「さあクリリン、もっと打ち込んでこい、この攻撃が止まった時がお
前の最後だつてことは、もう気付いてるんだろう?」

「……言われなくなつてやめるもんか!」

「クリリン! このままだとおまえもへたばつちまうぞー!」

悟空が叫ぶ、その言葉もまた真実。

このままのペースで攻撃を重ねたならばクリリンが俺を仕留める
より早く、クリリンの体力が尽きる。

そうなれば、この華麗かつ苛烈なコンビネーションは、格上に無理
攻めを仕掛けてスタミナ負けしただけ、という結果に終わるだろう。

「……そろそろだな」

「へへ、まあな!」

俺も、クリリンも、それを理解しているし、互いが理解しているこ
ともまた、理解している。

特にクリリンは3年の間、このひと時を予想し続けてきたはずだ。
俺も、奴も、やることはたった二つ。

「——ツツツツ!!!」

「……………!!!」

俺は奴が出す最後の奥の手を退け、俺の奥の手を叩き込む。

奴は俺が出す奥の手を退け、奥の手を叩き込む。

その二つだ。

「たあーっ!! ……とりゃあーっ!!!」

「~~~~ツツ!!」

「クリリン選手、次々とビームを放ちます、ソシルミ選手動けない!!」

これまでの『全力』を超える気弾のつるべ撃ちを前に止まる動き、爆炎の向こうのクリリンを見据えるが……やはり、そこにはいない!

「上かツツ!!」

「かー! めー! はー! めーつ!!」

今日三度目、渾身のかめはめ波!!

だが、かめはめ波はクリリンにとって『俺とクリリンの時間を交換する技』に過ぎない。

それを目眩ましにする作戦すら、時代遅れの品だ、一体、それをどうやって……。

「波ーつ!!」

「フンツツ!!」

拮抗するかめはめ波と輝く手、3度目となれば最早互いに慣れたもの、この競り合いは俺の有利に働く。

一方、クリリンは更に気力（文字通りの意味でもだ）を消費し、額に汗が滲んでいる。

ならば一体、この後どうする?

そう思った瞬間、クリリンの目が決意の色へと変わった。

「——はあーつ!!」

「ク、クリリン選手、かめはめ波を放つ手を二つに分け、ソシルミ選手に向けて加速していきます!!」

「ツツ!!」

そうきたかツツ!!

クリリンのプランは、『俺を抑え込むかめはめ波』をそのままに俺に接近すること……だが!

「二手足りんツツ!!」

かめはめ波の終わり際に重ね、俺は一気にその場から飛び退く。

膠着状態が終わればその場から去る事ができるのは必然、それを拘束する手がないのであれば——

「くらえっ!!」

「エネルギー弾ではなあツツツ!!」

クリリンが再び放つ二つの気弾!

だが、ここまでは予想通り、輝いたままの手が気弾へと向かう。

「ふんっ!!」

「なツツツ!!」

「曲がったーっ! 技が曲がりました、ソシルミ選手を挟むように

曲がります!!」

曲がる気弾!!

次の武道会で出るはずの技が、まさか今ここで出るとは!

「たあーっ!!」

「行けーっ! クリリン!!」

次いで突入するクリリン、攻撃タイミングはほぼ同時!

時代劇やバトルものではお馴染みの投擲武器と本人の同時攻撃だ

が、効果は絶大!

どちらを回避し損ねても、俺の場外は必至ツツ!!

「そうか、ソシルミの防御は気弾の爆発を防げても、その衝撃までは

防げない!」

プリカが叫ぶ。

その叫びは真実だ……が。

「今度は俺が見せる番だ」

俺は腕を振りかぶり、その輝きを高め――

「滅^メエエエツツツ!!」

「なっ……」

――腕は二つの気弾を巻き込んで爆裂し、『留まることなく』そ

のまま振り抜かれた。

これが俺の3年間、その一つ!

纏わせた『力』を攻防のための硬化ではなく、爆発力へと変化させ

る、より攻撃的かつ防御にも優れた新たな技術!

「こつちが爆発しちやいけない道理もあるまいツツ!!」

「……くっ!!」

結果的に、クリリンは無防備のまま俺の前に現れる。相対するのは、万全の状態の俺であった。

「場外!! クリリン選手場外! 第2試合はソシルミ選手の勝利です!! 激戦の末、再挑戦を振り切り、二回戦への進出を果たしましたーっ!!」

その後は、あつけないものだった。

武舞台の外へ叩き落されたクリリンに最早なすすべはなく、地面にめり込み、あえなく場外。

試合は俺の勝利という結果に終わった。

「イテテ……、また負けちゃったな……」

「何度もヒヤつとさせられた、特に、最後の曲がるエネルギー弾は夕イミング含め、完璧だった」

「よせやい、おまえ、まだなんか隠してただろ」

「全力で戦い、最も効果的な技を出した、それだけだ」

俺は倒れたクリリンに手を差し伸べる。

クリリンはそれを掴み、言い放った。

「次こそは勝つー!」

「次も俺が勝つ」

クリリンは不敵な笑みで、俺はいつものニヤついて笑みで笑っていた。

どこまで逃げようと追いつけてくる挑戦者がいる喜び、そして、あの強敵を追い続け、挑戦し続ける喜び。

立場は違えど、同じ喜びがそこにあると、俺は感じた。

「次の試合は師匠なんだろ? ちゃんと休んで……絶対勝てよ」

「当然、師匠の再挑戦も、しっかり阻んでみせるさ」

俺達は武舞台を通って控室に向かう、その途中で別れた。

俺はコーラを開け、屋根に飛び乗る。

「炭酸入りか、珍しいな」

「飲むか?」

「いいよ、次はオレの試合だからな、腹が膨れたらまずい」

俺が一息にコーラを飲み干すと、プリカはその俺を見て、何やらニコニコとしている。

試合前に見たのと同じ笑みだ。

「なんだ、俺が厄介なことを言い出さないのがそんなに嬉しいか？」

「……クリリンが強くなってよかつたな」

「ああ、クリリンの成長と、試合形式の恐ろしさを感じた」
なにせ、斃れずとも押し出されるだけで負けてしまうのだ。

戦闘の規模に対してあまりにも武舞台が小さい……押し出しを恐れ、気を使いながら戦えば、今度は敵に足元を掬われる。

「最後の曲がる気弾、本気でビビってたろ」

「ああいう技があるということは既に知っていた、だからこそ、防げたのかもしれん」

戦いに事前知識によるアドバンテージの差はつきものだが、入手法が入手法だけあって、素直に『違うのは当然だ』と受け止めるのは難しい。

そんな俺の苦悩を知ってか知らずか、プリカは反論してみせた。

「どうだろう、おまえの反射神経とカンなら、知らなくても……」

「かもな、それに、前提知識があるのだから、俺の能力と言えば、俺の能力だ……ま、どちらにしろ、いい試合だった」

それは間違いないな、と、プリカも首を縦に振った。

「次の試合はオレと……悟空だ」

「一回戦じゃ最高のカードだ、それに、本気でどちらの勝ちも願わずに済む」

俺がそう言うと、プリカは少しむっとした。

「ちよつとくらい応援しろ、赤勝て白勝てじゃないぞ」

「俺は決勝で強い方とやりたいんだ、応援して何が変わる、それに、お前だって俺を応援しなかっただろう」

「……アレは、おまえが勝つと思ってたからだ」

「当然、俺も勝つ気でいたが……分かった、お前を応援してやる、それだけでいいな」

プリカは満足げに頷いて、屋根から飛び降りようとする。

俺はそれを引き止め、ビンを投げ渡した。

「コーラか、炭酸入りはマズいぞ」

「抜いて、その後で締め直してある」

「ありがとな」

プリカは俺が渡した炭酸抜きコーラを一息で飲み干すと、そのまま屋根から飛び降り……思い出したように、ビンをこちらに投げて見せた。

「頑張れよ」

「おう！」

天下一武道会、第3試合、それは俺にとって前世で最も憧れたサイヤ人と、今生で最も共に過ごしたサイヤ人の試合。

「それでは、第3試合、プリカ選手対、孫悟空選手を開始いたします、両選手、武舞台へ!!」

マイクなしでも会場に響き渡りそうなほど、はつきりと通るアナウンサーの声が会場に響き渡る。

真にどちらが勝とうと喜べる、最高の試合が、今始まるうとしていた。

↓つづく……………?↓

第3試合の開始を宣言するアナウンサーの声を、不機嫌そうに尻尾で弾いて、のっしのっしと歩き抜けていく一つの影があった。

「ねえあんたどこ行く気だい、試合が始まっちゃうぞ! 前大会ベスト・フォー同士の試合だぜ!!」

「うるせえ!! どきやがれ!!」

「ひゃあー!」

引き止める格闘ファンを腕と尻尾で蹴散らして、観客席の端から飛び降りた影は、人間の形をしていない。

飛び降りた矢先に翼を開き、飛び去っていく彼は獣か、あるいはモンスターか。

「このギランさまの本戦行きを二度も阻みやがったガキの試合なん

て……見てられるか!!」

ギラン、彼は、本来の歴史でも、第21回天下一武道会の第4試合で悟空に敗れ、以降はピッコロ大魔王による武道家狩りで死亡したニューズを除き全く音沙汰なし、という弱小武道家であるが、この歴史では一層試合組に恵まれず、本戦出場すら果たせぬまま燻っていた。

《お二人は共に、前大会で尋常でない力を見せてくれた選手であるとともに、孫悟空選手は亀仙流の奥義かめはめ波、プリカ選手は――

――》
「……オレさまだって必殺技の一つや二つ!」

ギランの性質は、武道家というより、ゴロツキであった。

武道大会に容赦なく特異な身体能力を持ち込み、それが通じないとすると即座に降参する『武』へのプライドの欠如、地元では知らぬものがいない程の暴れっぷり、にも関わらず、名誉と金を求めて武道会に参加する根性、非の打ち所のないゴロツキである。

《さらに、お二人は前武道会で準決勝を争った経験をお持ちですが、今回の武道会では――》

「オレさまも次は……クソっ!」

次は、次こそは、そう言いながら、敵手の試合を見ずに武道会場を離れる彼の目的は、……何のことはない、ジューズを買いに行くことである。

重要な試合を見る機会を捨ててまでジューズなど買いに行く理由は二つ、一つは、自らの必殺技と言える、粘性の高い分泌液を飛ばす技『グルグルガム』によって消費した水分と栄養素の補充を体が求めていること、もう一つは、そもそも試合を見ようと思えないことである。

ゴロツキ、あるいは、荒くれ者である彼にとって、再戦を誓うことは戦いを研究し、その敵のために自らを高めることではない、憎悪を滾らせ、いつか敵を射抜くことを、自らに誓うことなのだ。

だから、わざと敵の試合に背を向けて、それを自らに表明する。

「あいつ……っ?」

そんな彼がパイヤ島の空を飛んでいると、武道会場からほど近いビルの屋上に、何やらロープを纏った『不審な』人影を見つけた。

飛行生物であるギランの目は一般的な人間より遥かに高い分解能を持つ、その男の風体がおかしく、武舞台の方をまじまじと見ていて、何か、球体のようなものを持っているのが、遠目にも認識できたのだ。

「おい、あんた、なんでこんなところで見物してんだ、会場はまだ席空いてるぜ?」

「うるさいわ、あつちに行つてちようだい」

「な、なんだ、オカマ野郎! せつかく人が教えてやったのに……ん?」

ギランは男の酷い態度に苛立ちながら踵(翼?)を返そうとし……男が持った球体、水晶玉であつたその向こうに、何かが写っているのを見咎めた。

「あれ、その水晶玉……」

「見たわね……!」

野生のカンと呼ぶべきか、悪寒がしたギランが一步大きく羽ばたき、のけ反つた瞬間——男の手刀がギランの顔があつた場所を薙ぎ払つた。

ギランの思考が一瞬で呑気な出稼ぎ武道家から、地元を統べる匪賊へのそれと変わる。

「な、なんだテメエ!!」

「ケダモノらしくカンがいいのね、でも、もう終わったわ」

「は——へ?」

まず覚えた違和感は、男の顔が、自らと同じ高度にあること。

翼を持たない人種は(ごく一部の例外を除き)地べたや樹木、建造物に身を委ねねば自らの位置を保つことができない、それは常識のはずだ……が、この男は地面のない場所に立っている。

そして——

「オレさまの……はね……」

「やあねえ、握つて振り回すつもりだったのに、あんまりモロいから……ちぎれちゃつた」

男の両手には、ギランの翼が握られていた。

「じゃ、さようなら」

彼の体はいやにゆっくりと感じられる落下の中、翼の代わりであるかのように血液を噴出させ。

《———プリカ選手———孫悟空選手———!!———!!》

ギランは、熱狂する観客達の声援と、興奮気味の実況を、遠ざかりつつある意識の端で捉え、『やっぱり見ておいた方が良かったかもな』とぼんやり呟こうとして……。

そのまま、パイヤ島の路地裏へと墜落していった。

↓つづく

第二十一話：転生地球人が異星人達の成長を見届けるまで

二つのエネルギー、同じく黄色、大きさも同じそれが激突し、爆散する。

その爆炎が晴れぬ内に、さらなるエネルギーが飛来し、けたたましい音と共に閃光をばらまいた。

「プリカ選手、悟空選手、一步も引かぬ撃ち合いです!! 格闘とはかけ離れたように見えるこの戦いも、また武の一つの姿なのかいっ!!」
煙の中から飛び出した二つの影、二つの五体に二本の尻尾、本来この地球に二人としていないはずのサイヤ人同士が激突する。

両者共に、常人であれば、その一撃どころか風圧ですら耐えられぬ打撃が交わされ、大気循環とは無関係な爆風が観客の頬を撫でてゆく。

影の片割れ、孫悟空は頬についたススを拭いながら、実に愉快げにしていた。

「へっへー、思いつきり力出して戦うのもひっさしぶりだな!」

「……オレはそうでもないんだけど、どうして付いてこれるんだ?」

「オラだってめいっばい鍛えたもんね!」

「そうか……!」

試合が始まってから二分足らず、既に、前の試合でクリリンが放ったエネルギーの量を遥かに超える力が武舞台の上で炸裂している。

……恐ろしいことに、プリカも悟空も、一切疲弊していない。

「ひええ、悟空もプリカさんもピンピンしてやがるぜ……!」

「あれで全力じゃないのか!?!」

クリリンとヤムチャは全く消耗の見られない二人に恐怖しているが……俺にはわかる、二人共全力だ。

その上で、圧倒的なスタミナが彼等の戦いを支えている。

だが、サイヤ人の本領は『ただの全力』などではないし——

「どうしたプリカッ!! お前の技を見せてみるッッ!!」

「勝手言うなあ……!」

「ん……? おお!! オラも見てえぞ!!」

俺と悟空の催促を前に、プリカは小さく、愚痴のような台詞を吐き……その口元もまた、小さく釣り上がっていた。

会場は更なる技の出現に湧き、ライバル達の顔は驚愕の表情に染まる。

「ハ、ハツタリに決まっとるわい! 天津飯、惑わされるんじゃないぞ!!」

「し、しかし鶴仙人さま……!」

「ええい、黙っておれ!」

二人共、3年分鍛え上げた肉体、研ぎ澄した気力を見せても、それに相応しい技、戦いを見せてはいないのだ。

いくら全力を見せつけようと、既に全会場が戦慄しているようにも、全てこの試合の真髄とは無関係だ。

「が……ぐん!!」

プリカはエネルギー弾を手に握り込み、そのまま更に気力を注ぎ込んでゆく。

すると、拳から光が漏れ出し、続いて、拳そのものを光が包み始めた。

「おおーっ! プリカ選手、あの技を、今度は手に掴んだまま膨らませてゆきます!! これはまるで——」

「——ミソシルの技か!!」

エネルギー弾は大きく膨らんで手を巻き込み、まるでハンマー鉄球のようになって腕の先を飲み込んだ。

上体を下げ、両腕を後ろ手に、まさしくハンマーのように構えたプリカは、不敵に笑いながらも、小さくうつむいて目をそらすような仕事をする。

「この技、あいつに怒られそうな気もしたんだけど……オレが考えた技だし、あいつがやれって言ったんだし、しょうがないよな」

「怒られる? 誰が怒るんだ?」

「こつちの話だっ!! があ!!! 『バイナリ・スター・モーニング』っ

!!」

技名!？」

俺がギョっつとしている間に、プリカはスタンディング・スタートよりはるかに低くした姿勢から猛然と駆け出し、その腕を叩きつける。

悟空は一瞬だけその腕を受け止めようとして……回避へと切り替えた!

「プリカ選手の一撃をたまらず避ける孫悟空選手! ああの技の威力、達人には見るだけで分かるのでしようかーっ!？」

技から逃れた悟空は即座にかめはめ波のチャージを開始、短い貯めで即座に発射を試みる……が。

「波ーっ!! お!？」

プリカはバイナリ・スター・モーニングを前にかざし、かめはめ波を完全に抑え込んだ!

「ぐ……これなら、いける!」

「なんと、今大会二回目、かめはめ波を防ぐ選手です!!」

気を発射する技にはどうしても生じてしまう『操作』のニュアンスを捨てることで気の収束率を高め、かめはめ波をも防ぐことが出来るだけのエネルギーを得ている。

それをプリカの膂力、速度で振り回し、俺と鍛えに鍛えた安定性をもって支えるのなら——

「——誰が怒るものか、パワーとスピードを活かして格闘戦技量の不足を無視する、いくい技じゃないか」

俺の声が聞こえているのかいないのか、プリカは再び悟空に向けて突撃を開始する。

だが、最初はその攻撃を前に逃げるばかりであった悟空も、数度、技から逃げるうちにその対抗策を思いついたようだ。

「へへっ! これなら上手く当てらんないだろっ!!」

「孫悟空選手増えましたっ!! これは前武道会で出た技、残像拳です!!」

多重に出現した残像がプリカを取り囲む……が、言うまでもなく、どれだけ残像を増やそうとも体は一つしかない。

「それでも、いたずらに避け続けることで危険を犯すよりは、機動力を發揮して大ぶりに回避した方がいい、冷静な選択だが……」

「っがあ!!」

プリカはバイナリ・スター・モーニングの軌道を振り回すように切り替え、体ごと回転して悟空の『出現位置』を攻撃する。

……戦闘センスの面で特に優れている印象はないプリカだが、あくまでサイヤ人、あくまで武道家、『出現する悟空を振り回しに巻き込む』程度の読みはたやすい!

「うげっ!!」

「孫悟空選手、残像拳も通じず、壁に吹っ飛ばされましたー!!」

悟空が激突した壁は、突入した質量に見合わぬ破壊と土埃を吹き出し、その威力の高さを物語る。

「孫くん!!」

その莫大な威力を前に亀仙流の弟子やブルマ達は悲鳴を上げ……。

「やはり、次にオレと当たるのはプリカか」

……鶴仙流の弟子は小さく呟く。

が、まだ試合は分らん、プリカを応援したいのは山々だが、悟空はこの程度で終わる武道家ではない。

「プリカッツ!! 悟空はまだ来るぞ、備えろッツツ!!」

「言われなくたって……!」

「やったな、プリカ!!」

派手に壊れた壁のガレキから、悟空が這い出した。

ピンピンして……いや、ダメージにも関わらずさらに活性化している、戦闘民族の本領はここからだ。

「へへ、いいこと思いついちゃったもんね!」

「……!」

無邪気な、しかし、その声を知るものにとつては最大限の警戒を促す無邪気な笑い声と共に、再び残像拳が放たれる。

今度は、プリカの間合いより絶妙に離れた距離を見計らった残像拳だ。

狙いは明らかに体力消耗……ではない、悟空とプリカの体力消耗は

今のところ互角、ならば、これは……。

「ぐがあ!! どうした、届かないなら意味ないぞ!!」

「!!」

その瞬間、悟空の目に戦闘知性の輝きが灯る。

「波ーっ!!」

「孫悟空選手、かめはめ波です!! かめはめ波を——」

「宙にツツツ!!」

「あっ!!?」

かめはめ波で加速した悟空がプリカに激突する!

二人はもつれあいながら武舞台の端まで転がり、途中で弾かれるように飛びのいた。

「悟空の戦いに真新しいものは何もない、しかし残像拳に、かめはめ波……同時使用を可能にした技量には目を見張るものがある」

技の組み合わせと技量向上をこなし、新たな局面に遭遇した時でも、既存の技術を必要な形で使用することで打破する。

他選手の試合を見ずに寝てしまうことすらある程のマイペースさを前提としたその武の形は、新技を連発するよりもよほど本来の武に近いともいえるかもしれない。

「が……ぐ……!」

「孫悟空選手のクリーンヒットです! プリカ選手たまらず技を解いてしまうーっ!」

……プリカは即座に体勢を立て直す、……しかし、俺はあの技が命中した瞬間、何か、決定的なものを感じてしまった。

俺はそのカンが当たらぬことを祈るが、戦いは非情に進んでゆく。

「っがああああ——」

「!! たあーっ!!!」

そして、数分後、エネルギー弾と打撃戦を織り交ぜた激戦の中、プリカは密かに大技のチャージを始め……秘匿されたその隙をついた悟空の一撃によって、試合は幕を閉じた。

「よう、おかえり」

「……ああ」

俺が通路までプリカを迎えに行くと、プリカはこちらの顔を見ようとすらせず、うつむき加減で答えた。

「元気がないな」

「間抜けだ、チャージ中にぶつ叩かれて終わりって、そりや、ないよな」

「あの技はしっかり隠されていた、動作も、意もな……、俺は横から見ていたから分かったが、対面だったら怪しい、誇っていいはずだ」
「そうかな」

俺のフォローも、落ち込むプリカには通じない。

「ここまで敗北に弱いやつでもないと思うのだが……悟空相手だとか、わざわざ応援させておいて、とか、思うところはあるのだろうか。途中までのアレも良い技だった、できれば最後のも見たかったがな」

「アレ……バイナリ・スター・モーニングか」

「そういやお前、技に名前付けたり叫んだりするタイプだったんだな……」

「悪いか」

プリカはふてくされたようにこちらを睨む、少しはマシになったか？

「別に、俺のやり方じゃないが、そうやって愛着を持って鍛えれば技も、武も、答えてくれるかもしれん」

「……ちよつとおまえっぽくない言い方だな」

「気色悪いか」

「いや」

そう答えるプリカの声にはまだ覇気がない、直接慰めても足りないか……ならば。

「ま、どちらの技も、防いだ悟空が上手だったということだ、流石と言ったところだな」

「悟空は新技とか出さなかったぞ」

「あいつが新技を自分で出してきた試しはないだろう、いい意味で

マイペースな戦い方と鍛錬、それが悟空の強みだ」

「おまえとは正反対か」

プリカはようやく、皮肉っぽい笑みを浮かべた、プリカらしくはないが、少しは元気が出たか。

「流石は我等のヒーロー、まだこれからの試合がどうなるか分からないが……俺も楽しみだ」

「悟空は強いぞ、楽しみにしとけ」

「言われなくたって楽しみにしている、元から大した奴だと知っている上で、あの試合だぞ」

「それもそうか、いやあ、先に味わっちゃって悪いなあ」

そうこう話していると、何か居心地悪そうにする気配が一つ。

山吹色の道着……話題の人、悟空だった。

「よう、悟空、いい試合だったな！」

「あんな締めで悪かった、次はもっと頑張るから、期待してくれ！」

「お、おう！へへ……」

悟空は照れくさそうに頭を掻く。

うむ、多分、自分をホメまくる会話を前にして、さしもの悟空も近寄りがたかったと言ったところだろう。

……ふと視線を感じて振り向くと、ヤムチャとクリリンが口を半開きにしてこちらを見ていた。

「悟空も恥ずかしがったりするんだな……」

「なんか不思議な感じだ……」

その後もしばらく俺達は試合について……というか、悟空について語らっていたが、すぐに次の試合、天津飯・ヤムチャ戦のアナウンスがあり、屋根に戻ることになる。

「ソシルミはどっちが勝つと思うんだ？」

「なんとも言えん、元の歴史通りなら天津飯だが、ヤムチャも相当鍛え込んでいる」

「それが地の能力差をひっくり返せるほどか、ってどこか」

プリカは少し悩む素振りを見せて、何かに気付いたように、こちら

を見た。

「天津飯はおまえにこっぴどく負けたる、それを根に持つてるみた
いだし、当然、めちやくちや鍛えたんじゃないか」

「確かに、亀仙流への遺恨は相対的に薄れたかもしれないが、実力差は
逆に広がったかもしれない」

「元の歴史だと、ヤムチャの肘か膝ぶつ壊す流れもあったよな……
大丈夫か？」

「……少なくとも、この試合は『赤勝て白勝て』とはいかんだろうな」
俺がそう締めくくると、プリカは緊張したようにつばを飲む。

試合は間もなく始まる、俺は……赤勝て白勝てとは思えず、しかし、
二人の成長と戦いへの隠しきれぬ興奮を抱いて、銅鑼の音を迎えるの
だった。

『亀仙流の弟子二人とソシルミを潰し、オレが鶴仙流の最強を証明
する』

試合前にそう吐いた天津飯は、その宣言通りの苛烈な攻撃によつて
ヤムチャを追い詰めつつあった。

「はっ!!! たっ!!!」

「く……! はい!!!」

互いに交わされる拳、天津飯が優勢であればヤムチャはフットワー
クでそれを覆し、ヤムチャが優勢になろうとすれば、天津飯は舞空術
でそれを躲す。

天津飯の戦闘法はチャオズとは対照的で、フットワークを重視した
戦闘の中、敵の攻防におけるタイミングを外すように舞空術を用いる
ものだ。

「チャオズが用いた舞空術とステップの組み合わせの発展型、ある
いは別の形と言った所か、完成度は天津飯が遥かに上だな」

「ヤムチャも頑張ってるぞ」

プリカの言う通り、武舞台を見れば、一進一退の攻防が繰り広げら
れていた。

舞空術を併用したハイキックに対し、ヤムチャは素早く上体を下げ

て、自らはミドルキックを放ち返礼する。

天津飯は苦し紛れの肘で辛うじてを受け……力づくでそれを跳ね除けた。

片足を取られかけたヤムチャは、しかし全く動じることなく飛び退き、体勢を立て直す。

「確かにヤムチャの進歩には目を見張るものがある、体捌きと突き込みの鋭さだけで言うなら、天津飯を上回っているかもしれない」

フットワークに舞空術を交える天津飯に対し、ヤムチャは自らの足だけでそれに対抗している。

舞空術という圧倒的な技術、弟子入りの遅れによる鍛え込みの差、地球人と三つ目人に存在する根本的なフィジカル差を抱えつつも、動きのキレの良さによって、決定的な攻撃を防いでいるのだ……が。

「天津飯選手、果敢に攻めます！ ヤムチャ選手は今の所防戦一方です！ これからどうするーっ!!」

……アナウンサーが言うように、今の所、試合は天津飯優勢で推移している。

しかし、俺はまだ、ヤムチャの勝ち筋がないとは考えていなかった。

「ヤムチャは適切に地盤を固め、手持ちの能力を昇華した……後は互いの隠した手札と、底力が勝負を決める」

「その二つなら、天津飯が大分有利になる」

「だろうな……だが、まだ勝機がないって程じゃない」

俺の言葉に応えるように、二人は同時に飛びのいた。

天津飯がヤムチャとのインファイトを拒むように腕を振るっただだ。

当然、隙は生じるが……それを突かせる天津飯でもない、武空術を使って後方に飛び、ヤムチャもまた、取って返しての攻撃を警戒して飛びのき……この状況が生まれた。

天津飯は自信をもって語る。

「ふん、このまま殴り合いを続けてもいいが、それではつまらん」

「ビームの撃ち合いがしたいってか？ へっ、あのまま続けりゃ勝ち目がないと踏んだかい？」

「どうする？」

ヤムチャの強がり、あるいは本気の挑発を無視して、天津飯は一步踏み込み……ヤムチャは、手を二つ、前にやった。

「これは……かめはめ波の構えです！ 武天老子さまの三人目のお弟子さんも、かめはめ波を使えるようです!!」

「……かめはめ波か、いいだろう、来いっ!!」

「か……め……!!」

ヤムチャは脇腹に両手をやり、挟み込むようにしてエネルギーの蓄積を開始する。

かめはめ波の構え、『にわか仕込み』ではない、亀仙人が教えたであろう、本式のかめはめ波だ。

ヤムチャには知る由もないが、天津飯はかめはめ波を消し去る技術を持つている、もしそのまま放たれたのであれば、試合の流れは完全に天津飯のものとなるだろう。

「は……め……」

だが、ヤムチャは四文字目、エネルギーを懐に蓄える段階に入って、その口を閉ざした。

そして、抱えたかめはめ波をそのままに、重心を下げに下げ……一気に力を解放し、前方に飛び出す！

「はいーっ!!」

「なっ!!」

「ヤムチャ選手、なんと、かめはめ波を持ったまま走り出したーっ!!」

駆け出したヤムチャの手にはかめはめ波……おそらく、今武道会だけで二度も防がれたエネルギー技を信頼せず、突撃して直接放つつもりなのだ。

天津飯はそのたくらみを防ぐため、今度はヤムチャに向けて自ら突撃を開始する。

荒野のハイエナ、砂漠の狼、そう名乗るだけはある足腰の強さが、気を貯めながらの突撃という現時点では高等極まりない技を支えていた。

「ヤケになったか！ 両手がふさがった状態でこのオレに――」

「――田舎もんめ、スポーツもダンスもやらないのか!？」

ヤムチャは倒れかけの姿勢を更に下げ、同時に体を反転させる……これは！

「抜けたーっ！ ヤムチャ選手抜けました！ 背中中で床を滑る、ブレイクダンスのような動きです!!」

「!!?」

「道着じゃちよつと滑りにくいのが、これで――」

だが、天津飯は完全に予想外の動きに辛うじて反応し、ヤムチャに回り込まれたその瞬間、天高く跳躍する！

その狙いは間違いなく、ヤムチャが抱えたかめはめ波の照準を逸らすこと！

しかし、プリカは空を見上げて、それから地面のヤムチャがかめはめ波を構え直したのを見てかぶりをふった。

「でも、飛んだだけじゃまた狙い撃ちだ」

「ヤムチャが狙いを定める間にどどん波を撃てるなら……いや、まさか!!」

跳躍の勢いそのままに上空を浮遊する天津飯、ヤムチャはその決して高速とは言えぬまでも、生半可な集中力ではとらえられぬ動きを見逃さぬよう、目を見開く。

「プリカ、目、閉じとけ」

「え!? あ、ああ!」

プリカが目をぎゅつと閉じ、俺は汗を拭うような仕草で誤魔化しながら天津飯の直視を避ける。

そして、次の瞬間――

「太陽拳!!!」

「ぎゃっ?!?!」

天津飯が叫ぶと同時に、武舞台のヤムチャ、そして会場のあちこちから悲鳴が上がる。

「天津飯選手が閃光を放ちましたっ!! その輝きに目を焼かれたヤ

ムチャ選手、それと会場の皆様が非常に苦しそうにしています!!」
「くああ……目閉じただけじゃダメか……」

ついでにプリカまでやられた。

ヤムチャはぼつちり目を焼かれたらしく、目を押さえて悶える……といった醜態は避けたものの、かめはめ波は霧散し、かろうじてファイティングポーズを保っているだけの有様だ。

「約束通りいいものを見せてやっただろう……? だが、もうシヨは終わりだ、どどん!!」

そこに追撃のどどん波が突き刺さる、ヤムチャは声と音を頼りに防御姿勢を取ったものの、まともに食らって焦げながら数メートル吹き飛んだ。

最早趨勢は決した、後はどどん波で押し出せばいい、会場の誰もがそう思ったであろうその時、天津飯は吹っ飛ぶヤムチャに向け急降下を始めた。

会場の半分は更なる技に興奮し、もう半分は、過剰な程の攻撃に恐怖を抱きつつある……師匠はどうやら前者、亀仙人は後者のようだ。

「あそこから更に技を重ねるとは、慎重ですな!」

「こりゃ! 人の弟子だと思って!!」

そして、天津飯はヤムチャを地面に叩きつける……のではなく、むしろ、ヤムチャを掴んで上空へと加速する。

未だ苦痛にあえぐヤムチャの抵抗をあつさり制圧した天津飯は何やら全身に力を込め始めた。

「て、天津飯!! よさんか!!」

「言っても無駄だ兄者」

天津飯が放たんとする技の正体を知るものは本人含め会場にたったの五人。

鶴仙流の三人、そして歴史を知る俺達だけだ。

「お……おい、ソシルミ、あれって……」

「四妖拳!!」

慌てる鶴仙人が見守る中、天津飯の肩の後ろ、背中に差し掛かる辺りから二本の肉の塊が突き出始める。

四妖拳、二つの腕を追加で生やし、合計四本の腕で敵にあたる技だ。「技つつーか……見れば見るほどおかしいぞ！ どの骨につながってるんだあれ！」

「通常の技の概念どころか、解剖学まで無視している、俺にもどうなっているのか分からないのが……」

それより更に分からないのは、天津飯がなぜこの局面であんな技を使うのかということだ。

既にヤムチャは言葉通りの死に体、どどん波でも決着はつくし、直接攻撃で手を下したいとしても、そのまま蹴るなりなんなりすればよく、わざわざ拘束した上で腕を増やす理由はないはず！

「便利な技に見えるだろう、だが……人の形から離れれば鍛えた武術を自ら捨てるのと同じ、よって——」

「——天津飯選手が増やした腕でヤムチャ選手を更に拘束しています、まさかこれは——っ！」

「あ、阿修羅バスターっ!!？」

プリカは思わずといった感じでそう口にしたが、それも無理はない。

四本の腕でヤムチャの両手をホールドし、天津飯はそのまま地面に向け加速していく！

「確実に敵を仕留めるために使う!!」

天津飯の叫びを前に、やっと技の本性を理解した観客達が恐れおのぎ、ヤムチャの兄弟弟子二人は必死に脱出を訴える！

「ヤムチャーっ!! なんとか逃げろ!! 死んじまうぞーっ!!」

「ヤムチャヤーん!!」

しかし、無情にもヤムチャは既に抵抗する術を完全に失い、呻くことしかできない。

「が、ぐ、ぐああ……」

「安心するといい……このオレが迂闊に敵を殺すようなハマを……するとと思うか!!」

ヤムチャは碌な抵抗も出来ぬままに地面に激突。

まず落下したのは胴体、それだけでもダメージは計り知れないが、

さらに、落下の衝撃で拘束……否、『極め技』が完成し、腕が完膚なきまでに破壊されている！

「け、決着!! 明らかな戦闘不能のため、カウントは省略します!! 早く救急車をーっ!!」

「キヤーっ!!! ヤムチャーっ!!!」

「ヤムチャさまーっ!!」

恋人と子分、そして、全会場がヤムチャのために叫ぶが、ヤムチャはピクリともせず、血が混ざった泡を吹くばかりだった。

「おい、ソシルミ、オレの試合を見ただろう」

「ムグ……モニユ……ああ、見た」

俺が控室の片隅、おじやをかつ食らっている、そこに天津飯がやってきた。

ホコリを舞い上げて食べ物にかからないよう、そつと歩くおまけ付きだ、細かい所で育ちがいい。

「きさまもああしてやる、決勝戦でああなりたくなかったら、棄権でもしたらどうだ?」

「いやあ、いい試合だったじゃないか、余計に楽しみになったね」

「お、おい、ソシルミ!?!」

「いい試合だと……!?!」

プリカは慌てたように、天津飯は驚愕と侮られた怒りの入り混じった表情で俺に聞き返す。

「互いに武術の技を交わし、気を用いた技も出し合い、その上で策を競い、勝利者は油断することなく止めを刺す、これをいい試合と言わずなんとする……まあ、俺はああまで敵を痛めつけようとは思われないが」

「きさま……!?!」

「やめとけ、多分ソシルミは本心で言ってるぞ、オレもちよつとヒクけど……!?!」

ジト目、というか本気で引いている視線だ、解せぬ。

確かに、試合前こそ、天津飯がヤムチャを過剰に痛めつけるのでは

ないかと心配していたし、実際行われた試合でも、ヤムチャは過剰に痛めつけられたが……。

あくまでそれは、試合の中で、敵手を確実に仕留めるためのもの、大会ルールや本人の優しさが許さないというのでないのなら、第三者が口を挟むことでもなんでもない。

「きさまら、おちよくるのもいい加減に……」

「おっと天津飯くん、わたしの弟子が何か失礼を働いているのかね？ すまないが、こいつは昔からちよつと挑戦的な所があつてな」

天津飯がいきり立って、俺達に詰め寄ると、追って師匠が現れ、天津飯の肩を掴んだ。

師匠は『全く誰に似たんだか……』と呟き、友好的なムードを演出するが、その筋肉は隆起し、『ここで私闘をする気なら三対一になるぞ』と言わんばかりである。

「くっ……いいか、ソシルミ、決勝戦で待っている!!」

分が悪いと察したのか、天津飯は捨て台詞を言って去っていく、まあ、俺も天津飯とやりたいのは山々だが……

「お前が悟空に勝てたら、な」

捨て台詞に独り言で返すと、隣の師匠はわざとらしく肩をすくめてみせた。

「全く、おまえも厄介なのを敵に回したものだな」

「あの件については師匠筋と話が付いているのですから、私相手の復讐戦は私闘です、ま、嬉しいものですがね、私にとっては」

「相変わらずだな……プリカ、おまえも苦労しているだろう」

「結構楽しいですよ、今みたいにびっくりすることもありませんけど」
プリカが俺のこういう話題でフォローに回るとは意外だ……師匠はそれを見て、何かゲスい顔をしている。

師匠は弟子である俺が女と同居しているのが気になって仕方ないのだ、3年間否定され続けても全く諦めない。

「そうだ、ソシルミ、相変わらずと言えば、おまえ、今も試合前にその、変な食事をやっておるのか」

「ヘンとはなんです、ヘンとは、いいですか、炭酸抜きコーラで当座

のエネルギーとカフェイン、それに水分を、おじやで炭水化物と食物繊維、タンパク質、それに……」

「いい、わかった、補給と験担ぎだったな、散々聞いたわ」

「どうです、師匠も、これから試合でしょう、それも……多分、大一番」

そう言つて、俺は新たにホイポイカプセルを取り出して師匠に差し出すが、『お前のよく言う”超人的消化力”は持っていない』と突っ返されてしまった。

「どちらにしろ……時間だ、ソシルミ、そろそろ行くぞ」

「ええ、よろしくお願いしますよ」

俺が手を差し出すと師匠はそれをしっかりと握り、次いで不敵な笑みを作る。

「鶴仙人の小姓を叩き落とした程度でわたしの力を測れたと思うなよ、リベンジマッチは……弟子の特権ではない」

俺は何も言わず、ただ、”あの笑み”でそれに答えた。

↓つづく

第二十二話：転生地球人が始まりを想うまで

「それでは第五試合、はじめっ!!」

熱狂する会場の中心で、アナウンサーが声高らかに開始の合図をかけ、銅鑼の音が鳴り響く……しかし、その音が止む頃になっても、俺達二人が構えを取ることはなかった。

会場の熱狂はやがて困惑を帯びたざわめきへと変わっていく。

……俺達が構えを取らない理由は唯一つ、目の前の敵手、我が師匠であるチャパ王に、その気がないからだ。

「なあ、ソシルミ、わたしはこの4年弱、おまえを倒すために、随分鍛えてきた」

「存じ上げております、道場へと帰るたび、厚くなる肉と高まる覇気を見てきましたから」

初めて気付いたのは3年前、DELICIOUS菜館での宴会だったか。

あの時はまだ、師匠との再戦は鍛錬程度にしか考えておらず、変化もまだ、違和感程度であったが……。

「あ、あの、チャパ王選手……? 第五試合、もう始まって……」

「まあまあ、マイクパフォーマンスというやつだ」

「師匠、それはプロレスの言葉です」

「いいじゃないか、おまえも聞く気だろう? ……わたしはガラに

もなく、おまえのマネで、砂袋を体中につけて鍛錬してみたりしたものだ」

やったなあ、それ。

重量トレーニングをするために、想像出来るような重りは全部付けた。

重くしたりユックサックを背負い、砂袋やチェーンを巻きつけ、鉛を編み込んだ服を着込んだ。

「あの時は異様に見えたが、なかなかどうして、いい修行になった」

「……まあ、へんな目で見られているのは知ってましたが」

「後は裸足で砂漠に踏み込んでみたり、重りをつけたまま泳いでみ

たり、崖に飛び込んでみたり……」
全部やった。

それで、足がズルムケになったり、浮き上がれずに湖底を歩いて脱出したり、本気で死にかけたりした。

訓練強度だけで言えば今の方が強いが、当時は浮かれていたのもあつて……大分無茶をやったな。

「ああ、銃も受けてみた、軍に命令してだがな、最近、魔族はほつき歩いておらん」

そこまで話した所で軽く周囲を見ると……亀仙人、鶴仙人含めた全員がかなりヒいている。

唯一平気な顔、というか、普通の範囲の呆れ顔なのは、一緒に鍛錬していた時期のあるプリカだけだ。

「な、なるほど！ チャパ王選手は愛弟子との再試合のため、激しい鍛錬を積んでいらっしやったというわけですね!!」

「その通りだ、この歳で大きな飛躍は少々キツイかと思つたが……なかなかどうして、為せば成るものよ」

……師匠が何をしたのか、俺に何を語ろうとしているのか、俺にははっきりと分かる。

俺が4年前、師匠を打ち破った時、俺の手には莫大な才能と鍛錬による力、そして、13歳の幼さを補つて余りある、亀仙流や『グラップラー刃牙』等を参考にした鍛錬で得た力があつた。

そして今、そのアドバンテージは失われた、師匠は俺が何を知っていたのか、何を元に修行したのかを知らぬまま、それを克服したのだ。

「さ、やろうか、ソシルミ!!」

「ええ、やりましょうか……師匠!!」

「ついに試合が始まります、両者、しっかりと構え——」

がなりたてるアナウンサー、そして沸き立つ、あるいはブーイングを飛ばす観客達。

それらをよそに、俺達の再戦は、静かに始まったのであつた。

「ダアーツツ!!」

「むん!!」

静寂を引き裂いたのは、二人の放つ鬨、そして、拳の激突する金属音だった。

それと同時に、一人分の、師匠の血液のみが作る血煙が武舞台の空を濡らす！

「その技か！ 師を相手に容赦がないな!!」

「使わぬのは殺し技のみツツ!! 師を相手に出し惜しみは不要と心得ておりますがッ!」

「当然よおっ!!」

「流血！ チャパ王選手、凄まじい勢いで流血しています!! しかしそれでもなお、一步も引きません、弟子を相手に何を恐れることがある！ そう言わんばかりに、果敢に攻めていきます!!」

……明らかに上昇した身体能力、安定性、それらは既に達人の領域にあつた師匠を、超人の域に踏み入れさせ——否！

超人としてさえ優秀なレベルへと昇華させている！

とはいえ、出し惜しみなしの輝く手を前にしては、いくら打撃戦が成立するだけの技量を持っていても、皮膚が持たない。

しかし——

「さすがじゃのう、ああまで流血してもなお、技に一切のブレがないわい」

「それより武天老子さま、ソシルミの手が……!」

「うむ、動きが変わりつつある、これは……」

突きを輝く手の手刀で弾き、師匠が放つ手刀を、今度は”ただの手の甲”で逸らす。

師匠の攻め手を受ける中、俺の手からは輝きが失せ、ただの生身の手となってゆく。

「お、おい！ ソシルミ、どうした!」

「ソシルミ選手、手の光を消してしまいましたーっ!! なにか作戦があるのか、それとも、チャパ王選手がなにか技を使ったのでしょうか!」

……これは師匠が何かをして、俺の技を妨害したわけでも、俺の力が限界に達したわけでも、ましてや、情に流されたわけでもない。

「なるほど、チャパ王とやら、考えたな……」

「桃白白さま、分かるのですか」

「ふん、分からん方が未熟なのだ、気を高めたままの手で精緻な動きをし続けるにはそもそも無理がある、あやつは相当鍛え込み、大分克服したようだが……」

「技で劣る力任せの者や同年代の武道家を相手にするにはよくとも、おのが師と、それも接近戦を演ずるとなれば、その強張りは致命的なものとなるじやろうな」

仰る通り。

この世界において『気』とか『戦闘力』とか『スピリット』とか呼ばれる一連のエネルギーは、操作する際、”強張り”を伴う。

鍛錬によつて克服できないというわけではないのだが……やはり、師匠の技に対抗するためには、足りないのだ。

「ははは、ソシルミ！　これで条件は対等、きさまが練った技は、その半ばが無に帰したというわけだ!!」

全くもつて、仰る通り！

この俺が新たに得た技は、その殆どが『輝く手』をベースにしたもの、それを封じられた今、俺に画期的な技は最早ない、それこそ、『相似拡大されたあの日の俺』と何も変わらない。

だが――

「私が得たのは技だけではありませんよツツ!!」

「虚勢だな、おのれの嫌う鍛え込んだだけの武道家になったことが怖い、ソシルミ!!」

師匠の拳が俺を襲う、未だに八手拳は飛び出さず、しかし、激しい攻め手……俺の両腕はそれを――内心の動揺を物ともせず――寸分も、刹那も損じぬ動きで捌いてゆく。

「ソシルミ選手、技を封じられてもなお、一切引かぬ動きです！」

「あの技がなくなつておまえの力も技も、チャパ王よりずっと上だ!!」

プリカの叫びは決して欲目や色眼鏡によるものではない、俺と師匠の技量は互角……いや、上ですらある、そして、力は言わずもがな。

ならば――

「地力で勝る弟子との競り合いに敗れ、懐から追い出されたときが、やつ最後のだ」

「しかし……仮にもソシルミの師匠でしょう、あの男の師ともあるものが……」

「あの男なら、あの男の師なら、か……、亀仙流のガキといい、あやつといい、こうも強い影響力を持った人間が次々現れるとは、まるで兄者と亀じじいの……」

「その話はよせ、桃白白！」

100合、200合、300合、次第に加速してゆくインファイトの中、師匠の息が切れ始める。

無理もない、そもそもからして、体の出来が違う、若さが違う、そこに力の差までが加わっているというのに、更に強引な攻め手で体力をすり減らしているのだ。

だが、しかし、そんなことは戦う前から、武道会の前から分かっていること。

師匠は持っている、追いつがるために支払ったダメージと体力を上回るだけの価値、俺を打倒するための、何かを！

「両者、密着するような距離で激しく打ち合っております、一步も引かず、相手を逃がすこともない戦いぶりは、師弟だからこそ演じるこゝとが出来るものなのでしょうか!？」

「……！ 見えたかクリリン！ 悟空！」

「え、ええ……！」

「おっちゃん動きが早く……いや、ミソシルの動きが遅くなってるのか！」

俺の拳が師匠に向けて飛ばば、師匠はそれを跳ね除け、俺の返す刀が師匠の追撃を叩く。

数百、数千の撃ち合いの中で幾度も発生したその流れに、一瞬のほころびが生まれた。

「クッ……！」

「はは、どうした、大分もどかしそうだな、ソシルミ!!」

一瞬だが、返す刀が遅れる、その分を体幹の動きと強引な引き戻しで補うが、その度に余計な消耗が発生し、次の手は、更に遅れる。師匠の右拳が俺を襲えば、肩口で顔を守り、拳の甲で拳を逸らす……その構えを前に軌道を変えた拳を更に追って、こちらの拳を合わせる。

その動きの最中、下げられている左拳が俺の喉に向け――

「――シイツツ!!」

「浅いか!!」

文字通り、首の皮一枚を血煙と共に弾き飛ばして突き抜けてゆく!

「りゅ、流血です!! ここに来て、ソシルミ選手、流血!!」

「ソ、ソシルミ!?!」

一手、最後の一手が遅れ、師匠の攻撃を防ぎ切れない。

そして、同じように……こちらの攻撃は最後の詰めの部分で潰されてゆく……これは!

「あ、あれがソシルミの師匠の技術力……!」

「いや、ソシルミとチャパ王の技術は互角か、あるいは、ソシルミの方が上じやろう」

「じゃあどうしてソシルミが押され始めてるんですか!?!」

次々と重ねられる拳に、一切俺を上回る点はない。

遅く、軽く、弱い……だが、その拳が俺の攻撃を跳ね除け、防御を貫いてゆく。

「分かった!!」

「わ、分かるのか悟空!!」

「分かるけど、マネは出来ねえ、ありや多分、おっちゃんにしか使えない技だ!」

「……は?」

拳が俺の皮膚をカスリ、肉を打ち据え、次第に俺の体に傷を増やしてゆく。

これはまだ俺が一介の弟子出会った頃味わった感覚……ではない、全く違う!

これは一切未知、未体験の苦戦だ!

「どうしたソシルミ、打開策がないのなら……わたしの息が切れるより、きさまの息の根が止まる方が早いんじゃないかっ!？」

「止めたら……反則ですツツ!!」

「憎まれ口をたたく余裕ができたということは、なるほど、もう見抜きおったか!」

「ごうも分かりやすくしては!!」

師匠の拳が俺に向かう、その瞬間、俺は迎撃を行い、師匠はそれを防ぐべく新たな動き——軌道や手の形の変化——を織り交ぜてゆく。

その動きが、次の俺の動き、そして、俺の拳が演ずる『最後の一手』、すなわち……!」

「反射神経ツツツ!!」

「その通りよ!!」

俺が夢見たあの世界、俺が名乗る血を持った男が持っているのと同じ”鬼の反射神経”、それが激しい打ち合いの中、一合ごとに発揮され、俺の攻防一挙手一投足を支え、土壇場で優位性を確保してくれている。

だが、師匠がやったのはそれを逆利用し、文字通り『反射』的な対応を誘導すること、まさしくそれは——

「私を倒すための拳、というわけですか!! 弟子相手に大人げないことでツツ!!」

「なにせわたしはリベンジマッチを挑んでいるのだ、許されぬわけもあるまい」

ただ反射神経の存在を知るだけではこんな技は使えない、この俺の師として8年の成長を見守り、手を離れた後も戦いをつぶさに観察し続けた同門……師匠だけが、たどり着ける、対アエ・ソシルミ限定の絶技。

他の誰にも真似できない、真似できるものがない、あえて倣おうとはしないだろう。

俺は頭皮から垂れた血が撫でる頬を吊り上げ、いくつも擦過傷のついた手きつく握りしめる。

「奮^フツツツ!!!」

「ぬ……!?」

反射神経、俺が土壇場で用いる最後の身体機能、それを読まれ、逆利用されているのならば!!

「おーっと！ ソシルミ選手気合を入れて……徐々に攻撃を押し返しているように見えます!!」

拳と拳が交差する瞬間、師匠は精妙に自らの拳を操作し、それに対応する反射神経に導かれた俺の拳が次の動きに入りにくいよう、攻防の精細を欠くように誘導している。

その反射神経の持ち主、この俺ならば、期待される動きを避け、反射神経の働きが害を成さぬよう、事前に制御することも可能!!

「——ツツツツ!!!」

「ク……！ よもや、こうも容易く……!」

あと一手で俺の拳が届く、その瞬間、師匠は激しく飛びのき……俺が押された分と合わせ、ちようど、武舞台の中央から同じ距離に立つことになった。

「ハア……ハア……」

「珍しいじゃないか……、こんな序盤で、おまえが、息を切らすなんて……!」

「ほ、本当だ……！ オレとの試合の時は、あんなに必死でやらなきゃダメだったのに……!」

師匠の技は俺に無駄な消耗を強い、それを破るために用いた強引な動きもまた、俺の体力を大幅に食った。

これまで俺は自らの土俵に敵を引きずり込む戦いばかりを行ってきたが……同じ土俵を持つ相手との闘いの厄介さなど、久しく忘れていた!

「ははは！ 師匠、私の弱点を二つも教えてくださるとは、流石は我が師と言ったところですが、でも、こんな大舞台など使わず、口で言うてくだされば、よいものを!!」

「わたしはおまえの師として得たものを試合に活かす気はない、というだけだ」

「今までののは、策ですらなかつたと?」

「そんな勘違いはシヤクだからな、先に披露させてもらった」

師匠は本気だ、観客席で亀仙人が『え!? マジで!? 教え導くとかじゃなくてガチリベンジマッチ!?』とばかりに驚き倒しているが、あくまで師匠は本気で言っている!

「……師匠」

「なんだね?」

「私は嬉しい、貴方が本気で牙を研ぎ、この私を……再び、喰らい尽くそうとしていることが」

俺の笑みに、師匠もまた、笑みで答えた。

微笑みではない、獰猛な肉食獣、否、鬼か悪魔の笑みだ。

そして……師匠はその笑ひのまま、八手拳の構えを取る。

「こ、この構えはまさか……」

「その通りだ、アナウンサー……、これこそがわが奥義、4年前、ソシルミと交わし、そして敗れた奥義、八手拳だ! 行くぞソシルミ!!!」

「前と同じ轍は踏まぬと、そう確信しているのですね……師匠ツツツ!!」

俺もまた、構えを取り――

「――ツツツ!!!」

「………!!!」

――次の瞬間、両者は激突、一度に八の残像を生み出すと言われる奥義はあの日と同じく、同時に炸裂した!!

「こ、これは凄まじい技の応酬です、わたしには全く何が起こっているのかわかりませんが、とにかく、拳の残像だけが、凄まじい勢いでハネ上がり、まるで飛沫上がる滝壺のようです!!!」

師匠は、何かをやるうとしている。

これは誰が見ても間違いないことだ、この戦いに勝ちたいのであれば、俺はこんな……見え透いた焼き直しになど、乗る必要はない。

「あれが音に聞こえた八手拳……なるほど、大した技じゃ」

「す、すげえ……! 多林寺でもあんな技は……!」

「どうやって捌けばいいのか検討もつかねえ……オラワクワクして

きた！」

丁度俺と同じ笑みを浮かべた師匠の頬が更に釣り上がり、凄惨な笑みを浮かべた。

500合、700合、1000合、拳が次第に加速してゆく。

1500合、2300合、ギリギリ見える拳は、感覚でしか捉えられぬ拳となり、その速度は――

「な、なんと!! チャパ王選手の八手拳はどんどん広がり、残像もなめらかな……まるで板のようです!! なんとということでしょうから!!」

「まさか……、ソシルミの師匠とはいえ、あんなことが……!」

「四本では足りぬなあ、天津飯、あれをいかにする? 勝ったほうがおまえの敵だぞ? おまえが尻尾の小僧に勝てれば、だがな」

「え、縁起でもないことを言うでないわい!! 亀の弟子なんぞに負けるわけなからう!!」

半透明な壁のように広がった、目にはそう見えるその拳は、しかし、技術力を失っていない!

「ツツアアア!!」

「ふ、ふふ、ふふふ……!!」

俺は八手拳を更に加速させ対応するが……駄目だ、あの技とは『もの』が違う!!

もはやこの技は八手拳ではない、八手拳の術理を保ちながらも、全くの別物、別の技法。

「この……技はツツ!!」

「むかでけん百手拳」

「何ツツツ!!」

俺のうつろな問いに、師匠は静かに答えた。

師匠の拳は更に速度を増す、俺の拳はそれに追随するため速度を増し……しかし、だめだ。

『八手拳』の威力は、これ以上上がらない。

「カアアアアアツツツ!!」

「ハアアアア!!」

右こめかみ、右上腕、左頬、次第に俺の体に傷が刻まれ、その度に血煙が残像の華を彩る。

そして、ついに――

「トアアアー!!!」

「ゲブ――ツ」

「め、命中！ チャパ王選手の拳が、ソシルミ選手を捉えました!!」胸部に激しい打撃……いわゆる、ハートブレイクショットが、命中した。

俺はそのまま後方に転がり、武舞台端にうつぶせの右手が転がり出る。

「落下……は、しておりません！ ですが、ソシルミ選手は戦闘不能――」

「黙っている、この程度でくたばるタマではない……おい、ソシルミ!!」

追撃をやめ、アナウンサーまで制した師匠が俺に語り掛ける。

「あ、あの……チャパ王選手、お弟子さんは……」

「黙れと言っている、ソシルミ、きさま、狸寝入りはよせ」

「……バレておりましたか」

「バレルも何も、おまえがアレでくたばるなど、金的を打ったところであり得んわ」

「人を何だと」

「鬼、昔自分でそう言っておるのを聞いたなあ」

それは、確かに修業時代、何度か言った覚えがあるが。

とにかく俺は、師匠の言葉に答えるため、あおむけになる。

「ソシルミ、おまえがああ、ピカピカ光る技にかまけている間に磨いた牙だ」

「……そのようで」

いろいろと言いたいことはあるが、口は動かない。

肉体のダメージではなく……精神のダメージからだ。

ああ、師匠は本当に嬉しそうな顔をしている、弟子相手に雪辱を晴らして、本気で喜んでいる。

「どうだ、一度破った者に破られる気持ちは」

「まだ敗れてはおりません」

あの日、俺は師匠から貰った卒業課題、八手拳の応酬を、俺の勝利で締めくくった。

『……師匠、俺が強くなれたのは貴方のおかげです、俺がどこまで行っても、貴方の武術と一緒にいます』

俺は旅立ちの日、確かにそう言ったのだ。

「ソシルミ、おまえはわたしを、あの日の戦いを裏切ったと思うか」

「思います、私はあの日の戦いを、誓いを……」

違う、やるべきことは、悔いることではない。

「師匠」

「なんだ、弟子」

「私はこれまで、さまざまな戦いを勝ち抜いてきました、どんな敵わぬ敵とも遣り合い、奇跡的な勝利を刻んできた」

敗れて悔しい？

そんな言葉は俺には似合わない、届かぬならば、今手を伸ばせ、手が伸びぬなら、飛び上がれ、それでも届かぬならば考えろ。

俺の決意に答えるように、屋根の上から声が飛ぶ！

「ソシルミ！ まだ、やれるんだよな!!」

「当然ツツツ!!」

俺は寝たまま飛び上がり、着地と同時にファイティングポーズを取る。

「ソ、ソシルミ選手立ち上がりました!! ハートブレイクショットにも関わらず、ダメージの色を見せません!!」

「当然も当然でしょう、誰が私を鍛えたと思っっているのです!!」

「このわたしだ!!」

観客達は俺の再起に、さらなる戦いに熱狂をもって答える。

そうだ、それでいい、この熱狂は俺と、そして師匠の熱狂だ!!

「今度も奇跡を起こします、我々師弟の物語を、こんな復讐戦などで終わらせることは、絶対にしない!!」

「ならばやってみるか、ソシルミ!!」

俺は八手拳の構えを取る。

師匠もまた同じ構え、だが、その体に練られた気——不思議なエネルギーなどではない——の質が、決定的に異なっているのを、俺は感じた。

……俺はあの攻防の中、俺は百手拳の術理を体と頭と、魂で理解し……しかし、その全てを体得するには至らなかった。

だが、そんな事は関係ない!!

「チャリアアアアツツツ!!」

「……………!!!」

俺と師匠の拳が、貫手が、手刀が、鍛えた指を用いた尋常ならざる形の手の攻め手が激突する。

俺の拳はやはり『八手』、師匠の拳は『壁』。

しかし、俺の八手拳は先のぶつかり合いの時より、数段早く、数段重くなっていた。

「ソシルミのやつ、あの一瞬で師匠の技を盗みおったか……」

「あれが分かるんですか?! 武天老師さま!」

「ああ、しかし、さすがに不完全のようじゃ、あれでは追いつくことはできんじやろう……!」

強化された八手拳は、しかし師匠の百手拳を打倒するには足りない、このままではただの焼き直しになるだけだ。

だが、当然——

「この程度か!」

——俺の顔は、いつものように、それ以上に、笑う。

「どうやら、違うようだな……!」

八手拳、それは拳の密度を極限まで高め、そこから生じる残像による幻惑と反撃を許さぬ攻勢で敵を圧殺する奥義。

その点で言えば、師匠が生み出した百手拳はまさしくその究極系、つまり、その方向性でそれより先に行くことはできない。

ならば、俺が知るすべてを使って、その先へ進める具材としよう。

「だおオツツツ!!」

「ソシルミ選手の雄叫びです……その雄叫びと共に、何か……何か

が破裂するような音が鳴り響いています!!」

破裂音。

それは、俺が『気力大移動』と呼んだ技の原型、本来あるべき姿が伴っていた音。

「ク……!!」

「——ツツツ!!」

音が鳴るたび、師匠がうめき声を上げ、百手拳の壁が揺らぐ。

俺の拳は八のまま増えず、しかし、師匠の腕からは断続的に血煙が弾け飛ぶ。

「す、すさまじい光景です!! この様を何かに例えるならば、大輪の赤い花、赤い蒸気を振りまく美しく赤い花とでも言うべきでしょうか!!」

異音が上がる速度は高まり、赤い煙は密度を増す……そして、その20か、30回目。

「ダアアツツツ!!!」

「ゴフ………!!!」

俺の拳が、師匠の胸へと突き刺さった!!

「ぎ………残像がほどけるように消えてゆきます、まさしく花の散華、いえ、開花なのかもしれません……!!」

「よっしやああ!!!」

屋根の上の相棒は高らかに歓声を上げている。

「グ……フ………! 八手拳の内に、とんでもないものを仕込みおる

わ………!」

「分かりましたか、さすがです」

「分かっても見きれぬ………良い技だ、名をなんとする」

「………名、ですか」

プリカとも話したが、俺は基本的に技に名を付けない。

だが、この技を、八手拳の、百手拳のさらに先にある物として、極めるのであれば。

「ひとまず、八百拳やちひゃくけんとでも」

それを聞いた師匠は俺のぶつきらぼうな言い方に呆れたように

笑って、ゆらりと体を重力に任せた――

「ダアアアアア!!!」

「――ツツツ!!!」

――次なる踏み込みのために!!

「チャ、チャパ王選手、突如反撃、高速で踏み込み、ソシルミ選手に叩き込みます!!」

アドバンテージを自ら捨て、最大の技を破られ、師匠は俺に、何を
する!?

俺達の手刀が切り裂きあい、拳が砕きあい……師匠は、名も知らぬ
技、名も持たぬ技を次々と繰り出し始めた!!

「蛇^ダツツツ!!」

「フン!! ドア!!! ダアアーっ!!!」

最早教導も、美しい技のぶつかりあいもない、八手拳、百手拳の基
礎となった技、昇華された技、どこから盗んできたかも知れない、他
流派の見知らぬ技、見知った技!

その全てが俺に向けて迫る、最早、思考すら成り立たぬ領域の連撃
!!

右拳の抜き手、肩口で防御――右の崩拳、同じく崩拳で相殺――

――両手貫き、脇腹を抉られながら体当たり――崩れた体

勢、ヤクザキック

足を掴む胴体、頭への頭突きで妨害――苦痛に歪んだ顔で頭突

きの逆襲、更に頭突き――頭突き、頭突き、頭突き、頭突き、頭

突き

『手四つ』――俺の勝ち――頭突き、掌底で迎撃――

――頭突き、脱出阻止失敗

立ち上がる師匠、退く俺、交わされる拳

否定されたばかりの反射神経を含め、全てを総動員し技を捌く、知
らぬ技を力づくで跳ね除け、知った技を知らぬタイミングで放たれ、
拳が俺の肉に刺さる。

肉に刺さったままの拳を掴み、『力の流れ』を見て投げる、着地すら

待たず、空中に居るままの師を襲撃し、蹴られる。

増える傷、消費されゆく体力、しかし、それらを無視して技の応酬は更に加速してゆく。

「ツハツハハハ!!!」

「ふははははっ!!!」

吐息が笑い声なのか、笑い声が吐息と混ざるのか、俺達は笑う、高笑いの音が拳にかき消されながら、ぶつ切りに響く。

一度たりとも同じ応酬は行われない、互いを打倒するため、最高の技を経験から、知識から、そして、この戦いの中から引き出し続け、全能力を使ってそれを打破し続ける。

そして、永遠とも言える競り合いが途切れ、俺達は同時に、敵に背を向け――

「義ギエアアツツツツ!!!」

「ムン!!!」

一息に反転し、全力の拳を叩きつけた!!!

「……………カ、フ……………」

「コ…………ホ」

静止したまま、鼓動数回分の時が経つ。

そして師匠のみが、腹筋を貫かれ、ゆっくりと崩れ落ちた。

「な、長きに渡る技の応酬を勝ち抜いたのはソシルミ選手でした!!」

チャパ王選手、ゆっくりと膝をつきます!! カウントを……………」

「……………要りません、この人は腹筋を貫かれた程度で戦闘不能になる

ほど、やわなヨガはしていない」

「か……………買い被りがすぎるぞで」

…………師として弟子の弱みを突き、武道家として新たな技を用いた師匠、それを打ち破った俺の前に現れた彼の姿は、チャパ王という一人の男が、戦士として培ってきた全てだった。

「ふ、ふふ……………ソシルミ、やったな……………」

師匠はふらつきながらもファイティングポーズを取り、よろよろと歩み寄ってくる。

「さ……………最後に、教える、おまえは……………」

俺は近づく師匠へと歩み寄る。

師はその瞬間、石畳を踏みしめ、打撃のための加速を始めた、視界の端、その手には、確かな『輝き』が握られ……。

「おまえは、年長者に甘すぎる」
加速する拳、その早さと速さ、そして重さは、生半な覚悟では防ぎきれぬ一撃で。

「師匠、貴方は演技がヘタだ」

俺はその一撃を『輝く足』の蹴り上げを持って、体ごと一回転しながら弾き飛ばした、続けて一撃!!

「謝アアツツツ!!!」

放たれた全力の『気力大移動』は完全に炸裂し、師匠を意識ごと弾き飛ばし武舞台外の壁へと叩きつけた。

「へ!? あ、け、決着!! チヤパ王選手場外です!!!」

俺が持つ武の根本、それは勝負に対して、あくまで真摯であること。俺は、4年前には卒業課題であった師匠超えを、今度こそ果たしたのだ

「や、やったな!! ソシルミ!!!」

「応援ありがとう、プリカ」

屋根の上のプリカ、会場を埋め尽くす観客、亀仙流やその仲間、そして、鶴仙人、桃白白、天津飯、アナウンサー、全ての観衆に手を振る。

……技にこだわらないことが武であるなら、技を極めることもまた武。

どちらにしろ、俺の本分は武であるのだ、武を磨かねばならない。そう思いながら、俺は、次の試合を演じる……そして、更に次の試合で俺と当たる二人の武道家、悟空と天津飯を見やる。

「戦うってのは、楽しいな」

自然と漏れ出たこの言葉は、俺が贈る精一杯のエールであり、身勝手、しかし、切なる願いでもあった。

↓つづく

第二十三話：転生地球人達が師匠と楽しく観戦するまで

「えーっ!? ちよつと、困りますよ——」

「とりあえず、ここは——」

何やら、眼下が騒がしい。

あっちこっちで坊主や小僧、尼さん、それに寺の外から来たであろう様々なスタツフが駆け回っている。

「もうすぐ決勝だからかな」

「決勝だからってセレモニーをやるような大会でもないだろう、案外、賞金でも遅れてるのかもしれない」

「流石にそれはあるまい、……まさか、亀仙流の連中の流れ弾が通行人に命中でもしたのか?」

師匠がそう言うのと、プリカは一瞬顔を青ざめさせ、何度も記憶をたどっている。

……それと、そう、師匠、師匠だ。

屋根の上には三人、俺と、プリカと、師匠が座ってコーラを飲んでいた。

「それで、怪我は大丈夫なんですか? 内臓に穴開いてるのにコーラ飲んじやったからお陀仏、なんてのはゴメンですよ」

「わたしを誰だと思っている、おまえにヨガを教えたのはわたしだぞ、それくらいは把握できる……それに、なんだそのやけに具体的な心配は」

「そいつ、機嫌がいいと変なこと言うんだ、たぶん、愛しのお師匠さまと一緒に調子に乗ってるんだろうな」

プリカの憎まれ口、俺の上機嫌を他所に、眼下の大騒ぎっぷりは、ひどいものだ。

坊さんは何人かすっ転んでいるし、それに巻き込まれた観客が怒号を上げている。

「へっへっへ、こりやあ失礼」

そんな中、我等が亀仙人は尼さんがコケかかった隙を突いて尻を撫でていた。

「何やってんのよこのエロジジイ!!」

「うらやま……ひどいことしやがるぜ、急いでるつてのに!」

「あんたもよエロブタ!!」

「ぎゃーっ!!」

ブルマ、ウーロンにランチと言った、いつもの亀仙流メンバーも亀仙人のセクハラにあきれている。

(プーアルはヤムチャの付き添いで病院に行ってしまった)

亀仙人はしばし尻の感触を反芻するように撫でた手を眺め、まじめっぽい顔を見ると、すつくと立ち上がった。

「む……わ、わしはちよつとメシ買いに行ってくるからの!! クリリン、後はまかせた!」

「あ、ちよつと、武天老師さま、ボク一人で応援するんですか!？」

亀仙人は一瞬にしてアウエーと化した環境から逃げ去るように観客席を飛び出した。

今から弟子の晴れ舞台だというのに何をやっているんだ。

「ふむ……しかし、プリカの言い回しも、えらいトゲがあるじゃないか、え?」

「何が言いたいんです、師匠」

「妬いているのだ、プリカは」

「……っ!!」

プリカは拳を振り上げ……流石に俺以外をほいほい殴るのはマズいと思ったのか、そのままぶるぶるしている。

「よしてくださいよ、プリカをからかうのは」

「いや、この反応は案外……」

「ソシルミ! チャパさん、ちよつと、あの試合の最後の八手拳について聞いていいか!?」
「なんで、チャパさんは、あんなに、ソシルミの技に感心してたんだ?」

「そう言っつて、プリカはこちらを向かないまま、ぐいつとコーラをおる。」

「随分と藪から棒だが、まあいい、語らねばなるまい……お前にも教えよう、八手拳の強さの理由を……」

「おい、そんな見え見えの誤魔化しにあっさり流されてどうする」
プリカをからかうのが悪いのだ、俺はコーラを飲み干す姿でそう語り、プリカに向き直る……が、そこで、時間切れになった。

「それではこれより、天下一武道会、第6試合、まご……孫悟空選手対、天津飯選手を開始致します!!」

俺達三人は同時に新しいコーラを開け、屋根から落ちないギリギリまで身を乗り出した。

……これは俺が最も憧れた男の一人の試合であり、同時に、俺が歪めた歴史、俺が歪めた男の試合だ。

これ以上の楽しみは、自分があの男たちと戦うこと以外にはあるまい。

「それでは第6試合……はじめっ!!」

アナウンサーの掛け声とともに始まった第6試合、向かい合う二人……だが、その片割れ、悟空の姿が明らかにおかしい。

悟空はいたずらっぽいな笑みを浮かべた後、殆ど四つん這いと言えるほどに姿勢を下げ、しかもそのまま格闘戦を演じているのだ。

「悟空は一体どうしてあんな姿勢に……」

「見た目以上のことはまだ分からん、が、自信はあるようだな」

見た目とはすなわち、互いの高さが違えば試合は噛み合いにくい……程度のことだ。

当の悟空、そして観客席で見守る鶴仙流の二人を除いた全会場が悟空の珍妙な戦い方に疑問符を浮かべていた。

「天津飯のやつ困っておるわ、あの小僧もなかなかいい所に目をつける」

「こりゃ、あのソシルミならまだしも、おまえがああハゲの弟子の味方をしてどうする!」

……そう、鶴仙流の二人。

チャオズは師匠の激しい叩きつけによって深いダメージを負って、

病院送りになっていた。

今頃はヤムチャの隣でうなされていることだろう……つまり、この試合にも、もしかしたらあるかもしれない俺と天津飯の試合にも、もうジャマが入ることはないのだ。

「たっ！ たあっ!! へへ、こりやいいや！」

「く、くそ……！ ちょこまかと!!」

そして、全会場、特に俺とプリカが期待した通り、悟空の不自然な戦闘法の効果は如実に現れつつあった。

天津飯は悟空を追うが、身長差がある所から更に悟空が低い姿勢を取っているせいで、かわいそうな程にかがんだ姿勢での戦いを強制されているのだ。

「天津飯の動きが鈍くなってるな……」

プリカが呟く通り、天津飯の動きは明らかに、『体を曲げているから』などという単純な要素では説明できないレベルで鈍くなっている。

俺の予想が正しいなら、この戦い方は恐らく、人間の本能そのものを利用する戦術と言えるだろう。

「なるほど、考えたな」

「……分かったのか、ソシルミ」

「ああ、これは恐らく、人間の思考や認知力そのものの限界を突く戦術だ」

天津飯が攻撃すれば悟空が反撃する、そのローテーションの中、互いにステップを踏むわけだが……。

本来天津飯が用いる、フットワークと舞空術を併用した立ち回りは、『体全体を下げる』動きをしながら浮き上がるという矛盾をクリア出来ず、不完全な形に終わる。

「下がりながら上がるという矛盾、それは急場で克服できるものじゃない」

「さすが、悟空……か」

「だな」

二人で満足げな笑みを浮かべていると、師匠は何やら混ざりたく

なつたらしく、姿勢を合わせてにんまりと笑った。

……ちよつと気持ち悪いな、この絵面は。

「両方大分腕を上げたようだが……まだ、悟空が優勢だな」

『『予想』通りな』

プリカが気を利かせて『予想』と言ったそれは、当然、この世界が辿るはずだった（と、前は思っていたが最近どうやら怪しいんじゃないかと思ひ始めている）歴史のことだ。

あの歴史でも、基本的に試合は悟空優勢で進行し、天津飯の勝利は気功砲による武舞台消し飛ばし戦術と舞空術の組み合わせ、それと運によるものだった。

「だが、あの天津飯というのもまだ負けてはおらんぞ」

奮闘する天津飯の動きを見て、師匠が口を挟む。

天津飯はこれまでの中途半端にかがんだ姿勢をやめ、自ら完全に体勢を下げての低空飛行を戦術に組み込み始めていた。

それによつて、再び高速移動と自由自在な浮遊を両立したステップを取り戻した天津飯は、次第に試合を巻き返してゆく。

「天津飯選手もまた体勢を下げ……どうやら、ここで二人の機動力は拮抗しようです!!」

アナウンサーも、戦いの全ては見えないなりに、戦いの趨勢を見る能力はあるようだ。

しかし、これは……。

「……天津飯は悟空の技に対抗してるけど、逆に言えば、飲まれかけてる」

「ああ、試合のペースを握られているということだからな、天津飯のスタイルと、悟空のスタイルは噛み合わないだろう」

屈んだ姿のまま、悟空が姿を消し……次に姿を表した場所を天津飯が叩けば、更に新たな場所に悟空が現れる。

いたちごっこ、という言葉が相応しい状況だ。

低空飛行によつて速度で追いつがれば、さらに早い残像拳をもつて上回る、悟空が再び巻き返した……ように、見えるが。

「このオレにチンケな残像拳などは通じん!!」

天津飯はギョロギョロと目を動かして悟空の姿を追う、残像拳を目で追うのは悪手のはずなのだが……悟空の動きを探る天津飯の三つの目は、次第にそれぞれ別の方角に向けて動き始めた！

「……そこだ!!」

「いっつ!」

天津飯の拳が出現直後の悟空を捕らえ、武舞台端まで吹き飛ばす。読んでいるのではない、完全に、悟空が見えている動きだった。

師匠が思わず叫ぶ。

「散眼か!!」

散眼、それは本来二つで一揃いの動きをする眼球を巧みなコントロールによって別の方向に動かす技だ。

本来は四方八方から飛来する矢を効率よく視認し、対処するための技なのだが、天津飯はそれを高速移動への対処技として使用し、そればかりか、視野を分散することによって失われるはずの立体視機能を使つ目の目を使うことで補うという芸当までこなしている。

しかもあれは……本来、元の世界で言うところのインド武術に伝わる技であつて、カンフーの技ではない。

「私に負けたことをきっかけに研究したのでしようが、すさまじい練度です」

「うむ、われらの技をあかも使いこなすとは……」

タイミング、練度、共に完璧に用いられる散眼を前に、多少の速度や残像などは通じないだろう。

その予想を裏切らず、天津飯は激しく動く悟空をその都度捉え、的確に反撃してゆく。

「この三つの目はごまかせんぞ、孫悟空、かめはめ波でも撃つたらどうだ?」

「んなこと言つて、どうせなんかよけちまう技があるんだろ?」

足を止めて口を尖らせた悟空を前に天津飯はにやりと笑い、しばしの膠着状態の後――

「たあーつ!!!」

「来るか、孫!!」

「またもいたずらっぽく笑い、突撃する悟空！」

「あ、あの構え……一体、何をやる気なんだ悟空！」

クリリンが困惑するのも無理はない。

その手の形、腕の振り、足運び、誰もが初めて見るその動きの正体に気付くものは会場であつたの二人であつた。

「八手拳か!!!」

俺と師匠の声が被る、どれだけ独自解釈と換骨奪胎を行おうと、その動きを俺達が見紛うはずもない。

悟空が放とうとするその技は、紛れもない八手拳だ！

「うひゃあ！ 突然叫ぶな！」

「叫ばずにいられるか、あやつ、こつとも簡単に八手拳を盗むとは……！」

「あ、あれも八手拳なのか……？」

「体格や技量、シチュエーションに合わせたアレンジが激しいが、間違いないな」

悟空は手を八つの残像に変え、天津飯へと向かつてゆく。

「でも……八手拳ってあんなに簡単な技じゃないだろ？」

「悟空は既に残像拳と、八手拳に相応しい拳の速さを身に付けているからな、あいつのセンスなら、真髄やら拳の種類やらはともかく、骨子を真似るのはさほど難しくない」

「……ふん、おまえが最後に使った、あの技が盗まれておらんなら、何を盗まれようと今更だ」

そう言つて強がる師匠に、プリカは問う。

「ああ、そうだ、あの技！ 百手拳むかでけんってのが拳を早くして残像を増やす技なのは分かつたんだけど……」

「俺が最後に放つた八百拳やおこがしはお前にも見えなかつたか」

「いや、それもあるけど、なんであの技をチャパさんはあんな褒めてたんだ？」

「そうだな……、それは、八手拳が不完全な、諦め、妥協の産物とも言える技だからだ」

師匠はあつさりとして、自らの必殺技の存在意義を否定した。

……いつものクセだな、こりや。

「それだけ言っても分かりませんが、八手拳は、どれだけ速く動かそうと必ず残像という形で見えてしまう拳を、むしろ残像を見せる形で利用して敵を幻惑する連撃技だ、と言わないと」

「良く言いきりだ、見えてしまう、の方が重要だろう」

「だから、見えない拳の入ったソシルミの技に感心したのか」

「関節の同時動作と気力による強化の相乗効果、それによって、拳を限界を超えて加速し、しかも八手拳の連撃の技の中に組み込んだのだ……全く、いい弟子を持った、真の後継者とは、こういうものだ」

こっ恥ずかしい事を言う師匠に、思わずむせる。

……師匠の言う通り、あの技は以前使った『気力大移動』の原理と、その更に源流であるグラップラー刃牙の技、『マツハ突き』を応用したものだ。

それを語るか悩みながら視線を感じて横を見れば、師匠、それにプリカがニヨニヨと見ている、こういう役目は俺じゃなくプリカがやるべきだろう。

誤魔化すように試合を注視すると、膠着状態にあつた二人の撃ち合いが次第に変化していく様が見て取れた。

「おーっと!! 孫悟空選手の八手拳が、次第に天津飯選手を押してきています、これは一体どういうことかーっ!?!」

悟空の動きが素早くなっていくのではなく、天津飯の動きが明らかに鈍く、いや、混乱してきている。

目の動きもおぼつかなくなり、まるで……。

「目を回してるのか……?」

「お前もそう思うか、プリカ」

「……なるほど、あの三つ目が残像を見切るなら、見せてやれ、そういうことだな」

師匠が意味深に呟いた言葉を俺は噛み砕く。

残像拳を見切るほどの認識力、知覚力を持った三つ目の天津飯、そんな彼に、八つの残像を見せる秘拳を至近距離で叩きつけたら、一体どうなるか。

「つまり、情報を処理しきれなくなったというわけですか」

「おそろくな、しかも、なまじ見えてしまう分……」

ノックアウト寸前の三つ目を必死にぐりぐりと動かして必死に食らいつく天津飯、だが、悟空が突如体を回転させると、そこには――

「な、なにっ!？」

「へへっー!」

「孫悟空選手、しっぱの一撃です!!」

――高速で飛来する、長い尻尾があつた!

「見えてしまうならば、それに頼ってしまう、目が見せるものは今と過去のみ、ゆえに、目を重視すれば、未来までには『目』が向かない」
「ふはは、三つも目を備えておいて、見えぬものが生まれるとは、皮肉なものよ」

「どんな特徴も、良いことばかりじゃないってことか……」

そう言うプリカも、サイヤ人の強みであり弱みである尻尾の鍛錬を行っていたな。

(どういうわけか俺に隠れてだ)

……結局あの戦いでは、俺が変に気を使ったり妙に深読みしただけで、尻尾はまだ鍛えきっていないなかつたのだ。

「フツーより多いのはお互いさまだな!」

「お、おのれ……!!」

尻尾の一撃に怯み、更に拳を食らった天津飯は、背後に引っ込み、再度ファイティングポーズを取る。

悟空も同じく、その場でファイティングポーズを取り……膠着状態が訪れた。

「……手詰まりか」

「でしようね」

悟空はかめはめ波を迂闊に放って反撃される愚を犯そうとはしないだろうし、新たな奇策を簡単に思いつきはしない。

一方の天津飯も、かめはめ波をいくら撃ち返そうと悟空相手では一発芸に過ぎないし、まだまだ元気な悟空を相手に迂闊に気功砲などを

使えば、反撃されるのは必然だ。

動きの止まった試合を見て、ぼそりと師匠が呟く。

「天津飯、あやつも真面目な奴よ、もつと自分から手を作るなりすればよいものを」

「真面目って、あいつが使う技は大体相手に怪我をさせるぞ、ヤムチャも、かなりひどい目にあつたし……」

プリカが口を尖らせて言うその内容は、俺にも、師匠にも頷けるものだ。

確かに、ここまで天津飯の動きを見れば、分かる者には、悟空を確実にぶっ壊して動きを止めてやる、という意味を感じ取れるだろう。

しかし……。

「残虐と真面目は両立する、敵を効率よく仕留める……ということに関して、この上なく真面目である、という形だな」

「嬉しそうだなソシルミ、おまえが狙われてるってのに」

ジロつとこちらを見るプリカの言葉に、俺は笑って返す。

誤魔化しの笑みではなく、肯定の笑みだ。

その次の瞬間には、試合が新たな動きを見せる……動いたのは、天津飯だ！

「天津飯選手動きました！ 今度は完全な直立姿勢、まっすぐ立つて突っ込んでゆきます！」

駆け出した天津飯は、そのまま、激しい足技の動きで悟空に立ち向かってゆく。

舞空術のステップも健在、両足での足技を活用した動きには、これまでに見せた陰りは一切ない。

敵が低いなら足で攻める、姿勢を下げてはいけないなら下げない、ごく普通の……師匠の言う通り、真面目な攻め手だ。

「どつどつというこたはない、きさまを倒すのに、奇をてらつた技などいらん!!」

戦いを真面目な領域、自分の土俵に持ち込んだ天津飯はしばしの優勢を手に入れた。

しかし、悟空は必ず、何らかの手段で巻き返す……俺がそう思って

いると、屋根の下から俺を呼ぶ声がする。
誰だ！

「おうい、ソシルミくん、わしにちよつとおじやを分けてくれんかのう、いい屋台がなかったんじゃー！」

亀仙人だ！

……なんで？

「いや、武天老師様、弟子の試合ですよ!?!」

「だ、だめかのう……」

「そりやあ別にいいですが、ちよつと、ああもう!」

弟子の晴れ舞台、しかも楽勝でもなんでもなく、今まさに追い詰められている弟子を前に、一体何を言っているんだ。

! 　　どうかその食い意地はなんだ、悟空かプリカじゃあるまいし……

「おおーつと!! 孫悟空選手飛び上がりましたーつ!! しかし、飛ぶ相手を前にジャンプとは、一体何をするつもりなのでしょうか!!?」

「あ!? ……武天老子さま、ホイホイカプセルです、返さなくていいですから、どうぞ!」

対応している試合が進んでいく!

俺はその焦りのままに、懐のホイホイカプセルを一つ投げ渡す、軽く俺の10食分はある中の一つだから、惜しくはないが……!

「波あーつ!!!」

「な、なににーつ!?!」

急いで空を見上げた俺の目に写ったのは、激しく吹き飛ばされる天津飯と、かめはめ波の姿勢のまま固まり、天津飯に背を向けた悟空の姿!

「悟空は飛んで逃げた後、かめはめ波を二回撃って、一回目で天津飯に太陽を見せて目潰しして、二回目で倒したんだ」

「孫悟空は三つ目の、視覚が強化されるといふ強みと表裏一体となった弱点を短期間に二度も突いた……全く、大したものだ」

詳細は後で聞こう、とにかく、悟空は再び天津飯の技を打ち破ったということだ。

ふっ飛ばされた天津飯はすんでのところで体勢を立て直し、舞空術を用いて武舞台に着地、再び悟空と睨み合う……が。

その眼光は明らかに鋭く、そして、ギラついていた。

「あ、あやつ……ここでアレを使う気か！」

「ソシルミとの私闘ではなく兄者ご執心の亀じじいの弟子相手に使うなら、大歓迎じゃないのか？」

「何を言うか、わしはソシルミのやつのも、まだ許してはおらんぞ!!」

天津飯は悟空を睨み……そして、第三の目だけで俺をちらりと見て、右手で、左腕を撫でる。

その左手には、五本の細い抉ったような傷跡、そして、一本の深い切り傷があった。

「おいソシルミ、あの傷ってまさか……!」

傷跡をなぞった手が、手刀というにも余りに真つすぐな形へと変わる。

なぞられた腕の先は対照的に、半分握ったような、獣の鉤爪の形で……。

「あの傷、あの技、奴は俺との戦いをツツ!!」

俺への復讐のため鍛えた技を、俺との戦いではなく、目の前の強敵のために蔵出したのだ。

腕を撫でたのは、敵討ちのための技を本人に見せつけるため、うずく傷を撫で、戦意を燃やすために。

「なんだ……? 動物のまねっこならオラも……」

「きええええい!!!」

とぼけようとした悟空の声を引き裂く雄叫びと共の、天津飯は飛び込む。

武道家生命、否、命に届く威力と軌道!!

「きえええええい!!!」

「っ!!!」

飛び込む瞬間、電子音にも似る聞き慣れた音、『気』が出す音がか細く奏でられ、その手は不確かながら、『輝き』を纏っていた!

「まさか、ここまで俺の技を!!」

元から命を狙うに値する威力を持ったその技は、『輝き』を手にすることでも更に威力を増し――

「――ぎいっ!!!」

「悟空ーっ!!!」

悟空の道着を切り裂き、弾丸をも弾くはずのその皮膚を割く!!

「これで終わると思うなよ……あのヤムチャと同じ目にあわせてやろう!!!」

苦しむ悟空の手を両手でがっしと掴んだ天津飯は、そのまま腕を増やす!。

「く、くそ……ヤムチャをやった技か……!」

「太陽拳!!!」

「ぎゃああああ!!!」

天津飯の勢いは止まらず、そのまま四本の腕で悟空を拘束し、豆粒ほどにも見えない高さまで飛び上がっていく!

「天津飯選手、孫悟空選手を抱えて飛びました、再び、あの技を出すようです!! きゅ、救護班!!!」

脱出不能の技が再び放たれる。

四本の腕で敵手を拘束し、腕を極めながら、敵の胸で落下する超高速の、理外の落下技!!

「ゲーツ! 阿修羅ナパームストレッチ!!」

「ふ、ふぎけるのはやめろソシルミ! 悟空がヤバいんだぞ?!」

プリカが俺の『悪ふぎけ』を止めようとするが、俺にはそれを止める理由がない。

俺はまさしく、悟空が脱出することそのものを……最高の楽しみにしているからだ。

増えた手で悟空の両手を、元の手でしっぽと口元を抑え、プリカと悟空に使われたサイヤ人の技、ゲロビと尻尾の反撃を警戒したその形は、ヤムチャに放ったそれより徹底的で、あらゆる脱出手段を許さぬ構えで――

「――さあ、どうする孫悟空ツツツ!!」

←
U
U
U
U
←

第二十四話：転生地球人が決勝を闘うまで

高高度に飛翔し、悟空の全身を極めた天津飯が狙うのは、言うまでもなく、敵を自分もろとも武舞台に叩きつけて全身を破壊することだ！

「ヤムチャ選手を下した技が再び放たれます!! 今度は更に高く、更になんじがために締められているーっ!!」

激突すれば悟空であっても再起不能レベルに痛めつけられるであろうその威力と、あらゆる反撃を防ぐ、四本腕と二本足での拘束、敵を確実に破壊するという一点に集中した、殺さぬ殺し技!!

「ぐ、ぐぎぎや……がああ!!」

「無駄だ!! 幾分か力を隠していたようだが、もっと早くに出すべきだったな……! 最早きさまは逃れられんぞ!!」

悟空は元の歴史と同じく、『試合用のパワー』『戦闘用のパワー』に分けて力をセーブしていたようだが……全力を出したところで、あの技から逃れるには足りないようだ。

「悟空ーっ!! もっと力を出すんだーっ!!」

「ゴク……完璧な固め……あやつの執念を感じるわい」

手を手で、足を足で封じ、口と尻尾というイレギュラー的な要素まで許さない、万全の極め技。

やはり脱出の手段はないのか、会場の全員が想いを同じくして息を飲む。

——その一瞬の静寂の中に、悟空のか細い、絞り出すような声がこだました。

「か……め……」

「なにっ!!」

悟空の手が光り、エネルギーが高まってゆく!

拘束された状況で気を練り上げたことに驚く天津飯だが、悟空は手をきつく拘束され、かめはめ波を撃てたところで、天津飯に当てることも、脱出のための推進力を得ることもできないことに気付くと、余裕を取り戻した。

「クク……無駄なあがきだ、今更何をしよう……!!」

「は……め……」

だが、悟空のかめはめ波は止まらない!

「悟空のやつ、一体何をするつもりだ……!!?」

「わからん……ムグ……、しかし、悟空のやることじゃ、かならず意味があるじゃろう!!」

亀仙人がおじやを食いながら吐いた言葉に、俺は全面的に賛同する。

「波あーっ!!!」

およそ三分の二ほど落下した時点で、悟空のかめはめ波が輝き……両手に一つずつ蓄えられたそのエネルギーは、そのまま、互いに衝突し合う!!

「そうか!! 反動かツツツ!!」

「なるほど!! かめはめ波同士で——」

押し合うエネルギーは単に宙に放った以上の反動を生み出し、両手をそれぞれ、外側へと激しく動かす!

その力と、腕そのものが生み出す腕力が組み合わせれば!!

「たあーっ!!!」

「ク、クソっ!!!」

悟空脱出!

次の瞬間には、拘束から帰ってきた手が口に向けられた天津飯の手を激しく叩く!!

「ぐあっ!!!」

「よっしや! これで!!!」

悟空はそのまま、天津飯の足を支点にして位置を逆転、背後へと回り込み……。

「くらえーっ!!!」

「ガハ——!!!」

両腕を合わせた『ハンマー』の一撃を叩き込み、天津飯を武舞台へと叩きつけた!!

「て、天津飯選手武舞台に……ダウン! 天津飯選手ダウンです!!」

動けません!! カウントを——」

重力、舞空術、そして悟空の叩きつけ、3つの要素が合わさった天津飯の激突速度は、最早音速を超えている。

常人であれば原型すら残らないであろう速度、超人であっても、ただでは済まない!

「ぐ、ぐふっ……だ、誰が動けないだ……と……」

……その激突を受けてなお、天津飯は立ち上がろうとする。

しかし……その試みは、一気に体を持ち上げた所で限界に達し、膝から崩れ落ちたことによつて完全に挫折した。

「——ナイン……テン!! 天下一武道会準決勝第2試合を制したのは孫悟空選手です!! 会場のみなさん、名試合を演じたお二人に、惜しめない拍手を——!!」

「く……ソシルミと戦うどころか、鶴仙人さまの指示も果たせず終わるとは……」

「いい試合だったな天津飯! オラわくわくしたぞ!」

悟空が未だに立ち上がれぬ天津飯に向け、手を差し伸べる、天津飯はそれを見て、一瞬目を輝かせる。

しかし……。

「いらん!」

「……そつか! ははははっ!!」

天津飯は更に気合を入れると、笑う悟空を置いて師の元へと帰っていく。

鶴仙人は破れた天津飯に『現実性を重視しすぎて締め付けを怠った』とか『破壊を焦りすぎて武を見失った』とか盛んに叱っている。

……師として、教えるべきことを教えているのだ。

「天津飯は更に伸びるな」

俺がそう言うと、プリカは軽く睨んだ、大方、ここで歴史通り天津飯が離反しなかったことで起こる変化を憂いつつも、師弟が仲良くしているのを否定はできない、そんな苛立ちを俺にぶつけているのだろう。

下を見ると、丁度亀仙人も、似たような葛藤を感じさせる顔で唸っ

ていた。

「それにきさま、あのハゲの弟子にほだされおつてからに!!」

「は、はあ……」

……よい師弟関係なら、長く続いて欲しいが、果たして。

バナナ、おじや、それに炭酸抜きコーラと、ウメボシ。

もつといいエネルギー食は沢山あるのだろう、だが、俺が選ぶのはこれしかない……盤面この一手、だ、

俺が憧れたヒーローは、孫悟空だけじゃないのだ。

「ムリ……ムチャ……マク……グム……」

「前と同じ、凄い食べっぷりだ」

プリカが呆れたような、感心したような声色で茶々を入れてくる。

「ブハッ……『気』と呼ばれるエネルギーは文字通り、気力のことも指すからな」

「気合を入れるには、ガッツリ食った気になるのも大事ってことか、なるほど……」

「半分は験担ぎだがな」

そう言つて、俺は更に炭酸抜きコーラを開けようとする……が、その時。

「ソシルミ選手、そろそろ試合開始です!!」

「……よし、プリカ、すまんが片付け頼む、食器のカプセルはケースの空きに適当に入れといてくれ」

「わかった、すぐ追いつく、……ここまで来たんだ、相手が悟空とか気にせず全力で戦つて、勝つてこい!」

プリカは俺に拳を突き出し、俺もまた、それに合わせてプリカの拳を叩く。

本当にやりたかった形とは違うが、こんな拳の交え方も、悪くない。

武道会場の有様は、ひどいものだ。

壁は砕かれ、石畳は割れ、焼け、しかも血が滲んで、まるで戦争でもやらかしたようになってる。

「それではいよいよ始まります、天下一武道会、決勝戦!! ソシルミ選手対、孫悟空選手ー!!!」

「うおおーっ!!!」

一方、アナウンサーと共に沸騰する観客達、そして、武舞台の周囲でなおも忙しそうにする人々が演じる慌ただしさと熱狂は、俺達がこれから演じる試合にふさわしい熱狂を醸し出していた。

(なんと武舞台の外には警察まで居る、まさか試合中の負傷が刑事事件化しているわけでもないだろうが……)

武舞台と周囲の剣呑な雰囲気、観客達の熱狂、そして、雲ひとつ無い青空が、俺にこれから始まる戦いの激しさを予感させる。

「おまえはわが道場の歴史を全て超えた大天才、門下最強の弟子だ……必ず勝てる、天下一を取ってこい」

師匠が、振り向くヒマもなく言葉を叩きつけ、背中を叩く。

『今のところ』とも、『今度こそ』とすら付け加えぬ潔い賞賛が、今は心地いい。

「さあ、両選手、入場です!!」

互いに道着を替え、補給を済ませた俺と悟空が、ゆつくりと武舞台へと上がる。

遠目に見ても分かるほどの数の生傷と、その大きいものだけを、申し訳程度に覆った手当の痕跡が俺達の体を覆っていた。

「両選手ともに、前試合の怪我が激しいようですが、試合の方は大丈夫なのでしょうか?」

「骨格と腱へのダメージは薄い、見た目より軽症だ、それに……」

「それに?」

「俺達はかつてなく気力が充実している、この程度の怪我で力^{リキ}が抜けるなど、ありえんことだ」

「オラもだ」

そうアナウンサーに答えながら、チラつと悟空を見れば、悟空は挑戦的に笑って、それに答えた。

俺も悟空も、蓄えた力を叩きつけたくてうずうずしている。

「さあ、試合開始のコールを頼む、みんな、待ちきれないんだ」

「わかりました、それでは天下一武道会、決勝戦、始めさせていただきます!!」

「よろしくお願いします」

「……よろしくおねがいます!」

俺達が礼を終えるのを見計らって、小太鼓、続いて銅鑼が鳴り響く。その瞬間、俺達はかき消えた——ように、余人には見えたと違

いなく。
「ソ、ソシルミ選手、孫悟空選手、武舞台のあちこちに出現しましたーっ!!」

次の瞬間には、そのような有様となった。

「————~~~~ツツツ!!」

「~~~~ツツツ!!」

ブウウン、という、大きなプロペラが回るような風音、パチパチという拍手のような音が武舞台から静かに響く、

前者は言うまでもない、俺達が高速で移動する音、後者は、石畳から剥がれ落ちた石が弾き飛ばされ、敵に、あるいは『弾き飛ばした者自身』に衝突して砕け散る音だ。

「ぎ、残像拳!! 残像拳です!! 両選手の残像が武舞台を埋め尽くすように広がっています、なんとという高度な戦いでしょうか!!」

「ヘン! あんな技、どーせ相手を捕らえられずに終わるわい、お互いも見えとらんじやろ!」

「いや……そうでもないようだぞ、兄者」

敵が『見えている』場所には既に居ない。

それは大前提として、『見えている敵』から読み取れるはずの情報、すなわち、重心、視線、佇まいもまた、ブラフに満ち、まともに読み取ることは困難だ——が。

「見えたぞツツツ!!」

「見えたっ!!!」

それは不可能を意味しない!

俺達は敵を捕捉し、更に、その敵が次に現れる場所までもを予見し、新たな決戦地を見出す。

その姿は、見えぬものから見れば――

「――まるで、戦いの彫刻館!! 二人の戦いがわれわれの網膜に焼き付き、まるで武舞台を彫刻の館に変えてしまったかのようにす!!!」

「もう始まつてるのか!! ……前とは違う! 完全に見えてるんだ!!」

ドツプラー効果の中に霞む声が叫ぶ『前』の存在こそ、俺達が互いを捉えられる理由だ。

互いの消え方、現れ方、それらへの理解を深め、シミュレートを繰り返したからこそ、俺達は互いを見失わずに済む!

「俺達が見えているとしたら、残像に半生をかけてきた師匠くらいのものだろうか」

「いや、天津飯だって見えてるんじゃないやねえか?」

小さく呟いた声が、少しのブレもなく、イヤにクリアに通って、俺達の間を往復する。

そろそろ潮時だ。

「あやつら――!!」

「まさかあいつら、あの速度で寸分変わらず互いを――!!」

並走する俺達二人は、歪んだ声を合図にするかのように、互いの足を蹴り飛ばし合った。

そして!!

「ムンツツ! ハアア……ツツツ!!」

「か……め……は……め……!!!」

武舞台の端と端、方や踊るように、方や、抱え込むようにして、気を高める俺と悟空!

互いの最大のエネルギーを叩きつけ合うことをもって、この果てしない『序盤戦』を終わらせる!!

「来いッツツツ!!!」

「波あ~~~~つつ!!!」

瞬間、あの、極光が湧き出し、迫りくる瞬間が見える!

極限にまで引き伸ばされたあの時間の中で、俺は極光に閃光を叩き

つけ――

「うわああっ!! 見、見えません、何も見えません!! 凄まじい力の激突です!!」

輝きを掴んだ俺の腕は、そのままぐるりと一周し、その勢いを宙に逸らす。

逸らす方向は『周囲』ではなく、空中そのものへの拡散である、これによって、武舞台や俺の体はこの廻し受けによって壊れることなく、この無防備に受けければ細胞一粒たりとも残らないであろう一撃を消し去る事ができるのだ。

「マ・ワ・シ・受ケ……やっぱり、こうなるのね」
足元に、ぽたぽたと液滴が滴る音がする。

破れた手のひらから溢れた血だ。

「はあ……はあ……っ! や、やっばミスシルはすげえや!!」
「……散々鍛えたつてのに、このザマだぜ?」

俺はわざと、痛む手のひらをひらひらさせて見せる、その痛々しさに観客席のあちこちから悲鳴が上がるが、俺はあまり痛くない、脳内麻薬とヨガのおかげだ。

「オ、オレの時はどんなに頑張っても傷一つ付かなかつたのに……!」

「威力が……いや、わしが教えたかめはめ波とはすべてが違う、プリカの技を取り込んだか……」

……血の滴る拳を握る、開く。

「今度は俺の番だ、いいな?」

「おう!!」

笑いかける俺に、笑って答える悟空、これは師匠との儀式じみたやり取りとは違う、互いが出す技という料理を、敵の肉を、すべて喰らい尽くしたい戦士同士のプレゼント交換なのだ。

俺はもう一度拳を見て、エネルギーを高め……今度は、ただの輝きではない、更に強く輝かせてゆく。

滴る血が、光る、そして、爆ぜる。

「ソ、ソシルミ選手の手が、いいえ、傷口から出る血さえも輝き、小

さく発泡……いえ、爆発しています……!!」

「オレをやった時の技か!!」

そうだ、この技はクリリンの曲がる気弾を消し飛ばし、試合の趨勢を決めた『爆発する拳』……その応用形。

エネルギーに『爆発』という分かりやすい形の破壊のニュアンスを練りこんだこの拳は、これまでのように『ただ固いから殴っても強い』などという消極的な力ではなく、応用によって更にすさまじい威力を発揮する!

「ツツアアアツツツ!!」

「いっ!!」

決め技、そう思わせる程に高まったエネルギーに反して、俺の拳は極めて軽快な速度で悟空を打つ!

「ぎゃああ!!」

「ぐ、悟空ーっ!!」

「孫くん!!!」

悟空に叩きつけた拳を腰まで引き戻し、俺は次の一撃に向けて気力を練る。

かつて気力大移動と呼んだ技は、エネルギーを拳の加速に使う全関節に向け順番に流し込み、打撃の速度とインパクト力を上げるだけの技であった。

しかし、この技は違う、加速しつつ拳へと向かうエネルギーとその速度をそのまま爆発力へと変えることで、拳の命中せぬ敵にまで叩き込むことができる!

「タトタタツツツ!!」

「くうっ……!!」

俺の拳が悟空を叩けばそこが爆発!

悟空を掠めれば爆発!!

それが一体どーゆーことかッ!!

「ち、ちくしょう……近づけねえのか、プリカと同じだ!!」

「プリカには悪いが、あの技より上だ、快速にして高威力、奴の技は技術を必要としないが、この技は拳の当たり方すら必要としない」

当たり方を問わないのであれば、打ち方が可能になる。

逆に、迫る側にとっては、こちらのあらゆる動作が脅威となるのだ。

「ま、まさかミソシルがこんな技を使ってくるなんてな……」

「驚いたか」

「オラ、ミソシルは殴り合いがスキだとばかり思ってた」

「今でも大好きさ」

……そう、この技は邪道だ。

鍛えた格闘技術を投げ捨て、敵にもまともな戦いをさせない、『持ち味を活かす』戦いとは正反対の技術。

だが、これもまた武！

「師匠が教えてくれたんだ、持ち味を活かすことが戦いなら、活かさせないことも戦いだとな」

「……フツーのことじゃねえのか？ それ」

「確かに、笑っちゃうくらい普通だ」

会話はそこで止まり、再び、武舞台上は俺の爆発に支配される！

悟空はまさしく天性のセンスで、俺の拳が描く新たな軌道を把握し、攻撃を回避していくが……甘い！

俺は中空で右手に爆発を引き起こすことで悟空が刻むステップの起動を変化させ、左手でその隙を突く！！

「ぐぎやあああ!!」

爆発の威力に喘ぎながらも、悟空はしつぽを含めた五体で必死に姿勢制御を行い、武舞台上へと着地する。

どうした孫悟空、この程度ではないだろう！

悪役のようなセリフが脳裏を掠めるのは、俺の中に一筋の引け目——悟空相手だからではない、自らの技への——があるからに、他ならなかった。

「悟空、俺の体力消耗を待っても無駄だぞ……今の俺は完全に気力が充実してるんだ、一日だって戦っていられる」

「そうみてえだな、でも、オラはもう、おめえの技がわかったぞー」

「シャアアアツツツ!!!」

見せてもらおう、そう口で言う代わりに、俺は再び突撃する。

その瞬間、悟空は俺を飛び越すように飛び上がった。

「たっ!!」

「落^ラツツツ!!」

続けて、俺の腕が悟空を追い、爆発が悟空を地面に叩きつける!

「貴様、今のが策とは……」

悟空は、にいつと笑い、再び俺を見据え……今度は正面から殴り合うための構えを作った。

いいだろう、お前に攻略されてやろうじゃないか。

俺は期待を抑えきれずに笑い、手足を広げて構えを取る。

「爆^バツツツツ!!」

「きええええっ!!!」

俺の右腕が袈裟斬りに振り下ろされる……その瞬間、悟空は腕を上げて手を防ぎ……爆発の瞬間腕を下げ、爆風の勢いを逸らす。

避けるだけならば容易い、だが、これ以上どうするつもりだ、俺には左手があり、足までもが残されている——そう考えた瞬間!

「っ!!!」

「なツツツ!!!」

悟空は体勢を下げる勢いをそのまま、逆立ちをするように足を振り上げ、俺の右手を蹴りつける!!

「やっぱそうかつ!!!」

「シィィィツツツ!!!」

ダメージはさほどない、苦痛などいくらでも耐えられる、だが、拳と足の衝突によって生まれた間隙は——

「たああーっ!!!」

「ガブ……………!!!」

悟空の拳を俺の鳩尾に届かせ、体ごと壁に激突させるに十分な大きさがあった!!

「命中ーっ!! 孫悟空選手の攻撃が命中しました!! ソシルミ選手、大きく壁にめり込み……壁ごと崩れ落ちたーっ!!」

「ソシルミーっ!!! おいつ、どうってことないだろ! さっさと起きてこい!!!」

騒がしい観衆やアナウンサーの声はやたらと悟空を褒めそやす中、頭上では相棒が好き勝手言ってくれている。

立たねば。

「はっはっは、……ゲホッ、いいのを貰った、流石だな」

「ミソシルが本気じゃなかったからな」

爆発する手は使用時に必ず、エネルギーチャージか気力大移動を必要とする。

そのどうしようもない『貯め』の一瞬、輝く手では発生しない『再装填』を突かれた。

……だけではなく、再装填の隙をカバーする動きさえ完全に阻害された……謙遜されても嫌味に感じるほどのやられっぷりだ。

「全力のつもりだったんだが、まあ、慣れないことはするもんじゃな
いって、ことなんだろう」

「いつものミソシルなら多分、飛び上がったら掴んでくるだろう
なって……でも、そうじゃなかったら？」

……なるほど、技の限界と、慣れない技への動揺……、そこまで読
まれていたというわけかと、続く腹部の激痛を抑え込みながら呟く。

俺は打撃命中時に、内臓の配置を操作しダメージを軽減し、更に、命
中は内臓のショックを最大限に抑える。

決してやせ我慢などではない防御技術を駆使し、ギリギリまでダ
メージを抑え込み、ようやく平然と会話出来るレベルまで回復したの
だ。

「よし、真面目にやるぞ、付き合え」

「よっしやー！」

俺は性懲りもなく、悟空に挑みかかる。

今度は殴り合いの構え、悟空も同じだ。

俺達は互いに血まみれの笑みを浮かべるが、青空を観客席越しに背
負った悟空の姿は清々しく……いい。

青空には先程まではなかった幾筋もの飛行機雲が刻まれ、俺にはそ
れが悟空が放つ後光の輝きにさえ見えた。

実にいい、これこそ、天下一を競う舞台に相応しい武道家だ！

「覇アツツツ!!!」
「!!!」

小技など弄さない、大技で誤魔化しもしない!

俺の拳が悟空の頬を切りつけ、悟空の拳が、俺の脇腹を抉る!!

「——ツツツ!!!」

「しっ!!!」

拳と拳を叩きつけ、足と足を払い合う、時に背を向け、時に飛び退きながらも、純粋な戦いの鼓動だけは敵を貫き続ける。

これこそが試合!

「合ッツ!!!」

「ふへ!!!」

俺は悟空の拳に手のひらを合わせ、軽く捻り上げる、すると、悟空は激しく一回転し頭から武舞台に……ではなく、足から着地した。

戸惑う間に叩き込まれた俺の拳が、悟空の顎を撃ち……大したダメージも与えず、悟空の体を跳ね上げるだけ跳ね上げ、体を一歩後ろへと追いやる。

「ミ、ミソシル、おめえ今——」

「効くは効く、かッツツ!!!」

更に、悟空の足の筋を指で踏みつける!

すると、悟空は叫び、その動きを止め……ずに、苦悶のままにぎこちない動きで俺の頭を薙ぎ払おうとする!

間一髪で避けた俺に、再び疑問の視線を向ける悟空、その放つ拳の軌道をこれまでの経験から読み、回避、拳を肩から流して投げれば、武舞台の外へ——

「——うわっとなっとなっとな……!」

「……やっぱ無理か」

俺が今使った技術はいわゆる合気の類に属する技であり、敵の体の構造と力の流れを利用し、少しの力で敵を自滅へと追いやる技……なのだが。

そもそも体構造からして違うサイヤ人には通じない、というか、通じるのかもしれないが理解が足りない……サイヤ人も悟空も、理解を

深めてきたと思っただが、まだまだ足りないようだ。

「くっそう……せいやーっ!!」

「甘いッツ!!」

相次ぐ不可解な技にしびれを切らした悟空が放つ全力のパンチ!

だが、俺はその直情的で不規則な一方、同調すれば読みやすいとも言える悟空の拳を読んで手を広げ、そのまま腕をはっしと掴み、そこに潜む力の流れと筋骨の流れを操作して……投げる!!

「うわっ!!? ……波ーっ!!」

「……やっぱだめか、期待もしてなかったが」

投げ飛ばされた悟空はそのまま、空中でかめはめ波を撃ち、滑り込むように武舞台へと戻ってきた。

「お、おめえ……、いま何やったんだ?」

「合気だ、敵の力や体の構造を利用する……これこそが本来の技というもの、機会があれば学んでみるといい」

「じゃ、後で教えてくれよ」

「いいぞ」

武舞台の上とは思えぬ、和やかな会話が繰り広げられる、というか俺が悟空に合わせ、悟空はそれに甘えている。

戦いの中とはいえ、この程度の楽しみは許されるだろう。

だが、そんな甘えも、これで終わる。

俺は八手拳、否、八百拳の構えを取り、悟空を睨んだ……その瞬間、会場は息を飲み、鳥は逃げ、飛行機雲を塗り潰すように空を覆い、悟空はこれまでにない広い構えを取って俺の攻撃に備えた。

「……やるのか!」

俺は何も答えず、その気迫のみをもって、答えとした。

足下の石畳が砕け散る感触を確かめながら、刹那の間に距離を詰める。

その時には既に、俺の体は無数の残像に包まれ、次なる技を示す『意』すらも巧妙に隠された拳が悟空に狙いを定めていた。

いくら早く動かそうと、腕の数は二本……ではない、偽装された腕、

二の矢として用意された腕、全てを合わせれば、技が名乗る800すら、ゆうに上回る腕が悟空を狙う！

「——ツツツツ!!」

「へ、へへッ!!」

悟空は目の前、視界いっぱい……それ以上、過去と未来、虚と実の全てへと広がっていく拳を、感覚、頭、反射、全てで捌き、凌ぎ、迎撃し、そのいずれも及ばなければ後退によって、かわしてゆく！

「八手拳は動くのもできるのか!!」

「あれは試験用の技などではなく、実践技だ、敵が逃げれば追うのも当然!!」

俺が追えば悟空が逃げ、悟空が抗えば、俺はそれに合わせて更に拳を突きつける。

付け焼き刃の八手拳を出そうなどと考える暇も与えない、絶対的な連撃、空間だけではなく、時間と虚実へと広がる支配、制空権、それこそが八手拳が持つ真の価値!!

「ぐ、悟空……!」

「チャパ王を真に伝説にしたと言われる八手拳、それを上回る技があれか……!」

すんでの所で避ける、などという甘えはこの技には通用しない。

何故ならば、俺には強力無比の輝く手があり、鍛え上げた指技の威力を斬撃の域にまで高めているからだ!!

「あ、あやつら、よもやあそこまで……!」

「どうだ、天津飯、見えるか」

「……いえ」

拳が貫き、指が切り、掌が打ち据える!!

この地球上屈指と言える俺の連撃は、気力大移動の高速拳によって最早抵抗を許さぬ領域へと加速する!!

否……それ以上、俺も悟空もこの激戦の中で、残像拳にすらかかる僅かなタガが外れ、これまでにはあり得ない……最高以上のコンディションを更に越える、限界を超えた力を発揮しているのだ!!!

「く……もう、後が……ねえ……!!」

敵手の足が武舞台の端を撫ぜる感触が拳を通じて伝わる。
どうする、悟空。

熱狂の中にある心が、最後の最後、追いつめた敵の再起を願った。

「……つたあ!!」

「何ツツツ!!?」

飛び上がる悟空、高く飛び上がれるはずがない、足を曲げる暇すら与えてはいない。

俺の拳から逃れられる高さでは決して無い、何故だ、何故飛び上がる——

「これで……!!」

「五本全て使うためかツツツ!!」

孫悟空の五体、五本の手足、尻尾!

その全てを俺に突きつける悟空!!

「たあ~~~~~つつつ!!」

「輝^キエエアアアアツツツ!!」

拳2つに対し、拳2つ、足2つ、尻尾一つ!

飛んで戦うのはサイヤ人の血の記憶か、以前の戦いの記憶か、それとも単なるこの場での思いつきか!!

どれにしても素晴らしい、どれにしても……凄まじいツツツ!!

「アアアア、アア、ア、ツツツ!!」

「~~~~~つつつ!!」

最早、誰の声も聞こえはしない、どんな喧騒も、武舞台の姿も、気になりはしない!

互いの雄叫び、五体が奏でる音、感触、それだけが俺達の全てだ。
数える気にもならない時間、だが、悟空が飛んでから、落ちるまで

の、ほんの「瞬の間に」——

「だあーつ!!」

「~~~~~ツツツツ」

——俺の最強、最後の必殺技は打ち破られ。

「ソ、ソシルミ選手ダウン! 武舞台中央のソシルミ選手横たわっています! ……ワン……ツ……!」

俺の胸に突き刺さった拳は、俺が持つ立ち上がる力を、全て奪い
……。
……仰向けに転がった俺の眼に、寺の屋根が、その上の、2つ
の影が映る。

……………。

「ミソシル」

「大丈夫だ、まだやれる」

「シックス、セブ……ソシルミ選手、立ちました!! 立ち上がりまし
た!! 試合続行!!!」

よろけながら立ち上がる俺の心臓は明らかに異常な振動をしてい
る。

一呼吸、二呼吸してそれを抑え込み、三呼吸、四呼吸のうちに、全
身の震えを抑え込む。

「……人のことは言えないタフさだ、我ながら、呆れるね」

「オラとは違うんだろ? ミソシルは頑張って我慢してるんだ」

「頑張ってる……か、ああ、そうとも、お前とか、そこで俺が寝ちま
わないように番をしてくれてるあいつとか、そういうのと殴り合う
にや、この体は不便だからな」

もちろん、良いことだって沢山ある。

俺は生まれ変わって得たこの新たな相棒に言い訳をするように
心の中だけで呟いて、悟空を見た。

そして、屋根の上の相棒を見る。

「今度もちやんとやってやる、だから、見ててくれよ」

相棒は小さく動く……霞んだ目でも、頷いたのだと分かった。

それを黙って見逃した悟空に向き直り、俺はエネルギーを集中す
る。

「……………やるぞ」

「おう」

溜めが長いから殴っちゃった、なんて言わない、理解ある態度に感
謝し、俺を立ち上がらせた全てと、立ち上がった体に礼を言う。

そして、拳を腰ために構え……視界が暗くなった。

俺の目はブラックアウトしつつあるのか、今いいところなんだから、待ってくれ……。

「悟空!!!? ソシルミ!!! 避けるんじゃあ!!!」

「え、あ!!!」

「なツツツ」

違う、なんだこれは、上空からプレッシャー!!

亀仙人の怒鳴り声!!?

俺達は反射的に屋根の上——ギリギリ、場外を免れそうな領域

——へと、同時に飛び乗り。

武舞台に振り向くと、武舞台が、客席の一部ごと、消え去っていた。

「……は?」

「ふはははははは!!! 避けおったか、どうやら、随分鍛え込んだやつ

がいるようではないか!」

上からの声……どこか聞き覚えのあるその声を見上げる。

緑色。

「喜ぶがいい、きさまらは、この時代で最初に……」

触角の生えた老人、胸に丸い文様と、何やら文字。

「このピッコロ大魔王に殺される人間となったのだ!!!」

↓つつく

第二十五話：転生TSサイヤ人が未来を託されるまで

「さて、恐怖と殺戮を楽しむにしてもこれでは少々多い、……減らすとするかな」

「——ツツツ!!!」

屋根を蹴り砕き、俺はピッコロ大魔王に向けて突撃する。

残した仲間が、何かを叫ぶが、俺の全意識は、ピッコロが言葉とともに握り込んだ、その手にある！

「ミソシルっ!!」

「待て、待たんか、ソシルミ!!!」

無茶も無謀も正気の上、一瞬の判断であっても、それを見逃す俺ではない。

ただ、……ただ、あの技がどれだけの人間の命を奪うのか、死を与えるのか、そう思うだけで、俺にはどうにも、我慢がならなかったのだ。

「なにつ!? ふはは、バカめ……!!」

疲労に霞む視界の先で、輝きすら握らない手が、そのプレッシャーを俺に叩きつけようとしている。

死なせてたまるか、死んでたまるか。

俺は気を高め、手の輝きをピッコロに、ピッコロが放つ気に向けて突撃する!!

「——ツツツ!!!」

特攻同然の行為と正反対の決意は、ピッコロの放つ純粋な害意と激突し。

……俺の負けだ、ただ一度攻撃を防いただけで、俺の体はズタズタになって落下しつつある。

「ソシルミ!!!」

「ミソシル……くそーっ!!!」

プリカと、悟空の声がする、心配と怒りの混ざった声だ。

声が出せたのなら、逃げて体勢を立て直せと、ドラゴンボールがあるから平気だと、伝えたい。

それすら叶わぬまま、俺の意識はそのまま、体ごと大穴へと飲み込まれていった。

「プリカ、やつを拾え!!」

「あ、ああ!」

一瞬、呆然としていたオレを現実に戻す、チャパ王の声。

オレはソシルミが武舞台の穴に落ちる寸前に拾って、そのまま穴の横に着地する。

同時に、上空から響く叫び声……悟空!

「てりやああああ!!」

が、悟空もまた、ピッコロの一撃で地面にたたき落され、屋根を突き破って寺を大きく傾かせた。

……多分、まだ生きてるはずだ。

「悟空……くそっ! おい、ソシルミ、大丈夫か!」

オレは必死にソシルミをゆすって呼びかける。

ソシルミはあちこちズタズタだけど、息はしている、心臓も動いている、なら、まだ大丈夫のはずだ。

「……意識のないけが人を……、揺るのは、やめろ、脳にダメージがあつたら、どうするつもりだ」

相変わらず、気の抜けたやつだ。

多分こいつは、オレがそんなふうにして安心してやろうと、わざと調子を外して見せたんだろう。

それが分かってても、素直にありがたいと思ってしまいうくらいに、このたった一分足らずの時間は、衝撃的だった。

「プリカ、逃げろ、ピッコロが来る」

「ほう、わしをピッコロ大魔王と知っておるとは、よほど勉強熱心な武道家とみえる」

ピッコロの声に、ソシルミは露骨に『しまった』という顔をした。

次の瞬間、オレも思い出す、ピッコロの種族、ナメック星人はたしか、地獄耳なのだ。

このままではまずい、だけど、ソシルミを抱えて逃げるにはあまりにも——そう思った時、聞き覚えのある声が3つ同時に響いた。

「とあーっ!!!」

「どどん波!!!」

「どどん!!!」

鶴仙人と桃白白が撃った二筋のどどん波、それと、木の棒……亀仙人の杖がピッコロ大魔王にぶち当たる!

いや、ぶち当たったように見えて、うまく弾いたようだけど、これに関心はソシルミと悟空から逸れたはずだ。

(心配するな、ホイホイカプセルがある、仙豆を飲ませてやるからな)

オレは身振りでそう伝えようと、ソシルミは首を振って、空を見る。何がダメなんだ、そう思いながらオレも空を見上げると……その理由が、わかった。

軍用機や民間機の大編隊が空を覆い、その隙間を縫うように羽の生えた化物や、パラシュートを背負った化物がどどん会場に向けて降りてきていた。

「ま、魔族……!?!」

「お……そらく、俺達の知らない歴史だ」

ソシルミの喋り方が、いつもの論理的で理路整然としたものから、次第に朦朧としたものになってゆく。

限界なんだ、ダメージから立ち直ってなんかいない、むしろちゃんと手当しないと、死んでしまう。

オレはソシルミを守るため、チャパ王をアイコンタクトで呼び寄せた。

「ソシルミはもう限界だ、意識も朦朧としてる」

「……くだらん情に流されおつて、おまえが倒れば、もはや戦える者はおらんというのに」

「申し訳ありません、師匠……」

ひどい物言いだけど、自分の一番弟子がまともに戦うこともなくやられてしまえば、憎まれ口の一つも言いたくなるのかもしれない。

でも、多分チャパ王は身を挺して自分や観客達を守ったソシルミの行いを、しっかりと評価しているはずだ、そう思える、本心ではなさそうな言い方だった。

ソシルミ自身もまた、苦い顔をしている……戦えないのが悔しいんだろう、いろいろな意味で、だ。

「プリカ」

そんなソシルミが、絞り出すようにオレの名を呼んだ。

オレは何も言わずにうなずき、ソシルミの言葉を聞く。

「悟空は多分もう戦えない、あいつに、逃げて、傷を癒やすように言ってくれ」

「逃げて……傷を癒やす、そう伝えればいいんだな？」

「ああ、それで分かってくれるはずだ、それと……」

ソシルミは苦しみに息を詰まらせるような、それか、考え込むような感じで黙って、震える声で言葉をつなぐ。

「奴はおかしい、強すぎる、つまり、何かが違う、亀仙人達は負けるだろう、お前も師匠と逃げろ……」

「おい、ソシルミ、何がおかしいんだ、ピツコロ大魔王が強いのは最初っから……」

「い、今の戦力では無理だ、逃げて、鍛えなおせ……、また、頼む、地球を……」

そして、ソシルミは、苦しげに目を閉じ、体の力を抜いた。

……言ってることはわかる、危ないから逃げろと、戦力を十分残して、最後にはドラゴンボールで取り戻せと。

何もかも正しい、正しい計算だ……足りないのは自分の命、それと……倒れた自分を置いて逃げろだなんて、家族同然の仲間に言い放たれたオレの気持ちを計算に入れることくらいだ。

「なんだ！ ソシルミ!! 地球を……オレに任せるつもりか!? オレがおまえを見捨てて逃げるってんじゃないだろうな!!」

「プリカ、ソシルミが限界なのはおまえが言ったことだろう、寝かせてやれ」

「……チャパさん、あんたはどうするつもりだ」

「弟子の命令など聞く気はない、ソシルミを連れて逃げる」
オレはそれを聞いて、大きくため息をついた。

弟子が弟子なら師匠も師匠、我が強くて、判断が早い。

オレもそれにならって、ソシルミを守ることにしよう……悟空を逃がすって指示だけは、聞くことにしておいてやる。

「おいぼれどもが、このピッコロ大魔王に挑もうなどとは思いがつたものよ!!」

そう言つてピッコロ大魔王は目玉を輝かせ、ギョワツと薙ぎ払うようにビームを放つ!

三人は各々飛びのいて逃げ……ビームの軌道にあつたビルが真つ二つに割れて倒壊、ついでのように、観客や警官が数十人、まとめて消し去られた。

「き、きさま……!!」

「関係のない連中を、か? わしの楽しみはそれよ、武道家どももそれを褒めたたえる連中も皆殺しだ、むろん、そうでない連中もな、きさまらにかまつてやっているのは、単に順番の問題にすぎん」

破壊力、それにチャージ時間の短さ、大魔王つてのは伊達じゃない。

何よりこの場では……民間人を気にせず巻き込む戦い方が、何より恐ろしいんだ。

そんなピッコロの行いと口ぶりに、亀仙人はかなり怒っているけど……それを制して、鶴仙人が飛び出す。

「このハゲ! ピッコロの軽口にかまつておる場合か!! どどん!!」

鶴仙人はたぶん、この場で自分が襲われているからか、亀仙人との共通の師匠、武泰斗の仇をうつためか、義憤では戦っていないからこそ、冷静でいられるんだろう。

亀仙人は歯を食いしばって、それから、自分の杖(いつの間にか手に戻っている!)を投げ、自分もそのままピッコロに突っ込んだ!

「くっ……とうっ!! つあああーっ!!」

杖はまるでブーメランのようにねじれた軌道を描きながらピッコ

口をかすめ……その間に、亀仙人本人がピツコロに飛び蹴りをかます、絵に書いたような同時攻撃だ！

そこに二人のどどん波と暗器が加われば、さすがのピツコロもいくつかは弾けず、命中したり、無理な避け方をするハメになっている。

「ふん、ただおいぼれただけではないようだな、武道家め」

……楽しんでいるのか、それともただ余裕があるだけか、ピツコロは三人を鼻で笑う。

しばらくは大丈夫だ、オレはそう確信して、意識を自分たちの戦いに向ける。

「つがあああ!! ぐああああ!!」

オレが放つ気弾が、一つ、また一つと魔族を木っ端みじんの『汚い花火』に変えてゆく。

ソシルミがぶつ倒れたから遠慮する必要がなくなった……つてわけじゃないけど、どのみち、手加減する余裕も、理由もないんだ。

「ぐわっ!!! ぎあああ!!!」

オレは直接ソシルミを守る仕事をチャパ王に任せて、とにかく気弾を撃ちまくっている。

危険な兵器を持った魔族や、人々を襲う魔族を優先的に狙うが、後ほもう、カンにまかせて撃つだけだ。

悟空はもう筋斗雲を使ってどこか遠くへと向かった、傷を癒すために病院……じゃないか、どこかで体を休めるんだろう。

……観客席やその周り、寺の敷地内はもう、阿鼻叫喚の有様だ。

「ぎゃああーっ!!」

「た、助け……がふっ……」

一人、また一人と、銃声や肉の立てる嫌な音とともに、観客やお坊さん、尼さんが殺されていく。

わんさか降りてくる魔族は、オレではどうやっても殺しきれない。

「きゃーっ!!」

逃げ送れた女の子が魔族に襲われている、オレは気をぶつけて魔族を倒そうとするが……だめだ、間に合わない、近すぎる。

そう思った時、半裸の男が駆け込んで、魔族をタツクルで弾き飛ば

した……バクテリアンだ!!

「へへ……食い放題たあ、大魔王さまさま……ぼげっ!」

「とうっ!! お嬢さん、逃げてください!!」

「は、はいっ」

クリリンや天津飯、それに予選敗退した武道家の中でも強いやつらが、なんとか魔族と戦っている。

それぞれのスタイルは様々だ、クリリンはひたすら駆け回って、ブルマたちを必死に守りながら、周りの魔族を倒していつている。

「バカ! クリリン!! こつちを守りなさいよ!!」

「そんなこと言っただって、見過ごせませんよ!」

「あーもう!! こんなことならヤムチャについて病院に行つてりやよかつたわ!!」

「くそーっ! クリリンのやつ、真面目ぶりやがって!!」

「がんばってー! クリリンさーん!!」

守るもののあるクリリンは必死に寺の外へ出るルートを探しているが、うまくいかない。

オレたちの必死の戦いでも魔族は全然減らず、それどころか包围は分厚くなっていく。

やつぱり、この事態をなんとかするには、ピッコロを倒す以外にはないんだ。

「はっ!! とあっ!! どどん波! どどん!! 鶴仙人さまに桃白白さんをお守りせねば……!」

一方天津飯はピッコロと三人の戦いに割り込もうとする魔族をひたすら叩き潰している。

もともと善人じゃない分、割り切った戦いをするのが、逆にありがたい。

様々な武道家たち、特にクリリンと天津飯の大暴れのおかげで、戦況は有利だ。

試合前から集まってきた警察も……観客の避難の役には立つてくれている。

「みなさま落ち着いて!! 警察の方の指示に従って避難をお願いし

ます!!」

……それでも民間人の被害は抑えきれない、悟空は無事に逃げ切れたのか？

そして、鶴亀両仙人、それに桃白白はピッコロ相手にいつまで持つ？

倒してくれるならそれが一番のはずだ、それでも、オレの胸には、ソシルミが意識を失う間際に放った言葉が強く刻まれていた。

「があ!! ぎああ!!」

一つ、また一つと汚い花火が上がリ、その何倍もの数の人間の命がオレたち武道家の手からこぼれていく。

クリリンがかめはめ波を放って周囲を焼き払えば、その隙間を埋めるように何倍もの魔族が降りてくる、それを防ぐために軍用機を撃ち落とせば、今度は地上がおろそかになって、チャパ王とソシルミが敵に囲まれる。

あちらを立てればこちらが立たずとは、まさにこのことだろう。

「チャパ王さま!! ソシルミさんを守るお手伝いを、どうかわたしに!!」

「好きに戦っている! かたっぱしから潰せば楽にもなる!!」

……意外、いや、ある意味予想通りだが、オレたちと深く関わっている武道家を除けば、一番活躍しているのはなんとバクテリアンだった。

バクテリアンは力を込めて弾丸を弾き、レスラーとしてのすさまじい突撃力で魔族を蹴散らし、ソシルミとチャパ王を狙う連中をうまく排除しつつ、観客まで助けている。

「このままなら、逃げるよりも魔族がなんとかなる方が先か……?」
思わず口をついた言葉の通り、魔族との闘いはこちらの有利に進んでいる。

問題は、言うまでもなくピッコロ大魔王。

ピッコロに挑みかかった三人は体中にダメージを受けながらも、息のあった連携でうまく戦っている、ただ無策で消耗戦をするとも思えないから、なにかがあるはず……それが、この寺の、もつと言えば、こ

の島、この世界の命運を握っているんだ。

「ハゲじい!!」

「つるっばげ!!」

亀仙人と鶴仙人はしきりにお互いを罵りあいながら、次々と見知った技や、見知らぬ技を放っていた。

鶴仙人のどどん波がピッコロの急所を狙って飛び、それをたまらずガードすれば、すかさず投げつけられた杖がその腕を押し込み、反撃を抑え込む。

その流れもこれだけ続けば慣れたものか、ピッコロが余裕の笑みを浮かべて次なる手を打とうとすれば、鶴仙人が超能力で持ち上げた大量の瓦礫がピッコロを襲い、土煙がその視界を封じる。

「どどん!! ……しっ!!」

そんな連携の中、次々と飛び回りながら的確なタイミングで桃白白がどどん波や暗器を放ち、ピッコロの行動を妨害する。

……ピッコロにダメージはなく、ただ、戦いか、それかいたぶることを楽しむようにニヤニヤと笑うばかりだ。

そして、飽きたのか、しびれを切らしたのか、手を握り込んで力を蓄えようとした……その時!

「きええええい!!」

「むっ!!」

桃白白がどこから取り出した青竜刀を持って突っ込む!

これまでここそ隠れて攻撃を行うのみだった桃白白が突如取り出した長物に面食らったピッコロは、思わず目を見開いて振り払おうとして――

「鶴仙流、逆輸入『太陽拳』!!」

「あ……がっ!!」

――上体を逸らした桃白白の後ろから、鶴仙人の太陽拳がピッコロの目をくらませた。

そして、客席でここそと動く亀仙人は、あるものを取り出した、あれは、オレも知っている。

前世の話じゃない、今生の……あれは家でよく使ってるタップパーだ

！

「ゆくぞ、鶴!!」

「わしに命令するんじゃないわい!!!」

「亀仙人が両手を突き出し、叫ぶ!!」

「魔封波!!!」

「な、あ、お……おおおーっ!!!」

亀仙人が放ったエネルギーの奔流に巻き込まれ、ピツコロは大波に飲まれる木の葉のように流されていく。

でも、オレは知っている、魔封波は命をかけて放つ技、亀仙人はここで死ぬつもりだ!

「つえええええい!!!」

「おおおおーっ!!! こ、こんな——」

が、鶴仙人がそこに割って入る、鶴仙人は自分も力を放って、ピツコロを亀仙人の作る流れからかつさらって、タツパーの中に押し込んだ!!

「今じゃ、封じるぞい!!!」

亀仙人は懐から『お札』を取り出し、ピツコロを封じたタツパーに向けてふらつきながら駆け寄っていく。

……どうやったのかはわからないけど、多分、亀仙人は何か危険なことが起きるのを察知して、封印のための道具を揃えていたんだ。

しかも、鶴仙人とうまく連携して、理屈はわからないけど、魔封波の反動も抑え込んだらしい。

亀の甲より年の劫、というか、亀の甲も揃えているんだから頭が下がる。

「っがあ!! チャパさん、今だ、ホイホイカプセルを使おう!!」

魔族はピツコロが封印されて動揺している、そこを突けば、なんとかホイホイカプセルを開いて仙豆を使えるはずだ。

そう思って、ソシルミのところを駆け出そうとしたその時……突然、見たこともないような速度で、『なにか』が、ピツコロの入ったタツパーを砕いた。

「はあ……はあ……肝を冷やしたぞ、やってくれたな、武道家ども

!!!

バラバラに砕け散ったタツパーとお札の破片の中、大汗をかいたピッコロががなりたてる。

……そのとがりには、ローブを着た人型のなにか!!

「せつかくお手伝いしてあげたのに、こんな早くにやられちゃうなんて、情けないっいたらありやしないわ」

「ふん、おおかた、きさまらの雑な偵察が見抜かれでもしたのだろう？」

「あら失礼ね、ハエを一匹落としただけよ」

「もうよいわ、下がっておれ!!」

「あつそ、じゃあ頑張つてね、おじいちゃん！」

人影はオレたちが茫然としている間に、すさまじい速度でどこかへと消えた。

あいつ女口調だが、声も姿も立ち振る舞いも明らかに男、つまりオカマだ。

ブルー將軍じゃない、声も明らかに違う……、なんだあいつは!!

「……許さんぞきさまら!! もう容赦せん、チリも残さず消し去つてくれるわ!!」

「ちよつとこれは……ヤバいかもしれん」

「お、怖気づいてるんじゃないわい、このハゲ! のう桃白白!!」

「わたしを巻き込まないでくれ兄者……」

オレのところまで伝わってくるほど怒りをたぎらせたピッコロの前に、三人は必死で虚勢を張る。

そう、虚勢だ……二人の仙人はオレにもわかるほど、その力をすり減らしていた。

「きええええ——ぐあああつ!!!」

「亀ーつ!!!」

杖を持って挑みかかった亀仙人は、片手でその杖をへし折られ、自分もその勢いのまま、崩壊しかけの本堂に突っ込んでいった。

……ソシルミが言ったのはこういうことか。

ピッコロに勝てないんじゃない、何が起きるかわからないから、手

持ちの材料で戦つてもろくなことになる、そう言いたかつたんだ。

「これでやつは終わりだ、おまえも力を使い果たしたようだな、もはや再びあの技を撃つこともできんだろう」

本堂の残骸を見ながら、ピッコロは呟く。

鶴仙人は悔しさをたたえた顔で、わなわなと震えている。

「先生……」

「なんだ？　じじいにもなって、師が恋しくなりでも——」

ピッコロが鶴仙人の小さなつぶやきをバカにした瞬間！

鶴仙人が全身に気を煮え滾らせて、一息にピッコロに向けて突撃を始めた！

「かああーつ!!!」

そしてそのまま、滑り込むようなタツクルで、ピッコロの腰にしがみつく!!

「そちらに参ります!!!」

「な、なに……く、くそつ……離さんか!!」

振り払おうとするピッコロの抵抗を抑え込む鶴仙人、あれは文字通り決死の……自爆の構えだ!

「桃白白!!　道場は任したぞ!!!」

「待て、待ってくれ兄者——」

次の瞬間、凄まじい爆発がかつて観客席のあつた場所を完膚なきまでに消し去り……その渦中に居たピッコロは……。

生きていた。

……当然と言えば当然、すでに魔封波で命を使い果たしかけた鶴仙人が更に自爆をしたところで、たかが知れているんだ。

「ク、クク……おいぼれの命一つで、わしを殺せるとでも思ったか……!」

「つ、鶴……」

瓦礫から這い出した亀仙人の、こころなしか力ない声が、鶴仙人を呼ぶ。

「ようやく思い出したわ、きさまら、あの男の一番弟子と二番弟子だ

な？」

「……おぬしが人の顔など覚えるとは意外じゃの」

「当然、わしにとつて人間など虫にすぎん、だが、毒虫の色は覚えておくものだろう？」

亀仙人は二の句を告げず……黙りこくつたまま、数秒、ピツコロ大魔王を睨んだ。

そして、弾かれるように後ろに飛び退き、手を前に揃えた！

「気功——」

「ぬるいわ」

飛び退いた瞬間にはすでにピツコロが飛び出し、ちょうど、手を前に揃えきつた所で、手刀が亀仙人の腹を貫いていた。

……終わりだ。

この戦いに勝ち目はない。

周りを見れば、生き残りの……いや、逃げ遅れた観客は、もういない。

「チャパさん、逃げるぞ!!」

「天！ 撤退だ!!」

「く……鶴仙人さま……!」

オレが叫ぶのと、桃白白が叫ぶのはほとんど同時で。

自然に、まだ倒れたままのソシルミをかばうように、この場にいる武道家たちが集まることになった。

桃白白は懐に手を伸ばしてチャパ王に向け、首をかしげる。

「いや、場所がなからう」

何か乗り物を出すと言った桃白白にチャパ王は、場所がない、と返したと、一瞬後になってわかった。

桃白白はニヤリと笑って、懐から出した手に握ったホイホイカップセルを、そのまま武舞台のあつた場所に投げ捨てる。

そして、自らも追って入った……一体何を!?

「見ておらんと蹴散らせい!」

オレの動揺をさとしたチャパ王が、魔族を潰せとせかす、ならばなにか策があるんだろう。

天津飯とオレは動揺を振り切ってエネルギー技を連射する！

「がああ!! ぐあ!! だがあ!!」

桃白白が穴にかまうからには、穴の周りだ、そうアタリを付けて、片っ端から穴の周り、穴の上空の魔族を潰していくと、至近弾の爆発で墜落した魔族が、穴の底で甲高い悲鳴を上げた！

そして、落下音じゃないバチバチとあちこちに敵の破片が散らばる（この戦いでは）聞き慣れた音と、バラバラという空気を叩くような音が、地面の下から聞こえだす。

この音は——ヘリコプター!!

「乗れ、逃げるぞ!!」

そうか、地面の下、人間が一人もない場所なら魔族もないし、小ぶりのへりくらいなら出せるのか！

オレを含めた武道家たちの顔に希望が浮かぶ。

……そして、亀仙人の死体がオレたちの目の前に投げ捨てられた。

「逃がすと思うか？ クク……!!」

血が滴ったままの手を握り込んだピツコロ。

ヤバイ！

ソシルミを抱えて乗り込むには時間が足りない、オレはとっさにソシルミに覆いかぶさって——その瞬間、ピツコロの腕からエネルギーが吹き出し……。

チャパ王が、見たこともないほど強く手を輝かせて、オレたちの前に躍り出た。

「ソシルミを頼んだ、そいつはガキだからな、おまえみたいのがついてないといかん」

「チャパ王——」

そして、焼け焦げた地面と、崩壊した寺、街にぽっかりと残った燃え残り。

……パラパラと音を立てるへりと、ソシルミの師匠が残した『影』だけが、残された。

↓つづく

第二十六話：転生地球人が力を望むまで

板状の金属に別の金属が衝突する甲高い音。

回転する機械が風を叩く音。

火薬の爆発音、動力機械の爆発音、肉が肉を叩いて破裂させる音。

そして、叫び声。

「……………ここは……………」

戦場、そしてヘリコプターの中だ。

それはすぐに分かった、聞き慣れた戦場の音、魔族……そして、よく知った人々の叫び声。

……だが、違和感が拭えない、何かが、足りない。

俺は確か、突如、何故か現れたピッコロ大魔王に挑み、敗れたはずだが……。

「プリカの奴め、見捨てろと言ったのに……………」

ヘリに乗り込んで戦っているなら、おそらく今は撤退中だろう。

鶴仙人と亀仙人、そして桃白白は、ピッコロを倒せなかったのだ。

いや、俺が気になっているのは、そんなことじゃない、声がしない、あるはずの『声』が足りない——

「師しよ…………ゲフツツ………… 師匠!!」

「ソシルミさん、目が覚めたんですね!!?」

横から、大男が顔を覗かせた。

……バクテリアン、俺と戦い、俺から学び強くなった男。

そうか、こいつも一緒に逃げているのか。

「し、師匠はどこだ……………」

「チャパ王さまは…………その…………」

顔を曇らせたバクテリアンが言いよどむ。

俺は、もう分かった、言わなくていい、と、固く目を閉じることによって伝える。

師匠は、死んだ。

「俺達は負けた、師匠は死んだ、そして今、このヘリは逃げているんだな?」

「その通りです、でも、逃げ切れるかどうか……」

バクテリアンは目を伏せる……いや、地面の方を見る。

おそらく、ピツコロ大魔王が地面から見張っていて、その気になればこのへりは堕ちる、そう言いたいんだろう。

ほんの数秒だけ難しい顔をしていたバクテリアンだが、すぐにはつと顔を上げ、へりに取り付こうとする魔族を叩きにかかった。

もはや俺という重傷者にかまっっている時間もないらしい。

俺の体はひどい有様だった。

手が焼け焦げているのは元からだだったが、ピツコロの一撃を受けたせいで、同じくらいはやけどが全身に散らばっている。

それだけではない、衝撃で内臓が受けたダメージもひどく、頭部を含めてあちこちが脳内出血を起こしていた。

医者であれば、どうして生きているのか分からないと言うであろうダメージを、地球人としては規格外の生命力と、培ったヨガの無意識な活躍で、どうにか、生きていられるだけに抑え込んでいるのが、今の俺の状態だ。

「師匠……」

ドラゴンボールがある、そうどれだけ自分の胸に言い聞かせても、抑えることができない。

俺を8年間養い、鍛え上げたあの好漢は死んでしまったのだ。

しかも、魔族に殺された者の魂は成仏出来ずに苦しむという、今はどこで、どう『苦しんでいる』のか。

師匠はなぜ死んでしまったのだろうか、悔いはなかったのか？

ドラゴンボールで生き返れると信じて、覚悟の上で自分の身を投じたのだろうか。

俺は無念に浸ろうとするが、それを止めるかのように、叫び声が響く。

「く……くそっ!!!」

俺の無念を引き裂いたのは桃白白で、その理由は一瞬後にわかった。

ガン、と大きな音の後、響くエンジン音が奇妙な……何か、致命的

な気配を感じさせるものに変わったのだ。

「エンジンをやられた!! 脱出するか……!?!」

「無理です!! 下はもう魔族に——」

天津飯がまた、絶望的な一言を放つ。

「どうやら脱出してもしなくても、俺達にもはや逃げ場はないらしい。」

それでも腹をくくるしかないか？

そう思った時、船の無線機が甲高い音を立て、何か、電波を受信し始めた。

《ザ……ザザ……わたしは……ザ……》

しびれを切らした桃白白が、戦っている連中に声をかけようとした瞬間、ヘリの無線機がひとりでに無線を受信し始めた。

原理すら不明だが……ただ一つ言える、こんな事ができる奴は、この世にほんの数人しかいない。

《わたしはピラフ大王、きみたちを助けに来た、ギリギリまで速度をあわせる、わたしの機体に移乗してほしい》

「ピラフツ?!」

痛みを堪えて後ろを見ると……確かに、ピラフの機体、元の歴史ではピラフがピッコロ大魔王に譲り渡した機体だ。

それが、めちやめちやに砲台を動かし、魔族を撃ち倒しながらこちらへ向かっている!

啞然としていると、ヘリから身を乗り出して戦っていたプリカが機内に戻ってきた。

「お、おい、桃白白! どうす……ソシルミ! 起きてたのか!!」

「ああ……この状況、不可解だが、奴の申し出に乗るしかあるまい、機体ももう、持ちそうにない」

「その通りだ」

桃白白が俺の言葉につなぐ。

「だが、ピラフ大王とやら、ピッコロ大魔王はどうするのだ?」

《そ……それはなんとかなる、とにかく乗り移ってくれ!》

「フン、秘密か、まあいいだろう」

そのやり取りを聞いたプリカは少し考え、自分の意見を加算し、多数決が成り立つと思ったのだろう、『残り二人』のクルーに声をかける。

「天津飯!! バクテリアン!! この機体を捨てて、後ろから来るやつに乗り移る!!」

「ダメですよプリカさん! 空は魔族でいっぱいです!! あの機体だって、狙われてます!!」

バクテリアンが悲鳴を上げた。

確かに、航空機や身一つで飛ぶ魔族の軍団で、空はいわゆる『青く見えない』状態になっている。

だが、やるしかない。

「しようがあるまい、舞空術を使えるオレが先に出て露払いをする、そこをきさままらと桃白白さんが飛ぶんだ!」

「天津飯……お前の実力は分かっているつもりだ、だが……」

「ソシルミ、きさまに心配される筋合いはない、わたしはただ、鶴仙人さまの仇と戦うための戦力を減らしたくないだけだ」

天津飯はそう言つて、魔族の群れへと飛び込んだ!

その瞬間、あちこちから魔族の弾丸、砲弾が天津飯に殺到する、天津飯はある弾は手で掴み、ある弾は腕で受け、そして、ある弾は覚悟を決めた腹筋に迎え入れていく。

——あんな戦いは長くは続かない、このままだと天津飯は袋叩きの末、死ぬ!!

「プリカ、早く飛べ!!」

「お、おまえを置いてく前提で言うな! つかまれ、さっさと行くぞ!!」

プリカは俺を無理やりに背負い、へりの出入り口へ向かい、そこで立ち往生する。

俺を背負い、敵だらけの魔族の中に踏み込むには、このへりは脆く、プリカの力も足りないのだ。

「わ、わたしが投げます! その瞬間にプリカさんも飛べば、なんとか……!」

「そ……そうか！ よし！」

「待て、バクテリアン、お前の脱出はどうなる！」

「追ってすぐに行きます」

バクテリアンはやけに清々しい笑顔でそう言い放つ。

何か、まずい気がする、このままだと、また……。

「考えてるヒマあるか、行くぞソシルミ、バクテリアン!!」

「はいっ!!」

プリカとバクテリアンは勢いよく掛け声を放ち、バクテリアンが差し出した手の上にプリカが立つ。

そして、そのままの勢いで一気に、二人の満身の力でピラフの飛行機へと――

「ガッ……グオオ……！」

「だ、大丈夫かソシルミ!」

激突しながら、転がるようになってか甲板へと着地（着艦？ 着機

？）した。

うるたえるプリカを宥めながら、俺は甲板の隅に配置されたハッチへと這う。

「ぐああっ!! こ、このままだどこつちも持たん！ バクテリアン

と桃白白さんはまだか!!」

天津飯が腕と足に大きな銃創を作って叫ぶ。

へりはふらふらと飛び、すぐにでも墜落しそうだ。

「とああっ!! 天!! 早く機内に入るぞ!!」

「バ、バクテリアンのやつはどうしたのです!？」

「桃白白様、バクテリアンはツツ!!」

俺と天津飯が叫ぶのはほぼ同時のことだ。

よろめく機体が踵を返し、魔族に攻撃されながらゆっくりと高度を下げ始めたのも、また、ほぼ同時のことだった。

「バクテリアンツツ!! 戻ってこい、バクテリアンツツツ!!」

ハッチを閉めると共に急速に加速し始めた機体は、ピラフの予言通り、地上で目を光らせているはずのピッコロに攻撃されることなく、魔族の群れを引き離し。

……こうして、俺達による二度目のパイヤ島来訪は、終わりを告げたのだった。

機体の中に迎えられた俺に、プリカは即座にホイホイカプセルを展開——案の定、一分ほど見つけれずあたふたしながら——
仙豆を俺の口にねじ込んだ。

元気いっぱいになった俺がやったことは、ただ一つ、ブリッジへと乗り込み——

「貴様ツツ!!! ピラフツツツ!!!」

「ぐ、ぐげ……」

「や……やめろソシルミー！ お、おい!!」

何をやめるのか、俺はピラフの首根っこを掴み、その顔を俺の顔より更に高くへと釣り上げているのだ。

それをやめろと言われている。

やめる気はない、プリカもそれが分かっている、俺に突っかかることもなく、ただ怯えるだけだ。

「ピラフ、これは一体どういうことだツツ!!!」

「わ、わたしたちは、間違った道を選んだのだ……」

ピラフが要領を得ないことを言い出すのを、力を緩めて聞いてやる。

「メシヤキ族はもともと、魔族だった、父上が、あいつの、ピッコロの封印を見てから、変わった」

「ピッコロの封印とメシヤキ族に何の関係がある」

「隠し場所を、外交の、切り札にした」

魔族であったピラフの父は、ピッコロ大魔王の封印を目撃し、それを外交カードに魔族の群れから独立した、そう言いたいのだろうか。

「そ、それは間違っていた……やり方が間違っていたのかもしれない……」

「何が起こった」

「わたしたちの国はルシフェルに襲われて滅び、そして今も……魔族に襲われ、ピッコロの封印を解く手助けをさせられたのだ……!」

「そしてお前はむぎむぎと情報を吐き、のこのこ俺達の所までやってきた!!」

「すべてはわたしのせいだ……道場のみんなも、殺されてしまった……ラパータも、ローテイさんも……!!」

予想外の名前に、俺は再び手の力を強め……そこでようやく、プリカが俺の腕に手をかけ、頭を横に振った。

……………。

「皆を殺した奴らに、従ったと」

「ピッコロ大魔王の居場所とドラゴンボールのことを吐かねば、シユウとマイを、殺すと言われたのだ……」

シユウとマイ、ピラフの二人の部下。

俺は3年前、そいつらを助けようとするピラフに仙豆をくれてやった。

その時感じたのは喜びだった、生命の尊重、部下への愛、それらを助けるのは、俺にとって何より心地のいい、自分らしいことだと、思えたのだ。

……ピラフの首にかけた手をゆっくりと下ろし、襟を離す。

「げほっ……げっ……」

「ピラフ、感情的になってしまった、すまない」

「あ、謝らなければならぬのはわたしだ、わたしなんだ……」

俺はいつの間にか垂れていた涙を、ボロボロの僧衣で拭う。

……僧衣はボロボロだが、体は仙豆で新品同然だ、そのミスマッチが気色悪い。

よし、くだらないことを考えるだけの余裕はある、戻ってきた、そのはずだ。

俺が調子を取り戻そうとしていると、それを待ち構えていたのだろう、桃白白が話しかけてきた。

「それで、ソシルミ、感動の和解もいいが、状況が分かったところで、次にどうする?」

「ひとまず魔族は撒きました、となれば、次は着陸し、戦いに備えるべきです、この機体は大きいが、やれることは限られていますから」

「……この分では、亀仙流、鶴仙流ゆかりの地は危ないだろうな」
「あいつらの情報収集能力を考えると、そうなるか……」

桃白白とプリカの言う通り、この歴史の魔族はおそらく非常に情報収集能力が高い。

となると、我々の拠点は抑えられているだろう……と言いつつ、俺の脳裏にはすでに撤退先の候補地が浮かんでいた。

十分な居住空間と機材があり、ある程度秘匿性の高い基地——

「ピラフ、座標は俺が入力する、そこに向かってくれ」

「あ、ああ……わかった」

俺はピラフ、桃白白、プリカを伴って操縦席へと向かい、コンソールを操作する。

座標を入力していく俺に、ピラフとプリカは首をかしげ、桃白白は、ニヤリと笑った。

プリカが座標を見て、それから俺の顔を見て聞く。

「それで、ここにはなにがあるんだ？」

「マッスルタワー！」

今度はプリカも笑った。

『臨時ニュースを——正体不明の武装勢力がパイヤ島に——』

——スクランブル発信した空軍機からの連絡が——』

ボサついた髪を掻きながら、着崩した……というよりは、急いで着込んだであろう、汚いスーツの男が必死の形相で原稿を読み上げる。

内容は、俺達がさつきまで体験してきたこと、そして、俺達が知らないことの数々。

『——武装勢力はパイヤ島に点在する複数の仏閣を襲撃し——』

——未確認情報ながら、パイヤ島中央病院になだれ込んだとの——』

「チャオズ……!!」

俺の隣で横たわる男、天津飯が悔しげに呻く。

……ヤムチャとチャオズ、二人が担ぎ込まれた病院は、確かあそこだったはずだ。

『空港及び、空軍基地などが中心的に攻撃されているとの報告の後、パイヤ島全土との通信が途絶え——今入ったニユースです！パイヤ島への襲撃と時を同じくし、西の都を含む世界各地に武装勢力が現れ、西の都の〇〇地区では大きな爆発が——』
ニユースは続く。

「す、すごいことになってるんだな……」

「ああ、『ハツチャン』、魔族どもは好き放題の大暴れだ……嫌になつたなら今から逃げてもいいんだぞ、ここだつていつまで安全かわからん」

天下一武道会の会場で行われた殺戮は、おぼろげながら俺の記憶にも残っている。

……俺が避けた最初の一撃の時ですら、数十人の観客達が消滅したので。

あの暴威が世界を襲う、戦いが嫌いな『ハツチャン』も例外ではない。

「いや……、困ってる人ほつとくの、いけない、それに、おまえたちはソングクウの友達だ」

「オレは違う」

天津飯はまともに動かない体を無理に動かして、パイとそつぽを向いた。

……魔族との戦いで重症を負った天津飯に、俺はたった一粒しかない仙豆を、半分くれてやるつもりだった、しかし、プリカの奴はあまりにも焦っていたのか一粒の仙豆を俺の口にねじ込んでしまったのだ。

残されたのは命に別状はないまでもひどい怪我をそのまま残した天津飯、俺は負い目を感じた……という程でもないが、自分から申し出て助けに来てくれた人造人間8号、ハツチャンと共に、マツスルタワーの医務室で看護を行っていた。

「天津飯、チャオズと鶴仙人様を復活させる方法があると言ったら、どうする」

「なにっ!!? きさま、一体……いや、あるのか……?」

「ある、俺があの時、ピラフ大王と争っていたのはその手段、ドラゴンボールだ」

「では、今すぐにも……」

「ピッコロ大魔王を撃破しなければそれは叶わない、ピッコロ大魔王は間違いなくドラゴンボールを抑えている」

天津飯は、ぐう、と齒を食いしばった。

憎んでいたはずの兄弟弟子との共闘の末、無念のうちに果てた師匠、おそらくは戦うことすら出来ずに斃れたであろう、弟子、蘇らせることが出来るならば、なんとしても手を伸ばしたいに違いない。

……俺も自分の手の届かぬ場所ですら師匠を失い、半生を共にした道場もまた、魔族の襲撃によって壊滅したのだ。

俺は機内でピラフから聞き出した道場の最後を想って齒噛みし、とりあえずその想いを抑え込んで、天津飯に語りかける。

「意外だな、天津飯」

「なんだ、藪から棒に」

「お前は……俺がこう軽薄に、不思議な情報を提供したら、意味なく反発すると思っていた」

「ソシルミ、なんだかわからないけど、そういうことを言っちゃいけない気がする……」

ハッチャンが俺に釘を刺す……ああ、そうか、『人造人間8号』。

かつて俺が鶴仙流を裏切った理由として選んだカバーストリーは、武道家全てを過去にする人造人間を製造するレッドリボン軍の脅威だった。

それがわかりやすい形で真実だと分かっただけならば、俺を憎む理由そのものが限りなく小さくなる。

「そうだ、おまえが想像している通りだ、おまえは、オレたちよりよほど多くのことを知って、それをなんとかしようとしてきた、そして今……オレもまた、おまえが防ごうとしてきたこととの対決を迫られているんだらう？」

天津飯の理解は事実の全てではない、それどころか、過程には大きな偽りまでもが入り込んでいる。

……だが、それでも、俺達の行為を、思いを、十分以上に理解しているのだ。

「——ああ、奇遇ですね、桃白白さん！　一緒に入りましょう、ちよつと話したいことがあるんです」

病室の外で、プリカの、やけに白々しい声がする。

ドアが開くと、プリカ、桃白白、そしてピラフがわつとなだれ込んできた。

「桃白白さん！」

「弾丸程度で情けない、いくら力があつても少し囲まれた程度ですれでは、先が思いやられるな」

喜色を浮かばせた天津飯を、桃白白は強くはねつける。

だが、ハツチャンはプリカたちと挨拶していてその会話に気付いていなかったようだ。

「ん？　そのひと、オレがここに来るときもそこにいたけど、もしかしてずっといたのか？」

桃白白がぴくりと眉を上げる、……かなり動揺しているようだ。

天津飯は一瞬顔を明るくしたが、次の瞬間には桃白白にジロつと睨まれ、気まずい空間が生まれる。

そして、自分が生み出した気まずい空間を吹き払おうとするように、桃白白が俺に小さく聞いた。

「ドラゴンボールの話、あれは……本当か？」

「本当です」

……ピッコロ大魔王はおそらく、ドラゴンボールの使用後に神龍を殺害するだろうが、それも神様に頼んで復活させてもらえばよい。

取らぬ狸の皮算用かもしれないが、全てはピッコロ大魔王の撃破につながっているのだ、この程度の省略は、許してもらえないだろう。

「そうか」

そんな俺の内心を知ってか知らずか、桃白白は小さく頷いてそれっきりだ。

「……プリカ、ピラフ、さつきニュースが入った、西の都が襲撃され

て……」

「オレたちの家が壊されてドラゴンボールが盗まれたんだろ？」

プリカは顔をしかめながらも、知っている、というふうには携帯端末を見せてくる。

家の管理をしていたロボットや様々な管制プログラムの情報から、とつくの昔に知っていたようだ。

「す、すまない、せつかく電波遮断容器に入れていたというのに、わたしは話してしまっただけ……」

「この件についてお前が謝ることはもうない、ピッコロを倒す努力だけでいい、俺達もそうする」

「財産は大体銀行にあるしな」

プリカが俺の知らない情報を付け加えた、金の勘定と管理はプリカにまかせている。

「パパイヤ島は良くて壊滅、最悪、全土が消滅しているだろう、ヤムチャ、チャオズ、クリリン、及び亀仙流絡みの非戦闘員の複数人が行方不明だ」

「行方不明、と言ってもあの戦場で行方不明になったのだ、ほぼ……」

俺達は一斉に顔を見合わせ、曇らせる。

俺の師匠であるチャパ王、桃白白の兄であり天津飯の師匠である鶴仙人、亀仙人、バクテリアン、道場の皆、会場や世界中で殺された、そして今から殺される人々。

犠牲はあまりにも大きい。

だが、だからこそ、戦わねばならない、その犠牲を取り戻すためにも。

「わたしはこの基地に残された機械を使って、ひとつ、ピッコロとの戦いに役立つものでも作ろうと思う！」

「オレは傷を癒やし、ピッコロとの戦いに備える！」

「……こやつは傷が落ち着いたら、鍛え直す、連中との戦いをさせるには鍛え方が甘いと、よく分かった」

「じゃあ、オレは手伝う、たたかうのはスキじゃないけど、特訓の手

伝いくらいはできるぞ!」

みんなの決意表明が住むと、俺達に視線が向いた。

「オレはピラフと——」

「——俺とプリカは孫悟空と合流し、共にピッコロ打倒のための力を蓄える」

「居場所は知っているのか?」

俺は笑いを持って答える、……多分、間違いないはずだが、自信はそこまで強く持っていない。

俺達は解散し、俺とプリカは誰もいない司令室で対面していた。理由は……さっきの俺の言葉の意味を確かめるためだ。

「おいソシルミ、いきなりなんだ、悟空の居場所と、力って……」

「カリン塔だ、お前が俺の言葉をしっかりと伝えてくれたなら、きつと悟空はそこにいる」

「……そうか、悟空と合流すれば、戦力は十分だし、ついでにカリンさまに鍛えてももらえるだろうからな」

プリカはばばつとまくしたてる。

何か焦っているような感じだ。

「カリン様は一度鍛えた俺達をもう一度鍛えるようなタイプじゃない、それに、悟空と合流したから戦力が十分だと? そんなはずはない、絶対に足りない、俺は悟空と共に——」

その瞬間、プリカがぐわつとにじり寄り、腕を振りかぶり、殴る……のではなく、胸ぐらを掴んだ。

身長差から、引き上げるのではなく、引き下げるような動きになり、俺はたたらを踏む。

「悟空と何をするつもりだ!!!」

「……分かってないはずないだろ、俺は」

「超神水を飲むつもりだな!? ダメだ!!!」

超神水。

カリン塔に秘蔵された、飲んだものに隠された力を引き出す水。

ただし、カリン様が就任して以来、ただ一人もその水を飲んで生き

延びた者はいないという、強烈な毒物としての性質も併せ持っている。

元の歴史においては、老いたピッコロ大魔王に倒された悟空が飲み、6時間苦しみを耐えた後に克服、それによって得たパワーは、若返ったピッコロ大魔王をも圧倒したという、非常に効果の高いパワーアツプ手段だ。

「……オ、オレは……チャパさんに、おまえのことを頼まれてるんだ」

「その師匠の仇をとるためだ」

「ダメだ!! ここで鍛えろ、桃白白だって、頼めば教えてくれる!」

プリカはどうしても、俺を行かせる気はないらしい。

かくなる上は……。

「俺も死ににいくわけじゃない、勝算はある」

「……なんだ」

「俺の流派は実践武術の性質を持つ、毒その他、肉体に異常をもたらす要素への耐性は強い、薬膳料理などによる毒抜きの手段も持ち合わせている」

「それで、超神水の毒性に立ち向かうのか」

食いついた、これなら……。

「ああ、それに、超神水に対抗するには、体力と精神力、生命力が必ずやだ、範馬の血を持ち、ヨガを修めた俺にびったりじゃないか」

「……そう言われれば、そうなの……か?」

プリカは考え込むような感じで押し黙った。

超神水がそんなやわな毒でないことなど、俺には分かっている、だが、どうしてもピッコロに対抗する手段が欲しいのだ。

これは賭けだ、その上で、俺は挑戦したい。

「プリカ、ピラフが、道場の皆の最後を話してくれた」

「ソシルミ?」

「ケララ先輩、パタラ先輩、双子のあの人達は故郷じゃ忌み子でな、拾われたことに恩義を感じていた」

「……この世界にもそういう所があるのか」

「ああ、それで、自分たちを育てたローティさんと、同じく拾われ子のガキどもを守って戦ったらしい……そして、ピラフはその首を、魔族どもに投げつけられたと言っていた」

プリカが顔を歪める、気持ち悪い話をされたからではない、道場の面々とは、もう3年の付き合いになる。

俺も話しているだけで胸糞が悪い、プリカが3年なら俺は12年だ。

最低限平静を装うため、俺は拳を握り、怒りをそちらに移す。

「チャルク先輩は大事にしていた武器を次々使い捨てながら、魔族を銃ごと切り捨てていた」

「ああ、組み手がヒートアップすると、自分だけ剣を持ち出して切りかかってくる……」

「ピラフが連れ出された時には、全身に自分の剣を、突き刺された姿で、壁に磔にされていたらしい」

武器術の修練に余念がなく、刃物だけではない、木剣まで丁寧に扱っていた先輩。

俺は拳を更に強く握りしめて、次を言おうとする。

「ラパータは、最後まで、ピラフたち三人を庇っていた、だが——」

強く握られていた俺の手を、プリカが上から柔らかく包んだ。

手を見ると、握りすぎて完全に白くなっている。

「もういい、わかった、どれだけやつらを倒したいのかもわかった、勝算も、あるんだろ？」

「……ああ」

プリカにこうされてみて、やっと分かった。

俺は自分から道場の悲劇を話したがったんじゃない、自分が戦う力を得るために選んだ手段——友をだますことが、自分で我慢ならなかったんだ。

だから、それを誤魔化すために、わざと自分の気持ちを高めようとしたのだろう。

……しかし、それが分かったところで、俺が止まることはない。

俺は力を得る、そして、ピッコロ大魔王を倒し、地球の平和と、殺された武道家達を取り戻すのだ。

自分自身のために、変化した運命の責任を取るために。

↓つづく

第二十七話：転生地球人が背負うまで

俺達は一路カリン塔にジェットを飛ばし、ボラ・ウパ親子への挨拶もそこそこにカリン塔への登頂を開始した。

下部からは頂上が見えない、果てしなく高い塔、しかし、今の俺達にとつては朝飯前の小運動に過ぎない。

「とっ！・落ちるなよっ！」

「んなへマをするかッツ!!」

軽口を叩きながらも、常人のスプリンターが走る以上の速度で塔を駆け上っていく俺達二人。

一時間もしない内に頂上である居住区画が見える……が、それと共に、何やら奇妙な音が聞こえてきた。

「……風音か？」

「いや、風ではない、生物か機械の音だ」

ウオンウオン、あるいは、ギイギイ、その両方が、以前塔を用いて修行していた時には聞かなかった音。

何かがおかしい、脅威というよりは純粋な不安感を煽るような音だ。

「お、おい、なんかヘンじゃないか？」

「……もう遅い、着いてしまった」

俺達が居住区画にたどり着くと、もはやその音は気がかりでは済まない大音量になっていた。

そして、はしごの末端から乗り込んだ俺達を、カリン様が出迎える、これも妙だった、わざわざカリン様が来るなど……。

「よ、よう来たの、ソシルミ、それにプリカ」

「カリン様自らお出迎えとは」

「ことがことじゃからのう、いつそ、飛行機で来ても良かったんじやがな」

カリン様がわざわざ迎えに来た理由はすぐにわかった、それは、事態が逼迫しているからではない。

それはこの音の正体、つまり、これが音、ではなく、声、叫び声で

あることにあるのだ。

「悟空はもう超神水を？」

「その通りじゃ、……よく知っておるのう」

「なかば私にしかけたようなものですから、『傷を癒せ』と云えばここに来ると思っていました」

「それでわざわざ、オレにそこまで言わせたのか」

プリカは合点がいった様子でオレを睨む。

悟空が超神水を飲むのは元の歴史と同じ、非難される筋合いはないが……まあ、ひどい叫び声だ、同情心も湧くのだろう。

「カリン様、私にも超神水を下さい」

「おいソシルミ！ やめとけて、悟空でもこんなひどい声で叫ぶ毒なんだぞ!!」

「……とりあえず入って、悟空と会おうとええ」

俺達は言われるがままにメインフロアに付いていく。

そして、足を踏み入れた瞬間に、絶叫はクリアな、完全なものになった！

「ぎゃあああああつ!!! ぐおおおおお!!!」

そこにいたのはもんどり打って今にも死にそう大な絶叫を繰り返す悟空!!

「これは……ツツ!!」

「悟空……!」

絶え間なく悶絶し、僅か数秒だけ苦痛を抑えて呼吸をしては、またその空気を全て絞り出すように叫ぶ悟空！

その絶叫は悲惨というだけではない、もはや、それを聞いている俺達にまで苦痛を味わわせるような響き。

満身の苦痛を叫ぶその悟空の声は、どんな地上の人間でも発することが出来ない音量でありながら、今にも消え入りそうな悲痛さをも感じさせるものだ。

「これでわかったじやろう、あの悟空でさえこんな有様じゃ、おぬしがいかに猛者と言えど、その力は人間から一歩か二歩はみ出した程度、それでは……」

「か、帰るぞソシルミ！ いや、いや、ここで悟空を待つて修行をす
るつてのも……」

悟空は全身をのたうち回らせ、絶え間なく叫ぶ。

汗は滝のように溢れ、周囲を見れば叫びすぎて裂けた喉からであろ
う喀血があちこちに散らばっている。

……悟空でなければ死んでいる、それがはっきりと分かる姿がそこ
にあった。

だが、俺はここで引くわけにはいかない、それは目的があるからで
あり、それが俺の生き方だからだ。

「カリン様、まず仙豆を下さい、それで体力と栄養素を万全にしま
す」

「仙豆か……、や、やるのはええが……」

「ソシルミ……」

プリカが俺の服を掴んで引っ張る。

それを外して、俺はカリン様に更に嘘っぱちの説明を並べた。

「それと薬膳料理で、体力を万全以上に高め、毒に備えます、腹にも
のが溜まっていけば、毒は入りにくいということもあるでしょう……
栄養学の基本です」

「お、おぬしは勉強熱心じゃな……」

カリン様が、濁したように小さく言う。

カリン様の知る限りでも、14人の武道家達が超神水を飲み、そし
て死んでいったという、ならば、ぱっと思いつく対策などは全てやつ
たに違いない。

その上でカリン様が言葉を濁してくれているのならば、それは
……。

「私にはヨガの術もあります、心技体のうち、心と技ならば、悟空に
も負けはしません」

「ヨガ、ヨガか……そうじゃのう……」

「カリンさま、こいつの言ってることって……」

問いかけるプリカに気付かれないように気を払いながら、俺はカ
リン様に向け、精一杯の覚悟、そして懇願の意思を伝える。

口裏を合わせてくれ、合わせなくてもいいから、俺が超神水を飲むことに、もう反論しないでくれ。

お願いします、と。

「……そうじゃの、肉体はともかく、それを操る術と精神力はその悟空よりおそらく上、肉体もそんじよそこらの武道家より生来、丈夫なようじゃし……」

「カリンさま、ソシルミに超神水を!？」

「うむ」

プリカは俺とカリン様を交互に見る、カリン様はつとめてプリカから目を逸らし……プリカは俺を見て、覚悟を決めたようだった。

カリン様はどうやら、俺に味方してくれるらしい。

「ありがとうございます、カリン様」

「礼などええわい、危なくなったら、すぐ吐くんじゃぞ」

プリカはもう何も言わず、俺を見つめている。

その覚悟の意味は、信頼なのだろう。

俺は今、友の信頼を利用してまで、死地に向かおうとしていた。

俺が超神水を飲むのは、悟空とは別の部屋だ。

……互いの声がうるさすぎてヨガに集中できなくなるだろう、ということもあるし、料理を食べるのにもジヤマだからだ。

「……よく食べるな、まだ前の仙豆が腹に残ってるのに」

「ゴク……メリ……ああ、俺の胃袋は宇宙だ」

「こんな時にまで軽口か……」

プリカは呆れた様子で俺の皿を取り替えてゆく、こいつには珍しく、こんな料理を見ても、腹一つ鳴らさない、かなりの自信作なんだが……。

この薬膳料理は俺が各地の武道場などから（道場破りで）頂いてきたレシピをベースに、ローティさん監修のもと味と効能を両立させたものだ。

「ソシルミ、おぬし……」

あぐらで食べまくる俺に、カリン様が語りかける。

「これが本当に飲みたいのか？」

……かつて、『自分の気持ちに素直になれ』と言ってくれたカリン様の問いかけは、つまり、自分を信頼している友を騙してまで、そんな罪を背負ってまで、力を手に入れたいのか、飲んだとして、ただ死ぬだけかもしれないのだぞ、ということなのだろう。

これは、俺が本当にやりたいことなのか？

「ええ、飲みたいです」

ピッコロ大魔王と戦う、世界を守る。

まさしく俺らしい行為じゃないか、

「そうか……わかった、飲むとええ、わしは知らんぞ……」

「ありがとうございます」

カリン様は、俺という若者が命を賭して力を得ようとする事への深い諦めと後悔、そして、覚悟を受け止める意思……仙人としての態度を持ちつつ、若干及び腰な様子で、俺の前に超神水の湯呑を置いた。
「ほ、本当にいかんと思ったら吐くとええ、誰も責めはせんからの……？」

「私以外は、ですがね」

そして、カリン様は、いそいそと部屋を出ていった。

残るは、プリカと俺のみ。

「……飲むんだな」

「ああ」

俺は超神水を前に、いわゆる座禅の形に足を組んだ。

……ヨガの姿勢など、超神水の苦痛の前に、どれだけ持つか分かったものではないが……俺を心配そうに見るプリカを少しでも納得させるには、必要だろう。

「さて、と、プリカ、飲んだら集中したい、少し外してくれ」

「ああ、……あんな準備までしたんだ、大丈夫だよな」

俺は何も言わず、超神水の入った湯呑を持ち上げる、特段危険な匂いがするわけでもなく、色はただ黒いだけ。

だがこれは、カリン塔を登りきる程に強力な武道家達を葬ってきた危険な水だ。

舐めるだけで悶絶するであろう超神水は、怖気付けば飲み込めない、俺は湯呑を掲げ、「一気に流し込む!!」

「——ツツツツ!!!」

「ソシルミ!!」

瞬間、口、喉、食道、胃袋を貫く激痛!!!

痛覚ではない、風邪のような『病の感覚』を痛みのレベルにまで引き上げた苦痛だ!!

まさしく『内臓がひっくり返る』痛みに悶絶しながら、なんとかプリカに答える。

「は……がツツ………!!」

はずが、喉が焼けると同時に苦痛で締めまり、声が出ない。

一瞬、呼吸さえもが止まる。

「おい!!?」

「だ、………大い、丈夫、だツツ………」

再開する呼吸に乗せてなんとか吐いた台詞は、自分でも弱々しい響きだ。

「や、やっぱり、やめた方が、喋れないんだろ?」

プリカが俺に手を差し伸べる、とりあえず前に出されたといった感じの手は俺に触ることもなく、ただ、心配を示すばかりだ。

俺はその手を振り払い、作り笑顔とサムズアップで無事をアピールする。

「……駄目だったら、ちゃんと呼んでくれ、な?」

苦しいアピールだが、プリカはなんとかそれで納得してくれたようだ。

プリカは後ろ髪を引かれるように何度も振り向きながら、部屋から去っていく。

それを見送って、一呼吸、二呼吸……。

「グ、グブ……ガフツツ!!」

俺は座禅を崩してうずくまる、もはや姿勢を保つ意味も、余裕もない……!

暴れる横隔膜を抑え込み、絶叫しようとする喉を広げ、ヨガの呼吸

を保つ。

鳩尾や金的の痛みすら、この『苦痛』の前では霞むに違いない、すでに焦点は合わない、握り込んだ手の感触がない。

……この苦痛が、悟空と同じならば6時間、あるいは——死ぬまでか!!!

だが、俺はこの苦痛を耐え抜き、乗り越え、命を保たなくてはならない。

その先にある力こそが、この世界を救い、再開を約束するのだ。欺いた信頼に、答えなくては。

あれから、数分か、数時間か。

喉を押さえて悶え、波が引けば必死にヨガを取り戻し、呼吸を整えかけたところで、更に大きな波に引き裂かれ、全てを投げ捨てて悶える。

これが何度繰り返されたのかも、一度の繰り返しにどれだけの時間を使ったのかもわからない。

その度に俺の体はこの超神水の毒に蝕まれ……抵抗する力を、失いつつある。

「おい、ソシルミ、カリン様がお前の対策は意味がないって……!!!」
……気がつくど、仰向けになって倒れた俺の目の前にはプリカがいた。

カリン様め、話してしまったのか。

「そ、そうか……」

「何言ってるんだ、おまえ、早く吐け!! 死ぬぞ!!」

「ヨガは……体に、残っている」

プリカは俺の言葉に顔を歪めた。

「そのヨガを教えた、その師匠の仇を討ちたいのか」

「かも……しれん」

自信はない、俺は一体、何故こうまでして、超神水を飲んだのか？

そんな考えが浮かんだ矢先に、また『波』がやってきた!

「ぐツツツ、ガツツ……、フウツツフウツツ……!!」

「ソシルミ！ しつかりしろ!! 吐け!! 出来るか!？」

「ハア……ハア……グ……ツツ!! も、もうムリだ……!!」

苦痛、そして、熱感や冷感、それらが体のあちこちで同時に、デタラメに吹き上がる、

俺が辛うじて会話が出来るだけの体力を保っているのは、苦痛を抑え込む能力があるからだ、しかし、肉体強度が足りない俺の体は、おそらく悟空よりも遥かに急速に壊れつつある……!!

「手遅れ、だ、い……胃粘膜で、吸収、した……」

「そんな……!!」

俺の胃にはもう超神水の気配はない。

吐かされる心配も、吐かせてくれるという期待もなくなったのだ。

「……ソシルミ、まさか、だけどな」

プリカは、出し抜けに、何かをこらえるような、冷えた声で言う。

冷たい言い方の裏に、何か、煮えたぎるマグマのような熱を感じさせる声だ。

「まさかおまえ、最初つから、オレを騙して超神水を飲む気だったのか……?」

答えられない。

苦痛からではない、それは……事実だからだ。

「お、おまえ……や、やりやがったな、くそ……なんで、こんな……!」

「プ、プリ……ガフツツ……!!」

今度答えられないのは、苦痛のせいだ。

体中の筋肉がデタラメに収縮弛緩を繰り返し、横隔膜すら痙攣している。

「そうだ、最初から、おまえが気づいてないはず、なかったんだ！
なのに、こんな……!!」

「ハアツ、ハアツ……期待、しすぎ、だ……」

俺にだって何もかも分かってるわけじゃない、ピッコロ大魔王のとどってそうだ。

そう言い訳しようとしたが、言葉が続かない。

俺はなんでここまで苦しみながら、質疑応答にわざわざ応じているんだ、なんて疑問が浮かび、消える。

汗がブワツと吹き出し、そして引く、毛穴が開いては閉じ、吐き気を伴わないままに胃がひっくり返るような痛みを訴えた。

「バクテリアンが死んだ時、おまえはあんなに叫んでたのに、自分はいいのか!!」

バクテリアンはあの時、桃白白を移乗させ、自分はそのための操縦と、敵をひきつけて落ちるといふ算段を立てた上で……それを隠して、俺とプリカを逃した。

「フウ、そ、そうか、フウ、奴と……同じか」

「バクテリアンとおまえは違う!! 他に手段があったかも知れないのに、勝手に、オレが止めるのを誤魔化して、安心させて……」

そうか、と、俺はやつと合点がいく。

プリカは俺がプリカを騙したと思って怒っているんじゃない、ただ、心配を踏みにじって、勝手に俺が死地に飛び込んだから、怒っているんだ。

それが分かって、答えようと口を開くが、声は出ず、プリカが叫ぶのが先だった。

「オレはまんまとかがれて、おまえが見事に毒を飲むのを見てた!!!」

「悟空だけじゃ勝てない!!! 賭けに、なってでも、力がなければ——」

そう叫んだのを最後に、俺の意識が一瞬飛び、そのまま体が床に倒れ込む。

「それで死ぬつもりか!!」

死ぬ、そう意識した途端、その言葉に呼ばれたように、寒気がやってきた。

再び横隔膜が痙攣する、それをなんとか利用して、答えを。

「死、死ぬ気は……ぎ……ヒ、ハア、ハア」

死にたくてやったんじゃない、そう答えようとして、喉が詰まる。あちこちがもはや意思に従わず、めちやくちやに動いているのだ。

答えないと、そう思うが、声が出ない。

「くそ、人を騙してまでむちやくちやするんなら、もうそのまま死んでしまえ!!!」

怒鳴り声が遠くなる、プリカの怒り顔が見えない。

内出血か、俺には想像もできない何かが血流を阻害している。

思考にもやががかってきた、まずい、このままでは。

苦痛ははつきりしたまま、でも、それを感じるための機能が失われ
ていく。

そうか、これは、前、最後に味わった――

暗い、暗い場所。

ここはどこだ、あの世……ではない、あそこはこんな場所ではない。
あの世ではない暗い場所に俺はぽつんと佇んでいる、生まれ変わっ
て得た力強い肉体をそのままに。

「ホウ……」

後ろから、低く、感心するような響きの声が聞こえる。

振り向くと、そこには――

「範馬勇次郎ツツツ!!?」

「驚いてくれるねエ……、はじめましてだな、俺のガキ……『志望』
クン」

範馬勇次郎、国民的格闘漫画『刃牙シリーズ』の主人公である範馬
刃牙の父親。

作中世界で最強の戦闘能力を誇り、あらゆる格闘家、軍隊、生命体
を凌駕し、地上最強の生物と謳われる男!!

そして、俺が前世から、今に至っても抱き続ける『憧れ』の塊!!!

「な、なぜ貴方がここにツツ!!?」

「お前がそう願ったから、じゃねえのか……?」

「……確かに、貴方は私の憧れだ」

「そうだ、『憧れ』……そんな不純な感情をもとにして、体、技、そ
して心を練り上げ、お前はここまで、たどり着いた」

『……』とは一体。

そう問おうとする俺を制止し、範馬勇次郎は更に言葉を続ける。

「それでいい、それを貫け、そして……俺の子を名乗るならば、その世界の頂点を手に入れろ」

「宇宙……最強」

「事実がどうであるかなど関係ない、勝利しろ、毒に、敵に、それこそがキサマにとっての証明となる」

範馬であるから最強なのか、最強であるから範馬なのか。

どこから来たのかも知れぬ『範馬勇次郎』が語る。

「この世界で、俺が最強に……」

敵は余りにも強い、悟空があつきりと克服した試練すら、俺には荷が勝つ。

そんな体たらくで、俺は……。

「お前じゃ足りねエか」

「……足りません、何度無理を通しても」

奇跡、そう呼んできた、土壇場での逆転劇。

幾度も繰り返したそれは、確かに、俺に力を与え……それでもなお、この無限に先がある世界を越えることはできなかった。

俺は必死にこの世界の、高まり続ける戦いに挑んできた。

もしかしたら、それは生き急いでいただけと言えるのかもしれない。

「無理しすぎで死んじまうのは間抜けかい？」

「いえ、それでも、俺はこう生きたかった、……その先に、死が待っているようにも、生きたかったのです」

「難儀なもんだな」

範馬勇次郎はわざとらしくポリポリと頭を搔いて言う。

「弱者とて、群ればマシにもなるだろう、仲間を作ってみたらどうだ」

「仲間なら居ます、でも、戦う時は一人です」

「なら、喰っちまえばいい、喰ったもんが腹の中に居るのは、誰も咎めやしねエよ……ちようど、お逃え向きのがいるじゃねえか」

「は!? それは一体……」

俺が聞き返そうとすると、範馬勇次郎は大きく拳を掲げ……。
「後はテメエで掴みな——」

——衝撃、頭痛、激突音!!

「ガ、ハツ……!!?」

「ソシルミー！ 目を覚ませ！ 大丈夫か!?!」

無意識のまま一気に息を吸い込み、血の滲んだ肺を満たす。
生きている、そうだ、まだ死んでいない！

「ゼヒユツ……ぜ、……ハア……!!」

「よ……よかった、まだ息してるよな……?」

酸素が体を巡り、意識が、思考が戻り、鼓動の音がまた聞こえるようになった。

死、死にかけていた、というか、一瞬心臓が止まっていた!!

「バ、バカっ!! 本当に死ぬやつがあるか、くそ!」

プリカが俺の頭を抱えてこちらを覗いている。

その顔は怒りに歪んでいる、死ねと言ったり、死ぬことに怒ってみたり、忙しいやつだ。

……いや、振り回しているのは、俺か。

波どころか、苦痛はどんどん強くなる、一方で呼吸は穏やかだ。

「し、しぬのは、いやだな……」

駄目だ、舌がうまく回らない。

呼吸が穏やかなのも、激しくするだけの力がないだけなのだ。

このままだと俺は、完全に死んでしまう、耳鳴りと頭痛がする。

「じゃあ死ぬなよ!! こんな勝手にして、勝手に死んで、オ、オレはどうすればいいんだ」

「ち、ちあ、ちがう……」

死にたくはない、でも、せつかくの二回目を、無駄にしたくない。
そう言おうとして、舌が回らない。

「も、もういい!! おまえが好き放題やるのは、いつものことだ、どうこう言うのは、おかしいか」

「プリカ……」

プリカが叫ぶ、長くない俺に、なんとか言葉を伝えようとしている。熱感と冷感に包まれていた俺の体から、熱感だけが消えてゆく。体は冷え、再びの、本当の死が近づいてくる……その一方で、心だけは、何か、熱を持ったものを感じ始めていた。

「でも、こうやって、騙し討ちにして、オレを、置いてくような、こんなことなら、あの森で……！」

プリカが俺の冷えた手を取る、そのぬくもりすら、もはや感じるこゝとが出来ない。

「冷たい、なんで冷たいんだ、試合の時は、もつと……」

「もう、げんかいだ」

俺の二度目の命は尽きようとしている。

生きるだけ生きた、少々間抜けな死に様かもしれないが、掴みたいものに手を伸ばした。

プリカの顔が、怒り顔から更に歪む、広がった口角が下がって、下唇の真ん中が上がる。

「嫌だ……」

プリカが呟く。

俺も死にたくない、生きられるものなら生きなくてはならない。

それと同時に、望みのままに生きたならばそれでいいという思いがある。

だが……今は違う気もする、何か、果たされていないという感覚がある、俺は、今死ぬべきじゃない。

「嫌だ、ソシルミ……死なないでくれ、頼む、おまえのむちやくちやが、オレには大事なんだ、何をやってもいいから、死なないでくれ」プリカが、涙をこぼした。

何か、根本的な所で、間違えていたような気がする。

俺の顔に、プリカの涙がしたたる、それを指で拭いて、次に、プリカの目尻に溜まった涙を拭い……。

舐めた。

「へ？」

「ん……あ？」

なんか、舐めてしまった。

いや、確かこれは、刃牙もやったんだ、だから、これが、俺のために流された涙なら、効くと思っただろう。

それで、間違っていたことも、はつきりとわかった、俺はこいつを騙すべきじゃなかった、一般論じゃない。

「いや、おい!! なにやってんだ、お、おまえーっ!!!」

「どくにきくんだ、うん……」

「はあ……!?!」

プリカは顔を真赤にして何やらがなり立てはじめた、だが、俺は体を癒やし、思考を巡らすのに忙しい。

俺の心身は、目一杯、酸素、それと力を吸い込んでいく。

「おちついてきた」

「こ、こんなバカな……オレは一体なんであんなに必死になってまで……」

そうだ、こいつにああまで言われたら死ぬわけにはいかない。

こいつを騙すのがいけないのは、こいつを騙すのは、そもそも俺がやりたくないことだからだ。

しかし、思えばとんでもないことをしてしまった。

「カリン様には、謝らないとな……」

「先にオレにあやまれ、色々もあるだろ!!」

謝る……何を謝るべきだろうか。

無茶をやったことか、止めるのを聞かなかったことか、騙したことか、死にかけたことか……。

……………。

「ありがとう、プリカ」

プリカは何かすごい顔をして、それから、大笑いした。

俺も笑ったような気がするが、その後のことはしばらく記憶にない。

とにかく、もう大丈夫だということだけが、俺達の間を駆け巡ったのだ。

.....
.....
.....

あれから数時間、カリン塔の一室で俺はあぐらを組み、プリカがそれを枕に眠りこけていた。

いつものジャージに、若干ボサついたサイヤ人らしい黒髪、安心してしまった寝顔。

表情が多くて楽しいやつ（と言っても大体睨まれている）だが、こうして完全に無防備な様も、それなりに見えていて楽しい所がある。

……気疲れからか深く眠りこけたこいつは、枕にした俺がカリン様と話しても起きず、よだれを垂らして寝ているという有様だ。

だが、あまり長く寝られていても困る……そう思いかけたとき、悟空の悲鳴にも劣らぬ爆音が部屋を包んだ！

グギルルルルルル!!

「うわあ!!」

「よう、起きたか、プリカ」

……こいつが自分の腹鳴で起きるのを見るのは二回目だ。

「ソ……ソシルミ、おはよう?」

「おはよう、お前の寝起きを見るのも久々だな」

俺がそう言いながら自分の口元を指で撫でると、プリカはようやく自分の顔によだれが垂れているのに気付いたようだ。

「うわあああっ!!」

プリカは凄まじい勢いで起き上がって、同時によだれをジャージで拭き取り、俺の顔とよだれが垂れていそうな場所を勢いよく見比べる。

「そんな焦ることないだろう、もう見飽きたぞ」

「いや……涙は舐めたから今度はよだれとか言い出すんじゃないかと……」

「なんだそれ」

「デイ、デイスコミュニケーション……」

いや、会話が成立していないことは分かっているんだが。

「さて、さつき悟空が来てな、マッスルタワーに行くと言ってたぞ」

「……あつちに連絡はしたのか？」

「もう済んだ、あつちじや天津飯がケガをおして特訓中、ピラフの兵器も完成しかけているらしい」

「ちよつと、寝すぎたか……」

プリカは恥ずかしそうに頬をかく。

「それで、ソシルミ、どうだった？」

「超神水か」

「ああ、力は……手に入ったのか」

「バツチリだ、のたうち回ったせいでもまだちよつと筋肉が痛いかな」俺がそう言つて節々の痛みをアピールすると、プリカはいい気味だとばかりに笑つた。

「しかし、舌の回らないおまえはケツサクだった、ああも弱るもんなだな、おまえも」

「蹴つてやろうか」

「今はおまえの方が強いから嫌だ」

俺達は小型機に乗り込み、マッスルタワーへと向かう。

操縦はロボットに任せた、気楽なふたり旅だ。

「ソシルミ、おまえ、ちよつと汗臭いぞ」

「……そうか？ いや、そうだな、あんなにうめけば当然かもしれない」

「着替えろ、ちよつと拭いてやる」

どうしてわざわざお前が拭くんか、と言つてもプリカは止まらず、タンスのカプセル、それと飲料水とタオルで作つた濡れタオルを持つてこちらにやつてくる。

何かおかしい、とは思つたが、死ぬとまで言つた手前、負い目があるのかもしれないし、今回本格的に死にかけて俺を労りたいのかもしれない。

まあ、自業自得とはいえ、あそこまでの試練に打ち勝つた俺だ、

ちよつとくらしいいい目を見てもいいだろう。

「むう……ふむ……」

プリカは俺の体を拭きながら、何が疑問を解こうとするような、あるいは、納得するような感じで鼻を鳴らす。

というか、筋肉や傷跡を重点的に拭かれているような気もしてきた。

「何故わざわざ、超神水の効果に興味でもあるのか？」

「よし、じゃあ次は背中……ん？」

「どうした」

「なんか、ちよつと、おかしいぞ、これまさか……!!」

プリカはタンスの上に置かれた手鏡と、ドアのガラスを合わせ鏡にして、俺に俺の背中を見ろと叫ぶ。

背中、その気がかりな響きへの期待を裏切らず、俺の背中は、異様なものを背負っていた。

「鬼……ッ!!」

超神水は飲んだ者に秘められた力を引き出す水だ。

俺の背中には、かつて夢見た、名乗り続けた血の証、鬼おにのかおの貌が。

「範馬勇次郎の、背中についてるやつ、だよな」

「ああ」

「なんだ、ようやく手に入ったんだからもつと喜べよ」

プリカは俺の顔を覗き込んで、ニタアツと笑ってみせる。

「いや、これはなんか、当然だつて感じだな」

「それにしちや、気分良さそうだ」

「そうか? ……まあ、そう言われれば、そうかもしれん」

「オレのサービスが良すぎたのかね、まったく」

普段は俺が言つて蹴飛ばされるような台詞だが、プリカは平気でつらつらと語る。

何の心境の変化があるのかはわからんが……。

「なんだ、その呆れた感じの目は」

「なんでもないと」

←
J
J
J
←

第二十八話：転生地球人が我儘を通すまで

爆音が響き、大きく通路が揺れる。

世界の王都、中の都に肉薄した我々の機体は、激しい魔族の対空砲火に晒され、今まさに撃墜の憂き目にあおうとしていた。

「だ、大丈夫だ、来る前にオレとピラフでしっかり補強した!」

……訂正、まだ沈まないらしい。

だが危険な状況には変わらぬ、機体を空域から離脱させるため、俺達戦士は降下準備を始めていた。

「オラ先に行く! 筋斗雲ーっ!!」

悟空が甲板へのハッチを開き、飛び出してゆく、それを見送りながら俺達も準備していると、それを追い抜く二つの人影があった。

「わたしと天津飯は甲板で対空戦闘を行う、都の戦いは任せたぞ」

「……だが、オレたちもすぐに追う、きさまに鶴仙人さまの仇は譲らん!!」

桃白白と仙豆で回復した天津飯がハッチへと登っていく、どうやらあの二人、傷が治り切る前から厳しい鍛錬を行っていたらしい。

だが……俺も譲る気はない。

「それは保障できんが、健闘を祈る」

「ソシルミ、オレたちも行くぞ」

プリカがパラシュートを付け、俺の肩を叩く……俺はそのパラシュートをそつと外して、プリカの手を引いてハッチに走る。

「おい!」

「市街地への降下くらい、生身でも平気だ、ふらふら落ちたら格好のエサだぞ」

「そう言われたってな……」

ぶつくさ言うプリカを連れ、甲板に出る。

機体に絡む魔族を片っ端から蹴り飛ばす天津飯と桃白白、そして、その周囲を飛び回る筋斗雲と如意棒の悟空、更に、機体各所に据え付けられた砲塔と地上からの砲撃の爆音!

そこは小さな激戦地であった。

「ソシルミ、ピラフが見てるぞ」

甲板から見えるキャノピーには、後ろめたげにするピラフがいた。俺はそれにサムズアップで返し、プリカに向き直る。

「地上は酷い有様だ、別々に行くぞ」

「それはいいけど……」

俺達、武道家有志連合の作戦は至極単純。

ピラフ所有機で中の都に肉薄、その後、全員で飛び降り、魔族を蹴散らしながらピッコロの居座るキングキャッスルへと進撃、ピッコロを袋叩きにする。

……というものだったが、はつきり言ってもう作戦は形骸というか、骨子しか残っていない有様だ。

「魔族が多すぎるが、そこは各国軍も来ているんだ、まあ、なんとかなるだろう」

中の都に集結した魔族はあの日の戦いより遥かに多く、あちこちで民間人に乱暴狼藉を働いている。

その上、大量の魔族と、各地から集結した軍隊との間で激しい市街戦が展開されているのだ。

つまり我々は、魔族に対し攻撃を加え、突破を試みつつ、共に戦う仲間となった人間の軍隊をかばわなくてはならない。

「ソシルミ、背中、戻っちゃったって言ってたよな、大丈夫なのか？」
「必要のない時にあれは現れない、あの時はおそらく、毒のダメージによって強引に引き出されたんだろう」

「……そっか、わかった、ピッコロと戦う前に、ケガとかするんじゃないぞ！」

俺達は別々の方向に向け全力で走り、各々定めた戦場へと飛び出した。

向かう先、中の都は往時の人の賑わいは影の形もなく、まさしく戒厳令下のゴーストタウンに、爆炎、硝煙、火災からの煙が立ち上っている。

俺が定めた戦場はその一つ、人間の軍隊と魔族の集団が争っている大きな交差点だ！

俺は姿勢を制御し、ちょうど、軍のバリケードの内部へと勢いよく着地する。

「トアーツツ!!」

「な、なんだ!? お、おい、きさまは一体……!?」

軍人さんが俺に銃を向ける、魔族と戦ってる途中に飛来した何者か、なんてもんをいきなり撃たないとは素晴らしい練度と言うほかない。

……周囲を見ると、焼け出された着の身着のままの民衆が恐怖に怯え、肝心の兵士たちも負傷兵だらけ、バリケードはあちこちで砕け、今にも魔族がなだれ込んできそうな状況だ。

「ぐ……軍人さん！ 魔族がバリケードに!？」

「落ち着いてください、人間です……多分」

「その通り、タンドール王国より参りました、武道家のソシルミス」

「タンドール……、な、なるほど！ チャパ王の弟子か!!」

師匠の名はそれなりに売れているらしい、俺はバリケードの裂け目に向かって歩を進める。

「奴らは俺が引き受けます、その間に、立て直して下さい」

「お、おい——」

それ以上は聞かずにバリケードを飛び出し……次の瞬間、魔族連中の集中砲火が俺を襲う!!

「——ツツ!!」

俺にとって、小銃弾や小口径の機関砲弾程度は手を輝かせる必要すらない。

だが、大ぶりの弾丸だけはあえてつかみ取り……!

「フンツツ!!」

「ぐげっ!？」

魔族に向けて叩きつけた!

俺は魔族陣地に向けてゆっくりと歩み寄ってゆく、敵を刺激せず、軍が体勢を立て直すまでの時間を稼ぐのだ。

「な、なんだ！ まさかあいつ、弾丸を掴んで!？」

「武道家って連中は化物ばかりか……!!」

「オレは聞いたことあるぞ！ チャパ王の弟子には魔族を殺しまくるのが趣味の天才少年がいるって!!」

だが、魔族どもは更に多くの火器を持ち出して俺に集中砲火を放っている。

キリのない魔族どもを相手にするためには、軍隊がいるのはありがたいが、守りながらでは戦えない！

そう思ったとき、背後で（おそらく、俺が立てたのよりも遥かに）大きな落下音がいくつも響き、続いて、ズシズシ、あるいはギュピギュピと歩行音が響き始めた。

「またか！ きさまらは何者だ!?」

「メタリック」

小さく、しかし、響く声で先頭の個体が言う。

メタリック、メタリック軍曹だ!?

俺が驚きながら弾丸を弾いている間に、メタリック軍団は背後で陣形を作り、軍隊の前に並び始めた。

「あ……ん」

「まさかツツ!!?」

メタリック達が小さく上げた声、その正体を知っている俺が飛び退いたその次の瞬間には、敵陣にいくつものビームが突き刺さり、魔族達は一挙に蒸発、爆死した！

本来ミサイルを使うはずの動作だが、ビームとは、大胆な改造が施されたものだ、あつけにとられながらそう思っていると、メタリックには似つかわしくない甲高い声が響く。

「《どうじゃい！ 連中の基地にあったデータを拝借して作ったロボット軍団は！》」

「頼りにはなるな、頼りには……ツツ!!」

ここはもう、メタリック軍団にまかせて大丈夫だろう……ピラフにとっては汚名返上のチャンス、張り切っていると見える。

「よくわからないが、この状況で助けが来てくれるとは、これで住民の避難を進められそうだ！」

「今のうちにバリケードを直すぞ！ ……ありがとう、タンドールのソシルミ!!」

魔族やその衣服の破片が燃え上がり、それに熱されたアスファルトなんかがちりちり言う中を駆け、俺は次の戦場へ向かう。

……中の都に降下してから、もうすでに十数分が経過していた。

高速で市中を駆け回る俺は魔族の集団を見つけ、ビルの壁を利用して一気に加速、ほぼ水平に飛び込み、そのまま手刀で指揮官の首を落とす。

「ツアーツ!!」

「ガボ……」

親分を殺された魔族は一瞬動揺し、俺に怒りを向ける……が、俺はそれを気にせず、魔族側のバリケードを蹴り飛ばし、行きがけの駄賃に数体の魔族を破壊してから次の戦場を探して再び駆け出す。

俺はこの戦いで魔族を殺すことは厭わない、シユラのとかが特殊だったのだと割り切り、腕を、拳を、指を、そして脚を振るっていく。だが……殺してはならない相手もまた、この戦場には存在していた。

「ひいっ！ 来るなーっ!!」

「う、撃つぞ、う、うああっ!!」

それがこの、俺を恐れながら、ひたすら銃を撃ちまくる『人間』の集団、魔族によって徴兵された民間人だ。

魔族、軍隊、武道家、そして、魔族や人間によって強制的、あるいは自発的に武装した民兵、それらが中の都全体で所狭しと撃ち合っているのだ。

「俺は人間だツツ!! その銃は魔族どもに向けろ!!」

「だ、駄目だあー!」

「お……おれはそっちに行……ぎやーっ!!」

俺の言葉に答えた男を引き裂く魔族!

民兵の後ろに隠れ、粛清の機会を見計らっていたのか……!

「オラ! 撃たねえとおれがためえらを殺すぜ!!」

「ひいっ!!」

魔族が民兵たちを脅すとともに攻撃が激しくなり、接近は更に難しくなる。

……民兵もろとも、少なくとも、被害を飲み込めるならば対処のしようもあるが……!

俺が攻めあぐねていると、上空から聞き覚えのある飛行音とともに、赤い筋が飛来し、人間達を打ち据え初めた!

「がっ!？」

「ぼげっ」

「うーん……」

頭や手を激しく撃たれた民兵は射撃を中断、これは……チャンスだ!

!!
一気にバリケードを飛び越え、気絶した民兵をまたぎ、魔族を襲う

「ま、まちがやれ! おまえが動いたらこいつを……」

その魔族が吐いた台詞はそこまで。

直線上にあれば、木っ端魔族の行動などより遥かに早く、俺の手刀が届くのだ。

俺は上を見上げ、先程の赤い筋の主、悟空に手を振る。

「助かった!!」

「またなミソシル!」

手を振り返す悟空……無理やりさせられているとはいえ、仲間を銃を向けるならば力づくでの排除もやむなし、理屈は分かるが、俺には難しい。

そこを割り切れるのが戦闘民族らしさ、無力化に留めるのが、地球人らしい優しさといったところか。

俺が民兵に余裕のある人間側の陣地を教え、更に中央に進もうとしていると、空の魔族の動きがおかしいことに気付いた。

これまでの適当に飛んで飛来する航空機を撃滅するだけの動きではないもつと組織だった……これは!

「航空爆撃かツツツ!!」

俺が叫ぶのと同時に、魔族どもが空中より爆弾、及び気弾の投下を開始した!

しびれを切らしたのだろう、人類側の各陣地を猛烈に攻撃し始めた魔族だが、空中戦、遠距離戦の手段に欠ける俺に対抗する手立てはない。

とはいえ、このままだと総崩れだ、急いで救援に――

「――どどん波!!」

「ちえっ!! つおっ!!」

……行くまでもない。

そう俺に伝えるように、空中では天津飯と桃白白が踊り始めた。

二人の動きはまさしく兄弟弟子が演じる阿吽の呼吸、魔族の拳足、銃撃やミサイルを軽々と避け、互いに向かう攻撃を無効化し、自らの攻撃は見事に命中させてゆく。

「蝶のように舞い、蜂のように刺す、なるほど、まさしく!!」

あの二人の鍛錬は見事実を結んだらしい!

天津飯の動きからは、(残念ながら俺にもある) 武道家としてのエゴ、すなわち、自らの技術を使って何もかもを片付けたいという欲の姿が消えている。

殺し屋、戦鬪者として純粹化され、技に執着する心を捨てたことで、かえってキレが上がったのだ。

「砲撃開始!! あの武道家たちを援護するんだ!!」

「撃てーっ!!」

振り返れば、あちこちの陣地からも対空砲火が始まっている。

更に、ピラフ機やメタリックからも砲撃が始まり……俺の出る幕はなさそうだ。

先に進もう。

重機関砲の陣地が10、いや、それ以上。

集中砲火、いや、弾幕を前に、俺はビルの影に入って息を整える。

「本気で俺を通さない気か、親分の戦力は十分だったのに、周到なこ

とだ」

ピッコロ大魔王の居座るキングキャッスルはもう目と鼻の先、だが、近づくにつれて魔族どもの守勢は堅くなり、今ではこの俺の力を持ってしても無防備に接近するのは難しいレベルに達していた。

そう、無防備、には。

「……チャルク先輩、技を使います」

俺はホイホイカプセルを使って武器のセットを取り出し、片手持ちの曲剣と円盾を持つ。

武器術を競い合うためでなく、拳では殺し切るのが遅いからと武器を使う不純、武器の技を愛するチャルク先輩が見たら顔をしかめるだろう。

「ウオオオオツツ!!」

「また向かってきやがった!!」

「そんなチンケな武器でどうしようってんだ!」

重機関銃の弾丸だろうと、一流の武道家が持つ武器・防具の前ではBB弾、いや、ポップコーンも同然!

盾で弾丸を弾き、剣身とソニックブームで弾丸を逸らしてゆく。

俺はまたたく間に煙に包まれて砲火は止まり、連中の息遣いと叫び声だけが聞こえる。

「や、やったか……ゴボっ……!?!」

「それは人間側の言う台詞だツツ!!」

息遣いに向けて放った円形手裏剣、チャクラムが命中し、魔族どもの喉笛を切り裂いた!

そのままかさず突撃し、魔族を剣で切り裂き、盾で潰し、足で貫く!

「——ツツツ!!!」

「……一息で殲滅は済んだ、息ももはや荒れてはいない。

「ハア……」

だが、俺はため息をつかざるをえなかった。

魔族の死骸に混ざって散らばる、人々の死体、日用品。

世界最大の都市として賑わっていたはずの都の喧騒はもはや

ここにはない、人口密度はおそらく、ゼロ。
殺戮と捕食、徴兵によって全て失われたのだ。

「ピッコロを倒さなくては」
ガラにもない使命感が口について出る。

この戦場を切り抜け、ピッコロ大魔王を倒す、そのためならば、戦場で武器も使う。

「トアアーツツ!!!」

俺は曲剣の代わりに带状の金属板を掴み、再びキングキャツスルへの突撃を始める。

金属板の名はウルミ、剣に属する武器の一種であり、よくしなるよう加工され、刃付けされた带状の金属板を一枚もしくは数枚束ねた武器だ。

軽く手を振れば、剣身たちはねじれ、起き上がり、まるで俺の手にタコかイカの触手でもついたように踊りだす。

「ば、化物!?!」

「それはテメエらだろうがツツ!!!」

ウルミの剣身を自在に制御する技は、師匠ではなく、チャルク先輩が教えてくれたものだ。

武器の扱いに秀で、純粋な実力で言えば数段上になった俺にも血を流させた先輩……、魔族などにやられるなどは、思いもしなかった。

俺は盾とウルミで弾丸を弾き、砲弾を切り裂きながら魔族の群れに襲いかかる。

「だが、化物で結構、貴様等魔族にとっての化物ならば、人には救いの神だ!!」

……どんな理屈が途中にあったのかは分からないが、一つ言える、俺がこの戦場を作ったのだ。

俺は人間と武道の未来のために歴史を変えてきた、だが、結果はこのぎま。

もしかしたらプリカがそうしたように、道場か、いつそ山奥にでも隠れていればよかったのかもしれない。

「魔族狩り、不名誉な称号だが、俺にはピッタリだ」

戦い、そして殺戮が、俺の——殺気!!

接近、超音速、砲弾、大型!!!

「——キエエツツ……ぐわツツ!!!」

超音速で叩きつけられる砲弾に、思わず叩きつけたウルミが爆散する。

それと引き換えに直撃を避けた俺は、しかし、爆炎にまかれ、そのまま数十メートル吹き飛んで、瓦礫の海に沈んだ。

「や、やったぞ! ひひひ! 人間ごときがおれたちに逆らうからこうなるんだ!!」

「ようやく武器庫の鍵も開いたことだし、すぐに残りのやつらも……」

瓦礫の隙間から見える爆炎の向こうには戦車軍団、それに随伴する魔族の群れ。

……まず、焼けた瓦礫を取り除かなくては、そして、連中の兵器を全て蹴り砕く、戦車砲も避ける。

そうして算段を整えている間に飛行型の魔族どもが飛来し、俺が攻めていた区画の守りは更に盤石になってゆく。

空中には雲霞の如き羽持ちの群れ、地上は地上で、所狭しと並ぶ異形と兵器の群れ。

「……………ハア」

疲れた。

肉体的なそれとは全く違う疲労感、徒労感が俺を襲う、かつては、今の何分の一の実力で楽しんでいた魔族との戦いだが、今は苦痛だけが広がって……。

ピッコロにたどり着くには、この戦場を戦い抜かなくてはならない、そのためにはまず、立ち上がらなくては。

立って、戦わなくては。

「奴らを殺して、ピッコロを殺して、この戦場を終わらせる……」

使命感に溢れたような台詞が、いかにもおっくうな感じで飛び出す、体はまだ、動かない。

魔族殺しなんて、何度も繰り返してきたはずだ、ならば、違うのは

……。

そこまで考えた時、俺の後方からいくつもの光の球が飛び出し、戦車を次々と撃破していった。

「この技は」

瓦礫を激しく投げ飛ばす音、感触、差し込む日差し。

……そして、俺の隣に人影が立つ、見る必要もない、気弾のクセと気配だけで、プリカだと分かる。

「寝てるなんて、おまえらしくない、戦場は楽しい場所じゃないのか？」

「……ここは人間の街だ」

「そんなの、前からあったんだろ？」

「俺がこの戦場を作った」

問い詰めるような質問の繰り返しを前に、思わず、本音を吐く。

俺はプリカが引きこもっている間も歴史の全面にでしゃばり、プリカと出会ってからも、あれこれと言いくるめ、好き放題に連れ回し、歴史を変えてきた。

ピッコロ大魔王の復活なんて、大規模な出来事まで捻じ曲げて、その拳げ句が……これだ。

だが、プリカは、それを責める様子もなく、俺をじっと見ている。

「おまえじゃない、ソシルミ、オレもだ」

「お前は俺に……」

「巻き込まれた、なんて言うなよ、オレをなんだと思ってる、流されやすいやつだなんて、思ってるんじゃないだろうな」

「……いや、流されたとか、それは言い過ぎかもしれないが」

蹴られ……そうになったが、プリカはしゃがんで俺の頬をひっぱたいた。

「言い過ぎとかじゃない、根っこから違う、オレはそんな適当に考えてない、おまえが言う言葉が正しかったから、オレはおまえについてきたんだ」

「プリカ……」

「悪党でも殺さなくていいなら殺さない、歴史なんかよりピッコロ

に殺される人を助ける、なにが間違ってるんだ、なににも間違ってるんだ、だから——」

城の方向から、大柄な魔族が次々とやってくる。

時を同じくして、おそらくは正規兵が放棄したものであろう戦車を操る民兵が恐れ知らずにも中央へと進撃し始めた！

「さすがの魔族も戦車砲ならイッパツだぜ！ 的がデカけりやその分つてな、撃てーっ!!」

「ぐへへ……いただきまーす！」

図体に知能を持つていかれたであろう、典型的な大柄魔族どもは戦車砲弾を口で受け止め、そのまま一気に飲み込み、それをエネルギーに変えたように、口を猛烈に光らせる！

「ソシルミー！」

「プリカ！」

俺達が呼び合うのと同時に、俺は盾とウルミの残骸を置いて立ち上がり、素手になった両手に輝きを纏わす。

そしてプリカは、莫大な力を練り始めた。

奴らの気弾が来る！

「——ツツツ!!!」

「が……ぐが……ががが!!!」

俺が明後日の方角に気を弾き飛ばした直後、プリカが飛び上がり、手を高く掲げた！

手が持ち上げるのは巨大な輝く球体!!

「ウエスト・スター・モーニング!!!」

プリカが叫ぶのと同時に、エネルギーの塊は魔族どもに命中し、奴らの防衛ラインに巨大な穴を開けた！

俺は魔族の壊滅を見守り、次に、逃走しつつある民兵の戦車を横目で見て安心しつつ、最後に、プリカを見る、ドヤ顔だ。

「これが、試合最後に出そうとしていた技か」

「大したもんだろ」

プリカは短く勝ち誇った後、少し気恥ずかしそうにして、一歩だけ俺の後ろに回り込む。

「……ソシルミ、おまえが落ち込むことなんてない、おまえは正しいことをしたし、間違ってるならオレも共犯だ、それでもまだ、責任を感じるなら——」

強く、普段の拳ではなく、平手で、背中を叩かれた。

「——間違いじゃなくしてこい、やりとげてみる、おまえの好きないようにするんだ、オレも一緒にやる」

「プリカ……いー」

俺はプリカに答えようとするが、それを聞くまでもなく、プリカは飛び上がり、穴を埋めようとする魔族に気弾と拳を叩きつけ始めた。
……先に進もう。

手刀で貫いた魔族を投げ捨て、次に現れた敵が振り下ろす剣を拳で叩き割り、続く膝で頭を撃ち抜き、次の段へと登る。

螺旋状になった階段の果てにある扉を蹴破り、俺はキングキャツスル頂上玉座の間へと殴り込んだ！

「ピッコロ大魔王ツツツ!!」

「ほう……まさかこの玉座へとたどり着いてくる者がいるとは……ん？ おまえはどこかで見た顔だな」

「ソシルミ、あの天下一武道会決勝を戦った武道家だ」

「なるほど、なるほど……」

ピッコロ大魔王はあくまで愉快げに、どこから持ち込んだ玉座にただ一人座っている。

元の歴史に居たはずの側近もそこにはいない、ドラゴンボールを使って手に入れたであろう、若々しい姿の大魔王は、ただただ自然体でこの俺を見つめていた。

「この乱痴気騒ぎを終わらせに来たぞ、ピッコロ」

「それは気が合うな、わしもそろそろ終わらせるつもりだった」

「何ツツ!」

俺がそう叫ぶのと、ピッコロの姿がかき消えるのは同時のことだった。

いや、この地上では俺を含め数人以外にはかき消えるように見えるで

あろう速さと早さで、ピッコロは移動した。

移動先は……玉座の上、キングキャツスルの尖塔!!

「貴様、何を——」

ピッコロ大魔王は俺を見て笑い、そのまま戦場をねめつける。

そして、俺の背後から、閃光が現れ、玉座に俺の影が刻まれた。

「これは……ツツ!!」

思わず振り返った俺の目に映るのは、爆発!

眼下に広がっていたのは、唯一武道家達の支援を受けずに善戦していた国王直属軍の戦っていた領域が爆煙に包まれる光景だった!!

溜めも何もない、ほぼ目線を向けるだけの時間で、自らの部下であるはずの魔族もろとも、一瞬にして!!!

俺は下手人、ピッコロに向き直る——いない!

「よそ見ばかりしておつて、心ここにあらずのままこのわしと戦うつもりか!!」

「——ツツツ!!」

俺は腕を振り、半ば死に体のまま、背後の気配を薙ぐ、手応えなし。

……俺が振り返るまでは気配は尖塔にあった、一瞬の間に、俺の視界を外れ、そのまま高速移動で再び俺の背後に回ったのだ……!!

この破壊、速度、やはり、若返ったピッコロ大魔王は、俺の手に余る強敵——

「さすが、大魔王」

「ほう、わしを素直に褒める人間など、久々に出会ったわ」

「強さを認めぬ相手と戦う意味がどこにある」

「弱者を甦るのは嫌いか？」

俺はピッコロに向け、大きく体を開いて構え、それをもって答えと

——宣戦布告となす。

乱痴気騒ぎを終わらせる？

それだけならば、プリカを置いてくる意味などない、悟空も、桃白白も、天津飯も連れ立って、なんなら、メタリックにも砲撃させて戦えばいいんだ。

違う、俺の目的はそうじゃない。

『——間違いじゃなくしてこい、やりとげてみる、おまえの好きなようにするんだ、オレも一緒にやる』

そうだ、俺はピッコロを倒す、素手で、一対一で。

好きなようにやり遂げてみせる、間違いでなくす、友は戦場に置いてきたが、同時に、俺と共に戦っている。

腹の底から湧き上がる果てしない、純粹な戦意は、間違いなく俺があの血を持っている証明であり、俺がこの生の中で積み上げてきた戦いの歴史と絆がもたらす……。

……わくわく、だった。

↓つづく

第二十九話：転生地球人が多くを背負い戦うまで

ピッコロが俺をぎろりと睨み、叫ぶ!!

「かあっ!!」

「——ツツツ!!」

感じるのは強力なプレッシャー、それは、眼差しをキーンとして放たれる不可視、かつ超高速の気の奔流!

一種のうちに解き放たれたそれを、俺はすんでの所で右手の輝く手刀で切り裂き、左手の手刀を差し込み爆散させる!

次の瞬間には、分かたれた奔流が背後の魔族を数体を巻き込みながら進み、雲を消し去った。

「ハッ、大した技だが、こんな小技で俺を仕留めるつもりじゃないだろうな」

「その小技で手を痺れさせながらよく言うわ」

……ピッコロの言葉は、事実。

圧倒的な『出力差』、小技ですら、俺の防御能力の限界に近いのだ。

「では遠慮なく、大技をどうぞ、大魔王陛下……!」

「その手には乗らん」

そう言うと、ピッコロは握り込んだ拳にボワボワとエネルギーを纏わし始める。

そして、そのまま、指を一本立て——

「ほれっ!」

「シィツツ!!」

指からのビーム攻撃、一撃ですら致命的なそれを、輝く拳で霧散させる!

だが、ピッコロはニヤニヤとした表情を崩さず、ゆっくりと、一本、二本と指を立ててビームを放つだけだ。

武道家に反撃の隙は与えない、ただ弄び、痛めつけるだけでいい、そう言いたげなピッコロに、俺は有効な反撃手段を見い出せずにいた。

「これ程とはな、大魔王ツツツ!!」

「武道家ごときが、ただ一人でわしに敵うと思ったか!」

確かに、そうかもしれない。

超神水の加護をもつてしても、若返ったピッコロ大魔王は圧倒的な力を持っている。

仲間を頼らず俺一人で戦う、そのエゴは、俺自身、そして、仲間や世界中の人々、眼下で戦う軍人達の命を掛け金にした、わがままでしか――

あー、あー、ちゃんと、聞こえてる？

聞こえてるんだ、よかった。

……ゴホン。

そうね、おれが、どうしてここにいるかって、話だっけ。

……おれたちは、軍人って言っても、大昔みたいに、人間とやり合うのが一番の仕事ってわけじゃない。

一番じゃないってのが、ミソね。

それで、おれたちの一番の仕事は、モンスターとか、魔族とかをやっつけること。

あの戦いも、そのため……って言っても、先生はよく知ってるか、軍にもカンケイあるもんね。

戦いだけど、あれは……ほんと、ひどかった。

あんな大きな都が魔族にやられたことなんてなかったしね。

でも、それだけなら、日常だよ、おれたちにとつては。

村とか、小さい町とかならだけどね。

やられてるのは見慣れてたけど、あんなに強いやつらははじめてだったよ。

うん、光の玉を飛ばす魔族はこれまでも何度か見た、倒したこともある。

でも、あんなに沢山出てくるとは、思わなかったなあ……一匹なら、なんとか戦車で土手っ腹ぶち抜けば倒せるんだけど。

あんなに沢山居ると、ちよつとやそつと撃つただけじゃ、ムリだか

ら。

……倒してくれたのは、格闘家だよ、そうそう、それも、テレビとかプロレスとかのしょぼいやつじゃない。

田舎の道場にこもってずっと鍛えてる、ホンモノ。

でもね、先生、おれ、実は格闘家って嫌いなんだ。

いや、ちよつと違うな、おれ、格闘家のこと、嫌いだったんだ。

そりや、強い格闘家は、強いけどさ。

ただ強いだけなんだよね。

おれたち軍人とか、ケーサツみたいなのに、しつかり戦おうって、思ってたりはしてない。

それどころか、自分たちの力はトクベツだから隠すとか、ナニサマだよ、とかも、思ったりするし。

だから、マタギならともかく、スポーツ選手とか、お坊さんとかが出てきて戦っても、ありがたみがね。

……って、思ってたんだけど。

そう、今は違うのよ、今は。

おれたちの部隊は、いわゆる、直属部隊ってやつでさ、要するに、それなりにやる方なんだよね。

だから、魔族に都が取られたって聞いた時は、すぐに戻ってきて、どこの軍隊より早く攻撃をはじめて、それで、一番お城の近くまで、行ったのよ。

途中で何人か格闘家にも会ったけど、なんとも思わなかったね。

だけど、考えが変わったのは、最後の時だった。

おれの隣にいた別の部隊のやつが、いきなり、魔族の親玉が、のんきに座ってた椅子を立て、お城のてっぺんに飛んだって言い出したんだ。

おれは親玉のことなんか全然知らないけど、なんかマズいって思ってた。

戦車の影に隠れて、耐爆姿勢を取ったんだ、もう、カンだね。

……それがよかった、次に目を開けた時、まわりにはなんにもなく

て、誰もいなかった。

当然俺もボロボロで、足は、ちぎれてたし、腕もね。

血もだくだく流れてたんだけど、実はおれ、そのときはそんなに気にならなくてね。

なにが気になってたのかった？

魔族の親玉と、誰だか分からないけど、誰かが、戦ってたんだ。

格闘家だった。

目はかすんでて、血が滲んでて、片目だったし、早くて全然見えなかったけど……かつこよかった。

あいつにそんな気はなかったかもしれないけど、おれはこう思ったね。

おれたちを背負って戦ってるんだ、って。

それで、もう目が見えなくなるって時に、助けが来たんだよ。

うん、あんたの娘さんだよ、博士。

おれの戦争の話は、これでおしまい。

ついでに、格闘家ももう、嫌いじゃない。

おれはあの格闘家の戦いっぷりと、あんたの娘さんの友達……なんだっけ、多林寺の、おでこに焼印のついた……。

あの子の筋肉、あれがすごくてね、すっかり、ファンになっちゃったよ。

わかってたつもりだったんだけどね。

戦場に来る格闘家ってのは、鍛えたいだけ鍛えて……その後で、なんとかみんなの力になりたいと思ってるんだって。

あの人たちなりに、本当はスキじゃない、戦場っていう……戦場で、必死で戦ってるんだ、って。

とにかく、娘さんと友達、なんか凄い暴れてる女の人、それに、刀の人……友達にどことなく似てたっけ。

あの人たちにもう一回会いたいな。

は？

ステレオジャックから直接いい音を聞く機能!?

いや、いくらおれがこれからサイボーグになるたって、体に直接だなんて、ぞつとしないね、いやだよ。

それが付けられるなら、もつと早いものを見れるようにしたりできない？

……録画再生機能に、スロー再生か、いいね。

今度は両目で見て、絶対に見逃さないよ。

俺は目にエネルギーを集中、賦活し、ピツコロの手、全身をくまなく見据える。

放たれるエネルギーの色、形を、視覚だけではなく、気配から感じ、その速度、性質までもを、頭に叩き込まなくてはならない。

超神水で高まった俺のエネルギーと知覚力ならば、それが出来るはずだ。

「きさま……何を狙っている？」

「さあねッ!!」

新たなビームが来る、一発で俺の全力の拳と同等かそれ以上の力が指先一本に集中したそれは、普通のボクサーにとっての弾丸にも匹敵する脅威度だ。

俺はビームの軌道に輝く手刀を滑り込ませ、やさしくタッチし――

――ひと息に弾き飛ばす!!

「……………フツツツ!!」

「な、なにっ?! くっ!!」

弾丸すべりの要領でビームを弾いた俺に向け、ピツコロは更に続けてビームの釣瓶撃ちを始めた。

だが俺は構わず駆け出す!

「――ツツツ!!」

「な、なに……………!!」

焦りを含んだ連撃を前に被弾しながらも、急所への攻撃のみは避ける。

「フツツ!! フンツツ……………グツ……………タアーツツ!!」

ビームであろうと、技である以上は術理があり、性質がある、であれば、回避も防御も可能!!

「チエリアアツツツ!!!」

弾いたままの勢いで叩き込む輝く手刀を、ピツコロは同じくエネルギーを高めたままの手で防ぐ。

だがそれは、弾丸を装填したままの銃で攻撃を防ごうとするのと同じく似た無謀な行為でしかない!

「ぐおっ……!!!」

明らかに随意的でない爆発が発生し、たまらず手を引っ込めるピツコロ、こうなれば、もはや気での攻撃は不可能だ。

つまり――

「フウ……ツツ! ピツコロ、今度はこっちの土俵でやろうじゃねえか!!」

俺が荒く息を吐き、距離を詰めると、ピツコロは観念して素手での迎撃を始める。

そうだ、俺はこれでいい、突っ込んでこそ俺だ。

この戦いもそうだ、仲間達を騙し、抜け駆けまでしてここにやってきた。

ならば、するべきことは一つ、その責任を負い切ること、ピツコロに勝つことだ!!

「素手なら勝てると思うか!」

「思うねツツツ!!!」

俺が輝く右手を突きこむと、ピツコロは素早く左手を迎撃姿勢へと変えた。

素晴らしい反射神経だ、これが若き天才武道家、ピツコロの姿か!

「やすやすと食らうものか!」

「そうは思っちゃいないッ!」

右手を逸らして迎撃の左手を絡め取り、自らの左手で指取りを仕掛ける。

このために、わざと左は輝きを纏わさずにおいたのだ。

「掴んだぞツツ!!」

「ござかしいっ!!」

ピッコロは叫びとともにノーモーションからの回し蹴りを始めた。まさか、指ごと俺を蹴るとは、ナメック星人とはいえ割り切ったことをする!!

「きええええい!!」

「又オンツツツ!!」

回し蹴りに指を離れた左肘、そして、持ち上げた膝をぶつける真剣白刃取り!

俺は蹴りの威力を殺しきれず、傷んだ関節二つを抱え跳ね飛ばされ、ピッコロは足と指から血を流してこちらを睨む。

「ハ、ハハツツ!! 初めての流血だな、ピッコロ!!」

「ただで防いだわけでもあるまい?」

「……かもな、だが、通じるのは分かった」

「ただ面倒なだけよっ!!」

ピッコロは俺の言葉に答えるように、一気に跳躍し、空中で制止した。

舞空術だ。

「やっば、使うんだな……!!」

「卑怯とは言うまい?」

「そう言われた方が嬉しいか?」

「大魔王にほざきおろ!」

そう言って、ピッコロは両手にエネルギーを纏わせ、再び、指からのビーム連打の狙いを定める。

遠距離攻撃舞空術かめはめ波飛行手段も持たぬ俺にまともな打つ手はない。

ビームが来る!

「はあーっ!!!」

「——ツツツ!!」

俺に手を打つ隙を与えない連射、その威力は一撃だけで、悟空のかめはめ波に匹敵するか、それ以上。

威力よりまずいのは、俺の手には痺れ、体には近接弾のダメージが蓄積していく一方、ピッコロはびんびんしていることだ!

「グッ……大魔王ともあろうものが、随分と消極的な!!」

「その手はくわんぞ? 虫けらを潰すのにわざわざ手を使うまでもないというだけよ」

そう言うのと同時に、ピッコロは大分撃ち尽くした両手のエネルギーを最充填し始める。

これ待っていた!!

「トウツツツ!!」

「工夫もなく飛んで当たると思うか、焦ったな若造め!!」

ピッコロの嘲笑が空に響く、無理に飛び上がった所で、俺に飛行手段がない以上、ピッコロは僅かに避けるだけで、対処出来る。

チャージの隙はわざと作られた撒き餌だった。

「工夫なく、ならなツツ!!」

……そう、俺は、それこそを、ピッコロが空を飛べぬ俺を侮り、嬲るためにわざと隙を作る瞬間こそを待っていたのだ!!

俺は今だ健在な袈裟と体勢を操作し、ほんの僅かに自らの軌道をずらす。

その僅かな軌道の変化がもたらすのは、俺の浅慮を笑うべく小さくとられたピッコロの回避距離を十分にカバーできる軌道の変化!

「な——」

「ドアアーツツツツ!!」

跳躍時の回転力と空気抵抗を利用した胴回し回転蹴り!!

叩き落されたピッコロは城に激突、土煙とともに大きくめり込み、城を大きく傾かせる。

国王には申し訳ないが……俺にも、余裕はない。

「ぶツツ……ハア!! ハア……!! ハア……!!」

使いたくもない搦め手に乗って、読み勝つてもなお、消耗が大きい!

読み勝っているのは俺だ、激突時に勝つのも俺、だが、体力消耗とダメージの蓄積は確実に俺を追い詰め、戦いの趨勢で言うならば、今だに、ピッコロに分があるのだ。

クリリンとの戦いで語った、格上に無理攻めを仕掛けて負ける格下

という構図が、まさしく俺に当てはまりつつある。

……だが、俺はやらなくてはならない、内に潜む力に頼るのではなく、自らの手で、ここまで鍛え上げた力によって！

俺は煙の向こうに沈んだピッコロに集中しながら姿勢を制御し、慎重に落下地点を選ぶ。

そして、着地の瞬間、背後から急激にプレッシャーがやってくる、回避、いや、防御を……間に合わない！

「あら、失礼!!」

「ツツツツ!!」

着地する瞬間の俺を掠め、数メートル吹き飛ばしつつ、飛び上がった『何か』が傾いた尖塔に立つ。

ローブを着込んだ影、あれは……! !

「貴様、例の魔族か!」

「何が『例』かは知らないけど、そうなんじゃない?」

不敵に笑うオカマの魔族。

そうだ、こいつこそが、ピッコロの封印を二度に渡って解き、道場を破壊した恐るべき敵であり、歴史の歪み。

俺達が立ち向かうべき本当の敵と言ってもいい。

その魔族に怒りと敵意を向けようとしたまさにその時、魔族は手にエネルギーをチャージし始めた。

そして、エネルギーをぞんざいに丸め、ピッコロの『眼差し』で焼かれた都市へと向ける!

「ピッコロのやつ、あんなにお残ししちゃって、もしかしてあなたにビビって手を抜いたのかしら……ねっ!」

「おい、待て——」

放たれたエネルギーの量は、ぞんざいながら、あの区画に残っていた軍人たちの命を焼き尽くすには、十分!!

突っ込んででも防がなければ、だが、息が整わない……そう思った時、別の極光が視界を横切った。

青いエネルギーが塊を押し切り、エネルギーを霧散させたのだ。

「あら、これは……武泰斗の流派の技ね、確か……」
言葉を詰まらせた魔族に答えたのは、俺ではなかった。

『かめはめ波』だ、まったく、忌々しい……」

「あら、起きたのね」

「寝てなどおらぬ、きさまがジヤマに入っただけよ」

瓦礫から這い上がったピッコロ大魔王はジロリと魔族を睨む。

ピッコロの眼差しはただの敵意を意味しない、それは明確な害意までも示すのだ。

……奇妙な光景だった、魔族同士がいがみ合うなど、見たこともない。

「あらら、怖い怖い」

「やつはわしだけでやる、きさまらの手などは借りん」

「変わり者ねえ、わかつたわ、じゃあね」

魔族は勢いよく跳躍し、そのまま都市の外へと飛び去っていく。

あとに残されたのはピッコロと、俺。

「どうした、随分嬉しそうだな、人間」

「ソシルミだ」

俺が名を伝えると、ピッコロは一度、二度、それを口の中で転がし、次に、何かを確かめるような口調で、俺に問いかける。

「ソシルミか……なあ、ソシルミよ、わしは今たつたの一人、おまえには仲間がいる、それが嬉しいか？」

「……違うな、仲間が別の場所で生きて戦っているのが、嬉しいのさ」

俺には分かる、あのかめはめ波はクリリンのものだ。

クリリンは生きていた、そして、ここで戦っているんだ。

一つ肩の荷が降り、それより重いものを背負うような感触が俺を襲う。

そうとも、俺は、俺が背後に置いてきた仲間達の分まで、それ以上に、戦わなくてはならない。

「仲間がいて、それでも一人でわしに抗うか、わからんな、人間は頭まで悪いらしい」

ピッコロは嘲笑と、それとは別の何かを含ませた笑みを俺に向けてる。

「馬鹿じゃなきゃあ、そもそもこうまで鍛えないとも」

「おかげでわし自らの手によって殺される栄誉にあずかれるというわけだな？」

「いや、俺は貴方を殺す栄光を頂くつもりだ、大魔王陛下」

俺はそれとなく地面を踏みしめる、その動きに鋭敏に反応したピッコロは、かつて自分が学んだのであろう、武術の構えを取った。

神の分身を相手取って、地上の命運を争う……こんな大事な戦いを、俺はただの格闘試合にしようとしている。

その責任は、取らなくては。

崩れ去った城の上、輝く拳と緑の拳がぶつかり合い、足に伝わったその衝撃が瓦礫を砕く。

足元を失った二人は別の決戦地を求め、また別の石を踏みしめ、また砕いた。

そして、更に次の瓦礫を求めて駆け出した頃になって、ようやく最初の拳が生み出した衝撃波が追いつき、全身を小さく震わせる。

「ハア……ハア……」

「クク……」

再び息が上がりつつある俺を見てほくそ笑むピッコロ大魔王。

奴にとっては今こそ仕留め時と言ったところか、ピッコロは両手を抱えるような形にしてエネルギーを貯める。

莫大な破壊力を感じさせる攻撃だが、妨害に移る余力はない、ここで防ぐ！

「ク、クク……はあーっ!!!」

「ツツツ!!!」

猛烈なエネルギーの奔流が、掠めただけで瓦礫を消し去り、回し受けで防ぐ俺の手を焦がす。

轟音の中、肉の焼ける音を幻聴しながら感じるダメージは、悟空のかめはめ波以上！

だが、俺はそれだけでも窮地と言えるこの技に構う余裕を持たない。

足元から振動が伝わる、これこそ、エネルギーの勢いに隠された真の意図——

「腕かツツツ!!」

「よく知っておるな!」

ナメック星人の特性、伸びる腕。

エネルギーが消えると、そこには砲身冷却中とばかりに掲げられた左手と、土に埋もれた右手!!

「シィツ!!」

だが、俺とピッコロの実力差は、腕を足でさばけぬほど大きくはない、俺はピッコロの足を振り払い、本体に向かって走る!!

しかし……ピッコロは笑みを崩さず、俺をあざ笑った。

「かかったなっ!!」

「何ツツ!!」

次の瞬間、ピッコロは激しく腕を引き抜き……瓦礫が俺を襲う!!
腕をあえて差し向けたのは隙を見せて俺を誘うためか!

「俺にこの程度の足止めは——」

「——何のことを言っている?」

瓦礫をひっくり返す腕を引つ張ったピッコロはそのまま体ごと猛烈な勢いで——

「回転だとツツツ!!?!? グツツ……!!」

腕そのものの威力、更には、腕が更に拘束で弾き飛ばす瓦礫を輝く両手で弾くが、いくつつかの攻撃が体と腕に命中し、俺はたまたまず後方に吹き飛ばされた。

「ゲ、フ……人間じゃない相手との試合はやっかいだな」

「これが試合だと?」

「力を持った二人が、罨も仕掛けず正面からやり合うんだ、試合と呼ぶしかないだろう」

「ク、ハハ……そうかもしれんなあ!」

ピッコロの腕、否、派手な回転に隠された肘、爪、拳に挟られた腕

が痛む。

これまでの、人間には不可能な技をただひけらかすだけの戦い方ではない、そこには俺を仕留める工夫があり、力以上の技術が込められている。

だが、それだけに、俺には不満があった。

「ピッコロ、お前はまだ実力を隠している、そうだろう？」

「きさまも力を隠し持っているではないか、まさかこの期に及んで出せないのか？」

「出せないな……」

鬼の貌、俺が得たはずの力は、この戦いにおいて、未だに目を覚まさずにいる。

理由は分からない、まだ追い詰められ足りないのか、何か、自覚すらしていない迷いでもあるのか。

……だが、だとしても、俺はピッコロに勝たなくてはならない、そうでなくては、仲間に、師匠達に、プリカに、報いる事ができない!!
「出せないなら、それが実力だと諦めて……死ね!!」

「そうはいかないさ、自由にならない力に頼るなど、不純そのもの……俺は、今ある力で貴様を倒す!!」

技術、戦術、身体能力、反射神経。

常人を遥かに超えた超人、その中でも、当代の地球人では随一の実力が俺にはある。

それを与えたのは、魔族共に殺された師匠達であり、この地球そのもののものだ!!

「ツアーツツツ!!」

「来るかつ!!」

俺はピッコロに向け駆け出す、その手には、輝きよりもなお純粹な力が握られ……収束されてゆく!

これは、本来悟空に使うはずだった、そして、魔族から地球を守るにはもってこいの技だ。

「なにかくだらん技を出すつもりらしいが、わしには通じん!!」

あざ笑うピッコロの初撃は伸びる腕、肩肉でブロックし、前に進む

！
俺は踏み込みながらのローキックでピッコロの足を制するが、ピッコロはそれを回避し、爪を俺に突きつける。

まともに喰らえば骨を切り裂き命に届く爪を、自爆覚悟の『爆発する手の掴み取り』で防ぎ——後ろ蹴りをピッコロの腿に叩き込んだ!!

「ツツツ……トアアーツツツ!!!」

「ぐ、おお……!!」

ピッコロが苦しむ一瞬を利用し、俺は拳を構え、技の最後の下ごしらえをする。

全力の格闘を持って敵の動きを封じ、その果てには、手に収束させた衝撃波エネルギーを叩きつけるのが、この技だ!!

「行くぞ、ピッコロ!!!」

「まさか、その技は——」

シユラから盗み取った衝撃波エネルギーの操作は、俺が使えるエネルギー操作の中でも最も高度なものであり、穏健な魔族であったシユラの技は、魔族の暴走から世界を守るにふさわしいもの。

そして、それを叩き込むための格闘技術は、俺がこの世界で強さを極めようとする理由となった、師匠の美しい戦いを真似、昇華したものの！

その組み合わせによって作り出されたこの衝撃波拳のコンビネーションこそが、俺が今放つことが出来る最大の技、これまで築き上げてきた戦いの歴史が生み出す技だ!!

「噴^{ブン}アツツツ!!!」

俺の必殺拳がピッコロの鳩尾に突き刺さる!!

拳はその勢いだけでピッコロを瓦礫の海に叩き込み、激しい土煙が上がる……が、これが終わりではない!

「ぐっ……おおお!!?!」

「ツハア……これが、俺の奥の手、だ……!!」

ピッコロの叫び声とともに、空気が震え、土煙が爆ぜた。

インパクトの瞬間に拳より侵入した衝撃波エネルギーが敵の体内

で起爆し、体内を完全に破壊する。

それこそがこの技の本質、いかに再生能力を持つ種族といえど、攻撃戦でダメージを受ける以上、体内をかき回すようなダメージを受ければ、ただでは済まない。

「ハア……ハア………」

俺は息を整えながらピツコロを待つ、死んだとは思えない、だが、無防備に近づくほど、楽観はできない。

最後の最後に逆転するのは、俺自身の十八番なのだ。

俺は煙の向こうの気配を見張り——殺気！

「ツツツ!!」

左手のクロー！

だが避けられる、それを回避し、再び臨戦態勢を取った俺に、ピツコロは笑いかけた。

「はっはっは、まさか、人間でここまでやるのがいるとはな!!」

「ぐ、ぐ無事のように、大魔王陛下」

「おかげさまでな」

ピツコロは左手に持った左手をぷらぷらと見せつけ、明後日の方角へと放り投げる。

笑うピツコロだが、小さく冷や汗をかき、無傷ではない、それは分かっている、分かっているが……。

「どうした、手詰まりか？ ソシルミ」

「……まだまだ、これからだ」

体力は削れ、ダメージは大きく、敵は健在。

「では、楽しませてもらう」

最大の技までも破られ……それでも、戦いは、まだ始まったばかり、だった。

↓つづく

第三十話：転生地球人がただ一つ背負うまで

『では、楽しませてもらう』

ピッコロはその左腕に持った左腕を投げ捨て、こちらに向けて構えを取る。

それを見れば、何が起きたのかはすぐに分かった。

「炸裂寸前、エネルギーを腕に流したか……!」

「どう弄くられようとも気は気、どこに当たるかわかればどうということもないわ」

俺が流し込んだ衝撃波エネルギーは、ピッコロが持つ何らかの技術で左腕に逸らされ、そこで炸裂した。

その後、ピッコロはナメツク星人の生態、自前の再生能力を用いて破壊された腕を再生し、ゆうゆうと俺に見せつけているというわけだ……!

今度は、俺の額に冷や汗がつたう。

サラリと言った技術の難しさもさることながら、再生可能とはいえ、やすやすと片腕を――

「――さあ、ソシルミよ、試合再開だっ!!」

「……ツツツ!!」

舞空術と完全に調和した変幻自在超高速のステップに乗る膂力は先程よりも勢いがある……いや、俺が弱っているのか!

受け流しが間に合わない!

「グツツ……!!」

「どうしたソシルミ、これで種切れというわけではあるまい!!?」

全力の受けて拳を防ぎ、しかし、そのまま瓦礫の端まで吹き飛ばされた俺にさらなる攻撃が襲いかかる!

ピッコロの攻撃の威力が上がって……いや、俺の体力がもうない、どうする、このままではギリ貧、なぶり殺しだ。

俺は脳裏によぎった敗北のイメージを振り払うべく思考を巡らしながら、横っ飛びでピッコロの攻撃を回避する。

「まだだっ!!」

「~~~~ツツツ!!」

回避途中の俺が巨大な瓦礫に差し掛かった時、ピッコロが追いつく!

そのまま放たれる拳、足、絶大なパワー。

防御しようにもしきれはしない、威力を瓦礫に流すことすらままならない圧倒的な破壊。

これが、異星人の才能、これが、宇宙随一の優秀人種、ナメツク星の天才児、その片鱗だけでも、今や地球人最強の一角となった俺を潰すには十分すぎる。

「はははははは!! しょせんは人間、こんなものか!!」

保有エネルギー量、筋力、身体強度、体力、特殊能力、フィジカル的な要素はほぼすべてピッコロの圧勝。

格闘技術、反射神経など、僅かな要素では俺が勝っているが……絶対的な不利を覆すに足るものではない。

「ガツツ……ガフ……」

すべてをもつてしても敵わない、頼みの必殺技も既に使ってしまった。

俺にピッコロの攻撃を防ぐ手段は——

「フン、最早声も出ないか、そろそろトドメにしてやろう……!」

俺を殺すべくピッコロは拳を振りかぶる。

……その動きに、見覚えがあった。

それは、悟空に似ている。

そして、天津飯に似ている。

……ジャツキー・チュン、亀仙人に似ている。

「——ツツツ!!」

「なに!？」

鋭い拳を、爆発する手で逸らし、それと同時に、思わず口から言葉が漏れる。

「武道家……」

「きさま、わしを武道家と呼ぶか……っ!!」

「確かに、武道の動きだ」

そうだ、ピッコロは武道家だ。

だからこそ、俺を相手にここまで圧倒できる。

だが、武を使う相手ならば、更に勝る武を使えば、あるいは。

「先輩……一手、御教授頂きたい」

化物と戦うのではない、唯の化物になど、俺は負けない、追い詰められなど、するはずもない。

敵は武道家であり、俺は武で立ち向かうのだ！

「ツアーツツツ!!」

「急に調子づきおつて……ぬうー!」

爆発する手は格闘技術を無力化する武道家殺しの技、本来武術で勝る俺が使えば強みを潰すが、爪を用いた抜き手を多用するピッコロには有効だ！

「その程度の爆発!!」

「効くとは思っていないさツツ!!」

指を使った精密な戦いが難しくなればそれで十分、俺の優位は守られる。

気力大移動の高速拳に爆発を乗せることで威力と速度を守ったこの技は、数日前には不慣れからの動揺を突かれ敗れたが……今の俺に迷いはない!!

「武道家として、貴様を倒す!!」

「わしはピッコロ大魔王だ!!」

ピッコロが叫びとともに俺をにらみ、エネルギーを噴射する！

俺は手を輝きに変える余裕もなく両手の爆発で受けるも、激しく後退し、技の停止を余儀なくされた。

……圧倒的なエネルギー、全盛期はこの数百倍だったとするならば、この地上に敵はいない。

「グ……オオ……ツツ!!」

「きええええいつ!!」

下がった俺に対し容赦なく追撃を始めるピッコロ。

俺はギリギリで立ち直り、爆発を纏わぬただの気力大移動を放つ！

「シツツツ!!」

「食らわんわ!!」

高速打撃をあっさりと掌で受けるピッコロ、その身体強度と反応速度。

地球人とナメック星人の間にある数十か数百倍の基礎能力差、にも関わらず、鍛え込まれたガードの技術。

しかし、一撃で仕留めようなどとは思っていない!!

「八百拳やおこぶしツツツ!!」

「技に名とは、きさまらしくもない——」

ピッコロの嘲笑を受け流し、俺は八百拳のコンビネーションに入る

!

高速打撃による幻覚の虚と超高速打撃の実を合わせ、対応不可能の敵を撃滅するのがこの技、どちらも『見える』ピッコロ相手であれど

!!

「——ツツツツ!!!」

「ぬおおおっ!!」

残る体力の大半を注いだこの技、ピッコロにも効果あり。

繰り返される低速の打撃はピッコロの目を慣らし、時折放たれる高速打撃への耐性を失わせる。

このまま連撃を重要臓器に叩き込み、行動能力を奪う!!

「トタタタツツツ!!!」

「くだらん!! 連撃と言えど、腕が増えるわけではあるまい!!」

だが、一つ腕を捕らえることすらできはしまい!

そう答えようとする俺の手が止まる。

「なッ……!?!」

「見ろ、捕らえたぞ!」

輝きを保ったままの手が止まったのは、腕が壊れたからでも、掴まれたからでもない!

腕はピッコロの左腕にめり込み、そのまま停止していた。

「わざと力を抜いて俺の貫手を……!」

「クク……」

ピッコロは文字通り『気を抜く』ことで左手の強度を下げ、次いで、再び力を込め、刺さったままの手の動きを封じたのだ！

この実力差で腕を取られたままは絶対的にまずい！

突き刺さった貫手にエネルギーを投入し、脱出を――

「遅いわっ!!」

「ガ――」

腹部に衝撃、ピッコロの蹴り!!

俺は思わず飛び退くが、ピッコロはすかさず伸びる腕の手刀を追撃に放つ！

回避はできない、だが……。

「ただ伸ばしただけの腕などツツ!!」

俺は腕を回避して懐に入り込み、すれ違いざま、その腕に満身の衝撃波エネルギーを流し込む。

しかし、ピッコロは間髪入れずに俺のタツクルに対応、俺の両肩がっしりと両腕で掴みながら、両腕にエネルギーを流し込み始めた！

「まさか――」

「そのまさかよ、きさまのチンケな気など、種がわかれば容易く消しされるわっ!!」

流し込んだエネルギーが消え去るのを感じる、だがそれ以上に危険なのは、エネルギーが両手に蓄えられているということ。

嫌な予感当たるもの、輝く手でロツクを外そうとする間に、ピッコロは蓄えたエネルギーを起爆する！

「グアアアアツツツ!!」

「気を爆発させるなど初歩も初歩よ、技に至るまで練り上げた努力は買ってやるが、それまでだな」

爆発によって弾き飛ばされた俺は、瓦礫を押しつけ、その端にめり込んで、ようやく止まる。

……エネルギー量が一流なら、エネルギーの操作もまた、一流。

ピッコロ、いや、その前身、カタツツの子と呼ばれたナメツク星人は地球において圧倒的な才能を持ちながら、ここまで技術を練り上げ

た。

何故だ？

気疲れなどではない、純粹な疲弊とダメージによってもたらされる脱力の中、普段ならば気にならない、いや、戦場にはそぐわない疑問が脳をよぎる。

「ようやくきさまも死ぬ時が来たな」

「そのようだな、ピッコロ」

「……自分が死ぬ時までそれか、気色の悪いやつめ」

「性分だ」

違う、俺は生きたい、あくまで生きたいと思っているのだ。

だが、最早抗う牙はない、自らを鍛える強者を前に弱者ができることは、強者より長く鍛え、強者より良い技術を得ることしかないのか？

どうして、それが分かっているながら俺はこの世界の知識を使って更に自分を鍛えようとしなかった？

重力室を使って鍛え込んで、敵対者を潰してのんびり鍛える、そんな構図を選ばなかった理由が、どこかにあるはずだ。

「一体、どうしてこうなったのやら」

「うわごとか、見苦しいぞ」

「……ああ、見苦しいが、最後までやらせてもらう」

俺は最後の力を振り絞って立ち上がり、ピッコロに向けてファイティングポーズを取る。

構えですらない、ファイティングポーズだ。

「ふん、座っていれば終わらせてやったものを！」

立ち上がってみれば、ピッコロの言葉に言い返す余裕もなく。

ただ、全力でやるだけ、そう思いながらも、雑念は止まらない。

——ピッコロが向かってくる。

「きえええええい!!!」

「……………」

何故、ピッコロは圧倒的な自分の力を更に鍛えたのだ？

何故、俺は知識のアドバンテージを使って周りより力を高めようと

しなかったのだ？

“ 門の外に向き直って見る道の先には、無限に広がる武術の世界が広がっていた。”

武術を、全身で味わいたかった、気で膨れ上がった体のつま先でなく、指先でなく。

『俺は、修行相手が……欲しかったただけだ！ 強くて俺を殺しに来る、思う存分戦える相手が……！』

全力で戦いたかった、必死で戦いたかった、命を賭けたかった。

『滅びない、俺達と一緒に戦えばいい、仲間たちと切磋琢磨し、敵に立ち向かうんだ』

並びたかった、高め合いたかった、鍛えあいたかった。

『だから、今日はお前が産まれた日だ、俺も、お前が産まれてきた事を祝う、間違いなく俺にとっても、祝うべき日だからな』

——間違いなく俺達は、祝福されてこの世界に生まれてきた、だから。

俺は拳を握る、小指から順に関節を折り、人差し指から握り込み、親指で抑える。

発射体制は、体に委ねる、決まった構えはそこにはいらない。

「ヤケか、気の技すら使わず——」

違う、生きたいのだ、ただ、生きたい、自ら得た生を全うしたい、それだけなのだ!!!

精一杯に今を生き、生を謳歌し、今の戦いを戦い抜いてこそ、宇宙

を揺るがす戦いにも手が届くはずなのだ!!!

「邪アアツツツツツ!!!」

「むおおっ!!!」

俺の放った拳が、ピッコロの腕を叩く。

おかしい、今の俺が放った拳を防御する価値などないはずだ。

にも関わらず、俺の目の前にあったのは、腕をクロスさせた腕から血を流したピッコロが、俺の鼻先数メートルで目を見開いている姿だった。

自らが持つ最高の能力を最高に発揮して生きる。

俺はかつて、力においてそれを望んだ、自らの力は、宇宙にも通じるのではないかと思った。

しかし、それは圧倒的な強さと才を持つ異星人たちの前に否定され、俺が頼みとしたのは、技術であり、戦法であり、そして、最後に頼ったのは、奇跡だ。

「……おい、ソシルミ、何をやった」

「何かは……わかんねエが……」

霞みかけていた視界はクリアになった。

学んできたものを捨て去ったかのような、無様なファイティングポーズ、そこから放たれた拳は、迫りくるピッコロに防御を強い、その防御すら貫いたのだ。

「やらせてもらうッッッ!!!」

「むっ!!!」

ファイティングポーズから拳を腰だめに下げながら突撃し、そのままパンチを放つ!

律儀にも待っていたピッコロは、再び防御姿勢を取るが、貫ける。確信とともに放ったパンチが腕に突き刺さり、金属同士が激突するような音とともにピッコロを弾き飛ばした!!

「調子に乗るでないわ!!!」

「ヌンッッ!!」

放たれる両手の手刀を、チョップで迎撃、二つの交差から、ピッコロの赤い血が垂れる。

反射力までもが向上しているのだ。

俺達は互いに一瞬、動揺し……同時に互いに向けてキックを放ち、蹴り合って飛び退いた。

「ぎゃま……どこにそんな力を隠していた?」

ピッコロは忌々しげに笑う。

……力は隠していたのではなく、隠れていたのだ。

そして俺は、この力を失ったのでも、出せなくなったのでもなく、どうやってこの力に呼びかければいいのか、見失っていたのだ。

「鬼の貌、俺の背中に蓄えられた打撃用筋肉ヒッティングマッスルの塊、それがたった今、目覚めた」

「背中の筋肉で反射速度まで上がるのか？」

上がる、俺がそう答えると、ピッコロは忌々しげな表情を消し去り、愉快げに笑った。

「わしの本当の力を見せてやろう、寿命までもが縮まる真の全力だ、見せたくはなかったが……」

「見せてくれ」

「言われなくとも!! ぬ、ぬおおおお………!!!」

気を高めだすピッコロ、見守る、俺。

試合ではない、本当に倒すべき相手であるはずの敵を前に、手心どころか、その強化を待つことすらしている。

だが、それはお互い様だ、互いに、敵を殺すことより、戦いを楽しむこと……あるいは、自らの生をぶつけることこそを、楽しみとしているのだ。

「お……おお……!! はあ、はあ」

「終わったか、ピッコロ!」

「ああ、これでききさまも終わりだ!!」

緑の肌キナに青筋を立てたピッコロが笑い、体を前後に大きく開いた……亀仙流のような……構えを取る。

俺は体を左右に広げた構え、範馬勇次郎の構えを取った。

互いに本来の限界はとうに超えた領域、ただ、おそらく互角だと肌で分かる。

……ここまでやってもまだ、ピッコロが本気を出すだけで互角とは恐れ入るが、勝つのは俺だ。

パワー、スピード、技術、エネルギー、体格、あらゆるものが関係ない、ただ強い、それこそが範馬、その根源こそが、腹の底から湧き上がるこの高揚感、戦闘意思だ!!

拳と拳がぶつかる。

足と足がぶつかる。

頭と頭がぶつかる。

「はははははっ!!!」

「アハハハハハハッツツ!!!」

殴りながら笑う、殴られながら笑う、狂気ではなく、狂喜がある。相手がやることなんて関係ない、ただ自分がうまく殴れば、気持ちよく殴ればそれでいい!!!

パンチにはパンチをぶつけて、めいっばいぶつかり合いを楽しむ、たまに肉を殴るのも楽しいな。

気持ち悪いと思ったらみぞおちに拳が当たっていた、痛いけど、どうってことない。

どうってことないけどやり返そう。

「ドアアアアアッツツ!!!」

「ちええええいっ!!!」

凄い力だ、この力があれば、俺は師匠にジヤマなんかされずに済んだ。

そうだ、こいつにはジヤマしてくれる師匠もいなかったんだ、どんな気持ちだっただろう。

圧倒的な力を持って、自分は善人で、止めてくれる人はいないなんて。

もやもやと考えている間に、五百回くらい、パンチが俺達の顔に当たった。

「キエエエエエッツツツ!!!」

「しいいっ!!!」

顔にも拳が当たる、ピッコロにも当たる。

ピッコロの血と俺の血は、肌の色が違ってもどっちも赤色だ、嗅いでないけど、鉄臭いのか。

これじゃ、自分が宇宙人だって気づけなくてもしょうがないか。

「ひよああっ!!!」

「キイエツツツ!!!」

どうだ、宇宙人! 地球は退屈だったかい?

つまらない場所だった?

だったら、ごめんな、俺もよそ者だけど、お前を楽しませてやるから。

「死ねい!!!」

「グガアアツツツ!!!」

楽しいなあピッコロ、戦うつてのは。

お前は今、自分のためだけに戦ってるのか？

実は俺もそうなんだ。

誰かを背負ってちやあ、重くって戦えないもんな。

「くたばれ大魔王ツツツ!!!」

「ちえええええい!!!」

お、クロスカウンター。

それでもお前は倒れないんだ、俺も倒れないけど、そろそろ足がふらついてきた。

……目の前にはお前だけがいて、背中には鬼だけが背負われてる。仲間はもつと後ろか隣。

大事なやつらは、俺の腹の中、俺の一部だから、どこにもいない。拳が当たる、必死の思いで再装填して、解き放って、当たる、精一杯引っぱってまた当てる。

「拳……を……」

おかしい、拳が下がらない、また殴りたいのに。

気がつけば、目の前にピッコロがいない。

どこへ行ったんだ？

俺の拳は吹っ飛んで、ピッコロは呆れてどこかに行ってしまったのか？

それなら、悪いことをした。

「……気色悪い、あっちへ行け」

「ん？」

ピッコロが俺の肩を掴むと、腕にずるりと生肉の感触がして、それから、背中が瓦礫に当たった。

突き飛ばされ、その拍子に拳が引っこ抜けたと気付いたのは、その後だ。

俺は呆然とピッコロを見上げてつぶやく。

「ピッコロ……胸、穴が開いてるな」

「きさまが開けたのだ、まったく、このピッコロ大魔王にここまでしつこく……」

「それは、ご無礼を」

立ち上がらねば、追撃が来る。

だが、俺の足は最早動かない……当然だ、とうに限界を超えた所から、更に限界を超えた戦いを行ったのだから。

俺がホラー映画の腰の抜けた被害者のように四苦八苦していると、ピッコロは大声で笑い出した。

「はははははははっ!!! 無様だな、ソシルミ！」

「滑稽なのは承知だ」

「きさまのしつこさに免じて、決着は預けてやる」

一体何を言い出す、魔族が倒れた敵を目の前にしているのだ、さつさとトドメを刺せばいいものを。

そう言おうとする俺の目の前で、ピッコロは喉を急激に膨らませた。

「ま、待てッッ……!!」

「おっ!!」

ピッコロはそのまま、とてつもない勢いで『卵』を吐き出す。

卵、それはピッコロのすべてを込めた分身だ、つまり、今ここにいるピッコロは、死ぬ！

にもかかわらず、ピッコロは何やら清々しい笑みを浮かべて、飛んでゆく卵を見ている……。

「わが子よ、いつの日か……父のかたきを取ってくれよ……! そしてさらばだ、ソシルミ……うっ!!」

ピッコロの肉体から光が漏れる、死とともに、蓄えていた力が開放され、爆発しようとしているのだ。

まだ決着が付いていない、後でなどと言い訳をするな、お前を復活させたのは何者なのだ、なぜそのようなことをした、あらゆる言葉が脳裏を掠めて消えてゆき、最後には、ただ一つ、好敵手の名だけが残

る。

「ピッコローツツ!!!」

だが、俺の叫びも虚しく、ピッコロから吹き上がった爆炎は瓦礫を吹き飛ばし、爆風は俺の体を包んでゆく。

……そして、ピッコロの命によって巻き起こった爆風は、俺の目からこぼれた涙をさらって虚しくどこかへと吹きさっていった。

その涙は、好敵手の死を前にして流れた、理屈すらもない、ただ死を惜しむ涙だったのだろう。

「……また……戦おう」

宙に放たれた再戦の誓いとともに、俺の意識もまた、中の都の空へと消えていった。

目が開く。

まぶたが開き、光がやってくる、視界の端に地面が映る。

写った地面は荒野だった、荒野に見えるほどに荒れ果てた、中の都だった。

「む……ん……」

叫びすぎたのか、拳が当たったのか、痛む喉でうめき、首を回して周囲を確認する。

……ところで、頬に何やら、柔らかいものが触れた。

「お、起きていいののか?」

触れた柔らかいものの正体が喋った、プリカだ、若干声が上がらずにいる。

するとこの頬の感触……ではなく、俺の頭が乗っているのはプリカの足ということになるだろう。

いや、待て、俺は今何をされている?

違う、それより、答えなくては。

「……魔族はまだいるのか?」

「全部逃げてった」

「じゃあ、しばらく寝ていよう」

「皆、聞いてくれ、これは俺達武道家、いや、地球全体の命運にも関わることだ」

「地球全体だと？ ピッコロをおまえが倒した今、これ以上何かあるのか？」

天津飯が驚いたように言う、まあ、それも無理はないだろう。

悟空とプリカはすでに何を話すのか感じているようで、神妙な表情になった。

「ドラゴンボールのことだ」

「……ピッコロに殺された兄者や亀じじい、それとおまえの縁者を蘇らせるのだったな」

「ええ、ですが、作戦前の予想通り、ドラゴンボールはピッコロ大魔王によって使用され、ピッコロは若返っていました」

「ドラゴンボールは使つちまうと一年は石つころになつちまうんだ、だから、しばらくみんなを生き返らせるのはムリってことだな……」

悟空がガラにもなく説明してくれたが、それは違う。

この世界では俺とプリカしか知らない、さらなる秘密があるのだ。

「いや、ピッコロ大魔王はおそらく神龍を殺害している」

「なにいつ!? あの神龍を殺すだと！ そ、そんなことが!!?」

ピラフが驚くのも無理はない、神が直々に作り出した、いわば化身とも言える存在、死者蘇生から住宅の建築までそつなくやってのけるあの龍が簡単に死ぬと言われて、誰が信じるだろう。

「強さと能力は違う、全能の神龍とはいえ、ピッコロ大魔王のパワーに晒されれば死んでしまつてもおかしくはない」

「では、ドラゴンボールはもう、使えない……鶴仙人さまも、チャオズも……!!」

天津飯が3つの目を驚愕と悲しみに見開く。

……話がここで終わりなら、俺は不確実な希望で皆を釣った詐欺師ということになるが、そうではない。

桃白白はそれにすでに気付いているらしく、焦りながらも、頬を釣り上げて俺を見た。

「きさまのことだ、何か策があるからこそ、わざともったいぶっているのだろうか？」

「その通り、ドラゴンボールとはいえ一つの道具に過ぎません、壊れたのであれば、それを作った人物……すなわち、神に面会し、ドラゴンボールの再生を嘆願するまでです」

真剣な顔で宣言しながら、俺は内心で微笑む。

あいつが……ピッコロ大魔王がその命を遺してくれたお陰で、俺は今、こんな提案をできている。

「神に直訴だとお!!？」

またピラフが大げさに驚いた。

魔族とも繋がりがあられるらしいこいつにとっては、神の存在は俺達やそこらの武道家より、よっぽど身近なのだろう。

ピラフとプリカ以外の皆は、神の存在を信じきれず、しかし俺の言葉を疑うでもなく動揺するか、特に違和感もなく受け入れてしまったようだ。

このおおらかさが、この世界のいいところだな。

「神だと……？ 存在しているならば、オレも頼みに行きたいところだが……」

「神が受け入れるのはおそらく、強さと清らかさを兼ね備えた者だけ、つまり、権利人は悟空だけだ、カリン塔までは俺も付き添うがな」鶴仙流の二人は清くなく、力もおそらく足りないのでアウト。

俺は強いが、そこまで清くないのでアウト。

プリカは清いと言いたいが筋斗雲に乗れるほどではないし、ピラフは論外。

神との面会が許されるのは、おそらく元の歴史と同じく、悟空だけだ。

そう伝えてやると、清くない連中はおとなしく引き下がった。

「わかった、オラ、神様にあつてくる」

「良い返事だ、後でジェットに乗って行こう」

「オレはどうしてる？」

「ぶっ壊された家の片付けがあるだろう、ブルマに手伝ってもらわ

ないと、研究所から漏れた汚染物質もあるんじゃないか？」

プリカは『あゝっ……』という感じの顔で固まり、青い顔でブツブツ言いながら設備の脳内リストを確認し始めた。

俺はトレーニング設備がなくなるくらいで気楽なもんだが、プリカは大変だ。

……さて、業務連絡は終わったが、俺にはまだ、皆に言わなくちゃいけないことが残っている。

「最後に、皆、俺の抜け駆けを見守ってくれてありがとう、おかげで気持ちよく戦い抜けた」

「オラも、もうちょつと空のやつらを倒したら行くつもりだったからな……お互いさまだ！」

「ありがとう悟空、代わりと言っちゃなんだが、武道会の決着はまた今度付けよう」

俺が悟空と話していると、横で天津飯が何かを言おうとしているのに気付いた。

天津飯は鶴仙人の仇を討ちたかっただろう、一度謝っておくか……と思ったが、天津飯はプイと顔をそむけてしまった。

「拗ねるな天津飯、……フウ、なに、ソシルミ、仇を横取りされたのは事実だが、裏を返せばかわりに討ってくれたということ、貸しや借りはなし、それでいいな？」

「ええ、桃白白様、十分です、天津飯も……次は直接やろう」
天津飯は顔を背けたままだったが、もはや敵意はない。

……これで、長く続いた鶴仙流との因縁も終わり、これからは新たな関係が始まるだろう。

それが薄いものか濃いものか、良いものか悪いものかは分からない。

分からないのは、この歴史が、善人の悟空を通した見たかつての歴史ではなく、悪を取り込んででも活かそうとする、俺達を作る新たな歴史だからだ。

「ピラフ、ピッコロ大魔王は倒した、魔族は俺達で全部倒した……これで終わりだ、丸く収まった、お前が部下を助けたのは、間違いじゃ

なかった」

「おまえの頑張りも、オレがおまえを送り出したのも、な」

俺がピラフに向けて言った言葉に、プリカが重ねて、俺の背を小さく叩く。

……そうだ、間違いはなかったんだ。

長く続き、始まりも苦しかったこの戦いだが、戦い終えた俺達はただ、晴れ晴れとした表情を浮かべていた。

↓つづく

第三十一話：転生地球人と転生TSサイヤ人が再会を誓うまで

ズラリと並んだメタリック達が同朋のスクラップを抱えながらコンテナに入ってゆく。

コンテナは当然、ホイホイカプセル化機能搭載のものだ。

「ピラフ、メタリックを後で貸してくれ、除染に使う」

「何を今更水臭い……、わたしたちも手伝うぞ？」

「流石に悪いからな、それに、チャパさんともひどい目にあっただろう？」

プリカとピラフは今後の段取り、鶴仙流の二人は早くもジェットを出してパイヤ島へ向かう準備、悟空はヒマを持って余してそらの瓦礫の上で体操。

それぞれが次の準備を進める中、俺は……特にやることがないので、瓦礫に座ってコーラをかつくらっていた。

「ブハツ……ふう、流石に疲れた、死にかけるのは毎度のことだが、ここまで絞り切るのは久々だ」

「おつかれさま、だな」

ピラフと一通り話し終えたプリカがオレの隣に座り、ねぎらってくれる。

だが、そろそろ出なくては、食事や着替えは機内で済ませよう……そう思っていると、プリカが俺の顔を覗き込んで、なにか言いたげにしていた。

「なんだ？」

「なあ、ソシルミ、おまえまでカリン塔に行く必要、ほんとにあるか？」

「……それはどういう意味だ」

「必要ないって言ってるんじゃない、おまえにはあるのかって、聞いてるんだ」

元の歴史を参考にするなら、悟空がカリン塔に行きさえすれば、あ

とは自然に、カリン様は神への直訴を承認し、悟空は神の下へと向かうだろう。

ならば、そこに俺が居る理由などは、ない。

あるとするならば……、そう、プリカの言う通りだ。

「できることなら、神に会いたい、神の下で鍛えたい、……俺の好敵手の半身に会いたい」

「じゃ、仕方ないな」

「いいのか？ 会えたら、俺は三年ずっと神殿で修行することになるぞ、別にお前は困らんだろうが」

「オレは家の始末と作り直しに、今回のデータを踏まえての研究もある、仕事が多いんだ、行ってこい」

いつの間にやら顔を空に向けたプリカは、こころなしか大きめの声でそう言い放った。

まあ、俺が家に居ても、やれることは本人とメカのスパーリングパートナーしかない、むしろ食費と気苦労が減るだろう。

何も問題はない。

「じゃあ、俺はジャマだな、ちよつとくらい留守にした方が良さそうだ」

少しやけくそ気味な感情をぶつけるような言葉に、プリカは何も言い返さない。

心配はいらないと言ってくれているのか、本心だからなのか。

「……そろそろ出る、数日帰ってこなかったら、そのときは神殿だと思ってくれ」

「ああ、いってらっしゃい」

こうして俺と悟空はカリン塔へと向かい、神への面会を志願することになった。

潜在エネルギー、気、元氣、スピリット、戦闘力、キリ、そのように呼ばれる各種の力、エネルギー、あるいは存在。

それは万物に宿るエネルギーであり、あるいは、その存在や生命力

そのものであるともされる。

「飛ぶ、空を飛ぶ……」

俺は疑問を投げかけるように呟き、その言葉を飲み込む。

舞空術の飛行とはロケットのようにエネルギーを下方に噴射する反作用によって推力を得るもの『ではない』。

舞空術の飛行とはホバー・クラフトやミノフスキー・クラフトのように地面と自らを物体やフィールドで繋げ、それによって地面から離れるもの『ではない』。

舞空術の飛行とは飛行機や鳥のように空気を背後へと押し流す反作用と翼の揚力によって推力を得るもの『ではない』。

「おーい、ミソシルー！ どうしたんだー？」

空高くから悟空が呼ぶ。

実に楽しそうに、そして純粋に俺を心配する声色だ。

……俺は、ゆっくりと『力』を込め、自分の体を空中へと持ち上げた。

「まだ飛ぶのなれねえのか」

「仕方ないだろう、俺はお前らのように……」

「なんだ？」

「……かめはめ波とかは使えないからな」

もともと飛べる人種というわけではない、という言葉を読み込み、俺は当たり障りのない言葉を吐く。

そして、少しの気恥ずかしさをごまかすため、周囲を見渡ししてゆく。

平行に見渡せば青黒い空、少し下を見れば雲海、空気は薄く、日差しは地上よりも厳しい。

「かめはめ波が使えなくなっただって、ミソシルはあのビカビカ光ったりする技使えるだろう？」

「そうだな、もう少し鍛えれば、俺もうまく飛べるだろう」

「なんで飛べねえんだろうなあ」

舞空術、と呼ばれる一連の技術は、通常の物体が空を飛ぶ理屈とは全く違う原理で機能する。

体を構成するエネルギーそのものを、そのものが持つ、意思によって自由に動かすことのできる性質をもって動かすもの……と、呼べるかも分からない、きわめて体感的な原理で、空を飛ぶのだ。

……つまり、俺は理論派だからうまく新技術になじめないという話で、種族差だけのせいにするわけにはいかない。

悟空と同じく感覚派でサイヤ人のプリカは今頃、うまく飛んでいるのだろうか。

「ソシルミよ、まだ上手く舞空術を使いこなせぬか」

「ええ、仰る通りです、神様」

ふらふらとおっかなびつくり飛ぶ俺の元に、神様がやってくる。

……そう、神様。

「おぬしが気を用いた技を受け入れられずにおるのは、おそらく、気を未だに自らの物として受け入れられておらんからだろう」

俺達二人は今、天界に居た。

——ことは、予想以上に簡単に済んだ。

カリン塔に到着した俺達を、カリン様は温かく迎え、神殿行きにも同意してくれた。

『……いいのですか?』

『神様に会いたいんじゃない? 神と言えば実力者中の実力者で……おぬしと無関係ではないというのも、おぬしなら知っておるだろうし。』

心が読めずとも、分かるものは分かる、ということだ。

俺の精神は純粹ではない、と言おうとすると、カリン様は、心は純粹ならいいというものではないし、お前は自分で思っているより純粹で善良だ、と返してくれた。

買いかぶられている気がしないでもないが、悪い気もしない。

神殿への行き方はシンプルだ、カリン塔頂上部のソケットに如意棒を挿入し、伸ばせば、それがそのままエレベーターとなって神殿に到着する。

元の歴史であれば、ミスター・ポポが現れ、悟空をボコボコにして

鼻っ柱をへし折る、という流れになるのだが……。

『こい、神様が待っている』

『……何か、試練だとかは?』

『ない、おまえたち未熟だけど、じゅうぶん強い、それに、たくさん強いやついて、鍛えあつてる、あんしん』

ということらしい。

俺とプリカが参加したことによる些細な変化、と言った所だろうか。

後の流れはシンプルだ、神は、ドラゴンボールと神龍の復活と引き換えに、俺と悟空に、次の天下一武道会に現れるであろう、ピッコロの子供を倒すためという名目で三年間の修行を要求したのだ。

『地上の者たちの勇気と希望のために作ったドラゴンボールだが、皆、おのれの欲のためにしかつかわぬ……』

『……………はい』

『い、いや……おまえたちの使い方は少しはマシだったと思うぞ? 完全に自分のためだけではなかったわけだし……』

……フォローになっていないフォローとともに。

そして今、俺と悟空は神様の元で鍛錬の日々を送っている。

一般的な高地トレーニングによる心肺機能や効率のよい動きの鍛錬を始めとして、ヨガにも似たバランス修練、舞空術を中心とした『気』の操作訓練、そして、地球の古今東西の歴史や事物についての学習……。

「エイジ650年、第一回天下一武道会開催……以来開催日は当時の暦によって決定され……優勝者は……」

「すう………ぴい………」

空から帰った俺達は自由時間を与えられ、悟空は昼寝、俺は座学の復習に勤しんでいた。

「のんきな奴め、せっかく神の下へと迎えられたというのに」

悟空はぐっすりと寝て体を休める、俺はただ単に『体を動かしていない時間』としてこの時間をとらえている。

ひたすらにのんきに見える悟空は、次なる修行に備えているとも言

えた。

だが、やはり、学ぶことは楽しい、ここには様々な名著や、歴代の神々がしたためた、表に出ない歴史までもが所蔵されている。

プリカは科学や工学畑だが、俺はどちらかと言うと知識全般や生物学が好きなのだ。

「休んでもよいのだぞ、ソシルミ」

「身体は疲れていても、頭は疲れていませんから」

「……ソシルミよ、おまえは、優れた力と技、それに精神力と知識欲も持つておるし、自ら望むことと責任を果たすことの間釣り合いも取れておる」

「なんですか、藪から棒に」

「その果てにピッコロを倒したことは感謝している……だが、おまえはどうも、未来に対する考え方が甘い、そう感じざるをえんのだ」
未来に対する考え方。

「……多分、俺が未来に、漠然とした期待しか持たず、計画性というものがない、そんなことを、言っているのだろう。」

だが、その曖昧な希望こそが俺を鍛え、ついにはピッコロを倒すに至ったのだと、俺は思っていた。

「おまえが世を渡りきってピッコロを倒すに至ったのは決しておまえ一人で成したことではない、そこで寝ておる孫悟空やお前の師匠、そして、あのプリカという娘がおまえの道をただし、支えたからこそ」

「……確かに、そうかもしれない」

「そしておまえは、あの娘を始めとして、地上への執着を捨てられておらん、修行がうまく行かないと思っっているなら、そのせいだろうか」

「いえ、神様、プリカとは納得づくで別れたのです、私にはここで、プリカには地上で、やるべきことがある」

神様は、『そうか』とだけ答えて、俺のもとを去っていった。

……ちやうど、歴史書の項目は西の都の成り立ちに移っている、西の都で、プリカは今、何をしているだろうか。

しつかりと家を再建したのか、まだ手間取っているのか、また引き

こもりになって、言葉を忘れてはいないだろうか……。

モヤモヤする、イライラする、何か自分の中にたまっていくような感じだけど、何がたまってるのかはわからない。

そんなモヤモヤをなんとか趣味にぶつけようとするけど、やっぱり上手いかずに、オレはボリボリと頭をかき、情けないうめき声を吐き出した。

「あ、あ、あ……!! やっぱり軸と軸受の強度が足りなくて……いや、ギアも足りないか、機構で誤魔化すにも限界がある、でも流石に材料工学に踏み込むのは……でも、いつかは触らないと……」

構築中の鉄人拳八号の起動実験、ガチャガチャと動く鉄人拳から取れるデータは、鉄人拳の性能をこれ以上に向上させようとすれば、そもそも材質のレベルで改善が必要、という結果を表していた。

まるで、今はいない、この家には住んだことすらない同居人、あの相棒の愚痴みたいだ……と、少し失礼だけど、考えてしまう。

「カッチン鋼でもあればしばらくはもつんだろうけど、ないものねだりだよなあ……」

魔族に木っ端微塵にされた家の跡地は、しっかりと除染し、オレは、ブルマやピラフたちに手伝ってもらいながら新しい家を建てた。

自力……とは言いにくいけど、人間の手で建てた家には、前よりたくさんの機材や、チャパさんからもらった武器なんか所狭しと置かれていて、だいぶ賑やかだ。

「オレとロボットだけの楽しい我が家、買い出しとか言つて余計なもの買うやつもない」

そう、オレの同居人、武道バカのソシルミは今頃、この星の神様のところで修行していて、地上にはいないのだ。

「チャパさんからもらった武器も書物も、あいつがいなきや意味はなし、……まあ、あいつはもつといいことしてるんだろうけど」

この地球で一番の実力者、神様。

神様に修行を付けてもらえるってのは、格闘バカのあいつにとって一番幸せなことだろう。

オレが口出しすることじゃないし、しても、何の意味もない。

「……心配しなきゃいけないのは、オレのことだな、うん」

ドラゴンボールを集めてみんなを蘇らせてから、除染が終わって家が建って、内装も整ってくると、オレはめっきり出不精になった。

出不精と言っても、鍛錬はばっちりしているから運動不足の心配はない、心配なのは、言葉を忘れないか、だ。

わざとらしく独り言を呟いてでも口を動かしていないと、すぐにもあの森で発見されたときの野人状態になってしまう。

「帰ってきたソシルミに笑われたくないしな……」

だが、問題はそれだけじゃないし、もう一つの問題の方が、より大きかった。

……家の作業が終わったくらいからこつち、ずっと感じてる『モヤモヤ』だ。

多分、森に住んだ頃に感じていた感覚と同じ……いや、少し、違うニューアンスもあるけど、とにかく、モヤモヤするんだ。

「大猿になる……つてのも、ダメだしなあ、メタリックとかヤムチャとか借りて戦っても、全然ダメだったし」

モヤモヤはどうやっても消えない、森に居た頃は、大猿になれば消えたし、恐竜を思いっきり殴れば、ちよつとはマシにもなった。

今のは違う、メタリックを壊しかけても、ヤムチャやチャパさんと流血するまでスパリングしても収まらない。

「オレはサイヤ人だから戦いが好き、戦わないでいるとイライラする、でも、戦っても、モヤモヤは収まらない」

森を出てからこつち、モヤモヤしてきたらソシルミにスパリングを頼んでいた、サンドバッグを殴っても、少しはマシになった。

……今は、誰とやっても収まらない、モヤモヤは日に日に強まっていく。

原因として考えられるのは、オレに発生した一番の変化、つまり……。

「ソシルミが、いないこと……」

目を逸らしても逸らしきれない、たった一つの答え……仮説。

「……シヤクだけど、多分、それしかない」

オレはいつの間にか、作業を終え、工具をしまつて、旅支度を整えていた。

ただ、仮説を確かめるためなのかも、このモヤモヤを晴らすためかもわからないまま、オレは家を飛び出し、覚えたての舞空術で聖地力リンへと飛びはじめた。

針。

いわゆる針山地獄の針を一本抜き取ってきたと言えば想像しやすいだろう、大きく太い、しかし鋭い針。

その上に置いた人差し指に全体重をかけ、逆立ちの姿勢を保つ……それが、俺の今やっている修行だ。

精妙なバランス感覚と、エネルギーの一点集中さえ保たれていれば、針が指を貫くことはない。

「おまえ、動きと精神力はわるくない」

ミスター・ポポが俺を褒めるが、構っている余裕はない、この修業は半日続くのだ。

少しでも体力と思考力は温存せねばならない、むしろ、ポポはそれを分かつて茶々を入れに来ている。

時折見に来るポポをスルーして、ひたすら耐える、ただそれだけでいい、精神力を鍛えるというのはそういうこと——

「ん……!?!」

——ポポが小さく声を上げる、このような子供だましに乗ってはならない。

心をかき乱し、俺が失敗するのを待っているのだ。

だが、今度は調子が違った、ポポは何やら急いで飛び出していくし……何か、神殿の外の気配を感じる。

「来客か?」

まさか、プリカが俺に会いに来たのか?

いや、一番確立が高いのはプリカだが、会いに来る理由はない。

じゃあ誰だ、プリカだったなら、どうして……。
そこまで考えた時、指先に痛みが走った。

「痛ウ……」

指先に、1ミリか、2ミリか、針が突き刺さっている。

修行は失敗だ、俺は床に飛び降りた、……。いや、刺さったら失敗という条件はあったか？

焦って降りてしまった。

「……いや、何を焦っているんだ、俺は」

もし来客がプリカだったとして何を焦るんだ。

自分が何に焦っているのか分からない、まさか、修行をやめにしてまで、プリカを出迎えたいと思っているのか？

俺が若干の混乱を抱いていると、何やら、強力なプレッシャーが建物の外から流れ込んでくる！

流星に行くしかない、誰へともなく言い訳して、俺は建物の外が見えるイチにまで移動する。

すると、通路の向こうでは、ポポが構えて（と言っても直立だが）何者かと相対している光景があった。

ポポは冷や汗をかき、明らかに強敵と対峙している、プレッシャーは強まるばかりだ。

……この星にそんな強者がいるとすれば、魔族か、あるいは、プリカしかない。

「ミスター・ポポ、これは一体どういうことですかツツツ!!!」

「ソシルミ」

「ソシルミっ!!!」

小さく俺を呼ぶポポ、続いて、その数十倍の音量で俺を呼ぶ声！
聞き間違えるはずもない、プリカだ！

プリカは笑みを浮かべて俺を呼ぶ、それと同時に、あのプレッシャーも収まった。

「なんだ、何かすごい技を使っていたようだが、やめたのか？」

「あ、あーいや、技ってほどじゃないんだ、はは」

プリカは何か顔を赤くしながら頭を掻く、技に何か恥じるべき所で

もあるのだろうか。

「それで、どうしてここに？」

「……大した用事じゃない、おまえがどうしてるのか気になったんだ」

「見ての通り、ここで修行してるよ、お前はどうかだ、プリカ」

「仕事は全部済んだ、家もバツチりだ、建て替え祝い、チャパさんから色々貰ったから、楽しみにしとけ」

近況報告のようになってしまった会話を、ポポは横から、じーっと見ている。

やりにくい……というか、どうして黙って見ているんだ？

「うれしそうだな、ソシルミ」

「嬉しい……そうか、まあ、久々に会えたんだし、それはしようがないでしょう」

ポポは、まるでため息をつくように小さく沈黙し、俺とプリカを交互に見て、非難めいた声をあげた。

「そいつ、神殿によこしまな理由で入ろうとした」

「よ、よこしまって……」

「おまえ、自分でわかっていないのか」

ポポに『何か』を指摘されたプリカは何やら、固まって、激しく頭を掻いてあちこちと、こちらをチラチラ見てくる。

こういう、プリカの感情が行き詰まった時に発揮されるヘンな仕草を見るのも久しぶりだ。

懐かしいというか、独特の味があるな。

しばらく、それを眺めていると、神殿内部から神様がやってきた。

「ポポ、ふさわしくない者が来たなら、なぜ早く追い出さなのだ」

「神様、追出す必要はない、多分、帰れって言ったら帰ると思う」

「ふむ……ポポが言うならばそうなのだろう、では早く帰れ、プリカ、ここはおまえの居るべき場所ではない」

「神様、ちよっとお水でも飲みましょう、ソシルミ、プリカを帰しておけ」

「な、なんだポポ、いきなり水などと、喉は乾いておらんぞ!」

半ば強引に神様を神殿に引つ張っていくポポ。

ポポが神様にあんな態度を取っているのは初めてだ、一体何が起きている、俺達を二人にしてくれるつもりなのか？

そして、俺の混乱をよそに、プリカは神殿から飛び降りようとしていた。

「じゃあ、オレは帰る、ちゃんと修行してるみたいで、安心した」

「待て待て！ 多分、ポポはちよつとくらい話していいって言ってくれたんだぞ、ちよつと話していけ」

「話すつて、なんだ？ 鉄人拳八号の技術的課題なんて聞いても困るだろ」

「例えば……ここに来た本当の理由、とか」

俺がそう言うのと、プリカは目を丸くして身体をすくめ、それから、またあちこちを頭をかいて、うーうー言う、まるで4年前のようなモーシヨンの後、小さく呟いた。

「……モヤモヤするんだ」

「モヤモヤ？」

「昔、森に居た頃、オレはずっとモヤモヤしてた、モヤモヤしたら大猿になったり、恐竜を殴ったりして発散してた、おまえが連れ出してくれてからは、モヤモヤしなかった、でも、今はまた、モヤモヤする、誰とスパーリングしても、なくならないんだ」

「闘争本能か」

サイヤ人がモヤモヤして、大猿になったり恐竜を殴ったりすれば収まるものと言えば、闘争本能だろう。

だが、プリカは何故か俺から目を逸らして、『違う』と言った。

「た、多分違う、闘争本能じゃない」

「では、なんだ？」

「……オレがここに来る時、ちゃんとカリン様に挨拶したんだ、カリン様は、ちよつとイヤそうにしながら、オレがここに来てもいいって言ってくれた」

「脅したんじゃないだろうな」

俺が冗談めかして言った言葉を否定せず、プリカは言葉を続ける。

……流石に脅したというわけではなく、ただ、否定しにくい程に、圧を出してしまったとか、そういうことだろう。

「いいって言われて、おまえに会えるって思ったら、なんだか気分がよくなって、モヤモヤはほとんどなくなったんだ」

いや、待て、今何を言ったんだ!?

俺に会えるからとか、そんな直球の事を言うやつだったか、こいつは。

俺だって、こいつと浅からぬ縁があるからこそ同じ家に住んでいるわけだが、こんなあけすけに言われるとなると……!」

「おまえも赤くなるんだな」

「俺をなんだと思ってるんだ」

「聞かないとわかんないのか?」

分からん、と、答えようとしたが、分かるような気もするのでどうにもならない。

話題を逸らすのも何か負けたような気がする、こうなれば、同じ話題のまま進むしかないだろう。

「それで、プリカ、……その、今は……」

「ソシルミはどうだ、オレと別れてから、どう思った? あんな適当に決めちゃってさ」

「は!? それは、だな……」

いかん、何だか分からんが、俺は今猛烈なピンチにあるらしい。だが、それでも俺は、この会話から逃げる気にはなれないのだ。

「……不安だった、お前をもう一度一人にってしまったと思って、んでもないことをしたんじゃないかと思った」

「大げさだな」

プリカは否定しながらも、どこか嬉しそうだ。

「そうかもな、でも、間違いじゃなかった」

「それで『おまえ』はどうだ、オレのことじゃなくて」

「俺は……寂しかったさ」

師匠でも、世話役でも、兄弟弟子でもない。

隣で鍛えて、たまに教えあつて、たまにスパarringして、普段は

わけのわからない機械を弄って、たまに俺に見せてくれる。

そんなプリカが居た日々は、俺にとって、自分で思う以上に楽しかったのだ。

「そっか、……オレのモヤモヤは、なくなったよ」

「なら、良かった」

「おまえの『その』顔を見れたからだな」

「おい、そりやどういことだ？」

プリカはこちらを見ないまま領いて、神殿のフチに歩きはじめた。

「オレは帰る、武道会の日におおう、カリン塔までは迎えに来てやる」

「もういいのか」

「ああ、もういい、またな」

振り返ってニカッと笑って、そのまま下界へと飛び込んでいく。プリカは……。

……なんだか、いい顔をしていた。

↓つづく

第三十二話：転生地球人が魔なるものと相対すまで

優雅に空を舞う個人用のジェット機、そのコックピットにはロボットが鎮座し、座席には一人の若い女が座っていた。

俺はこの女のことを知っている！

いや、この黒髪としつぽ、濃密なパワーと芋ジャージを知っている！！

「プリカ、久しぶりだなッツ！」

『——！?』

ということ、ジェットと速度を合わせ、等速で背後に向けて飛びながら挨拶をしかけた。

夕暮れ空の中、地平の果てまで広がる広葉樹林の上、優雅に飛ぶジェット……に、ピッタリと張り付いて飛ぶ生身の俺。

機内では目を丸くしたプリカがワタワタと要領を得ないハンドシグナルを始めたが……。

当然、理解できないので、俺はハッチを叩いてアピールする。

「着陸はいい！　ここで乗り込む!!　開けてくれッ!!」

しばらく叩いていると、プリカの迷い、もしくは混乱を表すようなしばしの沈黙の後ハッチが開く。

「おまつ!!　おまえっ！　バカ!!」

「入るぞ、速度下げないから風が吹き込んでるじゃないか」

俺はハッチ近くの広めになった場所に立って、高高度で付着した氷を払う。

いつもの袈裟の上にマントを着てきてよかった。

「久しぶりだな、お前も、随分でかくなった」

「……イヤミか、そんなデカくなつていて」

「俺は5センチしか伸びなかつたんだぞ」

マントをパタパタとやっていると、プリカが近づいてきて背伸びしながら雪を払うのを手伝ってくれた。

プリカの身長は目測で150センチ前後、俺は190といったところか。

あの範馬勇次郎と同身長、もつと高くなってくれても良かったが、いい感じだ。

「くそ、首が痛くなる」

「大丈夫だ、神様の相手をすれば俺もお前も等しく首が痛い」

神様は異様に身長が高い、250センチもある身長は、ジャック・ハンマーの言った『身体能力を維持したまま伸ばせる身長の上限』を上回っているのだ。

プリカはそんな俺の慰め(?)を無視して、なつかしきジト目で俺を見上げた。

サイヤ人の肉体がもたらす遅めの成長期を越えたプリカは、かつての子供の顔から、……まあ、やはり童顔の範囲で、だいぶ大人びた顔つきになっている。

「結局、あの頃と身長差はあまり変わらなかったな」

それと、仕草も。

そんな訳のわからない、密かな好感を隠して、つぶやく。

「どの頃だ」

「森で出会った頃だ」

7年の月日を経て、160いくつかだった俺の身長は190センチに伸び、プリカの12歳女子にしては発育の良くなかった身長は、やはり、150センチの、あまり発育の良くないところに収まった。

……とはいえこの場合、発育が良くないというのは、慣用語ではない。

顔つきに骨格、肉付き(断じて、筋肉のことだ、断じて!)については、ほぼ完全に成人らしいものになっている。

「なんだ、おい、あんまジロジロ見るなよ」

「あ、ああ……」

プリカは恥ずかし気に顔をそむけ、わざとらしく周囲に散らばった氷や水を拭き始めた。

いかん、ガラにもなく舞い上がっている、……まあ、何しろ3年ぶりの再会なのだ。

俺は高揚を収めるため、あるいはごまかすため、その3年間ずっと

気になっていたことを聞くことにした。

「それで、プリカ、犠牲者の復活は無事に完了したのか？」

「とりあえず、チャパさんに道場のみんな、亀仙人に鶴仙人は復活したよ」

「ヤムチャとチャオズはどうした、それと、民間人や軍人は？」

「それは後で話すけど、みんなちゃんと黄泉帰った、願いはしつかり練って工夫したから、偵察のためにうろついてたやつなんかには殺された分も大丈夫」

そういつて、プリカは胸を張る。

——プリカの話によると、あの天下一武道会の裏で殺されたのは俺の同門ばかりではなかった、らしい。

魔族の偵察部隊はあちこちに現れて被害をもたらしていたのだ。

パイヤ島でも、強力な魔族に殺された武道家がいたらしく、その被害に動揺したスタッフ達の心を読んで不穏なものを感じた亀仙人が、密かに対魔族戦の準備を始めていた……。

というのが、あの日に起こったことの真相、というわけだ。

「それで俺は観戦を邪魔されたというわけだな」

「まだ根に持つてるのか」

「冗談だ」

俺の否定を前に、プリカは疑うでもなく、わざと聞いたただけだ、と答え、さらにあの日の話をしてくれた。

「それじゃあ、クリリン達を救ったのは、戦いの土埃つてところか」

「ロマンチックな言い方だな……まあ、そうなんじゃないか？」

むろんこれは、『消える魔球』よろしく、土埃の煙幕、迷彩効果によって逃れたという話ではない。

ランチのクシヤマを誘ったという意味である。

金髪の『いただきランチ』はそのバイタリテイでクリリン達を扇動し島から脱出、そのまま抵抗戦を繰り返して中の都に突入しのだ。

「……生身の人間が役に立つとは、分らんもんだな」

「武道家つても、クリリンは格闘技やつてるだけの普通の子供だ」

「ああ、ちゃんと戦えるやつが居るといえないのとじゃ、違うだろ

う」

その後、同じく魔族と一戦交え、魔族を捕食するために行動していたヤジロベーと利害の一致から合流したクリリン達は、中の都で転戦し、最後には負傷者を連れて西の都へと帰っていったらしい。

「ヤジロベーはどうしたんだ？」

「どっかに居るんじゃないか、仙豆を食われなくなったのはいいけど、ちよつと寂しいかもな」

「必要になったらリクルートすればいいさ」

「確か、今日の天下一武道会には、出てたよな」

妙な会話をわざと振ってくるプリカ、俺は合わせて答える。

「ああ、予選敗退のはずだ」

「……神様もいて、今回の武道会、枠足りないんじゃないか？」

「俺は出るぞ、お前は出ないのか？」

「おい、チチと悟空が結婚出来なかったら地球はどうなるんだ、もつと真剣に……」

プリカは顔をしかめる、こればかりは譲る気がないらしい。

互いに主義の違う俺達二人はこれからもこうしてぶつかっていくのだろう。

3年の離別が終わって、また、ぶつかり合う日々が始まるのだ。

「わかった、その話は後でしょう、……それで、ヤムチャとプーアルは、どうして生き残ったんだ？」

再会の興奮のままに喧嘩するのももったいない、そう思った俺は、一度話を戻すことにした。

「二人とも、ヤムチャの命令とプーアルの機転で助かって、病院の地下室に隠れたらしい」

「地下、放射線科あたりか」

「それで、地上を襲った攻撃に巻き込まれずに済んだって、ヤムチャが自慢してたよ、天津飯も喜んでた」

子分の活躍を喜べる親分はいいものだ。

「これで3年前に出来た謎はあらかた解決したことになるな」
「いや、まだ残ってるぞ、ピッコロから逃げる時の――」

話しながら、俺はぼんやりと夕暮れの風景を眺めていた。

下は、カリン塔が近かった時の広葉樹林から、ありがちな荒野に移り変わっている。

だが、何しろ天界では雲海しか見えないのだ、つまらない地上の荒地地も、久々なら新鮮だ。

時差のため、ちようどいい時間に到着するには妙な時間に出発しなくてはならないのだ……ん？

「……おい、プリカ、ちよつとコックピット見せろ」

「なんだ？ このあたりは雲一つないぞ」

「違う、もう大分移動したはずだ、なのに、この経度でこの時間帯に夕暮れだとツツ……!?!」

「わかるのか」

わかる、俺は神とポポに後継者としても見込まれ、教えを受けたのだ。

時間帯に合わない夕暮れが起きる現象を脳内でリストアップしようとしたとき——機体に衝撃が走った！

「うわっ!!」

「攻撃か、やはり……!!」

俺は急いで窓を見る、いや、それ以前に感じる悪寒、これは感じ慣れた……魔族だ！

実際に見れば、異様な夕暮れ空を更に塗りつぶす、雲霞の如き黒点、魔族の軍団!!

「魔族の攻撃だ、プリカ、脱出準備!!」

「く、来るぞ、ミサイル!」

レーダーには、四方八方から迫るミサイル、俺とプリカは着席し、ベルトの着用もそこに脱出装置を起動した。

起動音の中、俺は眩かすにはいられない。

「しかしプリカ……これで俺は3度目だぞ、人生で3度も飛行機で墜落するなんて、そんなやつ……」

「どうしておまえは落ちるとき無駄口叩くんだ!!」

上方に射出された座席を振り払い、俺とプリカは夕暮れ色の空に滞空する。

夕暮れの色、魔族、前世の記憶にひっかかる状況ではあるが、それより……。

「まさか、このタイミングで襲撃とはな、いや、このタイミングだからこそと言うべきか」

天下一武道会で、孫悟空、ピッコロ、神といった地球上の大物がかかりきりの今だからこそ、俺達を襲う意味がある。

……何故、俺達などを襲うかは、分からないが。

「天下一武道会、楽しみだったただけではない、約束も、いくつも……！」

「言つてたつて仕方ない、どうする、ソシルミ」

「叩き潰す、それ以外にあるまい」

まさしく雲霞のごとく、魔族が7分で空が3分……は誇張しすぎかもしれないが、体感ではそれくらいある。

そんな魔族の群れを前に、俺はわざと、俺とお前ならやれると宣言するように宣言した。

容赦する理由も余裕もない、邪気と殺意にまみれ、知性に欠ける魔族ども。

それでも、殺しは気分よくないのだが。

「多分これで、魔族との戦いも終わりだからな」

「……そうか、歴史の流れで言うと、次は5年後、『Z』の時代か」
修行に出る前でもめつたに話題に登らなくなっていたようなことを、プリカは言う。

地球での戦い、同じ地球に住む生き物同士での戦いは、これが多分、最後なのだ。

7年間続いた冒険の日々、その終わりが、近づいていた。

「それで、具体的にはどうするんだ？」

「プリカッツ!!」

「おう、ソシルミ!!」

答えを放棄して、俺はプリカを呼ぶ。

答えになっっていない答えを受け取って、プリカは俺を呼ぶ。

たった二言のやり取りでやりたいこと分かる……はずはないが、俺達は無理にでも合わせたい気分だった。

プリカは、一切周囲のことを気にせず、莫大なエネルギーを蓄え、俺は空中で構え、全周囲に気を貼る。

「ぐ、ぐぎ……が……!!!」

「やられるだけの雑兵を、よくもここまで集めたものだ」

プリカが呻き始めた瞬間、空を覆う黒い群れが、魚群か、はたまたシャンプーのムラのようにうねる。

不穏な気配を察したのか、ただただ俺達を押し潰せると踏んだのか、周りの魔族どもは俺達の全周囲を包むように銃砲を構えた。

同士討ちの危険を無視しているかのような行為だが……その判断は正しい、『気を貯める』行為は即ち、全身のエネルギーを収束させること、その収束度合いが高ければ高いほど、必然的に体は無防備になるのだ。

「死ねえーっ!!」

「クケケケケーっ!」

大小、種類様々な弾丸、砲弾、矢玉が迫る、空中ではキレのあるステップを踏むことはできず、五体のみでプリカを守ることはできない。

……であるから、技を使う。

「ラカアツツ!!」

俺は手足を振るい、空気を歪ませる。

空気の歪み、ソニックブームは俺が狙った通りに広がり、迫る弾丸の機動を歪め、ミサイルを砕く!

後は、悠々と舞空術で気ままに飛び回り、プリカを守ればいいのだ。

「できた、ソシルミ、当たるなよ!!」

「合点承知ツ!!」

「つがあああ!! スター・ブラック・バイナリー!!」

プリカは右手から巨大な気弾を吐き出し、更に、気弾と自らをもやのようなエネルギーで覆った。

そして、プリカはそのまま砲丸投げのように気弾を振り回し始めた！！

「当たるなってこういうことかツツ!!」

「だああああ!! ずああああああ!!」

「よ、避けられ……ぐげえー!!」

強力で巨大な気弾がぶんぶん振り回され、魔族の群れを飲み込んでゆく!

名前の通り、バイナリ・スター・モーニングの発展もしくは応用系。試合のためではなく、気弾を使わぬ（使えぬ）俺が防御に回り、チャージ中のプリカを守り切ることを前提とした対集団戦用の必殺技だ!!

「まるで空間に消しゴムでもかけてるようだな、このまま続けられるなら大分——」

悪寒、急速接近、狙いは……プリカだ!!

「プリカツツツ!!」

「おが……わっ!!」

俺はプリカに抱きつくようにタックルを食らわせ、数メートル位置をずらす。

エネルギーの塊は機動を外れて遠くの地面に炸裂したが、構ってられない。

「あら、避けられちゃった」

聞き覚えのある声がある。

顔を上げれば、そこに居たのは、見覚えのあるオカマ、オカマの魔族だった。

俺は奇襲の動揺と回避の達成感を隠すように、事も無げに言い放つ。

「男子三日会わざれば刮目して見よ、それが三年だぞ?」

「穢らわしい、神とあの黒いのによく鍛えられたようね」

オカマの魔族。

深いミント色の皮膚、かきあげた白髪、尖った耳、その装いは古代とも世紀末とも付かぬ奇妙な戦装束。

ローブを着込まぬ今、その影の正体が俺にははつきりと分かった。

「ガーリックJr.の手のものツッツ!!」

「ガーリック三人衆、ニツキー!」

オカマ、いや、ニツキーは訂正するように名乗りを上げた。

「ニツキー、なにか、聞いたような……」

「ああ、俺にも聞き覚えがある」

「あら、よく調べているわね」

ガーリック三人衆、ニツキー!!

その存在を明確に認識した瞬間、かつてこの世界の住民ではなく、この世界のオタクであった俺の記憶と知識が呼び覚まされる。

ニツキーは、ドラゴンボールZ最初の映画、(タイトルもそのまま『ドラゴンボールZ』、後にサブタイトルが追加された)の、いわゆる中ボスだ。

映画『ドラゴンボールZ』は所謂『ラディッツ編』をベースとした映画であり、話の筋もそれをなぞっている。

かつて今の神と神の座を争った魔族、ガーリックの息子であり、一種の生まれ変わりでもあるガーリックJr.は手下のガーリック三人衆とともにピッコロ(大魔王ではなく、生まれ変わりだ)を襲撃し神を抹殺、更にドラゴンボールを収集し、自らを不老不死にする計画を立て、実行に移す。

だが、その過程で悟空の息子、悟飯を『ボールごと』拉致してしまい、それを助けるためにやってきた悟空とクリリン、そして実は生きていた神とピッコロの攻撃にあう……というシナリオだ。

見どころはドラゴンボールZ初期映画独特の、文字通り地に足が付いた地上戦、武器を併用しての戦い、他媒体含めほとんど見られない地球の神の活躍シーン、魔族達のどこかコミカルなキャラクター性と戦い(目の前に居る俺はそれぞれではないが)、辺りだろうか。

ガーリックJr.の目的と行動に複数の齟齬があったりと、かなりツツコミどころの多い映画だが、上映時間が短い分、後の作品群に対して濃縮された展開と良好なテンポ、『ドラゴンボール』から『ドラゴンボールZ』へと移る過渡期の戦闘描写や設定、雰囲気などはとにかく

く魅力的だ。

「ソシルミ、こんな時になに思い出してるんだ」

「そうよ、なに寝ぼけちゃってんのよ」

「あ、すまん」

「7年ぶりだな、それ」

……ドラゴンボールZの歴史は今から5年後に始まる、つまり、ニツキーとガーリック三人衆、そして、裏にいるガーリックJr.は本来は5年も先に現れるはずの魔族だ。

大きな戦いの発生しない時期とはいえ、5年の月日はあまりにも大きい、俺とプリカは戦い抜くことができるだろうか。

だが、ニツキーがもたらすものは脅威だけではない——

「——タンドール王国を襲撃し、ピラフを恫喝したのは貴様だな」

「その通り、弱っちい奴らで簡単だったわよ」

「プリカ、周りの連中は頼んだ」

「……わかった、ソシルミ、がんばれよ」

プリカは物分りよく俺を応援してくれている、大丈夫だ、俺も腕を上げた……!!

我が同門の命を奪い、間接的に、師や無関係の多数の人間達の命を奪った存在。

そして、ピッコロ大魔王の封印、俺とピッコロ大魔王の試合、あらゆるものを妨害し続けた、まさしく 因縁の敵が、目の前に居る！

「ゆくぞ、ニツキーツツ!!」

「相手してあげるわ!!」

その言葉とともに、ひと息に降下するニツキー、それを追ってゆっくりと着陸する俺。

まずはスタンダードな地上戦で腕試しをしようというわけだ。

「あなた3年前は飛べなかったものね、まだ慣れていないんでしょ？」

「やってみれば分かる、だが、今はこの戦いを楽しもう」

軍勢の始末を任せたプリカには悪いが、やはり、俺はこういうのが

性に合っている。

強大な敵と楽しみながら戦い、カタを付ける、戦うならば、それが一番いい。

だが、当のニツキーは、俺が楽しんでるのは不満なようだ。

「生意気ね!!」

荒野を踏み碎き、飛び込んでくるニツキー!

俺達は素手と素手を握りあい、4つの形になって力を試し合う。

パワーは……ニツキーが上か!

「流石は魔族ツツ!!」

「人間にしてはやるようだけど、これで負けちゃうようじゃねえ……!」

またしてもパワー負け、今後が思いやれるが、これはいつものことだ。

そして、同じパワー負けにしても、あの日戦った大魔王の、心技体全て揃った恐ろしさには及ばない。

ならば、いかようにでも戦えるというもの、俺は握り込んだまま手を輝かせる、目的は硬質化ではなく、パワーの増幅!

「まさか、こんなことまでっ!?!」

「刮目して見よと言ったはずだツツ!!」

ニツキーの手をミシミシと握り込み、握りつぶさんばかりに締め付けると、たまらず蹴りが放たれる。

まるで指相撲に負けかけの子供のように暴れるニツキーだが、その威力と技量はまさしく大魔族!

手に負えなくなつた俺は両手を開放し、土産に蹴りを叩き込んでニツキーを吹き飛ばした。

「これで分かっただろう、技を残しているようじゃあ、3年の修行を経た俺には勝てん」

「随分と余裕なこと」

「出し惜しみはまどろっこしいというだけだ」

「後悔するわよ………ノドアメーっつ!!!」

甲高い叫びとともに満身に力を込めるニツキー!

次に、体が一段膨れ上がり、その内包するエネルギーも一段増す。いわゆる変身、それも、ただの変形やギアチェンジのようなものではない、普段は抑え込んでいるパワーを開放するための変身だ！ただでさえ手に余る程のパワーが更に増したというのに、俺は興奮を抑えきれない。

その興奮を抑えきれないということそのものが、さらに楽しい。

「随分と男前になったじゃねえかツツツ!!」

「嬉しくないわよっ!!」

不意を打つような飛び込み——膝蹴り!!

命中すればただでは済まぬそれを、スウエー、否、ブリッジの形で回避し、舞空術の応用で倒立。

腕を曲げた逆立ちから、全身のバネと舞空術の瞬発力でニツキーを上方へと蹴り飛ばす！

吹き飛んだニツキーは空中で態勢を立て直し、ビームの構えだ……が。

「そんなちゃんけな技が俺に通用するかツツツ!!!」

「まどろっこしいのは嫌いなんですよ？ さっさと上がってきなさい」

さもなれば、爆撃でもしてやろうか、とばかりに、大玉の気弾を作り出すニツキー。

爆撃など、いくらされても荒野が更に荒れるだけだが、その通り、まどろっこしいのは好きじゃない。

「乗ってやろうツツ!!」

「そう来ると思ってたわ!!」

気弾を投擲するニツキー、俺は気弾の爆発を防ぐため、輝く手の防御と戦いの中で培った技術でそつと、しかし、しっかりと逸らす。

俺は飛び上がる勢いをそのままに舞空術を発動、空中に舞い上がった。

この惑星において数百年ぶり、俺にとっては初めての『空中戦』の幕が上がる。

初めての戦い、新しい力の開放……、久々の、だが、何度やっても

飽きない瞬間が来る!!

「トアアアアツツツ!!」

「ひゃああああ!!」

俺とニツキーは激しく手足を交わし、離れては突撃を繰り返す。

地上の戦いとはまるで勝手が違う、地上であれば、仕掛けたい技もないのにわざわざ敵から離れるようなことはしない。

「なるほど、これが空中戦かツツ!!」

「あら、初めてにしてはスジがいいよね……!」

舞空術がもたらす力は踏ん張りとは似て非なるもの、全身を等しく移動させる一方でステップほどの鋭さのないそのパワーを生かすには、突撃か、固定されたまま手足を振るって敵に叩き付けるような戦い方が基本となる。

即ち、連撃と激しい移動によるかち合いが戦闘のキモ。

だが――

「俺がただ、新しい技に慣れ親しむなんてことはありえないなツツ!!」

「何をしてくれるって言うのかしらっ!」

「こういうことを、さ!!」

俺は意識して動きを変える。

舞空術の動きを、いちいち止まったり加速を付けたりする動きではなく、舞空術そのものに慣性を持たせ、身体の持つ慣性と組み合わせる加速状態を常に維持し続けるのだ。

連撃はその勢いを崩さぬままに鋭さを増し、幻惑は拳を鈍らせぬままに数を増やす。

この技術こそ、3年の訓練の最大成果の一つ!!

「き、器用なことするじゃないの!!」

「器用は大得意だともツツ!!」

3年前、神様は俺に、気の技を自らのものにしていないと言った。だが、我が物にしていけないからこそ得られる見える世界が、使える技がある。

大きな戦いが無くとも、最大の友の目が無くとも、それを忘れる俺

ではない。

強化された連撃を前に怯むニツキー、その隙を見逃さず、俺は全身を激しく回転させ、その勢いのままに回転踵落としを叩きつける!!

「チエエリアアツツツ!!!」

「きやあああつ!!!」

ニツキーが地面に激突し、もうもうと煙が上がる。

終わった……わけではない、まだ気は収まっていない、だが、趨勢はこちらに傾いた、後は決着を付けるのみ。

周りを見渡せば、すでに魔族の姿はない、プリカが全滅させたか、あるいは逃げ出したか……。

「ソシルミー… そつちも済んだのか!？」

プリカが叫ぶのと同時に、俺の背後から悪寒がやってきた!

それを避け、プリカに向き直れば、あちらも何者かからの攻撃を避け、体勢を崩していた、これは……!!

「シヨウガヤキーつ!!!」

「ウナジューつ!!!」

背後からけたたましい叫び、パワーの本流。

身体をむくむくとふくらませる、深緑とねずみ色の魔族……ジンジャーに、サンシヨ!!

「これで……3対1ね!!」

ミント色のオカマ、ニツキー。

深緑の小男、ジンジャー。

ねずみ色の巨漢、サンシヨ。

勢揃いしたガーリックク三人衆は、それぞれ莫大なパワーと邪気を持って、俺達をねめつける。

これは……まずいか。

「すまんプリカ、遊びすぎたかもしれない」

「……分担は間違ってたかと思う、気に病むな」

俺の強がりにはプリカは慰めを返すが、俺には別のものも見えていた。

俺は一人でニツキーに挑んだ、それは正しかったか?

結果はこれだ、一人で戦いを挑んだ結果、ニツキーを仕留めきる事はできず、敵に合流を許してしまった。

「あら、二人とも、ガーリックJr. 様は？」

「わかんねえ」

「あのお方には別の用があるのかもしれない、神もピツコロも天下一武道会にかかりきりのはずなんだが……」

3対2、1体ずつならば優勢になれる俺達と言えど、更に一人加われば、敵方の戦術の幅の拡大は測り知れないものがある。

これは、予測できたはずだ。

……判断を軽率にしたのは、恨みではないか？

そうだ、かつて起こされた惨劇の復讐をする、仇を討つ、それは傍目に見て、正当性のあるもの。

だが、その正当な感情は……しかし、俺が本来選り取るようなものではないのだ。

「俺がやりたい、なんて欲は、本来うまそうな好敵手だけに抱けばいいものを……」

「何をぶつぶつ言ってるやがる!!」

ねずみ色の巨漢、サンショが俺に飛び込む、それが、戦闘再開の合図だった！

「づあああつ!!」

「ハアーツツツ!!」

見るからに頭の回っていない単純な動きは簡単に捌けるもの、だが

「抜け駆けは駄目よ!!」

サンショの大振りな攻撃を回避した体勢では、ニツキーの攻撃を避けるのは困難!!

流星に、二人がかりで平気でいられる実力差ではない、こちらも二人で望みたいところだが……。

「すまんソシルミ、オレもかかりつきりだ!!」

深緑の小男、ジンジャーがプリカに張り付き、俺を助けさせぬようにしている。

分断されたことを悟ったその時、二人が異様な力を込めて、自らの身体に付いた巨大なイボかつノのような器官を掴み、気合とともに引き抜いた！

「かあああああつ!!!」

「ごおおお!!!」

そのイボは白刃へと変わり、剣のようにその手に収まった。

これこそ、ガリック三人衆が持つ最大のインチキ技、しかも、目の当たりにすれば更にその危険度が分かる。

肉体から直接作り出された刃は、自らのエネルギーと馴染み、しかも本物の剣と同等かそれ以上に堅く、鋭い！

「ひやははは!!」

「きええええい!!!」

「—— ツツツ!!!」

『輝く手』の最大強度、舞空術を用いた自由自在な挙動、それらを保持してはもなお……！

「グツツツ……!!!」

「そろそろ限界のようね、流石に二人がかりじゃこんなものかしら」

「へへ、いくぞニツキー!!」

「そうね、サンショ!!」

輝きがあれば、俺の手は鉄よりも硬くなる、だが、敵の剣はもとより鉄より堅く、本人のパワーも上乘せされ、技など無くとも斬鉄を可能とするレベルに達しているのだ。

頬、髪、僧衣に切り傷が刻まれ、剣を防いだ手の骨がきしむ。

反撃を可能とするだけの材料は見いだせない、このままでは——

「ひいああああ!!!」

「ずええええい!!!」

並んで迫る魔族、一人だけならば、気力大移動で出し抜ける。

二人ではどうにもならない、数の力は意識したことがなかったが

……！

「ツアアーツツツ!! ギイツ……!」

俺の身体に更に傷が刻まれる、今更武器を出そうにも隙はない。どうすればいい、奇跡も今は品切れだ。

「終わりだーっ!!」

「まだ、元氣いっぱいだぜツツ!!」

「強がっちゃって、無理よ、諦めなさい!!」

目の前から振り下ろされる直剣、かくなる上は、腕の一本や二本、犠牲にしても刺し違えるしか――

「もらったわ――ふへっ!!」

その時、俺をあざ笑っていたはずのニツキーが、突然、間抜けな声を上げた。

急いで目をやれば、ニツキーの身体を覆う、硬質な粘液としか表現できない、奇妙な物体。

「へっへっへ……クソ魔族!!! 借りは返させて貰ったぜ!!!」

周囲を見れば、俺達からすれば極めてか細い気配を持った獣人。

青紫とくすんだ緑に彩られた、超肉厚の翼竜――

「ギラン!!」

プリカが叫ぶ。

「ケダモノの技の味はどうだい、じゃ、アバヨ!!!」

それとともに、高速で滑空し、逃げ去っていくギラン。

「はっ!!」

思わず俺も声を出す、ギラン、ギランがなぜ!?

俺が困惑している間にも、魔族は動く、その邪悪さ故に、仲間ではなく、敵へと向かって!

「て、テメエよくもニツキーに汚えモンを!! ぶっ殺して――

グギっ!!」

その直後には、俺の輝く拳がサンシヨの首根っこを掴んでいた。

「余所見だぜ、サンシヨ!!」

「な、なんてこと!!」

俺はそのまま輝く手に出力を集中し、サンシヨをねじ切る。

拘束されたニツキーを殺すのは気が進まないが、ギランを殺しにかかったサンシヨは別だ。

……それでも決して気分は良くないのだが、ギランの復讐を悲しみで上塗りするつもりもない。

俺は空元気気味に気合を入れて、叫ぶ！

「そのグルグルガムが解けたと同時に、仕掛ける、かかってこい、ニツキー!!」

俺とプリカは穴を掘り、ジンジャー、ニツキー、サンシヨの死体を埋める。

魔族とはいえ、弔いはあつてしかるべきだ。

「……三人がかり、息のあったコンビネーション、5年後の悟空達には容易い相手だが……強敵だった」

「やっぱ、おまえも思い出したんだな、映画のこと」

「ああ、だが、まさかギランがやってくるとは」

「……あれは、オレも驚いた」

あの後、なんとかギランを捕まえて聞き出したところ、ギランは天下一武道会が襲撃される前に魔族に襲われ、殺されていたらしい。

(というか、俺達については『顔も見たくない』ようで、それしか聞き出せなかった)

多分、あの天下一武道会の裏で殺された武道家とは、ギランのことだったんだろう。

そして、ギランはその屈辱を、黄泉帰った後もずっと忘れずに覚えていたのだ。

仇について調べ上げ、いつか復讐する機会を待って、それが今日、この日だった。

「敵わずとも、一矢は報いる……あいつもまた、過去の敗北と向き合う、一人の戦士だったとうことだ」

俺がギランを褒めそやすと、プリカは露骨に明るい顔を見せてみた。

対戦相手の成長、あるいは成功を喜ぶとは、まるで俺のようだ。

——遠くの空に、邪悪な気配がする。

「来るぞ、プリカ」

「ああ、……これで、魔族との戦いも終わりか」

本当ならば5年後に復活するはずのガーリックが、何故、今。

奴が遅れてやってきたのは、何故だ。

そんな疑問は尽きないが、ただ一つ、俺の胸には肯定的な感情もあつた。

何一つプリカに遠慮すべきことなどない、本来存在しないはずの歴史。

そんな歴史の中、二人でひと暴れできるのなら……天下一武道会に参加できず、こんなところで戦うのも、悪くない。

↓つづく

第三十三話：転生地球人が摩訶不思議な冒険を終えるまで

女の胴程の太さの腕を持つボディビルダー、そのボディビルダーの胴ほどの太さを持った、暗い青緑色の腕。

その拳が激突したならば、戦艦の装甲であろうとも、貫通は免れない破壊力。

「ひいいあああ!!」

「シイツツツ!!」

それを全力の回避と、『輝く手』によるパリングの併用でなんとか回避し、続けざまに、パンチを差し込む。

差し込むパンチは俺のものではない。

「がぐあああ!!」

プリカの拳!

「くっ……うっとおしいハエどもめ!!」

「うっとおしいで済まされちゃ困るんだけど……」

俺が全力の防御で作った隙に、プリカの肉弾攻撃、正直、存在することは理解できても、にわかには信じがたいほどの頑強性。

俺達、そしてギランが『ガーリック三人衆』を撃滅して数分後、ガーリックJr. は、部下を殺されたことにおかんむり……というわけでもなく、極めて冷静に、しかし、強い殺意を持って俺達に襲いかかってきた。

そのパワー、スピードともに強力無比、おそらく、現地球最強。

「そう言うな、済まなくしてやればいい」

手を伝い、手首を濡らす輝きを纏った流血、そして、じわりと頬を伝う汗を、戦いへの高揚で塗りつぶしてごまかし、敵を見据える。

『ガーリックJr.』

かつて、先代の神が死ぬ時、今の神と後継者の座を争った魔族『ガーリック』の子供であり、生まれ変わり。

その戦闘能力は、文字通り子供ほどの背丈しかない変身前の状態で

すら神をゆうにしのご、そこから更に数メートルに巨大化する能力まで持っている。

「流石はかつて神の後継者争いにまで参加したという存在、伊達ではない」

「今更なにを白々しい……ルシフェルをも打倒したきさまらを生かすわけにはいかん!!」

「生かすわけにはいかないのはこちらも同じだな、できるなら、闇の中で大人しくしていて欲しかったんだが」

俺にとって、ガーリックJr. は、これまで幾度も激突を繰り返してきた魔族の親玉であり、師匠や同門の皆の間接的な仇であるのだが……。

そんなことは関係ない、じめじめと恨みを蓄えるのは性に合っていないし、正しかりうが、間違っていようが、怒りなんてものを、『戦う理由』ってやつに混入させるのも、もう嫌だ。

「ルシフェル……懐かしいな」

「ああ、奴のように、今度も野望を砕いてやろう」

俺がプリカと出会ったあの日、相對したあの魔族。

奴の、あの強力極まりない力と、共に地球を手にするると誓った仲間達への想い。

ガーリックJr. からは、あいつ程の脅威は感じず……俺達二人は、肉体という意味でも、精神的に、絆という意味でも、遥かに強くなっている。

「行くぞツツ!!」

「があっ!!!」

「させるかあ!」

俺とプリカは一直線になってガーリックJr. へと向かう、将棋で言えば棒銀、ガンダムで言えばジェットストリームアタック、単純な連携だ。

だが、まず飛び出した俺に向け、ガーリックJr. は猛烈にエネルギー弾を放つ。

俺は速度を落とさぬままにそれを弾き、しかし、体勢を保てぬまま、

斜めに流れた。

「たあいもない、先に小娘から——」

「プリカ来いッッ!!」

俺は再攻撃に手間取り、プリカ一人を悠々と相手にする……そんなつもりはガーリックJr.の背後より、俺の声がかかり……。

それと共に、プリカはこくりと頷き、勢いをそのままに斜めにそれ、軌道を俺に向ける！

「なにっ?」

「行くぞッッ!!」

プリカは更に頷く、何をするかはわからないが、合わせてみせる、その物語る顔と、佇まい。

その先に居るのは、お馴染みになった空力と姿勢変化、そして舞空術の合せ技で見事に静止して見せた俺。

俺は手を伸ばして広げ、プリカはそれに合わせ、俺達の影が重なる!!

「——ッッッ!!」

「ぐぎいっ!!」

俺の気合いとプリカの食いしばった声が同時に響く。

強化した握力でプリカの腕を掴み、俺自身はその場に静止、プリカの動きを反転させつつ更に勢いを付け、ガーリックJr.に向け射出する！

そう、この技こそ——

「舞空ブランコッッ!!」

「ぐぼおっっ!!」?

弾き飛ばされるガーリックJr.

「ちよつと……ダサくないか?」

戦場に相応しくないジト目のプリカ。

お前の技名も大概だろうが。

「調子出てきたじゃないか、もっと行くぞ」

「バトルの途中にふざけてていいのか?」

良くはないが、悪くない。

どうせタイマンではないのだ、なら、俺達の持ち味、仲のいい二人だつてところを活かしてもいいだろう。

「ふ…………ふざけおつて…………」

「別に奇策を弄するわけじゃない、ただただ仲がいいだけさ、それとも魔族にやそれだけでも眩しいかい？」

「おのれーっ!!!」

打てば響くように、煽れば飛び込んでくるガーリックJr. は正面から受ければひとたまりもなく、弾けば輝く手が裂ける、弾丸の速度の暴走列車！

ならば、考えるべきは弾くことでもなく、防御でもない。

俺は神経を集中しつつ、力を極限まで抜き――

「フツツツ…………!!!」

「なぬう!?!」

ガーリックJr. の突撃を、その腕を、足を掻い潜るほどの距離で避ける。

攻撃の沸点を外されたガーリックJr. がたたらを踏むように滑り込む先には、新たな技を準備したプリカの姿があった！

「ぐ…………つがああ!!! スター・モーニング・マルチプル!!!」

エネルギーが風を切り裂く音を立て、2つの光球が楕円軌道を飛び回る。

感じずとも見てわかる超強力な密度と、超高速の回転軌道は、巻き込まれた犠牲者を決してただでは逃さない。

「な、なんのこれし…………きいっ!!!」

「ぐああああっ!!!」

巨大化した身を縮め、スター・モーニング・マルチプルの破壊空間から守ろうとするガーリックJr. に、下手人、プリカが更に躍りかかる！

そのパワーは、まさしく地球最大!!

「ぐがあああ!!!」

「げえーっ!!!」

満身の力を込めたキックを腹部に受けたガーリックJr. は舞空

術を保てず、遙か地面の方角へと吹き飛ばされてゆく。

俺はそれを見て、思わず賛辞を送る。

「素晴らしいツツ!! まさしくお前らしい、前の技をしつかりと進化したな!!」

「バイナリ・スター・モーニング」

俺の称賛に一瞬顔を明るくしたプリカだが、ついでに睨まれてしまった。

いや、実際すごい技だ、持ち前の気の制御能力を活かしつつも手足を自由にし、イメージも制御も容易い『楯円運動』を利用することで操作の手間を減らしたあの技は、技術屋のプリカらしい発想と言えるだろう。

一方、プリカのとどめの一撃を前に地面に叩きつけられ、ようやく戻ってきたガーリックJr. は、なんとも言えない色の血液を垂らしながら、今にも怒りを爆発させようとしている。

「お、おのれ……人間ごときが！ ようやく眠りから覚めたというのに……!!」

「なんか……かわいいそうになってきたな」

「元からあんなキアラだろう、あいつは」

ガーリックJr. は元からあんなやつだ。

作戦はちぐはぐ、地上最強クラスの力を持ちながら、どこか臆病。

そして微妙に力及ばず、微妙な形で敗れ去る。

まあ、それが味というやつなんだが。

「ガーリックJr.、お前は本当に強い、だが、俺達二人を相手にするには少々力不足だったようだな」

「二人がかりだからって意味じゃないよな」

この地球で、ただの拳で輝く手を傷つけられる存在など、最早こいつしかない。

しかも、こいつにはまだ隠し玉があるときた、プリカと二人ということわざと気を抜いて挑んではいるが、一人で挑めば、ピッコロ大魔王戦以上の苦戦を強いられるのは確実だ。

だが、俺達二人でなら、もしかしたら、こいつが『隠し玉』を出す

前に倒せる可能性もある。

「……こいつが最後の技を出す前に終わらせるぞ、プリカ、合わせろ」

「ああ」

俺はゆらりと両手を前に構え、足を前後に広げる。

「八千拳^{やちよ}」

「もうその手は食わん！ パワーで押しつぶしてくれるわ!!」

ガーリックJr. が俺の正面でエネルギーを蓄積し始めた。

だが、俺にとつてそれは些細なことだ、……八千拳、その名の通り、八百拳のバリエーション、空対空仕様。

「行くぞツツツ!!!」

「ぎええええい!!!」

ひと息に飛び込む俺に対し、奴が選択したのはエネルギー弾の高速連射！

俺は奴のエネルギー弾を前に弾ききれず突進を保つ事ができない、その事実を覚えているのだ。

だが、ガーリックJr. に見せた事実は、戦場の真実ではない。

「ムンツツ!!!」

エネルギー弾に手をかざし、手を衝撃波の輝きに満ちた。

そして、先程感じ取ったガーリックJr. のエネルギー弾の『理』に合わせて調整！

手に触れる寸前に衝撃波によって雲散霧消させ、消し去る!!

「はあっ!!?」

「さあ、ちよつと付き合ってもらうぞ、ガーリックJr. ツツツ!!!」

この八千拳を常人が見たならば——否、常人には、俺を包む^{!!!}空気の歪み、エネルギーのきらめきしか見えはしない。

師匠が俺に見た八手拳の未来、『見えぬ拳』はここに実現した。

それに加え、輝く手を自在に動かして武術を運用し、そのエネルギーの形質変化までも『拳の変化』として取り込んだこの技は、エイジ753年までの冒険の集大成。

例えそれが、ガーリックJr. という格上を殺すことは出来ずと

も。

「ちよこまかと!!!」

「グツツツ……!!!」

裂ける腕、頬、額、だが、それでも。

「ウエスト・モーニング・サンシャイン!!!」

「ま、またしてもおっ!!!」

本来5年後に現れるはずの魔族の首魁を翻弄し、我が友の必殺技を誘い出すだけの時間は整った!!

高く掲げられたプリカの手には、小さなエネルギーの塊が鎮座する。

その名の通り、まばゆく輝くそれは、プリカの号令とともに極超音速でガーリックJr.の腹部に着弾!

「ぐおおおおおっ!!!」

ほとんど瞬間といえる程の間に、エネルギー弾はガーリックJr.もろとも地面へと激突し、まるで大型爆弾でも直撃したかのような巨大な火球を形成した。

……やはり、恐ろしい威力、流星はプリカだ。

俺はその恐ろしさを感じた顔をあえて残したままプリカに向き直り、頷く。

プリカも、呆れたような、照れくさそうな顔で頷き、また、火球を見た。

「ガーリックJr.……あれが最後の一匹とは思えない」

「そこは『やったか!』じゃないのか——うわっ!!!」

次の瞬間、強力な、重力にも似た引きずり込まれる感覚!

間違いない。

「デッドゾーンツツツ!!!」

「まさかきさまがこの技を知っているとはな……だが、もはや驚かんな!!」

遙か下で叫ぶガーリックJr.の姿。

自分『で』作られたクレーターの端の小高い部分に立ち、構えを取って発動したこの技は、巨大な異空間『デッドゾーン』へとあらゆるも

のを吸引する封印技！

俺は鍛え上げた舞空術、プリカはエネルギー弾を断続的に放って、その反動で吸引に抗うが、……長くは続きそうにない。

もつと悪いことに、死にかけてであったり、単に気絶していた魔族どもが吸引によって叩き起こされ、吸われながらも、立ち上がろうとし始めていた。

「ああなったガーリックJr. は戦闘力で言って数倍ないと倒せないはずだが、試してみるか？」

「そんな余裕ない!!」

「だろうな」

俺達のパワーをいくらかき集めたところでデッドゾーンを超えることは出来ない。

だが、たった一つだけ、有効な手段を、俺は知っていた。神様の下で学んだのは武術だけでも、歴史だけでもない。

「この地域の経度、時刻、そして日付……、満月は今、俺達の真上に浮かんでいる！」

「満月!? でも、この空間の中じゃ……!」

「その通り! ちゃんと修行したんだ、この程度の結界なら、穴をあけるくらいできる!」

俺の叫びに、プリカは渋い顔をするばかりだ。

俺はガーリックJr. の吸引に耐えながらも、プリカの説得を試みる。

「じ、自信ないぞ、正気とか無理だし、あの時がうまくいきすぎたんだ」

「俺の言う事を、聞いてくれたじゃないか!」

「おまえが死にかけてだったから、敵に見えなかったのかも」
嫌がるプリカ、迫る俺。

だが、これしか策はない。

「あの日はできたじゃないか、今日だって……できるはずだ」

「むちやくちや言うなよ! 大猿を止めるのは親子でもない無理だ!!」

「言っちゃなんだが、俺達の間柄はそんなに薄いもんじゃないだろ」
プリカは押し黙った。

吸い込まれないようにする他は、しゃべるのが精一杯、そんな状況でプリカの姿まで確認できない。

だが、プリカは揺れているとはつきりわかった。

「どうする、プリカ」

「おまえは……」

小さく、躊躇するように呟く、いや、言葉を始めようとするプリカ。
俺は黙って、それを待つ。

「おまえは、オレが大猿になっても、目の前のおまえじゃなくて、あいつを襲えると思うか？ ……オレは大猿になっても、おまえの言うことなら、覚えてられるって思うのか？」

「思っ」

腹にずっしりと来るプリカの言葉に、条件反射かと思われかねない程の即答を返す。

足掛け七年分の関係だ、俺も、軽くとらえているわけじゃないが、だからこそ。

「お……おまえが、そこまで思うなら、なってやってもいい」

「ありがとう、死力を尽くす」

俺は全身に力を込め、舞空術を使い、天高く登ってゆく。

そして、貫手を強く、鋭く輝かせ……空間へとねじ込んだ!!

「割アツツツツ!!!」

そしてそのまま、空間を割り開く。

カーテンを開け放つようにたわんだ夕暮れ色の向こうには、想像していた通りの漆黒の空、そして。

満月!!

「……………!!」

俺は空間を開け放ったままプリカを見る、プリカはエネルギーの射出をやめ、吸引に流され始めながらも月から目を逸らさない。

成功だ、プリカの身体はどんどん大きくなり、ジャージはそれに合わせて伸びていく。

多分、戦闘服を参考に作った伸縮性のある素材なのだろうそれは、大猿の完成とともに破れた。

「アチャー〜モロ……」

「ゴガアアアアアアア!!」

うっかり耳を塞ぎそうになる程の雄叫びとともに、大猿が大地に立つ!

ズシンと響いて大地を掴んだ大猿は、その大地が砕け、吸い込まれるのすら意に介さぬように微動だにせず吠えた!!

「さあプリカ、七年分の進歩を見せてくれッツ!!」

「グル……………ゴオオオオオ!!」

そしてプリカはガーリックJr. ……ではなく、こちらにエネルギー弾を発射した!!

「ムウウツツ!!」

命中すれば消滅は免れない一撃!

俺はとっさに空間の裂け目を手放し、砲撃から逃れ——爆発!!

プリカは続けざまにエネルギー弾を放って魔族の群れを消し去り、のっしのっしと歩いて地上で吸引に抗う魔族を踏み潰し始めた。

プリカは完全に制御を失っている、……………ここに、地上最強、理性ゼロ、完全に制御不能なモンスターが誕生してしまったのだッツ!!

「空間の裂け目は無事だが……………このままではまずい!!」

「お、おいきさま!! 何をしたんだ! どうしてきさままで攻撃されてるの!!?」

ガーリックJr. がうるさいがそれどころではない。

プリカの攻撃は完全に無差別、破壊衝動にまかせてあっちこっちを壊しまくっているし、裂け目の維持も、長くは続かん。

空間の裂け目を閉じるか?

だが、そうすれば今度はパワーを失ったプリカがデッドゾーンに飲まれるのは必然だ。

「止まれ、止まるんだプリカ! ガーリックJr. を攻撃しろ!!

気弾じゃキツイかもしれないが、地面ごと抉ってやればすぐだ! 早く!!」

「グオオオオオオオ!!」

反応なし……いや、こつちにエネルギーを湛えた口が向いている!!
「ここで俺達が負けたら地球はどうなる、ガーリックJr. がもし
ピッコロと合流したら世界はとんでもないことになるぞ!!」

「ガアアアアア!!」

エネルギー弾……いや、ビーム!!

横薙ぎに放たれたそれをすんでのところで回避した俺は、溢れたエ
ネルギーに煽られ、木の葉のように回転しながら吹き飛ばされた。

吸引に抗いながら回避、裂け目の維持、これは……!

「研究室も、タンドール王国もどうなるか分からん、プリカ! 起き
ろ!!」

俺の叫びに、ただ、大きく喚く獲物としての反応を示したプリカは、
魔族を踏み潰す傍ら、しきりに俺に向けてビームやエネルギー弾を
放ってくる。

「悟空やクリリン、桃白白たちも——」

言葉への反応は、なし。

「全部で七年、一緒に居る時だけで四年も付き合ってきてこれか、プ
リカ!! 俺じゃ足りないのか!!」

サイヤ人の下級戦士は大猿になった時、意識を保つことが出来ない
が……同時に、十分に関係の近い人間の説得によって正気を取り戻す
例も存在する。

俺とプリカはそれになりうると思った、だが……。

どこが間違っている?

伝える言葉か、それとも、関係か、どちらかが足りないと思うしか
ない。

「ハアツツ……ハアツツ……プリカ……」

ついに息が上がる、エネルギーがもうない、ビームの余波だけで、俺
の身体は最早限界に近づいている。

「何が足りない?」

俺は、風音に飲まれるように、小さく、自分に問いかける。

……間違いがあるはずだ。

どこぞのオカマの言葉を引くまでもなく、時間と絆の深さとは関係ない。

共闘の数も関係ない、地球も悟空も関係ない。
あるはずだ、俺達のつながりが。

『お、おれもたたかう！』

初めて出会った時、奇妙なサイヤ人の存在に、驚きながらも、胸が踊った。

わくわくするような既知に包まれた俺の人生に現れた、予測できない未知の存在。

『おれは……とめられない、じぶんではおさえられないものがこわくて、あそこにいたんだ』

その正体は、自分の持つ知識を恐れ、自分の持つ力を恐れる一人の人間だったのだ。

そんなプリカが森を出た理由は、自分がかけた迷惑を償うためだった。

誰に言われるでも、誰に責められるでもなく、自分から責任を取ってみせた。

『……楽しかったよ、嫌になるくらい』

そんなあいつに、楽しんで力を振るうことを教えたのは、俺だ。

俺はあいつに見た力に焦がれ、それを引き出し……俺達は互いが抱える、同じ秘密を知った。

『オレはしようじき言って、ちきゅうじんの男にもどりたいんだ』

もう一つの秘密と願いを知った俺は、プリカに、その願いを叶えさせようとした。

だが、プリカはその願いを放棄し、代わりに、俺達の家を作った。

この世界で、二人で暮らすために。

俺達の思い出も、絆も、もつと沢山ある。

足りなくなんかない、積み重ねてきた。

「プリカ……」

それでも、”これ”ではないのだと、俺の中の、何かが叫ぶ。

観念して、俺はその叫びに、従うことにした。

「お前の優しさが好きだ、俺が振りかざす、理詰めの博愛主義なんかとは違う本物の優しさをお前は持っていた」

プリカは優しいやつだ。

人が傷付くのを本当に嫌だと思っている、その優しさが好きだ。

「お前が天津飯にやられた時、あんなに怒ったのは、お前がやられたからじゃない、お前が優しいのが分かって、そのせいで倒れたのが、辛かったからだ」

天津飯とチャオズにとっては、本当に、理不尽な怒り。

あれは、あの二人に向けられた怒りですらなかったんだ。

「何度助けられたか分からない、あの時守って貰ったピラフなんかより、俺の方がよっぽど、お前の優しさを味わってきた」

思えば、七年も。

力が凄いとかが、功績を上げたとか、つまらないことばかり褒めてきた気がする。

ずっと、全く考えも合わないまま、合わせないまま、俺の理屈ばかりに付き合わせてきた気がする。

何度も心配をかけて、時には俺がそのまま殴り飛ばしたことだってあった、それでも、愛想もつかさず、一緒に居てくれた。

それはプリカが優しいからか？

「お前が優しいから俺に付き合ってくれたんじゃないなら、俺も言わなきゃいけないことがある」

いつの間にか、大猿の動きは止まっています。

いつの間にか、尽きかけていた俺の気は、永遠に浮かんでいられそうなのに充実しています。

七年越しに放ち始めた、ずっと意地っ張りの俺の腹の中にこもっていた言葉は、止まりそうになく。

「プリカッツツ!!! 優しさだとか強さだとかかわいさだとかは関係ない!! もともとどうだったかとか、どうでもいい!! いいや、知りたい!!」

俺は叫ぶ、わざと以心伝心を気取っていても、言わなくちゃどうにもならない言葉があるってことを忘れていた、七年分の言葉を。

唯一年月が意味を持つ、積み重なった想いを。

「本当のことなんてどうだっていい、俺がお前を連れてきたのも、お前とずっと一緒に居たのも、お前を鍛えようなんて言ったのも、理由はたった一つなんだ!!」

止まったプリカに、何をすべきか叫ぶことも、すっかり忘れて叫ぶ俺に。

「俺はお前が好きだツツツ!!!」

大猿は、甲高い声で叫び返した。

「あ、あ、あーっ!!!」

意識が戻ったのか! いや、今のは流石に口が滑ったような、言い過ぎたような、でも否定はできないような。

いつものオタクらしい言葉遣いを取り戻そうと俺があたふたしている間に、プリカはエネルギーを口に溜め。

「ぐあーっっ!!!」

こころなしか涙声な雄叫び一閃、ガーリックJr. を周囲数キロの大地と共に完全に消し去った!!

大地に刻まれた、超巨大なクレーター。

中心には、ドーム型の、6年前に使っていたあの家。

家の中、ソファアーの上で毛布にくるまっているのがプリカ、台所に立って、鍋をかき混ぜているのが俺だ。

「……これで、俺達の摩訶不思議アドベンチャーは終わりだ、おかしな歴史、湧き出した悪者は、ひとまず全部片付いた」

「まだ終わりじゃない、これは何度も繰り返してきた戦いの一つだと思う」

「『もうちつとだけ続くんじゃない』……か」

プリカに月を見せた裂け目が消えるのは、結界そのものが消えるよりも少しだけ早く……プリカは結局、大猿から戻ると同時に全裸で自分が作った爆心地にへたり込むことになった。

俺は、身体を冷やしたプリカをねぎらうために、更にお玉を回して、少しだけ感傷に浸る。

孫悟空／カカロットという人間の半生、一代記とも言えるドラゴンボールの物語、その折り返し地点に、俺達は立っているのだ。

「ああ、それと、ソシルミ、もう一つ」

「繰り返すというなら、よく言う、『円環じゃなくて螺旋』というやつだな、俺達も、この世界も、あの始まりよりは進歩したはずだ」

敵の親玉は自分達の力に対処できて、悪あがきを潰す大猿は、ぼんやりと敵だけを意識できて倒せたなんて不確実なやり方じゃなく、完全に意識を取り戻して力を発揮したのだ。

「ああ、おまえの説得のおかげだ、あの時……」

「しかし、魔族どもとの戦いを勝利で終えたのはいいが、天下一武道会参加の希望は完全に潰えてしまった」

はるか遠くで、大きな力が激突するのを感じる。

地球の地理が頭に入った俺にはそれがパイヤ島、天下一武道会会場だとはつきりとわかった。

「悟空たちを信じるしかない」

「……ピッコロの負けを信じたくはないがな」

「元の歴史の通りに行けばいいけど」

そう言っつて、プリカはソファから立ち上がった。

ジャージの擦れる音と、素足の足音が近づいてくる。

「そうそう、元の歴史通りなら、チチと悟空の結婚も、この武道会だったよな！」

突然語気を強めたプリカが、右肩に置いた手。

俺の肩が、自分でも驚くほどに激しく跳ねた。

「ぶっ……ちよ、ちよっとおもしろいぞ、ソシルミ」

「料理中に脅かすな」

「ちよっとなら触ったくらいでビビるなんて、意外だった」

全然、意外じゃなさそうな口調に、むずがゆさを感じる。

確かに、普段の俺なら、包丁を使っている最中に殴りかかられたところで、微動だにせず料理を続けるのだが。

今は違う、そして、プリカはそれを分かっているのだ。

プリカは肩に手を置いて、それから、鍋の中身……味噌汁に少しだけ鼻を動かす。

そして、俺が『じゃあ味見でもするか』と切り出そうとしたのを見計らったかのように、言葉を続けた。

「火止めて、こっち向け」

「お、おう」

「正直、どっから意識があつたのか、オレも曖昧だ、でも、最後の言葉は、バツチリ聞いた」

真正面から俺を見つめて、俺が目を逸らすのは絶対に許さないとばかりに睨むプリカ。

俺は気の利いた返しどころか、言葉を返すことすら出来ず、続きを聞く。

「あれは、口からでまかせとかじゃないよな」

「本心だ」

否定する事ができなくて、引き伸ばすのも不誠実だと思つて、食い気味に放った言葉が、言った後になって、『言ってしまったぞ』と、胸の中でガンガンと響く。

だが、もつと恐ろしいのは、俺の、軽薄な『出任せ』の一つだと思われてしまうことだ。

……プリカはそんな俺を見て、こころなしかドヤ顔気味に、ぺちんと俺の頬を叩いた。

「その顔見て、でまかせなんて思わないから、安心しとけ」

「そんな顔、してたか」

「してた、……味噌汁、味見させろ」

俺が遠慮がちに小皿を出すと、プリカはくいつと飲んで、『うまい』と一言だけ言つてから、そのままソファーに戻った。

座ったプリカは、顔を赤らめながら話を始め、俺は鍋に向き直り、プリカの話を背中で聞く。

「あの日、あの戦い以来、オレが大猿にならなかつたのは、なんでだと思っ？」

「闘争本能が満たされたから、じゃないのか？」

「それもあるけど、違う、オレがああなつてたのは、寂しかったからだ、狭い山の中に引きこもつて、必死に自分を抑え込んで、心は乾く一方……それを無理やり八つ当たりして、本当に砕きたかつたのは、山じゃなくつて、自分の作つた心の殻つてやつだつたんだ」

「……それが、外に出て、いらなくなつた、と」

「おまえが出してくれたんだ、白馬の王子様」

思わず振り返ると、今度はプリカが顔を逸らした。

調子が狂っているのはお互い様らしい。

「ソシルミ、オレは最初、おまえが怖かつた、当然だと思う、おまえはなんでそこに居るのかわかんないし、オレがあんなになつてまで守ろうとした世界を、あつさり壊そうとしてた」

「……これで良かったと思う」

「オレもそう思う、おまえはオレが守りたかつた世界を壊して、代わりにオレに、希望と自由をくれた、結局、自由つて言つても、おまえにべつたりだけど、それも、オレが自分で選んだ結果だ」

「お前の自由を奪つたつもりはないが、それは、嬉しいな」

「ああ、だからオレも言うよ、ソシルミ、おまえが好きだ、オレがおまえにべつたりなのは、成り行きでも流されたからでもないし、おまえを見張るためでも、おまえの歴史改変を手伝うためでもない、おまえが好きだからだ」

そう言うと、プリカは押し黙つたまま歩み寄つてきて、無言で小皿を差し出してきた。

ほんの少しだけ味噌汁を注いで返すと、プリカは、しよっぱいから味を見ろとのたまつて、肩を叩く。

振り向いた瞬間、ぐいつと、肩ごと引き下げられた顔に、顔が。

「~~~~ツツ!!」

「………んー!」

「………!?!」

混乱に包まれた俺から、ゆっくりと離れたプリカが、小皿を差し出してきた。

塩を入れすぎたか具が少なかったか、いや、そうじゃない、キスだと……!?!

「ウソだ、味はちょうどいい、たまには、オレがおまえを騙したっていいだろ」

「お、おい……プリカ……!?!」

「文句があるなら、いつもどおり、お前らしく理路整然と、論理的に言い返してくれ」

「俺は……家族の事を言わないなら、前世も含めて、これが最初だった……」

「何一つ論理的じゃないな、早く味噌汁よそってくれ」

俺は言われるがままに味噌汁をよそい、席につく。

プリカは渡した味噌汁を持ったまま俺の隣に、というか、密着するように座った。

「天下」武道会は、今から行っても混ざれないだろ、ゆっくりしてこ
う」

「戦いを見届ける以外にも、するべきことは……」

俺の腰を引き寄せるように、プリカのしつぽが巻き付く。

またしても言葉が続かなくなった。

「とりあえず身体を温めてから考えよう、ソシルミ」

……強さとは我儘通す力、最愛に比べれば最強なんてなるほど。

「風呂でも入れるか」

「ベッドがあるだろ」

俺は敗北を認め、二人で身体を温めることにしたのだった。

ドアを叩く音がする、窓から差し込む光は、晴天の明け方。

一体こんな時間にどんな来客だ、迷惑極まりない。

隣で寝るプリカを……（一瞬、息を飲んだ）起こさぬように立ち上がり、応対に向かおうとして、ようやく異常に気付いた。

そもそも、ここは人の住まぬ荒野、クレーターの最奥、来客がある
とすれば、それは俺達の存在を感じ取れる特殊な知り合いしかいな
い。

「はいはい、今開けますよ」

もしかしたら目上かも、そんなふうにして、申し訳程度の敬語を
使いながら、開け放ったドアの向こうには。

「久しぶりだな、アエ・ソシルミ」

青白い肌、いつぞやの吸血鬼がいた。

↓つづく

第三十四話：二人がもう少し先の未来を見据えるまで

「……もうすぐ朝日が来るぞ」

俺は、目の前に現れた男、最早懐かしき敵に、脅しというわけでも、心配というわけでもなく、一言だけ呟いた。

「アエ・ソシルミ、……話をしようじゃないか」

それを物ともしないこの男の名はルシフェル。

7年前、俺と、まだ眠りの中にある相棒、プリカの手によって葬られた魔族の首魁。

……葬られたはずだった男だ、それが、紳士ぶった、吸血鬼らしい佇まいで、ここにいます。

「立ち話もなんだ、家に入れ、カーテンくらいは閉めてやる」

「それはどうも、お気になさらず」

俺の警戒と動揺を楽しむような口調で礼を言って、ルシフェルはずかずかと家に取り込まれる。

来客ならば飲み物くらい、と思ったが、ルシフェルは一体何を飲むのか。

血は振る舞ってやれないが、ワインもこの家にはない。

「水か、緑茶か、コーヒーか、どうする」

「紅茶はないのか」

「紳士らしい趣味だな、チャイならあるぞ」

「それでお願ひしよう」

……魔族も人間らしい飲み物を嗜むのか。

それとも、5000年か、7年の月日のいずれかが奴を変えたのか。確かガーリックJr.の手下はリンゴのような、謎の醗酵物質を含んだ果実を喫食していたが……。

振る舞ったチャイを飲むルシフェルを、見張りながらも別の色の目で注視していると、ルシフェルは面白げにつぶやいた。

「それで、吸血鬼を家に招いてよかったのかね？」

俺の警戒心と好奇心を見抜いたような言葉に心臓が跳ねそうになる。

「魔族の親玉に種族も何もあるまい、それで、わざわざ訪ねた要件はなんだ、復讐……という雰囲気でもないが」

「久しぶりの上、腰を据えて話すのは初めてなんだ、少しは会話を楽しもうじゃないか」

「朝日が近い」

「なるほど、心配してくれているというわけだな、では、わたしもそれに答えねばなるまい」

……調子が狂う、という程でもないが、こうまで余裕ぶった奴と話すのは久しぶりだ。

「とは言ったものの、わたしがここに来た理由は火を見るよりも明らかだろう」

ルシフェルは余裕たつぷりに、さあ問題だ、とばかりの言葉をぶつけてきた。

そして、俺はそれに対する回答を持っている。

「ガリックJr. の出遅れだな」

「ピンポン、ピンポン、ピンポーン！」

顔を恐ろしいモンスターのもれに変える……わけでもなく、美形のままのルシフェルがおどける。

そうだ、あの戦いの最中、ガリックJr. はわずか数分だけ出遅れ、それによって、手下の三人を失った。

ガリックJr. 勢力そのものの敗戦に繋がったあの出遅れが、単なる偶然などであるはずがない。

「するとあの日、ピラフと我々を救ったのもお前というワケだ」

「そいつも大当たり、賞金も何も出ないが、なんだ、わかっているじゃないか」

前回の天下一武道会を襲撃したピッコロ大魔王。

奴と配下の軍団からの攻撃から逃げる我々を救ったのはピラフだが、なぜ、魔族に締め上げられたはずのピラフがああ会場までやってこれたのか。

ピッコロ大魔王の追撃はないとピラフが言い、そして、事実そうだった理由とは何か。

その答えは、ここにあった。

「お前が俺達を助けた理由は……、自分の配下が壊滅している間に地球を奪われないため、と言ったところか」

「満点じゃないか、流石は次期神様筆頭候補」

納得の行く説明、本人も肯定している……だが。

「——いや、何かが違う、情報が足りない、それだけでは、同族ではなく俺達に手を貸す理由にはならない」

魔族にとつて、俺やプリカなどという強力な戦士が死ぬのに越したことはない、もつと言うなら、ピッコロも、ガーリックJr.も、好き放題暴れさせ、世界を荒らしてくれた方が、我々、光に生きる生き物と戦いながら勢力を育てるよりずっとラクになるはずだ。

それにもつと大事な問いが隠されている、そもそもこいつは、何故大猿から生き残ったのだ？

「……鋭いな、ソシルミ」

「称賛ではなく、理由を聞きたい」

ルシフェルは観念したように、一つため息をついた。

「わたしがおまえたちを助けた理由が、利益だけではないのは確かだ」

そして続いたのは、好意的に解釈するのならば、俺にとって何よりうれしい言葉だった。

「お前……」

「よせ、ここに来たのは、礼を言われるためでも、言うためでもない」
ルシフェルは、チャイのカップを音を立てて机に置き、自分はすくと立ち上がった。

「地上にはびこる魔族の脅威は全て去った、後に残ったのはきさまらにとつて無害か、取るに足らん連中に過ぎん……おまえたちの努力の結果だ、われわれは諦めないが、敗北は受け入れよう」

「俺も寂しい、お前等とは武を競いたかった」

「馴れ合いならシユラとするのだな」

そう言いながらも、ルシフェルはニヤリと笑い、ドアへと歩く。

ドアの隙間からは日光、まずい！

「おい待て、今マントでも出して——」

「ははは、やはりおまえは甘い」

ルシフェルはドアを開け放ち、何のこともないように朝日を背にして俺を見据える。

逆光で見えない顔には、やはり、笑みが浮かんでいた。

「奥で寝ているおまえの女はな、戦いの最後になって、技をあえてはずしたのだ、理性などないかのように見えた、あの大猿がな」

「待て、俺の女というのは違う！ いや、そうじゃない、プリカが……？」

「やつは善人だが、やつにああまでさせたのは、おまえの、その悟ったような生易しき、つまり——」

そこまで言って、ルシフェルは、わざとそうしたのか、単なる仕草か、頭をどけて、俺に太陽を見せた。

一瞬、俺の目がくらむ。

「おまえがわたしを生かし、わたしがおまえを生かしたのだ」

「ルシフェルツツ……!!」

ルシフェルが、太陽を横に置いたままふわりと浮き上がる。

そして、目がくらんだままの俺を見て、『最後の問題だ』と呟いた。

「さて、おまえが夜歩きした程度で魔族と出会えたのは、果たして偶然か？」

「それは——」

「答えを聞けるのを楽しみにしているぞ、ソシルミ!!」

腕を広げ、ルシフェルが太陽の方角へと飛び去ってゆくのを、ようやく慣れた目で見る。

その姿は美しく……俺にとって、希望の象徴であるかのようにも見えた。

東エリア、緑豊かな奇岩地帯。

今日は快晴、穏やかな日差しの中、巨大魚は川で跳ね、翼竜は飛び回っている。

久々に見る田舎特有の豊かな生態系に若干胸が躍るが、今日の用事

はフィールドワークではなく、人を訪ねることだ。

訪ねる相手の居る家は、森の開けた場所にある小さな一軒家。

「おーい、誰かいるかー!!」

「おまえなら聞かなくてもわかるだろ」

隣の我が相棒はそんな冷たいことを言うが、あくまで儀式だ。

俺がしばらく声を張ると、家の奥から『はーい』と甲高い女の声が出て、程なくドアが開かれた。

「どちらさまでしようか?」

活動的なチャイナ服、一つお団子に纏めたぱつつん髪、鍛え上げられた身体。

一度も聞いたことのない、聞き慣れた声。

「チチさんですね、始めまして、私は武道家のソシルミと申します、結婚祝いに参りました」

「同じく、プリカだ」

「えーつと……?」

チチは首をかしげ、若干警戒気味だ。

というか、俺達がジロジロ見るのがいけないのだが、こればかりは仕方ない、久々の『よく知った初対面の人物』、つまり、漫画やアニメで見た存在が目の前に居て、どうして興奮と好奇心を抑えられるだろうか。

というか、実際、武道家としても興味深い存在なのも事実。

悟空の妻で、牛魔王の娘、この世界においてもすっかり悟空と結婚した彼女は、この世界でも、十指、いや、二十指程には入る、有力な武道家だ

「悟空さー!ー! ちょっと来てくんろー!」

「おーう!!」

チチが俺達の肩越しに、遠くに向けて叫ぶと、やはり大声の叫びとともに、気が膨れ上がり、悟空が駆けつけてきた。

普段着と化した道着、そして、3年前とは比べ物にならないほど成長した姿だ。

駆けつけた悟空を見たプリカは目を輝かせている、嫉妬はすまい、

誰が責められるだろうか。

「ミソシル!! 久しぶりだな! するつてえと、横のはプリカか!?
なんかちつちええけど」

「余計なことを言うな、ちよつとは伸びたんだ、これでも」

俺が190センチ、悟空が175センチ、チチが160センチ代前半、プリカが150センチといったところか。

流石に元男としては思う所あるのだろう、まさかピラフとつるんで理由は小さいからではないよな……?」

蹴られた。

「結婚おめでどう、悟空、チチさん、それで、ご祝儀というわけでもないんだが、仕事の話を持ってきたんだ」

「仕事お!?!」

悟空が大げさに驚く、働きたくないというよりも、単純に、藪から棒に言われて驚いた感じだ。

「ああ、師匠が俺を師範として呼び戻そうとうるさくてな、駄賃も出るし、修行としても悪くはないんだが……、流石に俺も道半ば、かかりつきりにはなれん、それで、お前を誘いに来たんだ」

「つて言われてもなあ、オラ、人に教えたことなんかねえし……」

「お前もそろそろ、人の親になるだろ? それに、人に教えられるようになれば、自分の修行も捗るとは思わんか?」

「悟空さが仕事か……」

チチは悩ましそうにしている、新婚夫婦だ、二人の時間は欲しいが、悟空が働き、武道家としてキャリアを積むのもやぶさかではないつてところか。

それに、結婚してからしばらく経って、チチもいい加減、悟空の食費のヤバさを感じ始めた頃だろう。

「プリカさんはソシルミさんのお嫁さんなんだろう? お互い苦勞するなあ」

「あー、いや、それもちよつと違うんだが、ウチの家計はプリカで、苦勞してるのもそつちなんだ」

「理解しているようで何よりだな」

ならもつと考える、とばかりにプリカが睨む。

「まあ、あれこれは、おいおい考えるところとして、ちよつと、見せたい……いや、一緒に見たいものがあるんだ、悟空、ちよつと家に入れてくれないか」

「それはいいけど、オラと見てえもの？」

俺と悟空、チチが家に入ると、後からプリカがテレビ画面とあれこれのメカがくつついたモニターを運びこんでくる。

「この間、ブルマの家に行った時のことだ、妙な気配の男が俺に駆け寄ってきて、『俺はあんたのファンだ、こいつを受け取ってくれ』って言って、小さな記録媒体を渡してきた」

その男は直ぐに立ち去ってしまったが、なんとか聞き出したことによると、どうにもあの媒体に入ったデータは、そいつが自ら録画した、天下一武道会の動画データだったのだ。

ブルマやプリカに見せるまでもなく、カプセルコーポレーション製のものだと分かったこのデータ。

どうせなら参加者と一緒に見たい、ということ、一石三鳥、結婚祝い、バイトに誘いがてらはるばるやってきたのだ。

「理屈はよくわかんねえけど、あの天下一武道会がまた見れるっちゆうことか！」

「しかも、常にハイスピードカメラ以上のフレームレートで録画されているらしい」

「プリカが言ったのは、試合の大分細かい動きまで写ってるだろう、ってことだ、流石に、悟空とピッコロのは分からんが……」

技術の分からない孫家の二人は首をかしげるばかりだが、それでも、愉快なことが起こりつつあるのは分かってくれたらしい。

俺達四人は、わくわくそわそわしながら、並んで動画を見始めた。

桃白白と天津飯が向かい合う、元の歴史と同じ光景。

「兄弟弟子対決、燃えるシチュエーションだ」

「おらはあんま好きじゃねえなあ、おつかねえもん、鶴仙人さまのところのお弟子さん」

「そういうなよチチ、あれで、しっかり手加減もしてるんだからさ」
殺人技を、殺さぬ制圧に用いてぶつかり合う、矛盾しているようだが、極まった術理を本来とは違う形に生かすのも、また戦闘術だ。

一見殺し合いにも見える鋭い技の応酬は、まるで早撃ち対決のような、同時発射のどどん波により……天津飯の勝利で、幕を閉じた。

「そして、次はその弟子のチャオズと、正体不明の武道家、マジユニアか……」

「んもー、ミソシルったら、わかってるくせに！」

マジユニアVSチャオズ。

マジユニア、俺と大一番で雌雄を決したピッコロ大魔王が全てを託した実子にして、生まれ変わり。

それと相對するのは、俺に破れ、3年の月日の後、その師を相手に同じ破れ方をした男。

だが、画面の中に居るのは――

「素晴らしいぞチャオズツツ!! 最早画面からでは、何が起こっているかすら把握できん!!」

「分からないのに言うなよ……」

チャオズはあちこちに飛び回ってはビームを乱射している。

カメラは武舞台の映像、音声を完全に捉えているが、それでもなお、何が起きているか分からない。

「だが、マジユニアを痛めつけているのは事実だ！」

「悟空さ、この人ちよつと怖えだよ」

「心配すんなチチ、ミソシルは自分が戦った相手が強くなつてると興奮するんだ」

「これが興奮せずにはいられるか、俺は今すぐ鶴仙流道場に飛びたい気分だツツツ!!!」

超能力か、エネルギー運用か、俺と同じ新たな舞空術か。

変幻時代の軌道、エネルギーの奔流、そして更にそれは確かな戦術と武を感じられる動きでピッコロを追い詰め……そして、最後には、ピッコロの華麗なパリングによって姿勢を崩され、武舞台袖へと墜落、あえなく場外となった。

「……この目で見たかった」

「突然しよげるなよ、次が始まるぞ」

「今度はオラとヤムチャだな!」

「さすがに、悟空相手だとキツそうだけど……」

プリカはそう言うが、画面の中の展開は全くそうではない。

ここまでの二試合で展開された殺し技の応酬や空中戦とは全く違う、骨太の肉弾戦!

「凄いぞ、ヤムチャは腕を上げた、俺の見込み通りだ!」

「嬉しいか、ソシルミ」

プリカがニヤリと、というよりは、俺の笑みを見たい、とばかりにこちらを覗き込む。

いい笑みが浮かんでいることだろう、動画を見る俺の頬は釣り上がりっぱなしだ。

結局試合は悟空の勝利に終わったが、ヤムチャは前回の反省を活かし、視覚に頼らない認識能力を更に鍛え、やはり入手した新技『繰気弾』を鋭く操り、悟空を終始脅かし続けた。

「次の試合はいまいちパツとしねえけど、オラは好きだ」

「無名選手、シエンと、クリリンの試合か……なるほどな」

俺と悟空は顔を見合わせ、プリカはその意図に気付き、チチはぽかんとした。

シエン、神様に乗り移られた男。

「ま、結局かみ……シエンはクリリンにやられちゃったんだけどな」

「強くなったな、クリリンも」

またこちらを見るプリカ。

だが俺は、それより、敗北の瞬間、シエン……いや、神様が浮かべた穏やかな笑みこそが嬉しかった。

自分が鍛えてすらいらない下界の人間に敗れるとはどういう気持ちなのか、きつと、いい気分なのだろう。

「よかったな、『ピッコロ』」

二回戦、最初の試合は天津飯VSマジュニア。

本来の歴史には存在しない試合が続く、愉快だ。

天津飯はチャオズの仇を討つと息巻いている。

「流石の天津飯も、マジユニアが相手では荷が重いか……?」

「でも大したもんだろ? オラたちみてえに超神水飲んだわけでもないのに、すげえリキだ」

「鶴仙人に大分しごかれたらしい、今を見すぎて未来を忘れる癖も、手が回るからと何もかもやろうとして全てを手薄にする癖も消えた、技のキレも十分」

だが……それでも、我がライバル、ピッコロには及ばない。

天津飯が鍛えに鍛えた技のキレ、それはなんと、ピッコロに素のパワーと技術力で突破されてしまった。

あの技のキレ、ピッコロなりに俺との再戦を考えてくれたのだろうか。

「ニヤけるな、ちよつとキモいぞ」

……………。

ともかく、天津飯VSマジユニアは、マジユニアの勝利に終わった。

「……見たかった」

「まだ言うのか……」

そして、次なる試合、は悟空VSクリリン、これもまた素晴らしい試合だ。

互いに、舞空術とエネルギー波を巧みに組み合わせた高機動戦と、亀仙流らしい地に足ついた格闘術のせめぎあいを展開してゆく。

「やはり格闘戦が好きだが、エネルギーを使ったハデな試合は、純粹に見応えがあるな」

「ああ、親の顔より見た、ってやつだな」

「俺達が言うところのシャレにならん、お前まで浮かれて我を忘れては、俺が困るぞ」

激しく続いた試合の最後を飾るのは、クリリンが放つ、後の『魔空包圍弾』に通ずる所のある複数気弾同時操作技。

美しい軌跡を描くエネルギー弾で悟空の逃げ道を塞ぐも、悟空は得意のかめはめ波推進を回転力に転用した技で包圍を突破し、そのまま

捻りを加えたキックでクリリンを撃破。

クリリンは錐揉み回転しながら武舞台に撃墜した。

「大丈夫なのかこれ……」

「亀仙流だし、そうそう死なないだろ……多分……」

「クリリンはピンピンしてたぞ！」

「おらはこのままだと獄中結婚になっちまうってビクビクしてただ……」

……そういや、チチはまだこの動画に出てきてないな。

だが、武道会は容赦なく進み、そして、終わってゆく。

「悟空の勝ち、か」

結局、マジユニアは自分がピッコロの生まれ変わりであることを明かし、観客達を追い出したが……。

それでも、武舞台を消滅させるような暴挙には出なかった。

もしかしたら、最後まで俺と戦う望みを捨てていなかったのかもしれない。

「いい試合だった」

「そうだろう？ 次は、一緒にやろうな」

「ああ」

神は、穏やかに試合を行ったピッコロを殺そうとはしなかった。

その代わりに、悟空、そして、俺との再戦のため、自らを鍛えろと諭して開放する。

……こんな所にも、俺達の影響が現れるとは……というか、このカメラマンの根性は一体何なんだ。

「あ、そろそろだな、チチ」

「んもう、恥ずかしいだよ」

二人は何やらイチャイチャしている、すると、画面の端で、チチが泣いていた。

亀仙人が理由を訪ねると、予選敗退で情けなく、会いたかった人に会わず顔がないという。

それを聞いた亀仙人はチチを優しく諭し、悟空のもとへと向かわせ

たのだった。

後は、見るまでもない、元の歴史と同じ出来事が起こっただけだ。「なるほど、二人の馴れ初め、というか、再開は、こういう形だったのか」

「おらが弱かったただけなのにあんな泣いちまって情けねえだ……」

「チチは強えよ」

うーむ、微笑ましい。

そう思っていると、悟空がこちらをチラと見て、話を予想していなかった方向へと持ってきた。

「それで、ミソシルとプリカはもう結婚したんか？」

「あ、いや、俺達は……」

「まだ、まだじゃなくて、その、おい、聞くなよそういうの!!」

俺とプリカは一緒になって悟空の言葉を否定する、そう、これには深い理由があるのだ……!

口いっぱい頬張れる、大きな特注のスプーンで、ガプガプと音を立て、シチューを貪る。

いつもの光景、俺にとっては3年越しに初めて帰宅して以来、数ヶ月の時を過ごした我が家のダイニング。

「ムチャ……ムグ……ン……!」

喉に若干つかえるものを感じた俺は、コップの水がもうないのに気付き、ピッチャーに手を伸ばす。

「むが……!」

……そして、小さなテーブルの対面で同じく喉から音を出したプリカの存在に気付かないまま伸ばした手は、一回りも小さい、プリカの手と重なった。

「モ、モガッツ!」

「が、ング、ご、ごめん!!」

方や、口に物が入ったまま呻く俺。

方や、ごめん、だなどと、中々使わない言葉で謝るプリカ。

なんたる醜態。

青春どこの話ではない。

「な、なあ、ソシルミ、悟空とチチのことだが」

「ああ、うまくくつついたようで安心したよ、あれくらいの流れの變化なら、案外なんとかなるもんだなー」

「チャオズが出てきた時にはビビったよ、オレ」

「あいつが強くなって、本当に良かった」

脊椎反射で捲し立てあって、更にシチューを食う。

「なあ、それで、プリカ、悟飯の話なんだが」

「ご飯、今食って……孫悟飯、子供の方か」

「ああ、チチの中にはもうすでに命がある、俺にはそれが分かる」
うまく回らない会話の中で、ようやく、一つ取っ掛かりを作る。

脳裏に浮かぶのはあの野生児の悟空と、箱入りらしきチチの顔。

「早い、な」

「早いよな、俺には実際見ても信じられん」

「……………」

奇妙なタイミングで、プリカは沈黙した。

他人が見てもわかりはしないだろうが、俺には分かる。

早いという言葉に反応したのだ。

俺とプリカの間には、何を話そうにも、うまく話せない、何を話そうとしても、卑しく見えそうで怖い、そんな空間が生まれていた。

「プリカ……」

「あああああ!!! おい、ロボ、ビール出せー!」

「なツツツ!?!」

プリカは突如怪気炎を上げたかと思うと、次の瞬間には食卓用ロボットからビールをひったくって、ビンごと飲み干した!

「いや、おい、イッキはマズいぞ!?!」

「うるせえ、これくらいじゃないと酔えないんだよ、無駄に頑丈だからな」

「それならいいが……大丈夫なのか?」

俺は苦手な酒を目の前で飲まれた事実さえ忘れて心配したというのに、当のプリカはまったくもってケロリとしている。

そして、そのまま、新しいビールを箱ごと呼びつつ、ビンを下カンと机に叩きつけ、俺を座った目で見据えた。

「オレは前世じゃ、結構な大酒飲みだったんだ、合コンなんかにも、そういう芸人みたいな感じで誘われてな、だから、今生の身体が下戸じゃあ困ると思つて20年生きてきた、今じゃ、もうちよい下戸でもいいと思つてる」

「合コンって……」

「妬くなよ、その時のオレは男だ、それに、オレの度胸じゃ、誰も潰せも食えもしなかった」

そう言つて、プリカは少し黙つて、しかめっ面で、『どうだ、これがお前が知りたかつた、オレのことだ』と言つた。

「お前のこと……」

プリカが急にこんな事を言い出す理由には、身に覚えがある。

誰に告白するのでもないが、思い起こすだけで全身が縮こまるような情けなさ。

……あの日、俺はプリカと共にベッドに入つて、ただ温めあつて安眠したのだ。

そりゃ、そうだろう。

俺ははつきり言つて前世から継続してン十年連続童貞記録達成中、とつくに魔法使い！

プリカはプリカで男性としてどうかは知らんが20年女やってきて経験は一度もない（あつたら泣く自信がある）!!!

加えて言うなら、あの日は疲労と時差ボケでとても眠かつたのだ！心の通じ合つた戦友と初めて共にする褥の暖かさにおぼれて何が悪いというのだ!!!
なさない。

「俺がアルコールを嫌つてるのは、前世で病院通いだつたからだ、死んだのも病気、そんな前世の内は平気だつた病院とそれに絡む匂いは、たいして通わなくてよくなつた今生になって、いっぺんに、大ッ嫌いになつた、トラウマつて奴なのかね」

代わりとばかりに自分のことをぶちまけたのは、うまく会話できな

いなりの強がり。

そんな俺に、プリカはしかめっ面のまま、言葉をつないだ。

「おまえが、死ぬのは嫌なことだから、みんなも死なせたくない、とかそういうのをよく言うのは、それか」

「ああ、そうだ」

俺が散々語ってきた、悟ったような優しさの根本の一つは、ただ単に、俺は死ぬってことの痛みと苦しみをよく知っていて、出来ることなら、一度でも味わわせたくない。

味わうならば、一度でもいいと、思っているからだ。

「前世がそうだから、今生では、生きる喜びってやつを味わおうと思っただのさ」

「へえ、ああまでして女一人抱けずにぐっすり安眠で、生きる喜びか」

「ツツ!?!」

一瞬、言い返すのも、リアクションを取るのも忘れて、息をつまらせた。

正直言うと、大分傷付いたのだ。

だが、次の一瞬に考えをめぐらせれば、プリカがこんな、ふてくされた怒りをぶつけてくるのも当然だと思え、今度はこっちに、後ろめたさが湧いてくる。

そして、それをごまかすように、俺はビールをひつつかんで、プリカにならない、半分ほど飲み干した。

「ゴプ……ゴプ……ゴ……ゲッフ!! ガフツツ!!」
むせた。

「お、おまえ……ぷぷ……ふん、ビビりめ、まともに話すのが怖いからって、今度はオレのマネで酒か」

若干の笑いや心配を押し殺して、プリカは強がるようにオレを罵る。

感情豊か、複雑というわけでもない感情をいくつも腹の中で転がして、それをいっぺんに表に出す。

かわいらしい、愛らしい、前世で酒飲みの男だったと知らされても、

その気持ちは全く衰えることを知らない。

「何がビビりだよ、俺が偶然話を聞かなきゃ何年でも山で暮らしてたくせに、猿酒じゃなくてビール飲めてよかったな」

「はあ!!?」

が、心でどう思っている、口の方が先に言い返してしまった。

そしてそれを聞いたプリカは、俺が思っていた以上に怒りを爆発させた、というか、若干泣いているように見える。

なにかまずいことを言っただろうか。

「チャパ王に拾われなきや浮浪児だったくせに、おまえ、何が元の歴史だ、気取りやがって!!」

「言葉は関係ないだろ!!」

「はっ!! 暴れ過ぎて親に捨てられて? 偶然うまくモブキャラに拾ってもらって、それで何が元の歴史がどうこう変えるがどうこうだ、おまえがちよつと魔族殺してただけで、中の都はあのざまだ!!!」

「おま、お前!! あれはお前も同罪ということになったじゃないか!!!」

プリカは一本ビールを開けた。

俺も合わせて、残りを飲み干し、更に一本、手刀で口を切り落とす。

「そんなこと言ったっけ!? 知らねー、どうせ、オレはまぬけな原始人だからな、一生森の中にいりゃいいんだ」

「何を拗ねてるんだ、おい、ちよつと酒やめろ!!!」

俺がプリカの掴むビール瓶を取ろうとすると、プリカは逃げるように中身を飲み干した。

更に一本手を出そうとしているのを見て、俺はたまらずにそれをひったくって飲む。

「おまえ、くそ、この世界の運命だけじゃなくて酒までもってくのかよお……」

「わけの分からん事を言うな、流石にサイヤ人でもこれ以上はまずいぞ」

「しるか! おまえももつと飲み、くそ、オレだって、オレだってもつと、グスつ、うまくやって、悟空たちにしんらいされて、うああ

……バシバシやってなあ……ソシルミイイイ!!!」

しまいには泣き出し、泣くのが終わると、まるで親の仇のようにオレを睨みだした。

「いい加減にしろ、俺がどれだけ気を使ってると思ってるんだ、もつと伸び伸びやりたい！今からでも天下一の参加者全部ぶつ飛ばしにいきたい!!!」

「そんなときようないからこの家と道場行ったり来たりなんだからこの原始人二号!!!」

「誰がお前の二号だ!!!」

プリカが酒をケースからひったくり、同時に、俺もひったくる。そして、いっぺんに飲み干した。

目を開くと、少し欠けた月明かりが、窓から差し込んでいる。

とつぷりと夜はふけていた、ここは……プリカの部屋だ。

「……プリカ?」

居ない。

そして、呼んだ辺りで思い出した、俺は先に酔いつぶれたプリカを運んで、このベッドにやってきて……そのまま一緒に倒れたのだ。

壊滅的な出来事を思い出した俺は慌てて周囲を見渡すが、噂に聞く寝ゲロなどもなく、周りは綺麗なもの。

俺達の化け物つぷりは、どうやら、肝機能に関してもばっちりらしい。

「起きたか、ソシルミ」

「プリカ」

また、バカみたいに名前だけを呼ぶ。

今度は、明確な相手に。

プリカは2つ、なみなみと水の入った特大のコップを持っていた。

「おまえも、二日酔いなんかしてないみたいだけど、飲んだほうがいい」

「ああ、アルコールの分解には水が必要だからな」

俺はプリカから受け取った水のコップを一息に飲み干し、プリカに問う。

「なんで、わざわざ俺の前であんな飲み方をしたんだ」

そんなふうに関心ながら、内心で、俺はすっかり、ある一つの答えを期待している。

期待しているというよりも、そうでないならがっかりだと、口に出して言ってしまうようなほどだ。

そんな俺に、プリカは何も言わず、ただただ詰め寄って、俺の顔を正面から見て、ようやく口を開いた。

「……まだ、酒は嫌いか」

プリカのこんな顔は、初めて見る。

知り合って7年、初めて見る、拗ねたような、期待するような、いじらしい顔だ。

俺は最早、何も言えない、多分、プリカも俺が口で言うよりは、言うのではなくもっと別のことを期待している。

俺はプリカの、まだ酒で赤らんだほほを両手で撫でて、そのまま強く引き寄せ、唇を重ねた。

「……………ッ……………！」

「……………う……………あ……………ん……………」

唇だけではないが、深く繋がっているわけではない、俺達は息を止め、影を重ね続ける。

ひたすらに強い心臓は、何に使うわけでもない血液をただぐるぐる回すために全力運転している、うるさい、目が回りそうだ。

その、口付けというにはあまりに深く、大人らしい接吻というには不器用な行為は、俺達の間離れした肺活量の限界まで続いた。

「ぶあ、はあ、ふう……………」

「ハア……………これで、いいか」

唇を話、俺はうつむき加減で息を整えながら、プリカに問いを返す。

ただ単に、プリカの問いに、答えずにごまかす、という答えを返すただけじゃない。

こうして俺がアプローチすればいいのか、分からないなりに、俺か

ら動けばいいのか、そんな問いだ。

その答えを得るため、顔を上げると、プリカは、目を丸くして、くちをもごもごさせて、それから、ゆっくりうなずいた。

「なんだ、今更恥ずかしくなったのか、ああまでやっというて……」
プリカは俺をジト目で睨む、睨もうとして、気恥ずかしさや嬉しさ、そんな感情に邪魔されて、わけのわからない、意味を為さない半目になって、それが嫌で更に目をしばたかせるが、いつこうに、顔は戻らない。

俺は……そんなプリカの顔を直視できなくなり、その、余りにも目に毒な目を見なくて済むよう、更に口付けをかわした。

あれからまた数週間、俺とプリカは、タンドール王国の道場にいる。目的は一つ、悟空の初仕事を見守ること……だったのだが、それより先に、師匠は歓迎会を開くなどと言い出して、……俺達も巻き込まれた。

今は盛り上がりを見せる会場の端で、師匠と呑んでいるところだ。
(そもそも、宴会に積極的に参加しない俺に、師匠が合わせているとも言おう)

「それで、子供はいつだ」

そんな中、突然師匠がぶちまけた言葉に、俺は酒を吹き出しそうになった。

突然なんてことを言うんだ、この人は。

「師匠!!? なんです、藪から棒に、まだですよ!!」

「そうか、まだか……」

「なんで我々に、子供が出来るだなんて思ったんです」

「おまえたちの子供だ、わたしにとっては、孫のように思えるわい」
……『お前とプリカは我が子同然、手に取るように分かる』か。

俺は居心地がいいんだか、悪いんだか分からない奇妙な感触を手にとって、酒とともに飲み干す。

「酒が飲めるようになったのだな、ソシルミ」

「ええ、ですから師匠、我々は、もう少しだけ、二人だけでやっておきたいことがあるのです」

まるで夫婦生活を楽しむかのような言葉だが、実際はそんな、お気楽なものではない。

それをあえて、ごく一般的な夫婦が感じるようななまっちょろい、文字通り甘いものに包んで返した。

「熱い熱い、薄着でよかったわ」

「茶化さんでくださいよ」

「まあいい、ソシルミ、おまえたちの『それ』はいつものことだ、わたしは応援するぞ、好きにするといい」

師匠は意味深に笑って、そのまま立ち上がって去っていった。

俺は急な離席に一瞬首を傾げたが、その理由はすぐに分かった、プリカが来たのだ。

「なに話してたんだ？」

「子供をせびられた、師匠はどうやら、見ただけで俺達のことがかつたらしい」

「……まだ、無理だな」

プリカは意外にも、過剰に顔を赤らめてみたりはせず、ただただ冷静に答えた。

「俺達特有の、悩みってやつだ」

「ああ、時間的に無理ってわけじゃないんだろうけど……」

「近いうちにあんな戦いがあるって分かっている、のんびり子育て、なんてのは無理がある」

「そうだな」

未来を知る者、特有の悩みだ。

平和になるかもしれない、という希望すらもない、約束された戦いの到来を前に……幸福を、素直に享受することは難しい。

俺とプリカはしばらく、顔を突き合わせて渋い顔で黙りこくっていたが、しばらくすると、暗い雰囲気を感じとったのだろう、悟空がやってきた。

「ミソシル、プリカ、なに睨み合ってるんだ？」

「気にするな、……そうだ悟空、あの時間きそびれた、天下一武道会の話なんだが」

俺は話を逸らす。

ちようど、聞きたいこともあった。

「なんだ？」

「ピッコロの話だ、あいつ、俺と戦いたがってただろう、怒ってなかったか？」

悟空は首を捻り、『ああ！』と手を叩いた。

「楽しそうに試合してたぞ！ 最初は、ちよつとイライラしてたみたいだけだな」

「そうか、そりゃあ良かった」

嫉妬心がないでもないが、あいつ、ピッコロ大魔王に幸福な来世が与えられたならば、素晴らしいことだ。

是非再戦したい、対等な戦いを楽しみ、切磋琢磨したい。

「ああ、それと、おめえが来ないって分かった後、ピッコロはなんかヘンなこと言ってたっけ」

「ヘンなこと？」

「本当は慎重な性格の、ガー……なんちゃらが、父の解放に続けてこな、大胆なことをするなんて、だとか、なんとか……」

「……ガーリックJr.、オレたちが戦った魔族だ」

「そう、それ!!」

悟空は失礼にも、こちらに指を指して言う。

更に、道場するように一言付け加えた。

「魔族つちゆうんは、よっぽどミソシルが嫌いなんかな」

「……そうかもな、ところで悟空、チチとはどうだ、家事の分担はうまくいってるか？」

「ああ、そうだよミソシル！ チチのやつがさあ!!」

俺はまたしても話を逸らした。

素直に逸らされてくれるやつでありがたいが、いつか何かに騙されそうな気もする。

それとも、邪念あつて逸らしている相手は分かっただろう

か。

……さて、『歓迎会終了後はちよつと組み手でも』なんて言っていたくせに、師匠含めたほぼ全員が酔いつぶれ、悟空はいつの間にか居なくなつてしまった。

生き残っているのは度を越した下戸で一切飲まない数人、酒気抜きヨガを極め、うまく高弟に潰されることもなく切り抜けた数人、そして俺とプリカだけだ。

「後片付け、手伝わなくていいのか？」

「知らん、潰れたやつは自分で自分の始末をすればいい、師匠もだ、ちよつとは薬になる」

そして、その俺達はまだ呑んでいた。

酒好きだから、楽しんで呑んでいるからというよりは、やることがないから場に残った酒をひたすら飲み干しているという感じだ。

「なあ、プリカ、ルシフェルも、妙なことを言っていたよ、俺が夜歩きするだけで魔族と会えたのは、おかしいはずだ、ってな」

「うん、ピッコロも、ガーリックJr. は慎重で、あんな手を使うはずがないって言ってたって、悟空が」

『魔族っちゅうんは、よっぽどミソシルが嫌いなんかな』

悟空の何気ない一言が、俺の脳裏を反響する。

歴史改変の裏に存在する、かすかな違和感、それが、俺達の前に、重たく横たわっていた。

「なあ、ソシルミ」

「なんだ？」

「おまえの居る世界で、みんなが鍛えた、オレもそうだ、おまえとどんな関係になろうと、張り合うのをやめるつもりはないよ」

プリカが俺の肩に手を回し、ポンと乗せつつ引き寄せる。

身長の低いプリカに引き寄せられた俺は、自然、より掛かるような姿勢になった。

「それに、宇宙でまで歴史の違いがあるかなんてわかんないからな！」

「……ありがとう、プリカ」

「よろしい、じゃ、もうちよつと呑もう」

プリカは師匠の前にあっただいかに高そうな酒をひったくって、まだ酒が残ったままのでかいコップに注いだ。

「さあ、乾杯だ」

「何に？」

「おまえの宇宙最強と、全てが終わった後に出会う、オレたちの子供に」

小さく、ガラスの鳴る音が、俺達を祝う鐘の音だった。

↓特別編—SAGA—、もしくは第三十五話へ、つづく

第三十五話：転生地球人が戦友の兄と出会うまで

うららかな日差し、眼下には豊かな濃緑色の密林地帯が広がり、空は青。

鳥は鳴き、獣は吠える、しかし静かな景色——が、突如、無数の爆炎に包まれた。

「ぬおおおツツツ!!!」

「き、来たぞっ!! どうするっ!?!」

爆発と共に撒き散らされるのは、煙、炎、そして大量の鉄片、更には幾筋もの鉛玉。

たった二人で宙に浮く俺達二人、その全周囲を取り囲む爆発……当然、これは攻撃だ!

「好きにやれ、まだ地上に手は出すなよ、それと、殺しは——」

「ああ、わかってる!!」

俺達が空中で分かされると、大量の砲弾と弾丸が、いわゆる弾幕となって襲いかかる。

だが、砲弾も、対空機銃弾も、俺達にとっては止まっているも同じだ。

当たれば有効打も出るが、当たらない、故に、どうということはない。

「時限信管の設定をズラしてあるのだけは多少面倒だが——むツツ!?!」

迫る小型の弾丸、速度は目測でマツハ3!

弾数……一秒に数十……。

「……なるほどツツ!! いやいよ後がないとなれば、こんなものも出てくるかツツ!!」

最新型の対空機銃、たしかにこれなら、当たりさえすれば命に届く。だが——

「これさえ通じぬと分かれば、貴様らの士気も持ちはずまいツツ!?!」俺は射撃の矢面に立ち、手を輝かせる。

この際、気をつけなくてはならないのは二点、跳弾がプリカ、そし

て、地面の連中を襲わぬこと。

「ツアアアアアーツツツ!!」

タンングステン製の重い弾丸を弾く、弾く、弾き続ける!!

毎秒数十発、毎分数千、だが、師匠の拳より幾分か遅くて軽い。

「わざわざ相手してるのか!?!」

「少しくらい運動しなくては、仕事とはいえ身体が鈍る!」

ひたすら飛び回って攻撃を避け続けるプリカを他所に、俺は自分に挑戦する弾丸を全て弾き飛ばしてゆく。

二千、三千、四千……数万を超えたとき、ふと、対空砲火がやんだ。

「なんだ、弾切れか」

「砲身がいかれたのかも」

「どつちにしろ、そろそろ降りよう……最初っから、相手にすることなかったのに」

プリカが口をとがらせて言う。

確かに、こんな対空砲火は無視して突撃してしまっても構わないし、そもそも地上から侵入すれば攻撃も受けない。

だが……。

「火力を削って安全に戦闘し、かつ、力の差を見せつける、この戦いで必要なのはこの2つだ」

「おまえから出るとは思えないセリフだなあ、ソシルミ」

プリカはそんな風に言いながら、どこか嬉しそうにしている。

……何が嬉しいのか?

「何が嬉しいんだ、プリカ」

「あつ!?! え、ああ……えつと……?」

うっかり口に出してしまった。

余計なことを聞いた、でも、知りたかったのは事実だ、プリカが俺の何を見て喜ぶのか、どうして喜ぶのか。

……最近はこのことばかりだ。

俺がそう思いながら、黙りこくって見ていると、プリカは突然、笑い出した。

「ぶっ……クク……!」

「なんだいきなり、……ハハ、ハハ」

それに合わせるように、俺も笑ってしまう。

出会って12年、関係が結実して、5年。

それで今更こんな甘酸っぱいのもどうかと思うが、だが、それでも、こんな……幸せが『結晶』にならぬまま、ふわふわと漂う、こんな二人も、悪くない。

ガサガサと木々の枝をかき分け、俺達は地上へと降りる。

周囲に漂う、粘ついたような、怖じ気のあるような感覚（俺はこれによく慣れていて、むしろ心地良きすら感じる）。

木陰からこちらを伺うのは、多種多様な……異形。

「来る前から感じてはいたが、やはり、ここに巢食っていたのは魔族だったか」

「魔族で良かったな」

皮肉げな言葉とともにジト目をぶつけて来るプリカ。

周囲への警戒を残したままそちらを見てやると、プリカは俺の表情をよく見て、仕方ない、というような、あるいは、しょうがないからお前と喜びをわかちあってやろう、というような感じで、笑みを浮かべた。

俺はそんなに嬉しそうにしているのだろうか、いや……しているのだろうか。

「久しぶりだなあ、魔族ども、今日はお前等に——」

俺が語りかけた次の瞬間、全周囲より俺達に迫りくる弾丸。

弾く必要すらない、俺は並んで立っているプリカの袖を、腕の端でごく軽く押す。

その瞬間、プリカは一步前に出て、全周囲に『気迫』を叩きつけた！

「っがああ!!!」

俺にすらビリビリ来る凄まじい、ただの気迫。

続いて、勢いを完全に殺された鉛玉がボトボトと落ちる音がする。

「ツツ……流石プリカ、地上最強のエネルギー量だ」

「茶化すな、来るぞ」

弾丸が効かぬと見るや、大量の魔族どもは、剣を抜き、あるいは銃に着剣し、突撃を始めてきた。

「くっそー!! たたんじまえ!!」

「やぶれかぶれだ!!!」

「グゴオオオオ!!」

人間より遥かに優れた能力を活かすには正しいが、俺達の化け物度合いを見てもなお、これとはな。

「プリカ、ぼ……防御、頼む」

「はいはい」

「あ、それと、やつらが自爆を仕掛けてきたら、それも止めてくれ」

「注文が多いなあ……」

プリカは小さめの『スター・ブラック・バイナリー』を作り出し、音を立てて振り回す。

(エネルギー弾を作り出して振り回す技だ、俺は技名を忘れる度に覚え込まされ、5年経った今ではもう忘れることはなくなった)

スター・ブラック・バイナリーが巻き込むのは魔族……ではなく、魔族が持った武器、小脇に抱えた爆弾、どこからか放たれ、迫りくる砲弾だ。

一気に武器を失い、丸腰になった魔族共は――。

「これで、やりやすくなったツツツ!!!」

「ひいひいっ!」

――徒手空拳では地上最強、この俺の格好の餌食である!!

あちこちから煙が上がり、硝煙と血なまぐさい匂いが森の香りを押しつぶす中、俺は木陰に座り込み、魔族共を眺めた。

一斉に正座した魔族の群れ、数百が広がる光景……壮観だ、別に見たくもないが。

魔族どもは土下座したまま、俺と、立ったままエネルギー弾をちらつかせているプリカをチラチラ見る。

「い、命だけは……」

「助けてください……!」

「ゴアア……」

ぼろぼろと命乞いを口に出す魔族に、1人たりとも無傷のものはいない。

だが……致命傷を負った者もいなかった。

俺は魔族達の言葉に、答えてやることにする。

「よろしい! 君達の投降を認めよう、日差しの入らない輸送機を用意したから、あっちの開けた所で乗り込むぞ」

「……へ?」

魔族共の間拔けな声が重なる。

だが、俺とプリカは平然としていた。

そもそも、わざわざ武器を奪ってから徒手空拳を仕掛けたのも、『そのため』だからである。

「お、おれたちを殺さないのか……?」

「殺さない、最初からそのつもりでここに来た、いやあ、降伏してくれてよかったよ」

言葉に続けて、軽くと笑う俺、プリカはしかめっ面でエネルギーを構えたまま。

俺はそんなプリカを普段とはあべこべのジト目で見るが……まあ、警戒するのは当然だ。

俺とプリカは、手を頭の後ろに置かせてから森林の開けた所まで誘導し始める。

奇っ怪なシチュエーションと俺達二人の温度差にビビったであろう魔族が、ついに叫んだ。

「お、おれたち……どこへ連れてかれるんだ!!!?」

金属を叩きつけ合う音、金属で石を叩く音。

聞き慣れた……剣戟の音だ。

「うらあ!!」

「ちゃあ!!!」

二人の男、魔族の男が武舞台の上で試合を繰り広げる試合を、俺と

プリカは、観客席で優雅に観戦している。

うるさくも穏やかな時間……だが、前の席の魔族がいきなり振り返って、俺に語りかけた。

「な、なあ、あんた……あんたほどの武道家が、あんなしょっぱい試合見てて楽しいかよ」

「強者であっても、技術はそうとは限らない、技術で劣っていても、学ぶ所がないわけではない」

「……武道家ってのは、マジメなんだなあ」

「楽しい、とハッキリ言うべきだったか」

会話をすれ違わせた俺と魔族が気まずそうにしていると、隣のプリカがこらえるように笑った。

何故笑っているのかと聞くと、随分楽しそうだから……らしい。

「それで、なんでここに連れてきたばかりのおまえたちが、試合なんて見てるんだ？」

「い……いや、なあ……」

プリカの言う『ここ』とは、魔界のこと。

『おまえたち』とは、輸送機に詰め込んで連行した、魔族どものことだ。

「門番のゴラ……さま、がな、まだまだ登録の手続きに時間がかかるから、広場にいろつて」

登録とは、戸籍のこと。

俺達に連れてこられた魔族どもは、これからここで暮らすのだ。

「ふーん、魔界もいろいろ大変なんだなあ」

「人間もそうだろう？ 組織つちゆうもんがあれば、手続きがあるんだよなあ……」

「そうだ、そう、手続き、勢力壊滅によって野生化した魔族による被害への対処を嘆願された国王は、魔族退治で名高いタンドール王国に助けを求め、下心と善意からそれを受けたチャパ王陛下はそれを一番弟子に丸投げ、一番弟子は天界と魔界の間を行ったり来たりして、ようやく、魔族を確保し、この魔界に収容することで保護する施策を固めたのだ」

「長い長い、うんざりしたのはわかったけど、もつとゆっくり話せヨシルミ、あと、後半はおまえがやりたがったんだろ」

「た、助けてくれたのはありがたいけど、なんで人間のアンタがそんな……」

「ただの善意だ、人道主義と言い換えてもいい、世界のどこにでもあ
る、つまらないもんだ」

「……だが、おまえのつまらん人道主義は、世界を変えつつある……
そうじゃないか？　なあ、ヨシルミ」

後ろから男の声がかかった。

声の主の肌は紫、猛烈なパワーと妖気をたぎらせたその男の名は、
シユラ。

「う、うわっ！　シユ、シユラ……さま!?!」

「そうかしこまることはないよ」

魔族同士はパワーバランスに敏感だ、魔族はシユラに優しい言葉を
かけられながらも、逃げるように席を離れていった。

「こいつの思いつきで、迷惑かけてないよな」

「なに、地上で勝手に死ぬ魔族に同情などしないが、降伏して助けを
求める者を見過ごすほど、われわれは薄情ではない」

プリカが確認するようにぶつけた心配を、シユラは見事に跳ね返し
てくれた。

「ありがとう、シユラ」

「おまえが感謝することではない、だが……そうだな、礼を言いたい
なら、新しい試合相手を連れてきてくれ」

「そういうことなら、うちの道場から何人か出せる、生身じゃ流石に
一歩劣るが、武器術なら……」

「おいおい、おまえの同門じゃあ結局、おまえと変わらないだろう、
いつそ、武泰斗の系譜、カメセン流だとかツルセン流だとかを引つ
張ってこれないのか？」

「亀仙流に……鶴仙流か、面白い、どう思う、プリカ」

「いや、亀仙流はともかく、鶴仙流は、鶴仙人が魔族嫌いだからな
……」

プリカはそう言うが、俺はこの提案に可能性を感じる。

優れたエネルギー技の蓄積を持つ鶴仙流と、生来、エネルギーを自在に操る地球上の異種族、それらが出会った時に何が起るのか。

問題となる鶴仙人の魔族への恨みも、その首魁であったピッコロ大魔王の撃破以来、次第に薄れてきている、もしかすると、これはいけるのかもしれない！

「……な、シユラ、こういうやつなんだ」

「だから好き、か？」

「からかうな、オレは魔族は好きじゃない」

「それなのに着いてくるなんて、随分とカレに入れ込んでいるのね」
いつの間にか、プリカの後ろにピンク色の女魔族、メラが立っている。

考え込みすぎた。

「えーっと、鶴仙流を連れてくる話の後……」

「はあ……ソシルミ、説得は付き合うけど、ムチャだと思うぞ、いくらなんでもな」

「ありがとな、プリカ」

その優しい妥協に感謝を、と言ったところか。

「ルシフェルのやつには馴れ合いなどと言われたが、隣り合った世界同士、互いに高めあい、助け合うことに、意味はあるはずだ」

「さすが、次代の神として目されるだけのことはあるな、ソシルミ」

「それはどうも、俺にその予定はないがな」

シユラは、フられてしまった、とでも言うように肩をすくめた。

……俺が地球の大物になれば、シユラとは二大巨頭か……それも、悪くない。

そんな風に考えていると、長く続いていた試合もやっと終わり、ガヤガヤと次の試合の準備が始まっている。

「さてソシルミ、ここいらで、地上と魔界の友情を記念し……一汗流そうじゃないか」

「それはいい、シユラ、友情に答えよう」

そう言って道着をはだけるシユラ、その奥に潜む肉体は、8年前の

あの戦いの時より、格段に厚みを増した。

技量はどうか？ 気力は？ また、俺を奇跡に追い込んでくれるか？

「あら、カレを取られちゃったわよ、プリカさん」

「シユラは女じゃない、それに、男としてもオレは負ける気がしないね」

「？」

シユラ、メラが同時に首を傾げ、俺とプリカがニヤリと笑みを交わした。

「そういうわけだ、遠慮は要らない、存分にやろう、シユラ!!」

「うむツ!!」

俺達が一息に武舞台へと飛び込むと試合予定を書き込まれた石版が『シユラVSソシルミ』のなぐり書きに変わった。

観客席からは、多種多様な歓声が聞こえてくる。

「うおーっ!! シユラさまーっ、その人間のはらわたを見せてくださいえー!!」

「ソシルミーっ! いけすかねえシユラのやろうをぶつ殺せー!!」

「すばらしい、あの二人の再試合とは……」

俺という異分子の乱入は様々な反応を引き起こし、一方で、俺にとつては、さっきの魔族が言う『しよっぱい試合』さえもが、未知なる刺激だ。

俺の武の道にとって、魔族どもに慈悲を示すのは単なる脇道だったかもしれないが……ここに来て、ようやく。

「これが、おまえの見たかった景色か？」

「思ってもみなかった、いい景色だ」

……ようやくだ、10年以上の長きに渡る俺と魔族との戦い、付き合いは、ようやく、飛び散る血の華ではなく、友情の花を咲かせつつある。

俺が考えた頭でっかちの理想と、プリカのほんの少しの優しさが支え合って、ようやく得た成果だ。

魔族を叩きのめして改心させるなんて考えを持つ気はない、それで

も、彼等と俺達が共に生き延びて、新たな未来を紡ぐことが出来るのであれば、きつと、それは素晴らしいことなのだろう。

例えそれが、新たな戦いの歴史であろうとも。

8年前に家ごと破壊され、新たに建て替えられた自宅。

その鍛錬場で、今まさにヨガを始めようとしていた俺の前に、やけに真剣な顔の相棒、……恋人、プリカが現れた。

プリカはじつと俺を見る、ジト目でも睨むのでもなく見据える。

そして、何度か躊躇するように口を開こうとしてはつぐみ、もごもごして、それからやつと、しつかり声を出した。

「ソシルミ、話がある」

「何だ、出し抜けに」

あくまでなんでもないように聞く俺だが、プリカの満身に漲る決意、体格相応に高い、だが、響く声を前に、若干たじろいでいた。

一体何を話そうというのか？

訓練方針の話か、家の改築か、鉄人拳（今は27号だ、ナンバーが増えるのが早い）では満足できなくなったから巨大ロボでも作らせろと言うのか。

それとも……別れ話か、逆に、我慢できず子供が欲しくなったか。

聞き返す一瞬と、それにプリカが答えるまでの一瞬を足し合わせた瞬間に、悪い想像、いい想像、どうでもいい想像が脳裏をめぐる。

「ソシルミ」

「だから、何だ」

俺がじつとプリカの目を見据えると、若干だが、その目が泳いだ。

「ああ、その、な、オレ……」

「……うむ」

「今日の晩飯、オレが作るよ、やってみたいんだ、料理」

「はア!!?」

普段はロボットだらけの厨房を、小柄な影がちよろちよろと動き回る。

言うまでもなく、ジャージの上から割烹着を着込んだその影は、プリカだ。

「えーっと、まず食材を切って、切る時にはどうやれば……タマネギは濡らすといいんだっけ？」

戦闘とプリカのことに限っては極めて単純な俺にとっては、それだけで眼福なのに、そうしているわけが、自分に料理を作ってくれるためというのだから、たまらない。

品目はシチュー、つまり、俺が幾度となく振る舞ってきた得意料理を、俺に食わせてくれるという。

俺は隅っこに置いた椅子から高みの見物だ。

「ちゃんと指を切らないように、慎重に刃を……あっ!!」

プリカが叫ぶと同時に、大きな破砕音！

続けて風音……俺の眉間に飛来する何か、掴んで見ればそれは、中程から折れた刺身包丁の刃だった。

……刺身包丁!?

「おい待て！　なんでシチューに刺身包丁が要るんだ!?!」

「さし……あ、い、いや……一番切れそうだったから……」

どう考えてもシチューに刺身包丁は要らない、シチューは刺身ではない。

というか、そもそも、プリカは包丁に種類があることを知らないらしい、家庭科の時間何してたんだ？

「……………なあ、プリカ、手伝おうか？」

「いい、オレだけでやる！」

強い決意を前に、上げかけた腰を再び下ろした俺だが、体が下がるのと同時に額からゆっくりと汗がつつたう。

流石に食材を食器用洗剤で洗うようなポカはしないようだが、まな板は真つ二つ（包丁の刃渡りを越えている、どうやったんだ!）、ジャガイモは中心部だけを残して全て剥かれ（焼酎の大吟醸を作る気か?）、人参はいつの間にかみじん切りだ（まるで偏食の子供に食わせるようだが、俺もプリカも、害がなければなんでも食う）。

これは……耐えられない!

「はっはっは!! いやあ、お前、それでよくロボットなんて組み上げられるなあ!」

「それとこれとは話が別だ! くそ!!」
もはや涙声である。

これで、普通の女の子が相手ならまずケガを心配するところだが、プリカは地上最強候補の一人、大船に乗った気持ちで眺めていればいい、氷山に激突しようと、山に登ろうと、壊れるのはそちらの方だ。

「いいか! 料理は科学だとか訳知り顔で言うやつもいるけどな! 組み立てと実験と料理はそれぞれ別だ! 違う技能だ! 一緒にするな!!」

プリカが振り向きながら怒りを顔にした瞬間、蛇口が切り飛ばされ、コロコロと床に転がった。

料理はプリカにとって12年ぶり、いや、野人としての暮らしの中の料理など料理とは呼べないとすれば、少なくとも20年ぶりか? サイヤ人に全く慣れない仕事をさせれば、こんなものなのか。

「はあ……はあ……なあ、ソシルミ」

「手伝う?」

こらえきれない笑いを抑えながら俺が聞くと、プリカは首を横に振って、それから、転がった蛇口と包丁を見比べて言う。

「あー、いや……もし、とんでもなく強い敵がいて、武器を使えば勝てるかもって思ったら、使うか?」

「……最後の手段だ、それも、都合よく使う機会に恵まれたら、の話になる」

「そっか」

一瞬だけ見せた意味深な問いかけを捨てて、プリカは再び台所に向かい合う。

流石に幾度も失敗を経て、刃物の使い方は上達してきたようだ、そこからはすいすいと切って、具の準備を完了させた。

セオリー通りならば、次は鍋に具を入れて焼く所なのだが……プリカもちゃんと予習してきたらしい。

鍋を火にかけ、具を入れる……油を引かずに。

「く、くそ、張り付く！ くあつ!!」

鍋に向かって格闘するプリカ、助言の一つでも入れてやろうかと思うが、また怒りそうだ。

と、ここに来て、笑いっぱなしの俺の内心に、一つ疑問が湧く。

「それで、なんでいきなり料理なんて？ 別に、家事の分担なんて気にするタマでもないだろ」

「くああつ!! チ、チチとちよつとー!」

余裕なく叫び、ガンガンと鍋を叩くようにかき混ぜながら、プリカが答える。

まるで奇妙な楽器を演奏しているようだ、伸びた尻尾と金属音は『おさるのジョージ』にも見えた。

我ながらなんて失礼な、でも仕方ないじゃないか。

「女子力……つてどこか、だが、もうゴリラだぞ見てると」

「ウ、ウホっ!! じゃ、なくてだなあ……!」

若干乗ってくれたことに敬意を払い、俺はそつとヨガの姿勢で笑い封じ込める。

プリカは美しいヨガのポーズを取る俺の意図に気付いたようで、害虫を嘔み潰したような顔をしながら、答えた。

「悟空と悟飯がとんでもない量食うのが、たまらなく嬉しいんだとさ!!」

「うんうん、食いつぷりがいいのは作る側にとつちや嬉しいことだからな」

「ふ、深く同意するな！ なんかイヤだ!!」

「褒めてるのに……」

それにしても、悟空、悟飯、それに有力な武道家であるチチ自身で囲む食卓。

常人で言えば宴会の規模だ、いかに超人レベルに片足突っ込んだ武道家とはいえ、苦勞するだろうに。

それでも嬉しいというのは筋金入りだ。

「チチは、夫と子供にたらふく食わせること、その喜びが女の本懐つて……」

大鍋から響く音、目を見開いて必死で振り回すヘラ、その姿は魔女どころか、一種のシャーマンにすら見える。

女どころではない。

「別に、お前は普段女っぽくならうとかしてないだろ、ハタチこえてジャージとか、普通の女なら……」

「オ、オレはこれでいいんだよ！ おまえはこれが好きなんだから、女としてのオレはこれが一張羅だ、悪いか！」

嬉しい言葉だが、容赦する気はない。

俺は浮かびそうないやらしいニヤけ面の、いやらしさの意味を変えて、更にからかつてやる。

「女なのはどうでもいいって言うにしても、この間、悟飯に『おばさん』って言われてシヨックそうだったなア」

「バ……!! バカ!! おまえ、それは関係ないだろ！ オレはおばさんなんて歳じゃないし、そもそも、根っからの女でもないから余計に——」

「——分かったけど、鍋、煙吹いてるぞ」

「うわああああっ!!」

プリカはヘラを高く振り上げ、鍋を突き破らんばかりに振り下ろそうとしている！

潮時だ、俺はプリカからヘラをひったくり、強引にでも手伝ってやることにした。

なに、料理は作ってもらうのもいいが、共同作業と言うのも、悪くない。

水っぽい、サラサラとした白い液体をスプーンですくい取って口に運ぶ、二人。

シチューのはずのその料理、その出来はと言うと、辛うじて害なく食せるレベルだ。

「モニユ……マク……んむ、失敗した妙なものも、食えない程でないなら、それも味わいだ」

「知ったふうな口きくな」

文句を言っただけで睨むプリカだが、どこかその視線は満足げだ。

……ああ、そうだ、プリカは何か……こういう、変化を求めて、料理をするなんて言い出したんだろう。

変化が欲しくなるなら、そこには必ず閉塞がある、今何かを感じるとするなら、それは……。

「なあプリカ」

「ん」

「もうそろそろ、ラディッツ戦だな」

プリカはぴくりと反応し、それから、食べ物を飲み込んで、俺の言葉に答えた。

ニンジンの溶け込んだシチュー……らしき食べ物は、やはり水臭く、粥のような雰囲気纏っている。

飲み込んだというのは、噛んで呑んだということではなく、そのままの意味だ。

「ラディッツ、どうするつもりだ」

「万一パワーアップしていても、数を揃えて、連携が取れば倒せるはずだ、こつちもそれなりに鍛えてきた」

「……倒せる、か」

若干、含みを持たせた感じで、プリカは俺の言葉を復唱する。

その言葉がプリカを不安にしているとすれば、俺は訂正しなくてはならない。

「ラディッツは根っからのサイヤ人だ、余程でなくては改心は期待できない、偽装降伏も平然としてくるだろう、……諦めるつもりでいるよ、地球の安全が優先だ」

「……そうか、そうだな」

自分でも分かるほど暗い声で宣言する俺に、プリカはただただ、納得だけを意思表示する。

ここまで突っ走ってきた俺が、簡単に理想を手放したと非難する………感じでもない。

プリカは安全志向、むしろそっちの方が好みだし、俺だって、殺さないのはリスクとコストを支払って買う高価な美德だと分かっている。

た。

俺は結局、それ以上掘り下げることにはせず、無難な言葉で、会話を閉めることにした。

「なに、十分な戦力がある、ドラゴンボールもある、後は、誰かが力をするか、また何か湧くとかしなきゃ大丈夫だ」

「それが不安なんだけどなあ」

「まあ、なんとかするさ」

いつの間にかカラになったシチューのどんぶりを持って、プリカは席を立つ。

そしてガリガリと頭を掻いてから、俺の言葉に続けた。

「ああ、なんとかしよう、ソシルミ」

「だがシチューは……流石にお前がなんとかしてくれ、ハラはサイヤ人の方がでかいだろ」

プリカはビクつと震え、こちらを弱った目で見る。

「わ、わたし少食だから……」

「かあつ！ 気持ちわりい！」

蹴られた。

空を見る、すると、目に映るのは空ではなく、自宅の地下に建設された広大な鍛錬施設の天井だ。

だが、俺とプリカは同時に空を見つめた……見つめざるを得なかった。

俺はただ一言だけ、確認するように呟く。

「来たな」

「ああ」

追ってやってきた答えに、俺は事態を確信する——ラディッツが来たのだ。

正確な大きさは分からないものの、俺達を圧倒する巨大なエネルギーの奔流。

無意味な破壊をもたらすものに特徴的な、怖じ気のような気

配。

戦闘民族、戦闘種族、サイヤ人、その文化を引き継ぐ最後の数人の一人、孫悟空の兄貴が、この地球にやってきたのだ。

「この気なら……倒せる、そうだな、プリカ」

「……倒せない相手じゃない」

「ああ、この分なら二人でも行けるかもしれないが、わざわざ危険を犯す理由もないしな、悟空と合流しよう」

俺はすぐにでも家を出ようと、汗を拭い、道着をそのままに、靴だけを履き替えにかかる。

だが、プリカは俺の言葉に異論があるようで、立ち止まって更に一つ、提案をしてきた。

「ソシルミ、ピッコロも助けに行こう、元の歴史と違うから、何が起るかわからない」

「それはいいが……、手分けするのか、危険が大きい気もするが」

「よっぽどハマをしないなら、どっちにしろ、ラディッツと会うときは二人のはずだ」

「……なるほど」

エネルギーの探知能力は俺が優れているが、敵の居場所と強さを見るくらいのことなら、プリカにも出来る。

最悪、気を消して隠ればいいし、共闘を拒まれても、まるつきり一人で戦うハメになるよりはいいだろう。

この作戦は、十分価値あるものに思えた。

「おまえは悟空、オレはピッコロでいこう、おまえと因縁あるピッコロが出会ったら、何が起るかわかんないしな」

「……分かった!! ピッコロを頼むぞ、プリカツツツ!!」

「そっちこそ、悟空をよろしく!!」

俺達は同時に玄関を飛び出し、そのまま、違う方角の空へと消えていった。

この戦いはあくまで前哨戦、誰も死なせず戦おうなんてのは甘いかもしれないが、ここで死人を出している場合ではない。

『Z』と冠される新たな歴史にも、俺達による変化が生まれようとし

ていた。

「ミソシル、おめえもわかつたんか!？」

「ああ、すぐに発つぞ悟空、奴の狙いはお前だ、チチさんと悟飯を巻き込むわけにはいかん」

「そ、それとミソシル、プリカの気があの強えやつと、あとピッコロにいる方に行つちまつてるみてえなんだけど……」

「それは、道中で説明する」

悟空の家に、俺が駆けつけると、悟空の側でもそれが分かっていたようで、冷や汗をかいた悟空が俺を迎えてくれた。

エネルギーを感じする力はないものの、悟空の妻子も、大黒柱の動揺を感じ取って、慌てた様子で駆け出してくる。

「な、なにかあつたんだか!？」

「おとうさん……? あ、ソシルミさん!」

「久しぶりだな悟飯くん、お父さんはちよつと急用が出来てな、俺と一緒に出かけることになったんだ」

「ああ、ちよつとだけ待っててくれよな、すぐに帰ってくるから、チチ、悟飯を頼む!」

……『すぐに帰ってくるから』、その言葉が、元の歴史で悟空を襲った運命を思わせ、一瞬、俺の背筋を凍らせようとする。

その一瞬の躊躇の内に、悟空はすでに筋斗雲を呼び、飛び乗ろうとしていた。

情に厚いくせに決断が早い、流石は戦闘民族、か。

「よつと、ミソシル、早く行くぞ!!」

「悟空さ……!!」

「大丈夫ですチチさん、悟空に俺、それとプリカもいるんです、大船……なんて言ったら、調子に乗りすぎかもしれません、なんとかしてみせます」

「……ソシルミさん、悟空さ、無事でいてける、プリカさんにも、よろしく頼むだ」

俺は無言で頷き、悟空と共にゆつくりと、だが迅速に家を飛び立つ

た。

ちらと隣を見れば、自分を不安げに見る妻子に、悟空はこれまでにない緊張感を覚えている様子だが……その緊張は、決して悪いものではないと俺には分かる。

この緊張感が、今の悟空にはベストコンディションだ。守るものがあるから強くなる、それだけで悟空の強さは説明できない。

それでも……確かにその言葉通りの力が、今の悟空には漲っていた。

「おいミソシル！ な、なんかヘンだぞ!？」

「……………ああ」

悟空が俺を呼ぶ、だが、俺の神経は遠く、遙か数百キロ先で起きている出来事に集中しているのだ。

返答すらしている余力は……。

「ミソシル!!」

「分かっているツツ!! いや、すまん、ああ、この状況は……おかしい」

悟空の家を飛び立って数分、俺達は遠くの気の流れに集中しながら、全速力でプリカのいる方へと飛んでいた。

だが、様子がおかしい、プリカは、ラディッツと出会って少し静止した後、こちらに向かってきているのだ。

一体どうなっている、何かの作戦……いや、流星に俺に何も言わず始めるはずが……。

飛行中の風圧がなければ、おれはじつとりと汗を……冷や汗ではなく、脂汗をかいていたに違いない。

「そろそろ二人が見えてくるぞ、ミソシル、しつかりしろ!」

「ああ、悟空、分かっている」

返答する余裕もない俺に、悟空は少し軽い口調で、だが、緊張した様子で語りかけてきた。

「な、なあ、実はプリカとあいつは仲良くなっちまって、一緒にオラ

たちに挨拶しに来てるとかじゃねえかなって！」

「……………仲良く、か」

努めて明るくしているのであろう悟空の言葉を前に、また俺は考え込む。

そうだ、いや、そんなことは流石にないにしろ、ラディッツの強さを前に、一度油断させておいてから三人で倒すつもりなのかもしれない。

だが……………そこまでラディッツは強いのか、強いならば、なぜピッコロや他の仲間を呼ばない？

「ゴ……………ごめん、ミソシル！ 別に変な意味じゃねえから、な!？」

俺は別に怒っちゃいない、ただ答える余裕がないだけ……………駄目だ、悪い想像ばかりが、脳裏をよぎる。

プリカは何を考えている？ ラディッツ戦については何度か話した、だが、こんなプランはない、アドリブなら、どう合わせればいいのか……………？

いや、それより先に、ちゃんと悟空に応答しなくては、まずは謝罪を……………そう思った瞬間、莫大なエネルギーの塊がこちらに飛来した!!

「~~~~~ツツツ!!」

「ひゃあつ!!!」

すんでの所でエネルギーの塊……………ビーム二筋、球体一つを回避した俺と悟空だが、その余波だけで空中をよろめく。

そのよろめきの数瞬、それが俺達にとっては致命的な隙となった。

飛来する二つの影のうち、一つは停止し、超高速のままこちらに向かって——

「ぐげっ——」

「悟空ツツツ!!!」

飛来した影に、悟空が轢かれ、遙か遠くへと弾き飛ばされていく。……………死んではない、だが、無事かまでは分からない、俺は無事を祈りながら、影の気配に集中する。

影は悟空を弾いたあと、もう一つの影と並んで俺を見た、違う、影ではない、目の前にいるのは、ラディッツと、そして……………プリカだ!

「ふん、きさまの助言通り、カカロットは一度排除した……それで？
そいつがきさまの言っていた男か、プリカ」

「はい」

何故だ、何故二人が一緒にいる。

ラディッツ、悟空の兄。

母星である惑星ベジータの壊滅を逃れたサイヤ人の一人であり、種族的な生業である惑星侵略のための戦力として、同じく生き残りの弟である悟空を……いや、どうでもいい、目の前にいるこの男は、殺戮をなんとも思わない虐殺者だ！

纏うエネルギーも不快そのもの、そんな男が、そんな男と……。

「プリカ……!?!」

「おい、分かっているんだろうな」

「……はい」

まさか、俺を裏切ったのか。

俺の心に忍び寄っていたその予感が、ついに襲いかかってきて、俺を支配する。

血の気が引いている、呼吸が安定しない、目がかすむ、いかん、動揺すれば気の安定までもが失われる。

……違う、そんなはずはない、プリカが俺を裏切るなど、ましてや地球や悟空を犠牲にするなど。

ありえない、何故だ。

ありえない、だが、目の前にはプリカとラディッツが並んでいる。

物事には理由があるはずだ、だが思いつかない、俺を騙していた？
わざわざ騙す理由がない、じゃあ――

「――っ!!!」

「ガ……ブ……ッツツ!!」

いつの間にか、俺のみぞおちに、深々と拳が突き刺さっていた。

かすみ、更に濡れた視界の中心に映るのは、めり込んだ拳の持ち主は、俺の愛する人。

分からない、なぜ。

「……これで、いいのですか」

冷たい声で、プリカが確認を取る、相手はラディッツだ。
遠のいてゆく意識の中で、プリカの声だけは、ばかにはつきりと聞
こえる。

「ラディッツ……お兄様」

不可解な、しかし、どこか致命的な、その言葉までも。

↓つづく

第三十六話：転生TSサイヤ人が森へと帰るまで

「ぎゃうっ!!!」

ラディッツに腕を踏みつけられて、悟空が叫んだ。

その腕は、踏みつけられる前からめちやくちやにへし折れていたけど、今の踏みつけで、もっとひどい有様になった。

「あ…………うあ…………」

「どうだカカロット、そこにいるプリカのように、オレについてくるというなら命まではとらん、体も戻してやってもいいぞ?」

荒野に横たわった悟空の体は、ボロボロだ。

まともな手足は一本もない、顔も、胴体もひどく痛めつけられていて、地球人が出来る普通の治療じゃ、絶対に治らないのがよく分かる。悟空の兄貴…………そして、オレの兄貴、ということになる、このラディッツも、それをわかっているから、こんな意地の悪い脅迫をしているんだ。

「い…………いやだね、オラ、悪者の仲間になんかなんねえ…………!」

「プリカとおまえが仲間になれば、この星を見逃してやってもいいと言っているのに、残念だ、なあ、プリカ」

「ええ、お兄様」

戦闘民族、サイヤ人。

かつて惑星ベジータを根城にしていた、地球人にそっくりで、非常に強い肉体とパワーを持った種族。

惑星の侵略や住民の民族浄化を仕事としているこの種族は、惑星ベジータの壊滅によって全滅した。

生き残りはほんの僅か、他の星を侵略しに出ていた者と、星の住民の根絶やしのために送り込まれた子供だけ。

他の惑星を侵略していたのが、オレの兄…………ということになるラディッツや、その仲間のベジータとナツパ。

送り込まれていた子供が、オレと悟空。

それぞれ、ラディッツの弟と妹、バーダックの息子と、娘だ。

「心配するなプリカ、カカロットが仲間にならずとも、おまえの夫だ

けは生かしておいてやろう、戦力としても、まったく役立たないというほどでもなさそうだしな」

「ありがとうございます」

「……プ、プリカ……ほんとうにそんなやつ仲間……、い……いや！　こんなことが前に——ぎゃああああ!!!」

オレは余計なことを言いかけた悟空の傷口に、即興の気功波を打ち込む。

この地球では、オレとソシルミ、そしてピツコロと並んで最強の人だった悟空も、ラディッツ相手じゃ、こんなものだ。

戦いの始めには、悟空の不意打ちの練気弾がスカウターをふっ飛ばしたりもしたけど……それだけだった。

ラディッツも強くなっているんだ、気を見て、この歴史の戦いで元の歴史より強くなった悟空と比べれば分かる。

「お兄様、言ったでしょう、こいつはどう脅しても、例えば妻子を人質にとっても、自分の心を曲げはしません」

「そのようだな、これでもたった三人の兄妹……殺す時くらいは、一撃で仕留めてやろう!!!」

「す、すまねえチチ、悟飯……!」

ラディッツは手に気を貯め、そのまま放ったビームで悟空の胸を貫いた。

オレは一瞬だけ目を逸らしてから、死んだ悟空を見る、宣言通りの、即死だ。

「ふん、せつかく惑星ベジータの爆発から難を逃れたというのに、つまらん意地を張って死におって」

「まったくです、ですが、カカロットもまさか兄に殺されるとは……サイヤ人のさだめというやつでしょうか」

オレとラディッツは二人で悟空の死体を見下ろす、ラディッツは更に勝ち誇り、悟空を見下げて小さく笑った。

「はっはっは、親兄弟ですら殺し合うのがサイヤ人、それゆえに、われわれは強さを保ってきた……さだめとはよく言ったものだ」

「ええ、まったく、その通り」

オレはそんなラディッツの腰に巻かれたしつぽを握り込む。

「はっ……ぐ……!!?」

「案外、隙だらけだな」

「き……きさま……一体何を……!!?」

「親兄弟でも殺し合うのがサイヤ人、あんたの言った通りだ、兄さん」

しつぽを握り込んだのと反対の手に、エネルギーを貯める。

ラディッツは脂汗をかいて、今にも倒れ込みそうだが、しつぽを鍛えておかないとつかつなやつだ。

いや、鍛えていても、血の繋がった家族には通じないのかもしれない。

「バ、バカな!!? このオレを殺すつもりか!!」

「その通りだ、オレはこの星を守る」

「オレを殺せばすぐに仲間が来る、オレよりも何倍も強いサイヤ人だぞ!!」

「強いサイヤ人が妹に殺された間抜けを助けると思うか? 偉大な

戦士バーダックの息子が情けない命乞いをするもんだ」

ラディッツは小さくうめく。

下級戦士でありながら超強力な戦闘力を誇ったバーダックの息子……コンプレックスの一つや二つあるか。

でも、オレはソシルミほど、オレが裏切ったあのソシルミほど、優しくくない。

「せっかくオレたちは平和に暮らしてたのに……惑星ベジータのことなんか知らずに」

「戦闘民族サイヤ人が平和だと!? それこそ、なによりの苦痛のはずだ!!」

戦闘民族にとつて殺すことじゃない、戦うことが幸せなんだ、それは平和の中でも出来る。

戦いの相手と高めあい、どちらが勝っても喜べる戦いが、オレたちには幸せだったのに。

「平和を勝ち取って……互いに鍛えあつて! オレと悟空は互いが

兄妹だと知らないままでも!!」

「よ、よせっ!!」

「互いに大切な人を見つけて、幸せに暮らしてきたのに——!!!」
気はもう十分に溜まった、元の歴史より強くても、仕留めるのには
十分なパワー。

それを指に移し、敵に突きつける。

名前はない、魔貫光殺砲の پاکリに、技名なんて要らない。

「死ね、ラディッツ!!」

「ぐぶっ!!」

ビームは喉を貫いて、ラディッツの命を奪った。
終わった。

悟空は死んだ、ラディッツも死んだ、オレの仕事は終わった。

脂汗体中から滲み出して、ジャージが重たくなっている。

あまりの気持ち悪さに額を拭いても、拭う布、ジャージが濡れてい
て拭いきれない。

「はあ、はあ、……はあ……はあ、ま、まずは、ラディッツの死体の
装備と、スカウターの残骸の回収、悟空は……」

気を探ると、遠くの空から、Z戦士たち、そして、近くでふらふら
と飛ぶソシルミ。

「あいつらに任せて、オレは、もう行く」

用意しておいたホイホイカプセルから、ステルスジェットを出す。

これに乗って、気を抑えていれば、誰にも見つからない。

行き先も、しつかり目星をつけてある。

……ソシルミも、Z戦士も、いない所だ。

「つがああああ!!!」

深い密林の中、オレは叫びながら、殴る。

拳から、相手の骨がめちやくちやに碎ける感覚が伝わってくる。

相手を殺しながら、血を浴びないやり方は、ずっと前に会得した。
殴ったのは恐竜、オレは恐竜を仕留めて、今から肉にするんだ。

「ひさしぶりだけど、案外覚えてるもんだ……な！」
皮を引きちぎってそこらに投げ、肉をバラバラにして、用意しておいた鉄板に叩きつける。

「ふん!! とお!!! そいつ!!」

残った骨は、適当な大きさに砕いて……。

破片が鉄板に入りそうになった、もっと丁寧にやらないと。

「ふう……さ、食うか」

なんて言っただけいいけど、恐竜の縦だか横だかわからんステーキの軍団は、ちよつとやそつとじゃ焼けそうにない。

気弾で焼く……と、ソシルミには間違いなく見つかるから出来ない、焼けるのを待つ。

ただ待つ。

「久々とはいえ、ちよつと乱暴だったなあ」

今更だけど、少し反省する。

恐竜がかわいそう、なんて言うタイプじゃないけど、食べ物を粗末にしちゃいけない。

鉄板も痛む。

「よし、そろそろ焼けたか」

いくらサイヤ人でも、そこらのケダモノの肉を生焼けてモリモリ食ったら、お腹を壊す。

オレは肉汁もクソもないくらいに焼けた肉を豪快にかじる……美味しくない、でも、肉を食ってるって感じた。

「ぐあつ! がぐつ!! あぐつ!!」

わざと声を出しながら肉をガツガツ食べはじめて一分足らずで、10000グラムくらいを食い尽くし……。

「がっ……んがっ……げふ! げふ!」

……むせた。

がつつきすぎだ、こんなに急いで食べる理由は……ああ、なるほど。

「や、やけ食いだな、これは……」

今やってるのはやけ食い、さっきのは、八つ当たり。

自分でも分からないくらい深い所で……荒れてるんだろうな。

……ラディッツは、オレと会うや否や、オレを妹と呼んだ。

オレと悟空の父親、バーダックは二人の子供を別々のポッドに乗せて地球に送り出した、場所がズレた理由は多分、単純な計器の誤差、それか、銀河パトロールって宇宙の番人……気取りの連中に発見されにくいようにしたかったんじゃないのか、って、ラディッツは言ってた。ラディッツ、バーダック、聞いたことのある名前が、ずっしりと、リアリテイを持ってオレにのしかかってくる。

オレはそんな重荷を腹にとどめておくことが出来なくなって、ゆっくり、口から吐き出す。

「ラディッツは、死んだ、あいつがオレの兄さんだなんて、これまで知らなかった、でも、殺すしかなかった、ソ……、あいつは殺していると言ったけど、やっぱ、イヤだろうな」

苦しい、口から出る言葉と一緒に、目にも涙がにじんで、胸が苦しい。

あまりの苦しさに、オレは一瞬出そうになった名前を一度飲み込んで、別の言葉に言い換えて、言葉を終わらせた。

「ベジータは来ない、ドラゴンボールの情報は与えてない、兄さんを殺すハメになったけど、その代わりに、地球を救えた、誰かがやらなきゃいけないことだった」

元の歴史では、マジユニアが悟空もろともラディッツを殺す、そして、冥土の土産に、悟空はドラゴンボールで蘇るのだと教えた。

その言葉が、ラディッツの何倍も強力な戦士であるベジータとナツパを呼び寄せてしまったんだ。

でも、あいつなら、もしかしたら、ラディッツでも。

「あー!!! うあああーっ!!!」

オレは頭をガンガン叩いて、側に置いた水を、2リットル一気に飲み干す。

駄目だ、完全に精神がやられてる、というか、これは禁断症状だ、あの存在が、オレの思考回路に深く根ざしてしまって、取れないんだ、考えるだけ苦しいだけなのに。

「……まずい、でも、気弾で焼いたのよりは、マシか」

気弾で焼いた肉のまずさから、あの味噌汁の旨さと、それを振る舞うあいつの、それがオレをあゝ森から……。

オレは悟空を殺した！

どうして、悟空を殺したんだ!?

あの、気のいい、憧れの、妻をもった、一児の父、つい数分前に兄弟だと知ったあの男を!!

「オレは悟空を殺した、その理由は、悟空を殺さないと、悟空は界王様の所で修行できない、そうなれば、パワーアップは頭打ちで、界王拳も使えないからだ」

元の歴史では、悟空は一年後にやってくるベジータを倒すため、界王様の住む界王星で修行をするはずだった。

あの世にある蛇の道、その先に住んでいる宇宙の管理者の一人、界王様が、元の歴史での、悟空の次の師匠だ。

界王様から教われる戦闘力を何倍にもする界王拳と、周囲のパワーを集めて敵に叩きつける元気玉が無ければ、これからやってくる数々の危機に対抗できない。

それに当然、界王様と修行しないなら、そのコネもなくなる、界王様とのコネがなければ、これから起こる危険な事件はもつと苦しくなるはずだ。

悟空が死なない道は……ない。

「ゲームみたいに、界王様のことを教えて自殺してもらうなんて、できるわけないんだ、悟空は夫で、父親だ、子供を置いて一年も死んでるなんて、できるわけがない」

それを強制的にさせたのは誰だ、オレだ!

良心と、悟空、そしてチチとの友情が、オレを責める。

「人としてやっちゃいけないことだ、それは分かっている、でも……」
綱渡りの、しかも大味な戦力バランスで訪れる数々の危機。

それを乗り越えるのに、悟空の力は絶対に必要なんだ。

正直な懸念、恐怖、でも……どうしようもなく、言い訳がましい。

オレは自分自身の言い訳から逃げるように、もつと深く、罪を思い出そうとする。

「オレはソシルミを、オレを信頼しきって、疑うのも辛いつて目で見
てくるソシルミを、ぶん殴つて、気絶させて、あいつの親友を殺して、
あいつの親友の兄貴を殺して、逃げた」

食が進んでない、肉が焦げ付き始めてる。

オレは無理やりにもそれをかつこむ、料理の方法くらい、ちゃんと教わつとけばよかった。

あの、できそこないのシチューの方がよっぽどマシな……いや、あれは、比べ物にならないくらいうまかった、あいつと食べたから、あいつと作ったからうまかったんだ。

「あいつは強くて、賢くて……正しいことが何なのか分かってた、甘ちゃんだけど、行動力があって……世界を、いい方向に変えてつた」
オレはどうだ。

あいつが来なきや、オレは一生、あの森で暮らしてたはずだ。

ソシルミがいないと何もできないだなんて、そんなことはない、それに、オレにだって出来ることはある、でも、オレは世界を変えられない、そんなタマじゃない。

「だから、あいつの代わりに、オレが地球を守らないと、あいつが、きれいでいられるように」

きれい、そう言った途端に、オレの心の中にあいつの姿が浮かぶ。いつでも笑っていて、ちよつと子供っぽくて、何をするにも、正しい未来を選ぼうと必死だったあいつ。

あいつが！

「あいつがオレを見た、あの情けない目が、消えない、見たくなかった！ ああしたのはオレだ、誰だって、恋人に裏切られればそうなる！！」

憧れていた、前世でずっと見てきたあの悟空よりも実際に見た悟空よりも、テレビや漫画で見てきたどんなヒーローたちよりも強く、ソシルミに、ソシルミが見せる未来に。

だから。

「あいつに死んでほしくない！ あいつの地球を守りたい!!! あいつに殺しなんてさせたくない!!!」

いつのまにかこぼれていた涙を撒き散らしながら叫んだ言葉。
綺麗事だ、ごまかした。

何を誤魔化しているのか、考えたくない、でも、頭じゃなく、胸の中
でくすぶっているこの気持ちは。

「はあ……はあ……」

オレはなんとか息を整えて、まだ、鉄板に残る肉に取り掛かる。
考えていることとやっていることが違うのは、自分でも分かっていた。
た。

あいつへの憧れと、愛情と、オレたちが背負った責任と、のしかか
るおかしな未来にオレの頭はやられてしまったんだ。

「こんなことなら、あの日、あの森で、出会わなければ——」

口から出かかった言葉を潰すために、炭になりかけた肉をガジガジ
と噛み砕いて、飲み込む。

「むがつ、がふ、げほ……だめだ、あいつと会わない人生なんて、も
う、想像できない」

むせた喉の痛みも、あんな言葉をいい切ってしまうより、ずっとマ
シだ。

もうオレはあの山の猿じゃない。

ソシルミと出会って、あいつに救われて、あいつに憧れ、あいつを
愛したオレだ、自分が生まれたことを否定することは、できないんだ。

「や、やっぱり……」

それでも、止めた言葉の代わりに、どんどん吹き出してくる、この
気持ちは。

「一緒に、いたい……おまえが好きだ、ソシルミ……」

未練だから、しまい込んで。

やってしまったことを、やり通さないで。

あらゆる都、カメハウス、カリン塔、オレがいた森、タンドール王
国。

かつての仲間たちにうつかり見つかりつこない場所にある、大きく
も小さくもない密林、それがオレの選んだ、オレがこれから住む場所

だ。

そんな密林の中のひっそりとした溪谷に、オレはホイホイカプセルを放って、隠れ家を作った。

《ロボAからZD、オールグリーン、偵察行動中、登録された人物の反応のある地点、1》

「どこだ」

《ロボLとM、カメハウスです》

Z戦士や、ソシルミにまつわる重要人物の居場所には、既に自前の偵察ロボットを配備してある。

流石に神殿やカリン塔は不敬だし、見つかりそうだから置いてないけど、どうやら、無用な心配だったみたいだ。

「音声と映像、つなげ」

オレが短く命令すると、二つのカメラからの映像と、二つのマイクによって拾われ、処理された音声繋がってくる。

どうやら、Z戦士はカメハウスに集まって、状況を整理してるらしい。

その中でも、中央に立ってみんなに説明してるのは……ソシルミだ。

『……ず、悟空が死んだのが分かった、まだ生命力は残ってたから、多分、一撃で殺されたんだと思う、その次に、ラディッツが死んだ、プリカが殺してくれ……殺したんだと思う』

『ラディッツちゅうのが悟空を殺して、その後、ラディッツをプリカちゃんが殺した、ということじゃな?』

『ええ、そう見てよろしいかと、ラディッツを油断させるために近付いたのでしょうか』

『それで、わざわざ孫とおまえを? つじつまが合わんな、気の大ききさくらいオレにもわかった、三人でかかれば、やってやれない相手じゃなかったはずだ』

『分からない、だが、何か理由が……いや、すまん、これは俺の欲目だ』

ソシルミはオレをかばうようなことを言っっては、自分で言い直した

り、天津飯なんかの仲間につつかれたり、まさに、板挟みだ。

申し訳なさが溢れてくる、長く見ていられない、それでも、みんなが何を考えてるのかしつかり把握しておかないといけない。

それに、これでわかった、オレは……。

「ソシルミを、ちゃんと突き放さないと、いけない」

また、口に出して確認して、また、胸が苦しくなる。

あいつを、オレの犯した罪に、オレがやる汚れ仕事に巻き込まないためには、あいつがオレに気を使わなくて済むようにするには、オレは勝手に希望を捨てたクソ野郎で、あいつは信じていた仲間裏切られた被害者じゃないといけない。

……いや、その通りなんだ。

そのためにあいつが傷付いたとしても、オレがどれだけ孤独になつたとしても。

オレがあいつの世界を守る、後は、あいつは、あいつのやり方で世界を救ってくれるはずだ。

それで、あいつが守りたいものを傷つけるとしても……やるしかない。

「そうだ、まずは、ラディッツが持ち込んだ機械を見ないと」

技術力で世界と関わり続けるという手だつてあるんだ。

オレは赤くなっているのが自分でも分かる目元をもう一度拭って、ラディッツから奪った戦闘服、スカウター、ポッドのスイッチを見る。

「オレのとそう変わらない、技術力の進歩は、それほどでもないのか……」

壊れたスカウターも、若干形が違うだけだ。

スカウター、ソシルミは『盗聴の可能性がある、ヘタに触るべきじゃない』なんて言っていたけど、もういまさらか。

この技術はとても魅力的だ、ソシルミたちの居場所も、地球に侵入した異星人の居場所もすぐにわかる。

それに、気を読み取る手段がわかれば、ごまかす手段だって、わかるかもしれない。

「まずはそーつとだ、爆発でもしたら、コトだからな」

オレはスカウターに触る、アニメや漫画じゃ一見して使い方の分からないよく分からないマシンに見えたけど、実際に手にとって見るとなかなかどうして、わかりやすいデザインだ。

くるくる回す、装着用の装置も、見てみれば簡単だ、様々な異星人の耳に付けるのに適した、考えられた形をしている。

さて、何から触るか、バラすにしても……そう思いながら回していると、カチ、と、小さく音がなった。

《ガ、ガガ……》

「わっ!!? う、動いた、まだ生きてたのか!」

《ロ、ロロ、ロロクオ……メッセージヲ……サイセイ……シマス、ゴジカン……マ……》

録音メッセージ……?

誰の、何の録音なんだ、留守電か?

録音時期は丁度、オレがラディッツと行動を共にしてから、ラディッツを殺すあたりの時刻だ。

何か……嫌な予感がする。

『ピー……い、ラディツ……オレたちを……度胸……だ……』

ノイズが混じったその声には、聞き覚えがあった。

ベジータの、声だ。

『……いも……とは……なんなのか……だが、いい……たいく……今から……』

「ラディッツは何かを教えていたのか、いや、それともオレたちの会話を傍受したのか?」

オレとラディッツは一緒にいたはず、もし通信したなら、いつだ?

……そんな呑気な考察は、すぐに打ち切られた。

『出発……する、一年かか……ヒマを……この際……レーニングでも、はっ……は……っは……ブツン』

とぎれとぎれでも、何を言っているのかすぐにわかった。

前世でさんざん胸に刻みこんだ、印象深い出来事だ。

《サイセイ……、シユウ……ウ……ガピ》

「ベジータが、来る……!」

サイヤ人の王子ベジータ、戦闘力19000。
その部下ナツパ、戦闘力推定5000。

戦闘民族サイヤ人の数少ない生き残り、宇宙の地上げ屋、フリーザ軍の手下。

元の歴史では、地球にドラゴンボールがあるという情報を傍受して地球に来たはずの連中。

それが……この歴史でも、理由なんてないはずなのに、やってくる。「ま、まさか……」

せっかく、ソシルミを裏切つてまで防いだ、そのつもりだったのに。最悪の、本当に最悪の想定だった、どうして来るんだ！
壊れたはずが、少しの間だけ動いてたのか？

オレがほんの少し目を離れたスキに、ラディッツはあつちと話を通していたのか？

歴史の修正力、なんて馬鹿げた言葉まで思い出す。

何が起こつたんだ、わからない、でも、起こってしまったことは事実だ。

スカウターからのノイズの代わりに、ばくばくと心臓が暴れる。
やばい。

ラディッツさえ強化された状態で現れる、更に強くなったベジータとナツパ、そして不確定要素。

それを、なんとしても防ぎたかったのに。
「……ソシルミたちにこれを伝えよう、まだ間に合う」

だからだらあふれる汗、割れそうな心臓、震える手、揺れる心をすべて無視して、口と、思考だけが動く。

そうだ、やることは最初から決まっていたんだ。
死んだ悟空を界王星に送り込んで鍛えてもらおう、強くなった悟空

が、ベジータたちへの強力な戦力になる。

これは考えてみれば、オレが本来やりたかった生き方じゃないか、原作の事件を、そのままクリアしていけばいい。

不確定要素はオレが潰す、ソシルミは頼らなくていい、ソシルミももうオレが憧れた世界の一部なんだ、なら、会いたいとか、一緒に

居たいなんて考えない。

「何も変わらない、やることは同じだ」

オレは目元を触る。

赤く腫れた目から、新しい涙はこぼれていない。

ちゃんと、乾いていた。

スカウターをいじる手を止めて、空を見る。

知ってるけど、見慣れてるわけじゃない天井だ。

オレの視線の向こう、渓谷の上で、よく、とてもよく知った気が旋回していた。

「き、来たのか……いー」

ソシルミが来た。

気はすっかり消していたのに、どうやってここを見つけたのかもわからないけど。

とにかく来たんだ、あいつなら、おかしくない。

「と……とにかく、出迎えて、違う、いや、違わない、それで……」
しっかりと突き放さないと。

そう思っ、口に出そうとしたのに、言葉が詰まってしまう。

嫌だ、あいつがオレを探しているなら、今からでも。

きつとそれで間に合う。

「違う、違う！ それじゃ、何も変わらない、ソシルミはオレを許すだろうけど、許したら……あいつまで」

あいつまでオレと一緒にになる。

人としてあるまじきやり方で歴史に介入して、仲間を裏切ってもいいんだと、そういうことになってしまう。

でも、全てを打ち明けて、ちゃんと謝ったら……あいつは……。

荒くなった呼吸と心臓の音が耳にまで聞こえてくる中、控えめな、ドアノックの音が響いた。

「いるのは分かっている、ここまで近づけば、感覚でも分かるぞ、プリカ」

自分の意思とは関係なく喉がすぼまる。

オレはあいつと会うのが怖いのか？

……違う、あいつが来たのに、あいつの声に興奮してしまってるんだ。

来てくれてうれしい、って、そう思っている。

「……ああ、いる、鍵も、開いてる」

「入るぞ」

絞り出した言葉に答えて、あいつがノブをひねる。

そんな単純な動作すら意識してしまう、たった数時間で……こんなに飢えてしまうものなのか。

ソシルミはオレの身長に合わせて買った小さめの隠れ家の小さめのドアを窮屈そうにくぐって、正面で待っていた、オレを見る。

不安げな目だ、まだオレを信じている、腹を殴られたことなんて、全然気にしてない、いつもの……あの、ソシルミをそのままに、弱りきっていた。

「プリカ、この家は……あらかじめ、用意していたのか？」

オレを信じてるくせに、まるで裏切りの計画を非難するようなことを言う。

こういうやつだ、気遣いは出来るくせに、妙に無神経で……。

ああ、オレは本当に。

「そうだ、前から用意してた」

「プリカ……」

ソシルミは言った後になって自分の質問の意味が分かったみたいで、ゆらゆら目を逸らす。

不器用なやつ。

こんな時でもオレは、こいつが好きだと思おうのをやめられない。

オレは本当に、こいつのことが好きなんだ。

なら、しつかりやらなくちゃ。

「ずっと前から、こうなると思って準備してた、もう、おまえとは一緒にやれない、そう思ってたからな」

「お前がラディッツを殺すのを目的にして離脱したのは分かっている、だが……」

「だが、なんだ？　悟空を殺す必要はなかった、か？　まさか、ラディッツ一人殺せばそれで終わりなんて思ってたわけじゃないよな」
ソシルミが、答えに窮するというよりも、ただただオレの剣幕に驚いた感じで、息を呑む。

悟空が死ななければ、重要な技術、界王拳は手に入らないし、師匠の一人が居なければ強化もどこかで止まるかもしれない。

ソシルミはそれもなにかの手段で取り返しがつくと思っていたんだろう、オレは……思えない。

意見をすり合わせれば、和やかに話すことも出来る内容を、オレはわざと、鋭い言葉でぶつける。

「オレに言われてようやく気づいたのか？　計画性のなさは、相変わらずだな」

「プリカ、戻ってこい、ドラゴンボールがある、事情を説明すれば、皆……」

「おまえの所には帰らない、おまえとじゃ戦えないから、こんな手を使ったんだ」

「ツツツ……!!」
ソシルミが目を見開く。

何を思っているのか、ぐるぐる巡る複雑な感情が、全部伝わってくる。

今すぐ、なんちやつてとか、そう思ってたけど……とか、誤魔化して抱きつきたい。

オレの居場所は、おまえの隣にしかないんだと伝えたい。
……それは、できない。

「おい、お前がラディッツを殺したなら、あと11年は平和になる、人造人間やバビディが来るまでこうしてるつもりか」

「ソシルミ、この世界は原作とは違う、なにが起こっても、おかしくない」

オレにもそれは分かっていた、それなのに手を出せなかったのは、オレも同じ。

オレは迫りくる危機を、兄弟二人の血で押し流すことしか……それ

すら、出来なかった。

でも、お前なら。

「……まさか、ベジータが来るのかツツ!!?」

「そうだ、ベジータは来る、これで、悟空を界王星に送る理由が出来たな、フリーザ編も始められる」

聞いたよな？

帰ったら、すぐに悟空を界王様のところに行るんだ。

オレはそう目で伝えたくて……それすらも誤魔化して、これがオレの本意であるかのように、ほくそ笑む。

「おい、どういふことだ、ベジータが来るだと、プリカ、お前が——」

「おまえの生やさしいやり方では、世界は守れない、だからオレはここにいて、だから、もう終わりだ」

……ソシルミ、おまえが作った世界に、作る世界に、オレは要らない。

おまえの優しさが届かない場所にオレは手を伸ばせる、でも、オレには血を流すことしかできないんだ。

それでも、その罪を背負って、おまえを守る。

「いや、まだ間に合う、なあ——」

「よせよ」

情けなく顔を歪めて、手を差し伸べるソシルミを。

突き放す言葉を言わないといけないのに、できなくて、小さく、吐き捨てるように呟いて。

手を、血が出るまで握って、心の中で、泣きわめく今までの自分を縛り付けて。

ちゃんとした言葉を、後に続ける。

「もう、おまえは信用できない」

「プリカ——」

駆け寄るソシルミを、オレはただ手を伸ばして、押し返す。

その瞬間に感じた胸板の暖かささえ、オレの決心を壊そうとしてくる。

やらなくちや。

「帰れ、オレはオレでやる、おまえは勝手にすればいい、もう、どうでもいい」

例え、それで一番傷つくのが、おまえに一番強く変えられた、救われた、オレそのものだったとしても。

↓つづく

第三十七話：転生地球人が空を見上げるまで

俺は空の手を、軽く握る。

そして、腕を前に差し出す、その先にある木の板……戸板を叩くために。

だが伸ばされたその手は、小さく迷い、そして、止まった。

「……………」

声すら出さずに、俺はドアの前で立ち止まっている。

逡巡している。

このドアを叩き、中に居る人を呼び、話をしたい。

だが、俺にその資格は、いや……単に俺が怖いだけか。

俺は悟空の家の前で……俺の相棒が間接的にか直接的にか、殺した男の家の前で立ち往生していた。

既に、悟空が死んだという情報はその妻であるチチの知る所だ、だが、それでも……。

頭の中でいくつも接続詞が並ぶ、考えがまとまらない。

呆然と、数十秒も立ち尽くしていると、不意に、目の前のドアが開かれた。

「あ、あの……なしただ、ソシルミさん？」

現れたのは、悟空の妻……チチだ。

この人生でもよく知った顔と声、俺とプリカと孫家とは、家族ぐるみの付き合いだった。

そのチチはかなり憔悴している様子だ、無理もないだろう、復活が約束されているとはいえ、自分の夫、自分の息子の父親が死んだのだ。

顔には泣きはらしたような跡がある、まだ寝不足にまではなっていないようだが、食事が喉を通らないのか、ほほは若干こけていた。

「……すいませんチチさん、ノックもせず」

「いやいや、とんでもねえだ、なんかはわかんねえけど、とりあえずウチに入ってけろ」

気まずい。

ただでさえ気まずいところに、モタモタしているものだから更に気

まずさを重ねてしまった。

家に迎え入れられた俺は、チチと居間の机越しに向かい合う。

悟飯の気配がないが……。

「ああ、悟飯ちゃんなら、悟空さが居ねえんでダダこねて、それから寝ちまっただよ……まだ、あのことは伝えてねえ」

寝室のある方向を見て、チチは辛さをこらえるようにして小さく言った、俺も釣られてそちらを見る。

チチは『ダダこねて』と言ったが、多分、悟飯は泣き疲れて寝たのだろう、それもかなり激しく泣きわめいたに違いない。

視線をそのままにしていると、チチが不安げに俺に問いかけてきた。

「ぶ……悟飯ちゃんがどうしただ？」

「いえ、ただただ申し訳ない、と……すいません、本題に入ります」
父の不在に大きく揺らぐ悟飯のエネルギーは、だいぶ前から俺も感じていた。

4つの子供に、父親の予想外の不在はこたえる。

だがそれはあと一年続き……そして、俺はそれを伝えなくてはいけないのだ。

「チチさん、悟空が神様の所で鍛えていたのは、知っていますね？」

「あ、ああ、それが何かしたただか？」

「悟空はサイヤ人の攻撃から地球を守るため、神様より偉い、宇宙の一角を仕切る大物、界王様のいらっしやる地に修行に行くことになりました」

「神様でも途方もねえのに、今度はその上だか……」

チチは素であろう、現実感を失ったような声でぼんやりとつぶやいた。

だが、これは現実だ。

「問題は……界王様のいらっしやる場所、界王星という場所は、あの世に存在していることです」

「……それって、悟空さは、甦れねえってことだか？」

空間の温度とでも呼ぶべきものがぐっと下がる。

チチは俺に遠慮しながらも……こちらを見る目は座りかけていた。「あと一年、サイヤ人が来るギリギリまであちらで修行して、急いで地球へと帰ってくる、という形になるかと」

「そう、だか、あと一年……」

一年という月日は、人生には短い。

だが、若き夫婦と4歳の子供には、大事な時間だ。

それを奪う当事者になっている事実を、俺は改めて意識する。

だが、それでも、界王様の元で習得出来る技術とパワーは、これらの戦いに欠かせない。

プリカが悟空を間接的に（と、思いたい……）死なせたのも、そのためだ。

「ま、まあ、武道家としてこれ以上の名誉はねえだよ、宇宙の神様みたいな人に面倒してもらえらるんだべ？」

チチは強がっている、武道家としての洞察力やエネルギーを読む力を使わなかったって、はつきりと分かる。

「……そうかもしれませぬね、出来るなら俺が行きたかった」

「だめだソシルミさん!!」

「ツツ!!」

「……す、すまねえだ、声大きくしちまって、でもソシルミさん、自分からそんなこと言っちゃ、だめだよ」

無神経が、こんな場面でもついてまわる。

俺は何も言えなくなり、しばし黙り込む……だが10秒も経たないうちに、チチは新しい質問を振ってくれた。

「それで、悟空さは何か言ってたか？」

「はい、貴女と悟飯くんには済まない、でも……」

「でも？」

「わくわくする、と」

チチはキョトンとした顔になって、ほんの少しだけ、笑みを浮かべた。

いや、確かに空気が和らいだが、その評定を笑みだと思ったのは俺の見間違いかもしれない、それほど小さな、ほんの小さな動きだ。

「やっぱそうだか、悟空さらしいだ……、それで、他にはどんなことを言ってたただか？」

「他に……ええ、そうですね……」

確かに、悟空がチチに伝えようとした言葉はまだあった。

だが、それを俺の口から言うのは……はばかられる。

そんな俺の葛藤を見抜いたか、あるいは終わらせようとするように、チチは小さく身を乗り出して、俺に問いかけた。

「……なあ、ソシルミさん、あの……プリカちゃんは、結局どうしたんだか？」

「プリカは……」

俺は、息を飲む。

『もう、おまえは信用できない』

数時間前の、まだ生々しい記憶が蘇ってくる。

『おまえの所には帰らない、おまえとじゃ戦えない』

息を荒げそうになっては抑え込み、なんとか、チチの言葉に答えた。

「……プリカは……俺とは来れない、と……本当なら、説明と、詫びを入れるためだけにでも、連れてくるべきでした、が」

プリカの拒絶に負けた俺は、それを言うことすら出来ず、すごすご立ち去ってしまったのだ。

今まさに言った通り、本当ならしつかり食い下がらなければいけなかったのだが……俺には、それすら出来なかった。

『おまえは勝手にすればいい、もう、どうでもいい』

つばを飲み込もうとして、舌が動かず、空気だけを飲み込む。

「私はそこで……すいません、ただ、弱かったです、チチさんは夫を、悟飯くんは親を失ったと、いうのに……」

「ソシルミさん、そんな顔しないでける、プリカちゃんのこと一番つらいのはソシルミさんだ、おらに気を使うことあねえだよ」

「……顔、そんなにひどいですか」

俺は自分の顔を、ようやく意識する。

ひどく歪んでいる、それに、触った感触もおかしい、青ざめているのだ。

「は、はは、すみません……まだ、ちよつと、調子が上がらないよう
です」

「無理しない方がいいだ、ちよつとくらい休んでも……」

「いえ、大丈夫、それよりチチさん、まだ何か聞きたいことは？」

「……それで、悟空さはなんて？ 多分、プリカちゃんのこと言つて
たんだよな」

チチはついに、核心を突いた。

俺は一瞬、口の中で言い訳を転がすが……どうにも、うまい言い訳
も言い換えも思いつかず、そのまま直接、悟空の言葉を伝える。

「……分かりました、悟空は……、ちよつと痛かったけど、みんな
が無事でよかった、プリカがこんな手を使ったのも、去つていった
のも理由があるはずだから、怒らないでやってくれ、と」

「やっぱ、悟空さらしいだ」

そう言いながらチチは笑おうとして、悲しみと笑みの間でせめぎ
合ったような顔になる。

怒りの色はない、だが、プリカに何も思っていないなんてことはな
いだらう。

筋斗雲に乗れる人間であっても、人の親、人の妻となれば、恨みつ
らみ、悲しみと無縁ではいられないのだ。

俺はもう一つ、言わなくてはならないことを思い出し、それを口に
しようとして、チチが蚊の鳴くような声で吐き出した言葉を聞き……
口を、体全体を凍てつかせた。

「でもおらは、これから先……あと一年、おらだけで悟飯ちゃんの面
倒を見ねえと……」

「……………」

俺はここに来て、言葉を失った。

どんな言葉も情報も、プラスには繋がらないことが分かつてしまつ
たからだ。

でも、それは当然だ。

一番欲しいものが、ここにはないのだから。

「――神様は彼等サイヤ人に対抗する力を得るため、悟空をあの世の彼方にある小さな星へと送り出し、そこに住む宇宙の管理者によって鍛えてもらうことにした、というわけだ」

ホワイトボードに描いた界王星をぐるぐると何度も囲んで強調し、観衆に目配せする。

俺は今、カメハウスにて、戦士その他の仲間達に、現在地球に迫る危機について説明中だ。

観衆達は思い思いの反応を取りながらも、俺の伝えた情報に興味しんしんと言った様子である。

「悟空やプリカとおんなじ体つきで、もっともっとパワーがとんでもない連中か……」

「オレたちもウカウカしてられないな」

「あらヤムチャ、ちよつとは覚悟決めたって感じじゃない」

「ま、まあな、へへへ……」

クリリンやヤムチャ、ブルマは割と調子がいい。

悟空を信頼しているのだろう、あいつが何倍にも強くなって帰ってくるなら、倒せない敵なんてない、と。

悟空への信頼と友情は同じくしていても、実際の知識を持っている俺とでは感覚が違うのだ。

「神様より更に偉いお方かあ、悟空ももう、わしにとっちやあ雲の上の人じやのう」

「しかし亀仙人さん、わたしたちにとってはまだまだライバルです」

「これから一年、天さんと頑張る！」

「しっかし悟空のヨメも大変だよなあ、あと一年も、あの悟空のガキを面倒見なきゃならねえんだか――あいたあ!!」

ウーロンがブルマに蹴飛ばされた。

「よしてやってくれ、事実だからな、だが悟飯くんはいい子だから、手はかからないはずだ」

「ちよつとくらいは怒ってやりなさいよ！ あんた、自分の彼女のことですよ!!」

「いや、プリカはもう俺とは終わりだと……この話はいい、元の話の続きをしてもいいか？」

「あんたねえ、そういうときは……」

ブルマはまだ何か言いたそうにしているが、キリがないし、流石にこんな話に付き合わせ続けたくはない。

身振りど、視線を使って話を切り上げて、強引に次の話を始める。「さて、ここに皆を集めたのは、これから起こる危機の周知と説明のためでもあるが、本題は違う」

「違うって言うとなんだ？ 一緒に鍛えるとかか？」

「ここに集まってもらった武道家の皆は、天界に……神の住む神殿に向かい、そこで鍛錬を受けてもらおう、これは神様直々のご指示だ」

「神様が……」

クリリンが、感慨があるのだかないのだから分からない感じでつぶやく。

凄まじいことだが、実感は沸かないだろう、俺や悟空と言った戦友が既に面倒を見てもらっているのだ。

ここに居る皆にしてみれば、偉大な権力者とか文字通りの神というよりは、知り合いの師匠と言ったところだろうか。

「皆って言うと、オレやクリリン、それと天津飯やチャオズか……もしかして、武天老師さまも？」

「ご指示にはないが、行けば鍛えてもらえるだろうな、……お望みであれば、話は通しておきますが」

「年寄りにムチャ言うでないわい!!」

亀仙人は続けて、『しかし、わしと鶴の弟子が神様のもとで、か……』と、何やら感慨深そうにつぶやいた。

仙人と名乗っているからには、神様とも何か繋がりか、そこまでではないにしろ、思い入れがあるのだろう。

「……これで俺の用事は終わりだ、何か質問でもあるなら今のうちに頼む、俺はすぐに出るからな」

「なんだよソシルミ、ちよつとくらいゆつくりしていけよ」

「なら、ソシルミ、おまえも神のもとで修行するのか？」

クリリンによる引き止めと天津飯の質問が、同時に飛んできた。俺はひとまず、天津飯に答えることにする。

「俺と悟空が受けた修行は、ピッコロごと神を殺し、新たな神となるべき人間を育てる修行だ、力だけが目的だったわけじゃない」

「なるほどな、技術面で神に教わることはもうない、パワーやお得意の新技はこれから身につける、ということか」

「……ああ、次は明確な目標がある、決してしくじりはしない」
技に磨きをかけ、パワーを身につけ、サイヤ人を打倒しなければ。
俺には、その責任がある。

「ソシルミがここまで本気になるなんてな、一年後が恐ろしいやら楽しみやら、どっちにしろ、サイヤ人はよっほどヤバい相手みたいだ……！」

「ええ、ヤムチャさん、ぼくたちもウカウカしてられませんね！」

「サイヤ人の次はおまえだぞソシルミ、次の天下一武道会でやっつけてやる！」

「次……か、次があれば、必ず戦おう」

というのも、第23回天下一武道会の後、ピッコロが二度も現れたことから内外で反発が活性化し、武道会の次回開催は無期限延期となったのだ。

武舞台周辺の破壊はピッコロの性格の変化によって起こらなかったが、開催するべき人々が嫌がっているのでは、仕方ない。

「オレもチャオズと同じ気持ちだ、次は孫もおまえもプリカも打ち倒し、鶴仙流と新鶴仙流の最強を証明してやる」

「モテモテじゃなソシルミ、この騒動が終わっても、おまえさんはしばらく退屈せんぞすみそうじやの」

皆、やる気だ、……眩しいほどに。

その眩しさを見れば見るほど、これから始まる死地を知らせず、ただ強い敵が来るとだけ言って戦わせることに、欺いているかのような心苦しさを感じる。

……いや、実際欺いているのか。

そんな俺の苦悩を知ってか知らずか、ヤムチャがふと思いついたと

いったような感じで俺に話しかけてきた。

「なあ、ソシルミはどこへ行くんだ？ その、言っちゃあ悪いんだけど、一人の家じゃ流石に寂しいだろ、オレたちと天界で一緒に鍛えようぜ」

「そうじゃな、ずっと前に断つといて今更じゃが、わしもちよつとは手伝えるぞ、そうじゃ、かめはめ波でも教えちやろうか？」

「……お気遣いありがとうございます、ですが、私は今回の一件の処理が終わり次第、道場に戻るつもりです」

そうだ、プリカが森に帰ったように。

俺がそんな風に考えて沈黙を味わっていると、天津飯はくつくつと笑って、俺を見た。

「しかし、おまえとプリカが別行動を取るとはな、一体何を企んでいるのやら」

「レッドリボン軍の件は済まなかった、今回は……何も企んじやいないさ、別行動じゃなく、もう終わったんだ」

「おまえとプリカが？」

「ああ」

俺は結局、あの日と同じく……皆をごまかし続け、事態をコントロールしようとしている。

自分で勝手に背負ったと言えば、そう言えるが、これは辛い役目だ。プリカの俺を睨む目が、責める声が恋しい。

俺のやろうとすることを、ただ批判してくれるだけでいい、その後で結局、同じことをするとしても……それは、間違いなく俺にとっての救いだっただの。

……もう、行かなくては。

「質問もないようだし、俺はもう発つことにする、カリン塔には、なるべく早く出向いてくれ」

「のうソシルミ、次はどこに行くんじゃ？」

「次は、神様に説明が終わったとお伝えして、それから鶴仙流道場で鶴仙人様にことの次第を、それが終わったら、今度は魔界、それも終わったら家で荷造りして、道場に向かいます」

「ず、ずいぶん忙しそうだな……」

クリリンが引いているが、俺の飛行速度はジェット機以上、移動時間はそのかからない。

何より、これらの組織と話が出来るのは俺しかいないのだ。

「少し頑張りすぎじゃぞソシルミ、ちよつとは気を抜かんかい」

「大丈夫です、悟空やあいつほどじゃないにしろ、俺の体は丈夫にできてますから」

「……これは重症ねえ」

「それでは、失礼します」

俺は（窓からでもいいのだが）一応ドアから出て、空へと飛び立つ。舞空術の感触は良好、あと3日くらいなら飛んでいられるだろう。

有力者が放つエネルギーと地図だけを頼りに飛ぶ空だが、世界中に点在する施設を順繰りに回っていけば、次第によく通る航路というものも出来てくる。

これまでなら、つまらない、気に食わないので経路から外してしまふような航路もあるが……今はそれどころではない。

俺が今差し掛かっているのはそんな地域、なにもない、ただ奇妙な岩だけが転がる荒野だった。

「戦力が足りん」

俺は風に溶かすように、小さく一言だけ呟く。

ナツパがラディッツの数倍の強さ、ベジータは更に数倍……もしナツパを倒せたとしても、今度はベジータが俺達に牙をむく。

いや、そもそも悟空の帰還タイミングそのものが曖昧だし、ピッコロのミスではなくプリカの故意によって（なのだろう、俺はまだ信じられないが……）呼び出された二人がどう振る舞うのかも分からない。

いくら地球の戦力が底上げされていて、俺と、おそらく来てくれるであろうプリカがいるとしても……。

「伝えるしかないのか、あの言葉を、チチに……！」

孫悟飯の戦力化。

悟空は去り際、俺に一つ言葉を残していった。

『それでよミソシル、悟飯のことだけだな……オラ、あいつはすんげえ力を持つてるって思うんだ』

『……それはたしかに、俺も感じるが』

『それなら話は早えや、なあミソシル、悟飯のことはおめえに任せ、もし悟飯の力が必要だと思ったら、おめえが鍛えてやってくれ！』

『おい悟空、そんなことを気安く任せていくんじゃない!!』

『悪いな、それと、チチが怒るから勉強だけはちゃんとさせてやってくれよ、じゃあな!!』

……悟空はそれだけ言って、逃げるように界王星へ向かっていった。

あの言葉を真に受ければ、俺は悟飯を任されたということになる。悟飯を戦力化することを任された、ということに。

「だが、それは……ツツ!!」

あの傷心のチチから悟飯を奪うということ、幼い悟飯を戦わせるという運命を受け入れるということ。

俺は失われた相棒を思う、あいつならば、そうするべきだと断ずるのか。

ならば……。

俺が思考の深みに入ろうと、しばし目を閉じた時、地平線の先から巨大な気の奔流が――

「――シィツツツ!!」

輝く手を使い、ビームを弾き飛ばす……が、続けて、超高速のエネルギー弾が降りかかった!

「上からだとツツ!!」

俺は急な防御で死に体になりかけた体勢を強引に整え、それらの迎撃にあたる……だが。

いかにして別方面からビームを。

触り慣れないエネルギーだ。

一体何故俺を、この地球に今更俺を狙う者など。

思考はただ空回りし、ただ感覚のみが敵を捉え続ける。

そして一条のビームと、エネルギー弾幕の先に居たのは……。

「ふん、無様なソシルミ」

「……ピッコロ、いや……マジユニア!!」

「ピッコロでいい、あれは偽名だ」

俺が8年前に打倒したピッコロ大魔王。

奴が今際の際に産み出した自らの分身……それが、マジユニア。

言われてみれば、今まさに受けた奴のエネルギーには、元来のピッ

コロ大魔王に近いニュアンスを感じる。

だが……。

「8年前の『お前』とは大分様変わりしたようだな、ならば、この星を襲う危機のことも分かっているはず——」

「——はあっ!!」

飛び蹴り、ピッコロは突如攻撃を、否、この飛び蹴りは目くらまし、狙いは……!

「回り込みかツツツ!!」

俺は振り返りながら、ピッコロの来る方角から距離を取る。

……3ミリの距離で、そのつま先が俺の鼻をかすめた。

「ふん、やる気がなくせに、体捌きだけはいつちよ前か」

「待てピッコロ、お前とも話がある、今は戦いに興じている場合では……」

そう伝えても、ピッコロは一切聞く耳を持たない。

いや、ほんの少しだけ嫌そうな顔を見せ、続けてニヤリと笑った。

「なら、おまえが意気消沈し、オレと戦う気を失った今はチャンスというわけ……だっ!!!」

「ピッコロ——ツツツ!!」

残像すら生み出さない超高速の踏み込みを前に、俺は輝く手を受けに使って全力で抗戦する。

弾き、逸らし、迎撃し……総合力は拮抗していると言えるが、膂力と頑健性の面ではやはり一枚劣るか!

……いや、戦力分析をしている場合ではない。

「何故だ、貴様ならば既にこの星をめぐる状況を理解しているはず、地球に住む者同士で相争っている場合ではない!!」

「そういえばきさまはオレの耳の良さを知っていたな……だが、そんなことは……」

ピッコロはそう言いながら、腕を下向きにクロスさせ、まるで両腰に携えた剣を抜くような姿勢を取った……来る!!

「知ったことではなあいつ!!」

「——ツツツ!!」

その勢いはまさしく抜刀!!

だが、引き抜かれたのは、剣ではなく、腰に伸ばした腕そのもの。抜き放たれた腕は伸び、しなりながら荒れ狂う、ピンクと緑の暴風と化した!!

「あの技の改良発展型かツツ!!」

「きさまの故郷で盗んだ技だぜ!!」

かつてピッコロ大魔王が放った、体ごと伸ばした腕を振り回し、その猛威に隠した鋭い爪や肘、拳を叩き込む技。

こいつが放つのはその発展型!!

両腕をしならせ、勢いを付けて振り回しながらも、元の鋭さを失っていない、この動きは——

「ウルミか!! どいつもこいつもよく研究する!!」

「どうだソシルミ、きさまの故郷の技の味は!!」

「どうだもこうだも……ツツ!!」

俺はピッコロの攻撃を弾きながら考える。

どうすればこの戦いを終わらせられるのだ?

殺し技は論外、急所など、ピッコロに通じるかもわからん。

手加減して勝てる相手ではないのは確かだが、それでも……!!

「隙ありつ!!」

「ガ——」

どこからか飛来した光弾が、防御をする暇もなく俺の脇腹をえぐった。

服と共に破れた、火傷と裂傷の混ざった大きな傷口からは血が溢れ

……俺はヨガを保てず、傷口を手で抑える。
完璧な奇襲……だが、受けてからならば、何が起こったのかはすぐに分かった。

この戦いの初めに放たれた光弾の一つが、静かに潜伏していたのだ。

「もう一度言ってやるぜ、無様だなソシルミ、前のきさまならこんな奇襲はやろうとすら思わせなかったはずだ」

「俺が平和ボケしたとでも？」

「平和ボケ？ 色ボケの間違いじゃないか？ だが違うな」

「それは一体——」

答えの代わりとばかりに、ピツコロは俺から距離を取る。

逃げるのでも勝ち誇るのでもない、再びしならせた腕の軌道の形に、光の筋が見え——

「さあ、これはどうだっ!!!」

「……まさかツツツ!!!」

俺はエネルギー攻撃を回避せずに防御する、よつて、一対一で連射されれば、常にその攻撃の軌道は俺にとって丸わかりで、対処は容易い。

だが、伸ばし、しならせた腕ならば違う、変幻自在で予測困難！

ビームが来る!!

「ヌウウツツツ!!!」

輝く手、爆発する手、衝撃波、そしてソニックブーム。

両手を使い実行できる防御手段をすべて駆使し、エネルギー弾を防ぐ……が、これは長くは持たない!!

「技は衰えちやいないようだな、ソシルミ!!」

「ならば何が衰えたと——……ツツツ!!!」

続くビームの中から、ひときわ大きい塊が飛来する。

目を慣らした上で新たな種類を投入か？

いや、違う!!

「グツツツ!!!」

「遠距離戦から肉弾戦へ、これはきさまが望むはずのことだ、ソシル

「ミ!!」

ピッコロの光る腕!!

ここに来て、こいつもこの技を使うとは……………!

「おまえお得意の肉弾戦だ、行くぞ!!」

「…………ツツ!!」

光る腕の激しい攻め手と、俺の輝く手が激しくぶつかり合い…………。

「どうしたソシルミ、得意分野でもこんなものかっ!!」

技量ではこちらに一日の長があるが…………鍛え上げたであろう武術、

パワー、ダメージの差が…………いや。

認めたくはないが、押し負けているのは気迫の差!!

「何故お前はこんなタイミングで、こんな気迫を…………ツツ!!」

「知れたことよっ!」

叫びとともに、ピッコロの『八手拳』技が俺を襲う。

八千拳で迎撃するも、不利は揺るがず…………。

何故ピッコロは俺を襲う、そして、何故、俺はこうも押し負けているのだ。

鍛錬の量、質で負けているのか?

そんなはずはない、ならば——

「曲がりなりにもきさまと決着を付けるチャンス、見逃してなるものか!!」

「俺と…………!!?」

決着を。

俺の刹那にも満たない動揺に、ピッコロの拳が襲ってくる。

「ルアアツツツツ!!」

「むっ!!?」

防御、成功。

「決着、だと…………」

俺は目の前のピッコロすら置いて、眩く。

それを盗み聞いて、ピッコロは笑った。

決着…………何故、俺と決着を付けたいんだ?

俺とピッコロは再び戦っている…………なぜ、ピッコロは戦いたい。

「そうだ、その顔だ、ソシルミ!!」

「どの顔だ、ピッコロ!!」

何故俺と戦いたいのか、それは……………楽しかったから、だ。
それ以外には、思いつかない。

何故、あんな未練のなさそうな顔で、ピッコロ大魔王はピッコロを産み出したのだ?

俺と戦うため、地球へのわだかまりなどない心で、俺と、たくさんの武道家たちと、競うためのはずだ。

ピッコロが楽しく天下一武道会で戦えたのなら、それを教えたのは俺のはずだ。

「すまなかつた、ピッコロ」

「何を謝る気だ、ソシルミ」

答えの代わりに、猛烈に充実しつつある……いや、充実していたのを思い出した気を溢れさせ、その爆発力をもって、ピッコロに拳足を叩きつける!

そうだ、俺は何をやっていた?

戦いの充実! 生命の躍動!!

これこそ、俺の人生の。

「チエリアアアツツツ!!!」

「ようやくやる気になったようだな、だが——」

互いの気が高まる、俺の手の形はもはや防戦ではない、殺さんばかりに尖った技で、ピッコロの戦闘能力を奪い取る構えだ。

俺の頬は釣り上がり……いや、つり上がっていたのを、ようやく自覚した。

最初から、戦いは楽しかったのだ。

不敵な言葉をかけてきたピッコロの動きは、最早完全に把握している、何が起きようとも……。

「——魔貫光殺砲!!!」

「礼^レリアアアアツツツツ!!!」

これがピッコロの奥の手、光る腕に蓄えたエネルギーをそのままビームとして発射する必殺技!

以前の戦いで犯した、チャージ中のエネルギーを叩かれ、暴発させた失敗を克服しつつ、俺の基本技である輝く手への対抗兵器として仕上げたであろう、珠玉の技術によって放たれる魔貫光殺砲。

それを俺は輝く手の手刀で切り裂き――

「ぐっ!!」

「少々のことじゃあ死なないんだろう？ ムチャさせてもらったぜ」

ピッコロの胸にまで、突き刺した。

「が、ふ……一体どうやって、ただの技でオレの魔貫光殺砲を……？」

「全身全霊の気を一箇所に叩き込む……それは、俺の専売特許だ」

「……さすがだぜ、単身で城を駆け上がり、父に立ち向かったあの日の心は、まだ持っているようだな」

「いや、おかげさまで……思い出させてもらった」

戦いは楽しい、この楽しさこそが……この俺の人生の、真髄だ。満身創痍の体から、パワーがいくくらでも湧いてくる。

「さあ、続きをやるか、ピッコロ」

「もう十分だろうソシルミ、……サイヤ人とやらの次はおまえだ」

……そうか、ピッコロの目的は、俺に戦いを思い出させることだったのか。

ならば、これは試合だ。

俺は手を合わせ、ピッコロに頭を下げる。

「ありがとうございました」

「フン」

傷を癒やしたピッコロはどこかへと飛び立っていった。

……あの戦いの最後、あの一合。

その一合は、ここ数年味わえていなかった自分らしい戦い、そしてその楽しさを思い出させてくれた。

あの楽しさこそが俺の人生の真髄、そして、俺はそれを元に生き、人を愛し、敵を愛し、世界を愛してきた。

だからこそ、かつてプリカは俺を愛したのだろうし……仲間たちも俺を想ってくれている、そんな縁を結べたのだ。

「プリカ……」

だが、この眠りかけていた素晴らしい縁を叩き起こし、地球を強くしようとしているのは、プリカの選択だ。

俺とプリカを選んだ道、それはどちらも間違いじゃない。

でも、それでも……。

「お前はどうか、お前は、それで満足しているのか？」

きつと、苦しんでいるはずだ。

あいつは森なんか好きじゃない、ただ俺と同じ、耐えきれない板挟みの中で……。

脳裏に、かつて亀仙人に投げかけられた言葉が浮かぶ。

『一生懸命戦うつちゆうのは楽しいもんじゃが、だからこそ、戦いを通じて何を得たいのか、しっかり見極めんといかん』

プリカ……。

「……お前は何がしたいんだ？　これがお前の本当にしたいことなのか？　したいことだとして……方法は、ちゃんと合っているか？」

俺は空を見上げる、なんでもない空を。

俺にはやりたいことがある、そのために俺は飛ぶ。

まず行く場所は、決まっていた。

俺はしっかりと手を握り込み、ドアを叩く。

「はい、……ソシルミさん？」

「チチさん、お話があります、立ち話で結構です」

現れたチチの手を、両手で握る。

「あ、あの……？」

「プリカを連れてきます、そして、あんたに詫びを入れさせる」

チチは、ぼかんとしたような顔で、それでも、しっかりと話を聞いてくれている。

ありがたい。

「……悟空の言う通りプリカは悪くない、でも、それはあくまで判断

の話だ、人の親、人の夫を奪ったプリカには、それを止められなかった俺には、責任つてもものがあります、その分だけでも、しっかり頭を下げさせたいんです」

「ソシルミさん……わかっただ、よろしくおねげえします」

そう言つてチチは深く、深く頷いた。

俺も頷き返し……そしてゆっくりと手を離す。

「行つてきます、チチさん」

「なんて言えばいいのかわかんねえけど、とにかく、頑張るだよ！」

俺はチチにおじぎをして、ゆっくりと浮遊する。

……今にして思えば、カメハウスで皆に誘われたのは、気遣いだけじゃない。

あれは、俺が居ることは皆にとつていいことなのだと認められたということだったのだ。

そしてそれは、プリカも同じだったはずで……ならば、プリカの居場所は、森なんかじゃない。

「プリカ、お前の居場所は……」

皆の中にあるはずだ。

俺の隣では、なかったとしても。

それを直すことこそ、プリカを再び森から引きずり出すことが、俺にとつて、やらなくてはならないことだ。

心の底から、やりたいことだ。

俺はプリカの居る空をじつとにらみ、舞空術の速度を全開に飛び立った。

↓つづく

第三十八話：転生地球人がその名を証明するまで

「蘇るとはいえ、一家の大黒柱を殺したんだから、嫁のチチと息子の悟飯くらいには謝れ……これで、付いてきてくれるか？」

駄目だ。

あいつにとって既に信頼ならない存在であったとはいえ、10年以上共に戦ってきた俺を切り捨て、前世からのあこがれの人である悟空を、歴史通りでなおかつ復活前提とはいえ殺害したのだ。

決意のほどは、想像に難くない。

ならば……どうする？

……飛行中の空路は赤道へと近づき、深い緑が地を覆う。

空は白混ざりの青、至って晴天。

一方、そこを飛ぶ本人、この俺の思考は今もなお、混沌とした苦悩に覆われていた。

「……俺や仲間達と一緒に居たくないならそれでいい、でも、せめて森で暮らすなんてことはやめてくれ、そのための禊としてでも、謝ってくれないか？ なら……」

これも違う。

あいつの決意は硬い、これじゃ、駄目な気がする。

いつそのこと、俺自身の言葉として、『愛している、戻ってきてくれ』と……。

駄目だ、どの口で。

この地平線の先に居る我がかつての相棒、プリカ。

俺と仲間を裏切り、世界を救おうとしている(はずの)あいつは今、その足で密林へと隠れ、たった一人で暮らしている。

それを引き戻すため俺は必死で、あいつを呼び出すための言葉を考えて……だが、失敗した。

かける言葉が見当たらない、あいつが来る理由も思いつかないし、俺がかけていい言葉がまず、見当たらない。

「もう、あの森か……」

答えが出ないままに、密林が見えてくる。

プリカが新たな住処とした森、選ばれたその立地は、西の都やかつて住んでいた森はもちろん、战士们ちゆかりの場所から丁寧距離を取った……プリカの決意と隔意を表すように。

俺は躊躇しながらも後戻りはできず、ゆっくりと降下して、隠れ家のドアの前に立つ。

「……………ツツ……………」

俺は意味もないのに息をひそめるが、プリカは既に俺の存在に気付いて、聞き耳を立てている。

待たせることはできない、何かを、言わなくては。何かを。

乾いた喉を締めて、息を吹き込んむ、そうすれば声は出る。

声が出れば俺は何かを喋るだろうと思って、俺は、それに賭けることにした。

「……………ツツウ、プ、プリカ!! た、助けてくれ……………」

意外な程にすんなりと、言葉は出た。

だが、どうしてこんな、まずい、なんで俺を嫌って去ったプリカに助けを求める、不興を買うだけだ。

やばい、もっと嫌われるぞ。

違う、嫌われるなんて俗なものじゃなく……………ああ。

俺はプリカを引き戻したいはずだ、何故、助けを求めているのだ。分からない、脳裏を疑問符が回り、体中から、どっと冷や汗が出てくる。

立って、目を開いているのに前すら見えない俺が状況に気付いたのは、ボタン、と、ドアが『閉まる』音を聞いた時だった。

「はあ……………はあ……………」

そこに居たのは、プリカだった。

顔は多分、俺以上に混乱しきつていて、焦っていて、自分が何故ドアを開けてここにいいのかすらもわかっていないような様子だ。

俺にも分からない。

でも、俺の足はまるでそういう習性のある生き物かのように前へと進んで、俺の手は、プリカの手へと向かった。

「……っ!!」

「あッッ! つウ……」

俺の手はあっけなく弾かれ、でも、プリカは、再び家に戻ろうとするわけでも、さらなる加撃を行うでもなく、混乱したまま佇んでいる。俺もまた、何が起こっているのか分からないが、これが俺にとつて……。

多分、最後のチャンスなのだろうと、それだけは分かり。

それに気付いた瞬間、また、どんどんと言葉が溢れてきた。

「な、なあ、プリカ……聞いてくれ、チチが、傷付いてる、悟空は界王星に行つたから、だからだ」

まともに言葉がつかっていない、つながっていない言葉でも、何かを伝えたくて俺は喋る。

プリカは混乱した顔を、雰囲気が変わらないまま形だけ神妙に変えて、息を抑え込むように、俺の話を聞いていた。

今、プリカを返しちやいけない、今ちゃんと言葉を伝えられなかったら、何かを言えなかったら、プリカはずつと森にこもつて……たつた一人で暮らし……俺もまた、この世界でたった一人だ。

いや、違う、問題はきつとそれですらない、どんな結果になろうとも、ここでプリカとの断絶に決着を付けられなかったら、俺はきつと永遠に後悔することになる。

「とつちらかつていて、すまない、ただ……なあ、チチに謝つて、悟飯に謝つて、人里に帰るだけでいいんだ、俺が……もう嫌いなら、それでいい」

必死で伝えた支離滅裂な言葉だが……俺がプリカに伝えられる言葉は、多分どのみちこれくらいしかない。

プリカもそれは分かっているから、これだけでも、なんとか伝わってくれるだろう。

そうやって、なんとか自分の『やらかし』を正当化しながら話しかけると、プリカは小さく歯を食いしばって、後ずさりした。

脈はないかもしれない、そう思いながらも俺はまだ、この対面が感じさせてくれた可能性に縋り付いて、半ば無軌道に言葉を紡いでゆ

く。

「な……なあ、プリカ、見た所、栄養状態と睡眠状態がかなり悪化しているようじゃないか」

プリカは若干腫れぼったい、クマの付いた目と、こけはじめた頬を小さく撫でる。

そして、小さく顔をしかめつつも、特にそれ以上のアクションをとることもなく、じっと俺を見た。

俺はそれに食らいつくように、言葉を紡ぎ、ポケットの中を必死に漁ってゆく。

「今は一大事だからな、すぐに休めとは言いにくいが……とりあえず、栄養だけでも取らないか？」

「栄養……」

小さくつぶやいた声は疲弊を感じさせる、掠れたものだ。

そんな些細なことにさえ俺は心を揺さぶられながら、やっと見つけたホイホイカプセルでタツパーと器を出す。

中身は、白い塊の入った茶色い汁……豆腐の味噌汁だ。

「ソ……味噌汁」

「滋養が取れ、体が温まり、精神の安定も見込める、食ってくれ」俺は味噌汁を一杯注ぎ、プリカに差し出す。

プリカは無言でそれをじっと見て、喉を鳴らした。飲んでくれるか？

その瞬間だけは下心も思いやりも忘れて、ただただ、味噌汁の行方だけに神経が集中する。

プリカは、目を見開き、歯を食いしばり……。

「……………っ!!!」

超音速で逃げた。

「……………ツツツ!!!?」

密林の枝を薙ぎ払って空に飛び出し、一瞬にして豆粒ほどの大きさになるプリカ。

何故逃げたのだ、拒めばいいのに、俺の味噌汁すら見たくないのか？

そんな思考を巡らせる俺が体の主導権を無意識から取り戻した時には、自分もまた空を駆け、プリカを追って大空へと上がっていた。

「ま、待てプリカッツツ!!」

俺はプリカに呼びかける、だが、返答はない。

超音速故に聞こえていないのではない、武道家の声はこんなときでも通じるものだ。

プリカは俺の言葉に答える代わりに、あるいはそれそのものが答えであるように、更に速度を上げ、空の彼方へと突き進み始めた。

逃げるプリカ、追う俺。

その構図が続いて、数十分か、数時間か……。

俺達は、密林のあつた地域を遠く離れ、何の変哲もない荒野へと差し掛かっていた。

いや、ここは……。

「おい、分かるかプリカ!! ここは、天津飯に最初に襲われた場所だ!!」

あの頃は、二人ともまともに空も飛べず、移動は飛行機だけだったし、飛行機から撃墜されれば自由落下するしかなかった。

今はと言えば、俺達はこうして、舞空術で追い掛けっこをしている。出力はプリカで、練度は俺、それが大体釣り合う所にあつて、決着がつかないのだ。

「あの時やらかした鶴仙流への裏切り、許してもらえたのはちゃん」と俺達が先に話を通したからだ、今度は違うはずだ!! なら——

「——」
思いつきのような、しかし、間違いなく全霊の問いかけに答えはなく、プリカは更に、絞り出すように速度を早めた。

荒野からさほど遠くない場所にはカリン塔がある……俺はそこで自ら死にかけ、プリカはそれを見て、死ぬのはやめろと言ってくれた。

「カリン塔が見えるな!! なあ、あの日、俺がする無茶が大事なんだと言ってくれたのに、俺はお前の期待に答えられなかったのかッツ!!? それは本当に済まないと思ってる、だがプリカ——」

上がる速度、帰らない答え。

二人の距離は結局変わらず、大地と空が動いているのを除けば、一切が静止してしまったかのようにすら感じられる。

プリカはこの俺から逃げようとしている、何故、俺と一緒に居なくともいいと伝えたはずの相手を、俺は追っているのか？

何故プリカは俺から逃げるのか。

考えてもきりのない考えに脳が触れ、その余りの熱を前に伸ばした思考を引っ込める繰り返しを続ける間に、俺達の眼下には、更に別の、見覚えのある島があった。

「パパイヤ島、天下一武道会の島だ！ プリカ、あの決勝戦は楽しかった!! だからプリカ、相手は俺じゃなくなっちゃったっていい、お前ももう一度……」

全力で追い掛けているんだから、余計な酸素は使うべきじゃない、なのに、俺はまるで、あいつに話しかけないと永遠に追いつけないかのような焦燥感に追い立てられて、叫び続ける。

視界の下側で流れる景色が、その速度を増す、最早、どちらが先に加速しているのかすら曖昧だ。

少しずつ、息が荒れ、少しずつ、体に力を入れるのが億劫になってきた。

それでも止まることは出来ない、諦めることはできない。

プリカは、プリカはどうして逃げる、味噌汁が飲みたくないからなのか？

「ハア……ハア……プリカ……!」

あいつも限界のはずだ、コンディションは俺よりずっと悪い。

力任せに飛んでる分、疲れもでかいだろう。

どうしてそんなに頑張ってる俺から逃げるんだ。

普段ならば辿り着かないであろう、ナイーブな思考に包まれかけてきた頃、霞んだ地平に、見慣れた町が見えてきた。

西の都、カプセルコーポレーションの所在地……俺達の家のある町だ。

「プリカ……」

俺はまだ手に持ったままのお椀を握りしめて、プリカの名を呟く。本当は、何かを引き合いに出して、何かを言おうとして……言えなかった。

……この町の思い出、我が家の思い出は沢山ある。

だが……やっと、俺は思い出したのだ、まずいシチューの味を。

「お前は、あの時から……」

プリカには聞こえないような大ききで、言葉が漏れ出る。

プリカが料理をするという出したあの日。

普段は絶対にしないようなことを、出し抜けにやりたいなんて言い出して、突然、普段はしない話……俺は武器を使うか、なんて質問をしてきたプリカ。

今思えば……いや、もっと早く気付くべきだった、あれは、知識と現在の間で板挟みになったプリカが上げた悲鳴だったのだ。

それを俺は見逃して、のんきに、日常に彩りを加えてくれる気まぐれと、ちよつとしたナイーブへの慰めとして見過ごしてしまった。

「プリカ、俺はツツツツ!!」

「ぐ、あああああ!!」

プリカが声を上げた!!

俺はそれだけのことに、一瞬驚き、喜んで、次の瞬間には、更に速度を上げたプリカに追いつこうと必死になる。

プリカが繰り返す加速は俺の言葉から逃げるようで……まるで二人の思い出を巡るかのようなこの道筋とは、正反対に思えた。

もしかしたら、そうあつて欲しいが、プリカには迷いがあるのか？

「プリカアツツツ!!」

「ぎあああああ!!」

激しく叫びながら飛ぶプリカは全力、いや、それ以上だ。

俺もまた、全力以上の速度でそれを追いつながら……プリカがおそらく無意識に目指しているであろう場所の事を思い描いていた。

記憶にあるのは岩山、忘れもしない見上げた月。

体のあちこちが疲労にやられ、霞む視界の向こうにあったのは――

「――悪魔の手、魔神城!!!」

俺とプリカが出会ったその日、プリカは自分と、自分が脅かしてしまった人々を襲う魔族を倒すため、俺とともに魔族の根城である魔神城へと向かった。

そこでの戦いとその顛末は、俺達に悟空達との縁、ルシフェルとの縁を与え……俺達二人も縁を結び、戦友としての絆で結ばれることになったのだ。

「ふう……はあ……くああああ!!!」

苦しいな叫び声とともに速度を落としてゆくプリカ。

俺はお腕を握りしめ、限界ギリギリの力を振り絞り、ラストスパ―トをかける。

「シイイイアアツツ!!!」

「くっ……ぐ、が!!! ぐあっ!!!」

叫び声とともに感じられるエネルギーの滾り!

予想通りと言えば予想通りか、プリカがここに来て選択したのは、振り向きざまのエネルギー弾!!

思えば、出会った頃にはこれすらも、俺にとっては絶望的な攻撃だった。

「フツツ!! トアアツツ!!!」

「がぐあ!! ぐお!!!」

叫びながらエネルギーを放つプリカ、叫ぶ理由は今もわからないが。

俺は片手がふさがったまま、全力でエネルギー弾を弾き、弾ききれず、いくつか体に受ける。

それでもお腕を手放さないのは……意地なのか、俺の想いなのか、自分でも……いや、分かるはずだ。

「あの頃を思い出すぞ、プリカツツ!!!」

今も輝くこの俺の手、結局気功波は使えながったが、エネルギー弾を防ぐ技を使えるようになったのは、プリカが飽きもせず付き合ってくれたあの特訓のおかげだ。

面倒見が良くて優しいプリカ、思えばあの時から俺は……。

「プリカ、お前が好きだ!! 俺はまだお前が好きだぞ!!」

「が……ぐああ!! ぐいい!! があ!!」

勢いを増した光弾が迫る、が、高まり続ける俺の気は、疲労困憊したままのプリカのエネルギー弾など、ものともしない!

「お前がまだ諦められない!! 一緒に来てくれ!!! もう一度、一緒に暮らそう!!!」

エネルギー弾の速度は上がり、ついには振りかぶることすらない、連続エネルギー弾へと変化する。

速度と冴えを増す俺の技は、実にサイヤ人らしいその技を、紙一重ながら捌けていた。

「もう一度言うぞ、お前が好きだ、プリカツツ!!!」

俺が放った言葉の後、プリカの放つエネルギー弾で包まれた視界は一瞬クリアになり……そして、目撃した。

「げ、が、ぎ………ぐご、ぐ……!!!」

「なツツツ!!!」

口に蓄えられた、猛烈なエネルギーの塊、これはプリカの必殺技、長らく見なかった……ゲロビ!!

回避……射線の先で何が起こるかわからない!!

受けるか、弱っているとはいえ、プリカの全力の技を!!!?

「それがお前の技なら、なんだって受け止めてやるとも!!!」

莫大なエネルギーの奔流が、この星の大气を叩く。

その影響が伝播するよりも遙かに早く現れた、月数個分をあっさり消し去るであろう光条!!

俺はエネルギー弾を捌くため、様々な形に変化させていたエネルギーを、硬化と反発力に特化させた、『輝き』に集中し、光へと叩きつける。

視界はホワイトアウトし、聴覚は莫大な振動を前に機能を停止する。

全身全霊の激突の前には意思さえ消え失せ……。

……手のひらから、何かがこぼれ落ちた感覚があった。

「あっ」

動作不良のはずの聴覚が、はつきりと、プリカの……『素』の声を嗅ぎつける。

白く飛んだ視界はすぐにプリカの姿を捉え、次に、プリカが見ていた先にあつたものを見る。

お椀が吹っ飛び、中身の味噌汁が空中に飛び散っていた。

「ああ~~~~~ツツツ!!」

戦闘中止!!

お椀を取って、味噌汁をかき集めればまだ——駄目だ、未だ残る衝撃で粉碎されて、遠くまで飛んで、空気中のチリと混ざって、蒸発して。

「あ、ああ……ツツ!」

味噌汁は大気の中へと消えた。

俺はお椀を未練がましく持ったまま、肩を落とす。

地球を一周分も駆け回ってプリカに飲ませようとした味噌汁は、あっけなく消え去ってしまった。

プリカの最後の攻撃は、あっけなく俺が抱えた最後の意地をくじいたのだ。

味噌汁は、その野暮ったい家庭的なイメージと裏腹に、光りながら空へ散ってゆく。

俺の込めた願いとともに……プリカの拒絶によって。

好きだ、愛している、帰ってきてくれ。

そんな言葉が技を招いたのならば……それは、きつと。

「……ツツ」

「…………」

プリカは、エネルギーを放ったままの姿勢から、ゆつくりと体勢を直立に変えて、呆然と立ち尽くしていた。

プリカもまた、終わりを感じているのかもしれない。

終わってしまったと……この追撃戦、俺達が辿ってきた歴史を振り返るような道筋の果てにあつたのは、俺達が辿ってきた歴史と同じ破

局なのだ。

そう感じて、その『終わり』に浸っているのか。

だが……俺はその呆然としたプリカの見せた『隙』に、飛びついた。

「うわっ！ や、やめ……あ、くそ、よせ!!!」

「逃さんツツ!!!」

俺は必死でプリカの腕を掴み取る。

やけに、強い言葉が飛び出た俺の口に驚くのも咎めるのも後にして、俺は掴む手の力を強める。

自分から逃れようとする人間の腕を掴んでどうするんだ、そう、俺に未だ残る理性が叫ぶが、体には届かない。

これが最後のチャンスだと、理性部分以外の全てが叫んでいるのだ。

プリカの顔は大きく歪み、俺を振りほどこうとする。

……こんなものが、何のチャンスなんだ？

いや、何のチャンスなのだとということすら頭にはない、ただ、ここでプリカを離してはいけないと、それだけが思考を支配する。

プリカはしばらくじたばたと暴れていたが、俺から逃れるには足りなかった。

「わ、わかったソシルミ、に……逃げないから、放してくれ……な？」

「信じられるか、そんなこと」

いやに弱った様子で俺に語りかけるプリカに、俺はチャンスが幻想だったのかもしれないという恐怖を感じながらも、苦々しげにそう言い放った。

プリカを掴んだ腕の力をそのままに、俺はプリカと向き合い、じつと目を見る。

強引に縛り付けて自分の言葉を聞かせるのは、完全なるエゴかもしれない、だが、それでも。

話さなくてはならない、これが終わりになったとしても、プリカと。

「なあプリカ、お前の食べたがらなかった味噌汁はもうない、少しでいい、話を聞け」

俺の言葉を聞いたプリカは、ほんの少しだけ力を抜いたように感じ

る、それは多分、本当に味噌汁がもうなくなったからだと思う。

その理由は……分かりかけている、そんな気がするが、胸から出ない。

ならば先に、伝えるべき言葉を伝えよう。

「俺もあの後……お前がいなくなつてから、大変だったよ」

プリカがつばを飲み、こころなしか上目遣いに、俺を睨むような、責めに怯えるような目をする。

……プリカは罪を犯した、それは事実だ。

しかし、俺はそれを責めない、責める資格だつて持つていない。

だから、責めるために捕まえたんじゃない。

ただ俺の考えを、意思を、気持ちを伝えるチャンスは、これで最後だと思つているだけだ。

「お前がやったことの事後処理の話じゃあない、お前がいないと、誰も俺を止めてくれない、諫めてもくれない、一緒に考えてもくれない……たった一人で、このデカすぎる知識と責任に向き合わなきゃならない」

「……っ……」

「プリカ、これは……この苦しみは、お前も感じていたものじゃないのか？」

プリカの腕が、大きくびくついた。

だが、言葉はない。

答える気がないのか、言葉がないのか。

プリカがほんのちよつとだけまだ俺に気持ちが残つてるとして、こんな強引ことをしたら、それも吹っ飛ぶかもしれない、吹っ飛んだかもしれない。

こうやって話した後、全部的外れだと、ラディッツと共に俺を倒した時点で何もかも終わつていたんだと言つてくるかもしれない。

どうしようもなく怖い。

だが、それでも俺は俺の言葉を伝えよう。

「……たった一人で陰謀を巡らしていると、世界の中で自分だけ事情を知つてゐるって事が、皆を騙してゐるみたいで申し訳なくて、自分は何

「ついい目を見ちやいけないみたいに感じてくる」

プリカは腕を震わせ、小さく目を見開いた。

それが何を意味しているのか、普段の俺なら分かるかもしれないが、今の俺にはさっぱりだ。

でもそれでいい、分からない方がかえって、しっかりと言葉を放てるかもしれないから。

「なあプリカ、お前が俺を倒して森に引きこもったのも、そうだったりするんじゃないのか？」

プリカは強く口を噤んで、目をそらした。

だが、下に逸した視線の先に広がっていたのは、俺達にとって見覚えのある山々、森。

それを直視するのにも耐えられず、プリカは再び、俺の目を見た。

「下の森……懐かしいな」

俺と出会う前のお前が考えていたこともそうなんじゃないか、と言外に伝えるつもりで言う。

自分が歴史を歪めるくらいなら、身寄りのない、とんでもなく強い、大猿になる女なんてもんが世界を歩き回るようになるくらいなら……。

……この世界には余計な、あとから来た異分子の自分が引きこもって、辛い生活を続ければいい。

プリカがそんなふうを考えて、森で暮らしていて……俺と出会うことでそれをやめたならば、それはきつと。

そんなほのかな希望も、プリカの一言で消え去るかもしれない。でも今はまだ。

「!! そ……」

「待ってくれプリカ、俺の話を最後まで聞いてくれ」

俺の言葉が間違いならば、何もかも終わりでもいい、それがふさわしい。

だが、俺の伝えたいことは全て伝えさせてくれ。

それは俺達の間はまだ残っているかもしれない絆を切り裂き、幻想を持つことさえ許されない完全な断絶に繋がる道かもしれないが

……それでもいい。

「お前はかつて、自分というよそ者を森に閉じ込めて世界を守ろうとした、そして今は、歴史通りとはいえ、自分の選択で死んだ自分の兄弟と、そのために裏切った俺への償いとして、自分にとっていいものを全部遠ざけて、あの密林で暮らそうとしてるんだ」

その『いいもの』の中には……もしかしたら、
わずかに浮かんだ希望を下心と切り捨てて、俺は今に集中しようとする。

俺の言葉を聞いたプリカは、動揺し、ふるふると震え、戸惑うというよりはさすがのような目で俺を見ては、その目を自分で塞ごうとして、まぶたを閉じる、その繰り返した。

……見ていられない。

「プリカ、ちよつと手を放すぞ、逃げるなよ」

逃げるなんて言葉じゃない、手を離したくない。

この限りなく高まった不安に包まれた時間だとしても、この後訪れるかもしれない、『最後』よりはずっとマシだ。

でも、それよりも大事なもののため、俺は両目をプリカに向けたまま、そつと手を放す。

「あつ……」

プリカは小さく声を上げて俺の手を見た。

俺はそんなプリカの小さな手をもう一度握り直したい衝動に耐え、お腕を体の前に持つてくる。

「こんなちよつぽけな奇跡じゃあ説得力がないかもしれないが、お前に見せたいものが……飲ませたいものがあるんだ」

俺は離れた手を、お腕へとかざす。

伝えたいことを表現しよう、その手段はある、もしこれが再び拒絶されたのなら、そのときは。

そんな恐怖も、かすかな期待も振り払って、想いだけを、手に。

「取り返しをつかないようなことでも……」

かざした手から、『輝き』を超える光が溢れ出し、お腕を包みこむ。
俺はいやしくも神の弟子であり、同じ弟子だが格闘一辺倒の悟空と

違い、不思議な技くらいは使えるのだ。

そうだ、格闘ばかりじゃない、不思議な技がこの世界にはある。

「……取り返しがつかないように見えることでも、案外、この世界ならなんとかなる、なら、人間同士だって、きつと」

……そして、手が通り過ぎたお椀には、なみなみと味噌汁がたたえられていた。

だが、それを受け取るかどうかは、プリカ次第だ。

プリカはその整った顔をそむけ、息を止めているくらいに小さくして……味噌汁の匂いを拒んでいるように見える。

そんなプリカの鼻が僅かに動いたようにも見えたのは、俺の欲目か。

味噌汁は会心の出来だ、全ての想いを込められた……そう確信したとき、俺を包んでいた恐怖は収まった。

これがプリカにとって、もう別れた男の思い出と、無様に縋る姿を見せられるだけの、苦痛な時間だったとしても……俺はプリカに、想いを伝えたい。

人間が蘇るのに、人間同士の関係が蘇らないなんて、そんなことあるか！

俺は何一つ論理的でないそんな思考を抱えたまま、視線を作り出した味噌汁からプリカへと、そつと移す。

「俺はサイヤ人から、沢山の危機から、世界を守りたい……でもそれは、隣にお前がいなくちゃ、駄目だ、いや、お前が嫌ならそれでもいい、でもお前が不幸なままの世界じゃ、無理だ」

視線を味噌汁から俺に戻したプリカは、神妙な……でも、どこか不安げな顔で俺を見てくる。

結局、俺はこんな土壇場で、こんな不器用なやり方でしか、プリカに向き合えない。

「プリカ、お前にとって、歴史のためといって人死にを見逃して仲間を裏切るようなやつが許せないってのは、分かるんだ、でも……今お前が罰しようとしている、その人は……その人は……」

上空の風を浴びた俺の涙が、頬の上で冷たく自己主張している。

自分はこうも涙もろい人間だったか、自分が相手を説得しようとする言葉にこもった悲しみだけで涙をこぼしてしまうほど独善的な人間だったか？

「なあ……俺の一番大事な人なんだ、なのに、こんな……困る、助けてくれ、頼むから……」

プリカの右腕が、ぴくりと動いて……ただ動いただけに終わる。俺はその手を取ってから、もう一言だけ、プリカに伝えた。

「もしお前が自分の腹を温めてくれる気になれるなら、飲んでくれ……これで、お前の体を温めてくれ」

本当なら目の前で、いちから作ったものを飲ませてやりたい。本当なら、もつともつと沢山料理を作って食わせてやりたい。

でも、空の上で作ってやれるのはこれだけだ、これが精一杯。

プリカは俺の顔と味噌汁を交互に見て、手を居心地悪そうに動かす。

それでも、軽く握っただけの手からも逃れようとはしない。

「あ、うあ……」

顔を赤くしたり、青くしたり、渋くしたり、笑おうとして、しかめっ面に戻したり。

プリカの顔はころころと変わってゆく、もう何かを繕ったりはしていないんだと、俺には分かる。

お前は どうしたい？

それを伝えてくれ、どんな方向であれ、遠慮はいらない。

俺が伝えたかったことを受け取ってくれたならば、後はどうしてくれたっていい。

俺は微動だにせず、プリカの決断を見守る。

そしてプリカは、所在なく降ろされていた左手を上げ、俺の手から右手を取り戻してから、両手で味噌汁を取り、じつと見て……。

一息に飲み干した。

「んがっ、んぐ……ぐむ、ぐく……ぶはっ!!」

「うまいか？」

「ああ……ん？ これエア味噌汁か、虚空から、味噌汁……」

プリカは小さく同意してから口元を拭い、続けて、茶化すような、ごまかすような感じで続けた。

刃牙シリーズの三作目、シリーズ主人公の名を冠した『範馬刃牙』は、範馬刃牙とその父親である範馬勇次郎との長きに渡った対立の結末、地上最強の親子喧嘩を最終編として据え……。

その親子喧嘩は、長く分断された親子関係の埋め合わせのような殴り合いの末、『エア夜食』……『エア味噌汁』を息子に供する地上最強の父親という、前代未聞の構図から続く和解で幕を閉じた。

だからこそ俺はこの世界に生まれた時、『アエ・ソシルミ』という名前に、最強を目指せという天命を感じたのが……。

その天命は今、全く新しい形で、俺の目の前に現れたのだ。

「おまえは、この世界を元とはもつと別の……いい未来を作った、オレはそんなお前を、オレがやらかすことに巻き込みたくなかったんだ」

「……だから相談しなかったのか？　じゃあ、帰ってくればいいだろ、すぐに」

俺はプリカの言葉を聞いた直後……さつきまで必死で懇願していた相手に、拗ねた声で抗議をぶつけた。

だが、これまでも続いてきた、勝手に放たれたような言葉を前に、俺は何故か、もう動揺していないのを自分で感じる。

プリカは小さい声で、俺の言葉に答える……いや、俺の言葉を聞いた自分の言葉として、続きを話し始めた。

「おまえがそうやって許したら、……やって良かったってことに、なつちやうだろ……あんなことが!!」

小さな声は次第に大きくなり、喉が膨らんだり縮んだりする、泣き声混ざりのものに、変わる。

「歴史の通りにする、歴史を参考にすることで世界を守るといのは、決して間違いじゃ——」

「間違いじゃないわけないだろ!!　悟空は死んだんだぞ!!?　ラディッツもだ!　オレはあいつが兄貴だなんて知らなかったのに、あいつらが、オレと同じ親父がいて、同じ母さんがいる人だなんて知ら

なかったのに……知ったばかりだったのに……い……い……」

お前は愛されて産まれてきた、愛されて、惑星ベジータから逃された。

かつて俺がプリカに語った言葉は、おそらく真実だったのだ。

そして、プリカはその愛を分かち合った二人の事を知ったと同時に……二人を、この世から消し去ることになった。

それが、どれほどのことか。

「プリカ、よせ、もしあいつを蘇らせたっていいことなんかはないはずだ、生きてたつて、あいつと仲良くできるかなんて、そんなこと誰にも分かるものか」

「……う、ああ……オレは……おまえに……」

絞り出すような声が次第に泣き声へと変わっていく。

ついに泣き出し、舞空術の制御すらおぼつかなくなったプリカを、俺は抱きとめる。

……プリカは全く抵抗なく俺に体重を預けた。

俺はその重みに耐えきれなくなつて、絞り出されるように、言いたかつた言葉を吐き出す。

「綺麗でいることなんかより、二人で戦うことの方がずっと大事だ、帰ってきてくれ、プリカ」

「ソシルミ……」

「二人でもっと、世界を救うための悪巧みをするんだ、重力室も作つてくれ」

プリカは俺の胸の中で、小さくふるえた。

それはとても長く続き……終わつたと同時にプリカは俺の胸から離れて、涙のない凜とした顔で、ようやく俺の言葉に答える。

「……オレはおまえのことが好きだ、一緒にいたい、地球を守るのも戦うのも、暮らすのも、おまえと一緒にやりたい」

今度は俺が言葉を失つて、プリカを強く抱きしめた。

プリカは、小さく息を漏らして、なすがままだ。

この愛しい人を、また俺の元に取り戻せたことは、俺にとって多分、これまでのどんな戦いにも勝るとも劣らない勝利なのだろう。

そして……愛するからには、やらなくてはならないことも、ある。

「家に帰ろう、プリカ」

「……でもその前に、やらなきゃいけないことがある、そうなんだろう？」

「ああ」

「チチの所に行かなくちゃな」

「チチ、本当にごめん、すまなかった、……オレは本当に……悟空とチチ、悟飯たちに、皆にとつてひどいことをしたと思ってる」

「何度でも言いますが、この一件は、俺がプリカを止められなかったこと、たった一人で戦うほどに追い詰めてしまったことにも責任があります、どうか、プリカを許してください……!!」

「……本当に、ちゃんとプリカちゃんを連れてきただな、ソシルミさん」

悟空の家の玄関先で二人揃って深々と頭を下げた俺達に、チチが小さく言う。

チチには、どんな事を言う資格もある……それは、俺達が受け入れなくてはならないことだ。

謝罪だから、許してもらったためだからそうするんじゃない、ただ、チチには権利があり、俺達には義務がある。

そう思っているから謝るのだ。

「それで、『やつちやいけなかった』とか、『もうしない』とか、言わねえだか、二人とも」

「………はい、言いません」

出来ないことは出来ないと言え、それも誠意だと信じて放った言葉の前に、しばし、静寂が生まれる。

重苦しく、長い静寂だ。

それに耐えてでも、許してもらわなくてはいけない相手の言葉を拒んでも、俺達は、チチの言葉を受け入れるわけにはいかなかった。

この先も、俺達は陰謀を巡らすだろう、また人を裏切るかもしれない

い。

そして、それをやめることは……。

「ま、いいだ、二人とも、頭を上げてくれ」

「……チチさん！」

「地球を守るためだったんなら、仕方ねえだよ、一声くらいはかけて欲しかったけど、それは勘弁しといてやるだ、悟空さの友達だしな」

「ありがとう、チチ」

チチは（多分、俺達の気持ちのために）もったいぶってから謝罪を受け入れ、ニツコリと笑って俺達を許した。

どれだけのことだろうか、自分と、幼い息子から父親を……一年とはいえ奪った人間を許すということは。

それをあつさり……。

こんな謝罪で申し訳ない、許してもらうなんて、申し訳ない。

謝罪を受け入れてもらったことに、更に謝りたいと感じている。

プリカは先に、ありがとうと感謝を伝えた……俺もそうしたい、だが、俺にはもう一つだけ、ここに来る理由……使命があった。

こんな優しい人には決して言いたくないような事を、言わなくてはならない。

「チチさん、もう一つお話が」

「な、なんだ？ ソシルミさん」

「……貴女に伝えそこねた悟空からの伝言があるのです、その内容は——」

——悟飯を俺の手に委ね、最強レベルの才能を引き出し、戦士として育て上げること。

俺がそれを口に出して伝えると、チチは狼狽して叫び、事前に内容を伝えていたプリカまでもが、動揺を抑え込むように、自分の胸元を手で握った。

「そつたら……!!?!」

「事実です」

どんな修行でも感じたことのない重圧を前に、俺はじつとりと冷や汗をかく。

困難な説得だ、しかも本来これは……嫌だ、やりたくない。

4歳の子供を鍛えて戦場へと連れ出すのだ、そうしたいと、その母親に申し入れるのだ。

……だが俺は、やらなくてはならない。

愛する人への責任を、愛する人を愛することへの責任を、俺は果たさなくてはならないのだ。

最後のチャンスを掴み取った俺に与えられた、地球の守護に対する深い責任。

だがそれをも喜ぼう、これが、俺が望む通りに生きていくということなのだから。

↓つづく

第三十九話：地球人達が空からの敵に備えるまで

鳴り響くサイレンをバックに、人々の怒号や悲鳴、電話・無線のコール音がこだまする。

チカチカと光る電算機、モニター、スイッチ類、それらに齧りつくスタッフたちの目は真剣そのもの。

ここは、タンドール王立宇宙センター。

「エネルギー反応、なおも増大中です！ 既に反応値は300を――」

「空間歪曲反応も同様で――」

「事前情報とは――」

あちこちから聞こえる専門家達の叫び声は、緊迫感を感じさせつつも、どこか心地いい。

だが……事態の進展は、芳しくないようだ。

「軌道の推定!? 計算機の出力があと100倍は――」

「データがもつとあれば……ええ！ ええ!! 分かっています!!」

「しかし、ここを――」

カリカリと喚くコンピューターと、次第に悲壮感を帯びてくるスタッフたちの声。

それらに追い立てられるようにして、青い影が立ち上がった。

「もういい！ 全部こっちによこせ！ わたしが見る!!」

「ピラフ司令!!」

決断的に立ち上がったピラフは、モニタ群の前に立ち尽くし、目まぐるしく視線を動かし、冷や汗を垂らしている。

「ピラフ大王」

俺は急かすでもなく焦れたわけでもなくただ声をかける……が、隣のプリカはそうは思わなかったらしい。

ジロっと睨んできた。

技術者が全力を出しているのに催促とは何事だ、という目だ。

「……わかつている」

ピラフは焦ることなく、小さく声を上げて、ただ事態の重さだけを

認めた。

喧騒と機械音に包まれたているはずのこの部屋が、やけに静かに感じられる。

ピラフはギョロギョロとモニターを見たまま動かない、ピラフを守る俺も、プリカも同じだ。

そして、数分が経過した頃に、ピラフは固く結ばれていた口を開いて俺達に向き直った。

「およそ四時間半だ、場所はまだ分からん」

「分かった、すぐ師匠に連絡しよう」

「それがいい……、マイよろしくと伝えてくれ」

プリカが、『マイ?』と首をひねる。

それもムリはない、プリカはマイが今出張しているの知らないのだ。

今、マイは……。

【残り4：20】

わたしは今、ピラフさまの命令で中の都にあるキングキャツスルに來ている。

目の前にいるのは世界の国王と、何人かのお付きの者だ。

そして、わたしの役目は……伝令だった。

「しかしそれは……大変なことだ」

「その通りです陛下、確証もないというのに……」

「確証ならあります、わたしの主であるピラフ大王さまがデータを集め、タンドール王立宇宙センターにて現在検証中です」

世界の国王を相手にわたしは冷や汗もかかず、『大変なこと』を伝えてゆく。

本当なら緊張するところだが、わたしもそれなりに王族とは付き合いのある身、今更これくらいで怖気づいたりはいしない。

「……マイさんと言ったか、これは確かに、チャパ王の命による通達なのだな?」

「はい、チャパ王は、『事態を静観すれば多大な犠牲が出る、これはあの事件の再来を防ぐチャンスなのだ』……と」

「チャンスだと!? バカな、今日が何の日なのか分かっていないのか!? そもそも……」

「よしたまえ!」

わたしの伝えた言葉に怒るお付きを止めて、国王は頭を抱える。

「それにしても……まさか、よりにもよってこの日とは……、なんという……」

国王の苦悩は深いらしい……しかし、さすがは国王の器、すぐに持ち直して、わたしに別のことを聞くために頭を持ち上げた。

「観測したというのは分かった、信じよう……だが彼らは、そんな情報はどこから?」

「もともとはチャパ王の一番弟子、ソシルミから得た情報です」

「……ピッコロと、魔族を倒した男か」

「はい、今はどちらとも仲良くしているようですが」

それを聞いた国王は、頭を抱えるでもなく、ただ小さく首をかしげた。

そう言えば、いわゆる『魔族』と、ピッコロ大魔王本人は結構違う存在なんだ、と伝えるのを、忘れていたような気がする。

わたしにとって魔族というのは、ピラフ大王様や……。

【残り4：12】

オレは映像を写すのをやめた水晶玉を玉座の脇に置いて立ち上がる。
そして軽く飛んで、今まさに試合を始めようとしていた武舞台へと

着地した。

「シユ、シユラさま!?!」

「シユラさまー! どうして邪魔するんですー?」

「次の試合はシユラさまがやるんですか!?!」

「それならちよつと見たいかも知れねえなあ……」

魔族どもがぎやあぎやあと騒ぎ立てる。

見れば、元から居た連中だけじゃなく、ソシルミが連れてきたやつらもだ。

随分と厚かましくなった、いや、馴染んできたと言うべきか。

「黙れい!! ……出撃準備だ、久々に門を出られるかもしれないぞ」

黙れ、と言うとともに会場は静まり、次に、一声で沸き立った。

久々に戦いを楽しめるのか、もしかしたら血を浴びることができるとか、と。

だが当然、異を唱える者もいる。

「シユラさま！ 神や閻魔との盟約はいかなさるおつもりなのです!!」

「勝手に門を出ればソシルミも黙っちゃいません!!」

メラとゴラが大声で叫ぶ……が。

「まさしくその神とソシルミが出てこいと言っているのだ」

「神が……!?!」

「ソシルミが……?」

二人は首をかしげる。

無理もない、神もソシルミも、われわれと友好的関係を築こうとしつつも、この地から出さぬことに関しては徹底していた。

だが、二人にはもつと困惑してもらわねばな。

「血に飢えた諸君には悪いが、今回の目的は殺しでも略奪でもなく、戦いで済まないのだ」

魔界にはソシルミに恩を受けた者が多い。

返せる機会があるならば、返しておくのもやぶさかではないだろう。

そのついでにオレはまた恩を売れる……売った恩で何を求めようか。

そうだ、以前は断ってしまったやつと同門との試合でも、やってみるのも面白いかもしれないな。

『……というわけだ、ラパータ、至急これを皆に伝えてくれ、追って連絡する』

「は、はいっ!! それではー!」

受話器を自分でも乱暴だと思いうくらい勢いよく戻して、ぼくは走り出した。

理由は一つ、皆に、たった今知らされた一大事を教えるためだ。

ぼくは人気の失せた道場の廊下を駆け抜け、半地下の鍛錬場へと飛び込むように駆け込む。

「ソシルミ先輩から連絡です!! 以前の話の通り宇宙人が来ます、到着地点によってはうちが住民避難の手伝いをすることになるので、すぐ用意してください!!」

いきなり現れたぼくの叫びに、鍛錬に勤しんでいた先輩方が一斉にこつちを向く。

刃引きもしていない剣で演舞か試合でもしてたんだろう、血みどろの顔だ、怖い。

(普段は、ぼくが顔が怖いといじられる側だけど、今度ばかりはそう言ってもいいはずだ!)

「ラパータ!」「戦いか!!!」

「プリカちゃんと同じ種族だつて聞いたぞ!! 強いんだよな!」

ケララ先輩にパタラ先輩、チャルク先輩は一通り言いたい事を言うと武器を掲げたまま雄叫びを上げている。

いや、その……。

「ソシルミ先輩も、プリカさんも、悟空さんでも敵うかどうかかわからない相手ですよ?」

「つまり!」「オレたちがやれば!」「大金星!!!」

「宇宙人をぶった切れると思つたらゾクゾクしてくるぜ!!」

「ああもう、みなさん! 避難です避難!! 戦って死んでしまつても知りませんよ!! 覚えてますか? ぼくたち、もう生き返れないんですからね!!!」

なんて叫びながらも、ぼくの握られた手には、緊張以上の汗と火照

りが滴っていた。

自分が戦おうと戦えまいと、戦ったら死ぬとしても……強い人が現れると思うと、どうしても滾ってしまう。

武道家の本能だと、ソシルミ先輩は笑って言うんだろな。

……先輩と並び立って戦える人たちが羨ましい。

ぼくも、一度道場から出て世界を巡ってみるべきなのかもしれない、だとしたら、まず尋ねるのは……。

【残り3：45】

「武天老師さまー、無線が入ってますよー！」

「むう……わかった、すぐ行くわい」

ソシルミのやつが置いていった無線機が受信音を立ておった。

今日は何やら胸騒ぎがして、修行をほどほどに切り上げ、ゆっくり休みながらお宝ビデオでも見ておこうか、などと思っていた矢先のことじゃ。

……このタイミングで急用、そしてこの胸騒ぎ、……とうとう来おったか。

『お久しぶりです武天老師様、まずは本題からよろしいでしょうか』

「お主のその焦りようは、まさか……」

『サイヤ人の宇宙船は、数時間後には到着します、場所は、座標にして……以上です、まだあまり絞れていませんが、予測エリア内には中の都もありますね』

「……それはまことか」

もちろんです。

ソシルミはそう言って、から、仲間たちを到着予想地点内のあちこちに送り出したい、クリリンとヤムチャにも伝えてくれと頼んできた。

わしが、もちろんと答えてやると、ソシルミは安心するでもなく礼を言っ、それから、もう一つだけ質問をしてきよった。

『それであいつは、そっちには顔を出しましたか？』

「おお、来たぞよ、じゃが、すぐに出ていったわい……やっぱり、恋しいんじゃないなあ」

『でしようね……これで肩の荷が降りた思いです、ではお元気で武天老師様、もし何かあればその時はよろしくお願いします』

「年寄りを頼りにするでないわい」

そう言い返してやると、ソシルミはいやらしく笑ってから、ひと声かけて無線を切った。

……振り返ると、そこにはもう皆がいて、わしとソシルミの話の内容も既に分かっているようじゃ。

「なんじゃ、盗み聞きしとったのか」

「そんな人聞きの悪いこと言わないでくださいよ、……中の都ですか」

クリリンの言葉にうなずいてやると、皆は神妙な顔になって、クリリンとヤムチャを見た。

戦うのはこの二人だけ、わしは留守番じゃ。

「ほ、本当に来るのね……」

「オレは行かねえかな!!」

「ウーロンが行ってもジャマになるだけだよ、頑張ってくださいね、ヤムチャさま!!」

「お……おう！ やってやるぜ!!」

「おふたりとも、頑張ってくださいね」

……皆やる気に満ちあふれておる。

強い相手を前にしても楽しみを忘れんのは、誰の影響やら。

「悟空とソシルミに強くなったオレたちを見せてやります!」

「ピッコロの時は病院だったからな……オレも今度こそ!!」

「気合を入れるのはええが、功をあせるでない、ソシルミがああも怯える相手じゃ、二人とも、油断せずにかかるんじゃないぞ」

「はいっ!!」

「それと……」

「?」

「あの鶴の弟子にはぜーったい負けるでないぞ!! ええな!!!」

クリリンとヤムチャ、それに皆が一斉にずっこけた。
ま、あんまり真面目になりすぎるのもよくないからの。

【残り3：35】

「わかった、直ぐに出る」

『ああ、頼んだぞ、天津飯』

虫のようなヘリコプターのような機械がフラフラ飛んで、オレの前から去っていく。

「天さん、あれ何？」

「プリカのよこした通信用の機械だ、まったく、あいつら……通信機を忘れたからといって妙なものを遣わしやがって」

チャオズは、ふーん、とだけ言つてそのまま飛んでいく機械を眺めている。

いや、少しくらい通信の内容に興味を示したらどうなんだ？

「……もう少して中の都の辺りにサイヤ人が来るらしい、オレたちも出るぞ」

「中の都に来るなら、人がいっぱい死ぬ」

「そう決まったわけじゃないが、もしそうならソシルミのやつは嫌がるだろうな」

「あいつ、なにか仕掛けたのか？」

「それについてだが……厄介な、いや、面白いことになるかもしれない」

やつの不可思議な知恵も、陰謀も、こうまで表に出されればいつそ清々しいものだ。

そんな想いを込めて笑うと、チャオズもまた、わけもわからずに笑い出した。

【残り3：16】

「喜ベソシルミ、国王陛下が落下予想エリアに戒厳を布告した、しか

も、中の都の避難には警官隊と軍を出すらしい」

「本当ですか師匠!!」

「大分渋っていたようだがな、まあ、国王陛下の気持ちも分からんでもない」

わたしの声とともに、ソシルミはガタツと音を立てて椅子から立ち上がった。

ソシルミは憂いが晴れた、とばかりに顔を明るくして、そのまま出支度を始めにかかる。

随分騒がしくなってきたこの宇宙センターは、休むにしろ、待機するにしろ、あまり居心地はよくないからな。

「しかし、大分影響力が伸びてきたとはいえ、よく国王がウチの言うことを聞いたものです」

「はあ……、ウチだからではない、おまえの予言だから聞いたのだ、ソシルミ」

ソシルミはいかにも照れくさそうな感じで顔をしかめ、プリカはニヤニヤと笑いながらそんなソシルミの脇腹を肘でつついている。

孫……じゃなかった、子供はまだか。

「まったく、宇宙船の発見はわたしの成果だというのに……」

「そう拗ねるなピラフ……ゴホン、ソシルミ、あいつはどうした？」

武天老師さまの所に行くと言っていたが……」

「もう挨拶して、今は天界に向かってますよ」

「そうか、国王は今すぐ避難を開始すると言っているが、お前も急行するの?」

「いえ、先程、荒事に慣れた方々に連絡を済ませた所です、ひとまずはあの方々におまかせしようかと」

「ほう……」

わたしがわざとらしく首を捻ってみせると、ソシルミはさあ当ててみるとばかりに笑い、プリカはそんなソシルミをジロつと睨む。

全く愉快的な、いつもの光景だ。

【残り3：12】

「兄者、すぐに出るぞ」

執務室の兄者は、片方だけ小さく眉を潜めて椅子から立ち上がった。

おつくう……じゃないな、これから始まる依頼に真剣なのだろう。

「まさか兄者が、それも自らこんな依頼を受けるとはな」

「ふん」

「あの世で師匠に会ったとは聞いていたが、まさかここまで……」

「やかましいわい桃白白！ さつさと準備せんか！」

中の都は、舞空術にもジェット機にもちと遠い。

わたしは兄者を柱の発着場に案内しつつ、事前にやつがよこした依頼書を読みきかせることにした。

「要約するぞ、『サイヤ人宇宙船落下予想地域より住民を避難させよ、具体的な仕事を行う場所は追って指示する、殺害を除き手段を問わない、ただし、公権力が動いている場合は、なるべくそれに従え……」

b y、神』……今回は、中の都ということになるな」

「何がb yじゃ、もっと真面目にせえ」

「神の依頼というのについてはノータッチか、確か兄者も……」

「……今回のことはソシルミの差し金、何が起こってもおかしくはないわい」

兄者はぶいっとそっぽを向いた。

機嫌がよくない……違うな、こっ恥ずかしいのだろう。

「まさかやつも、殺し屋にこんな依頼を飛ばしてくるとはな」

「戦い以外のことで、亀と弟子連中に負けるわけにはいかん！

たつぷり戦果を上げてあの餓鬼と神から報酬をふんだくってやるぞ

！ いいな、桃白白!!」

……殺しとメンツにしか興味のなかった兄者が、まさかここまで変わるとはな。

どれもこれも、始まりはあの餓鬼、ソシルミだ。

さて、サイヤ人とやらを相手に、お前は何をしでかしてくれるのだ

？

【残り3：00】

タンドール王国の空は清々しく晴れており、その向こうには宇宙空間の黒が滲んでいる。

俺とプリカが今まさに飛び立ったその大空の果てから響く、この地上を揺らさんばかりの濃密な気配が一つ。

「悟空だ、プリカ」

「……ああ」

悟空があの世界から帰ってきた。

天界に感じられる気配は5つ、悟空、神様、ポポ、そして悟飯とチチ。

事前の嘆願は受け入れられ、悟飯とチチは悟空の出迎えに天界を訪れていたのだ。

「悟飯も強くなった、悟空も喜ぶだろう」

「……少し寂しいな」

「おいおい、自分から弱みを見せるとはお前らしく……」
蹴られた。

……悟飯は結局、師匠と亀仙人に面倒を見てもらいつつ、俺達も時折教えてやる、という形に落ち着いた。

悟空を向かえに行くまでに挨拶に行っていたのはそのお礼を言うためだ。

だが、悟飯を鍛えたのは、戦力のためではない。

「悟飯が戦士の道を選ぶにしても、選ばないにしても、この鍛錬はあいつのために必要だった」

「ソシルミ、悟飯は戦闘に出さない……それでいいんだよな？」

「……ああ、あいつを鍛えたのはあくまであいつ自身のためでもある、戦力として扱わないわけにはいかないが、あくまで伏兵……予備戦力だ」

二つの星の血を継ぐ大天才、あいつの体は、あいつが望まなくとも宇宙規模の力を秘めている。

俺達は一年かけて、ありうるかもしれない『元の歴史より遙かに強いサイヤ人』に対抗する戦力としてあいつを鍛え……それでいて、あいつを戦場に出すのは最後の手段だと定めた。

だが、もしこの戦いをあいつ抜きで越えられて、あいつが自分の力を永遠に戦いに使わないとしても……。

あいつは、あいつ自身を鍛え、その力に見合うだけの精神力と技を身につけなくてはならない。

俺達の考えは結局そんな所に落ち着き、チチと悟飯自身も、それに同意したのだ。

「生まれながらの宿命を乗り越えるためには、それを自ら選び、自らのものとするしかない」

「……まるで、オレたちだな」

そう言われれば、通じる所もあるのかもしれない。

二度の人生を生きた人間としてではなく、前の人生の記憶を残して産まれた一人の人間としての俺達に……。

俺が自分の人生観を見直そうかと思っていると、懐の通信機が甲高く鳴り響いた。

発信者は……桃白白か。

「もしもし」

『ソシルミか、こちらだが……面倒なことになりそうだ』

「面倒？ 中の都では軍も動き始めているし、もしトラブルがあったにしても、貴方方に敵うレベルの人間は……」

『下調べを怠ったな、聞いてみる、今マイク感度を上げる』

桃白白はそう言って黙り込み、俺は向こうからの音声に耳を傾けた。

『——ツコロ戦争十年祭は、終戦の——キングキャツスルの足元から始まり——半年かけ——最後には——パパイヤ——』

「……ま、まだ避難は始まってないのか？」

横で聞いていたプリカが焦った声を上げる。

その声は向こうのマイクとの間でキインとハウリングし、桃白白は

マイクの感度を下げた。

『ああ、軍もそろそろ動き始めているが、会場のアナウンスがまだ生きてる有様では、順調とは言えんだろう』

『ピッコロ大魔王の件の被害を悲しみ、人々が復活した奇跡を喜ぶ祭典が開かれると聞いてはいたが……まさか、よりにもよって今日この日から始まるとは』

『フツの人間に、獣っぽい奴ら、おお、魔族の類までおるぞ！』

……まあ、ああもハデに不思議なことが起こったら、こごもなるか』

桃白白ははしやぎ気味に、ちよつと他人事のような様子で祭りの様子を実況してくれている。

……普段なら喜ぶか頭を抱える所だが、あいにくそれどころではない、中の都全住民に、しかも今は祭りの参加者たちの命がかかっているかもしれないのだ。

「ど、どうするんだ?!」

『どうもこごもあるまい、現状、わたしたちにできることは——』

桃白白……ではなく、通信機に設定された割り込み着信音が鳴り響き、俺は顔をしかめる。

表示された発信者は……ピラフ大王だ。

「すいません、一度あちらに対応します」

『了解した、しばらくはここで静観する、何かあればかけ直せ』

……どうにも嫌な予感がしながら、俺は通信機のスイッチを押す。

『お、おい！ やつと出たか!! 聞こえているか!?!』

『ピラフ大王、よほど急を要する伝達のようなだな』

『ああそうだ!! ……サイヤ人の宇宙船が加速している!! 原因は分からんが……落下は予想より相当早いぞ!!』

俺とプリカは一瞬息を飲み、先に口を開いたのは、俺だった。

「なんだと!? それで、予想時刻は——」

『あと一時間足らず! 落下地点もわかった……中の都だ!!!』

【残り00:42】

俺達は地表に影響のないギリギリの速度まで加速し、一路中の都へと向かう。

避難の補助と万一の対処のために、仲間達には当初の落下予想エリア全体に向かつてもらっていたが……それももう要らない、なるべく合流しつつ、中の都へ向かうように連絡した。

多分、一番遅れるのは天界から出発した悟空と悟飯だろう。

『城下からの避難誘導、未だ——』

『わからないんですか——100万——ただでさえ——』

『——車で脱出しようとする市民が……ええ、降ろさせてはいませんが……』

特例措置として通信周波数を貰って傍受している王立防衛軍の回線からは、避難が難航しているという通信ばかりが流れてくる。

例の祭りの影響で人が増えていることもあり、住民の避難は思うように進んでいないようだ。

「……何よりまずいのは、奴らが来るのが中の都だったことだ、一年後にドラゴンボールを急いで集めても、中の都の犠牲者の多くは二度と復活できないツツ!!」

対策はしてきた、重力室まで使って体を鍛え、互いに隠し事などせず全力で技を磨き、ヨガを極め、本来戦闘用でない特殊技能も高めてきた。

それだけじゃない、ピラフと師匠に相談して宇宙センターも作ってもらったし、いくつかの『仕込み』もしてある。

人事は尽くした、というやつだ……が。

「オレたちが間に合わなきゃ、ナツパの指の動き一つで、中の都に住む全員と、鶴仙人と桃白白が……」

プリカが、俺達の脳裏を支配する懸念を言葉にした。

元の歴史でのサイヤ人は、地球に着陸して都市の喧騒を見た瞬間、指を腕ごとちよつと持ち上げるだけの技を使い……東の都を、まるごと完全に消し去ったのだ。

それも、『あいさつ』などと言いながら、何の理由もなく……。

「武道家に言うのは失礼だが、あの二人では絶対にサイヤ人には敵わない、事態も……止められないかもしれない」

「急ぐぞ、ソシルミ」

絶対に許してはならない、だが、俺達には祈ることしかできない。はやる気持ちを抑え、出せる範囲の全力で中の都へと飛んでいると、次々と仲間達の気配が集まってきた。

「ソシルミ！ プリカ！ 無線は聞いたぞ、マズいことになったな……」

「早く行かなくちゃ、中の都の人たちが殺されちまう」

「クリリンツツ!! ヤムチャツツ!!」

俺達は再会の喜びを分かち合うよりも、焦燥感を共有する。

事態に対応しやすいよう配慮していたのが、今度は仇になったのかもしれないと感じるが、どうすることもできない。

ただ祈りながら飛ぶと、下で俺達を指差して驚く農家の人達が見えた。

もし敗北すれば、彼等の命もまた、失われる。

……それから数分後に、天津飯とチャオズが合流した。

「鶴仙人さま、桃白白さん……!!」

やはり、師匠達に迫る危機に冷静ではいられないのだろう。

二人は冷や汗を垂らし、必死の形相で飛んでいる。

これには、鶴仙流に隔意のある亀仙流の二人も同情を見せた。

「中の都の避難さえ済めば、住んでる人たちも無事で住むし、鶴仙人や桃白白だつて逃げられるさ」

ヤムチャがそう言った言葉に、俺達も望みを託すしかない。

それから数十分後、ようやく悟空と悟飯がたどり着いた。

「オッス！ 久しぶりだな、皆!!」

「悟空、相変わらずのんきななあ……」

元気な、しかし気の抜けるような挨拶に、一瞬で空気が緩む。

その一方で、俺は二人が並ぶ姿に一瞬ドキリとするが、それを抑え込み、努めて冷静に振る舞う。

プリカはより葛藤が強いらしく、実際ほんの僅かに飛行姿勢が揺らいだ。

手でも握ってやろうか？ と、皆には分からない程度にジエスチャ―をするが、要らないと、またジエスチャ―で帰ってきた。

心配だが、辛くなったら自分からそう言うってくれるだろう、言ってくれないならしつかり見ておくだけだ。

「ソシルミ、プリカ、悟空にクリリンにヤムチャ、そしてオレたち……一堂に会するのは第22回天下一武道会の時以来か」

「オツス！ へへ、このままオラたちだけでやりてえくらいだ、皆鍛え込んできたなあ、見たら分かるぜ、へへ……」

「お前の伸び幅が一番だつてのも見れば分かる」

「なにを！ ボクだつて負けてないぞ!!」

ちよつとした同窓会だ。

さつきからだんまりの悟飯は、親父の友達に囲まれた子供と言った所……いや、そのまんまだな。

俺とプリカが皆を制してやると、悟飯はおずおずと、しかし元気に挨拶を始めた。

「こ、こんにちは！ ボク、孫悟飯です！ きよ……今日は、みなさんの戦いを拝見させていただきます!!」

「妙に礼儀正しい小僧だ……ソシルミ、おまえが仕込んだのか？」

「何故俺に振るんだ天津飯、座学と鍛錬には一枚噛んでいるが、余計なことはしてないぞ」

「おまえがいつも面倒くさい言い回しばつかりするからだろ、でも今回ばかりは関係ない、元からだ、チチは教育熱心だからな」

チチと悟飯は一年の修行期間中も、ちよくちよく会っては親子の団欒を楽しんだり、教育を行ったりしていた。

元の歴史におけるピッコロと悟飯の関係を否定する気はないが……やはり、子供と親は離れすぎるべきではない。

「そうだそうだ、チチのやつ、悟飯の勉強が前より進んだって喜んでたぞ！ 悟飯はバツチリ強くなったし、うかうかしてつと、オラもすぐ抜かされちまうかもなあ……」

「頭の方はもう抜かされてるんじゃないか？」

「ひっでえなあクリリン！ オラだって、チャパさんここで武道を教えるからって、ちよつとは勉強したぞ！」

悟飯は父が望むように強くなり、そして、母が望むように賢くなった。

あの日、俺達の呼びかけに応えて修行に応じることを決めた悟飯……その選択は、幼子には酷すぎるものだったかもしれないが……。それによって愛する両親の望みに答え、今は同じ景色を眺めている。

「なあ、プリカ」

「……これでいい、だろ？ オレはまだそこまで割り切れないけど、ああまでニコニコされちゃうとな」

「ああ、後は俺達が努力するだけだ、あいつを戦場には——」

『——こちら——市民の一部がパニック状態に——至

急——』

「何ツツ!!」

音量を落としていた無線機から、剣呑な知らせが届く。

まさか、この局面で!!

【残り00:07】

中の都の大通りを見れば、視界を埋め尽くすのは、歩道まで乗り上げたエアカーと、そこを縫うように動き回る人、人、人。

その人々の耳を満たすのは、クラクションと叫び声、時折鳴り響く激突音だ。

「くそお……一体何が起きてるんだ!!」

「おまつり、楽しみにしてたのに……」

避難者は大量の車両で詰まった道を通りあぐねて立ち往生。

交通整理すべき警察官も車両に埋もれ、軍人すら立ち入れない有様だ。

その大惨事を悲痛な瞳で見下ろすのは、この都の主、世界の国王

だった。

「国王陛下、時間がありません」

「い、いや、まだだ、国民を……それも、わが城下の住民を見捨てて行くわけにはいかん！」

「やつらはビームを使うと聞き及んでおります、せめてへりにお乗りください、街からの脱出は……努力します、ですから……」

国王の座す街の中心、再建が完了したキングキャッスル周辺のみは、かろうじて人払いが済んだものの、街からの住民避難は遅々として進んでいない。

「こ、こつちの道もふさがってやがる!!」

「歩いて逃げろっておまわりさん言ってたけど、いつ車がすっ飛んでくるのかわかんねえのに降りられねえよ！」

「せっかくピッコロ戦役を助かって退役したつちゆうのに……まさかこんなことになるとはなあ」

人口の多さ、祭りの規模、そしてパニック。

あらゆる要素が、住民のスムーズな避難を妨害していた。

そんな大惨事の街を見下ろす老人がもうひとり……いや、二人。

「兄者、これこそわたしたちに向いた仕事じゃないか？」

「そうだのう桃白白、ようやく好みの仕事が来たわい」

そう言つて、兄弟はひよいと群衆へと飛び込んでゆく。

彼等はこれまで状況を見守りつつも、舞空術を用いた怪我人の救助や車両の引き上げなどによって避難に貢献してきた。

だが、彼等はあくまで武道家……それも、長らく闇の世界に浸り続けた武道家だ。

「どけい!! 誰じゃ、騒いでおるのは!!!」

「ひいつ!!」

パニックを起こした住民に割り入ってゆく鶴仙人が放つのは、しおれた老人の体から放たれたとは思えぬ濃密な殺気と怒号。

泣く子も黙るとはまさにこのことか、声を直接聞いた住民達は即座に口を噤み、ゆつくりとその場を離れてゆく。

「どどんっ! ……死にたくないならあっち行つた方がいいよ？」

「オレのバイクがあっ!!!」

精神的な厚みによって圧倒する鶴仙人から少し離れた場所で、桃白白がどどん波を乱射、次々と路上に放置されたバイクやエアカーを破壊してゆく。

……いや、破壊されたのは放置されたものだけではない、人が乗ったままのそれもまた、運転手を傷付けぬよう巧妙に破壊されているのだ。

「あー、ボクちゃん、ちよつと車とかニガテなのよん、だから……

ひよい!!」

「ひいひい!!」

桃白白は渋滞が脱出の妨げになっていることを悟り、それらを破壊しながら。

鶴仙人はあらゆることを意に介さず、ただひたすら市民を黙らせながら、パニックの中心へと向かっていく。

そして二人は理解した、パニックの中心にあるもの、それは――

「はっはっは!! オレたちはそもそもあんな祭り大つきらいだったんだ!!」

「ソシルミのヤローの顔に直接ドロを塗ってやれなかったのは残念だが、行きがけの駄賃つてことで、楽しませてもらうぜ!!」

――そこに居たのは、二体の魔族だった。

それも、ピッコロ大魔王の騒動で見られた魔族ではない、更に古くから各所で暴れていた魔族……ソシルミに言わせれば、『ルシフェルの所の奴ら』と言うであろう魔族が暴れていた。

「むう……」

「魔族が今更何をしておるか!! こやつら……」

「兄者」

「……わかっておるわい、殺せば余計騒ぎになる」

民衆をかき分けるように歩いてきた二人が、突如、姿を消す。次に出現したのは、暴れる魔族達のちよつど真後ろだ。

「武道家め、出やがった――ぐ!! が……は」

「こ、これでも喰ら、ぐ!! ぶげ……」

そして、魔族達は次の瞬間には既に意識を失い、ゆつくりと地面に倒れ伏した。

熟練の武道家であるか、ハイスピードカメラを搭載したサイボーグであれば、二人が魔族に対し、それぞれ二回ずつ、鋭い攻撃を叩き込んだのが見えただろう。

鶴仙人と桃白白は魔族たちを見下ろし、目を見合わせた。

(一撃で倒せんとは……、妙に強いぞ、こやつら)

(ああ、しかもこの状況で『ひと暴れ』とは、辻褄が……)

だが、魔族の異常な行動への思考を巡らせるのは、そこまでだった。

「——兄者!!!」

「き、来おった!!!」

そして、兄は空を見上げ、弟もそれに続いた。

「間に合わなかったか……!!」

鶴仙人は眉を強くしかめ、音より早く迫りくる流星を見る。

「サイヤ人、なんと厳しい気よ……」

流星から溢れる気配、宇宙においては戦闘力と呼ばれる生命エネルギーが放つそれは、見上げる彼等の数十倍。

彼等が本来悪に生きること誓った身でなければ、『禍々しい』と形容したのであろう濃密なる悪意が、中の都を突き刺す。

「な、なんじゃあれは……!!」

「国王様!! もう限界です! 離陸しましょう!!!」

大魔王よりもおぞましく、神よりも強い者共を載せた丸形宇宙船は一直線に都へと飛来。

そして……キングキャツスルの足元、かろうじて避難の済んだ広場へと——

【残り00:00】

——轟音とともに落下した。

土煙の中から溢れる禍々しい気配と、うつすら見える奇妙な人工物

を前に、その場に居るもの全ての視線が釘付けとなる。

落下の衝撃が作った二つの小さめのクレーターは、大げさな落下とは異なる印象を与え……だが、それに安堵する暇も与えぬとばかりに、落下物からは不気味に機械音が響く。

機械音の正体、それは球体状の人工物は備え付けられたハッチが開く音。

開いたハッチから、それぞれ大小一つずつの人型が、のそりと身をかがめて歩み出た。

「——地球——いい感じじゃ——どうする——」
「ラディッツのやろ——しかしこうも——まあいいか、ちよつと——」

和やかに、しかし邪悪で攻撃的な気配を隠そうともせず談笑する二体存在、宇宙人。

彼等の真の脅威を察することが出来たのは、この場ではたったの二人だけ。

瞬き一つ出来ぬままに宇宙人を見つめる二人は、武道家としての感覚で、宇宙人のうち大柄の一体がこれから行う、ほんの僅かな動きを察知することができた。

ほんの僅かな……右手の指を腕ごと軽く持ち上げるだけの、その動きを察知した鶴仙人は——。

「太陽拳!!!」

「あいさつ!——もおつ!!!?」

鶴仙人は、その動きを前に最後の隠し玉……相手の動きを實力差と無関係に封殺する、新旧鶴仙流最強の切り札を、あつけなく使い捨てた。

「な、なんだっ……光の……、目つぶし兵器か!」

「くっ……落ち着けナツパ!! うかつに動けば敵の思うつぼだっ!」

だが、今まさにこの地へと必死で飛行を続けるソシルミとプリカならば断ずるだろう。

その判断は間違いなく、英断であったと。

鶴仙人の判断は、中の都がナツパの暴挙によって灰燼と化すことを防ぎ、鶴仙人自身の命をも守ったのだと。

……しかし、彼等にとつて本当の恐怖は、そこからだった。

「兄者、もう回復しそうだぞー！」

「目まで強いとは、なんという……」

「ナツパのやつはまともに喰らいやがったが、オレはそうはいかん……発想力だけはあるようだな、地球人というやつは」

悶える大男を捨て置いて、小男が二人ににじり寄る。

かつて彼等を欺き、それでいて守ろうとしたあの男が、あの男に呆れ顔で寄り添い続けたあの女が、心底恐れた存在はあれなのだ、鶴仙人と桃白白は理解した。

莫大な気は彼等の魂魄を押し潰し、鍛え上げたはずの心身は怖じ気に震える。

だが、彼等の背後には救うと誓った民がいて……その地にはもうすぐ、彼等の弟子と、そのライバル達がわんさとやってくるのだ。

「……桃白白」

「おう」

二人は逃げるのではなく、前に出た。

その直後、激しく、それぞれ別の方向にあるビルに激突することになった。

「バ……」

「ぐっ……い！」

「む？ 見た目よりは頑丈のようだな」

小男……サイヤ人『ベジータ』は左耳から同じく左目にかけて装着した装置、スカウターの表示を見る。

そして、二人がめり込んだビルに向け、ぞんざいにエネルギー弾を叩き込んだ。

「気功砲!!!!」

「なっ……!!」

あらゆる意味で枯れた喉から絞り出した声が、同時に響く。その生命の全てを叩き込むというほどの必殺技である気功砲、最高

の技を、またしても使い捨てる暴挙。

だが、その狙いは自らを狙うエネルギー弾ではなく――

「――なっ……こいつら、スカウターを!!」

「ぐおおっ!! ベ、ベジータ! 何が起きてる!!?」

崩れ落ちてゆくビルに取り残され、力なく落下してゆく二人。

本来の歴史ではサイヤ人が自ら放棄したスカウターだが、この歴史ではそのきっかけはない。

意図せず取った、武道家としての観察眼とカンによる行動は、まさしく二度目の英断であり……。

「ゴミのくせによくもやってくれたな……」

「ベジータ! オ、オレにやらせてくれ! このままじゃ収まんねえっ!!!」

「……フン、好きにしろ」

サイヤ人の大男、『ナツパ』は遙か格下に一瞬でも戦闘不能に追い込まれた屈辱を晴らそうとエネルギーを溜め込む。

そして、大ぶりのエネルギー弾を二つ作り上げた。

「死ねっ!!!」

この地球でかつて解き放たれたことのない絶対的なエネルギーの塊。

それが、せいぜい一般的な地球人の100倍程度のパワーしかない老人二人に向けて突き進む。

だがそれでも、当の二人は笑っていた、それはこの危機的状況を切り抜ける技があるからではない。

ましてや、弟子達や小憎たらしい同盟者が後始末をするからという希望ゆえなどでは断じてない。

それぞれ、一人の悪を志した武道家として、敵に負けぬため、怖じ気に負けぬために笑ったのだ。

「く、くくく……」

「ははは、気ばかり膨れあがりおって、ケダモノめ」

声を張るだけの体力すらもなく、それでも二人は立ち上がるため、瓦礫に足を、手をかけようとする。

だが、その両手は氣を握ることすらなくただ空をさまよい――

「つああつ!!!」

「護ゴツツツツ!!!」

二筋の光が、戦場を貫いた。

一つは細い筋のような光。

もう一つは、太く、しかし滑らかな大ぶりの光。

二つの光が大玉を切り裂き、跡形もなく霧散させたのだ。

「なにっ!!?」

「鶴仙人様、桃白白様、ご無事で」

「ど、どこが無事じゃ……さんざん遅れおって……」

地面に降り立った光、輝きが振り向いて、中の都の人々を守った英雄の名を呼び……続けて小さく、友の名を呼ぶ。

「無事ということにしておきましょう、――ピッコロ、ありがとう」

「礼などいらん、……武泰斗の弟子などどうでもいいが、こいつらにくれてやるのはシヤクだからな」

続けて空の後ろからやってくるのは、山吹色の道着が三。

「あれが、オラとプリカの仲間……」

「……悟空、あんな氣の連中がおまえの仲間なわけないぞ!」

「クリリンの言う通りだ!」

緑と黄の道着が二。

「仙豆だ、天津飯、チャオズ! 鶴仙人様達の介抱をツツ!」

「分かっている、くっ……まさかお二人がこんなになってまで……!!」

「い、急がなきゃ!!」

そして、臙脂色のジャージが一。

「……クリリンはあんなこと言ってるけど、見れば分かる、あれは、オレの仲間だ」

「それじゃあ、案外楽しく付き合えるのかもな」

ジャージの女は、ぎゅつと手を握りしめ。

偏袒右肩の男の手が、それを覆った。

↖ ↗ ↘ ↙

第四十話：転生地球人が侵略サイヤ人と戦うまで

情を残すように強くプリカの手を握って、それから離す。

そのまま両腕を広げた俺の目的は、サイヤ人との、停戦だ。

「……不幸にも遭遇戦が発生してしまったが、我々は未だ……」

「はーっはっはっは!! この様子じゃ、やっぱりラディッツはやられたらしいな、間抜けなやつめ!!」

高らかに笑って構えるナツパ——呼びかけ中止！

次の瞬間には、アスファルトを蹴り抉りながら飛び出してくるナツパ、突き出た拳。

力いっぱい、しかし、鋭さに欠ける甘い攻撃だ、おそらく当人も必殺を狙ってはいまい。

ならば……。

「シツツツ!!」

「はっはっ………む!!?」

俺は輝きを纏わぬまま、満身の力を込めた拳を、ナツパの一撃へと合わせる！

衝撃波となったエネルギーが周囲の大気を揺さぶり、同心円状に土埃を巻き上げてゆく中、一瞬だけ時間が止まり、俺の笑みとナツパの驚愕が交差した。

……それはあくまで一瞬のことだ、ナツパは次の瞬間には激突の反動を利用して元の位置にまで戻り、いらついた顔を浮かべている。

「な、なんて威力だ……ソシルミもあのサイヤ人も、まるで本気じゃないぞ……!!」

「ええヤムチャさん、オレたちももつと鍛え込むべきだったかもしれませんが……!」

俺とナツパの激突の威力を前に、仲間達はこの戦いのレベルを悟ってざわつく。

当事者である俺自身の意識は、ナツパの膂力よりも、停戦の要求すら許されない、サイヤ人の攻撃性の高さに向けられていた。

まさかしょっぱなから通るとは思っていなかったが、言うことすら

出来ないか。

「あ……あのやろう!! おいベジータ! もうやっちゃまっていいよな!!」

「待てナツパ、どうせスカウターもないんだ、ちよつとは品定めを楽しむのも悪くないだろう……、なあ、その地球人」

「俺か」

ベジータを含め、この場全員の視線が俺に集中する。

「そうだ、キサマがラディッツの言っていたプリカの夫だな、なるほど、キサマはこの星における有事の司令官……いや、まとめ役といったところか」

「おいベジータ、なんで分かるんだ?」

「さっきキサマがやつに殴りかかったとき、プリカのやつも、回りの連中も、驚きはしてもかばいには出なかった……実力を認められたリーダー格でなければこうはいかん」

なるほど、これが戦闘民族サイヤ人の王子か。

技や戦闘全般における眼力には、まさしく目を見張るものがある。一方、俺とプリカ、悟空以外の皆はナツパが振るったパワーにこそ、脅威を感じているようだ。

その恐れを感じ取ったナツパは、わざとその膂力をひけらかすようにして首ごと視線を動かし、皆を脅かしている。

「へっへっへ……どいつから頂いちまおうかな……!」

「滅んだ種族が今更何を食べる気だ、死体に餌なんていらぬ、地球にあるものは何もやらないぞ」

驚くほどに攻撃的な言葉を並べ立てながら、プリカがゆつくりと前に出た。

その纏う気配までもが、普段は絶対に感じさせない、怒りと拒絶に満ち溢れている。

事前の話し合いでは、停戦に同意していたプリカだが……今は、サイヤ人への怒りでいっぱいだった。

だが、同胞からの明確な拒絶を前にしてもサイヤ人の闘気は揺るがず、闘気に乗った互いの戦意が戦場を包む。

……それは戦士のみならず、周囲の民衆や軍人までにも影響を及ぼしている。

「な、なんか止まってるし！今のうちに逃げようぜ!!」

「もしかしてあの浮いてるのって天下一武道会に出てきたマジユニアじゃ……」

「孫悟空選手、ソシルミ選手……そうそうたる顔ぶれだ、この戦い、ぼくらの武器じゃ一矢報いることもできないだろうな……! クソ!! 一体何のために鍛えてきたってんだ!!」

「市民を逃がすんだ！せつかく体力はあるんだ、ご老人をおぶつていくくらいはできる!!」

ほんの数メートル先には避難を急いでいる市民達の姿。

俺達の後ろでは、そんな人々を守った二人の漢が、その弟子たちに看護されつつ、戦場を離れつつあった。

(サイヤ人に情報を渡さぬため、仙豆使用を謹んでくれているのだ、ありがたい)

「鶴仙人のじいちゃん、大丈夫かな……」

「大丈夫さ悟空、なんとたつてあの二人がついてるんだ、後はオレたちがサイヤ人を通さなきゃいいだけだぜ」

亀仙流の戦士たちは、鶴仙人とその弟の無事を願っている。

……尊敬しているのだろう。

(プリカ、大丈夫か?)

俺は声に出さず、テレパシーでプリカに呼びかける。

……プリカが漲らせている闘志と攻撃的な言葉は、内心の怯えから来るものだ。

怯えと言っても、サイヤ人の戦力に怯えているのではない、プリカが怯えているのはおそらく……自らが背負った産まれ、今なお自分の心の奥底に住み着く『大猿』。

そして、自分の手で犯した、その産まれに関わる大きな罪だ。

(……ソシルミ)

プリカが心で答える、俺をただ呼んでいるだけにも聞こえる心の声。

だが違う、これは……。

「プリカ、やるなら一緒だ」

「ん」

俺は一步前進し、プリカに並び立つ。

そして、プリカが俺を感じられるよう、強めに気配を放った。

「へっ、ダンナと一緒にじゃないと戦えねえってか、それじゃあやっばり、おまえが相手をしてくれるのか？ えーつと……」

「ソシルミだ、俺は一向に構わん」

「そうか、ソシルミ!! まさかさっきのが本気だと思ってるわけじゃねえだろうな!!」

「いや、全然」

凄むナツパだが、正直言つて一切脅威を感じない。

保有エネルギー量、技術力、身体強度、ナツパが持っているあらゆる要素を加味しても、この俺を正面から打倒することは不可能だ。

スカウターが手元にならない以上、これは推測とカンでしかないのだが……サイヤ人二人の戦闘力はおそらく元の歴史と何一つ変わってはいないのだろう。

であるならば、より強化された地球人と、蛇の道をより早く駆け抜けより長く界王星で鍛えた悟空、更に俺とプリカを加えた地球の戦力で勝てない道理はないのだ。

……もつとも、戦闘民族サイヤ人はそれでも侮りがたい特徴を秘めているし、俺やプリカ、ピッコロでも、タイマンでベジータとやりあえば、良くて苦戦を強いる、悪ければ手こずらせる程度で終わるだろう。

始まる前から決めつけられる戦力比ではないが、だからこそ、戦いは避けたい。

「ベジータ、ナツパ、お前たちは——」

「ゴタクはそこまでだ、ナツパ!! こいつとプリカはオレがやる! 確か潜在能力が高いのはプリカの方だったからな!!!」

叫びとともにベジータが構え……これは、来るか!!

「オレが地球人どもとカカロットか……ちっ、はずれを押し付けや

がって！」

「カカロットってオラだっけ……」

「お笑いだぜ、よわむしラディッツの弟はてめえの名前も分からねえとはなっ!!!」

とぼけた会話を始めるナツパと悟空。

そして、ベジータはついに俺達への攻撃を開始した。

ベジータの拳と、俺の輝く手が交差する!!

「ツアツ!!! ムオツツ！」

「戦闘力を手に固めて戦うのか、使えそうな技じゃないか、だが、所詮はザコの涙ぐましい努力つてとこだな!!」

やはり俺を押しつぶさんとするサイヤ人のパワー、強度。

だが、小技に走れば戦闘センスに潰されるだろう、俺に出来るのはむしろ、技術力を正面戦闘能力の確保に回すこと!

しかし、それよりも前にやらなくてはならない事がある。

「二人とも、ラディッツのことは不幸な行き違いだった、俺も義兄を失ったのには思う所がある!!」

「あんなやつのはどうでもいい!!」

「そ、そうだぜっ!! サイヤ人にザコも弱虫もいらねえんだ!!」

「……っ」

俺とベジータの会話、そしてナツパの反応を前に、プリカは、びくんと気配を揺るがせた。

前世から小物と知っているとしても、実の兄にして自らの罪の象徴、それをどうでもいいと同胞に言われたなら……。

俺もかつては、助けるのは難しく、意味も薄い、しようもない小悪党としてラディッツを見ていたが、今では違う。

一年前の、プリカを慰めるのための言葉ではなく、自分自身の心で考えれば、ラディッツですら死んでほしくはなかったのだ。

ベジータは本気でラディッツは要らないと思っている、サイヤ人の誇りは馴れ合いではないのだろう。

「……到着後の遭遇戦も詫びよう、僅かな生き残りのサイヤ人が相争うことはない、今からでも停戦するべきだ!!」

「サイヤ人というならば戦ってみろ!! 詫びたいというなら、やつの言っていたドラゴンボールとやらをよこすんだな!!」

仲間のうち数人の目が、一瞬、俺とプリカに向かう。

『教えてしまったのか』あるいは、『教えたはずないよな』という目だ。

だが、その僅かな視線は、ベジータにとって十分なものだったらしい。

「はっはっはっは!! やはりあるようだな、ドラゴンボールとやらは!!!」

「だったとして、貴様らには情報も実物もやれんツツツ!!!」

「やっと本気で戦う気になったか、そうでなくてはなっ!!!」

俺の敵意を喜ぶように、ベジータが飛び出す、俺へと飛び込む!!
ベジータ!!!

かつて破壊された惑星ベジータの名を持つ者にして、同星を根城としていた種族、サイヤ人の王子!

戦闘民族と呼ばれ、圧倒的なパワーを中心として戦闘に適した能力の数々を身に着けたサイヤ人であって、その特性をもっとも色濃く受け継ぐ戦士!

おおらかなこの世界において特異的な程の強い誇り、それと表裏一体のナイーブな精神は作品としてのドラゴンボールを精神面で支える存在であった。

しかし、今俺の目の前に立っているのは、後年の地球風の考えに染まり良き父となる前の、悪しき侵略者としてのベジータ王子に他ならない。

その残虐性、戦闘センス、保有するエネルギーと肉体強度はどれをとっても一級品、もしこの地球の敵でなかったとしても有害で排除すべき存在であるはずのそれに……俺は喝采を送らずにはいられない!!

素晴らしい、一つの種族の到達点!

戦闘民族サイヤ人の王子ベジータは、今、一切の甘さも無く俺の目の前に居るのだ!!!

この間、ゼロ秒。

俺はベジータの突撃を潰すように、気力大移動による地面を介さないワンインチパンチを行って迎撃。

ベジータはほぼノーダメージのままその激突に満足し、仕切り直しのため飛び退き、瓦礫の上に着地する……思考は、その流れの最中に行われたのである。

戦闘の楽しみに情報の楽しみを重ねることはあっても犠牲にすることなどありえない、最早、俺の興奮は内心だけで楽しまれ、誰にも気取られることはないのだ。

「……おまえなあ」

訂正、一人を除いて。

後ろで呆れるプリカの声色は、先程の暗さを残しつつも穏やかなもので……。

俺のしようもなさを思い出して復調してくれるなら、いくらでも呆れて欲しい。

「やはり、戦うしかないか……ツツツ!!」

「そのつもりで戦力を集めていたんだろう？　きさまも戦うのは好きそうに見えるぜ!!」

その通り、大好きだ……ワクワクする。

「そうだなベジータツツツ……陳腐な表現だが、拳で語らせてもらうぞ!!」

「楽しませてもらうんじゃないか!!」

……この戦闘の第一目標は戦士含めた地球の住民の保護、そして、第二目標はサイヤ人二人を生かした状態での終戦、停戦だ。

残念ながら、俺だけの力じゃベジータは倒せない。

だが、プリカと合わせれば互角以上、皆となら撃退出来るだろう。

誇り高いベジータを負かして、言うことを聞かせるなんてことは無理かも知れないが……対等の相手と思ってもらえれば、和解の可能性もあるかもしれない。

「ああ……楽しもう!!」

失礼ながら、今回、俺は欲張らせてもらう。

かつて愛した世界の住民を。

今愛している人の同族を。

強力な才能を秘めた武道家を。

俺は殺したくない、その意思に従う……欲張るためにこそ、俺は本来のプライドと違う行いもするのだ。

「……………!!」

俺の叫びに呼応するように、プリカは静かにその気の色を戦闘向けに変えた。

俺もまた、気合のレベルを上げる。

「ツエアアツツツツ!!」

「どうやら全力を……いや、戦闘力を上げる種族か！スカウターがあれば騙されていたかもしれない！」

互いのラッシュが交差し、舞空術とステップを併用した位置取り争いは限りなく続いてゆく。

パワー、スピード、頑強性、スタミナ……テクニクとバランス、反射神経以外の全ての項目でベジータが優越している。

「苦しそうじゃないかソシルミ、だがまさか、地球人ごときがここまで食い下がるとはな!!」

「鍛え込んだからなツツツ!!」

重力室に加え、これまで謹んできた様々な鍛錬装置を作り、戦闘に備えてきた。

超超音速の弾体を弾く鍛錬、超精密検査装置を利用したバランス修練、複数の極限環境を再現出来る装置を利用したヨガの荒行……。

それらの効果は自分でも眼を見張るほどだ、特に重要なのは……筋力とエネルギー量。

技量を高めることによつてこそ戦いを堪能し、パワーを上げることがは慎む、そんなやり方を志向してきた俺だが、鍛えたことによつて見える世界も、確かにあったのだ。

しかし、それをもつてなお、俺とベジータの間には相当な力の差が横たわっている。

「トレーニングか!! 確かに、こんな田舎星じゃあまともに戦いで

強くもなれんだろう!!」

「仲間と切磋琢磨し、師を仰いで暮らすのも楽しいものさツツ!!」
仲間達……亀仙流の三人は今、ナツパを相手に優勢に立ち回っていた。

クリリンとヤムチャによる見事な連携と、悟空のフォローはナツパの動きを封殺し、時折明確なダメージを与えてすらいる。

悟空がフォローに徹し、一種静観とも言えるほどに手を出さないのは、敵を見極めるためだろうか、それとも……。

「はいーっ!!!」

「が……つつう……ちよ、ちよこまかしやがって!!」

「へっ! サイヤ人ってのもどうやら大したことないらしいな!!」

「言いやがる……ちよろちよろしたって一人じゃオレに潰されて終わりのくせによ!!!」

……ナツパが俺達共通の『痛い所』を突くが、これは戦いだ。

全てを使って、望むものを勝ち取らせてもらう。

「お仲間が気になるのかっ!!」

「お前はどうか、ベジータ!!!」

「ふん、サイヤ人にとっては勝者だけが仲間だ!」

「オレも悟空もソシルミも!! そんなんじゃないぞ!!! ぐあ!!!」

プリカが叫び、俺とベジータの殴り合いにエネルギー弾で割り込む。

さつきから、プリカは俺とベジータの戦いを援護という形で支えている、奇しくも兄弟である悟空と同じやり方だ。

それは俺が内心でベジータとの戦いを望んでいることへの配慮なのか、それとも、まだ同族との戦いに動揺しているのか……。

「くっ……プリカめ、そんなにダンナが心配なら、きさまが戦えばいいだろう」

「……………」

「だんまりか、まあいいっ!!!」

ベジータは俺から距離を取り、上空に上がって構えを取る。

見たこともない構えだ、しかし、構えを取ったベジータから滾る

オーラ、あれは――

「さあ、きさまも戦闘力を扱うなら、これくらい耐えてみせろ!!」

「ツツツ!!」

元の歴史でナツパを消し去ったビーム攻撃か!!

回避……は不可能、ならば俺の手で防いでやるしかあるまい、しかし、ベジータが全力でないにしろ、保有エネルギー量は数倍、俺に出来るか――

……プリカが、俺の肩を小さく叩いて、それから気を高めた。

「お前がやる気か」

にやり、と笑うプリカ、俺のマネだ。

それだけで、俺にははつきりと分かる。

プリカはこの戦いを楽しんでいる、楽しもうとしているのだ。

戦いを楽しみ、愛する世界との体面を楽しみ、俺と並ぶことを楽しみ……自分の生まれと向き合おうとしている。

……気を高めたプリカは、両手を前にやり、それから、腰へと下げてゆく――見慣れた技だった。

「かあ、めえ……ぐあ、ぎえ……」

プリカの手に、よく知った青白いエネルギー塊が、よく知った音を伴って現れる。

ベジータのエネルギーもまた、既に臨界まで高まっているが……俺に恐怖はなく、ただ待つこと以外をする気もなかった。

「任せた」

「があーつ!!!」

あまりにプリカらしい掛け声とともに、放たれるかめはめ波!!!

だが、その閃光は間違いなく、本家家元、本式のかめはめ波……いや、超かめはめ波そのもの!

「むっ!!」

「ぐおあーつ!!!」

放たれた二筋のエネルギービームは、互いの中間点にて一瞬の均衡の後爆発。

その爆風は戦場を包みこみ、中の都全体を煽ってゆく!

「かめはめ波、習ったのか」

「……ああ」

「しかし、逆にどうしてこれまで習わな……まさか、遠慮してたのか？」

「遠慮しなくなった理由は、おまえが知ってるだろ、もうこれ以上言うな」

土埃の中でも分かるほど顔を赤くして、プリカが睨む。

俺は一陣の風が土埃を飛ばし切るまでそれを堪能した後、ベジータへと向き直った。

「まさか、軽く放ったとはいえこのオレの技に対抗できるサイヤ人がいるとはな……!!」

「強いだろう、プリカは」

プリカはかつて自分が夢見た、そして俺が見せた、戦士達とともに鍛え、戦うというビジョンを我が物とすることで、さらなる力を得たのだ。

そんな伝えようもない喜びを表現するように自慢してやると、ベジータはわずかに顔を歪めた、俺は別に挑発してないが……なんというか、なんだろう。

「ベジータ、こいつは、こういうやつなんだ、許してやってくれ」

「ふん、すぐ二人ともあの世に送ってやる」

「それまでは楽しませて貰おう、ベジータ王子、戦闘民族の王子と戦闘を楽しめる機会など、そうはないからな」

「ふざけやがって、王子を前にしてると思ってるなら、もっとそれらしい態度を取ることだな」

「それは失礼、だが、お前との戦いは本当に楽しみなんだ」

ベジータはちいさく鼻を鳴らし、こちらを睨んだまま僅かに態度を和らげる。

そうとも、戦いを和解のための段階として置くならば、それはコミュニケーション。

コミュニケーションならば、楽しむことこそが肝要なのだ。

プリカは再び俺の隣に、前でも後ろでもなく、隣に立った。

そして気を高め……俺とともに構える。

「仲のよろしいことだ」

「羨ましいか、地球人とサイヤ人は近い、この星で嫁を見つけてみる
といい」

「こいつとやりあえる嫁をか？ ソシルミ、それは難しいぞ」

俺達の軽口を叩き潰すように、突っ込んでくるベジータ!!

俺は初撃に合わせ、全力の気力大移動を叩き込む!

ベジータを止めるには足りない全力だが、初撃は防いだ、その拮抗
に――

「スター・モーニング・マルチプル!!」

プリカの光弾二つが迫る!

「なっ……!!」

両側から迫る光弾を防ぐため、思わず両手を開いて防御するベジータ、だがその隙は。

「八千拳ツツツツ!!」

「新狼牙風風拳!!!」

二つのラッシュ技の起点となるに十分!!

伊達に10年以上を共にしてはいない、俺達の呼吸は完璧以上に噛み合い、戦闘力で言えば遙か格上のベジータを完全に翻弄する。

「ぐっ、ぬ……ぬう……ぐおおお!!! 舐めるなよっ!!!」

打撃を受け続けるベジータが突如体を丸める。

球体は防御に優れた姿勢とはいえ、格下である俺達からの攻撃を一瞬防ぐ程度にしか使えないが……ベジータはその一瞬を利用し、体内のエネルギーを高めた!!

「退避ツツ!!」

「お、おうっ!!」

俺とプリカが思い思いの方角へ逃れた瞬間、莫大なエネルギーの奔流が空間を包み込む。

格上相手は苦し紛れでもこのザマだ、しかもベジータは既にこの爆炎の中にはいない、既に回り込み――

「後ろかツツ!!」

「もう遅いわっ!!!」

超高速移動で背後から突撃してくるベジータに、俺はとっさの舞空術で回転、足による防御を行う。

当然、ムリな防御で俺は死に体、プリカは一步遠い。

だが、そのプリカがひと味違うのだ。

「どどん!!!」

「む……………くそっ…」

出の早いどどん波がベジータの突撃を防ぐ。

鶴仙流・新鶴仙流の技はどこまでも実践向けだ。

(この歴史では見られなかった排球拳は別としておこう)

そして、その使い手達はと言うと、二人の師匠格の介抱を終え、戦場へと復帰していた。

「ど・どどん!!」

幾筋ものどどん波を矢継ぎ早に放ち、ナツパの急所(ここで言う急所は生殖器のことではなく人体の弱点全般を指す)を狙う天津飯。対するナツパはそれに反撃しようとするが、時々体の各所を抑えたり、目を拭ったりと様子がおかしい。

「ぐおっ……………ああっ……………!! ち、ちくしょう、なんだってんだ!!!」

原因は言うまでもなく、チャオズである。

チャオズの超能力はナツパの五感を攪乱し、更には念動力らしきものによって瓦礫や空気を弾丸として叩きつけ、動きを阻害していた。

武道会の見えない技の正体はあれか……………!!

……………そして、俺がそれとなくあちらの戦いに気を払っていると、どうやらベジータも同じように向こうが気になったようで、一瞬、こちら側の戦いが停止した。

「ナツパめ、手こずりやがって……………」

「……………ベジータ、このまま争い続けることに意味はない、戦いならば、後からでも試合として行える、むしろその方が互いにとって有意義だ」

「まだ言うか、戦いをやめたいというなら、ドラゴンボールとやらをよこせと言っているだろう」

「それはできない……いや、そもそもベジータ、お前はどこでドラゴンボールの話聞いた？」

戦いを行いながらも脳の片隅にあった疑問をぶつける。

ベジータにドラゴンボールの存在を教えられる人間がいるとすればそれはラディッツだが、ラディッツもまた、ドラゴンボールの事を知らないはずだ。

(プリカは間違いなく教えていないし、悟空が喋ったという情報もない)

「……きさま何を言っている、ラディッツに決まっているだろう、あいつはドラゴンボールを使うために、オレたちを呼びつけたが、……来てみればこれだ」

「なっ……!!!?」

「ツツツ!!!」

プリカと俺が同時に驚き、更には恐怖した。

俺はプリカと和解して、ベジータを呼び出したのがプリカではないと知ってからこれまで、ベジータを呼び出したのはラディッツによる何らかの、ドラゴンボールとは無関係の申し出であると考えていた。地球はいい星だとか、あるいは、プリカだけじゃなくその婚約者も仲間にするから向かえに来てくれ、とか……。

だが、違う。

ラディッツはドラゴンボールの存在を知り、ベジータに伝えた。

……どういうことだ、いや……そもそもおかしかったのだ、ラディッツはどう連絡する時間を捻出した？

俺は意識を失い、プリカはそれどころではない中、確認出来なかったのは事実だが――

「――ソシルミ、戻ってこい!!」

「はツツツ!!!?」

困惑と思考の海におぼれている間に、ベジータはエネルギーを高め、今まさにこちらに放とうとしていた。

「まずきさまを殺して、あっちのカスどもを締め上げてやるでしょう!!」

ベジータが放った無名の莫大なエネルギー塊は、まっすぐ俺に向かってくる。

先程の一撃に勝るとも劣らない威力、弾くには強く、消そうとすれば今度は余波が俺を襲うだろう。

……だが、俺は努めて静かに心身を整え、迫りくる技へと備えた。

「……………」

目すら閉じ、手足はぶら下げ……感覚だけでエネルギーを捉える。1秒にも満たない瞑想。

その効果とは!!!

「ヂエエツツツ!!!」

気合とともに、淡く、しかし広く輝いた両手をエネルギーに突き込む。

そして、その輝きをビームと同化させ……一気に捻じ曲げた!!

「ズオワツツツ!!!」

「何い!!!?」

捻じ曲げたエネルギーは、軌道をそのまま反対にしてベジータへと向かう。

これぞ、輝く手による気功波防御の最新バージョン。

技としての気功波を見抜き反転させる、天津飯やマジユニアの用いた技の、俺なりの形だ。

「く、くそつたれ……つおおお!!!」

自身のエネルギー波に襲われたベジータは回避を試みるかと思われたが、雄叫びを上げて逆にエネルギー波に突っ込んでくる!!

地球人に投げ返せたものを避けるようではサイヤ人の名がすたる、とても言いたげなその行為に俺とプリカは一瞬息を飲んだ。

「やっつけてくれやがったな……!!!」

「流石、サイヤ人の王子」

そして……エネルギー波を全て相殺して消し去ったベジータは、ところどころ焼け焦げた体と戦闘服で俺を睨んでいる。

……素晴らしい土俵際の粘りだ。

「すまないベジータ王子、貴方との戦いの中で別のことに気を取ら

れるなどとは」

「ふん、いきなりかしこまりやがって、不気味なやつめ」

苛立ちとともにそう吐き捨てるベジータだが、その顔には、例え弱小種族相手であっても、王子と呼ばれるのはやぶさかではない、そんな色がかすかに見えた。

夕暮れの空をビームが駆ける。

ゴーストタウンになりつつある中の都を戦士達の雄叫びが包む。

俺の目の前で、血みどろのベジータが吠えた。

「くそつたれええ!!」

同じく、遠くでナツパが吠える。

「ぢ、ちくしよ……お!!」

……否、その声は既に疲弊しきり、咆哮と呼ぶには余りにも悲壮なものであった。

だが、苦しいのは敵ばかりではない。

「ソシルミ」

「大丈夫だ」

プリカは、エネルギーが失せ、代わりにダメージを溜め込んだ俺の体を見てしきりに心配そうにしている。

事実、ヨガの呼吸と鍛え上げた精神力がなければすぐにでも苦痛に悶えてもおかしくはないダメージが、俺の体には蓄積していた。

ベジータはそれとなく回りを見渡しながら、俺に毒づく。

「ハア……ハア……きさまも随分苦しそうじゃないか、この分なら、余裕できさまにトドメをさせそうだけ……!!」

「俺がバテるのを期待してるならやめておけ、死ぬまで止まらんと……だが、いくらスタミナをヨガで補い、エネルギーを効率的に運用し、技術を使おうとも、サイヤ人と地球人の根本的な力の差はやはりいかにともし難いものがある

俺は一年の間全力で鍛えたが、それでも、パワーの伸び率そのものはプリカの方が高いのだ。

正直を言えば悔しいが、エネルギー以外の項目を合算しても、それは変わらないかもしれない。

恐るべき戦闘民族、……ベジータ、そしてナツパが周囲を見回しているのも、サイヤ人の優越性がゆえだ。

「お、おいベジータ、この星には確か……」

「バカやろう、言うんじゃない!!」

二人が探しているのは月、サイヤ人の真価の一つである変身能力のキーとなる満月を探しているのだ。

だが、見つかるわけではない。

神のかけた術によって、月は存在を嚴重に隠蔽されているのだ。

(俺が死ぬ直前に発売されたゲームにそんな話があったはずだとかたりをつけて頼んだらドンピシャだった、悪魔の脳みそは記憶力も凄まじいのだろう)

「……!! まさかオレたちを倒すためだけに月を消しやがったのか!!?」

ベジータはようやく月の不在に気が付いて叫ぶ。

考えもしなかった手段で打開策を奪われた二人は狼狽するが、ベジータの立ち直りは早かった。

月に見切りをつけるや否や、こちらを睨みつけたまま満身に力を込める!

「かあーっ!! うおおあああお——!!!」

放たれたのは、ベジータの代名詞の一つ、連続エネルギー弾!!

突っ張りのような動きと共に放たれる大量のエネルギー弾の嵐は、一つ一つが技と呼ぶに相応しいもの!

質と量を兼ね備えた連打は、同格以下を相手にするならばまさに必殺の攻撃、俺とプリカは対処に迫られ、一瞬動きが止まる。

「シイイイイツツ……ハッ!!」

「上か!!」

俺達がエネルギー弾の処理を終えた時、ベジータは上空にて、エネルギーの塊を持っていた。

見れば分かる、俺はあれを知っている!!

「どうせ知っているだろうが教えてやろう！ 限られたエリートサ
イヤ人は人工的な満月を作り出し、自ら変身することが出来るのだ
!!!!」

「悟空、プリカッツ!! あれを止めろ!!!」

俺の叫びに呼応した二人がベジータを止めにかかるが、その試みは
エネルギーを高めたナツパがビームを乱射し始めたことよって強
制的に中断された。

避けるのは簡単なことだが、流れ弾が出れば未だ外縁部に残る避難
民達が巻き添えを食ってしまう!

だが、ここで大猿化を許してしまえば、さらなる被害が、いや、地
球そのものが危うい!!

「ハア……ハア……ふんっ!!!」

俺達が必死でビームを防ぎきった頃には、ベジータは既に体力の多
くをつぎ込んだエネルギー塊……パワーボールを完成させ、空に向け
て投擲するところだった。

今から防ぐことが出来るか、いや、そもそも二人でもあのエネル
ギーを止めるだけのパワーを蓄えるのは間に合わないだろう。

「はじめて、まぎ——」

「魔貫光殺砲!!!」

掛け声と共に、一筋のビームがベジータに向け突入する。

間一髪でそれを避けたベジータ、しかし、奇妙に捻じくれたその
ビームはベジータが居た空間を越えて遥かに伸び……。

「……な、なんてこった、ベジータのパワーボールが……!!!」

魔貫光殺砲はパワーボールを貫き、完全に霧散させた!

俺は、今までずっとだんまりだった『仲間』を見上げ、声をかける。

「ピッコロ、助かった」

「ふん」

ピッコロはおそらく、俺達が和解を狙っているのを知り、あえて戦
闘に参加せず、互いの全力を出し合えるよう見守っていてくれたのだ
ろう。

だが今、看過し難い事態が起きたと察し、それを止めてくれた……。

「またピッコロにデレデレしやがって」
そんな言葉と裏腹に、プリカの気配は屈託なく俺の喜びに同調してくれている。

……一方、上空のベジータはわなわなと震え、歯を食いしばっていた。

「わざわざ無関心を装って伏兵に徹するとはな……く、くそ……してやられたぜ……!!!」

そのいらだちは自分への怒りだろうか。

サイヤ人の王子は残ったエネルギーを、それでも地球人達を震えがらせるほどに燃やし、ただ浮かんでいる。

だが、ナツパは違った。

「ふざけるなよ!! 地球人にナメック星人ごときが!!! もう許さねえつ!!!」

そう言いながら、ナツパは喉元にエネルギーをチャージする。

宇宙では一般的な、口腔を薬室・砲口としたビーム技、それをナツパは——戦士の居ない明後日の方向、避難中の市民たちのいる方角に向け放とうとしていた!!

「や、やめろーつ!!!」

地球戦士が叫ぶが、ナツパは止まらない、目的は八つ当たりか、かばって受けるダメージを狙っているのか。

どちらにしろ、防がなければ被害が出るだろう……俺は叫ぶ。

「プリカッツツ!!!」

「ぐ、が、ががあああ………」

プリカも叫ぶ。

今からナツパの技を止めるのは現実的ではない、ならば、放たれた後に処理するのみ。

俺は『射線』を見計らい、プリカの前に立つ。

「があ!!!」

「——ッツツツ!!!」

プリカのビームが俺を撃つのと同時に、ナツパの口からエネルギーの奔流が突き抜ける。

そして、次の瞬間には、俺は全身に纏った輝きをナツパのエネルギーに叩きつけ、ビームを上空へと捻じ曲げて地球の外に投げ捨てた。

「なっ……!!!?」

ナツパは驚き、仲間は『鶴仙人達を助けた技か』と口々に言う。

その通りだ、この技こそ、プリカのビームを俺のパワーとして流用することで放たれる合体技。

まさか防衛目的ばかりで二度も見せることになるとは思わなかったが……。

「小技は通じん、正面から——」

「——きさま!!! ナツパ!!!!!! 少し不利になったからって恥知ら

ずな真似をしやがって!!!」

ほとんどカラの体力に限界を越えた怒気をたたえ、ベジータが睨み、叫ぶ!!

ナツパばかりではなく、地球の戦士達までもが一瞬ビビるその迫力!

「今度あんなマネをしやがったら、まずはきさまから殺してやるぞ!!!」

「す、すまねえベジータ……、ど……どうかしてたぜ、こんなカスども相手によ……」

体をすくめたベジータは鼻を鳴らしてナツパを見下ろす。

「あいつ結構いいところあるじゃねえか、オラちよつと見直しちやつたぜ」

「ああ……、戦闘民族って言ってたし、戦いにはプライドがあるんだろうな……」

皆は、サイヤ人の王子が見せたその誇り高き態度に感心したらしく、静かに唸っている。

ベジータはそれを一瞥し、それからまた俺を見て吐き捨てるように言った。

「やけに嬉しそうじゃないか、ええ?」

「俺はそんなに嬉しそうかい?」

「ムカつく野郎だ、ニヤニヤしやがって」

「連れ合いの出身部族の王子が高潔な人物だと分かったからな、それを喜ばないわけにはいかないさ」

俺の答えを前に、ベジータは小さく眉をひそめる。

「バカにしやがって、サイヤ人を舐めるなよ」

「もう散々味わわせて貰った、貴様も、ナツパも、ここに居る二人もな」

ベジータは小さく顔をそむけ……その気配に、怒りの色はなかった。

……闘争によるコミュニケーションを期したこの戦いは、成功しつつあるのかもしれない。

リスクのある挑戦だが、このままやり遂げれば、あるいは。

「ベジータ、俺達で切磋琢磨すれば、いずれ——」

「はっはっはっはっ!!! きさまの甘ったるいセリフも聞き飽きた、そろそろ終わりにさせてもらおう!!」

「なにッ!?!」

「どういうわけかは分からんが、運はオレたちに味方したようだな!!!」

突如不可解な言葉を吐き、ベジータは天高く上がってゆく!!

嫌な予感を感じながらナツパの気配も探ると、奴も上空に上がりつつあった。

見上げると、そこには——

「——夕月ツツツ!!!?」

まずい。

一体何故。

考えている場合ではない、止めなければ、月の破壊も視野に入れ………!!

事態に気付いた俺とクリリン、ヤムチャが対処に当たろうとするが、ベジータ達が動き出す方が一瞬早かった。

「ナツパ、オレに合わせろ」

「お、おう!!!」

二人はパワーを高め、それをそのまま真下……つまり、今までの戦場に叩きつける！

「グツツツ……ヌウ……!!!」

「くっ……あ、あいつら一体何を……」

何も知らない悟空が爆煙に煽られながら眩く。

「あ、ああ……!!」

「あいつらもなれるのかよ?!」

クリリンとヤムチャは何が起きたのかを完全に察し、驚愕の呻きと叫びを上げた。

天津飯やチャオズは理解出来ていないが、それでも膨れ上がりつつあるエネルギーに事態をおぼろげながら理解し、わなないている。

俺は……俺の喪失感と困惑は、この場の誰よりも強い。

何故、この、やつと会話が成立しそうだった、このタイミングで。

何故、月が現れた？

流れ弾か？

そんなはずはない、術を破壊しかねないレベルの流れ弾は常に警戒していたはずだ。

ならば、まさか。

……不可解な通信、不可解な解除。

同一の原因が、あるとするなら。

「ソシルミっ!!!」

プリカの叫びが俺を再び呼び戻した時には、上空での変化は終わり、爆炎もまた、晴れていた。

!!
二つの大猿——戦闘力は生身の10倍——が、降ってくる

一つは広場に、一つはキングキャッスルを薙ぎ壊しながら!!

「はーっはっはっはっはっは!!!」

「ぐはははははは!!!」

間一髪キングキャッスルから逃げ出した一機のヘリ——国王専用機だ、まさかまだ都に残っていたのか!!?——に目もくれず、大猿二体は高笑いを上げる。

……先程まで優勢だった戦力比が、完全に向こうに傾いた。

だがそれと同時に、いや、それ以上に……彼等にとつて対等以上の脅威、目の前に立ちふさがる敵対者としてみなされつつあった俺達
が、再び、弱小な原住民に成り下がったことを意味しているのだ！

黒い戦闘服を着た大猿……ナツパの大猿が、高笑いの勢いをそのままに叫ぶ！

「どうだカカロット!! これが大猿だ!! きさまの捨てたサイヤ人の本当の力だ!! プリカ、てめえはしっぽがまだあるんだろう? 変身してかかってこい!!」

「くっくっく、調子のいいやつめ……」

呆れるような、同意したような様子でベジータがほくそ笑み、プリカは息をのむ。

10年以上の時を経て再び目撃する、自分達の……『本性』の姿の前に、心を揺さぶられているのだ。

……そして俺の隣には今、同じく心を揺さぶられたサイヤ人がいた。

「……満月の日には大猿の化け物が出るって、じいちゃんが言っていた、そのじいちゃんは、そいつに踏み潰されて死んじゃった」

「悟空」

「ミッシル、おめえは最初っから全部知ってたんだよな」

悟空の問いかけに責めるニュアンスは一切なく、ただただ、俺を知恵者と見て頼っているのだと分かる。

それでも俺は、答えに窮した。

「お前は……、お前は、お前ほどの武道家は他に居ないよ」

いずれ悟空にもサイヤ人としての誇り、自らのルーツを愛する心が芽生えるだろう。

だが、それは今でなくてもいい、今はただ、サイヤ人としてではなく、武道家としての悟空を褒め称えたい。

そんな意思を込めた俺の答えに悟空は満足してくれたらしく、小さくうなずいた。

「……ありがとな! で、でも、プリカは大丈夫なんか?」

「オレは大丈夫だよ、オレも……全部知ってたからな、おまえが兄さんか弟つてこと以外、全部な」

「な……なーんか恥ずかしいよなあそれ、今更わかってても、どつちにしろ一緒に戦えて嬉しいってのは、変わんねえし……」

「そ、そうか」

プリカはまたとても嬉しそうな気配を醸し出す。

……ここからが本当の正念場だと、皆は恐怖し、いきり立っている。だが、俺達二人だけは、ほんの少しだけニュアンスが違った。

「プリカ、最後までやるぞ」

「ああ、ソシルミ」

巨大になった困難の前に、それでも俺達は、サイヤ人をただ穏便に追い払ってやるのだという希望を、野望を捨てる気はない。

それどころか、その挑戦心は更に膨れ上がっている。

プリカはかつての自分の似姿……戦闘服を着た大猿の前に、失われた故郷を意識しているのだろう。

俺もまた、目の前の敵が、愛する人と故郷を同じくする同種であると、強く確信していた。

↓つづく

第四十一話：転生地球人が愛を語るまで

「さっさと小細工はやめて、きさまも大猿になれ!!」

四回目になる月への攻撃を防ぎ、大猿と化したベジータが叫ぶ、その相手は当然……プリカだ。

悟空はかめはめ波の姿勢のまま怒号に耐え、界王拳により滾った気を投げ捨て、仕切り直しに備える。

「プ、プリカっ!! 昔のオラは駄目だったみたいだけど、おめえなら何とか、あいつらみたいにしつかりしたまま大猿になったり出来ねえのか!!」

「う……悟空……」

プリカは、そんな希望を込めた悟空の声を、その『希望』が実のところ完全に正しいことすら明かさずに、うめき声とともに拒む。

「はーっはっはっは!! カカロット!! きさまは妙な技を覚えたようだが、そんなものより、オレたちサイヤ人が生まれ持った大猿の方がずっと強いぜ!!」

ナツパの嘲りは、現時点では紛れもない真実だった。

元の歴史より数段上昇した悟空のパワーと、界王拳の倍率——
今まで見たのは五倍まで——では、ナツパのパワーすら正面からでは上回れない。

「あ……あれが孫の種族の本領というやつなのか!? 確かに、あんな化け物になれるなら、人間のままで強いわけだ……!!」

「目玉が多いくせに言うぜまったく……、クソ、オレもふるえが来やがる……!! これまであいつらや悟空たちと戦えてた自分を褒めてやりたいくらいだ」

……莫大な気の応酬の中、サイヤ人以外は戦場の片隅へと追いやられていく、『Z』の世界が始まろうとしている。

一方、そのサイヤ人の一人である我が相棒……プリカは、ただエネルギーをたぎらせ、サイヤ人に向けて断続的なビーム攻撃を実行していた!!

「う、うああ……ぐああああ!!!」

戦闘力差十倍以上、効果の見込めぬ攻撃を繰り返す理由は、おそらく、一つ。

「プリカ、あれを見て思う所があるのは分かる、だが、今はお前の戦力が必要だ、それに……お前はあの大猿、お前の産まれと向かい合わなくては——」

「……ソシルミ」

プリカの目が俺を見る、プリカの声が俺を呼ぶ。

しばらくその心を隠していたプリカだが、その一瞬だけ、感情をこぼした。

これまで数度しか見たことがない程追い詰められたプリカ、今にも泣き出しそうなほどの激情。

それでもここは戦場だ、皆で戦っているのだ、俺が勝手に許すわけにはいかない、いかないのだが……。

「——分かった、でも覚悟してくれ……長くは持たない」

「ごめん」

俺にか、誰にか、プリカは謝ってから戦いへと戻った。

この戦場はシンプルだ、大猿が暴れ、戦士が撃ち、時折、大技のチャージや月狙いの攻撃をしては、妨害されて叩き落される。

プリカの大猿が欲しい、二つの大猿を止める戦力がなければ、勝ち目はない。

そう思った時、戦場一杯に広げた探知領域の片隅で、一つのエネルギーが膨れ上がっていくのを感じた。

気が高まっているのではない、体が巨大に——

「な、なんだ!!? おいベジータ! プリカのやつじゃない誰かが大猿になってるんじゃない……」

「騒ぐなナツパ!! 純血はたった二人だが、もう奴らも年頃だ、これはひよつとしたら、ひよつとするかもな」

大猿、純血、その言葉を聞いて俺の心臓が跳ね上がる、この地上で大猿になれるのは、プリカを除けばただ一人。

だが、違う。

エネルギー量そのものは膨れ上がってはいない。

では誰か、何か……その答えは、瓦礫を持ち上げ、土煙の向こうから現れた姿によってようやく判明することになる。

一番最初に気付いたのは、その姿を間近で見たことのある男、悟空だった。

「ピッコロ!!!」

「そうか、巨大化かツツツ!!!」

現れたのは、大猿と並ぶ背丈にまで巨大化したピッコロ。

エネルギーの総量は変わらないが、その全身に溢れるパワーは元とは段違いに膨れ上がっている。

……元の歴史では見られなかった、まさかの異星人対決というわけだ。

「ほーう、ナメック星人は不思議な技を使うと聞いていたが、まさか大猿並の巨大化をやつてのけるとはな」

「……きさままら、さつきも何やら言っていたが、まさかそれはオレのことか!？」

「テメー以外に誰が居るつてんだ、回りを見てみりや分かるだろう、緑で触觉の生えた地球人がどこにいるんだよ」

ピッコロは思わずといったふうに、巨大になった顔をキョロキョロと見回す。

その瞳に映るのは、地球人の戦士たち、遠くになりつつある群衆、そして、破壊された祭典の残骸……。

「まさか……!… 父^{オレ}を産み出した神の野郎の憎しみが、まさかこんな……」

「悪いが時間切れだ!! ふるさとを想うならあの世でするんだな!!!」

焦れたベジータが、ピッコロへと迫る!

一挙一投足が既に崩壊しつつあるアスファルトを砕き、コンクリートを煙へと変える大突進!!

動揺の中でも戦意を失わなかったピッコロの振り下ろす攻撃的なガードが大猿と激突し、莫大な衝撃波を発生させる!!!

「ぐうっ!!」

「はっはっは!! ただフーセンみたいに膨らんだわけじゃないようだな!!」

両者弾き飛ばされ、ごく小さく呻くピッコロ、ベジータは笑う。

予想外の食いでのある獲物に、再度突撃を食らわせてやろうとベジータはいきり立つが、次の瞬間に驚いたのはベジータだった!

「波あーっ!!!」

「むっ!!?」

悟空、クリリン、ヤムチャのかめはめ波!!

莫大なエネルギーを秘める大猿も、ピッコロの影に隠れて長くチャージされたかめはめ波を前にしては、防御姿勢を取らざるを得ない……が、それが悟空達の狙いだった!

「曲がれっ!!」

「なにーっ!!!?」

悟空のかめはめ波がベジータへと直撃、そして、残る二筋は大きく曲がり、明後日の方角……否、かめはめ波は夜空を突き刺し天高く、月へと向かってゆく!!

だが、ここに来て、ぶつかり合いを眺めていただけのナツパが動き出した!

鶴仙流の二人、そして俺達も参戦し、それを止めにかかる!

「させるかツツツ!!!」

「そりゃあこっちのセリフだぜっ!!!」

口を空に向けたナツパに向け、二筋のどどん波、プリカの大玉エネルギー弾、続いて俺の突撃が向かう……が、ナツパは僅かに血すら流しながらも、こゆるぎもしない!!

俺達は全力でナツパへの攻撃を繰り返すが、大猿化で動きが鈍くなったといはいえ、出の早いナツパの『ゲロビ』を止めるには、全く時間が足りなかった。

「があっ!! ぐあ!! ぐ!!」

「ツアアアツツ!!! ……駄目か、なんという耐久力……ツツツ!!!」

天高く、月を僅かに逸れる軌道で放たれたゲロビはクリリン・ヤムチャのかめはめ波を飲み込み、そのまま宇宙の彼方へと消えてゆく。

「ま、こんなもんよ……おいプリカ、そろそろ変身したらどうなんだ？ オレたちもちよつぱり……イライラしてきちゃうぜ!!」

威圧的に語るナツパの言葉は真に迫るものがある、それは……サイヤ人の攻撃性、とても呼ぶべきもの。

悟空と違って頭を打ったことのないサイヤ人と長く戦いを共にした俺には感じ慣れた感触だ。

サイヤ人は攻撃性を発揮すること、いや、苛立ちすらも楽しんでいような雰囲気がある。

真の姿と言うからには、それを振るうのが楽しいのか、サイヤ人にとって大猿になるということは、サイヤ人であるということ一体どういうことなのか。

俺はそれを知りたい、愛する人のために、かつてこの世界に抱いた愛のために。

だが、奴等が楽しめば楽しむ程、攻撃性が高まれば高まる程……。

「……………」

隣で沈黙を貫くプリカの『それ』は鳴りを潜め、次第に技のキレまでもが下がってゆく。

今のもそうだ、本調子であれば『ウエスト・モーニング・サンシャイン』なり、それこそ奴と同じくゲロビなりを叩き込んで、より有効な攻撃が出来たはずだ。

それが今は、消極的にビームやエネルギー弾を打ち込むばかり。

「プリカっ！ どうして変身してくれないんだよ!!」

「う、ああ……」

誰からともなく、次々と声が上がってゆく、変身してくれ、と。

だがプリカは答えない、沈黙と、喉から漏れ出るような声を否定の代わりとして、ただ戦い続ける。

人間として戦いたいだとか、そんなポジティブな意思から来たものじゃない。

これは、これまでも何度も見せつけられてきた……そして、俺自身が味わった、プリカの逃避だ。

かつて犯した罪、そして自らの本性、産まれ不幸。

それらの象徴としての大猿を前に、プリカの心は萎縮しきつてい
る。

「プリカッツツ!!!」

どうしようもなくなつて俺は叫ぶ、変身してくれと言いたいが、そ
れは言えない。

しかし、せめて、今ここで戦うだけの意思は取り戻してもらわなく
ては。

だが、プリカは強く肩をびくつかせ、強い罪悪感の籠もった目で俺
を見る。

それから敵を見て、なけなしの気力を振り絞つて叫びだした!

「うぐ……ぎいいいっ!!!」

いつもの濁つた叫びは、こんな時でも変わらない。

あれはあいつに残された吐き出す戦いへの意思なのか、それとも、
あいつは戦いに染まることを拒むがゆえ、あえて声を出すのか。

どちらにしろこれはまずい、プリカは……仕掛ける気だ!

「お? またやる気になつたのか、大猿にならねえなら、このまま捻
り潰してやるだけだよ!!」

「バイナリ・スター・モーニング!!! うあああああ!!!」

「よせプリカッツツ!!!」

プリカはエネルギー弾を手に纏わせ、そのまま猛烈に突進してゆく

! あいつは俺の言葉を自分への責めだと思つたのか!?

それとも、俺が言葉をかけるだけでも辛いのか?

だとしたら俺は――

「おおっと!! オレを忘れてもらつては困るな!!!」

「ぐぼっ………!!!」

横合いから飛び出したベジータがプリカを思い切りはたき飛ばす。
大猿のパワーで成されたそれは、金属音にも似た音と共にプリカを
弾き飛ばし、そのまま崩れ去つたビルの瓦礫の一つに沈めた。

「プリカッツツ!!!」

「はっはっは!! 他人を気遣つてるヒマはないぞ?」

ベジータが俺を笑い、そしてねめつける。

プリカは、瓦礫の下で動かない。

「ミソシル、プリカが……!!」

「死んじやいない」

「す、するってえと……」

「そういうことだ」

悟空は息をのむ、自分と同じ苦悩を共有している相手なのだ、何が起こっているのかは、よく分かるに違いない。

完全に気力を失ったプリカは、ダメージから立ち直ることも出来ずにいる。

「これで大分捻り潰しやすくなったぜ!!」

「油断するなよ、ソシルミとカカロットを見ろ、まだまだ余裕だ……プリカはオレたちが思う以上にタフということだろう」

プリカの援護が望めない今、戦況は最悪と言っている。

更には、……悲しみ、罪悪感、忌避感、俺の胸は、勝手にあいつが感じているであろう苦痛を拾い上げて痛む。

苦痛は俺の魂を蝕み、消沈させる、何故もつと寄り添えなかったのだ、という後悔と共に。

俺はベジータの視線に抗うように睨み返し、叫んだ。

「ベジータ、ナツパッツ!!」

消沈する魂、だが一方、俺の中には煮えたぎる闘志が存在していた。忌み嫌う自分の本性を突きつけられ、それになれたなんて言われて、冷静で居られないのは当然だ。

瓦礫の中に埋もれたプリカが起き上がれるまで待つ、それまで戦う。

なんだ、人が反対なだけで、あの時と同じじゃないか。

なら、やることも同じ——

「——俺が相手だツツツ!!!」

「虫けらが言いやがる!!!」

ナツパの言葉をゴング代わりに、俺は二体の大猿に向け、一直線に舞空術で突撃する。

望むところだ、飛んで火に入る夏の虫、とばかりに伸ばされた大猿の手は、しかし、俺を捉えられずに空を切った。

「なにいつ!!?」

俺の舞空術は、本来神様が俺に学ばせたかった本式のものとは異なり、実際の物理法則にかなり依存する我流のものとなっている。

大猿は通常の数倍の助走距離を取れる格好の相手、その懐に入つて飛び回る俺の動きは、上品に言えば蝶のような舞い、下品に言えば……。

「ちくしょう、うつとおしい小バエだぜ!!」

「小バエ、大いに結構ツツ!! 凶体がでかい苦勞を存分に味わえ!!」突撃を始めると、仲間達もそれに合わせて援護、本命の攻撃を次々と繰り出してゆく。

「超能力をくらえ!! ガレキがうぎいのに強さは関係ないぞつ!!」

「プリカは地球を守るために、辛えのを我慢して頑張ったんだ!!」

姉ちゃんなのか妹なのかはわかんねえけど、今度はオラが守る!!」

「フン、きさままらとの貸し借りはチャラのはずだったが、鶴仙人様と桃白白さんを救われてしまったからな……オレたちも、筋は通させてもらうぞ!!」

……ああ。

「グブツツ……!! お、俺達は果報ものだなあ、プリカ!!」

(お、おいソシルミ!! きさま、吐血しているのか!!?)

俺の口端からは血が溢れつつあるのを見て、ピッコロがテレパシーで問いかける。

敵にバレないようにする細やかな気遣いは、流石ナメック星人、流石神の片割れか。

物理法則に依存した俺の舞空術は、必然的に肉体にかかる負荷も大きい、本来であれば、むしろ風を感じられて心地良いくらいのものが……。

「妙な技と無理な加減速で体を痛めたか、まるで戦闘機パイロットだな、なあソシルミ?」

「さっすがベジータ、いいこと聞いたぜつ!!」

せつかくの気遣いも、戦闘民族の目ざとさを前には儆く終わり、二体の大猿はいかにも猿といった感じのいやらしい笑みを浮かべ、俺にわざと大ぶりの回避を迫るような激しい動きを繰り返し始めた。

体内にダメージが蓄積するだけではない、全身の血液までもが……揺さぶられて……!!

視界の色が黒と赤をゆらゆら往復する、

「きさまっ!!! プリカ!!! いつまでも甘ったれてるんじゃない!!!」

「ピッコロ!!!? おめえ……!!!」

「孫、きさまは黙っている! プリカ!! 大猿に化けるだとか、連中が罪深いだとか、きさまはそんなことを気にしているのかもしれない……: 奴を見ろ!!! 大猿に化けるだの、人間を殺すだの、そんな連中と向き合い続けてきた男が、今、自分の技で口から血を流しているんだぞ!!!?」

大猿のエネルギーと、仲間のエネルギー、そして風の動きだけを捉える。

耳も目もうまく働かない、思考も次第に鈍り始めた。

だが、止まるわけには——

「よせミソシ——のまま飛んで——おっ死ん——」

「——っはっは——」

気を捉えた動きは目や耳を使うよりも遥かに的確だ。

だが、環境の要素も忘れてはならない、風に乗る、大気を切り裂いて飛べば、舞空術も——

「こいつ——まだ——むしろ——」

「もう——やってやる——」

強いエネルギーの滾り、回避を——違う、これは!!!

避けた先には巨大な手が……。

「……グブツツ!!!」

「ようやく捕まえたぜえ……!!!」

俺を掴んだナツパが愉快そうに笑う、無理をすれば思考が鈍り、次第に技も鈍る。

その隙を突かれたということは、俺の自業自得か……! !

僅かな動きすら許さない凄まじい力で圧迫され、俺の口からは、更に血が吐き出されてゆく。

「ガ、ガフツツ……又……ウウ……ツツ!!」

控えめに見て10倍のパワー差は足搔いてもどうしようもない、だが、それでも俺は全力でナツパの指を開こうと力を尽くす。

仲間達も必死で俺を解放しようとしているが、ベジータが、遊びを捨てた動きで皆の動きを潰している……。

そうこうしている間にナツパは俺を握る手にもう片方の手を添え、俺の頭に向け親指を突き立てた。

「へっへっへ、楽しかったぜ、ソシルミちゃんよ!!!」

「ゲ………!!!」

俺は、力を込めだしたナツパを憎むでも威圧するでもなくただ睨む……が、その瞬間。

迫る親指の向こうで膨れ上がる、エネルギーの塊!!!

はつきりと分かる、何よりも愛おしいその気配は、いかに姿を変えようとも!!!

「ぐっがあああああ!!!」

「な、な——ぐべっ!!!」

雄叫びと共にいきり立ち、頭部へのパンチでナツパを地面に叩きつけたのは、間違いない、大猿の拳。

いや、臙脂色の布を身に纏ったその大猿は……。

「プリカツツツ!!!」

「ソシルミ、待たせた、……ピツコロ、ありがとな」

「な、なんだと!!!? か、下級戦士が……!!!」

俺に笑いかけるプリカ、ベジータは驚愕にわななく。

「下級戦士ごときが、どうして正気を保っていられる!!!?」

「見れば、分かるだろう?」

土煙の中、俺は意識を失ったナツパの指から這い出し、プリカと、ピツコロを見た。

そして、高らかに、しかし静かに語る。

「これが、地球で築いてきた絆の力だ」

「はっはっ……バカめ、絆だど!? 何の術を隠していやがる!!!」
あくまで強がり、一笑に付そうとするベジータの顔に浮かぶ強い動
揺の色……。

それを見抜けるのは、多分、今はこの世界で俺だけなんだろうな。

月は中天に登り、自らが生み出した二体の大猿を見守る。

「つおおおおおつ!!!」

「があああああ!!!」

大猿はその野蛮なる姿とは裏腹に技巧を尽くし、その野蛮なる雄叫
びに違わぬ暴れっぷりで、完全に無人と化した中の都を蹂躪してい
た。

「これでは割って入れん……なんという……!!」

「練気弾で狙うのもムリか……クリリン、なんか手はあるか?」

「手は……ないです、ヤムチャさん」

果てしなく続く殴り合いに介入出来るのは、大猿と同じ宇宙人、巨
大化したピッコロと、神をも越える実力者によつて教えを受けた悟
空、そして……辛うじて、という条件付きだが、この俺。

俺達三人がいることによつて、大猿同士の果てしない戦いの趨勢
は、臙脂色の大猿、プリカに傾いている。

だがその優位もまた、覆りつつあった。

「うおおおつ!!! やりやがったな、このクソアマア!!!」

「ナツパツツ!!!」

気絶から立ち直ったナツパ!

その気力は強く立ち上がり、顔に浮かぶのは怒りと、戦士の誇り。
プリカの大猿は俺達に力を与えたが、それと同時に宇宙から来たサ
イヤ人にも、種族の誇りを思い起こさせたのか!!

「下級戦士のくせに、あっぱれだぜ……プリカちゃんよ、だが、この
エリートをちよつと出し抜いたくらいで調子に乗ってもらっちゃ困
るなっ!!!」

「またしくじったら、おまえもろともこのオレが殺してやる、……行
くぞ、ナツパ!!!」

「おう、まずは……」

こちらを睨む四つの目、大猿の巨体が残像を生み出す程に動く!!
一歩遅れて二人を追うプリカ!!

「ぐっがああああ!!!」

「うすのろめ、追いつけるか!!」

それを振り切って迫る大猿!!

その腕、足、しっぽ、10本が束となり、竜巻となって俺に襲いかかる!!!

「又ウウウツツツ!!!」

避け、弾かれ、合わせ、風に揉まれ——これは。

「——捉えたぞ!!!」

「グ——」

衝撃。

一瞬の無音の中、景色が流れ、回転し……アスファルトが。

俺の体はめり込み、擦れ、抉りながら10メートルほど転がり、跳ね跳んでからやつと着弾した。

「ガ、フ………ゲフツツ……ゴフツツ……グプ………」

縮みきった肺を広げようとすると、その隙に血が溢れ出し、必死に行ったはずの呼吸は吐血に化ける。

骨も破損し、筋肉や筋にも、いくつか機能しない部位が出始めている。

受け身すらまともに取れずに受けたダメージ、呼吸すらままならぬそれを、残された部位で取れるヨガをもって全力で抑え込む。

大猿の全力、サイヤ人という種族の全力を満身で味わった。

戦力が足りない……いや、敵が戦いの最中に進歩しているのか。

「……このままで……は」

このままでは、悟飯を戦わせなくてはならなくなる。

悟飯を大猿にして、ひと悶着しながらなんとかサイヤ人にけしかけて……。

「嫌だ、俺が、戦わなければ……!!!」

だが、体は動かない。

「ハア……ハア……ツツツ!!」

なんとか息を整えようとする俺のいる通りへと飛来する、巨大な物体!!

そのエネルギーは、紛れもなく……。

「プリカツツツ!!」

「……ごああああああ!!」

自ら飛んだ……のではない、激しいダメージを感じさせる受け身すらまともを取れぬ飛行と、落下!!

俺の隣に残っていたビルに着弾したプリカは、ゆっくりと滑り降りてくる。

それを見て笑うのは、ナツパだった。

「はっはっはっはっは!!! 思い知ったか、これが名門のエリートサイヤ人の力だぜ!!! さっさと立ち上がってこい、またぶっ飛ばしてやる!!!」

……実に楽しげだ。

こちらを見て大喜びで笑うその姿はまさしく猿、だが、これこそ戦闘を生業とする種族のエリートといえるのかもしれない。

一方のプリカは、ビルを押し潰しながらずり落ち、ちょうど、頭が俺の隣に来る形で地面へと衝突した。

「う、ぐぐぐ……」

「プリカ」

「……なんだ、ソシルミ」

「悟飯を呼びたくない」

プリカは一瞬だけキョトンとして、それから、同意の色とともに顔をしかめる。

「悟飯は、戦わなくていいはずの人間だ、5歳の子供だ、俺達がしっかりしてれば……」

俺達二人がちゃんと戦っていればあいつを戦わせなくてもいい、それは俺達が手に入れた、この世界に与えることが出来る大事なことなんだ。

身勝手に世界を変えておいて悟空まで殺した俺達に出来る罪滅ぼ

しなんだ。

言葉にして伝えてはならないその叫びを込めた俺の言葉に、プリカは、俺に望まれた立場から忠告する。

「……でも、このままだと、絶対に勝てないぞ」

「最後のアイデアがある、大猿がお前一人のままで、奴等に勝てる技が」

プリカは目を見開き、俺の提唱する作戦ならばとばかりに、じつと耳を傾け始めた。

「俺は今からお前にしがみついて、そのエネルギーに同調する」

「ぼっ……ばか!! オレの気がおまえの何十倍だと思ってるんだ!!? いくらおまえの方が気の扱いがうまいからって、そんなことしたら……」

「俺がお前のエネルギーを取り込めばひとたまりもないだろうな、だが、逆ならどうだ?」

「逆……!?!」

驚くプリカに、俺は説明を続ける。

「ああ、お前のエネルギーを俺に入れるのではなく、その逆、俺がお前のエネルギーに干渉し、その運用を助ける」

「確かに大猿だと気はうまく使えない、それを助けてもらえば、でも……」

「このやり方なら、俺の負担は最小限に抑えられる」

「おまえのそれ、信用できると思うか」

プリカは大猿のまま器用にジト目を作り……それを、ジト目では済まない非難の目に変えて、更に、逡巡するようにまばたきをした。

「なあ、ソシルミ」

「なんだ」

「オレの毛並みはどうだ」

「悪くないと思い始めていた所だ、ジャージの大猿も、たまにはいいかもな」

プリカが、のそりと起き上がる。

巨大なはずの大猿が、いつも家で見るそのままのプリカに見えてき

た。

というか、そうにしか見えない。

そして、プリカはぶつきらぼうに、手を差し伸べた。

「さっさと乗れ」

「ああ」

俺は導かれるままにプリカの肩に登り、それからしつかりと柔らかくな、それでいて頑丈極まりない毛に体をうずめ、固定する。

それから、プリカのエネルギーと、俺のエネルギーを繋げ始めた。

……技の練習のときや体を重ねるときに、気を同調させることはあつたが、今度は更に深く、やらなくてはならない。

俺は更に深く合一するため、テレパシーを用いて心身の接触を図る

……!!?

これは、接続が深すぎる、意識同士が飲み込めあつて――

……

……

……。

『まず、自己紹介と行こうか、俺はソシルミ、一応『アエ』という名字があるが……、5歳で親に捨てられてからは、この名字が嫌いだ、名字では呼ばないでくれ』

大柄な少年が、だらだらと冷や汗を垂らしながら自己紹介をしている。

その顔に浮かぶ笑みは、恐怖に引きつっているが、確かに強い友好と、そして隠しきれぬ好奇心を表現していた。

『プリカ……プリカだ、としては……わかあ、わからない、たぶん……じゆうにさい』

それに答える少女は年若く小汚いが、環境によって一切傷付けられることのない美しい髪と肌が、泥や血糊の向こうから滲む。

少女は、この星において既に圧倒的とすら言える戦闘力を持つているはずなのに、どこか怯えたような顔で、おずおずとこちらを見上げている。

俺達は互いの存在に強い警戒心を抱いていた。

互いに正体不明、それどころか、この地上で唯一のはずだった『プレイヤー』……指し手の立ち位置を同じくする存在。

だが、俺達は、互いという未知に身を委ね、戦いを共にすることになつたのだつた。

『騒ぐなよ、緊急避難じゃないか、それより続きを教えてください、なんで俺に付いてきたんだ?』

『そ、それは……おおぎるが、めいわくだったから、おまえにきいたまぞくを、たおして……』

『……罪滅ぼしをしたかった、つてわけか』

思えば、そう、オレたちの共闘の始まりは、プリカが抱いた罪悪感だった。

生まれ変わって得た肉体、そしてそれを扱いきれず他者を傷付けた自分への深い失望。

それを償うチャンスをくれたのは、ソシルミだ。

『なんとなく分かっちゃいたが、そんなもんか、まあ、村人たちにも結構楽しんでたヤツは居たみたいだし、あまり気に病まない方がいいぞ?』

『そんなこといっても……やっぱり、だめだ』

『今更何を言うんだ、村を攻撃する魔族をぶつ潰して、地球まで救つたんだ、罪滅ぼしは完璧以上に終わってるはずだろう?』

気持ちの悪い、今となつては慣れ親しんだその笑いが、償いは果たされたと語る。

何もかもを割り切って、今から楽しく生きよう、そんな想いを伝え
たかった。

想いは伝わって、プリカは一つの救いを得たのだ。

「い、いきなり心の中に入ってくるなよ!!」

そんな景色を眺めていた俺の隣で、プリカがわめく。

奇妙な……暗い場所で、プリカと俺の姿だけがはつきりしている、
前もこんな所に来たような……。

俺は素直に詫びようかと思ったが、俺をはねのけることもなく、た
だ顔を赤くして怒るプリカを見ると、それも面白くないな、と思
い直した。

「ここまですんなり入れるとは思ってなかった」

「……もう入れないぞ、くそ」

「さあ、ここから出ようか、あいつらが待ってる」

俺はプリカの手をとって、共に戦いへと意識を戻していく。

あいつらとはもちろん、サイヤ人二人のことだ。

存分に、見せつけてやろう。

……。

……。

……。

足元には瓦礫の街が広がり、遠くには街から離れゆく車列のテール
ランプが見える。

空には満月。

ここは、現実の戦場……中の都だ。

どうやら、あの意識空間での出来事は、現実ではほんの一瞬のこと
だったらしい。

「ソシルミめ、きさま、ついに自分で飛ぶ気力もなくなったと見える
な」

ベジータが嘲るが、くだらない挑発に乗る気はない。

肉体から伝わる温もりと、エネルギーの繋がりがもたらす温もり。

その暖かさに溺れぬようにするだけで、俺は背いっぱいなのだ。

「行くぞツツツ!!!」

満身の力を込め、俺は……違う、プリカは拳を固め、一気に飛び出した。

その力はまず足、脚、そして背骨へと移り、腕を登り、拳へと至る!!

「つがアアあああああツツツ!!!」

「な、速——がっ!!!」

気力大移動、大猿バージョン。

今の俺は、ベジータより疾いツツツ!!!

「なんだこいつ、急に……まさか、ソシルミが何かの術で技を教えているのか!!!」

ベジータの言葉に答えようとするより早く、プリカの体は攻撃へと移る。

次なる技は、爆発する拳!!!

俺の意思ではない、上がりきったプリカの戦意、大猿の戦闘本能が俺から技を引き出しているのだ!!

「おがあああツツ!!!」

「妙な技を次々と!!!」

莫大な戦闘本能が持つ甘美な狂気がプリカから伝わり、俺を包む。

抗わねばならぬと直感させられるその力が、プリカを幾度も狂わせてきた原因であり、そして、狂うまいとするプリカが自らを苦しめ続けた原因。

……そして、俺と楽しんだ戦いの喜びの、根源なのだ。

手を振るい、足を回し、息を吸って、吐く。

全動作が心地いい、これが本来の姿なのだと、プリカの意識と無意識は語る。

かつて森に籠もっておいて、この姿という欲望を抑えきれなかった自分。

サイヤ人として伴侶を裏切り、兄弟を殺した自分。

凶悪な意思を持って産まれた、邪悪な種族の末裔である自分。

悍ましいその本性への嫌悪。

それを乗り越えられたのは

(お前が俺と共に戦うと決めたからか、プリカ)

(おまえがオレのことを好きでいてくれるからだ、ソシルミ)

……プリカはこの力を嫌い、森へと籠もり、俺に連れ出された。

心でそう伝えられたが、違う、なにか違和感がある。

俺への想いではない、なぜプリカは、自分の本能と歴史の改変とい

う小さな課題を前に、そんな極端な選択を——

『おかあさん、あした病院がおわったら、——につれてって、

ヒーローショーがあるんだ』

—— 幼子の姿が見えた。

その景色はこの地球ではなく、かつて生きた地球のもの。

この記憶は……………。

「ハツツツ!!」

「何をぼやっとしてやがる!!」

ピッコロと組み合っていたナツパが俺の見せた隙を狙って襲いかかる。

だが、夢と現をさまよう表層意識とは裏腹に体は動き——

「ツアツツツツ!!」

「はあっ!!!」

俺はとっさに、ナツパを合気で投げ飛ばした。

「見たか悟空、技だけじゃない! あれはソシルミの動きだぞ!!」

「ああ……それに、なんだか一瞬、プリカがソシルミに見えたような

……」

同調が深まっている、技だけではなく意識が無作為に混在し、肉体の操作権までもが混在しているのだ。

俺……違う、今度はプリカが、倒れたナツパにゲロビを叩き込む!

……が、ベジータが割って入り、防がれた。

「きさまにしては随分と甘いツツツ!!!」

「黙りやがれっ!!!」

「ぐツツがあああああ!!!」

プリカが俺の愚弄は許さぬとばかりにいきり立ち、拳を振るう。
それに合わせて放つのは、超巨大な衝撃波!!!

「つあああああツツツ!!!」

「こ、こんなことで強くなるだと……サイヤ人の力が、こんなカスのおかげで強くなるだど!!!? そんなことは許さん!!!」

「オレはやってやる!! あんなガキとゴミが合わさったくらいで、このオレがやられてたまるか!!!」

ベジータとナツパは合体攻撃への困惑を凄まじい怒りと戦意に変え、気をたぎらせている。

回りに意識をやれば、仲間達は疲弊し、戦場となった中の都は更に破壊され……そして、当の俺とプリカの疲労やダメージも、ついに限界に近づきつつあった。

「ぐわあああつ!!!」

「ピッコロツツツ!!!」

ナツパと競り合っていたピッコロがしつぽの一撃で吹き飛ばされ、キングキャツスルの残骸へと突っ込む。

死んではない、ダメージは致命的ではない、だが……。

「ぎツツツ!! むんツツツ!!! ……くツツツ!!」

仲間達の援護をもともしない連撃が、俺達を襲う。

多勢に無勢か、いくら気の運用能力を高め、俺の技術を使えるようになって、あくまで戦闘力の劣る一体の大猿、まずい——

——その時だった。

遠くから、拡声器のけたたましいハウリングが聞こえたのは。

『電磁波・光線遮断発煙砲、全弾発射ア!!!』

「な……なんだ!! こ、この星の軍隊か!!!?」

「王立防衛軍の……サイボーグになった人だ!!!」

ちようどナツパの問いに返すようなタイミングで、クリリンが叫ぶ。

そうだ、たしかに聞き覚えのある声だ。

ナツパはエネルギーを口に溜め、防衛軍の方に向けた!

「させるか!!!」

「それはごっちのセリフだぜっ!!!」
更にその背後からピッコロが襲いかかり、顎を掴んでしがみつく格好になる。

……一年前、俺はサイヤ人襲来に備えるため、師匠を通して国王含めた各国重鎮に対してその事実を通達したが、大猿の件だけはおいそれと明かすことは出来なかった。

それは、既に大猿を認知した人々による混乱の発生（つまり、悟空やプリカへの迫害だ）を避けるためだったのだが、国王を含めた、信頼をおける僅かな人々にだけはそれを伝えたのだ。

だが、まさか……国王が独自に、あんなものを開発しているとは……!!

「国王のへりが最後まで残っていたのは、大猿の出現を見張っていたから……というわけか、つくづく、俺達は果報者だな」

「ああ、最後まで……やろう!!」

「……望む所だ、さっさと捻り潰して、ぶち殺してやるから覚悟しろ!!!」

俺／プリカとベジータはどちらともなく腕を高く掲げ、強く握りあった。

手四つの形だ。

見れば、ピッコロとナツパも、自然と力比べのような形になりつつあり――

「ククク……オレが宇宙人か、言われた通りの不思議な力を使うのも悪くないが……やはり、武道家は武道家らしくなければな!!!」

その手は巨大なまま、激しく輝き始めた。

消耗の激しい隠し玉と言ったところか。

……この戦いは、ついに終着点へとたどり着きつつある。

「ボクたちもやろう!!!」

「ああ、チャオズ!!!」

超能力とどどん波、かめはめ波に繰気弾、界王拳のままの突撃。

仲間達の技がサイヤ人へと突き刺さり、空には煙幕が広がってゆく。

『プリカ、おまえは——プリカ——きつと——』

再び高まった同調の向こう側から、優しげな声が聞こえた。

俺にとっては聞き覚えのある、プリカは知らないその声は、バーダツクの妻、カカロットの、そして……プリカの母親の。

「ぐ、ああツツツ!!! きぎぎぎぎ!!!」

「こ、こいつどこにこんな力が……!!!?」

抑え込み合う中、プリカの背中に、奇妙な感触が現れ、それと共に劣勢になりかけていた力比べは、一気に逆転した。

俺には覚えがあるその感触、プリカもすぐに俺を通して、その感触の正体を知る。

(鬼の貌……)

当然だ。

何故か自然と、俺はそう思った。

——そして、ついに待ち望んだその時がやってくる。

「空が……ち、ちくしょう……!!」

「くそつたれめー!!! ぐうううう……」

三体の大猿が一気にその力の根源を失い、縮んでゆく。

大猿の大きき分、サイヤ人達と俺達の間には距離があり、俺は、プリカに肩を貸されるような形で地上へと降り立った。

それと同時に、力を使い果たしたピツコロも縮み……戦場は、一気に静まり返る。

響くのは、戦士達の息切れだけだ。

「ふ、ふう……よ、よく頑張ってくれたな、ソシルミ、プリカ、ピツ

コロ!!」

「はあ……はあ……再戦のまえに、きさまらを食われては溜まったもんじゃない」

地球の戦士達は全員、満身創痍。

同時に、大猿による強化を失ったベジータとナツパの疲弊っぷりもまた、凄まじいものだった。

俺はプリカの肩から抜け出し、一步、また一步と、ゆっくり歩を進

めてゆく。

これが、最後のチャンスだ。

「やめろソシルミ!! もうおまえには、ちっとも力が残ってないはずだ!!」

ヤムチャが叫ぶ。

!!
だがこれが、最後のチャンスなのだ、俺は、やらなくてはならない

「ヤムチャさん、ソシルミを止めましょう!!」

「オレが行く、二人は待っていてくれ」

そんなヤムチャを制止して、プリカが駆け寄ってくる。

……ヤムチャの言葉は事実だ。

俺の体は、この中の誰よりもボロボロだった。

ベジータと殴り合い、大猿に握られ、弾き飛ばされ、拳句の果てに10倍以上のパワーのプリカにくつつき、そのエネルギーの奔流に身を晒したのだ。

正直言つて歩くだけで精一杯……。

プリカが、俺の肩を掴んだ。

「プリカ……」

「なあ、ソシルミ」

「今度は、死なせたくない、頼む」

プリカが目を見開いて、悲しげにして、ぎゅっと瞑ってから、開いて、名残惜しそうな色を残したまま俺の肩を手放す。

俺はその勢いのままにゆっくりと歩き出し、サイヤ人二人の前に立って、手を広げた。

「ベジータ、ナツパ!! ……停戦しよう、もう手出しはしない、地球から去ってくれ!!」

俺の行為と、叫びを前にサイヤ人……ナツパは困惑し、ベジータは、じっと俺を見る。

仲間達も、再び静まり返った。

これは都合がいい、語らせてもらおうじゃないか。

「なあ、俺達の戦い方をたっぷり味わっただろう、堪能してくれたか

？面白いことを考えたな、なんて思わないか？ あの力カロットは生身のまま何倍も力を増やす技を手に入れた、プリカは俺と一緒になって、大猿なのに機敏に動いて見せた」

俺は宣伝する、この地球を、武道を。」

「だがそれも、サイヤ人が持っていた凄まじいポテンシャルあつてのことだ……戦いが大好きで、死ぬほど強くて、どんどん強くなる、俺にとつては、最高のパートナーだ」

そして、この俺の愛を。」

「なあ、ベジータ、ナツパ、俺は——」

「……おい、茶番はよせ」

俺の演説を止めて、ベジータがエネルギーをチャージする。

掲げた腕の先に居るのは、もちろん、俺だ。

「ソシルミ、一つだけ聞くぞ」

「ご自由に」

「何故、大猿になったオレたちのしつぽを狙わなかった？」
……………。

そう言えば、そんな手段もあつた。

俺は思わず、プリカと、クリリンを見る。

「考えもしなかった」

「……………フン」

ベジータはチャージしたエネルギーを虚空へと捨て、踵を返した。
あの方角には、確か宇宙船がある。

「ナツパ、帰るぞ」

「お、おいベジータ！ なあ、この星に残って……いや、ドラゴンボールつてのを奪つてよ、ラディッツを……」

「二度は言わん、きつさと付いてこい」

二人の背中がぼやけ、ぐらつき、地面がいやに恋しい。

俺は浅くなってきた呼吸を無理に深くして、二人に声をかけた。

「また来てくれ」

振り返ったベジータの忌々しげな顔を最後に、俺のまぶたと意識は、ゆっくりと閉じられていった。

←
U
U
U
U
←

第四十二話：転生地球人が星に願いをかけるまで

無限軌道が喚き立てる甲高い摩擦音と共に、飾り立てられた戦車が廃墟の街をゆつくりとめぐる。

飾り立てられた戦車というのは、重武装を皮肉った言葉ではなく、文字通りの意味だ。

兵士、それと、薄汚い格好をした市民たちに見守られるその戦車は、いかにも廃墟からかき集めましたという材料を纏って、極めつけには軍服を着た犬の獣人が乗っている。

「よっ!! 国王陛下!!」

「期待してませ!!」

犬の獣人こと地球の盟主たる我らが国王陛下は民と兵からの温かいエール、そして完膚なきまでに破壊された自らの居城を前に軽くまぶたをひくつかせながらも、ゆつくりと息を吸い込み、そして、言葉を紡ぎ始めた。

「——えー、皆さん、大変おまたせしました、多少のトラブルはあったものの、無事、ソシルミ氏を始めとした幾人も武道家と、王立防衛軍勇士諸君の活躍あって、会場を再び設営することができました……ここに、ピッコロ戦争終結十年祭の、再開を宣言させていただきます!」

国王の言葉は……駄目だ、記憶できていない。

……演説が始まったと思ったら、終わっていた。

せつかく戦勝を祝われている(はずだ)というのに、どうしても目の前の事に考えがいかないのだ。

そんな風にもた意識を飛ばしていると、広場ではわあわあと歓声が響いていた。

「さっすが国王陛下!! やっぱこういうのは短くなくっちゃね!!」

「実は酒だけ持って逃げてたんだ、どうだ、飲みたいやつはいるか!?!」

「そんなん……全員に決まってるだろ!」

「大きな声じゃ言えないが、そこらの同業者の屋台から拾い集めた

機材でなんとか焼きそばくらいは焼けそうだぜ！ お代はつけいてやる、食いたいやつは来い!!」

「オ、オラ食うぞ!!」

……サイヤ人が去ってから数十分、キングキャッスル前の広場は、往時の数百分、数千分の一ではあるが、喧騒を取り戻していた。

瓦礫の山で騒いでいるのは軍人と『巨大なソシルミを見た』と言って帰ってきた市民たち。

彼等は同じく戻ってきた国王をとっ捕まえて……後は、ご覧の通りだ、バイタリテイがあつてよいことである。

一方の俺はというと、流石にダメージの蓄積が大きかったこともあり、プリカと共に祭からほど近い瓦礫の山に座り込んで休んでいた。

……のだが、祭を離れてこちらにやってくる一団の姿が。

やたらとハゲの多い集団、よく知った、とても良く知った俺の仲間達だ。

俺はすつくと立ち上がり、仲間達……その先頭にいる、この戦いの立役者たる御老体を迎えることにした。

「むしろに面倒な軍人どもの相手をさせてゆつたり逢瀬とは、いいご身分じゃのう」

「これは手厳しい、……さて、おふた方への報酬については、神様がとり計らつてくださるでしょう」

「おい兄者、一体何をせがんだのだ」

「なに、鶴仙人様も後生のことが気になるお年頃ということですよ」
皆は首をかしげるが、神と繋がりの深いピッコロだけはなにかに感づいたようで、小さく毒づいた。

「ふん、善行を積んで神と閻魔の野郎におべっかか、武泰斗の弟子がくだらんことをする」

その言葉に含まれるのは善行そのものではなく、下心ある善行への嫌悪の色。

カタツツの子が持っていたであろう青臭い善意が、ここには帰ってきているのだと分かり、俺の頬は軽くつり上がる。

俺は、調子が上がっている内に皆に言うべきこと……言いたいこと

を言っておくことにした。

「皆！ 皆のおかげで誰一人犠牲を出すことなくこの戦いを乗り切れた、そのことに、作戦の立案者として心から感謝する、ありがとう」
「おまえのことだから、その中には、サイヤ人も入ってるんだろ
うな」

ヤムチャが、ニヤリと笑って言う。

そして、天津飯がより皮肉げな笑いをこちらに向けた。

「年々欲が深くなるな、ソシルミ」

「ご理解頂き感謝の極み……そうとも、皆のお陰で、全員の命を買えたよ」

そう言って二人に笑い返すと、皆も思い思いの笑いと、照れ隠しを作ってそれに答えた。

しばらくそんな暖かな雰囲気が続いた後、口を開いたのは意外なことに、悟飯だ。

「ぼっ……ぼく、みなさんの戦いを見て、とっても感動しました！

ぼくは学者さんになりたいと思ってるけど、みなさんみたいな立派な人になりたいから、武道も続けたいですっ!!」

「おー、えらいぞ悟飯、勉強はちよつとおっつかないけどよ、武道の方はオラも頑張っちゃうぞ！」

「うん！ そ、それと……あの、サイヤ人の人たちとも、いつかしっかり会って、ご挨拶したいなって……お父さんと同じ星の人なんですよ？」

「そうだな、オラも今度は殺し合いじゃなくて、試合で戦いてえ、天下一武道会みたいにな」

その言葉に反応するように、皆がびくりと動く。

周りを見れば、皆どうやら、天下一武道会には興味があるようだ。

「天下一武道会か……オレもやりたいな、今度はもつと鍛え込んで、ソシルミ並の肉弾戦にプリカ並の気弾をぶん回して戦う、とかもいいかもしれん」

ヤムチャの言葉を皮切りに皆は、サイヤ人より筋肉をつけたい、巨大化したい……夢物語から現実的なものまで、様々な展望を語ってゆ

く。

俺も興味を惹かれるのだが、俺が本題としたいのは、こんな愉快な話ではないため、お預けだ。

いつ話を切り出すかと悩んでいると、どうやら天下一武道会という言葉に釣られたのだろう、千鳥足のサイボーグ軍人がよろよろとやってきた。

「や、やるんですか!!? 天下一武道会!!!」

「やりたいのは山々ですが、本家は休止中ですから、やるとしたら師匠に頼んで——」

「——いや、そこは、わたしに任せてはくれないか?」

サイボーグ軍人の影から、国王がぬつと現れた。

「この星を守ってくれたのはきみたち武道家だ、その恩返しと、これからの武道家の養成のため、ぜひともその新大会に協力させてもらいたい」

「王様……」

誰からともなく、感嘆の声が漏れる。

声を上げたいのは、俺も同じだった。

国家と武道家が結びつく歴史はいくつか存在していたが、この歴史は、それらより大分早くそうなるのかもしれない。

「感謝します、ですが、この勝利は貴方と、貴方の軍、貴方の民の協力なくしてはあり得なかったことも、お忘れなきよう」

「……そう言ってくれるか、ソシルミくん」

俺と国王は、しばし頷きあった。

その後も、皆は久々の大集合ということもあって旧交を温めたり、新武道大会に想像を巡らせたりと愉快に話していたが、流石に疲れてきた俺がふらつくと、国王が俺の肩を支えてくれた。

「大丈夫かソシルミくん、どうやらこの祭はまだまだ長くなりそうだからな、少し休んだ方がいい」

皆も口々にそう言うが、未だに残るフリーザ軍の脅威など、話さねばならないことはゴマンとある。

「まあ、一旦座れ、座りながらも話せるだろ」

プリカの説得に、いよいよ根負けして俺は座り込む。

すると、そのまま引き倒されて、プリカの太ももに後ろ頭をうずめられる、膝枕だ。

……図られた。

「さ、皆はお祭りを楽しんできてくれ、オレとソシルミはゆっくり休むからさ」

プリカがそう言いながら暗に……というか露骨にあっちいけと迫ると、皆は愉快そうにしながらそろそろと立ち去って行く。

そして俺は、芋色の盛り上がりには半ば隠され、夜空を背景とした我が相棒の顔を見上げる。

「……あんまり顔が見えないとか思ってるだろ、いい顔しやがって、セクハラだぞ」

「そういう姿勢だろう?」

後頭部を占める、しっかりと筋肉が付きつつも柔らかさを失わない、完璧な感触。

戦い疲れた身に、戦友にして愛する人の膝枕、こんな幸せがあるだろうか。

そんな喜びを更に増す、辛うじて見えるジト目を堪能していると、その横から特徴的な黒髪が生えた。

「ミソシル、辛えなら、お好み焼きもらってくるか?」

「やめろって悟空、馬に蹴られるぞ!」

「なんだクリリン、オラ馬くれえ平気だぞ?」

「悟空、ありがとな、今はいいよ」

妻子持ちのくせに何故こうも鈍感でいられるのか、礼を言いつつも自分を棚に上げて呆れてみるが、気遣いそのものはありがたい。

結局悟空は、そのままずるとクリリンに引きずられて無事に退場した。

「はあ……どうする、このまま寝てもいいけど……」

「お言葉に……いや、少し話そうか、体内のエネルギーが不安定だから、このままだな」

遅発性乱気症(気のコントロールのやりすぎによって発症する一過

性の病気)の類と思ったが、症状が異なる。

単に疲れた、あるいはダメージが蓄積したというセンが有力だろう。

調子の上がない俺を気にして、プリカが顔を覗き込んだ。

「オレの気も逆流してたよな……大丈夫だったのか？」

「し、進化って気持ちいいねプリカくん……!!」

「はいはい、わかった、わかった、そうだね、ソシルミくん」

実際気持ちよかったと言えば気持ちよかった、肉体的な快樂とは少し違うが。

プリカは俺の言葉に合わせて投げやりな同意をぶつけてから、じろつと顔を覗き込む。

「それで、今度は何が気になるんだ？　言ってみろ、ピッコロが聞いているから、話せる分だけな」

「……分かるのか」

「こないことあったのに、疲れてるから休むなんて、おまえらしくない」

はつとしてプリカを見ると、わからいでか、というように微笑まれ、俺は何も言えなくなる。

そう、俺の調子が上がらないのは不調からではなく、不安から。

俺は気恥ずかしさに目を逸しがてら、中天から降りつつある月に視線をやる。

「神様と一緒に隠したアレが出てきた理由が分からん、流れ弾ではないはずだ」

「……まさか、誰かがやったって？」

「その通りだ」

俺達の関与の外で変化した歴史の、その『原因』となった……『何者か』。

仮定に仮定を重ねることになるが、それくらいしか思いつかない。

「考えすぎだ、ソシルミ」

「そうかもな、だが……」

「なにかがあるとしても、オレとおまえがいて、皆も鍛え込んでる、

だからきつとなんとかなる……そうだろ？」

「お前らしくないことを言う」

「おまえの言葉だ」

そういえば、ずっと昔に言ったことがある。

あれから色々（自業自得にしろ、釈然としないことにしろ）ひどい目にもあったが……確かに、俺達はそれを乗り越えもしたな。

そんな感慨に浸ろうとしていると、プリカは俺の頭を手で挟んで、強制的に俺の視線を奪った。

「……なあ、ソシルミ」

「なんだ、プリカ」

「ありがとな」

まっすぐに笑いかけてくるプリカの理解不能な感謝は、俺の心に残るわだかまりを、ひとまず消し去ってくれた。

だがまだ、語らなくてはならないことはあるのだ。

俺はプリカを見上げたまま、不確定ながら存在し続けている脅威について話し始める。

「ベジータ達からデータは行っていないはずだが、……まだ、フリーザは……、……、だから……」

視界が突然黒くなった、温かい、プリカの手だ。

駄目だ、話したら急に眠くなって。

でもまだ、話すことが……。

「そっちはもうわかってるから、ちよつとは休んでろ」

目を塞いでやるだけで眠りについた相棒の疲労困憊っぷりに、プリカは心配してやろうと思ったが、どうにも、腹の底から柔らかな笑みが湧いて、それ以外の表情が作れない。

その理由は、プリカには分かっていた。

「……おまえがこれだけやってるんだ、なんとかなるさ」

最強になる、そんな大それた夢を、宇宙の運命ごと飲み込もうと足掻く人。

自らが愛する世界をより良く生きるため、全霊で奔走し、戦う男のことを、自分はとてもとても深く信頼してしまっているから、だ。

「もつとだ、もつと……、クリリン、武天老師様と見てるエクササイズはどうした、もつと体を柔らかく保て」

「キツイゼソシルミ、それに、あのエクササイズは、エクササイズって言うてもだな……」

「とにかく、まずは精神力だ、やれると思込め、体が硬いなら俺が曲げてやる」

「む、むちやくちや言うぜ」

とにかく急ピッチで訓練を進めなくてはならないのだ、そう伝えると、クリリンはダラダラと汗を流しながらブリッジの姿勢を取り、その高度をぐいぐいと高めていく。

あれから一月ほどが経ち、ここはメカメカしく大きな部屋の中、俺とクリリンはヨガの訓練をしていた。

「な、なあソシルミ……、おまえが焦るのって、ベジータの上に、もつと恐ろしい大悪党がいるって話と、つながってんだよな、多分……」
「……その通りだ」

あの宴会の後、俺は仲間達や国王に向け、新たな脅威となりうる存在として、フリーザとその軍のことを教え、戦力増強のため、ブリーフ博士やピラフ、プリカと相談して、皆に重力室の使用を進めることにした。

とはいえ、この世界ではベジータ達のスカウターが失われたためナメック星の情報は伝わらず、ピッコロも死んではいないため、すぐに相対することにはならないだろうが……。

それでも、因縁はあるし、例の『何か』の存在もある。
どちらにしろ戦力の増強は急務なのだ、少々焦ってもバチは当たらない。
まい。

「そのためにも、もつと足を伸ばせ」

「イテテテテ!! む、ムリだって！ 伸びな……あーっ!!」

ヨガの鍛錬の進捗はともかく、クリリンを含めた皆の信頼はとてもありがたいものだ。

「い、いつ……くう……、お……おまえとプリカが考えたってこの部屋も、とんでもないもんなあ……確かにこんなところで鍛えられるなら、ずっと強くなれるよ」

クリリンの言葉と同時に、室温が50℃から、-20℃に急落し、汗に包まれていた俺達の体は、それがそのまま凍結した氷に包まれた。

「ひっ……冷たっ!! 地球を守るためにはいえ二人とも太っ腹だよなあ、こんないいもの教えてくれるなんてさ」

「二応プリカも囁んでいるが、メインはピラフとブリーフ博士だし、そもそも高重力訓練のアイデアは神殿にある精神と時の部屋から頂いたものだ」

「そういう話じゃないって、ありがと……ぎゃーっ!!!?」

照れくさくて目を逸しながら、息も絶え絶えのクリリンが眉間にシワをよせてこちらを見上げていた。

恨みがましい目……ではない、真剣な目だ。

「はあ……はあ……なあ、ソシルミ、もしフリーザってやつが来るとして、この機械でどれくらい鍛えたら勝てるかな」

「…………悟空とプリカ、あの二人がカギだ」

フリーザの戦闘力は圧倒的、集団戦法がうまく行けばマシにもなるかもしれないが……。

楽観は絶対に出来ないし、いくら策を練っても、『何か』が出現してそれを破壊する可能性もある。

ならば、正面から打ち破る超サイヤ人の出現に、頼るしかない。

「そっか、——なあソシルミ、おまえ最近、自分がいっつらより力がないのに悩んでるんじゃないのか?」

「~~~~ツツツ!!」

俺の言葉をあっけなく受け入れた次の瞬間、クリリンは、直球で、俺の本心に触れてきた。

その瞬間、俺は多分誰の目にも明らかかなほど大きくびくついていたに違いない。

——そうだ、俺は焦っている、もつと、もつと強くならなくてはならない、と。

「……その通りだ」

「やっぱ、悟空の『あれ』見ちゃったらなあ……、オレもちよつと尻込みしちやっただよ」

「界王拳を見て、ちよつと、か」

「まあな」

クリリンはそう言って、上を見てほほえむ。

界王拳を使った悟空の持つ、恐怖を煽られるほどの絶大なパワー。それを思い出しているであろうクリリンはにこやかに、ただ空を見た。

「……力では追いつけないかもしれないけど、どんどん技を増やせばなんとかなるかもしれないだろ？ だから、こうやって教わってるんだしな」

「……なるほど、な」

ひどい生返事は、納得出来なかったからではなく。

ただ、眩しかったのだ。

そのまっすぐな楽観が、遠い強さの先を見る目が。

「今日のところはこれくらいにしようかクリリン、焦っても、体の硬さは一日じゃどうにもならないしな」

「ああ、ありがとなソシルミ、教わった分だけでも、ちよつと体の温め方がわかってきた気がするぜ」

答えは……得られなかったが、憧れは得られた。

そんな想いを胸に、俺は装置のスイッチを切り、部屋の外、カプセルコーポレーションの庭へと出る。

俺は汗に戻りつつある霜を払って、ベンチへと腰を下ろした。

周りにはいくつもの重力室が所狭しと並んでいて、その一つでは、プリカと悟空が盛んにスパーリングを行っている。

「重力倍率は鍛錬開始当初より高く、それでも激突速度の鈍りは一切なし、か」

余裕を残していたのやら、強くなっているのやら、どちらにしても

……。

やめだ、流石にうじうじしすぎだ。

別のことについて考えよう。

思いつく議題は……ただ一つ、月の偽装を解き放った『何か』か、『誰か』か。

「……候補は……絞りきれない、か」

単なる偶然、潜伏中の悪党、和解したはずのいくつかの勢力、未だ存在を確認出来ない既知の悪党の数々……。

複合して勘案すべき要因も絞りきれない、魔族の出現、ラディッツのパワーアップ、果ては俺とプリカの出身まで。

だが、それでも、この世界における一つの法則と呼べるものが、考えの放棄を迫る。

「……何にしても、倒すしかない」

この世界の存在は、どうやっても『力』を得る時、強くなる。

そして、敵が強くなっていくのならば、倒すしかない。

そしてそして、強い敵を倒すためには。

戻ってきた『うじうじ』に、俺の眉間がムキツと音を立ててシワを寄せる。

「もつと鍛えるしかない、それも、危機の程度によっては、俺は主戦力ではなく……」

「——なあ、ソシルミくん、何を悩んでいるんじゃない？」

後ろからの声に振り返ると、そこにいたのは、工具箱を抱えたブリーフ博士だった。

「……行き詰まったのなら、年長者に相談するのもいいかもしれない。

伝えていいことといけないこと（俺の勝手な予想で皆を混乱させたくない、というやつだ）を考えながら、俺は言葉を紡ぐ。

「ええ、なんというか……これからの戦い、ちゃんといけるかなあ、と」

「きみは中の都でも大活躍したっていうじゃないか、もつと気楽にやったらいい」

「気楽に、と言われましても……」

「なんでも、楽しんでやらないとつまらないよっ。」

……そういえば、この人は地球存亡のかかった宇宙船の出発を、ステレオの配置にこだわって遅らそうとするような人だった。

そして、この意見、トートロジーだが一理ある。

だが、その一理は……。

「戦うのも、鍛えるのも、楽しいんですよ、でも、楽しいだけじゃ、足りないんです」

プリカも悟空も、皆も俺も楽しんでいる。

絶対負けないように限界を極め続けているし、相手を殺すことになんて拘っていない。

想いで負けているのかと言われたら、絶対に違うと叫ばせてもらう。

だが、それ故に、出すべき答えも限られるのだ。

「……もつと、頑張らなきゃいけません」

「そっか、休みはちゃんと取るようにするんじゃないぞい」

俺の根性論に何を言うでもなく、ブリーフ博士は軽く手を振って重力室の様子を見に行った。

それを見送った俺は、また嘆息する。

「——いかに強くなろうとも、共に走る仲間がより早ければ……俺は最強にはなれん」

いや、それどころではない。

フリーザ軍、ゲロ、バビデイ、そして、この歴史に潜んでいるかもしれない『何か』。

立ちふさがる危機の前に俺は主戦力になれないかもしれない、その危惧……いや、事実には、追い詰められているのだ。

俺がどうしようもない悩みを抱えながら、じつとプリカと悟空の入る重力室を見ていると、今度は隣から声がかかった。

「……ソシルミ、おまえはプリカと鍛えてると思ったが、違うんだな」

「ヤムチャか、……ああ、誘われはしたが俺から断ったんだ、耐えら

れる重力の差が大きすぎる」

さわやかな汗をそのままに、ヤムチャは控えめな感じで。

そして、俺の答えを聞くと更にバツが悪そうに本題を切り出した。

「ク、クリリンから聞いたんだが、あいつらとのパワー差で、悩んでるんだって?」

「……その通りだ、打開策も見当たらん、技の一つや二つなら思いつかんこともないが、これからの戦いはこれまでとはわけが違う」

やけに踏み込んでくるヤムチャに、それを咎めるくらいの気持ちではつきりと不安を伝えると、ヤムチャはちよつとたじろいで、それから、今度は普段のへらへらした調子で言葉をつないだ。

「じゃあ、どうするんだ? 技じゃどうにもならないなら、ドラゴンボールに願って、何かしてもらおうとか……」

「俺はドーピングを気にするタチじゃないが、それは流石にズルだな」

「だ、だよな……」

「しかし……星に願いを、つてくらいなら、アリかもしれない」

空を見ながら放った、若干本音の混ざった言葉に、ヤムチャは息を飲む。

そして、その弱音を咎めるように強く、しかしおずおすと声を張った。

「な、なあソシルミ! オレと……いっちょよ、スパーリングしてくれないか!? か、軽くでいいんだ……!」

俺とヤムチャの拳が次々と交差し、生半可な建物ならばそれだけで倒壊しそうな程の衝撃波が舞い散る。

これでも重力をかけていることで動きはぬるくなっているのだが……それをものともしないほどに、スパーリングは盛り上がっていた。

「さて、そろそろこの試合の意味を教えてくださいたいものだ……なツツ!!」

「ぐっ……な、なんのことだか……！」

「——シィッ!!」

「うわっ、ととっ!!」

俺は軽い拳打とフットワークを組み合わせ、ボクシングのように立ち回っていた。

ヤムチャは劣勢だ、捌いてはいるが力の差はいかんともし難い、この現状はまさに俺と……。

「ま、まだくらくらするぜ、重いだけじゃ済まないのが厄介だな、この部屋は！」

「生体機能への負荷はいい修行材料になるだろ？ それとも、慣れるまで手加減しておいてやろうか？」

「ぬかせっ!!」

そう言いながら俺の拳を捌き続け、次第に高重力に慣れてくるヤムチャ。

だが、やはり、正面からの打撃戦では俺に分があるのは変わらない。

「さっ……さすがソシルミ、言わなくても抑えてくれてるんだろがっ……それでもキレが違うぜ!!」

「ありがとうヤムチャ、だが、少しくらい効果的に打てたところでツツツ……!!」

俺は感謝された加減を消し去り、あえて全力に近い一撃をヤムチャへと叩き込む。

拳に込める意思は詰問、若干の苛立ちと共に、こうまで踏み込んできた理由を問いたです!!

「ぐっ……つう……!! お、重い……！」

いきなりの加速を前に、ヤムチャはすんでのところで対応しつつも、腕をクロスさせる強引な形に留まったその防御はダメージを逃しきれず、強い重力の中で数メートルは後退するほどの衝撃を受けた。

「——わかりきったことだが、悟空はちよつと力を込めるだけで、これよりずっと高威力の打撃を繰り出すぞ」

「お、おまえはあのベジータと違ってやりあえてただろうが!!」

「サイヤ人の成長速度と伸びしろを舐めるな、あいつらに望むだけ

の負荷を与えられるこの部屋は……俺達にとって、終わりの始まりだ
と思え」

「ソシルミ……」

ヤムチャは吐き捨てるように放った俺の言葉を前に、眉をひそめ、
歯噛みする。

仲間との才能の違いを叩きつけられたことへのいらだちか、突如ぶ
つけられた意思への反発か、戦友が敗北主義に堕したことへの怒り
か。

俺もまた、自分が放った言葉に動揺していた。

これが俺の本音か、だからさつきも、わざと手加減などと言ったの
か？

「そ、それでも……!!」

「——ツアアツ!!」

ヤムチャが紡ぐ言葉を切って、俺は蹴撃を叩き込んだ。

避けるヤムチャだが、その先には刈り込むように回った俺の腕があ
る!!

「さつき、あいつとの鍛錬を断つたと言つたらう、実力差があるから
となツツ!!」

「ぐう……っ……っ……っ……それがどうした!!」

「なっさけないツラで俺を見たんだ、俺が弱いからって断つたら、そ
りやもう、ひどい顔でな……キエエエツツツツ!!」

かすりながらも追撃を避けたヤムチャに襲いかかるのは、先に体勢
を整えた俺による追い打ちのサッカーボールキック!

そうだ、プリカあの苦痛に歪んだ顔……!!

どんな気持ちだろうな、一度は自分を破つた男が、今は完全に体の
性能で破れ、共に鍛えることすらままならないというのは!!!

「ぎっ!!! ……な、なんて威力だ!!」

「それだけじゃない、あの顔は優しかったよ、追いつけないなら仕方
ないと、見下すわけでもなく……そうだ、俺はもう、ただ鍛えてるだ
けで、優しくされなきゃいけないんだぜツツツ!!」

「あの戦いはおまえがいなくちゃ勝てなかつただろ!!」

「勝つだけなら悟空が殺せばよかった!! クリリンが切り刻めばよかった!!」

精神を制御できない。

俺はヤムチャから距離を取って、息と気を整えつつ、それでも言葉を吐き出し……いや、言葉が吐き出され続ける。

「当然、悪いのはプリカでもなく悟空でもない、俺だ、俺の弱さが悪い、ああでも、サイヤ人の鍛錬効率が……!!!」

「やめろソシルミ、そんなことを言っても仕方ないだろ、おまえは十分に強いじゃないか!!」

「ヤムチャ……お前は、平気なのか? お前と悟空の間に何倍のパワー差があるんだ、成長速度だって違う、勝ち目はないぞ」

「オ、オレは……」

答えながら、ヤムチャはじりじりと俺の背後へと回り込んでゆく。あくまでスパリングだが、俺に何を見せる、ヤムチャ。

筋違いの怒りを吐きつけながら、俺は10年来の友に、強く期待を寄せていた。

寄せていながらも……自分を止めることができない。

「コンピューター、重力操作オフ!!」

「ツツ!」

「新々狼牙風風拳!! はいーっ!!!」

急激に軽くなった体、背後から迫るヤムチャ!!

その気迫は殺意さえ感じさせ——

「はい!!! はい!!!」

「~~~~ツツツ!!!」

初撃の蹴りを捌くと、それを掴みにかかるヒマさえ与えず飛び込む連撃——疾い!!!

浴びせかけられる広がった手の打撃が俺の頬を裂き、腕を削る。

全力で捌いて致命打を避けるが……有効範囲の広いそれを防ごうとうかつに防御を固めれば、ヤムチャはその隙を突いてくるだろう!

だが——

「はいはいはいはい!!!」

「シイツツ!! ツイ!!! グウツツ……!!!」

この打撃、疾さだけではない!!

解析しきれぬ動きを前に、俺の防御は機動的なものから、そうあつてはならぬ、『固める』ものへと近づき。

「オウ~~~~!!!」

「……………ツ」

必殺の一撃が来る。

腕を上下対照に重ねた奇っ怪な拳がこの連撃の終着点、防ぐ手段は既がない。

受け入れ、跳ね飛ばされてしまえば、このスパーは終わりだ。

何を伝えられたのかも、わからないままに——指先が、腹に触れる。

「——ツツツツ!!!」

「なっ!!?」

その『瞬間』。

腹がぐるりと回転し、背になる。

防御姿勢の腕は、回転の間に拳となり……!!!

「還^カアアアツツツツ!!!」

「(づ)——」

全力の拳が、ヤムチャへと突き刺さったツツ!!!!

……ヤムチャはそのまま部屋の壁に叩きつけられ、ずるずるともたれかかるように腰を下ろす。

「ハア……ハア……う、腕を上げたな、素晴らしい技だった……」

「か……開口一番にそれか、……おまえらしいぜソシルミ」

苦しみながらもヤムチャは笑う。

一方の俺は、このスパーリング、いや、試合となった殴り合いの最後に使った技……否。

技とも言えぬ力について想いを巡らせていた。

「優れた反射神経が的確な技を導き出す……俺の持つ最大の能力の一つだが、ここ数年、こうまで研ぎ澄まされたことは、なかった」

「……忘れてたからじゃないのか?」

「忘れていただくと？」

「なあ、ソシルミ、やっぱりお前は強いな」
いきなり何を。

自らの技への疑問も、弱さへの失望も、踏み込まれたことへの怒りも忘れて問おうとする俺に、ヤムチャは言葉を続ける。

「力の話じゃない、反射神経とかとも違う、おまえはどこまでも強さを求めているじゃないか、だから、磨き上げた技では悟空でも勝てないし、かめはめ波なんか使えなくつても、誰よりもたくさん技を持つてる」

「……………ヤムチャ、それは」

「違わないはずだよな、おまえは、謙遜で力の差を見誤るようなやつじゃない、……………前の前の天下一武道会でチャパ王さんとやったあの戦い、あれをやるのは、この世でお前だけだ」

あの戦いを思い出しているのだろう、ヤムチャは遠い目をする。

技巧の限りを尽くし、戦いながら戦い方を進化させ、新たな技を繰り出し、最後には死力を出し合って相手を倒す。

あの戦いには、俺のすべてが詰まっていた。

「だから、いつかきつとあいつらのパワーに届く技が使えるぜ、おまえは……………オレも、オレの技にそんな日が来ると思って鍛えてるんだ、オレも、あんな試合をやりたいしな」

「それは、まさか、俺を見て」

俺を見て、俺の戦いを見て、そう思ったのか。

そんな俺の震える声に割り込んで、ヤムチャは答えを突きつけた。

「さっきの技、新々狼牙風風拳……………見覚えがあるはずだ」

……………確かにあの技、俺の記憶に存在する『ある技』と、僅かに似ていた。

連撃をただ疾さだけではなく、敵への幻惑としても用いる必殺拳、それは――

「――八手拳……………ツツ!!」

新々狼牙風風拳が八手拳を取り込んだ技だというなら、話がつながる。

師匠との戦いを最後に長らく触れることのなかった、速さと重さを超えた場所にある純粹な武道のやりとり。

それが俺の……強さを求め続ける存在としての本能を呼び覚ましたのだ。

「おまえが好きそうな話だろ?」

「ああ、ヤムチャ……俺は——」

何を言えばいいのかすら分からない、ただ、まずは感謝を。

俺が万感の思いでそれを伝えようとしたまさにその時、重力室の無駄に高性能なステレオから、超音質大音量大迫力の音響で博士の声が響いた。

『ソシルミくん、ヤムチャくん!! 大変じゃ!! 中の都に、またサイヤ人の宇宙船が着陸したんじゃ!! 王立防衛軍から電話が入つとるぞい!!』

「な、なにっ?!」

「分かりました、すぐに!! ヤムチャ、ありがとう、ひとまずこれで俺はなんとかかなりそうだ……、今参りますツツ!!」

人払いの済んだ中の都。

瓦礫と化したキングキャツスルの前に、ぽつんと一つ、クレーターとポツドだけが佇んでいた。

それを囲むのは、俺とプリカ、悟空、ヤムチャ、クリリン、そしてブルマ、後方に控える数人の軍人達。

「……せつかく復興中だったのに、またこんなことになるなんて」ブルマのその言葉は、皆の心境を代弁していた。

一月近くの間、復旧と復興が進められていた中の都を襲った再びの脅威……。

だが、その嘆きから一步踏み込めば、数々の疑問が湧いてくる。それを口に出したのは、ヤムチャだった。

「だが、サイヤ人は納得して帰ったはずだろ? なんで今になって……」

「――俺は、嫌な予感がする」

「大丈夫か、ソシルミ」

プリカが俺を気遣うが、気は晴れない。

それは、俺自身が気を揉んでいるからだ。

なぜ落着いたはずのポッドが開かないのか、なぜ、宇宙センターがポッドの襲来を検知出来なかったのか。

「……とにかく、開けてみないとどうにもならないだろ」

そして、なぜポッドは、一つしかないのか。

クリリンの言葉は真実だったが……俺にとっては……。

メッセージが録音された、血まみれのスカウター。

『最初に結論から言う……、オレもナツパもこれから死ぬ、カカロツト、プリカ、サイヤ人の最後の王子の、最後の言葉を聞きやがれ、それから先は……きさまらが決めろ』

スイッチを押すと始まったのは、録音メッセージ……いや。

ベジータの、遺言で……。

「再生、一旦止めるッ!!」

「ソシルミ!?!」

止まるメッセージ、俺はポッドをもう一度見る。

覗き込む、漁る。

……中にあるのは、血まみれになったコンソールだけだった。

「これだけ……か、本当に……」

……ポッドに乗っていたのは、血まみれの、通信機能が破壊されたスカウターが、一つ。

間違いない、ベジータが、自分の遺言を録音し、ポッドで送り出したのだ。

「……ソシルミ、大丈夫か?」

俺の顔を覗き込むプリカは、ひどく辛そうな顔をしている。

だが、そんなプリカが更に俺を心配しているのを見ると、俺はどうやら、ひどく辛そう、どころじやない顔をしているらしい。

……ベジータが本当に死んだならば、俺が歴史を変えたことよって産まれた死者、ということになる。

悪さをしている魔族や山賊なんかと戦うのとはわけが違うその重みを、感じざるにはいられない。

だが、辛いのはプリカも、悟空も同じだろう。

「ベジータ……あいつが遺言を、それも、オラたちに遺すなんて……」

「悟空……」

悟空は複雑な顔をしている、思うところがないはずもないのだ。

プリカの慰めと時間に動揺を取り去ってもらった俺は、ようやく人心地ついた。

「すまない皆、取り乱した」

「おまえが一番、あいつらとの戦いをやめるために頑張ってたもんな……」

ヤムチャの言葉は事実なのだろう。

だが、いつまでも苦しみ悶えているわけにもいかない。

「奴が何か、俺達に言葉を残したというならば、聞くのが道理だ、奴等にとって最後に触れ合った相手は多分、俺達なんだから……」

そして、遺言の再生が再開される。

その遺言はこの発端を説明することから始まり……。

その内容は俺達への、警告だ。

スカウターから聞こえる、風切り音と、爆発音、射撃音、断末魔、ベジータは基地を破壊しながら、この遺言を録音していた。

フリーザはなぜかポッド内に放置されていたスカウターから盗聴を行っており、地球での会話と状況証拠から、ベジータが地球のサイヤ人と結んで反乱を試みていると判断し、粛清を決意したのだ。

当然否定するベジータだが、あのフリーザが聞く耳を持つはずがない。

『……やつは笑いながら言ってたぜ、惑星ベジータの破壊は隕石じゃなく、自分のやったことだ、今おまえも仲間達のところへ送ってやる、とな……ふ、ふふ!!』

それは、サイヤ人への運命に向けた笑いか、自分への怒りか。

……フリーザの言葉を受け、太陽拳を再現して奴の元から逃げたベジータ達だが、自分達が星を脱出出来る可能性は既に存在しないと確信していた。

故に、俺達に遺言を残したのだ。

ベジータはナツパを大猿にして、基地を破壊しながら、ひたすら逃げ回る。

『勘違いをするなよ、借りを返すだとか、生き残り同士の甘ったれた情だとかでやってるんじゃない』

結局、遺言を残す理由を、ベジータは語らなかった。

だが、俺達と通じ合ったことによって、何か変化があったのだとすれば、それは、俺達にとつてきつと、救いになるだろう。

『いいか、三日だ、オレたちが暴れてもせいぜい三日しか稼げん、やつは必ず、軍を引き連れて地球を滅ぼしに行く、きさまらは……、好きにするんだな』

好きにしろ、という言葉が意味するのは、逃げろということか、戦えということか。

それとも本当に、好きにしろと思っていたのか。

「……遺言を残した理由は分からんが、とにかく、あいつが俺達に遺したものを、無駄にするわけにはいかん、早くこれを皆に——」

「——待てソシルミ、まだ、もう一件ある」

「何ツツ!!!?」

遠くで、ナツパが基地を踏み荒らす足音が響く。

近くでは、兵士達ががなり立て、その度にベジータの拳で一撃の元に粉碎される。

そして時折響く、ベジータのうめき声。

基地での戦いは、最終段階に近づいていた。

『……こんなことを言ってるのはシヤクだが、これでフリーザの野郎が泡吹く可能性がちょっとでもあるんなら、やってやる……!!』

苦しげにしながらも、ベジータはスカウターを再び握り、ポッドのスイッチ系をしきりに弄りながら、遺言の最後のページを埋めようとしていた。

『いいか、カカロット!! プリカ!! サイヤ人の誇りを忘れるな!!! フリーザのやろうには絶対負けるんじゃないぞ!! サイヤ人つてのがいやなら、善人でも、格闘家でもなんでもいい、とにかく、やつに負けるようなことは絶対に許さんからな!!』

「ベジータ……おめえ……」

思わずといった感じで、悟空がつぶやく。

……やはり、ベジータは戦闘民族の誇りを何よりも大事とする、サイヤ人の王子なのだ。

そう、俺達が思ったとき……嫌々ながらといったふうに、ベジータが言葉を続けた。

『それと、ソシルミ……』

俺に皆の視線が集中する。

一体何を伝えたいのか、『まとめ役』と見込んだ俺に伝えたいことがあるだけか？

俺は疑問と不安、そしてほのかな期待を胸に、血まみれのスカウターをじっと見続ける。

『いいかよく聞け、まず、プリカはサイヤ人最後の女だが、おまえにやる、王子としておまえたちを祝福してやろう』

「い、いま言うことかよ!？」

『だが……ソシルミ、きさまは自分の誇りを見失っている、このままではサイヤ人最後の女の夫は務まらない、……いいか、あんな卑屈な戦いは二度とするんじゃない!! きさまも種族最強の戦士なら、誇りを持って!!』

ベジータはそう叫ぶと、十秒後の録音停止をスカウターに命令する。

ポッドにそれを投げ込むと、続けてポッドの起動音と大猿の悲壮な吠え声が中の都に響き……。

最後に告げられる音声終了の通告が、俺達を現実に呼び戻した。

「誇り……」

だが、俺の胸には今も、ベジータの言葉が響き続けていた。誇りという、ありふれた言葉。

何を言っているのかすら、今の俺には分からない。

にも関わらず、俺の心はそれをようやく訪れた、待ち望んだ『何か』だと感じ、捉えて離さないのだ。

そしてそれは、隣の悟空も、そうらしかった。

「サイヤ人の誇り……そうか、オラの父ちゃんも母ちゃんも、フリーザつてやつに、殺されちまったんだな……」

「サイヤ人はみんな、ひどいやつらだった、あちこちの星を侵略して滅ぼして、それを売って暮らしてたし、オレたちの親もそうだった、……でも、オレたちの両親は、最後に、オレたちを逃してから死んだんだ」

「……父ちゃん、母ちゃん、会ったらケンカになっちまうのかもしれないけど、オラは会ってみてえよ」

兄弟か、兄妹か、姉弟は、悲壮な顔で同意しあった。

自分達はみなしごなのだ、二十余年もかかって、やっと理解したのだ。

仲間達が悟空とプリカを気遣う中、俺はその思いに同調しつつも—— たった一つだけ、問わずにはいられない。

「皆、よく聞いてくれ、俺は一年の間に、三隻の宇宙船を用意した」
プリカ、悟空、そしてラディッツの宇宙船をタンドール王国にて改造した宇宙船だ。

元の歴史で悟空が用いたそれよりも多機能で高性能なその使いみちは、『いくつか』想定していたが……。

「それを使えば地球を脱出してしまうことも出来る、カプセルをしこたま積み込めば、どこか遠くの星で平和に暮らすことも出来るだろう」

「お、おまえはどうするつもりだよ」

皆が息を飲む中、クリリンがそう問いかけた。

「俺は……」

プリカをチラリと見る。

プリカは、頷いた。

「プリカと共に最後まで鍛え、フリーザに決戦を挑む」

「オレもそうする、地球をそんなやつらの好き勝手にされてたまるか！」

「クリリンの言う通りだ、オレも戦うぞ!!」

「オラもだ」

各々決意を固めてゆく中、ブルマが震えていた。

だが、震えるブルマは、次第に肩をいからせ、目を吊り上げてゆく。

「……か、かっけてにビビって、かっけてに殺しに来るなんて、そんなこと、許せるもんですか!! あんたたち、やっちゃんないなさい!!! ヤムチャ、負けたらただじゃおかないからね!!!」

「あ……ああ!! オ、オレがフリーザと正面から戦うとは、限らないけどな……」

ヤムチャの弱気でゆるんだ空気に割り込むように、今度は後方の軍人……サイボーグ軍人が身を乗り出した。

「わたしたち王立防衛軍も、非力ながら最後まで戦わせてもらいます、敵は軍団、であれば、今度こそわれわれにもお鉢が回ってくるというものです」

「……フリーザ軍は、雑兵でも、前回の天下一武道会を戦った時の皆より強いですよ」

「武器も人も、あの時のままじゃありません、それに……もし本当に死んで、甦れないとしても、地球のために命をかけて戦うのが、王立防衛軍の使命です」

元の歴史ではあり得なかった地球へのフリーザ来訪、潜み続ける謎の影。

だが、その分、戦士の数は少し……いや、もっと、かなり多くなりそうだ。

……巻き込む、なんてことは考えない。

俺達は共に戦う、武道家も軍人もない、地球の戦士全てで、宇宙の帝王に抗うのだ!

偏袒右肩を着込んだ俺が立つのは、人っ子一人、動物一匹いない荒野。

俺の隣でしゃがんだプリカが、ヘッドセットと通信機をがちやがちやといじりながら俺に語りかける。

「宇宙センターから、もうそろそろだって連絡が来てるぞ」

「……もうそろそろも何も、気配だけで分かる、やはり世界中に同時侵攻する気だな」

「そうか？ オレは逆に、でかすぎてわかんないな」

どこまでも続く荒野は、非常に好都合だった……こんな化け物みたいなエネルギーを秘めた連中と戦うには。

「他の連中はどうだ、戦闘準備は？」

「Z戦士は世界に散ってる、軍隊も有志の皆もバッチリだ、あっちが各個撃破狙いなのはわかってるけど……」

「逆に一網打尽にされる危険もない、奴等の予想を上回って逆に撃滅してやれば、フリーザを袋にするチャンスだ」

「やることはやった、これで駄目ならどうにもならない、怖いのは運と、おまえの言う『だれかさん』くらいだな」

スカウターを持つフリーザ軍相手には避難も意味がない。

何より、プリカの言う通り、予想外の要素や危惧される謎のファクターの影響で戦士が全滅すれば……地球はそのまま滅ぶ。

フリーザはサイヤ人が第二の故郷と定めた（と思い込んでいる）この地球の人間を全員殺すだろう。

（多分、地球を破壊したりはしない、フリーザはちよつとやそつと脅かされた程度で星を破壊できるほど、プライドが低くないからだ）

元の歴史にはない戦いで訪れた地球滅亡の危機に、自責の念がないと言えば嘘になる。

「結局、俺達のやったことは、破滅を招いただけなのかもしれん」

俺が、とは言わないと誓ったが、やはり、俺なのだ。

そんな想いを秘めて、後悔……いや、不安を口にする、プリカは

表情を作らないまま、ヘッドセットを置いて立ち上がった。

「……オレたちのことを……オレたちと同じことを知らなくても、沢山の連中がオレたちを、おまえを受け入れた、オレだってそうだ」
照れる様子もなく、真正面から俺を見据えるプリカ。

俺がそれに答え、じつとその目を見てみると、その視線に割り込ませるように、地図を見せつけた。

この星の地図……書き込まれる勢力の数々は、元の歴史では考えられない、あるいは存在すらしないもので……。

その意味が分かりかけた時、プリカは地図の影から右腕を伸ばし、俺の首に手を回して、そのまま俺の頭をぐつと自分のその近くまで引き下げた。

「悟空の横取りなんて言わせない、おまえはおまえの、ソシルミの道歩んできた、だから、この世界がこれから辿る運命は……自然な、この世界の行く末だ」

「だからこそ、この星を——」

そう言おうとした時、プリカの左手が俺のほほに添えられ、顎を閉ざし、そのまま近づいた顔が、俺の唇を奪った。

「……………ツツツ!!」

突然受けた、しかも何度やっても慣れそうにないその感触に戸惑う俺に、プリカはいたずらっぽく言い放った。

「バーカ、悟空とオレは双子の兄弟だ！ ……なんてな、オレとあいつが近づいたんびにジロジロ見やがって」

「あ、あんな、プリカ……」

「……女はもちろん、男だって一番はおまえのものだ、オレのヒーローはおまえだよ」

そう言って、いつになくいい笑顔で笑うプリカの背後から、幾筋もの流れ星が広がる。

戦いの時が来たのだ。

↓つづく

第四十三話：転生地球人が宇宙との戦いを始めるまで

『ザザー……こちら南部方面軍、パイパイ島から来た武道家達の協力もあり現在戦線は安定、なれど予断を許さず——』

『東の都防衛隊だ、狙い通り敵は都よりも木初の宇宙基地を狙っている、このままなら、だが——』

『——でりやああつ!!! お、オツス！ 通信つてこれでいいんだよな？ だりや!! オレンジシティはまだ平気だけど、ずっと続いたらオラたち腹減っちゃうかも!!』

『こちら西の都、ヤムチャだ!! クリリンもいる！ こっちは余ゆ——うわっ！ だ、大丈夫だ、任せとけ!!』

『こちら——』
『こちらスピニツチ荒野、すでに戦闘中だ、戦況は——』

『オレたち二人で十分だ、うがああああ!!!』

ヘッドセットを首にかけてままのプリカが叫び、両手より光弾を射出した。

荒れた平原の上空、夕焼け空を覆う雲霞の如き敵兵、そして円盤と戦うためだ。

『スター・トライナリ・ケンタウリ!!!』

爆発、あるいは巨大な太鼓のような音と共に、光弾は数十メートルに膨れ上がり——「一気に空間を薙ぎ払った!!」

プリカを中心に回る2つの巨星。

三連星、そして、そうである隣星の名を冠したその技は、戦闘力1000は下らないフリーザ軍の兵士を焼き、円盤を砕く。

なんとも頼もしい姿だが、この活躍を羨む気はない、なぜなら——

「総員、やつを狙え!!」

「光線砲が通じないほどじゃない、撃て!! 撃て!!!」

衝撃波エネルギーを生み出し、突き刺さる敵の意思と動きを読み、俺は唱える。

「灘新陰流”レーザーすべり”」

その技の、容易に推測可能な効果はまさしく靦面、迫りくる光線、粒子線、エネルギーは直前でぐにやりとその軌道を歪めて荒野へと突き刺さってゆく。

原理は単純、衝撃波により生み出した空気の屈折で光線を曲げ、衝撃波そのものがビームを叩く、ただそれだけ。

だが、使いこなせるのは俺だけだ。

「そんな技ないだろ!!?」

「新開発だ」

——なぜなら、そうだ、二人で戦う時はいつだつてこうだった。前衛と後衛にはつきり分かれる戦い方をせずとも、プリカの持つ直情的な戦い方を活かすためには、その集団戦に向かぬ性質をカバーする俺が必要なのだ。

宇宙より飛来した大量のフリーザ軍は、概ね予想通りの地点へと降下し、地球への攻撃を開始した。

フリーザ軍が取った戦法は、大量の兵士と円盤による力押し。

戦法は単純なもの、未知の兵器とこれまでにない強力な敵兵に、しばらくは戸惑った。

だが、そういう相手との戦いは、俺も、全地球人も、慣れたものだ。

『こちらメンテナンスピン村、まだ戦闘はない、村人は魔族の襲来と勘違いして慌てている、気休めだが、襲撃前に逃しておけば多少はマシになるかもしれない』

『こちら王立防衛軍機械化部隊、北の都防衛のため、ツルマイツブリ山麓で待機中、こちらは勘違いどころか、用心棒まで雇ったらしい、影も形ないがな……まったく、ソシルミさんが何のために魔族の親玉と話を付けたと——』

ベジータが言った、『誇り』の意味は、まだわからない。

だが、それを掴めずとも、かつて父であれと願った存在に誓ったものは、俺の腹の中にある。

かつて見た世界への憧れ、師との絆、友との絆、世界中の戦士達との団結。

見知った仲間も、よく知らない武道家達も——多分、俺が把握

していないだけで、沢山の知り合いや、かつての強敵達が、どこかで戦っているのだろう。

「愉快だな、プリカ」

技を終えたプリカに向け、俺は、わざとぶつ切りに言葉を放つ、甘える。

「問題山積みだろ、サイヤ人じやなきや腹痛で倒れてる……それに、早く片付けて皆を助けに行きたい」

プリカの冷たい返答は、俺にだけは分かる完璧な回答だった。

……敵は総崩れ、息を整えたい程には疲れてはいないが、少し……プリカと話したい気分だ。

「奴等の武器、最初は面倒くさかったが慣れてきた、お前はどうか」
「過保護なカレシのせいでもちつとも覚えられないな、いや……それより、大丈夫か？」

「何の話だ」

「これは殺しだ、しかもあいつらはほとんどケダモノの魔族じゃない、人間だぞ」

俺は一瞬ドキリと……いや、鼓動が跳ね上がるというよりは、かすかに押さえつけられるような感触に……すでに満たされているのに気付いた。

悪党と戦って故郷と仲間達を守る時に、殺しをためらう程の不殺主義者になった覚えはない、が。

「こればかりは、ワクワクしないな」

「対等なら殺し合いでも、オレたちを残して死んでもワクワクするくせに」

「それでもワクワクするけど、死なないようにするさ」

ワクワクしてない俺なんて、誰一人望んじやいない。

なんて、伝えようとして口を開く前に、俺達は敵の動きに気づく。敵がまとまりを持って動いている、これは……。

「漏斗型の塊か、俺に通じる弾幕を作るためだろうな」

「……あれを消し飛ばすのはムリだぞ、それなりに幅があるし、撃つたら逃げる」

「だろうな、連中も考えられるじゃないか」

目の前の敵に対する“危機感”は未だにない。

あるのは、舞空術とは違う浮遊感、足元を焼く焦燥感。

地球を守る、変えた歴史を走り切る、そう誓った意思とは裏腹に、為せることは地球全土を襲う敵の何%かを焼くことだけという焦り。

この改変の影響とも何者かの悪意ともつかぬ歴史の変質を掴みきれぬことへの焦り。

戦士達への救援より、俺にとっては――

「ソシルミ、技、あるんだよな」

いつの間にか俺の顔を覗き込んでいたプリカが、しゃんとしろ、というように肩を叩く。

……そうだな、まずは、目の前の戦いだ。

「ある、しっかり用意してきた、お前はただ気を高めて、とびつきり小さくて強い気弾を作って、俺の前に軽く飛ばしてくればいい」

「結局オレのパワーか？」

あの悩みはもう克服しているんだろうな、そう釘を刺すように、プリカがいやらしく笑う。

「違う、対等な合体技だ、今度はただの制御装置なんかじゃないぞ」

「いいな、見せてくれ……っがああああ!! ああああ!!」

軽い口調と裏腹に、強い期待で目を輝かせたプリカは叫び、気を高めだす。

それと、敵の群れがざろりと動いてこちらに狙いを定めるのとは、全く同時だった。

動く敵集団の中、はやった小物からこちらへ銃砲を向け、放つてくる。

「俺の方に準備は要らない、お前はただ構えておいてくれ」

答えはない、その理由が、不安もないからだというのは、聞かずとも分かった。

俺はただひたすら、敵の攻撃を捌く、通じない攻撃は敵の苛立ちを誘い、更にその圧は高まってゆく。

全軍に近い攻撃が一方から迫りくるのをひたすら衝撃波で防ぎ

……生身も使う。

「ツツツツ!!!」

輝きを纏った手を焼くレーザーの苦痛を、ヨガの呼吸でかき消す。皮膚がいくら削れようと俺の技に乱れはない、師の教えの賜物は、俺のすべてを望んだ戦いに注ぎ込む力を与えてくれているのだ。

俺の手から輝く血液が散る度、プリカのエネルギーが僅かに乱れる。

「も、もう………っ!!!」

「まだ引きつける」

心配の色のエネルギーが、まるで浴びせかけられるように俺の背を包む。

だが、それはフリだ。

心配ばかりしているフリをしながら、この時間だけは、屈託なく喜んでくれている。

俺の――

「今だ」

「があ!!!」

――幾度とも知れぬ再起に、新たなる奇跡に!!!

「超アツツツツ!!!」

もはや音と比べるべくもない超高速で回転した俺が放つのは、物理的には単なる張り手。

だが、その先端には、宇宙最高の格闘技術が詰まっている。

狙いはもちろん、プリカのエネルギーだ。

拳を交わし、心を繋げ、体を重ね、エネルギー同士で、魂同士で結びついた俺達の『気』は、望まぬ限り互いを傷つけることはない。

プリカのエネルギー弾は、余すことなく伝えられた俺のパワーにより……。

「なっ……」

戦闘の、おそらく最精鋭であろうエネルギーの大きなフリーザ軍兵士の小さな声。

(研ぎ澄まされた感覚とはいえ、それが聞こえるほどに近かったの

だと、今更気付く)

それがあの一群が自ら立てた、最後の音だった。

「どうだ、これなら寄生プレイとは誰にも言わせんぞ」

「オレの気を使うのは慣れっこ、あとはいつもの衝撃波に、気力大移動に、ヘンな舞空術……オレがオレの気使うのよりよっぽど強いな、やっぱ」

プリカはどこか誇らしげにしつつ、自分の言葉に自分でむず痒くなったようで、ぎゅつと強くまばたきをした。

「お前の気はお前のものだ、あとヘンって言うな」

「じゃあゲロビもやめろ、乙女だぞ乙女」

お前は男とかジャージとか以前にそろそろ乙女という歳ではない。口に出したらまた蹴られそうなことを考えながら残る敵の影もないう夕焼け空を眺め——ている場合では、なさそうだ。

『西の都だ！　なんかでかい気がこっちに來てる！』

『こちらタンドール王国軍司令部、ピラフ司令だ、全世界のフリーザ軍が兵力を動かしている！　しかも、これまで待機していた精鋭まで』

ピラフは続けて、ほとんどすべての前線を読み上げる。

時を同じくして、俺の感覚も掴んでいた……ベジータと同等かそれ以上の莫大なエネルギーの塊が、各方面に差し向けられてゆくのを。もちろん、たった今フリーザ軍を殲滅したばかりのこの荒野にもまもなく現れる、……増援とともに！

「くそっ!!　みんなと合流して助けに行けそうだったのに……!」

「こっちに回る分、楽になったと思うしかない、……来るぞ、構えろ」
無神経な俺の言葉は、一瞬プリカの心に突き刺さるが、エネルギー弾に放った平手と同じく、プリカの心はその言葉をするりと受け入れた。

信頼感、というか、これは諦めか……まあ、いつものことだ。

「……人がため息ついてるのに、ドヤ顔しやがって」

「まあ、いいじゃないか」

迫りくる敵を前に、気色悪いにやけ面と、ジト目が交差した。

「ひいいいっ!!!」

「ム、ムリだああ!!」

恐慌状態で叫ぶ見慣れぬ人種、戦闘服と呼ばれるインナーとアーマーを着込んだ彼等フリーザ軍兵士は……。

俺達へと、まっすぐ突撃してきていた!!

「ムリなら引っ込んでいろ、降伏は受け入れるツツツ!!!」

「お、おれ……ぎゃっ!!」

俺の言葉に応じようとした兵士が、”前後の数人ごと”遠方からのビームに撃ち抜かれて消え去った。

怒りに揺れる俺の目に映る下手人は、兵士の群れの外、夕暮れ空に浮かぶ青紫のぶつぶつ、戦闘服、その顔にスカウターはない。

「裏切り者は殺される、当然だよなあ!!?」

遠くで、聞き覚えはある、しかし聞き慣れない声がかなりたてる。

俺の腕の一振りです兵士達は細切れに、プリカがエネルギーを振り回せば、チリになる。

それでも突撃は止まない、まるで俺達への恐れがないかのように突撃は続く、そのわけが、奴だ!

「に、逃げたって殺されるんだ!! や、やってやる!!」

「北の戦場はバケモノいなくてラクだって言うぜ、今からでも……」

「バカ! バレるに決まってる!!」

連中の厳しい規律……否、恐怖支配。

フリーザ軍は単なる匪賊の集まりではないが、まともな軍隊でもない。

外れれば味方に当たる射撃武器を使つての包囲戦、無実の味方を巻き込む情け容赦のない粛清……!

俺はフリーザによる支配のおぞましさに恐怖しつつ、フリーザ軍の内情に触れられたわずかな喜びを胸に、兵士たちへと語りかける。

「繰り返す、今すぐ戦場を離れて亡命申請を行うなら受け入れる!

粛清が怖いならば俺の後ろへゆけ!! ……指揮官のキュイ氏、貴方もだツツツ!!!」

「けっ、ベジータのやつを袋叩きで追っ払ったからって調子に乗りやがって、きさまらごときがフリーザ様に勝てるかよ!!」

声を張り上げるキュイ。

キュイ——フリーザ軍の兵士。

元の歴史では、もともとベジータと同格の戦士だったが、裏切り者となったベジータを抹殺する任務を受けたものの、地球の戦いで腕を上げていたベジータに逆に殺されてしまう、という役回りだった人物だ。

……フリーザ軍でもかなり上の立場に居て、しかもフリーザへの恨みもないであろうこいつにとって、フリーザを裏切る理由はない。

だが……。

「なあプリカ、お前のパワーで連中のスカウターは全部爆発したようだが、何故あいつらは平気な顔をしているんだ？」

「オレが知るか!! うっがああ!!」

戦闘力の増加を計測すると爆発するスカウター、信頼できる計器が故障したというのに恐れないのは何故だ？

そんな疑問を脳裏にめぐらしながらも、光線をすべて回避し、敵へと手刀を叩き込む俺。

気力を高めて光線を弾きながら、自らも幾筋ものエネルギービーム、エネルギー弾を放ち、叫ぶプリカ。

対照的な戦い方と同じく、纏う雰囲気も対照的だ。

プリカは間違いなく苛立っている、というか怒っている。

それはフリーザ軍への怒りであり……。

「さっさと片付けるぞ!! 早くしないと、まだまだフリーザ軍は全力じゃないのに……!!」

「今の連中の強みは数に任せた捨て身の戦術だ、なら、対処法は——」

「キュイとやりたいならそう言え！」

……予想以上に余裕を失っている。

吹っ切れたようで、プリカ自身もこの状況に思うところはあのだ。

いや、単純に仲間達を案じているだけなのかもしれない。

このまま素直に突撃すれば、プリカは援護する、キュイも多分プライドから応じるだろう。

だが、それじゃあいけない。

「そうだ、俺はキュイとやりたい、あいつと一対一で戦いたい」

「……なら、早く行けよ」

……………。

「俺は今でも、この戦いを楽しむ気である、地球を守る使命と、戦いの喜びは別だ」

「……………わかった」

プリカは、俺の要領を得ない言葉にぐっと足を上げた。

瞬間——衝撃!!?

「ぬおおおツツツ!!!」

蹴りだ。

ヤクザキックか、16門キックか、足の平で蹴られた俺は激しく吹き飛び——キュイの前でようやく止まった。

「はっ!? あ、あのサイヤ人、てめえの味方じゃねえのか!!」

「……そのはずだが、まあいいツツ!! 一対一と洒落込もうじゃねえか!!!」

俺は腕を刃牙の構えに、足を空中飛行に合わせて揃え、キュイに向けて突撃する。

「キエエエエツツツ!!!」

「……………このっ!!!」

拳による攻撃と迎撃が交差し、激しく入れ替わる。

周囲のフリーザ軍は割り込むどころか、援護もままならず呻くばかり。

だが、キュイは俺の奇襲ぎみの攻撃に完全に対応している!

敵も歴戦、流石はフリーザ軍のエリートか。

俺は望んだ喜びを感じ、大いに笑う。

「ベジータと同格というその実力、味わわせてもらおうツツ!!」

「ぬかしやがれサル以下があ!!!」

殴り合いから逃れ、飛び退くキュイ。

その狙いは「つ、エネルギー弾の連射による俺の抹殺だ!!」

「うががーっ!!!」

「——ツツツ!!!」

戦闘力18000の連続エネルギー弾!

数度見たならともかく、初見のそれは俺にも消し切ることは出来ない、衝撃波で壊し、輝く手で防ぎ、ひたすら耐え……………。

……………弾幕が途切れた!

「はあ……………はあ……………はーっはっはっは!! ちよつと腕が立つくらいで、サル以下が調子に乗りやがっ——がっ!!!」

煙の先の顎を、蹴りで撃ち抜く……………が。

「な、なにいい!!? 生きてやがるだとお!!」

「浅いかツツツ!!!」

「ふざけやがって!! エネルギーが駄目なら、素手でぶち殺してやる!!!」

らしくなってきた!!

怒りに滾るキュイの拳足は、先程を遥かに超え、その歴戦という他に見るところのない技術力に反して、戦闘力18000という数値が表す以上のパワーを発揮しつつある。

一方、この俺のパワー、身体構造は地球人の域を——半歩しか超えない。

そのもどかしさと、これからやる戦いへのワクワクをないまぜにして、俺は戦いながら笑う。

「妙な体さばきを……………! きさま、超能力者かつ!!!」

「武道家くらい宇宙にもいるだろツツツ!!!」

「てめえ含めて、全員口だけだがなっ!!!」

ならば試してみるか……………そう言おうとした瞬間、俺の背筋に走る悪寒!

単なるエネルギーではない、これは——

「ふっ、フリーザ様ばんざい!!!」

「わ、われらがタツブ星に栄光あれ!! サイヤ人に死を!!!」

後ろから俺に抱きつこうとする二人のフリーザ軍兵士!!

エネルギー量は少ないが、それらをバラバラに振りほどく一瞬は――

「もらったぜ!!!」

「ガ――」

キュイの一撃が俺にたどり着くのに、十分な時間だった!!

……意識は途切れることなく、だが、衝撃は一瞬だけ、現実への理解を送れさせた。

草の混じった土煙は、キュイの一撃を受けた俺がえぐった……キュイが、俺越しにえぐった大地だ。

遠くで、プリカが兵士達と戦っている、キュイが愉快そうにあざ笑っている。

俺は……。

「だ、大丈夫ですかソシルミさん!!」

声が聞こえた、聞き覚えのない、若い男の声だ。

「貴方は……」

「戦場を報告するために遣わされた部隊の者です、ですが、いてもたってもいられず……」

「なるほど」

確かに、自分達を守るはずの俺がこんなぎまみでは、不安になるのも仕方ないだろう。

なら、早く戦線に戻らなくては。

「離れていてください、巻き添えを食いますよ」

「待ってください! あんな威力で叩きつけられて……!!」

……認識がすれ違っている、か。

「俺は平気です」

「そんな、ベジータと同等ということは、計算上は今のあなたより

……」

「弱い」

「へ?」

土煙で見えないが、その兵士はたしかに顔をまぬけに歪めた。俺は土の味をいつそ楽しむように、ニイと口角を上げる。

「大猿の一撃より、弱い」

「大猿つて中の都に出た、あの……」

……自分達を守るための措置とはいえ、この情報格差は寂しい。

そうだ、俺が病の床で憧れ続けた男の一人が、傍らで俺を脅かし続けたひとが持っていた、最強の技。

それを俺が……意識しないなんてことが、できるわけがない。

土煙の隙間からキュイが見える、さて、そろそろ潮時か。

「もう行きます、土煙に紛れてお逃げください」

「あ、あのっ……!!」

兵士が俺を呼び止める、俺は捨て台詞なら飛びながら聞こう、と思つて一度力を込めたが、その真剣さに、足を止めた。

「あの……地球は……わたしたちは、本当に勝てるんでしょうか」

そうか、俺は頼られているのだ、地上最強の戦士の一角として、地球を救つてきた英雄として。

だから、こんなにこの人は、不安げな顔をしているんだ。

……ああ、乙戦士はそんなことに興味なかったが、俺には悪くない。

一瞬だけ、そんなワクワクで意識を塗り固めて……胸によぎる黒い

『影』、唯一明確な不確定要素を、良き戦いのために押し込めて、俺は微笑む。

「俺は奴に勝つ、仲間達も全員勝つ、あんたも勝つ、大丈夫だ——

——奇跡は起きる」

人には、満身創痍に見えるだろう。

偏袒右肩はあちこちが破れ、手を中心にあちこちの皮膚が焼け焦げ、裂傷の数も定かならぬ俺は、ゆつくりとキュイの眼前へと昇る。倒すためだ。

「へっ、やっぱり、地球人つてのはどれだけ鍛えてもムダな種族だったな」

「——テメエのパンチ、せつかく隙だらけの俺を殴ったつてのに、ナツパより弱いぜ、ほんとにベジータと同等だったのか？」

「こ、この!!」 いつまでも減らず口を叩きやがって!!」

侮辱のための挑発なんて、くだらないマネはしない。

俺が品性を売って買うのはケンカじゃない、戦いの楽しみと、さらなる強さだけだ。

「口だけかどうか、減らず口かどうか……次の一撃で分かる、来るといい、侵略者ツツツ!!」

「うるせえんだよゴミカスがーつ!!!」

キユイはついに怒り狂い、俺に向かって飛びかかる、だが、その動きからは正気は失われておらず、油断もない。

ならばどう戦うか——

「……………ツツツ」

——俺は大猿の拳に耐えた、だが、耐えられただけでは戦えない、あの拳に抗うにはどうすればいい。

あの拳を破るには。

まず手にとつたのは自らの肉体、強靱で頼もしく……だが、大猿の拳には耐えられない。

次に手にとつたのは心身に潜むエネルギー、……これも、足りない。

技術——目の前にあったのは、変身を最早行わぬ友の使う技、

界王拳。

……使いこなすには肉体の強度が足らぬ。

「くらえーつ!!!」

キユイの拳が迫る。

……何でも使う、俺の中にある全てを。

肉体、エネルギー、技術、鬼の貌、見様見真似の界王拳——俺

の中のものすべてを使う。

俺の中にあるものは、何一つ使わない。

全身全霊を込めて——

「絶^ぜイツツツ!!!」

「な——に……い……」

カウンターとして放たれた拳がキュイの腹部を貫通……否、消し飛ばした。

「キュ、キュイ様が、ま……まっふたつに……!!!」

メインの具材は築き上げた格闘技術。

次に、エネルギーの循環を威力に変える気力大移動。

そして、本来は体を崩壊へと導くであろう数倍の界王拳は、適切な位置と時間に絞って使うことにより技の具材へと変わる。

最後の隠し味……それは、そこまで極まった最高の技そのものが引きずり出した、俺の裡に潜む鬼の貌、それをもって、真の完成となす。

「……鬼面閃光拳」

俺は、自らが生み出した技の名を呼び、戦いを見守ってくれていた相棒に勝利を報告……しようとしたその時、その相棒、プリカが怯えるフリーザ軍をかきわけ、俺の隣に飛び込んできた。

「おまえらしい戦いだっただっただ」

「俺らしい戦いだっただぞツツツ!!!」

かつての戦いでもそうだった、プリカは、自分達で変えた未来の責任を取るため、ただ単に皆を、地球を守るために戦う。

だが、その中で、俺と同じ楽しみを感じてくれた、俺の楽しみ、俺の宿命を果たすために共に戦ってくれた。

今回も、そうだったのだ。

そんなプリカは、戦いへの出資者として、俺に質問があるようだ、俺は素直に耳を傾ける。

「……それで、『誇り』は見えたか？」

「まだ、分からない」

だが、喜びは大きい。

いつぶりだろうか、正面から、誰の力も頼らず強敵と戦い、打ち破ったのは……。

その喜びをほんの僅かでも分かち合おうと、俺はプリカを見る。

プリカは一瞬だけ笑みを浮かべ……恥ずかしげにそれを振り払うと、キツと敵を睨んだ。

「そうか、じゃあさっさと蹴散ら——」

『——こちら東の都!! 連中、宇宙基地がもぬけの殻だと気付いておかんむりだ!! 敵指揮官には傷一つつかない、このままじゃ……』

『ツルマイツブリ山麓、敵に有力な指揮官はいないが、こちらにも武道家がいらない、戦況は悪化する一方だ!!』

『オ、オラは平気だけんど、悟飯が疲れてきたみてえだ、休ませてやりてえが……駄目だ、軍隊の皆が死んじゃう……!!』

声、声、声。

通信機の向こうからは、それぞれの代表者の放つ『悲鳴のような声』だけではなく、完全なる悲鳴や断末魔までもが響く。

『助けに行かなくては』、プリカの肩が使命を感じてびくんと揺れるが、俺はそれに答えてやれない。

二人で守るこの戦場を見捨てれば後ろの市民はあっけなく蹂躪される。

——しかし、それよりも強く俺を留めるのは、今ここどうかつに動けば、『影』が何をしでかすか、何をもちたらずか分からないという恐怖。

そして、しかも。

じつとりと俺を包み込んでいた嫌な予感、影ではない、影とは思えぬ、全く違う形で実態を持ち、俺に襲いかかってくる。

「ソシルミ、早く倒すぞ、油断は禁物なんて言ってる場合じゃない、ちよつとでも早く——」

「——は、早く殲滅するぞ!! プリカッッッ!!」

「ソ、ソシルミ!!?」

巨大なエネルギーが、北の方角へと降ってゆく、サイボーグ軍人の戦う土地に。

その数は、五。

「奴等が来るッッッ!!」

↓つづく

第四十四話：転生地球人がその敵を見出すまで

ツルマイツブリ山麓の小さな町は、宇宙最悪の兵団の攻撃を受け、今まさに滅亡しようとしていた。

『住民の避難は——はい、概ね、ですが食料が何者かに——』

『食うもんなんかどうとでもなる!! さっさと——』

仲間達の通信を——無駄に——高音質な内蔵型通信機で聞きながら、兵士は敵を見据える。

敵は強大だ。

なにせ、パワーだけなら、十年前に世界を滅ぼしかけたピッコロ大魔王の数倍以上というのだから。

「へっへっへ、ポンコツが一体か、こりやあラクでいいが、手柄にはなんねえかなあ」

「……………」

最も突出したフリーザ軍兵士が放つその言葉を前に、男の頭脳は冷静に……しかし、『宇宙ではメジャーな煽りなのだろうか』などと、とぼけたことを考えていた。

とぼけた考えを反映するように、男の体はのゆつくりと、まっすぐ前に向かう。

「脳みそまで改造しちまって言葉も出ねえか!!」

ゆつくり、まっすぐ。

まっすぐ、……即ち、一切正中線をぶらさずに進む男に踊りかかった一人のフリーザ軍兵士は。

男がゆつくりと掲げた腕に貫かれ、その生命を終えた。

「……………」

「お、おい……別に早くも……」

男の右腕は、その手首ほどから生やした爪形の刃で一人の兵士を貫き、続けて、左手からも刃が飛び出す。

「なんだ!?! こ、こいつ——」

「——っっっ!!!」

左腕からも刃が飛び出し、男は敵群へ飛び出す。

戦闘力、パワー、スピード、尋常の戦場を支配するそれらにおいて、遙かに劣るその男を前に、フリーザ軍兵士達は翻弄され、切り裂かれ、命を絶たれてゆく。

格闘技……それも、この地球における極上の格闘技だけを専門とするマニアならば分かっただろう。

その流麗な動きは、『チャルク』というカラリパヤット使いによるカッターラ術のそれであった。

「……………」

男は黙して語らない、男は武道家ではなく軍人であるからだ。

男は息を上げない、男は人でなくサイボーグであるからだ。

サイボーグ軍人は、血まみれ、瓦礫まみれの周囲を見回し……否、各所のカメラで観測し、司令部へと報告する。

あちこちに映るのは、フリーザ軍の死体、現地兵士の死体、同僚の死体。

更に、戦いの爆炎と、時折空を裂く光線……未だに空を覆う敵、敵、敵。

うちにソシルミさんが来てくれたら。

サイボーグはそんな言葉を必死に飲み込み、声帯ではなく内蔵通信機に直接声を送信した。

『こちら——司令部へ報告します、——地区の戦線は押し返しました、しかし、内蔵型生命力測定器のデータによればわが方の劣勢はゆるがず、敵の測定器兼通信器、はい、スカウターが破損していることが唯一の……ですが、このままでは……はい、ノイズ？ 撤退……いえ、戦闘を続行します』

スカウター、宇宙よりもたらされた『生命力を測定する装置』は、なぜだか、本来の持ち主であるフリーザ軍からは失われ、地球人が僅かに複製していたものだけが動き、戦場を支えている。

そのおかげもあって、ツルマイツブリ山麓の戦線は、未確認の要因による追い風もあるが強力な武術家の助力がないとは思えないほどに安定していた。

(でも、今地球が攻められてるのもサイヤ人ベジータが宇宙船に置き去りにしていたっていうスカウターが原因だつて言うし……正直あれも納得はしてないけど、禍福はあざなえる縄の如しつてことなのかね)

電子的に加速された思考の中で僅かに物思いにふけたサイボーグは次に行くべきことを考える。

弾幕を形成し飛来するフリーザ軍を遠ざけんとしている通常部隊に加勢するべきか、地上のフリーザ軍を襲撃する格闘戦部隊に加勢すべきか、あるいはこのまま遊撃を続けるか――

(――くっ……！ 駄目か!! せめてもう少し巻き返してから迎えるつもりだったんだけど……)

そして、その者たちは、やはり遅れてやってきた。

紫の、角の男を先頭に、赤肌に銀髪の男、青の異形、黄色人種に似た大男、青い異形の小男。

ポッドから抜け出した彼等は、自分達が作ったクレーターを一息に飛び出し、手で作った望遠鏡をかざして町を眺め、朗らかな声を上げる。

「……なんだ、まだ制圧が済んでないじゃないか、せつかくの大規模作戦だというのに、一体何をやってるんだ?」

「隊長、しかもここってサイヤ人も武道家もいないって地域ですよ、スカウター壊れちゃったんで、わかりませんけど」

「うむむ……」

角の男が、おどけたように首をひねる。

『ヤバイ』と、サイボーグは残った生身で、否、機械ですら理解した。

「ま、他の任務は来てないし、ちよつとくらいゆっくり遊んでもよからう! じゃあみんな、やるぞ!!」

「「「はいっ!!」」」

この不真面目な男達の生命力は、ほとんどがベジータ以上。

そして、間違はなく――

「リクーム!!!」「バータ!!!」「ジース!!!」「グルド!!!」

「ギニュー!!!」

「「「みんな揃って」」」

——これまで出会ってきたどんな魔族より、異星人より、邪悪なのだ。

「ギニュー特戦隊ツツツ!!!」

「や、やっぱり来るのか……!」

ギニュー特戦隊!!

隊長のギニューを筆頭に、ベジータ以上の戦闘能力を誇る五人の精鋭戦士!!

強力なパワーに加え、隊長であるギニューと最も戦闘力の弱いグルドは、戦闘力差を無視するほどの超能力を抱えている!

フリーザ軍……いや、この宇宙において活動中の戦士の中では最強と言っていいその彼等の出現は、フリーザの本気と、地球の危機的な状況を端的に表していると言っているといいだろう!

「ど……どうする!」

「救援に——行くわけにはいかん、ここを死守しなくてはツツ!!!」

……死守、というほど俺達は辛い状況に追い込まれてはいない。

だが、理性によつてこの場に縛り付けられた心は、つい、そんな言葉を念じた。

その間にも、俺達の一挙一動がフリーザ軍兵士の命を断つてゆく、

……それでも、失われゆく命に払う敬意さえ霞む、焦燥感が。

「つがああああ!!! ごがあぐがあ!!!」

「プリカツツ!! 叫んだってどうにもならん!!」

「でも、力を入れれば、ちよつとは!!」

ちよつとはエネルギー弾が大きくなる、ちよつとは腕の振りが早くなる。

だが、そのためにこの長過ぎる戦いに使う体力を消耗するのでは意味がない。

どうすればいい、どうすれば、プリカを……そう思ったとき、腰に

差した小型通信機が音を立てた。

『……こちらツルマイツブリ山麓、フリ……軍の精鋭部隊と交戦中です、わが方……劣勢……』

「軍人さんツツ！」

「あのサイボーグの人かつ!!」

サイボーグの人、サイボーグ軍人。

ピッコロ大魔王による中の都侵攻によって大怪我を追った対魔族部隊の精鋭兵士であり、その怪我をカプセルコーポレーションの技術力で救われ、サイボーグの体を得てからは、武道ファン、そして対異星人戦線の重要人物として俺達と深く関わってきた男だ。

俺はその声がプリカの動揺を掻き立てないかと心配しながら、希望も持ちながら通信に応じる……だが、どこか様子がおかしい。

その声の背後には、戦場の音が響いているのだ。

普通なら、それは当然なのだが……。

「どうしたのですツツ!! 何故内蔵の通信機ではなく、普通の通信機を!？」

『……通信妨害が……しく……本来なら司令部に……です
が、やはり……ミさんにお伝え……』

「ありがとうございます、しかし、通信妨害なんて手段をフリーザ軍が使うとは」

『ええ、もっ……力押し of 軍隊かと……しかし、違和感は……』

確かに、フリーザ軍に擲手のイメージはない、だが、軍隊であるからには様々な科学技術を使うのが当然とは言えるだろう。

特に、今は自軍の通信装置が破壊されているのだ。

……しかし、サイボーグが言いたいのはそれだけではないらしい。

『違……は……ザ軍が……滅……本来な……ここ……た
え……』

「待ってくれ、通信が……!」

ひどいノイズの中、サイボーグが何かを言おうとしている!

この通信のついでということならば、もしかしたら単なる戦闘報告なのかもしれないが……。

俺はなぜだか、サイボーグへの義理や戦闘のための情報収集の意味以上に、サイボーグの語る言葉を聞きたい！

「オレに回せ、こちら側で調整する、防御頼む!!」

「応ツツツ!!」

作業のため足(舞空術)を止めるプリカを守るため、俺はエネルギーのセーブをとき、気合を入れた。

空気と衝撃波を用いた防御、そしてそれを転用した同士討ちで敵を仕留め、一歩も動かぬままに敵を仕留める技術も、最早慣れたものだ。

「プリカ、どうだ!？」

「い、いけそうだ……」

『……回復しましたか、こちら多……音質が……続けます……』

「頼む」

今度は守りに回るべく動き出したプリカが『スター・ブラック・バイナリー』で敵を掃討する中、俺はじつとサイボーグの話に耳を傾ける。

何かを感じるのだ。

俺が持つ幾多の能力、幾多の属性のうち、どれが何を感じているのかまでは分からない。

だが、何かがある。

『……敵が……フリーザ軍が、われわれの預かり知らぬ形で減つてい……です』

「フリーザ軍を倒すやつが居るのかツツツ!!？」

『生命力、熱源反応、ともに異常値は………ません、ですが……その可能………』

俺の感覚も、そんなやつは捉えていない。

だが、消えているというのなら、殺されているか、もっと高度な何かが起こっているはずだ。

そんな強大で、しかも得体の知れない存在を、俺は一つしか。

『……ミさん、ソシルミさん!! 大丈夫……ですか!!』

「あ、ああ……大丈夫です、ありがとうございます、対処については検討するつもりです」

『とにかく報告は……こちらも……線に戻……ご武——』

「——待ってくれ!!!」

出し抜けに、プリカが手持ちの通信機にあらん限りの、悲鳴にも似た大声を叩きつけた。

『……!!?』

「お……おい、そこから逃げろ!! スカウターがないなら捕まらない!! 散って逃げれば少しはマシだ! そのままだと全滅する!!!」

『プリ……さん……それは……出来ない相談、です』

ノイズまみれの通信の中、拒絶する声だけが、はつきりと響いたように感じた。

「撤退も戦略だ、あんたらじゃギニュー特戦隊には勝てない!!」

『わかって……も、実はおれ……ち……みんな、ここ……出身な……よ……』

ずっと前に覚え込んだこの星の軍事事情を、やっと思い出した。

サイボーグ軍人の原隊は、北の都周辺の出身なのだ。

「プリカ、止められないぞ」

泣き出しそうに歯を食いしばって、目を見開いたプリカが、すぐるように俺を見る。

あいつが尊敬している俺なら止められるだろう、そう言いたいのだろうが……。

違う、できっこない。

なぜなら、あいつが尊敬した俺は、命を賭して戦う俺なのだから。テレパシーでなくとも伝わる、アイコンタクトは一瞬、その一瞬でプリカはすべてを諦め、その失望をパワーに変えるように、巨大な『ウエスト・モーニング・サンシャイン』をいくつも作り出し、フリーザ軍へと投擲した。

「……がああ!!! ぐがああああ!!! どがああああ!!!」

「健闘を祈ります、どうかご無事で」

『ありが……す……』

通信は、ちようど断絶した。

プリカは未だに怒りと嘆きの中にあり、フリーザ軍兵士達を盛んに

消し去っている。

俺もまた、同じ感情は抱いている、だが俺は、その濁流よりも更に大きな流れ、何か根源的な直感によって突き動かされつつあった。

「地球人が地球を守る、北の人間が北を守る……そして、地球に受け入れられたサイヤ人もまた、地球を守るために宇宙人と戦う」

ならば、俺達は。

俺達は何のために、何と戦う？

すべての戦士がこの星を守るためにその戦意を滾らせているときに、俺達の役割はなんだ。

成さねばならぬことがあるはずだ、たとえそのために、さらなる痛みを支払おうとも、返さねばならぬ借りを増やしてでも。

迷彩と茶色のコート、背広、そして僧衣。

「バケブ山地の敵超戦士部隊、なおも前進!!」

「航空戦力はまだか!」

「それが、ラバーシユ回廊で高速円盤群に阻まれ、現在交戦中です!!」

「トニール空軍はどうした! ……全滅だと!!? あの間抜けどもめ、このままでは王都カンドウまでもが……!!」

いずれも並々ならぬ威厳を滾らせた男達が声を荒げ、あるいは静かに練り歩き、瞠目し、瞑目する。

ここは、タンドール宇宙センター……否。

タンドール王国軍臨時司令部。

「……ふう、チャパよ、北エリアの……件の精鋭部隊が向かった地域から、大規模かつ極めて多種の通信妨害が観測されておる、このままでは通信は全面的に不可能になるぞ……!!」

青い肌をした初老の男、ピラフは、全身から汗を流しながらガタガタとキーをタイプし、盛んにレバーやスイッチを動かし、時にはスパナを取り出して装置を開いてゆく。

「手を考えるほかあるまい……! わがタンドール王国軍もすでに

限界に近いが……」

同じく初老に差し掛かった色黒の、僧衣の男チャパ王はいまいましげに歪んだ顔のしわに冷や汗を伝わせしつつも、ピラフの後ろでじつと仁王立ちを決め込んでいる。

ピラフ大王とチャパ王が、静かに、冷静に、しかし何より強い危機感を持って話し合っていた。

「連中が北エリアに注力する理由……わしは思いつかんのだが、ピラフ、おまえはどうだ？」

「わたしも………ないな、せいぜい北の都があるくらいだが、同規模の都市はまだ4つもあるし、この戦争において地域の占領が大きな優位を生むとも思えん」

チャパ王はピラフが作った小さな『間』がわずかに気になったが、信頼する友が口に出さなかったことをわざわざ問いただそうとは思えなかった。

代わり口をついたのは、混迷を極めた戦場に沈み、激務に悩まされる心のなぐさめだ。

「……これが終われば、おまえも王者に返り咲くのだろうか？　ちようど全世界を眺めておるのだ、品定めせんとな」

「ああ、無事で済めばの話だがな、わたしと、タンドール王国と、シユラのところで戦つとる国民候補たちが……」

「だがもしわたしが死んだら、この国を頼む……ソシルミはあれで権威と恩義に弱い、せがめば王位を受け入れるだろう、やつを担げば……」

「やめんか!!　縁起でもない!!!　ただでさえここには道場のやつらがおらんというのに……!!」

ラパータ、チャルク、ケララ、パタラを筆頭とした門下でも有力な者はすべてタンドール王国や近隣国の防衛のために出動し、二軍とも呼ぶべき名もなき高弟たちもまたタンドール王国軍精鋭とともに戦いに出ている。

各地で続く戦いは、最新兵器の釣瓶撃ちを武道家による防衛と襲撃で支える単純な戦法を基本戦術とし、軍の体力と武道家の命をすり減

らしながらも小康状態に入っていた。

「ラパータ……あいつらめ、生き返れんというのに無茶をしおつて……ソシルミも、どうせ敵の大将とやると言うのだろう!!? 勝てるのか!? 数値で言えば、やつの全力の数十——」

その時、甲高いビーブ音が響いた。

チャパ王は一瞬首をかしげたが、ピラフはその音色を正確に記憶しており、対処に迷うことはない。

ボタンを押し、受話器を取る。

「——なんじゃ！ おまえたちの戦線は異常なく……何!!?」

「どうした、ピラフ」

「あれを出せだと!!? きさま、あれが虎の子だと分かって……」

「どうしたというのだ、ピラフ！」

チャパ王が問いかけるのと、電話の向こうの存在がチャパ王に替われと言うのは同時だったらしく、ピラフはさっと投げやりに受話器を突き出した。

「誰だ、ピラフが何やら騒いでおつたが……」

『師匠、私です』

「……ソシルミか、何の用だ」

『予備兵力のロボット兵団をこちらによこして欲しいのです』

柄にもなく、チャパ王は電話越しに目を見開いた。

ロボット兵団——かつて鹵獲・改造したメタリック軍曹やプリカと共同開発した『鉄人拳』シリーズなどを統合してさらなる改良、大量生産を施した独立戦闘部隊。

……タンドール王国が保有する最後にして最強の兵力だ。

「安定したその戦域への援軍ではなからう、理由はなんだ」

——チャパ王は、あっけなく、それを手放す算段を整え始めた。

「お、おいチャパ!!」

『……北エリア、ツルマイツブリ山麓の戦域では不可解な事象は多発しています、私はそれを調査したい』

「故に、予備戦力を補填としてよこせと……わがタンドール王国軍の有様は、把握しておるのだな？」

『感じております、危機的状況です』

むちやくちやだ、チャパ王が凡夫であれば、あるいはこの関係なくしてはそう叫びちらしてしまいそうな内容を、ソシルミは戦いの最中であつて息を乱さず、静かに、一言一言丁寧に語ってゆく。

チャパ王にとつてそれは、聞き覚えのある――

「――懐かしいな、弟子入りの時も、あの免許皆伝の試合を申し出る時も、おまえはそんな声だった」

『……師匠』

チャパ王は、ソシルミが連絡してきたと知った時、いつもの神がかりかと思つた。

あの強力な気は額面以上に危険な存在だ、救援に向かいたい、と。だが……ソシルミはこの戦いに挑む上で、そんな甘さは捨てているとも、信じていた。

故に、問う。

「聞かせる、今度のはただの神がかりではないな？ おまえにとつて、これはなんだ」

『――戦うべき敵との出会い、運命との対峙、宿命の得心』

チャパ王は、そつとほほえんだ。

「よろしい、ピラフ……すまないが出撃準備だ」

「チャパっ!!」

困惑を怒りにも似た驚愕へと変えたピラフが叫ぶのを手で制し、チャパ王は弟子に命令を下す。

「ソシルミ、兵団の到着までそこで戦え」

「お、おい!! この国の防衛はどうするつもりだ!!?」

その時通信機越しに、ソシルミとプリカは感じた。

穏やかに笑っていた己の師の口が、とてもよく見た形へと、歪むのを

「なに、戦線の一つくらい、わたしのチャクラムさばき次第でどうとでもなるさ」

『……感謝します、師匠、どうかご無事で』

「弟子の行き先を見るために戦う、自ら刃を振りたいから戦う、た

だそれだけ……きさまらと同じだ、なに、きさまらの子を見るまでは死なんさ」

チャパ王がそう言つて通信を終えたとき、すでにピラフはロボット兵団発進用の装置のスイッチを手元に用意していた。

「ほ……本当にいいんだな……？」

「すまない、わたしのワガママに答えてくれて」

「バカにするなよ、出会いこそ小心ゆえの情けないものだったが、わたしはきさまとの友情にひとかけらも貸し借りなど感じておらんわ!!」

「小難しいことを、ソシルミが感染つたと見える……いや、お互い様か……くく、はっはっは!!」

「ん？ は、は……はーっはっはっは!!」

王は笑い出し、大王がそれに続く。

転生地球人と転生TSサイヤ人が混沌との決戦地へ赴いたのは、その数十分後のことだった。

「ソシルミ!! あんな……鉄人拳やメタリックたちは、あの国の最後の砦なんだぞ!!」

「そうだ、だが、『奴』の暗躍をこれ以上見逃すわけにはいかん」

「ヤツっておまえ、そんなに、確信があるのか……!？」

ソシルミは舞空術の速度を変えぬままくりとプリカを向いて、じっと見つめた。

「ある」

「………わかった、やるならとことんだ、急ぐぞ」

プリカは納得のそぶりを見せ、目を瞑り………そして、開く。

そのまなざしを受けたソシルミは、たまらなくなつて、言葉が続ける。

「プリカ、大丈夫、師匠と皆とピラフは、立派に国を守ってくれるさ………俺にとって、あの道場は心の底から安心できる、そんな場所なんだ」

今度はソシルミが目を瞑る番だった。

険の裏に映るのは、青々と茂る草木、キューポラの付いた壮麗な建築物、熱気溢れる半地下の道場……。

「……もし死んでしまっても、きつとあの世で笑って俺に襲いかかる、そんな人達だからな」

ソシルミは優しく目を瞑ったまま、今ここに居ない、もしかしたらこの世にもいないかもしれない人々を想って笑う。

「オレにとってもあそこは大事な場所で、皆は大事な人たちだ、だから……」

「……ああ、勝つぞ」

二人は、あらゆる戦いで誓う必勝を、更に数倍にまで高める。

ツルマイツブリ山は、まだ遠い。

「くらえ必殺、ただのエネルギーボール!!」

「ひっひっひ!!」

「た、退……ひ……ぐ、ぐぎ!? ギャあーっ!!」

赤い肌、白い髪の毛の異星人が放つ凶弾から逃れようとした地球兵士が、不自然につるりと転げ、そのまま命を絶たれる。

「遮蔽……いや、とにかく視界から逃れるんだ!!」

「逃さないぜ……! リクーム………キック!!」

「せいがでるなあ、みんな!!」

地球人と見分けの付かぬパイナップルヘアの男の蹴りが兵士の体を粉微塵にする。

紫の男が、笑いながら戦士の刀をへし折り、そのまま頭を握りつぶした。

「スカウターがないとこざかしい不意打ちが面倒だ、なあリクーム」

「へっへ、オレは楽しいぜ、どーせこいつらの兵器なんてまともに効きやしないんだからよ」

「超能力も面白いくらいにかかりやがる、カスの相手もたまにはいいいな」

ツルマイツブリ山麓は地獄だ。

戦闘力数万の存在は、一般的な地球人が持てる最先端兵器の水準を

遥かに上回っている。

しかも、敵は残虐ながらも抜け目なく戦術を見抜いては破壊の限りを尽くす殺戮のエリートばかり。

「む、ムリだ、勝てない!! ここは引いて、武道家が来るのを——」

……まともに技の通じない敵を前に挑んでは殺される兵士達が挑み続ける理由は一つ。

「オレたちが逃げればこの街が、北の都が……オレたち全員のふるさとが!! 逃げた人たちが殺されるんだ!!」

「やるぞ!! 突撃だ! 何度でもだ!!」

たとえ、敵を楽しませる生贄となるだけだとしても。

奇跡を二度望むことなど出来ぬとしても。

戦い続けねば、守るべきものが失われる。

ただその一点のためだけに命を捨てる戦士達を前に、侵略者は笑う。

「はっはっは!! まともに宇宙にも出れねえやつらが、星の一箇所をなんとかなんとかかって、いつまでたっても飽きねえジョークだぜ!!」

「おーおー、またイキのいいのが来たぜバータ! ……ん? あいつどこ行つたんだ?」

「どーせどつかを飛び回ってるんだろうぜ、もう別の街をぶっ潰したりするかもな」

「隊長! こりゃあ、今日のデイナーはあいつのおごりですね!!」
「……………」

「隊長?」

だが、紫の男、ギニューだけは、小さく冷や汗を垂らす。

「あ、ああ……よかろう」

彼は、ほんの少しだが……『気』を操作できるタイプの人類だった。

↓つづく

第四十五話：転生地球人が戦隊で戦うまで

「教えてくれと言っているんだツツ!!」

「教えん!!」

「教えてくれ!! 貴様の實力と見識ならばわかるはずだツツ!!」

「教えんと言っている!! きさまこそ、あの『兵器』はなんだっ!! 隠したままは男らしくないぞ!!」

「教えるも何も俺はそれを知らんツツ!! 俺が知りたい、それは俺が聞いている『第三勢力』かもしれないのだツツ!!」

この俺、アエ・ソシルミと、フリーザ軍の隊長ギニューは互いに猛烈な剣幕をぶつけ合い、押し問答にふけていた。

「……ソシルミ、そろそろ、諦めたらどうだ?」

「隊長く、さっさとやつつけちゃいましょうよ」

「ソシルミさん! そんな連中に懇願することはありませんよ! 捕虜にして堂々と尋問すればいいんです!!」

プリカ、ジース、サイボーグまでもが半ば呆れた感じで遠巻きに俺達を見る……が、譲ることはできん。

何故ならばこの問答の争点である情報、奴が兵器と呼び、俺が第三勢力と呼ぶそれ。

かつて地球上で魔族やラディッツ、ベジータ戦における月に干渉したかもしれないその存在に関する情報は、この地球の、いや、多元宇宙の命運までもを左右するからだ。

目的のためには危険を顧みず敵と語らい、手を結び、情報を聞き出す覚悟が、俺にはあった。

……しかし俺も、俺の相棒も、紫の侵略者もその部下も。

殴り合いやエネルギーのぶつけ合い以上に苛烈な戦いの運命を知るよしもなかったのだ。

ソシルミとギニューの会話よりしばらく前のこと。

ギニューは口元に手をあて、普段の楽しげな、あるいは残虐な笑み

を一切思わせぬ顔で空を睨んでいた。

「いや……こんな……この星にそんな、しかし……」

眼はせわしなくぎよろぎよろとあたりを見回し、角はふらふらとアンテナのように大気をかき混ぜる。

部下の赤い男が、上司の焦りを感じ取って叫んだ。

「ど、どうしたんですギニュー隊長!!」

「黙れジース!! ……いや、すまん、だが……」

再びぶつぶつと言い出すギニューを見て、特戦隊の三人はおののき、三人だけでひそひそと話した。

「隊長、一体どうしちまったんだろう……」

「あの人はオレたちにもわかんねえ力を持つてるからな、何かを感じ取ったのかもしれないねえ」

「おいおいグルド、おまえにも分からないんだったら、もうお手上げじゃねえか」

スカウターを”原因不明の故障による爆発”で失い、索敵手段、そしてはぐれた味方との合流手段を失った特戦隊たちは、周囲を警戒しながらもわざとらしくおちやめに耳を貸し合う。

だが、それも長くは続かなかった。

彼らの隊長が、頭上に白熱灯を浮かべて面を上げ、喜色満面に叫んだからである!

「わかったぞ、兵器だ!! 兵器がある!! それも強力だが周囲に影響のない、小型高出力の機動兵器だ!!」

「「は?」」

部下たちは一斉に疑問符を浮かべ……。

(……機動兵器……ロボットのことか? 何を言っているんだあいつは……、わが軍にそんな優秀なロボットは、いや、第三勢力でもいると言いたいのか?)

聴力において只人を遙かに上回るサイボーグが、遠くでやはり、疑問符を浮かべていた。

ソシルミがちょうど、スピニツチ荒野を発った頃の出来事である。

荒野での戦いをロボット軍団にまかせ、俺達は一直線に北エリアのツルマイツブリ山麓へと向かう。

プリカは目的地を確認してから、仕切りに首を捻り、唸っていた。

「うーん、ツルマイツブリ……なんだっけ、聞いた気がするけど」

「Dr. ウイローの研究所の所在地だ」

「あー、そうか、あれか!! ロボのやつ!」

Dr. ウイロー。

科学技術だけで気候を変動させ、(おそらく)ベジータ級の戦闘力を持ったロボットを作る事ができるほどの高い技術力を持ったマッドサイエンティスト、映画『ドラゴンボールZ』この世で一番強いヤツ』のラスボスだ。

助手であるDr. コーチンとともに活動していたが、あまりのエゴイステイックな考えに世間からつまはじきにされ、その上、ツルマイツブリ山にある決して溶けぬと伝えられる氷の壁、名もそのまま『永久氷壁』に飲み込まれて消息を絶った。

その後、復活した彼が自らは機械の体に移植し、次のボディとして地球最強の男の体を求めて機械兵士や洗脳したピッコロに悟空を襲わせる……、というのが映画『ドラゴンボールZ』この世で一番強いヤツ』の筋であり、映画はDr. コーチンが永久氷壁を排除し、彼を復活させるところから始まる……のだが。

「……たしか、ドラゴンボールがないと、Dr. ウイローは氷から出られないはずだ」

「その通り、永久氷壁はサイヤ人襲来時のピッコロ程度の出力では破壊できんほどの強度を持つ、ドラゴンボールでなければ、解凍はできん」

「映画だと、たしか手下の博士がドラゴンボールを集めたんだよな、そのドラゴンボールはオレたちが抑えてるし、安心してことか?」

「ああ、それに永久氷壁の監視と補強は俺と神様とミスター・ポポで全力で行ったからな」

プリカが軽く疑問符を浮かべ、すぐに『ああ、そっか』と納得の表情に変えた。

Dr. ウイローの研究所が永久氷壁に飲み込まれたのは天罰……というのが地上の言い伝えだが、それは実際、危険すぎる科学力と野心を警戒した神による封印措置だったのだ。

俺まで封印の強化に加わったのは……念には念を、というやつである、ドラゴンボールは抑えていても、この世界の科学者は底が知れん。「じゃあ、Dr. ウイローってことはないのか……、なら一体……」
「わからん、あの地にはギニュー特戦隊の5人以外、強力なパワーはないはずだ」

顔をしかめた俺の額に汗が滲み、風に溶けてゆく。

あまりに不可解な状況だ、Dr. ウイローが復活したのであれば、エネルギーを感じさせずフリーザ軍兵士を屠るくらいのこととはできるが、やつにはそんなことをする理由はない、同じく天才科学者のDr. ゲロもそうだ。

一体何が起きている？

「何にしる急がなくては、サイボーグも死に、手がかりも逃すではせつかく戦場を預けた意味がないツツ……!!」

俺ははやる気持ちのままに速度を上げようとして、はるか後方を飛ぶ鳥が大きく姿勢を崩したのを感じ、緩める。

俺達は生身で安全に飛べる限界の高度にいるが、これ以上加速しては、ソニックブームその他の悪影響が地上を襲うだろう。

そんな心配を裏付けるように、差し掛かった荒野の地面が大きな土埃を上げた。

「これ以上は出せんかツツ……!!」

そんな焦りを見せた俺に、プリカはとんでもない提案をしてくる。

「ソシルミ、大気圏外に出るぞ!!」

しかし、そのとんでもなさに対して、理屈はわかりやすい……なにしろ、大気がない宇宙空間でなら、速度は出し放題になるからだ。
だが……。

「駄目だ、どれだけ体を強化しても、酸素が持たん!!」

「違うって、これがある!!」

プリカは少し呆れ気味のような感じでそつと近づいて、俺の手にカ

プセルを握らせてきた。

これは……！

「変身型のカプセルだ、わかるだろう？」

「……ああ、グレートサイヤマンと同じ、ホイホイカプセルの機能を利用した瞬間的に衣服を装備できる技術だな？」

「そうだ、さっさと使え」

俺は促されるままにカプセルを起動する、すると、またたく間に、俺の衣服とカプセルに保管されていた装備が入れ替わった。

「思い出した、大分前に採寸したやつかッ!!」

「やつと思ひ出したか……、行くぞソシルミ!!」

プリカもまた同じ装備をして、勇ましく氣勢を上げた。

装備とは、大気圏外脱出用の対環境スーツだ。

スーツを纏ったプリカの体は、頭はヘルメットに、体は戦闘服に近いらubber質によってしっぽまでご丁寧に包まれていた。

……身長、骨格、それに肉付き（この場合は筋肉だけではない、女性らしい脂肪もだ）、全てがあの日とは違う。

それを見る俺の心には、愛おしさと同時に……それ以上のある大きな感情が浮かぶ。

「なんだ、ジロジロ」

「……前の時は地上と体を気遣ったせいで、危うく鶴仙人と桃白白を殺しかけた、だが今は違う、それが嬉しいんだ」

たとえそれが即物的なものであれ、当たり前前の改善であれ、進歩がある。

それが嬉しい、あつてはならぬとはいえ、次につながる進歩がある、俺達は進歩できる。

「さあ行こう、謎を解き明かし、俺達の仲間を救うために!!」

「おう、ソシルミ!!」

俺達は進路を斜め上方へと切り替え、空が見えた。

高高度の空、味気なく言えば濃紺……だが今の感想を言えば、宇宙の黒が滲む空だ。

いつか本当に行きたい場所だが、今はただ、この星を守るために。

サイボーグ軍人にとって、恐ろしく強大な戦力を前にしながら密かに情報を収集する行動は、生身時代からのお家芸だ。

今回の戦いでは当初頼られる大戦力側であった彼だったが、この『降格』にも腐ることなく物陰に潜み続けていた。

彼が見つめる空では、4つの影が北国の空にゆっくりと浮かび、ひそひそと大声で会話している。

「いいかつ、まんべんなくやるんだ！ 隙間を残せば敵は必ずそこにひそんでしまうからな!!」

「しかし隊長、こんなことであぶり出せるんでしょうか……?」

「ロボットだろーがなんだろーが、地球の兵器なら地球人を守ろうとするはずだぜ!! 隊長の言うことに間違いはねーよ!!」

「ひっひっひ、何にしろ、こういうのはオレの大得意だぜ!」

大声での密談という奇つ怪な行為を続けるギニュー特戦隊は、浮かび上がったことによつて必然的に集中砲火を受けているが……全く意に介さない。

それどころか、グルドはその砲撃、銃撃に手をかざし、それらをすべてピタリと止めた。

銃弾、砲弾、ミサイル、光線、そのすべてだ。

その瞬間、サイボーグの掠れた動物的直感が、その肉体を失った日のことを唐突に思い出す。

「伏せ——いや、隠れる!! 遮蔽を……違う、建物か、地下に逃げろんだ!!」

自身が隠れていたことすら忘れ、付近の兵士たちに避難を求めるサイボーグ、その頃には彼の理性にも何が起こるかは明白だった。

そして……特戦隊は、空高く掲げられた彼らの矢玉を見て、コメデイチツクに、不満げにつぶやく。

「こんだだけか? もうちよつとできるだろ」

「ん、もうちよい追加するかな!」

簡単な事務仕事でもやっているかのようなやり取りとともに、瓦礫や地球人の兵器をことなげに持ち上げていくグルド。

その言葉を聞いて不気味さにおびえているのはサイボーグだけだったが、ここまで来れば何が起きているかは誰の目にも明らかである。

敵超能力兵はこの大量の質量とエネルギーを叩きつけるつもりなのだ！

サイボーグは事態の把握に努めながらも、仲間の兵士たちを必死に逃がそうとする。

「来るぞ、早く！ 早くしろ!!!」

彼の助言を受けた者を中心に、兵士は顔をひきつらせ全力で建物や戦車の影へと隠れてゆく……が、手遅れだった。

グルドと三人が嘲りの笑みを浮かべた直後、浮遊した物体とエネルギーは一瞬静止する。

その瞬間だけ、全ての戦闘音が止み……地球人兵士たちの絶叫だけが戦場に響いていた。

「回避!! 退——」

「きええええい!!!」

超音速で戦場を飛び回る残骸とエネルギーの暴風がグルドの視界内にとどまった全ての兵士、兵器を破壊してゆく。

一方……残る三人は、地上の様子を監視していた。

ギニューは全身全霊で、他の二人は懐疑的な姿勢のまま、なおざりに、だが。

「……動き、ありませんね」

「どうすんだよ隊長!」

「待て、われわれの意図を察して隠れているのかもしれない……」

地上を包み込んだ嵐は、地球人、宇宙人、建造物を区別せず薙ぎ払う。

それを見た特戦隊員たちは……何も意に介していない、殺すのは当然、破壊するのも当然、フリーザ軍兵士を巻き込んでいることにすら、一切後ろめたさはない。

せいぜい『お小言を言われるかな、でも、弱いやつらが悪いんだぜ』という程度。

嵐が収まり静かになった戦場の中、嵐をなんとか乗り切ったサイボーグは脅威など伴わぬその事も無げな態度を前に、この戦いにおいて幾度目かの戦慄を覚えた。

（フリーザ軍にはいくつかの精鋭部隊がいて、とんでもないやつらだとは聞いていたけど……まさかあんな連中だったなんて……!!）

サイボーグは一人の軍人として強い恐怖と憤り、異質感を特戦隊に覚える。

侵略者として虐殺を行いながら、この余裕溢れる態度、殺しに一切の躊躇を見せず、人殺しを人殺しとして味わうわけですらなく、ただ子供のようにうきうきと破壊行為を楽しむ姿勢！

自分たちをヒーローかなにかと思っているかのような意味不明なポージングといい、名乗りといい、あれが侵略者の決定的な力と脅威を示すための行いなら、満点と言うほかは――

「見つけたぞ、サイボーグ!!」

「はっ……!!」

一瞬思考にふけたサイボーグを、紫の男、ギニュー隊長が見咎めた。

と、サイボーグが認識したとき、既にギニューはサイボーグの目の前にいる。

「きさま……何にしろ情報を知っていそうだな、さて……」

「どうします？ サイボーグなら拷問つてのも難しいでしょうが」

「なに、こういう劣った星の軍人にはよく効く方法がある」

（一体こいつは何を言っているんだ？ オレが何を知っているんだ？ まさか、オレがフリーザ軍兵士が消え続ける原因だと思ってるのか？）

混乱に包まれるサイボーグの頭脳。

だが、それは長くは続かなかった。

ギニューはサイボーグの目の前に立ったまま、左拳を水平に掲げたのだ。

そして力を込めて手のひらを開けば……もう、サイボーグにも何が起きるか明らかだった。

「ま、さ、か……」

「はーっはっはっは!! そのまさかだ、どうだ、きさまが吐かねば——」

ギニューは広げた手のひらに、気弾を作り上げ……それは、またたく間に膨れ上がり始めた。

すぐに手のひら、胴、足を超え、アスファルトとコンクリートを削りながら膨らむ気弾の持つエネルギーは、サイボーグの持つスカウターの計測能力を上回り、更に上昇してゆく。

「……こんな……!!」

「——ふん、これでも吐かんか、しょうがないやつだなあ」

ギニューは、心底呆れた顔と声——まるで、わがままな遊び友達に向けるかのようなそれで——サイボーグをちらりと見て。

それから、その同胞たちを、自らの同輩もろとも抹殺するべく、巨大なエネルギー弾を……ごく軽く、ぽんと押し出した。

「やめろーっ!!」

サイボーグは跳ね上がる心臓も、思わず息を吐き出す肺もないことも忘れて叫び、止める手段もない気弾へと駆け出す……。

……ことすらできず、肌色の大男に腕を引つ張り込まれ、尻もちをついた。

「あ、ああ……」

砲弾どころか、RPGにも劣るゆつくりとした速度で向かう気弾は、何かに衝突すれば即座に爆発し、町の半分を消滅させるだろう。

武道ファンとしての知識と経験が、それを直感させたことで、サイボーグの絶望は更に深まる。

同胞であり、戦友であり、機械の体に変わった自分を受け入れ、部隊名にまで取り入れてくれた友たちが、今。

「く……!! わ、わたしは何も——」

「ま、いいんだいいんだ! どーせおまえたちは皆殺しだし、こんなちんけな町の一つや二つ、フリーザ様も要らんからな!!」

「へっへっへ、さっすが隊長!!」

気弾はのろのろと飛んで、壊れかけたビルの一つへ激突する。

瞬間、炸裂した閃光が――

「ヂイイエエエツツツツ!!!」

――炸裂した閃光そのものが、直前に滑り込んだ存在によって全て上空へと弾き飛ばされた。

驚愕するギニュー特戦隊とサイボーグ、だが、ただただ啞然とする特戦隊に対し、サイボーグは心のどこかで事態を理解していた。

「!!?!? な、なんだと!!!」

「隊長のパワーボールを……」

「おい、爆発したあとでぶっ飛ばさなかったか!!?」

「見間違いだろ!!」

滑り込んだ存在、男は、エネルギーによってえぐられた地面から覗く埋設管に両足を揃え、不敵に四人の敵、そして一人の戦友を見上げる。

サイボーグはたまらず叫んだ。

「……………ソシルミさん!!!」

「作戦目的は救援ではないが、流星に見過ぐすこともできんからな」突き放すような言葉が示すのは、戦友としての一線を引いた姿勢。そう、彼の目的はこの星を幾度も危機に陥れた影を倒すこと。

そのために、彼は自ら破壊した円盤が降り注ぐ町で、にこりと笑って敵に歩み寄る。

「さあギニュー隊長、話をしよう、議題は……この戦場で何が起きているか、つてとところでどうかな」

「ハア…………ハア…………」

「ふう…………ふう…………」

大声を張り合った俺とギニューは、長い押し問答に疲れつつも、次なる言い争いに揃えて息を整える。

「な、なあソシルミ…………もうよそう、素直に戦った方がマシだって」

「あいつの言う通りですよ隊長！　ここは正々堂々、男らしく雌雄を決しましょう！　あっち女居ますけど!!」

プリカと、ギニューを除く三人の特戦隊員たちが口々に俺を止める。

(ギニュー特戦隊は五人だが、一人はこの街の別の場所にエネルギーを感じる)
ギーを感じる)

俺は飛び込んだ状況やエネルギーが放つ感情、その他諸々の要因から、ギニューが『何か』を既に掴んでいると直感し、聞き出そうとしたのだが……。

俺が戦場に潜む『第三勢力』について聞けば、奴は『兵器』について聞き返してくる。

それらがどうやら同じものだというのは分かって……あいつも手練だ、兵器という考えにたどり着いた材料などは、頑なに口に出さないのだ。

停戦に関する提案も同じ、まったくの押し問答……。

そして、俺達を中心に渦巻く気まずさ、脱力感！

……というか、いい加減恥ずかしくなってきた。

(プリカ、ギニューは何か気付いている、それは確かなんだ)

(わかったけど、あれはもう意地になってるし、そもそもギニューは忠誠心があついんだ、情報漏らしたりするわけないだろ……それに)

(……それに?)

(オレもいい加減はずかしいぞ、ソシルミ)
皆まで言うな……。

その情報を聞き出すことすらできれば、問題への対処は容易になる上、共闘に持ち込めれば和平の緒すらかめるのだ。

……が、もう、潮時らしい。

「もはや、戦うしかないのかツツ!」

「ソシルミさん、やっと戦う気になってくれたんですね!!」

サイボーグまで言うか!

——加速のために飛び出した宇宙空間は、俺に新たな技のヒントを与えた。

大気をより高度に操作し、飛行の速度とキレを格段に向上させるその技を使った俺は、スーツを解除しながら戦場に飛び込み、街を救っ

たのだ。

そこまでは、よかった。

ギニューは俺を忌々しげに睨んで、当然のように物騒な台詞を吐く。

「ちっ……兵器の情報はおいしいが、殺すしかないらしいな」

「こちらも……フリーザ軍兵士を殺している何者かを排除したいと言っているのに聞かんとは、文字通り話にならん」

情報を聞き出し、あるいは同盟を結ぶことができれば殺し合うことはいはずの相手。

それも、協力的な肉体とパワーを持っている有望な戦士であり、……正直に言えば、正体の分からない影よりも彼らの方がずっと俺にとって『仲間』な気がしていたのだ

わかりあえないのは、残念でならない。

……と、回想していると、それを讀んだのか、何らかのチャンネルから思考が漏れたのか、プリカがすごく既視感のある視線を向けてきた。

「……おまえが結構天然ボケだつての、忘れてたよ」

「皆まで言うな」

少し凹む。

が、凹んでいる場合ではない。

ギニューはいきり立ち、今にも戦闘を開始する気だ。

「ふん、余計な手間を取った分、すぐに仕留めてやる、行くぞおまえたち!!」

「はっ!!!」

(プリカ、ここは俺に任せて貰おうか)

(どうする気だ?)

俺はプリカの問いへの答えもまともに出さぬまま、自らのエネルギーを練り上げる。

……今からやるのは、なるべく、取りたくはなかった手だ。

だが、やらねばならない、奴らから情報を引き出せないのならば、もはやこうするほかない。

そのために、俺はゆつくりとギニュー達に歩み寄った。

「お相手しよう、ギニュー特戦隊……我ら、『白亜戦隊ギル』が!!」

「なに、戦隊だと!!」

「ソシルミ?」

ギニュー達はわざとらしくのけぞって驚き、プリカはジト目で声を低く俺をにらみ、俺は胸を張ってギニュー達を指差す。

「ソシルミさん、一体何を? はくあ……?」

「わがギニュー特戦隊のマネをしようというのか!!?」

「我らは古代より存在する戦士、貴様らこそ新参者と知れ」

「おい、ソシルミ、なんでスーパーヒーロータイム始めようとしてるんだ」

完全に事態についてこれない二人を恥ずかしさごと振り切って、俺はゆつくりと足に力を込める。

そして、頭の毛を数本雀り取り……。

——爆音とともにコンクリートが砕け散り、土煙と家庭用ガスタンクの破裂による爆煙が周囲を包む。

「むっ!!? 目くらましか、姑息な手を……!!」

「我ら、大白亜より来たりし、星の守護りまもりてなり!!」

「ナニっ!!?」

「我ら、神の意によって滅び、星のため、人の願いによって蘇らん!!!」

3つの声が叫ぶと、そのおたけびに呼応するかのように起きた爆風が一挙に戦場の煙を押し流し始める。

未だ残った煙に包まれてそこに在るのは、声と同じ3つの影!

まず飛び出したのは、今までギニュー達に捕らえられていた男の声を発する中肉中背と言った影。

全身を紫のヘルメットとスーツに包んだそれは、両腕を翼のごとく広げ、次に、片腕片足をそれぞれ上下に構えた!!

「疾き刃の翼、プテラ!!」

次に出たのは、小柄な女の声、それが更に体を低く低く構え、両腕

と頭を揃えて突き出す、それは、その矮躯に反し巨大肉食獣の角のようで……。

「重き力の角、トリケラ!!!」

最後に大きく体を揺さぶりながらまろび出た大男は、斜めに構えた両腕を引き絞る音を幻聴するほどに大きく、力強く広げ、大顎と為した。

「鋭き技の牙、ティラノ!!!」

「地球人が変身しただと!!?!」

「い、いや、あれは衣装を変えたただけだ！ どうやったのかはわからんが……!!」

驚く特戦隊員たちを意に介さず、三人は三者三様のポーズを取ったまま位置取りと向きを合わせ、続けて声を上げた！

「「我ら、白亜戦隊ギル、大白亜の怒りに触れた愚か者よ、化石も残らず消え去るべし!!!」」

「く……！ なんという強敵だ!! どうします隊長!!」

ジースが焦りのあまりギニユーを見ると、彼もまた冷や汗を流していた。

「まさかこんな星で、ここまでイカしたファイティングポーズを取る者たちがいるとは……!!」

「われわれもファイティングポーズを……」

「駄目だ!! 不完全なスペシャルファイティングポーズで対抗できるはずがない!」

ギニユー特戦隊の要はスペシャルファイティングポーズ、それに高いプライドを持つからこそ、一人を失ったままのファイティングポーズを敵に見せることはできないのだ。

焦ったグルドが問う。

「対抗する手段はないんです!?!」

「二つだけ……ある!」

忌々しげに歯を食いしばったギニユーの決断は重く……しかし、明確だった。

「たたんでしまえ!! こうなれば実力行使あるのみ!!!」

「うおお!!」

「よっしやああ!!」

「けえええ!!」

かくして、4人と3人、ギニュー特戦隊と白亜戦隊ギルの戦いが幕を開けたのだった!

「ソシルミ……なにあれ……」

「あれは一体……」

隣で飛ぶプリカと、俺の抱えたサイボーグが眉を潜め、口々に困惑を顕にする。

……………。

「素で引くんじゃあないツツ!! ……ハア……ハア……!」

「いや、時間稼ぎするのはわかってたけど、なあ……」

プリカの言う通り、あいつらを相手にするには時間も余力も足りない。

情報を聞き出せないなら、撤退が現実的だった。

「ええと、あれは強烈なキャラクター性に従っている敵に対して、同様のやり方に従う素振りを見せることで時間稼ぎの精度を上げる試みなのでしょうか、どういう手段で分身したのかまではわかりかねますが……」

「丁寧な解説ありがとうございます!! 全くその通りです!!」

もう若干恥ずかしいが、解説といこう。

今回俺が行ったことはシンプル……ではない、かなり複雑だ。

まず、足に蓄積した衝撃波エネルギーと物理的な踏み込みで地面を破壊しつつガス管を爆発させる。

次に、その炸裂した爆風に乗じて、サイボーグを救出。

そして……。

「えっと……あれは、四身の拳なんですか?」

「その通りですが、オリジナルとは異なり……ふう……まず、生成手段から……」

「毛をむしってたっけ……毛……分身……あ!!」

その瞬間、プリカがはつとした顔になってから若干ニヤつき、困惑しているのはサイボーグの人だけになった。

確かにこれは、俺達にしかわからないことだな。

「どういうことですか?」

「多分ソシルミは、毛という自分の体の一部を核にして気の分身を作ったんだ、気を吹き込む手段は多分……息じゃないか?」

そう、俺がやったのは『孫悟空』……元の歴史においてカカロットよりはるかに先にそう呼ばれた石猿のそれを参考とした分身術だ。

毛を使い、息吹によってエネルギーを吹き込んで作った分身は、同じ息吹を用いる『スーパーゴーストカミカゼアタック』より頑丈で、四身の拳ほどハデに弱体化することもないが……。

「大丈夫か? やつらとやりあえる分身を作って変身までさせるなんて、気を……」

「………界王拳のちよつとした応用だ、前借りってやつだよ、多少……疲れはしたがな」

俺がそう言うと、プリカとサイボーグは俺の顔を覗き込み、自らの顔を心配げに歪めた。

これが俺以外の戦士なら、エネルギーの搾りすぎで活動困難になるところだが……俺は範馬でヨガの達人だ。

それを信じて、よろけそうになる飛行を整える。

「ちよつとには見えませんが、どうしてそんな戦術を……」

「また、戦争がイヤになったか、ソシルミ」

「……ッッ……!!」

サイボーグとプリカの指摘を前に、俺は息を飲む。

プリカの言う通りかもしれない、俺が特戦隊を撒くためだけにこんな大掛かりな技を使ったのは、本当に受けるダメージと時間を惜しんでのことなのか?

まさか、重要な危機に関しての情報を聞き出すというのも名目だけで、よく知る歴史のキャラクター、優秀な戦士を前にした時の『殺したくない』という感情のままに語りかけ、アホらしい対話をただただ

楽しんでいただけ……だとしたら。

「謎の存在への対策を取るにしても、奴らの脅威を排除し、やられた兵士達の仇を取る方が優先すべき——」

「——違います、ソシルミさんっ!!!」

サイボーグが俺の言葉を遮って、周りには聞こえぬ大ききさで……しかし、しつかりと叫んだ。

「あなたは、望むがままに戦う人だ……そうであるべきです、それがわたしたちの憧れたあなたという武道家で、戦士として支持したあなたなのですから」

「……軍人さん」

俺はサイボーグの視線に、呼びかけだけで返す、普段はプリカとだけ行かう静かなコミュニケーションが、ここでも成立した。

そうだ、俺は……。

「負けたなソシルミ、……さあ、次はどうする？ 時間稼ぎするからには、策もあるんだろ？」

プリカが急かすようにまくしたてた言葉に、俺は笑みをもって返す。

「お前こそ、この距離ならジャミング源の特定くらいできるんじゃないか？」

今度はプリカが笑みを返し、通信機を突きつけてきた。

「当然だ、こんなこともあるのかと、このマシンには考えうる限りの観測装置を積み込んであるんだ」

「……ジャミングなんて仕掛けたのが失敗だったと、ヒントを与えただけだと、思い知らせてやろう」

作戦目標はジャミング源、目的は兎にも角にも『奴』の目的をくじくこと、それを通じて、できればヒントを得ること、そして、この町を救うことだ。

三人は意思を一つにすると、それから、抱えて飛び続けるのはまずいので、サイボーグを再び戦いに戻すことにした。

崩壊した小さなビルの影でサイボーグを降ろし、プリカの誘導のもと更に突き進むんでいると、遠くから俺の分身達がギニュー特戦隊と

戦う音と、楽しげな笑い声が響いてくる。

「分身共め、楽しみやがって」

「……オレたちもオレたちの仕事を楽しまう、だけどソシルミちよつと困ったぞ、ジャミング源の場所が搾りきれない!」

プリカの声を聞いた俺が装置を覗き込むと……数種の波形と数値が表示されているだけだ。

(各データの意味は分からなくてもないが、示してる内容はさっぱりである)

プリカはゆつくりと速度を下げ、装置を睨んだまま立ち尽くした。

「ぶれる範囲はでかいのか?」

「……正方形に4区画くらい、しかも、ジャミング源そのものが一つじゃないみたいだ、多分……三つか」

俺が眉をひそめると、プリカも冷や汗を流した。

分身では、風潰しにするだけの時間は稼げない。

消し飛ばせば余計な被害が出るし、一つ破壊しただけで特戦隊にバレル。

「どうするプリカ、ここはどうやら防衛軍の制圧下のようなだが……」

「……そうだ! ソシルミ!!」

プリカの提案により、俺達はすぐさま生き残りの防衛軍が詰めた陣地へと向う。

陣に入ると、軍人達は突然の闖入者である俺達にむしろ歓迎の色を示してくれた。

「まさかあのソシルミ氏にお会いできるとは!!」

「機械ヤローの言ってた通り、ナマで見るとすげえ筋肉だぜ!」

……あのサイボーグ軍人の影響もあるようだった。

「——皆さん、我々は現在、この戦場を包むジャミングについて調査、対処を行っています、つきましては……」

「了解!!!」

「何でも言うてください、やってみせます!! ……これで本部と連絡が取れる!!!」

暑苦しいまでのやる気、 人気!!

これが地球の救世主が背負うべき重圧という奴なのか、多数の武道家に分散されていてこれとは、サタンはよくシラフで楽しんでいたものだ。

プリカなどは目を回しかけている。

「人酔いも久しぶりだな、とにかく指示を出せ、俺達は急がねばならん！」

「あ、ああ……、まず——」

軍人達は戦場に散り、俺達もまたジャミング源の搜索へと向かう。

「……ジャミング源の発見が、ジャミングを行つた者の特定に繋がればいいのだが」

飛び回ってジャミング源を探す俺の言葉に反応したのは、前提条件を共有したプリカではなく、近くの軍人の一人だった。

俺は彼の視線に何かを感じ、焦りを振り切つて彼と情報を共有することにした。

「そ、それって、誰かフリーザ軍以外のやつがジャミングをしてるってことですか？」

「ほぼ間違いないと思ってる、誰かは分からんが……」

「まさか、Dr. ウイロー!!!」

「知ってるのか、だが奴らは既に氷の中のはずだろう？」

俺が問うと、軍人は忌々しげな顔をして答えた。

「オレは生まれてませんが、地元ですし。噂じゃ手下のコーチンの目撃情報もあるとか……」

軍人は続けて、同じく狂科学者であったDr. ゲロの研究所もこの地域だと教えてくれた。

確かに、その二人の科学者とその勢力は滅んだとは言えないが、奴等にこんな行動をする理由はないはずだ。

そう思った俺が可能性を振り切つて会話を終えて搜索に戻ろうとすると、プリカが後ろから飛んできて俺の腕を掴んだ。

「ソシルミ!! ジャミング装置が見つかったぞ!!!」

「おおツツツ!!!」

プリカに誘導された先は路地裏で、その奥の朽ちた金網の向こう

に、妙に新しげな装置が鎮座していた。

「こいつで間違いあるまい」

「ヤツの仕様だ、ヤツは高い科学力まで持っていたんだ」
ついにプリカも、影の存在を認めた

「何が仕込まれてるのか分かったもんじやない、これは破壊する、いか？」

「うん、そうしてくれ」

俺は衝撃波エネルギーで遠距離から装置をチリにするが……手応えからすると、こいつの硬さは相当なものだ、歩兵の火器では破れるかどうか。

次の瞬間、プリカはハツとした様子で通信装置を見る。

「ソシルミ!! ちよつとだけど、通信が戻ってる!」

「何ツツ!!」

『……ますか、こ……パイヤ……! 戦線は安……、バクテリ
……ギラン選手の活躍がめぎ……、特に……リアン選手の……あ
……私語で……すいま……』

これは……!

天下一武道会の島、パイヤ島から放たれる無線通信だ。

状況の混乱からか内容がおかしいが、どうやらバクテリアンはこの局面で大活躍している!

「……ソシルミ、キモい笑顔が帰ってきたな」

「プリカも、かわいい笑顔が帰ってきたじやないか」

蹴られた。

通信が通ったのはどうやら一つ装置を破壊されてジャミングが一時的に不安定になったからでしかなく、すぐに戻ってしまったが……これで光明は確実になったというわけだ。

ジャミング装置の数は三つ、今一つ壊して……次の一つも、すぐに見つけた。

「よし、今度はオレがやる」

プリカがエネルギーを叩きつけ破壊すると、同時に光と熱が吹き出し

爆発!!

煙が引くと、吹き飛んだマンホールから光が流れ込んできた。

しかし……こんなトラップを仕込んでくるとは……!!

『……ンジンテイ防衛隊です、孫親子……程、ピンクと青……太った……敵將軍を撃………た、ピッコ……参戦もあり、敵軍は全滅間……わが軍は陣地の転換準備……行って……』

……そうか、悟飯は戦い続けているのか。

俺は数日前、ベジータの遺言を聞いた翌日のことを思い出す。

『ぼく、みなさんといっしょに戦うことにしましたんです!! 地球のみんなが死んじゃうかもしれないって時に、じっとしてられませんか!!』

——結局、孫悟飯という少年はサイヤ人の末裔で、とびっきりの正義漢なのだ。

俺やプリカを含めた皆も、今からでもやめにしていいと繰り返し説得したが、悟飯の意思は揺るがなかった。

「でも、地球の戦士がこんなだからこそ……、悟飯も戦いを選んでくれた、オレはそう思う」

「……そうかもな」

俺達は胸に抱いた覚悟と喜びと苦痛とともに、次の装置のある領域へと向かおうとして……決定的な瞬間がやってきた。

「ソシルミ!!」

「分かってる、分身がやられた!!」

分身の全滅は同時に『白亜戦隊ギル』というふざけたペテンの正体が露見したことも意味していた。

四人の怒り狂ったエネルギーが都市を駆け巡り、各軍兵士を殺しまくっているのを感じる!!

まずい、このままでは……装置を他の軍人達が壊せる保証もない、それどころか犠牲すら出る可能性もあるというのに!!

「来るぞツツ!!」

その言葉通り追ってくる彼らから逃げるため、俺とプリカは全速力を出す、俺達でなければあの装置は破壊できないのだ。

が……追いつかれた!

超高速で飛び込んでくる連中のうち、ギニューは情報を聞き出したであろうフリーザ軍兵士の首まで持っている!!

「……久しぶりだな、ギニュー特戦隊!!」

「くつくつく、面白いものを見せて貰ったよ、だが、今度はきみ自身と遊びたいな!!」

その言葉と共にギニューは首を投げ捨て、四人で一斉に手を前に出し、構えを取った。

同じ軍隊に所属する仲間に対してこの仕打ちとは……なんて連中だ!

俺のそんな嫌悪と裏腹に、連中の戦闘意思は最早爆発寸前!!

避けるか……いや、防ぐしかない!!

思い思いの雄叫びによって発射された攻撃を前に、俺はプリカの盾となる。

「ソシルミッ!!」

「お前だけでも離脱できれば、装置の破壊が——」

次の瞬間、飛び込んでくる、エネルギー弾、瓦礫、ビーム!!

俺は両手にそれぞれ輝きと衝撃波を備え、歪め、砕き、弾く!!!

だが、防ぎきれない、プリカの離脱時間を稼ぐにもこれでは……。

「シイイイイツツツ!!!」

「戦闘力で劣るくせに、なかなか鋭い技を使う……だが、いつまで持つかな!!?」

ギニューの言う通り、俺の強度と技術力では攻撃を完全には無力化できないし、未だ分身技から回復せぬ体力は更に消耗が続いていた。

俺はたまらず言い返す、それは減らず口ではなく……。

「ギニューツツ!! 今からでも俺と話せ、このエリアは正体不明のジャミングに覆われていた、それは俺達も知り得ぬ何者かによるものなのだ!!!」

「問答無用!!」

強まる攻勢を前に、ふさがりかけていた傷が破れ、火傷が更に焼けていく。

いくつもの区画を越えて駆け抜ける中、ふと、プリカの懐の装置が

声を上げた。

聞いたことのない壮年男性の声だ。

『こちら、守備隊の……そうだな、名もなき整備士だ!! 例のマシンは分解したぞソシルミさん、プリカさん!! さあ、思う存分ぶちかましてくれ!!』

「な……出来たのか!!? 被害もなしに!!」

通信はすぐに向こうから切られてしまい、プリカの言葉に答えるものは誰も居なかった。

だが、雄弁と物語るのは、通信機だ!

『……北エリア通信回復です! 聞こえますか、こちら東の都防衛隊! 鶴仙流門弟の参戦により戦況は安定、繰り返し、戦況は安定!!』

『こちらメンタンピン村、天津飯だ、うちの門弟が各地で戦闘を開始した、これから楽になるから安心して構えている、鶴仙流は地球最強を越え、宇宙最強だと見せてやる!!』

『シユラだ、魔族魔族と恐れられながら戦闘中、なに、慣れっこだ、気にするな』

……ジャミングの解除によって各地から届く声は、地球の優勢を示していた。

俺とプリカは必死に攻撃を防ぎながらもそれに喜びを感じ、気のみなぎらせ——

『タンドール王国軍カンドウ絶対防衛戦特別大将、チャルクだ、師しよ……国王陛下と食客のピラフ氏の参戦により戦線は安定している、……ソシルミ!! 安心していいぞ!!』

——唐突に飛び込んできた俺個人への呼びかけに面食らって、俺は目を見開く。

そうか、タンドール王国は無事なのか。

「チャルク先輩、師匠、ピラフ………ツツ……」

「泣くなソシルミ! もう装置が大丈夫なら、応戦するぞ!!」

「泣いてなど」

泣いてなどいない、そう言おうとして、汗が飛び去り乾いた頬を撫

でる雫を感じ、何も言えなくなった。

だが、特戦隊はそんな俺の感傷を許しはしない!!

緑の小さな男、グルドが俺の涙を嘲り、エネルギーを高める!

「泣かせるねえ、へへ、へへ、そんなにお仲間が好きなら……」

グルドが、経路に居た防衛軍兵士を超能力で掴む。

まさか。

「ほれっ!!」

「クツツツ!!!」

俺は投げつけられた兵士の速度を殺してキャッチし……次の瞬間には、彼の重要臓器がいくつかねじ切られて死んでいるのを理解した。

この戦闘中に死体を抱えている余裕はない、だが、投げ捨てるなんてことをはできない——

「ほれほれほれほれっ!!!」

小さな音を立てて、俺の頭と顔の筋骨が引き締まり、歯が欠けかねないほどに食いしばられた。

俺は投げつけられる兵士の死体を無視し、地面に衝撃波を叩きこむ。

土煙を全身に浴びてギニュー特戦隊は止まり、ジースがわめいた。

「げーっふ!! げふ! げふ!! くそっ! またこれか、姑息な手

を……」

「ふん、今度はどんな術を仕掛けてくる気だ?」

「どんなうまい小技でも、パワーがなくなっちゃね!!」

「へっへっへ、見つけ次第ぶっ殺し」

グルドの声が止み、それと時を同じくして土煙が消え始める。

「お、おいグルド、どうし……し、死んでやがる!!」

「なにっ!!」

外道は喉と頭、胴体にそれぞれ一直線の、十数センチの切り傷を作って死んでいた。

手段は簡単、術で作りに出したチャクラムだ。

俺はハデな運動をしたわけでもないのに息を荒くし、汗を流して、今しがた作り上げた死体を睨む。

「ハア……ハア……ツツ!!」

「ソシルミ……」

「プリカ……昔、お前がやられたとき、俺はこんなことをしたな……あの時は殺さなかったけど、今は殺す、プリカ……いいだろ?」

見ず知らずでも戦友だった、守るべき地球人の一人だった軍人の死が、前世から知る異星の超戦士への想いを、武道家としての好奇心を遥かに上回ったのだ。

殺した悲しみよりも、殺された怒りの方が、既に遥かに大きい。

でもそれすらも、俺が悔やむべきことではないのかもしれない、ギニュー特戦隊は殺し合いを平然とやってのけて、恨みつこなしな奴らだ。

俺は最初から、戦うべきだったのか……そうすれば、少なくとも今の犠牲はなかった。

これは、俺が俺であることに執着した結果だ。

「おまえのいいところは、そうやってなんでも考え込んじゃうところだよ、戦いと世界が大好きな地球人だ」

「……ありがとう」

俺が感謝を告げると同時に、プリカは特戦隊へと向き直り、顔をしかめ冷酷な声を上げた。

「これでご自慢のポーズもできないか、でもすぐに五人そろってできるようになるよ……あの世でだけど」

「ぐぬ……ふん! 殺されるなら所詮ふさわしくなかったということだ、ポーズは新しく練り直すとするさ、きさまらを殺した後でな!!」

俺は、あえて冷酷な台詞を吐いて見せたプリカに心の中で再びの感謝を告げ、ギニュー達との戦いに集中する。

「こんな手は二度と通用せん、行くぞ、ジース、リクーム!!」

「はい!!」

「……やるぞプリカ」

「ああ」

二組の戦士は、戦いのゴングを待つてじつとにらみ合い――

『――こちら総司令部!!　こちら総司令部!!　複数の地域で新たな敵兵力を観測した!!』

「ツツツツ!!?」

敵戦力だと、上空の反応はもうない、後はフリーザを残すのみであつたはず――

『敵に生命力反応なし、繰り返す、敵に生命力反応なし!!!』

「き、機械なのか!？」

「機械……いや、まさか……そんなことはツツツ!!!」

『全軍は奇襲攻撃に警――』

音が途切れた、否、装置が破壊されたのだ!

下手人は……ギニュー!!

「ここまで熱心に誘つておいて、今更よそを見ることもあるまい、オレたちだけで決着をつけようじゃないか」

「へっへっへ、そうだぜ、お二人さん……」

「――ツツツツ!!!」

二人と三人は、こうして再び向かい合う。

戦いを恐れる心は既になく、しかし……仲間を憂う心をそのままに。

「さあ、やろうか……ギニュー特戦隊ツツツ!!!」

↓つづく

第四十六話：転生地球人が『戦い』と向き合うまで

気を持たない謎の敵——もしかすると、この歴史を翻弄し続けた何者かの手先かもしれないそれ——が全地球に迫る中、俺とプリカはギニュー特戦隊との戦いを強いられていた。

目の前にいるのは、ジースとリクーム、そして隊長のギニュー。

つまり、すでに殺害したグルドと、離れた場所にいるバータを除いた三人が俺達の敵だ。

「ハアツツツ!!!」

「があ!!!」

並んで飛び出した俺とプリカの纏うエネルギーは数倍の差があり——しかし、同時に敵とぶつかる。

手を輝かせ、顔を厳しく食いしばった俺はギニューに向けてまっすぐ、『スター・モーニング・マルチプル』をいくつも展開した、絶叫のままの表情のプリカはジースとリクームを巻き込む軌道。

どちらともなく無意識のままに決めた分担で、俺達は戦闘を開始した。

まずは小手調べ、とばかりに俺は輝く手をそのまま拳にして、ギニューと相對する!!

「……地球人の方が先か、分身に技量は見せてもらったが、パワーが100%だろうとオレさまにはかなわんぞ!!」

「分身は所詮分身だ……見せてやろう!!!」

俺とギニューの拳がぶつかり合い、激しい衝撃波が周囲を襲う。

プリカはスター・モーニング・マルチプルのエネルギー弾によって二人を牽制しつつ、肉弾で攻撃を重ねていくスタイルを取って……優勢に立ち回っていた。

一方の俺は——やはり、優勢だ!

「キエエエツツツ!!」

「な、なんだこの拳の鋭さは——」

ギニューは俺の体捌きと、輝いたままの手が次々と形を変える変幻自在の拳術を前に困惑している。

それもそのはず、こいつの体験した『俺の拳』と、今の、本当の俺の拳は違うのだ。

「フルスペックでない身体で使える程度の技術を、俺の本領と思っ
てもらってはなッツ!!!」

「くっ……なるほど、そういうことか!!」

前世で有名だったレース漫画になぞらえて言うなら、『一万一千回
転まできっちり回せ』と言ったところか。

……俺達武道家は、エネルギーをいくら絞っていても本人の持つ素
の能力まで下がったりはしないし、速度まで下がったりしない。

(エネルギーと全能力がリンクしているなら、元の歴史でも悟空が
得意としていたような、要所でだけパワーを上げる戦い方はできな
い、下げた瞬間相手の動きに追いつけなくなって終わりである)

だが、技術や体捌きはそうではない、毛分身の元ネタであり、同じ
くエネルギー量の小さい分身を作る四身の拳、その本来の使い手であ
る天津飯はそこもなんとかなると思っていたようだが、やはり、技術
と心身は切っても切り離せない関係にあるのだ。

ギニユーは予想外の苦戦に歯噛みしながらも、楽しげに口角を上げ
た。

「ふん、プレッシャーから察するに戦闘力は一万程度、だが急激なパ
ワーのアップダウンと綿密なやりくりで実際の数値の数倍……しか
も、それではきかないほどの隠し玉を秘めているな?」

「流星は宇宙最強の軍隊の更に精鋭部隊か、そんじよそこらの突然
変異とは話が違う」

敵と愉快に語りながら戦う、というのはベジータ以来でしかないは
ずだが、随分久々に感じる。

ギニユーも楽しそうだが……俺の心は踊らない。

「ぎさまごそ、武道家じゃマシな方……だっ!!!」

言葉と共に勢いを増した拳が俺を襲う!

その膂力、その技のキレはまさしく宇宙の帝王が頼みとするにふさ
わしいもので……だからこそ。

だからこそ、技をかけるにふさわしい。

俺は、体に僅かでも威力が通れば絶命は免れぬ拳をスウエーする肩と顎で捉え、重力加速度と組み合わせた高速回転で背後下方へと押し流す!!

「なっ!!?」

「た、たいちよお!!!」

（行くぞ、プリカ!!!）

（お、おう!!?）

俺は思念のみでプリカに合図を行い、一瞬のうちに離脱を開始する。

……相手をしているヒマはない、この戦闘さえ仕組まれているかもしれないのだ。

投げ技の勢いをままに、輝かせた手でえぐったアスファルトはプリカを除く二人を的確に叩き、土煙を纏わせながら数十メートル先のビルへと叩きつけた。

「ソシルミ……」

「相手してるヒマはない」

小さなつぶやきをもって俺に問いかけるプリカに、俺は同じく短い答えを返した。

全世界に現れたエネルギーの感じられない敵がロボット兵器ならば、『奴』の差し向けた、あるいは奴に利用された何者かの手勢である可能性がある。

手がかりを掴まねば、そして、襲撃そのものに対処せねばならない。

俺は――

――エネルギー弾が来る!!

「ムウツツツ!!」

「きさま、ソシルミ!!」

「……ギニュー」

立て直しが早すぎる、さすが手練だ。

ギニューは怒りを滾らせ俺を睨む、奴は何に怒っている？

一瞬でも出し抜かれたことか、小細工そのものにか、あるいは……。

「きさま、オレさまと戦う気がないのか!!?」

「俺はこの星のために戦う義務を負っている、それに、貴様を憎んでもいない」

「きさまの事情など関係ないわっ!! オレはきさまと戦おうとしているんだ、その部下たちも同じだ!!」

「……………ツツ」

純粹。

「そ、そうだ、隊長の言う通りだぞきさまらっ!!」

「おうよ!! かかってこねえか!!」

純粹だ。

「……………貴様ら、本当に俺と戦いたいようだな」

「そう言っているだろう、足止めとでも思ったか?」

「いや……………」

ああ。

邪悪極まりないギニューの意思が、この瞬間……………純粹なる『戦い』への望み、戦闘本能のきらめきを俺に見せた。

同時に俺は俺自身を顧みさせられる、今の俺に純粹さはかけらもなく、目的であるはずの闘争手段を手段としてしか考えていない。

(ソシルミ)

念話を用いていないはずのプリカの心が、俺の脳裏を叩く。

プリカが、それほどまでに強く俺の名を念じたのならば。

そのとき、俺の答えはもう決まっている。

頬を釣り上げ、目尻を下げ、満身の力を滾らせ。

腕を前に、手を縦にそろえてゆっくりと合わせよう。

「よろしくお願ひします」

礼を返されることを望むことは出来ぬ、ならば望むまい。

俺は地面を叩き、そのエネルギーを破壊ではなくすべて自らの加速に利用してギニューの鼻っ面へと輝く蹴撃をお見舞いする。

その勢いで靴が破れ、ギニューの頬をえぐったのは素足だった。

「なんて早いスウエーだ」

「くっ……………くくく!! ようやくやる気になったようだ……………な!!!」

傷をものともせず俺の足を掴むギニュー……だが、掴むなどという手段を俺に使ったのは失敗だ。

俺はしなやかな関節と精妙な舞空術を駆使し、ギニューの掴んだ足を上へと引き上げる。

「う、うおおっ!!?」

体に触れ、あまつさえ拘束さえする。

接触によるエネルギー情報、身体情報の読みやすさに加え、何をするかまで教えてくれるのでは、俺がどう裁こうとそれは技ではなく据物斬りに等しい。

俺は地面に付いたままの足を振り抜き……ギニューをかすめて飛んだ足の勢いは、そのままクロローの形で強烈に輝いた手へと移動する!!

「抉^ケエアツツツ!!」

「ぬん!!」

だが、ギニューもさるもの、クロローの手のひらに掌底を叩きつけ、俺の技を完全に防いだ!

双方の衣が焼け、皮膚が裂け、色の違う血が空中で混ざり合う!!

「最低限の戦闘力があれば、武道家の技術とはこうも厄介なものか!!」

「俺も燃えてきたぞギニュー、ベジータ以外にこんなに興奮できる宇宙人がいるなんてなツツツ!!」

俺とギニューが戦うすぐ側では、プリカ、そしてバータとリクームもまた、激戦を繰り広げている。

「がっ!! ぐおっ!! がああああ!!」

「ちよこまかとしてくれちゃって、……ぎゃ!!」

「リクーム! な、なんてパワーだ!!」

二人の放つエネルギーを自らのエネルギーで受け止め、コンビネーションを体躯の小ささとヨガによって培った自由な動きで躲し、あふれる膂力でカウンターを加えていく。

プリカの顔は真剣そのものだが……笑みのニュアンスが入っているのも、俺には分かった。

サイヤ人の本能を色濃く持ったプリカとはいえ、地球の命運を、俺達の宿命をかけた戦いで笑う理由は、一つ。

「いいもんだな、ギニュー……戦いたいという望みに答えてくれる敵というのは」

「ああ、われわれ特戦隊についてこれる相手がいるとは思わなかった」

互いの牙をむき出しにした深い笑いから、殺意のエネルギーが放たれる瞬間！

俺はこれこそが、俺が愛してきた悪なる敵との戦いと確信した!!

「行くぞ、ギニューツツ!!」

「いつまで粘れるかな、ソシルミっ!!」

——俺達は示し合わせたかのように接近し、純粹なる近接戦闘を開始する。

騙し、スカし、ごまかし、敵意と殺意をぶつけ合い、殺し合いながらも……向き合い続けることだけは裏切らない。

純粹なエネルギー量で言えば圧倒的な差がある戦いを前に、肉は痛み、骨はきしみ、皮はひきつる。

だが、この戦いにおいて俺は……優勢を保っていた。

「キィィアツツ!!」

「くっ……、なぜだ、なぜ動きが……!!」

俺の優位性は、まさしくギニューの格闘能力が達人級で、わずかに自他のエネルギーを感知・操作するすべてを身につけていることにある。

武道を持った種族など稀な宇宙での戦いにおいて、エネルギーを感じる技術は意識、無意識的にギニューを支えていたのだろう。

「戦闘力の集中と探知、武道家としての体術技能……そこまではわかる、だがなぜここまで……!!」

「なに、一人の天才が最高を得て20年鍛え、最高の敵を得て20年戦った、それだけさ」

「ぐぐ……!!」

目の前で歯噛みするギニューが戦闘のプロならば、俺は格闘のプ

口、同じ土俵に上がれば俺が有利になる。

だが、格闘戦能力で勝っていることだけが、俺の優勢の理由ではない。

戦いのさなかにあって、俺の技術は再び一つの爛熟期を迎えていた。

鍛え続けてきた技術が、単なる小手先ややりくりを超えてゆく。

エネルギーの強弱を単なる目安と言い切れる領域へと高まってゆく。

「これでもフリーザには遠いかもしれんが、奴が相手でも今なら、楽しむことくらいはできそうだ」

「きさまごときがフリーザさまに敵うと思うか!!」

「やってみなければなッツ!!」

俺達がこれまでにならないほど強くぶつかりあった瞬間、かすかな機械音が戦場をかすめる。

戦場の喧騒の中では聞き逃しかねないほど小さな音だが……しかし、俺とギニューは同時に耳をひくつかせた。

そして次の瞬間、ギニューの目が激しく動き、続けて戦場に絶叫が響く!!

「フォーメーション237!! 目標、サイボーグ!!!」

「イエッサー!!」

「オッケー!!」

ギニューの視線の先にいたのはサイボーグ軍人、そして、三人の動きはまさしく、彼を目標にしたもの。

プリカに圧倒されていた二人が即座に命令に応じたことへの驚きと同時に、別れたはずの仲間がこの場にいることへの困惑と、守らねばならないという単純な使命感と、また別の強い情動が俺を包む。

だが、俺はその思いを抑え込み、サイボーグを守ることへと意識を傾けた。

「プリカッツ!! 止めるぞ!!!」

「あ、ああ!!」

俺の声に応じたプリカの前に、エネルギーを滾らせたジースが迫

り、叫んだ!

「そうは問屋が卸さねえ!!」

スタミナ度外視、両手に渾身のエネルギーを持ったジースを前に、プリカは自らの防御を強いられる。

そこから離れた建物の上には、サイボーグを向いたまま大口にエネルギーを集中させつつあるリクーム……。

そして、ギニューはすでにサイボーグへとエネルギー弾を乱射し始めている。

推測される目的は一つ……俺を誘い出し、諸共消し去ること!!
だとしたら……。

「随分と舐められたもんだ」

苛立ちの漏れる声でそう小さく呟いた俺のもとに、小さなエネルギー弾が飛来する。

差出人はもちろん、プリカだ。

プリカの理解に感謝しつつ、俺はそのエネルギーを加速材料にして全速力でサイボーグ——否、ギニューの放ったエネルギー弾へと向かった。

俺は虚空に自らの進むべき軌跡を描き……残像拳に近い高速移動で全ての弾を弾き返す!!

「ツアツツツツ!!」

「は!!!」

驚くギニューだが、俺にとってはすでにこの程度、驚くほどのことではない。

これほど長く打ち合った相手の、それも単純なエネルギー弾程度であれば、何百であろうと捌くのは容易だ。

ギニューはあべこべにエネルギー弾の対処に迫られることになった、俺はそのうめき声を尻目に、大気を利用した方向転換でリクームへと進路を変える。

「んごっ……!! ……リクームイレイザーカノン!!!」

「構わず放つかツツ!!」

俺は手刀にした右手の手首を左手で掴んで諸共輝かせ、それを先頭

にリクームの名も知らぬ技へと突っ込む。

一般人がこの瞬間を見たのであれば、接触の瞬間に飛び散ったビームの衝撃を前にまばたきをするに違いない。

そして、次に開いた目には――

「あ、あが……ぼ……べ……」

――俺の腕に口から延髄までを貫かれ、倒れゆくリクームだけが映ったことだろう。

終わりだ。

「リ、リクームつ!!」

「まさか……リクームのパワーが……」

「小技使いには対処しきれぬエネルギーで対抗すればいい……か、遅れてるな、宇宙の戦闘は」

武道家……いや、この俺を前にしては正反対だ。

でかい技ほど捌きやすい。

奴らは奸計を働かせたが、破ってしまえばむしろ与し易い、どうでもいい技だけがそこに残った。

「戦闘のプロらしく正面から戦えば……よかったものを」

「ソシルミ……」

プリカが声に出して俺を呼ぶ。

否、思わず俺の名を呟いたのだろう。

相変わらず俺は、随分感情が表に出やすい男らしい。

――そうだ、俺が強烈に味わった感情……それは、悲しみだ。

元の歴史ではついぞ放たれなかった『リクーム・ウルトラ・ファイティング……』その技名の続きを聞いたかった、技を見たかった、浴びたかった。

このふぎけた男と正面から殴り合ってみたかった、ふぎけた技を交わしあってみたかった。

こいつは残虐な敵で、侵略者で、もしかしたら希望なんてなかったのかもしれない、それでも殺した瞬間、俺の胸にはどす黒いものが飛び込んできた。

「リクーム……!!　そして、ギニュー……ジース……!!」

だが、死と同じくらい、惜しむべきものがある。
どうして正面から戦わなかった、どうしてこんな小細工を弄した。
これは性根なのか、後天的に獲得したものなのか、悪の気の持ち主
というものはこういうものなのか？

そんな俺の葛藤、もしくはは感傷を諫めるように、たった今守ったばかりのサイボーグ軍人が俺とプリカに向けて発光信号を送る。

『フリーザグン ノ ロボットヘイキ センセカイ ヲ コウゲキ
チユウ ワガカタ フリ』

俺は手を他に見えぬよう輝かせ、返信した。

『テキノ ショウタイ ハ カクジツ カ セントウ ニ サンカ
スルベキカ』

『カクジツ ナリ カプセルコーポレーション サクセン リツア
ンチユウ コノママ セントウ ヲ ゾツコウサレタシ』

『リョウカイ ケントウ ヲ イノル』

サイボーグはちらりと俺の歪んだ顔を見ると……俺の全身にべつたりと降り掛かった血糊と組織片を前に目を見開き、少しだけ自らの顔を曇らせた。

その後サイボーグはすぐに顔を精悍な軍人のそれに戻し、一礼して物陰へ隠れ新たな敵へと向かっていったが……。

俺の心には、さらなる苦痛が残った。

……俺は歪んだ顔を更に自嘲へと歪める。

そうか、ロボットは……フリーザ軍の兵器か。

隠れた敵がいると分かったからと焦った結果が、この取り越し苦労に……血まみれの右手、体。

未だ睨み合ったままのギニュー達を前に、俺は——

「何をぐだぐだと考えこんでいるのかあっ!!! かかってこんか!!!」

「ツツツ!!」

「どうした、きさま……続きがしたいんじゃないのか!」

「ギニュー、お前……!!!」

ああ。

目の前で殺害された仲間の死に怯み、自らの常識を超えた技術の持

ち主におののき。

卑劣な手段をとつても、なお。

その目は未だに、純粹だ。

これがきつと……戦闘のプロというやつなのだろう。

ならば、俺がすべきことは――

「――そうだな、ギニュー……いけるか、プリカ、それに……

ジース!!」

「……おう!!」

「敵にそんなこと聞かやつ、初めて見たぜ……」

ここまで来て、ためらうことはなにもない。

彼らの望む『戦い』が全手段を尽くした殺し合いならば、応じよう。

遠ざけるべきものと断じてきた、この破壊欲と殺意を、受け入れよう。

俺はエネルギーを滾らせ、輝きによって全身の血糊を消滅させ、そのままエネルギーを両手へと移し、構える。

煙となつて漂う血糊だったものを吹き飛ばしながら、俺は叫びではない大声で宣言した。

「全力で行く、ギニュー特戦隊、貴様らを全員殺す」

「……それでいいんだな、ソシルミ」

これでいい。

「どうやら……まずいことになったようですね、隊長」

「ふん、やるしかあるまい」

ジースはどうやら、俺に怯えているらしい。

ギニューは眉をぴくりと動かし、額の汗をわずかに垂らしながら強がる。

まずはジース……距離は、目算で20メートル。

俺は足裏より爆発を放ちながらの踏み込みによってその距離を零にし、手刀での頸部切断を試みることにした。

「――ツツツツ!!」

「な、なめるなよ!!!」

手刀はジースの腕に阻まれ、戦闘服を切断して腕の皮膚を切り裂い

たところで、止まる。

「やるじゃないか、ジースツツ!!!」

「ウチには宇宙最速がいるんだ、この程度っ!!」

俺とジースは、手刀と腕とで鏝迫り合いのように押し合い、にらみ合う。

純粋な押し合いとなれば、やはり……分が悪い。

惜しいパワーだ。

「くく、どうした地球人、こんな程度のパワーでオレと力比べする気だったのか？」

「……ハハ、ハハハハ……!!!」
「そうだな、力比べをしようじゃないか!!!」

俺の腕力の弱さに自信を取り戻して嘲るジースに俺は笑い返ししながら、右手首を掴み、さらなるエネルギーを流し込む。

力比べに負けたから両手で挑むのか、そんなふうにはジースは嘲りの色を深くするが……奴の上司は違うようだった。

「ジース!! 手をはなせっ!! ジースっ!!!」

「は、はい!? 隊長!!!」

俺の赤い対戦相手は、素直にも俺との鏝迫り合いを解消し、そのまま背後へと飛び退き――。

――その腕が、爆ぜた。

「ぎゃあああああっ!!!」

「体まで持っていくつもりだったが、優秀な上司を持ったな」

真マツハでも放ったかのような有様の腕を抑えて呻くジースを前に俺は呟く。

この技の術理は簡単、極限まで増幅させた爆発エネルギーを傷口から流し込む……ただそれだけ、俺の持つ『力』を活かした技だ。

だが、その前提条件はエネルギー差の小ささや傷口への接触など多岐に渡る、こんな繊細で卑劣なやり方は俺の流儀ではないが……。

望むならば使つてやろう、それも楽しいかもしれない。

「ジースっ!!!」

「さて、これでこいつも戦闘不能だな、ギニュー、降伏するか？ そ

れともポッドに戻って予備のスカウターで応援でも呼んだらどうだ」ベジータも確か、ポッドの中にスカウターを忍ばせていたはずだ。もちろん、それを使わせる気など毛頭ないが……。

「……事情通かと思つたら、そうでもないようだな……そんなものは許可されておらん、備品管理と指揮系統の邪魔になるだけだ！」

「何ツツツ!!」

予備のスカウターが……ない？

どういうことだ、ベジータがフリーザたちに裏切りを疑われたのは、ポッドの中にあつたスカウターから、地上での会話の情報が漏れたせいだ。

それが、予備でないとするならば。

……思えば、元の歴史においてはフリーザたちですら、スカウターの予備など装備していなかった。

ならば、あのスカウターはどこから来た？

ベジータが規則違反で持ち込んだのか、いや、ベジータはそんなところで意味もない規則違反をするような人物ではない。

答えは、ひとつに絞られる……地上、あの中の都の戦いの最中、何者かが忍ばせたのだ。

俺達とベジータの目を盗んだその行動の目的として、推測できるものは限らないが、結果から見れば、ただ一つ。

フリーザをこの星に呼び込むこと。

なぜ呼び込むのか、その答えも、これまでの『影』の動きとつながっているとするれば見えてくる。

影は、俺達が表舞台で活躍する影で動き……フデイツツのふりをし、通信を送り、ベジータのポッドにスカウターを忍ばせた。

その目的とはすなわち、戦士の抹殺。

サイヤ人を地球に呼び込み、隠された月を出現させ、フリーザまでもを呼び出す理由があるとしたら、それくらいのものだ。

だが、なぜ、何者が？

ドクター・ゲロを含むレッドリボン軍残党……は、地球の滅亡を望むまい。

その配下の人造人間、13、14、15、16、17、18、19号、そしてセルもそうだろう（そもそも多くの人造人間はおそらくまだ生まれてすらいない）。

魔族……ルシフェル、シユラ、ピッコロ大魔王、ガリックJr. 奴らには……怪しい動きはあれ、地球そのものを滅ぼしてしまうような悪意は感じられなかった。

宇宙の勢力、クウラやコルド、スラッグ、バビディ……奴らに、地球一つに干渉する理由はない、第一、地球などその手で滅ぼしてしまえばよい。

トワ、ミラ、フュー、ドミグラ……暗黒魔界に由来する時空犯罪者も考えられるが、奴らの干渉はタイムパトロールが防ぎ、消し去るはずだ。

俺やプリカとは別の『転生者』が地球にいる？

……だとしても、こんな長期にわたり潜伏する理由も、戦士を殺そうとする理由もないはずだ。

一体誰が、誰がこんなことを。

俺が決死の思いで選り取った、生き残る戦士を増やし、不慮の死を遂げる人を減らすための道を……。

サイヤ人の生き残りが手を取り合って生きる夢を壊したのは。

一体――。

「――死――ソシ――」

叫び声とともに、エネルギーを掴んだ腕が俺に迫る。

紫のそれを、俺はかき乱された心から吹き上がる怒りにまかせて、殴り潰した。

「が……!!?」

「……鬼面閃光拳」

完璧なカウンターだ。

奇しくも、ジースとギニューは同じく右手を粉碎された形になる。ギニューは特に、胸までもっていった、長くはないだろう。くそ。

「わからない、プリカ、俺は……」

「ソシルミ、大丈夫、地球を襲う敵を倒しただけだ、それにおまえは強くなってる、大丈夫だから、な？」

プリカは、わざと軽薄な結果論を俺に伝えてくれる。

だが、俺は何と戦ってるんだ。

敵を見ているようで見ていなくて、見ていないまま殺してしまった。

だが、俺は強くなっている、ならば何かを掴んだのだろう。

……何を掴んだのかもわからないままに。

頭がおかしくなりそうだ。

今まさに破壊した敵を見下ろせば、何かをしきりに話している。

「バ……バータを、バータを呼べば」

「駄目だ、ジース……やつは、死んだ」

「そんな、隊長!! どういうことです!!?」

「に、逃げろ、フリーザさまにこのことを……ぐっ……」

部下と上司のことを想う言葉を吐きながら、ギニューは大きく血を吐き出して……死んだ。

ギニューが今際の際に吐いた言葉は俺を再び、現実と理想の両面からかき乱す。

俺はこの強敵が抱いていた想いに触れるとともに、『バータが死んだ』という確信めいた言葉とも向き合わねばならない。

ギニュー特戦隊の最後の一人、青い異形の男、ずっとエネルギーを感じていた。

それが死んでいるという信じがたい言葉と、それがもたらす意味。

すなわち、今まさに俺達が騙され、企みに巻き込まれているのだという感覚がもたらす背筋を這うような恐怖から……俺は思わず、町の外れでうごめくエネルギーを見る。

「あ、あっちゃかっ!!!」

「しまった、目の動きから……ツツ!!!」

俺がミスを悔いるのと同時に、ジースは瞬時に莫大なエネルギー塊を形成、これは！

「プリカツツ!!」

「っ!!!」

瞬間、俺とプリカは全力の防御を行いながらその場から飛び退くと

——それを追うように火球が膨らみ、町の一角を完全に飲み込んだ!!

「ソシルミー! あいつは何を……」

「……プリカツツツ!!! ジースを……いや、ジースの向かう先にある気を叩くぞ!!!」

「は!!!? ……わ、わかった!!!」

ジースは（おそらく、もう生きてはいない）バータを追ってしまった。

あいつは手負いでも十分に危険だ、止めなくてはならない。

だが、それ以上に危険なのは、あのエネルギーだ。

俺達に『バータのふり』をしながら、平然と居座っていた存在。

奴こそが。

「奴こそが、俺達の真の——!!!?」

「どうしたソシル……!!! ああ、気が消えたのか!!!」

俺とプリカは驚愕と、焦りを共有する。

エネルギーをかなり低レベルに抑えたのだろう……つまり、隠れたのだ、俺達から。

疑惑は決定的になったと言える、だが、見つける手段はもはや……。

「これじゃ、目で見えるしかないってことか……?」

「俺の探知力ならまだ可能性はあるが、この混乱しきった戦場では……」

「い……急ぐぞ!!」

危険な、そして因縁あるその敵を逃してはならぬという焦りが俺達を襲った。

ソニックブームによる町への被害など、最早気にしてはいられない、俺達は全速力で奴がエネルギーを断った地点へと向かう。

事態は混乱を極めている、特にプリカは、事態についてくるだけで精一杯だ。

それでも、俺達の間には一つの想いがあった。

「あれが、もし奴が本当に、一連の事態の原因だとしたら」

「……ああ」

小さく返事を返してきたプリカに言葉を続けるより先に、俺は必死に自らのエネルギーを空間に塗り拡げる。

いわゆる気の探知には敵が放つものを受けるパッシブブレイダー方式と自らの気を広げてそれで敵を触るアクティブブレイダー方式があるが、今使うのは後者だ。

敵がもし見慣れぬエネルギーを持っているならば、これで少しは探知しやすくなるだろう。

『円』か」

「円ゆーな」

この言い回しも、『HUNTER×HUNTER』も、懐かしいものだ。

プリカはわざと冗談めかして、俺の張り詰めつつある心と、荒れ始めたエネルギーをなだめてくれる。

だが、俺の心は収まってはくれず、口は更に言葉を紡ぎだした。

「……もし奴が、強敵とと呼べたベジータとナツパが、義兄あにと呼べたかもしれないラディッツが、死んだ理由で」

もしかしたら、もっと前から続く戦いの。

俺が師匠や道場の皆を一度失ったあのピッコロ大魔王との戦争すら、もしかしたら。

「何もかもを戦いを、誰かが引き起こしていると、するならば」

エネルギーを広げ、目を皿にしながらも、手を白くなるほどに握りしめた俺の震えるつぶやきに、プリカは心配そうな顔をする。

そして、しばらく言葉を選ぶような素振りを見せた。

「でもソシルミ、オレには……わからない、なにが起きてるのかも、どう思えばいいのかも……」

「……俺もだプリカ、でも、俺は違う」

プリカは理解を超えた現象に、感情が追いついていない。

単に俺の推測を考えすぎとみなしているだけかもしれないが……

俺は、違う。

考えた上で湧いてくるのは、怒りだ。

「俺もわからない、だが……だけど、あれが本当に隠れ続けてきた何かだとするなら、俺が、お前が、師匠が……みんなが戦ってきた戦いが仕組まれたもので、道場の皆や、軍人達や、命をかけても救いたかったライバル達が死んだ理由なら、今死にかけてる理由ならツツツツ!!!」

「ソシルミ……」

「俺は、戦いを楽しみたかった、楽しめない戦いは粛々と進めたかった、戦いに、こんな想いは、持ち込みたくなかった……!!!」

「なあソシルミ、怒るのは……悪いことじゃないだろ？ 大事なもの傷つけられて怒るのは当然だ」

一般論で俺をなだめながら、プリカは白く握られた手をそつと覆ってくれた。

超音速の風の中でも、プリカの手は柔らかく、温かい。

……怒りは収まらないが、心が静まっていくのを感じる。

滾った熱をそのままに、穏やかさが戻ってきた。

「……俺は地球人だ、怒りにさほど意味はない」

「そうでもない、さっきのおまえ……おまえは嫌がってたけど、かつこよかったよ、あれはあれでよかった」

体温に続いて、声も……言葉もまた、俺の心に染み渡る。

ずっと俺は、武道家として純粹になろうと心掛けてきた。だが、それ以外のやり方があるならば……。

——その時、ほんの僅かに、視界とアクティブレードの範囲外でエネルギーが膨らむのを感じた。

「ソシルミっ!!」

「ああ!! まだ町中にいたか、だが一体何を……」

プリカは頷き、『あんなところで何を』と首をかしげ、青ざめた。

「そ、そうか!!あの通りには!!!」

「ツツツ!!! ……ジースツツツ!! 奴がいる!!!」

でも何を。

俺とプリカの脳裏をその言葉が支配したが、すでに体は動いてい

た。

「——ツツツツツ!!!」

何かが起きている、いや、奴は何かを狙っている。

超音速で移動する俺達より早く、奴の気は莫大に膨れ上がり——

「ジースの気が減ってるぞ!! 殺されたのか?!?!」

「違う、いや、何が……!!!」

単に減っているのではないと、俺にはわかる。

「なにが起きてるのか、わかるのか!!?」

「わからない、違和感があるだけだ、だが何かが……いや、奴は……

奴の気が膨れ上がってる!!」

「わからないじゃないだろ、それじゃまるで……」

プリカの飲み込んだ言葉は、俺の脳裏にも像を結びつつあった。

だが、ピンぼけしたまま、確信にはたどり着けないまま、奴がすぐ

そこに。

「……遅かったな、アエ・ソシルミ、それに……プリカ」

初めて聞く『聞き慣れた声』が、風音に疲れた耳を叩く。

地面に転がる2つの物体。

一つは、カラになった戦闘服。

「お前は……」

一つは、粘液を滴らせる、奴の抜け殻。

……奴の姿、三本の指に支えられた足。

黒い斑点を持った、緑の甲殻。

鋭く尖った尻尾。

みぞおちを彩る、紫色の透明感ある物体。

そして、たった今初めて聞いた、だが本当に、本当によく聞いた声。

見間違えも、聞き間違えもできない、こいつは……。

「セルツツツツツ!!!」

!!!!!!!



第四十七話：転生地球人があの日を思うまで

緑と黒、オレンジと紫に彩られた二足歩行の生物が俺とプリカの前にたたずんでいる。

視野を背後に広げれば、今でも町のあちこちで戦闘が繰り広げられて……。

フリーザ軍のロボット兵と、おそらく最後の予備戦力であろう地球の軍隊が戦い、命を散らしていた。

新たに現れる戦力は魔族との戦闘で使われていた旧式兵器が大半をしめ、俺の故郷、タンドール王国の民間航空会社のマークがついたままの機体までもが戦場を踊っている。

激化する戦闘には一切の余力がない。

この恐るべき敵——セル、第一形態を前にしても、最早援軍は望めないだろう。

そのセルは、俺がたつた今吐いた単語、自らの名を呼ぶ俺の言葉に、深くうなずいて応えた。

「……やはりソシルミ、きさまはわたしを知っているのだな」

『何らかの種類の悪の気』に染まっていたセルの気が爆発的に膨れ上がるとともに、本来の姿……幾多の戦士達のエネルギーの混合体へと変わってゆく。

もはや、目を逸らすことなどできはしない。

俺が、俺達が追い続けてきた影の、おそろく……正体。

『セル』……『人造人間セル第一形態』 ツツ!!

こいつは今この時代に、ここにいるはずがない敵だ、いや、存在しているかすらわからない。

現在はエイジ762年末だが、こいつの元の歴史において活動する時代は767年春……つまり、未来の敵だ。

人造人間セルは、かつて悟空が戦った悪の組織レッドリボン軍の残党、科学者『ドクター・ゲロ』が、自らの所属していたレッドリボン軍を壊滅させた孫悟空を憎み、殺害するために作り出した人造人間。

もつと言えば、戦士の細胞から作り出した……正確には、作り出そ

うとした合成生物だ。

ドラゴンボールという作品においては、俺達が今直面している（はずだった）『フリーザ編』の次、『人造人間編』の後半の敵……はつきり言つて、ケタ外れの強さを持つていると言つて間違いない。

地球に現れた戦士の能力や技術、異星人の特殊能力を兼ね備え、そのパワーは初期の状態でもフリーザやそれを上回る実力を持った戦士たちとやりあえるほどだ。

極めつけは吸収能力、生命からエキスを吸収することによって自らのパワーを増す基本的な吸収能力に加え、別に用意された特殊な人造人間を吸収することによって、更に優れた存在へと変異することができる。

……だが、本来の製作者であるドクター・ゲロは時間がかかりすぎるこのプロジェクトを放棄し、細胞の収集から実際の製造までをコンピュータに任せた。

コンピュータは長い年月をかけ……エイジ780年代末にセルを完成させたが、セルの誕生した歴史において、抹殺対象の孫悟空も、吸収して完全体になるはずだった人造人間もすでになく……。

結果、セルが選んだのは、それより以前に別の戦士が人造人間を倒すのに利用したタイムマシンを奪つて過去へと遡行することだった。

だから……セルが、彼の年代より過去にいるのは自然なことだが、が……。

「なぜ、ここにいる、俺を知っているのか？」

「ふふふ……なぜここにいる、か……なるほど」

「……………ッ」

「なに、いまさら隠したりとぼけたりすることはない、きさまがなんらかの手段で未来を予知していることは、わたしも薄々感づいていた、おまえにとつてわたしは未来の人物だ、そうだろう？」

……俺達の、誰へともなく、確固たる理由もなく隠してきた『正体』に迫る言葉。

それを前に一瞬硬直した俺をあざ笑いながら、セルは言葉をつなぐ。

胸騒ぎがする、ただの……情報を握られていることへの恐怖では、
すまない。

「タイムマシン、きさまは聞き覚えがあるんじゃないか？ わたし
はそれを使って時間をさかのぼった、当然、きさまを含めた強者たち
のこともよく知っている」

「……タイムマシンだと!?!」

「白々しい質問はよせ、ソシルミ……! きさまはわたしの知る全
ての事件に対して的確な対処をとってきた、それを崩した存在は2つ
の歴史でただ一つだけだ、それは、わたしも同じだった……そう、そ
の忌々しい……」

動悸が収まらない、脂汗がにじみ、ヨガが狂いつつある。

セルは語りながら苛立ちをつのらせ、ついに、腕を振り上げて人差
し指を立て、指をさす。

その先にいるのは……!!

「その女だけだっ!!!」

「ツツツツ!!!」

「な、お、オレが……!!? オレは、セル、おまえの歴史では……オレ
とソシルミは……」

「どういうことだセル、貴様はいつから俺達に干渉していたツツ!!
月か!?! スカウターか!?! まさかもつと——」

プリカがおののくとともに、俺の心もまた、深い衝撃に襲われた。
形のない恐怖、不安、もしくはこれは……罪悪感なのか？

理解できないままに、自分が何かをやらかしたという深い後悔のよ
うなものが湧き上がってくる。

セルはそんな俺を嘲笑する。

「この歴史に降り立ってはじめて試みたのは、ソシルミ、きさまら親
子の抹殺だ」

——

ツツツツ!!!???

「親子だとツツツ……!!?」

「……ふふふ、なるほど、そこへ食いつくとは、きさまでも自分のた

どっていない歴史のことはわからんか」

俺は聞き返すことしかできず、セルの嘲りを受け止める。

自分の知らない、自分の関係する歴史、これまで俯瞰してきたはずの自分が誰かに知られている、見られていたという感覚に、動揺が収まらない。

いや、それよりも強いのは、俺の捨てられた家——

「一体どういうことだ、俺は貴様に出会ったことはないツツ!!」

「事情があつてな、直接は会わなかったが……確実に、わたしはきさまに攻撃をくわえたぞ?」

「……………ツツツ!!」

俺が生きたこの歴史の始まりから、こいつはいた。

何を意味しているのかも分からないそんな言葉が、俺の脳をかき乱す。

先の言葉の推測すらロクに立てることができず、俺は焦点の合わせ目で、焦点の合わせぬ質問を返した。

「いや……アエ家を攻撃したとして、俺はその時すでに家にはいなかった、そうじゃないのか?」

「なんだか話がすれ違っているな……悪の気を持つものは操りやすいというのは知っているだろう? 攻撃手段というのは『それ』だ、使えたのは役立たずばかりだったが、目的の半分は達成できた」

「半分……まさか、ソシルミの親父を殺したのかっ!!?」

「ふん、皆殺しにさせたはずだったが、まさかチャパ王などのもとに逃げ延びているとはな」

未だに健在な路面に立っているはずなのに、足場が揺らぎ、体が傾いたかのような感触を覚える。

俺の実家、アエ家が滅ぼされていただと、それも……こいつの手によって。

俺の親が……捨てられたとはいえ、俺を産み、5歳まで育ててくれた、俺の……。

「やっぱりソシルミの親を……でも、一体どうして……」

「こいつら親子は強力な戦士だった……、殺さねば武道家どもはす

ぐに育ち、手に負えなくなる、それを防ぐ目的も、やはり半分は達成できた」

「そ、そんな……俺の……」

「だが半分が失敗したために、わたしは今こんな苦勞をしているわけだ、連中は扱いやすかったが、所詮は下等生物でしかなかったということだな」

脳裏に、かつて聞いた言葉がよぎる。

俺の人生の一つの原点とも言える戦いで、生涯の連れ合いとともに撃破し……生かし、そして俺を生かした存在。

闇夜に生きるはずのあいつが、太陽を背に語った言葉。

『さて、おまえが夜歩きした程度で魔族と出会えたのは、果たして偶然か?』

まさか、あいつの、ルシフェルの言っていたことは。

「魔族を操ったのかツツ!!!」

魔族——この星で闇に潜み生きるもの。

多くが太陽を忌み、太陽と生きる生命を害して生きている。

俺が友と呼ぶ……呼びたいあの吸血鬼は、太陽そのものすらも害そうとした。

「ようやく理解したか……ついでに言うと、幼いガーリックJr.を操って、ピッコロ大魔王を復活させ、軍隊を与えさせたのもわたしだ、……結局役に立たず、使い捨て同然に突っ込ませてしまったがな……、エキスはもったいなかったかもしれない」

「貴様——」

弱りゆく生命を抱えながらも自らに付き従う者共のために戦い、それを殺した俺に怒りを燃やしていたルシフェル。

故郷から遠く離れた見知らぬ星で……自分がその星の住民でないことすら知らずに育った男の生み出した無念の化身、俺との戦いを楽しみ、生まれ変わっての再戦を誓ってくれたピッコロ大魔王。

語らうことすらできなかった、かつて神となることを望んだ男の後

継者——俺の遠き同輩とも言える男、ガーリックJr.……!!!

エネルギーを燃やし、界王拳を練り上げ、睨む、睨む先へと跳ぶ!!!!

「……ソシルミ!!!」

「——ツツツツ!!!」

プリカの声が背後に溶ける。

輝きが俺の足で爆発し、身体と共に空を駆けながら脚へ、腹へ、腕へ、拳へと昇り弾ける!!!

拳は確かに当たり、だが防がれ、怨敵の手をごく小さく揺らした。

「セルツツツツ!!!」

「ふふ、さすがのきさまも普段のクールさを保てなくなったか!」

セルの嘲りは俺の耳を抜け、再び大気に散る。

俺の拳はセルの皮を小さく揺らし——エネルギー同士の触れ合いの感触を、俺だけがしっかりと覚えた。

怒りによつて恐怖は失せ、ついさつきまでのパワフルで精密な感覚が戻ってきたのだ!!

「許さんツツツ!!!」

あの男たちの生命の、生涯が、この存在に弄ばれたのならば。

俺が願った、甘ったるい共存の道が、この存在に絶たれたのならば。

「許さんぞ、セルツツツツ!!!」

「許さんからなんだというのだ、きさまらはここで死ぬ!」

嘲りを爆発と衝撃波によつてかき消し、俺は更に拳を進める。

「八千拳ツツツ!!!」

「ふふ、お相手してやろう……新・狼牙風風拳つ!!!」

新・狼牙風風拳、俺の仲間……ヤムチャの技。

だがそこに、サイヤ人との実力差に心折れかけていた俺を救った『あの技』のニュアンスはなく、俺の心はわずかに冷える。

だが、そのパワーは本物だと、ぶつかり合いを通じて魂が理解してゆく。

俺とセルの拳が持つ全要素——スピード、パワー、格闘技術、エネルギー量、密度。

互角といえるのはせいぜい、技術と密度。

セルはこの先の歴史の敵、当然だ。

だが——

「思っていたほどではないな、何がお前を弱くした、時間遡行か、経年劣化か、サボりすぎか!!!」

「質問が多いがもつと聞きたいことがあるんじゃないのか!? ベジータが来る原因になった通信、ラディッツの強さ、不自然に暴れる魔族、隠したはずの月、……この戦争の正体、どうだ!?!」

空間にエネルギーが飛び散る中、セルはまたも、俺の心を揺さぶろうと真実をほのめかす。

それは……完全に、成功していた。

「まさか——!!!?」

「まさかとは白々しい、きさまも感づいたからここに来たのだろうか? サイヤ人どもはどいつもこいつも後々厄介に成長する、悪い芽は早めに摘むしかあるまい!」

魔族の悪の気につけこむ技術があるならば、未来の歴史におけるバビディの魔術のような手段を使って力を与えることは容易い。

高度な歴史知識と知能を持ったセルにとっては、ラディッツのスカウターを使ってベジータを誘い出すことも、そのポッドに新たなスカウターを忍ばせることも十分に可能な作戦だ、隠した月も——

「——だが、やはりきさまはしぶとい、だから成体となったわたしがこの手で……!」

力を込め、俺の拳を払うセル!

やはり甦るために手を抜いていたか、だがまだ戦力を出し切っていないのはこちらと同じこと……ツツ!!

「がああああ!!!」

収束されたエネルギーを持ったプリカが、俺のエネルギーにまぎれて空間へと飛び込んだ。

その目的は一つ!!

「なっ……ぬおおおっ!!!?」

「ウエスト・モーニング・サンシャイン!!!」

プリカは手で持ったままの『ウエスト・モーニング・サンシャイン』をセルの脇腹に押し付け、そのまま満身の力を込めてセルごと射出する。

小型のエネルギー弾として発射され、後に膨れ上がるタイプの攻撃であるウエスト・モーニング・サンシャインは、プリカが持つ気功波の才能を端的に表している技だ。

俺の最高の友にして、愛する人、プリカ……だが、俺はそれを知らない人生もあつたのだと、強く意識せざるを得ない。

「俺の知らない……前の歴史」

親に捨てられ、師匠に拾われて育ち、プリカと出会って愛し合った……多くの友と敵に恵まれた俺の人生。

だが、そうでない人生があつた。

セルはプリカを知らなかったが……俺は父親とも、共に生き、共に戦っていたのだ。

俺は魔族と戦い、そして友誼を結んだ。

だが、その戦いそのものが、セルに仕込まれたもの、あいつらにとつて、どこまで本意だったのかわからない。

サイヤ人の死もそうだ、ライバルになり得たベジータとナツパ、義兄と呼ばたかもしれないラディッツ……。

たぎる怒りの中に、悲しみが染み渡り、さらなる怒りと……悔やみによって押し流される。

奴は、セルは、俺の干渉が育てたのだ。

俺の……別の人生の俺とはいえ、間違いなく、俺が……。

「ソシルミ、考え込むのもいいが構えろ、アレで仕留められるわけがない!!」

「あ、ああ……！ すまん、プリカ」

また思考の中に意識を沈めたこと……だけではなく、突然セルを殴ったことも含めて、俺は謝罪を差し出す。

行動爆発、という言葉が脳裏をよぎる、追い詰められた動物がやけになつて起こす反撃。

セルの言葉に押し付けられた罪悪感と、今まさに犯した独断専行の失態が俺を……。

「さつき、カツコよかつたぞ、おまえ」

「~~~~ツツ!?!」

柔らかく笑ったプリカが放った突然の『褒め』に、顔が赤くなるのを感じる。

いや、お前。

「こんな時に——」

「——こんなときだからだ、こんな時におまえは動いてくれるから、何度も地球を救って……オレを連れ出してくれた」

エネルギーを通したテレパシーではなく、言葉と、雰囲気はプリカの心を伝えてくれる。

そうか、プリカにとってはそれこそが……。

「プリカ……」

「ソシルミ、おまえの親はもしか——」

その時、セルの体を押しながら膨らみつつあった『ウエスト・モーニング・サンシャイン』の光弾がついに爆発的膨張を見せ……。

……次の瞬間には、遠くの空へと投げ捨てられ、フリーザ軍の円盤を消し飛ばした!!

プリカは予想していた結果にも

「やっぱりだめか、くそ、肝心なときに……いいか、ソシルミ、悪いのはあいつだ!! ラディッツを殺したのはオレだけど、でも——」

「ああ、だからこそ許してはおけん……なんとしてもここで倒す!!」
「でも、どうして、どうしてあいつはわざわざこんなパワーを持つといて闇に潜むような……」

プリカの言葉を遮る……いや、プリカの言葉につなぐように、あの聞き慣れたよく通る声が響く

「闇、闇……か」

……流石、ナメック星人由来の地獄耳だ。

セルはゆっくりとこちらに近づきながら、俺達へと更に問いかける。

「闇というのは、何の闇だ、『歴史』か?」

「……っ!」

「きさまはわからんが、ソシルミはすでに気づいているだろうな

……私の弱体化に」

「はつきりと……、弱みを見せてくれたな、セル」

俺の皮肉つぽく挟んだ言葉に、セルは妙に神妙な態度をとった。

「そうだ、きさまの慎重ぶりはすさまじく、さすがのわたしでも、カプセルコーポレーションが秘密裏に建造した試作型の小さなタイムマシンを盗むのが精一杯だった」

「……………」

「ふふ、思い当たるフシはあっても、口に出せばわたしに情報を与えるだけだ、という顔をしているな、ソシルミ、そしてプリカ」

「話したいなら話せよ」

プレッシャーを受けながら会話まで焦らされるストレスに耐えかね、プリカが呆れた言葉を放つと……。

「そ、そうだな……ゴホン」

セルは少し目を丸くして、咳払いをした。

「わたしが盗み出した試作型のタイムマシンはとても小さく、わたしがそのまま入れるサイズではなかった……」

セルは俺の顔をじっくりと見て、ほくそ笑む。

何をしたのかは知っているはずだ、とばかりに。

「わたしは自らをタマゴに変えることでこの問題を解決した、だが……それでも、もう一つ問題があった」

「問題……燃料か？」

元の歴史でも、タイムマシンの燃料問題は取り沙汰されたことはあつた、タイムマシンはどうやら、結構な燃料を食うらしいのだ。

本来の歴史より長く旅したならば特にそうだろう。

「その通り、わたしは足りない燃料を補うため、タイムマシンと自らを接続することにした」

「……まさか自らのエネルギーをつぎ込んだのか!!!」

潜在エネルギー、気、元気、戦闘力、キリ、スピリット、そんな風と呼ばれる一連の『エネルギー』は、生命力や精神力と……完全にイコールというわけではないしろ、同質のものといえる。

それを移動のためだけに使うというのは、尋常の武道家には考えら

れない行為だ。

一体なぜ……。

「歴史に頭角を表すとともに宇宙を股にかけ、フリーザをも上回るパワーを手にしたきさまを殺すにはそれしかないと判断したまでだ」俺は『この俺』とは無関係な言葉に……しかし、思い当たるフシがあつて、凶星を突かれた、というような気分になる。

——もし、もし俺が師匠のもとに留まらず、戦闘が持つ『武』の側面に惹かれることなく生き続けていたら。

その生き方はきつと、あらゆる知識を用いてパワーを手にし……。

『範馬』

かつて感じた天命のまま戦うことを望み、最強を目指し続ける、そんなものになつただろう。

それが幸福であるか、不幸であるかは、知る由もないが……。

「ふふ、そうして変えた歴史のきさまはわたしのこのパワーでも圧倒できるほどに弱い存在だったわけだがな」

「……俺は武を手にした、貴様の歴史と比べようと何も劣つてはいないツツ!!」

「人間でないわたしにもきさまが揺らいでいるのはわかるぞ、ソシルミっ!!!」

セルはいきり立つて飛び上がり、揃えた手のひらを前にやる。

かめはめ波だ!!

「かあ……めえ……」

幾度も放たれ、防いできた……前世では憧れたこともあつた必殺技、かめはめ波!

「地上に向けて撃つのかっ!!!」

「プリカ、上がるぞツツ!!!」

「わかつてたけど、おかまいなしかつ! くそっ!!!」

町……否、地球への直撃を避けるため、俺達二人もまた空へと飛び上がる。

セルはニヤリと笑い、俺達へと照準を変えてきた、最初からコレがお望みというわけだ……!

奴はごく軽くエネルギーをチャージしている、それはわざわざ探知するまでもない。

だがこれは――

「プリカ、避けるのはムリだツツ!!」

かめはめ波は曲射可能であるし、そもそも奴のかめはめ波の規模と速度は、俺達の回避行動を大きく上回るだろう。

冷や汗が風に溶ける、状況を打破しうる可能性はもはや一つ!!

「俺に全力の気をくれツツツ!!! 回し受けだ!!!」

「ムチャクチャを言うな、死ぬぞっ!!!」

「あれから荒行もヨガもたっぷりしたさ、今のコンディションならば……!!!」

「はあ………めえ………」

わざとらしく、掛け声を空に響かせるセル――

「プリカツツツ!!!」

俺は背中を預けてプリカの名を叫び。

プリカは俺の背に手を置き、俺の名を叫んだ。

『いつもの』だ……戦場にあつて、ほんの少しだけ俺の心がぬくもり……。

「……ソシルミっ!!!」

そして、セルもまた、悔りの笑みをそのままに、叫ぶ!!

「……波あーっ!!!」

「ツツツツツ!!!」

俺の全身、否。!!!

全霊までもにプリカのエネルギーが侵入する。

俺が普段エネルギーの操作に使う部分はもちろんとして、使わぬ部分、心や魂までもが、身の丈に合わぬエネルギーの奔流にさらされていた。

……が。

「心地いいくらいだ!! かめはめ波など、何度受け流したか――

――」
「追加だ、持っていけ!!!」

「……………ッッ」

無慈悲なるエネルギーの上乗せ、手が焼け爛れる気配とともに、全体が押し流される。
持たない。

そう確信した瞬間、プリカが俺の背を掴み、かめはめ波の外へと投げ出した!!

「プリ——」

やめろ、そう伝えようとした言葉が奔流に溶ける。

俺はプリカの膂力によってかめはめ波より逃れ、しかし、セルがわずかにパワーを操作するだけでその抵抗は崩れ去だろう。

プリカもまた、俺を投げ飛ばした反動でかめはめ波から逃れたが……見ただけで分かるほどに傷は深く……だが、消滅していいだけで奇跡と呼ぶべきか。

これが人造人間、セル……………。

『攻撃開始!! 目標、緑の人型生物!!!!』

『撃て!! 撃て!!』

下から声がする。

霞む目を開けば、回転する視界に映った、一点へ……セルへと集中するビームと実体弾の火線。

「皆……………」

舞空術すらままならず、ほぼ自由落下で地上へと落ちてゆく俺達をかばうように、……いや、俺達をかばうために、軍隊はセルへと攻撃を集中する。

一方、それと相対していたフリーザ軍もまた、セルを敵と見なし、攻撃を始めていた。

「好き勝手しやがって!! こいつ、フリーザ軍のモンじゃねえな!!」

「地球には宇宙人部隊がいるって通信が来てたし、そいつかも……」

「パワーはあるらしいが、畳んじまえば関係ねえ!!」

俺は……。

「グッ!!! ハア……ハア……」

地面に激突した俺は、全身のダメージと消耗から落下の衝撃を和ら

げることそのままならず、瓦礫を枕に見を横たえる。

ヨガに集中しようにも、種銭となる体力がない、ただ……息を整えようとして、それもできない。

ぼやけた目に映る戦い……否、抵抗と蹂躪。

打つ手もなく横たわる俺の耳に、ひどい音質の通信が届く。

『こちら魔界……中はどうやわれわ……宙人部隊と……つはつは、戦況は膠着……』

『……ンドウ防衛隊、こち……陛……ラフ司令が……』

『カプ……シヨンよ!! ……ボットの母船を……船は……』

あとは……飯くんの到着を……だけ!!』

おかしいのは耳なのか、通信機なのか、どちらもなのか。

頭もぼやけて、内容も飲み込めない。

『……敵の……総大……!!!! フリーザ……』

地上……!!!』

「……」

意識を保てない。

空を彩る閃光が、弱くなっていく。

ヨガを、呼吸を……。

「……心棒……メシ……まともに……かなあ、こんくら

いはやったるのも……だがよ……」

近くで、誰かが喋っている。

遠い昔、どこかで聞いた気がする、あるいは、最近にも……。

「おみやあ……これ……いとくで、つたく、……つてなら、自分で渡

しゃ……んじゃ……とは知ら……早よ逃げ……うなりし

やあ……」

放り出したままの手のひらに、小さく重い何かが乗り——俺は

飛び起きた。

「お前!! ——行ったのか、……いや、俺が意識を失っていたのか?」

見回しても、エネルギーを探っても周囲にはつきりとわかる気配は

ない。

手のひらに……小さな鉄のかけらがあった。
意味不明な贈り物に、俺は眉をひそめる。

「鎖の、断片？」

破断し、所々サビた、鎖のかけら一個分。

なぜ、誰が……。

そんなことを思う前に、俺の体はそれを帯の左にしまい込み、続けて、右に手をつき込んで、一粒の豆を取り出した。

苛立ちのままに鎖を放り投げても良かったはずだが……俺はなぜだか、その鎖を手放してはならないと思ったのだ。

それはきつと、誰かがこれをわざわざ渡してきたからというだけではなく——

「いや、こうしてはいられない、プリカはまだ……ツツ!!」

俺は自ら思考を断ち切り、プリカの元へと奔った。

倒れたプリカの傷はやはり深く、生命維持に必要な器官までも、エネルギーによるダメージを受けている。

……瀕死。

胸を締め付けられるような苦しみと共に——打算の心が、膨れ上がってくるのを、感じる。

「ソ……シ……」

「大丈夫だ、プリカ」

俺はプリカを助け起こし、握り込んだままだった仙豆をその口に押し込んだ。

その行為にある真心をけがすような、一つの期待を胸に抱きながら……。

ほどなくして、プリカは完全に息を吹き返し……俺の手を噛んだ。

「つつつがっは!! がふっ……ぐ、べ……」

「痛ツツツウ……ふう、間に合ってよかった」

「よくない、おまえのやけどの味で口がいつぱいだ、どうせなら口移しにしてくれれば……」

プリカはぶつくさと言いながら……俺と同じ期待を胸に抱いたの

だろう、自らの内面へと意識を向ける。

……そして、ぱつと顔を明るくした。

「瀕死。パワーアップは成功だ、怪我の功名ってやつだな」

「……瀕死の相方を前にちよつとワクワクさせられて、俺は自己嫌悪で死にそうだよ」

「今から強くなるライバルにワクワクするのは正常だろ？」

「かも、な……」

サイヤ人は、瀕死の状態から回復するとき、自らの持つエネルギーの総量を爆発的に上昇させる。

詳しい法則は不明だが……おそらく、その増加量は直面した敵のレベルによって変わるのだと、オレは睨んでいた。

それを証明するように今、プリカのエネルギーは元の数倍にまで上昇している。

一月前にベジータが見せた大猿を上回るエネルギー量だ。

だが……樂觀もしてられない。

「プリカ、エネルギーを探知すればわかるが……皆は、地上に降りてきたフリーザへの対処と、宇宙空間のロボット母船との戦いでつきつきりだ」

「……オレたちだけで、セルと戦わなきゃいけないってことか」

皆、戦っている。

俺達が作った歴史で……もしかしたら、俺が思っていた以上に、『俺』が関わっていたかもしれない、この歴史で。

だが俺はやはり、この罪悪感に似るほど高まった責任感とは別の、より真つ当に熱いものを胸に感じていた。

感傷に浸ろうとする俺を引き戻すように、プリカが俺の背を叩く。

(……作戦、あるか?)

同時に伝えられた念に、俺は短く、素直な回答を示した。

(ある)

(そうだな、このパワーをうまく使えば、なんとか……)

(それだけじゃない、セルのエネルギーの性質は今ので僅かながら掴んだし……さらなる、弱点も見つけた)

律儀に黙ったまま、首をかしげるプリカに、俺は使うべき技を伝えてゆく。

セルのパワーは未だ圧倒的だが……まだ、希望はあるのだ。

俺とプリカは、静かになってしまった空へと上がっていく。

セルは穏やかな空で、俺達を待つようにゆったりと佇んでいた。

わけも分からずに散ってしまった地球……そして、フリーザ軍の兵士たち。

彼らを惜しむ心と同時に、それを引き起こしたセルへの怒りと、自らの不甲斐なさを越え、目の前の敵を倒さんとする戦闘意思が際限なく吹き上がってくる。

「怒りつてのは、やっぱりガラじゃないが……!!」

「……大丈夫だソシルミ……オレも、同じ気持ちだ」

プリカはそう付け加えて、怒りの籠もった目で、セルを睨む。

セルは相変わらずの余裕の表情と声色で……。

「お久しぶりだね、予知能力者諸君」

「……ああ、あれから大分時間が過ぎた、以前の俺達とは思わんことだ」

「ほう……なるほど、きさま……界王拳を使っているな？ 倍率は

二倍といったところか……だが、それでも地球人には荷が重かろう」

セルの言う通り、俺は界王拳のエネルギーを纏っている。

肉体を酷使しながら、パワーを数倍にも上げる界王拳……その負荷は確かに、ただの地球人には荷が重い。

「ソシルミは特別製だ、甘く見るなよ」

その言葉に続け、プリカは『スター・モーニング・マルチプル』を多重展開し、叫んだ！

「ががあ!!! スター・トライナリ・ケンタウリっ!!!」

「気弾を多重操作し敵を翻弄する技か、だが、エネルギーに劣る側が力を分けては——」

セルの言葉を遮るように、俺が先陣を切って戦いへと飛び込んでゆ

く。

取る形はやはり、八千拳だ。

「またその技か!! チャパ王ごときの技を後生大事に抱えおつて!!」

「それはかめはめ波も同じこと、技は鍛えるごとに姿を変え、新たな世界へと共についてきてくれるものさツツ!!」

その言葉は、単なる売り言葉に買い言葉ではなかった。

だが……、界王拳とプリカのスター・トライナリ・ケンタウリのエネルギー弾群を合わせても、力を小出しに上昇させていくセルに追いつくことはできない。

俺の顔が怒りと苦痛に歪み……わずかに、口角が釣り上がる。

「どうした、ソシルミ……なぜ笑っている!!」

「わくわくしてくるって奴だ!!」

「わくわくだと、この力量差を前に……」

困惑し、一瞬だけ足を止めたセルの体表を、ビームが焼く……わずかに焦がす。

防衛軍の生き残りだ!!

「ちいっ!! まだ生き残りがいたか!!」

「やめろーっ!!! こいつには効かない、逃げてくれ!!!」

「プリカ……」

……俺の心は再び燃え上がりながら、その願いは、プリカと同じだった。

フリーザ軍との戦いは、ここではもう終わったはずだ。

こんな奴に立ち向かわなくてもいい。

俺のそんな思いを知ってか、知らずか……セルはほくそ笑む。

「やはり戦友が大事か、ソシ——」

「うがあ!!!」

何かを始めようとしていたセルに向け、プリカが全霊で叫ぶ。

同時に、遠くの地表で待機していたプリカのエネルギー弾が、一斉にセルへと襲いかかる。

「こんなもの、気付いていないでも思ったか!!」

セルはほくそ笑み、次々襲いかかるエネルギー弾を見もせずには捌いてゆく。

同時に、プリカは凄まじい密度のエネルギーを口に溜め込み始めた！

「ぐ……お……が………!!!」

「ふふ……気弾操作をしながらチャージする技量には恐れ入るが、飛び道具との同時攻撃とはずいぶんと古典的なアイデアだな!!」

「飛び道具だけと思うなよツツツ!!」

俺は八千拳のボルテージを更に上昇させ、セルに対抗する。

一方、セルはエネルギー弾と俺の同時攻撃を物ともせず……。

……ついに放たれたプリカのビームを迎えた!!

「つごああああ!!!」

「収束型か、確かにいい技だが、当たらんことには——」

セルは出し抜けに速度を上げ、完全にエネルギーの軌道から外れた——が。

その次の瞬間、ビームは鋭角に軌道を変え、戦場へと舞い戻る!!

「なっ!!! だが、かわすのはたやす——」

セルがそう叫んだ瞬間には、すでにビームはその背後へと到達し……。

プリカが放ったエネルギー弾……否、プリカのエネルギー弾に偽装した俺の毛分身へと命中する。

当然、やることは一つ!!

「反射だと——つごああああ!!!」

角度を変えたビームは完全な形でセルへとブチ当たり、爆炎を上げた!!

原理は単純、気功波の方向を変えるいつもの技（プリカのエネルギーはよく馴染み精度も上がる）を毛分身に使わせ、プリカの全力のビームを叩きつけたのだ。

だが、流石に毛分身をそのまま放つてはバレやすい、そこで、プリカの魔空包囲弾まがいの技に紛れさせた、だがそれだけじゃない。

プリカは未だ吹き荒れるエネルギーの爆炎を前にして、得意げに叫

ぶ。

「はあ……はあ……!! 界王拳で一番大事なのは気のコントロールだ、体は地球人でも、ソシルミが使う界王拳が二倍程度で済むと思っただのが間違いだったな!」

俺は毛分身を放つと同時に、その分身をプリカのエネルギーでコーティングし、同時に本体が界王拳を使用することで、分身作成による消耗をごまかした。

……セルは俺ほど、エネルギーの探知や扱いには力を入れていない、あるいはセルの歴史における俺もそうだったのだろう。

この歴史の技が、セルに牙を剥いたというわけだが……。

「……我ながら、こすい技を使ったもんだ」

「そうか? 武道家らしい技だと思うけど……ど……、ソシルミ!!」

「ああ……」

焦るプリカに、俺は答える言葉を一瞬失う。

エネルギーの爆炎が晴れ始めると共に、その中からセルの濃密なエネルギーが顔を覗かせたのだ。

俺もまた、動揺の中にあった。

「まさか、あの一撃をまともに受けても——」

それによく言葉を放とうとした瞬間、爆炎の中から幾筋ものどどん波が飛び出し、曲がりくねる。

的確にプリカのエネルギー弾と気弾を撃ち抜いたそれらは、最後に俺とプリカを狙う——そぶりだけを見せ、パン、と小さな音を立てて消え去った。

「……お前らしい、遊び心だな……セル」

「ふふ、楽しんでもらえたようでさいわいだ」

俺の皮肉に答えるように煙からまろび出たセルは、一切の無傷。

回復したのか、最初からそうだったのか、だが……傷もなく、エネルギーの消耗も見られないのは、確かだ。

「驚くこととはない、気を常に体内に循環させておけば、小粒な反撃など意に介す必要はないというだけの話だ、もつとも、実力差が大きく開いているからこそ取れる手段ではあるがね」

「……なるほど、な」

俺とプリカの身を叩く感情は、乾坤一擲の策が破れたことへの失望、恐怖。

ここから打てる手は限りなく少ない

……そんな論理的判断に、『だからこそ』と、俺の体を巡っているはずの血が叫び、顔を笑みへと引き戻してゆく。

それを見た、セルは、さらに嘲笑った。

「だろうな、では……」

セルは笑いをこらえるような声で下へと手をかざす。

その手に現れるのは巨大なエネルギー弾!!

「ふははははは!! きさまが人間どもを守りたいのはよく知っている、こうすれば笑えんだろう!!」

セルはぞんざいにパワーをつぎ込むと、軽くぽんと押すようにエネルギーを投げ落とす。

命中すれば、町はおろか、逃げた避難民まで消滅は免れない威力……!!

俺が笑みを怒りの形相へとに変えかけたとき、プリカが叫んだ。

「セルっ、おまえそんなことのために!!」

「このパワーも、きさまらの活躍の影でコツコツ集めさせてもらったものだ、仕上げはフリーザ軍どもの生命エキス、すべてこのためにやった、どうだ!? ソシルミ!!!」

「なぜ俺にこだわる!! なぜ俺にこだわって、関係のない連中まで——」

「はっはっは!! わたしもいい加減疲れて、うさばらしをしたいのだよ!」

「っ、がああああ!!!」

プリカは猛烈な勢いでエネルギー弾の下へと回り込み、再び全力のビームを放つ……が、駄目だ。

この圧倒的なパワー差では押し合いにすらならず、ゆっくりと下がる気弾にそのままビームが飲み込まれていくだけに、終わる。

それを見て笑みを深めるセルは、おそらくエネルギー量によって圧

倒され、俺達が力と技の無力を噛み締めながら町を見放し、逃げていく……そんな光景を見たいのだろう。

だが……。

「貴様の望みは、何一つ叶わんツツツ!!!」

俺はプリカのビームを避けながらエネルギー弾に回り込み、……それに両手をつける。

もつとも、飲み込まれるような単純なやり方ではない、最低限の距離を保ってエネルギー弾の移動や膨張と同調しているのだ。

「何をするかと思えば、まさか手で抑えるとは……」

「……抑えるだけか、見ておくといい」

俺はセルのエネルギー、そしてこの技の特性を深く見切つてゆく。

……ただ俺を愚弄したいというだけで、ここまでのことをするのは。

最初から、特定個人の抹殺と自らの完成のみを目的とする存在とわかっていたはずだ、だがこれは……。

「セル……ツツツ!!!」

軍人達の命、民間人の命、そして暮らし……人間同士の争いでは失われぬはずの山河までも消し去る巨大なパワーを前に、俺は怒りをたぎらせる。

セルの行為への怒り、それをあっけなく成そうとするセルへの怒り。

変えることの出来ぬエネルギーの差という現実への怒り……それを突き崩す技を俺は持っていない。

だが、作ってみせる。

また奇跡を起こしてみせる!!

「ム……ン……スオオオオ……ツツツ!!!」

深く息を吸い、そして吐く。

上腕からエネルギーを生み出し、下腕を通じて手のひらへと通し、セルのエネルギー弾へと流し込んでゆく。

それを鼓動のように、幾度も、高速で繰り返す。

「む……何を……」

……下には、次々と訪れる危機に立ち向かう軍人達。

町の周りには、わけのわからない恐怖に耐えながら、それでも指示に従って逃げてくれた住民たち。

「こ、これは――」

ついに、技の放ち手が違和感に気付く。

だがもはや手遅れだ。

俺の注ぎ込んだ衝撃波エネルギーは、巨大なエネルギー弾の統合を破壊しつつある！

後は――

「プリカツツツ!! やれー!!!」

プリカ。

俺の隣の、自らは渋ったはずの歴史改変の結果……そう思ってきたいくつもの変化を前にしても、俺とともに歩み続けてくれた、友……恋人、相棒、ライバル。

俺とプリカは、世界を豊かに保つために、望む俺であるために、望む俺達であるために、ともに全力を尽くしてきた!!

「つああああああああ!!!」

注ぎ込むエネルギーを極大まで増加させつつ、押し返すためではなく、破壊のためのそれに変化させたプリカのビームが……。

「に、二度も押し合いで戦闘力の差を越えるとは……!!!」

……セルのエネルギー弾を、完全に打ち砕いた!!

だが、それでは終わらない。

「――ツツツツ!!!」

俺は未だあふれるプリカのゲロビに乗り、吸収し、散らばったエネルギーの星雲を突破する。

……セル。

奴の考え、全てを知ることにはできない。

奴の、何もかもを固定された生まれに、何も思わないわけじゃない。でも、それでも。

「セルウウウウツツツツツツ!!!!!!」

「くっ………!!!」

!!!!!!

エネルギーから抜けた俺の心には、蛮行への怒りだけがあり。背中はひたすらに熱く。

「死ねッッッッ!!!」

全パワー、全技術^{!!}を込めた拳をセルに――

「この分なら、連中が来る前に……いや、まだ少し楽しむ時間もあるな」

――拳はセルに掴まれ。

「ふんっ!!!」

俺はセルの掛け声とともに、背中から地面へと激突した。

……脳が揺れ。

意識が。

よたよたと、小さな足でレンガを踏みしめて歩く。

がっしりと、小さな腕で抱えるのは、大きな水桶だった。

「んッ、ほッ、はッ……」

さんと輝く太陽が、桶に跳ね返ってチラチラと俺の顔を攻め立てるのを少し恨めしく思いながら歩く。

一歩ごとに、水桶の重みに押しつぶされた肺から息が漏れて、力んだ喉から声が出る。

それが妙に楽しくて、リズムよく足を動かすことを、心掛けてみたりもする。

……そんな俺の体を、大きな影が覆った。

「せいが出るな、ソシルミ」

「あつ、父さん、こ、これも、鍛錬です、それに俺も、お手伝い、しないとッ……」

歩みと呼吸に合わせて細切れに俺が返すと、俺の今生の父親、アエ・

――は俺の顔を覗き込んで、朗らかに笑った。

俺は範馬として強くあらねばならないし、この世界で起きる出来事

についていきたい。

その点、このアエ家は代々武を重んじる家系で……それは鍛えるにも、俺を産み、育ててくれていてこの家に報いるにもちようどよかった。

……しばらく、父さんに太陽から守ってもらいながら歩いていると、前から……俺が水桶を運んでいるはずの向こう側から、心配顔の母さんがやってくる。

「ソシルミちゃん、大丈夫？」

「大丈夫、だよ、母さん、わざわざ、見に、こなくて、も」

鍛錬するのも目当てで、わざわざ自分から申し出たとはいえ、お手伝いをしているのにこんなな構われたら俺の立つ瀬がない。

若干、体相応の子供心に支配されながら、俺は少し口をとがらせる。が、そんな心の揺らぎがよくなかった、その瞬間、少し砕けてくぼんでいたレンガに足を取られ——俺は、必死に水桶を支えた！

「わわわッ……んぐッ!!」

「ソシルミ!!!」

「おいおい、大丈夫か!」

尻もちを通り越して背中から落ち、水まで浴びるハメになったが、水桶は、どうにか守り抜いた。

ほっとすると共に感じた目のにじみをこぼした水のせいにして、俺は答える。

「がぼ……、大丈夫です……」

「はっはっはっはっは、ソシルミはさすがだな!」

「ソシルミちゃん、怪我は、ああつ! お父さん!! 笑ってないで、なにか布を……」

強がって見せた俺を見た母さんは慌て、父さんはわざとらしく豪快に笑ってくれる。

俺はどうやら——

何か、長く夢を見ていた気がする。

ずっと留まっていたかかったような、いたたまれず、すぐ逃げ出したかったような。

——だが、そんな感傷に浸っていい時間がないのは、确实だった。

上空から飛来する影、足を動かせ、奴の飛来に合わせ——

「ツアアツツ!!!」

「それで迎撃のつもりかっ!!!」

蹴り上げようとした足を避け、セルの手刀が胴体を襲う。

回避は不能、輝く手刀で迎撃を——駄目だ!!

「ガハツツ!!!」

「浅いか、粘るものだ!!」

かろうじて手刀に手刀をぶつけて防ぐ、小指の骨が空気にさらされた。

だがまだ動かせる、技を使える……次の瞬間こそは奴に打ち込む。

そう誓いながら、防ぎそこねた分の衝撃を背の肉で吸収し、ダメージのかさんだ背骨と肋骨にむち打ちながらも、体ごとの回転に逃がす。

その勢いは俺を立ち上がらせ——次の瞬間、セルの尾が俺を再び、地面へと叩きつけた。

「グツツ!!! ……ズアアツツ!!!」

俺は叫びと共に、叩きつけの勢いを再び回転に変え、手刀に流し込み——手首から投げられ、民家を3つ壊した先のアスファルトに転がった。

「……ハア……ハア……」

三度立ち上がった俺は、呼吸でダメージを抑え、構えを取る。

あのタイミングでも駄目か、ならば……そう思考しながらふと、隣に相棒が居ないことを思い出した。

プリカはまだ来ない、感覚が曖昧で、まだ生きているということしか、俺には分からないが……。

……代わりに、またセルが現れた。

「はあああ——っ!!!」

上機嫌に突撃してきたセルのパンチにガードを重ねて、同時に、膝蹴りがみぞおちに突き刺さる。

フェイントですらない単なる同時攻撃、本来なら絶対に許さないよな、わざとらしいほどに稚拙なコンビネーションを前に、俺の体はくの字に曲がった。

「が……ハッツ……」

「おいおい、この程度で終わりじゃないだろう?」

答え代わりに、持ち上げた顔には満面の笑み、強がりだけではない本気の喜びと、逆襲の誓いだ。

……それに叩きつけるように、更なる膝蹴りが、今度は顔に、胸に、そして俺の頭を掴んだセルは、その残酷性を戦いに隠すのを、やめた。拳、足、尾、あるいは頭突き、文字通り遺伝子に刻まれているはずのフォームすらかなぐり捨てた、原始的暴力。

俺は殴られながらも、その技ですらない技を睨み続ける、……俺は、こいつを倒さなくては。

「技など関係ない攻撃を前には、さすがのきさまもかたなしのようだな、え? ソシルミ……!!」

「ガッツ……バ……そんな相手にわざわざ鬱憤ばらしか、貴様も趣味……グブツツツツ」

単に腕を振るっているようにしか見えないそれを見て、感じて……。

技の特徴はないか、隙はないか、反撃の手段はないのか、俺はいつまで持つ、皆は無事か、プリカは……。

殴られているのに、その暴力の奔流を前に、憧憬と歓びを感じている自分がいる。

歓びながら、黒々とした怒りに身を焦がし、戦友達の仇を取れと叫ぶ自分がいる。

耐えているのか、機を伺っているのかすら曖昧な戦闘意識の片隅に、どこか他人事のような、あるいは逆に、純粹に人間的な感覚が戻ってきたのか、正体の分からない追憶が顔をのぞかせた。

そうだ。

こんなことが……前にも……。

↓つづぐ

第四十八話：転生TSサイヤ人が手を取って握るまで

戦いの気配は不気味なくらいに静かで、なにもかもが息をひそめて
いる。

煙の上がる空は穏やかで、野焼きならばよかつたのに、なんて、思っ
てしまつて。

オレは、この、煙の上がる瓦礫の山を見ながら。

遙か下で練り広げられる、ソシルミとセルの戦いを見ながら、思う。
こんなことが、前にもあつた。

セルが振るう……ソシルミへの、暴力。

全身に刻まれた傷とあざ、肋骨があるはずの胸は攻撃が当たる度
におかしなへこみ方をする。

手足の骨も、いくらかは無事じゃない……遠目にも、ひどくねじ曲
がつた指が見える。

——ソシルミが諦めていないだけで、こんなの、もう戦いじや
ない。

セルへの怒りを心の奥に詰め込んで、必死に息と気を整えながら、
オレは思い出す。

……ソシルミと出会つた日の最後。

魔族を倒しに乗り込んだ魔神城での戦いの終わりに、魔族の長、ル
シフェルは『魔凶星の土』を使って圧倒的なパワーアップを果たして、
オレとソシルミを打ち負かした。

あしらうのような一撃で倒れたオレの、ぼやけた目に映つたソシルミ
と、ルシフェル。

ルシフェルはソシルミを殴つて、蹴つて……怒りをぶつけてた。

その光景と、今起きていることが、ダブつて——

「——違う！」

オレはセルの地獄耳を一瞬忘れて、叫んでしまつた……なにが違う
と言おうとしたのかも、わからないまま。

はつとして、オレはセルをじつと見るけど、幸か不幸か、セルはソ
シルミに夢中で、気づいてない。

「セル、おまえの相手は……」

……オレは、気と怒りをこぼさないように、ゆつくりと、二人のところに降りていく。

昔のことを思うと、オレはずいぶん、自分の血……この命を毛嫌いして、ひどい扱いをしてきた。

それでいて、戦いは楽しんで、大好きなソシルミとか、悟空との絆になる時だけはあるがたいなんて思ってしまった。

どうしようもなく勝手だ。

でもオレは……。

……オレたち、オレと悟空の親が、オレたちを愛して産み出して、生き延びさせるためにこの星に送り込んでくれたという言葉を、信じてる。

自分の親に捨てられて、ずっと親代わりの人に育てられていたソシルミが言ってくれたあの言葉、オレにだけこっそりと教えてくれたオレのお母さんの名前……『ギネ』。

それを、心から、信じたいと思ってる。

だから――。

「っがあああああ!!!」

オレは気を全開まで高めて、全力の舞空術で落下を早める。

目指すはセル、ライダー・キックだ!!!

「!!!
!!!
!!!
!!!」

セルはオレの攻撃を物ともせず、防ぎながらも、掴んでいたソシルミの頭を離した。

ソシルミは体を支えきれずに、地面に落ちてうめき声を上げる。

オレの怒りは、それで溢れた!!!

「――セル、おまえの相手は、オレだっ!!!」

「ほう……なにをやる気だ？ この状況できさまに使える技など……」

セルは笑ったまま、オレを見る。

でも、それより気持ち悪いニヤけ面が、セルの足元にあった。

その顔は、なにかを思い出すようで……多分、オレと同じ日を、思

い出しているんだ。

何日か前、ソシルミとオレは、これからのパワーアップについて話していた。

フリーザとの正面对決に必要なパワーは、これから鍛えても絶対に手に入らない。

それで、まず思いついたのは、サイヤ人が瀕死から回復するときのパワーアップだったけど……

それは、一度事故で似たような状況になったとき、特にパワーが上がらなかったことを思い出して、やめた。

（パワーアップのブレ幅が大きすぎるし、瀕死にしたりされたりするときの心へのダメージが、戦いに影響しかねないほど大きいと思っただからだ）

次に、界王拳……でも、界王拳を使うにはオレの気の操作は大雑把すぎる。

最後は超サイヤ人、これが本命だ。

穏やかな心と強い怒り、十分なパワーを持ったサイヤ人が覚醒できる、超強力な変身。

髪が金色、目が青色になるだけのシンプルな変身だけど、戦闘力はなんと50倍にハネ上がる。

……でも、オレの心は穏やかじゃないし、第一実力も足りない、足りてるのは怒りっぽさだけだ。

それでも、ああ、今すぐ超サイヤ人になれば……！

なんて冗談交じりに叫んだオレに、ソシルミはいきなり神妙な顔をして、『うなじの辺りに意識とパワーを集中しろ、それが『コツ』らしい』と、教えてくれた。

……はつきり言つて、ソシルミはオレよりずっとドラゴンボールオタクだ、オレの知らないことを知っていても、おかしくない。

でも、そんな理由がなくても、オレはソシルミのアドバイスを疑ったりなんてしない、事実オレは、それを信じ切つて、今気を高めている。

「は……あ……っ」

「……お、おいきさま、まさか」

「あ……あ……!!」

ソシルミの教えてくれたやり方で息を整えて。

ソシルミの教えてくれた場所に。

ソシルミと深くつながって磨かれた技術で、気を送り込む。

ソシルミを思っただけ燃え上がる怒りと、いっしょに。

「まさかきさま!! さ、させるか——」

「おいおい、俺はタッチを受け入れた記憶はないぜツツツツ!!」

オレを止めるために走り出そうとしたセルの甲殻に、ソシルミの輝

く指が、まっすぐなのとねじ曲がったのを一緒にした指が、突き

刺さる。

「こ、このくたばり損ないが!!」

セルはソシルミを引き剥がそうと暴れて……でも、ソシルミは粘り

強い、絶対に、死んでも離さない。

……心も体もソシルミに守られながら、オレは最後の集中に入っ

た。

「が……ぐ、……おお……!!」

ずっと濁っていた雄叫びが、段々と、澄んだ叫び声に変わる。

怒りを燃やしながら声が落ち着く矛盾は、きつとオレが、拒んでき

たものを受け入れたから。

「あ……ああ……はあああ!!」

……ソシルミが連れ出してきて、ソシルミと一緒につかんだ居場

所。

悟空やチャパさん、ピラフやルシフェルたちの暮らすこの星の平和

を壊してきたやつへの怒り。

そんな怒りの根っこはきつと、ソシルミが褒めてくれた、優しさだ

から。

「ふんっ!!!」

うっとおしい前髪が、ゆるやかに垂れたまま金色に輝いて、吹き上

がるオーラにたなびいた。

全身から、怒りと喜びと戦いへのわくわくが湧き上がってくる。

「……よっ」

「なんということだ……!! しかも、バカな、この戦闘力での超サイヤ人への覚醒は……」

のんきに驚くセルに、オレは指先を向ける。

オレが覚醒の余韻にでも浸ると思ってるんだろうが、そんな余裕はない!

「どどん!!」

「なっ……」

セルは防御姿勢を取る余裕もなくオレのどどん波に飲み込まれて、遠くの瓦礫へと吹っ飛んだ。

ソシルミの体は、さつきよりずっとボロボロだ、オレの集中する時間を確保するために、セルに必死に食らいついて、さらにひどく攻撃されたから……。

でも……それでもソシルミは、そんな体でセルの方向を睨んで、しつかりした構えをとっている。

いつもの、オレが……皆が好きなソシルミだ。

ソシルミはそんなオレに心配は無用だというように、口元だけで笑った。

「悪くないぞ、プリカ」

「……なにが?」

「お前の金髪碧眼も、悪くない」

オレは超サイヤ人になったばかりで加減の出来ない足を抑える。ただでさえ髪と目の色が変わってるのに顔まで赤くなった。

ソシルミはオレの葛藤を見抜いたようで、自分も恥ずかしそうに笑って、それから、セルが飛んでいった方を気にしながら、傷だらけの手で腰の仙豆をとって食べた。

「……ガリ……ムニユ……ング……うむ、元通りだ」

治るところは少しだけ気持ちが悪いけど、元気になっていくソシルミを見ると、オレの気持ちも安らぐ。

ソシルミも、またまじまじとオレを見て……、それから、少しだけ

渋い顔になった。

「戦闘力で言えば100倍は下らないか、ずいぶん差が開いた」

「……おまえも拗ねるんだな」

「俺をなんだと思ってる、最強を目指すってのは自信過剰だけじゃ駄目だ、弱さを認めるのも過剰なくらいでない……」

オレはソシルミの口に手をあてて、ソシルミの言葉を遮る。

今起きたことは、全然違うからだ。

「ソシルミ、強くなったのはおまえもだ、そうじゃないのか？ オレが強くなったら、おまえもずっと強くなるはずだ」

また恥ずかしいことを言ってしまった……しかも、今回は動作つきで。

言うそばからちよつと後悔しかけてるオレの前で、ソシルミは百面相をかみ殺す。

それから、真面目で……それでいてわくわくした顔で、『ちようだい』にした手を向けてきた。

「……プリカ、パワーをくれ」

「好きだけもってけ、ドロボー」

その言葉に含ませた意図を受け取ったソシルミは、まだ少し口をもごもごさせながらオレの手をとって、気を抜き取っていく。

何度も繰り返した技だからか、取り込める量が上がってるらしい。一通り取り込んだのを感じたオレは手を引こうとして……ソシルミに、ぎゅつと掴まれた、

いや、いくらなんでも……!!

「お、おい、とりすぎだ、大丈夫か!!?」

ソシルミの筋肉は音を立てるほど筋張って、血管も浮き出て……少し、鼻血が垂れた。

気は生命エネルギーでもある、受け取りすぎは体への影響も大きいんだ。

でも、そんな症状もオレの心配も物ともせず、ソシルミは取り込んだ気を操って、なじませて、体の表面にまでまとわりつかせていく！
「グッ……クク、俺もこの戦いでいくらか掴んだ、それに、……ム

ンツ……少しは、ハハ……男を見せんとな」

「いや、十分——さてソシルミ、セルが……!!」

十分見せられてる、と言おうとした言葉は、セルが起き上がって、気を高め始めてるのを見て吹っ飛ぶ。

「この土壇場で超サイヤ人に目覚めるとは驚きだが……たつたそれだけのパワーでわたしにかなうかな!!」

セルはブスブスと煙を上げているのに、ダメージを感じさせない声を上げて、両手を上に上げて技を作る。

小さな、でも強力なエネルギー弾……デスボールだ!!

超サイヤ人になったオレのパワーでギリギリか……足りないか、そんな凄まじいパワーを秘めた技。

それを見たオレは、超サイヤ人になったことで手に入れた自信を失いかけて……ソシルミは、また笑った。

「行くぞ、セルツツツ!!」

「気を取り戻したからと調子に乗るな、きさま!!」

オレが止める間もなく……いや、オレはもう止めようとも思えなかった。

ソシルミは、そのままセルへとすつ飛んでいく。

セルは向かってきたソシルミにデスボールを投げつけて……。

……デスボールは、ソシルミの振りかぶった両腕に激突して、その纏った気をメリメリと剥がしはじめた。

「ふっ、プリカそのものならまだしも、纏っただけのきさまでは——

——む!!?」

「……ツツ!!」

全部のオーラを剥がされても、ソシルミは力負けしてない!

どうして……音を立てて弾け跳ぶ金色の気と……服の、背中。

「打^ダアリアアアツツツ!!」

「なっ……!!」

溢れたオーラを剥がされながらも、ソシルミはその両腕でデスボールを空の彼方に弾き飛ばして、そのままセルへと振り下ろした!!

「ぐ、おとおっ!! バカな、プリカから補充された気だけでは……、

まさか!! アエ・ソシルミ特有の変身——」

「——なるほど、お前の歴史の俺も掴んでいたかツツツ!!!」
現れたソシルミの背中には、あの、人の筋肉が作ったとは思えない形。
鬼の貌になっていた。

「極限状態、そして……オレの気をあふれるほどに吸い込んだことが、ソシルミの覚醒を促したんだ。」

「まだ浅いか、まだ驚きだけか、セルツツツ!!!」

「ふん、きさまの戦闘力が何倍になろうと、わたしの前では——」

「ハハハハツ!! ならば、鬼の貌の真価をしてみるかい!!!?」

「だけど、文字通りソシルミの力になれたとか、オレとソシルミのパワーなら届くかもしれないとか、喜んでる余裕もない。」

「笑うソシルミは、そのまま八千拳の構えになって……満開の拳を放った!!」

「——ツツツツツ!!!」

「このわたしにそんな連撃など……!!」

「セルは余裕でソシルミの連撃をさばくけど、オレは知ってる。」

「範馬勇次郎は、連撃も強いんだ!!!」

「こ、これは!?!」

「お前ともあろうものが、目の前の相手の技も見抜けないか!?!」

「……そうか! 背筋を軸とする変身ならば、連打の速度と精度までも……!!」

「さあ、それが分かったお前はどうするツツツ!!!」

「ソシルミの挑発に、セルは見て分かるくらいに怒って……。」

「どうするだど? 策など必要ない!! はあーっ!!!」

「……気を更に爆発させた!!」

「これは……ツツツ!!!」

「まだ余力があるのか!?!」

「感じるだけで震えがくるパワー、これがセル……さっきまでは全然本気じゃなかったんだ。」

「きさまらを殺すには十分だからこそその余裕だ、それを忘れたわけ

ではあるまい!!!」

いきり立ったセルは、急激に拳の速度を上げた!

ソシルミの……ぶつけ合っていた拳から、攻撃のかすめた顔や胴体から、血が飛び散って霧になる。

……もうソシルミだけでは限界だ。

一方の、オレは準備完了、もう十分観察させてもらった、ここからは——

「だあーっ!!! バイナリ・スター・モーニング!!!」

「ぐっ……!!! プリカめ、奇襲は何度も通じんぞっ!!!」

カットに入ったオレの攻撃を、セルは声を上げながらも防ぎきつた。

久しぶりに使うバイナリ・スター・モーニング、手を飲み込むように膨らませた気弾で殴る、技術をないがしろにした古い技だ。

でも、パワーを持って余してる今のオレにはこれがちょうどいい!!!

「続けて……っ!!! スター・トライナリ・ケンタウリ!!!」

輪を振って作るシャボン玉みたいに、バイナリ・スター・モーニングからたくさんの気弾を作って、セルにけしかける。

大丈夫……制御できる、超サイヤ人は頭に血が登っても、冴えてるんだ。

「ちっ!! サークラス団でも始める気か!? こんな芸で……」

「そうかな、美しい『武芸』じゃないかツツ!!」

オレと気弾とソシルミの連携はお互いにパワーアップしても、完璧のまままだ!

でも……それだけじゃ終わらない。

さつきソシルミがオレの気をまとりつかせる時に潜ませておいた、小さな気弾を呼び出し——

「ふん、また伏兵か、こんなもの……」

——ながら、バイナリ・スター・モーニングの気弾を膨らませて、セルに投げつける!!

「そして二段構え、バカの一つ覚えとはこのことか、通じんといったはずだ!!」

セルはそれを軽々とよけて、同時に襲いかかるソシルミの拳と、スター・トライナリ・ケンタウリの軌道もかわす。

死に体になる瞬間は一瞬もない、でも、気弾の中から現れたオレの指先にともる光を見逃す瞬間はあった!!

「!!! まさか!!」

目を丸くしたセルは、オレから距離を取ろうとして……界王拳を発動したソシルミに、腕を掴まれた。

セルにも悟られなかったオレの意図を、ソシルミはしっかりとわかって、準備してくれていたんだ。

「は……離せ!!」

「魔貫光殺砲!!!」

オレの魔貫光殺砲がセルの頭に突き進む。

ずっと前に使ったパチモンじゃない、本物の魔貫光殺砲!

貫通に特化することで注ぎ込む気の量以上の威力を持ったこの技は、セルの頭を貫くのに十分!!

セルは再生能力を持っているけど、その核は頭にある、だから、弱点は人間と同じ。

おまえの変えた歴史もここまでだ、セル! オレは内心そう叫びたい気持ちをごらえて、技に集中する。

「こ、この………」

セルはかろうじて自由な手をかざして、魔貫光殺砲の軌道に置く、でも手のひら一枚じゃこいつを防ぐには――

――でもその瞬間、セルはその表情を焦りから……『気付き』に変えた!

なにかヤバい!!

オレとソシルミは直感するけど、追い打ちをかけるにはとても間に合わない。

自分が焦るハメになったオレが睨むセルの手が、あの何度も見た『輝き』で光って……。

そこに命中した魔貫光殺砲は、僅かな擦り傷だけを残して、飛び散ってしまった。

「なっ!!!?」

「くくく!! ツツツツ!!」

こんな、この技が来るはずがない、これは『セルの歴史』のソシルミの技じゃないはずだ!

ここに来て、やつとオレは思い出した……セルはセルはオレとソシルミの驚きに心地よさを感じたのか、得意げに笑う。

「ふう……ふう、この私の世界中からかき集めた武道家の才覚と知性……甘く見ていたんじゃないかね?」

「……なるほど、だが俺にとっては、武道家というのは楽しみやすい、最高の相手だ」

ソシルミの買言葉を見て、セルは更に大きく笑った。

「ははは!! では、……そろそろ、殺すとするかな」

本気なのか、ただ脅してみただけなのか、やたらと物騒な言葉とともに、セルは気合をこめていく。

多分これが本当の戦闘用パワーなんだろう。

「はあ……ふう!!」

巨大なパワーにも関わらず、それはけっこう、早く済んだ。

……今までの、何割増しかくらいで。

でもそれは……。

「どうだ、これくらいでも絶望的な感じがするんじゃないか?」

まったく、セルの言う通りだ。

セルはソシルミだけが使えた強力な技を使えて、素の技術力も高く、パワーまで上がってしまった。

ソシルミすら、恐怖をにじませていて……。

それでも、冷や汗をかきながら軽い感じで答えた。

「確かにな」

「……ふん、わざと言葉を受け入れて強がっても意味はないぞ」

「違う、お前の強さがわかって感じるのには恐怖だけじゃないから、認めるのさ、俺は……」

セルに真正面から向かって言う、強がりじゃない、ソシルミが本気

で放つ言葉。

その続きはもうわかっている、わかって……オレのこわばった顔が、口だけ緩んだ。

「わくわく、してきた」

恐怖じゃなく、興奮に震える声。

その『わくわく』が、死を目の前にして湧き上がるものだとしても、オレの心は、その声と背中で勝手に励まされてしまう。

そんなオレの隣で、ソシルミは『輝く手』を構えた。

つまり、使うのは八手拳でも気力大移動でもない、輝く手の精度を極限まで高めて使う、変幻自在の連撃だ!!

「武道家同士、楽しく試合しようかツツ!!」

「楽しむ? ただ殺すだけだ、きさまらを!!」

二人の『輝く手』、それとオレの拳と気弾が再びぶつかり合う。

ソシルミの繰り出す技は常に的確だ、頭と反射神経の組み合わせが、最適解を導き出し続けているんだ。

オレの振り回す、手足の先と衛星軌道の技も、セルの意識の端ギリギリを狙い続けて、攻撃をぶつけてる。

……でも。

「グッ……!!」

「ソシ——ぎっ!!」

オレの腕から血が出る、胴体をかすめたパンチで、内蔵が揺れる。ソシルミは……その、何倍も傷ついている。

前衛後衛だとか、策だとかを考えない全力の連携攻撃も、セルには通じない!

そんなオレたちの様子を見て、セルは……何も表情を変えずに、ただ黙って拳を振る。

「……………!!!」

「グボ……だんまりとは、つれないな、セル!!」

ソシルミが血と一緒に吐き出した言葉にも、セルは答えない。

セルに、もう遊びも余裕もないんだ。

それはオレたちも同じで……いや、ソシルミは、回復したはずの気

がまたもうほとんどなくなつて、ダメージも限界に……。

(ソシルミィ！ このままじゃジリ貧、いや……もう……)

(……だが、技が完全に通じないってわけじゃない)

ソシルミのか細い念話は希望を伝えてくる、でも、オレにその希望をつかめるとは思えない。

オレたちの技は多分、セルに届く……。

だからこそ、セルはもう遊びなく確実にオレたちを殺しにくる、セルはそういうやつだ。

「お前と戦えばこうなることは分かっていた、セル……だが、俺もただ何も考えずにやつてるわけじゃないさ」

ソシルミは言葉と笑みを絶やさない。

血を吐きながら、零しながら、もう皮より肉が多く見えてるような手を鋭く振る。

その笑い顔には、いつものよろこびや皮肉とは違う、別のニュアンスが溢れて……。

その気が、オレにしかわからないくらい小さくだけど、黒く濁った。

「……そろそろだ」

ソシルミが、ほくそ笑みながら空を見上げる。

……なにを見てるんだ？

「一体なにを待っている、ソシルミ……！」

「……さてな」

ソシルミはセルから意識を逸らさなまま、空の一点を見つめている。

そして……。

「まさかソシルミ、くだらん時間稼ぎじゃないだろうな!!」

まだ空を見つめるソシルミに、しびれを切らしたセルが遅いかかる!!

時間稼ぎ？ 息を整える時間一瞬のために、こんな手を使うなんてありえない。

そう叫ぼうとしたとき、オレはようやくやく気づいた。
なぜか、オレの手が持ち上がってる。

「え？」

(貫うぞ)

ソシルミはいつの間にか上がったオレの手を掴んで、気を勝手に抜き取った。

気を取られたオレがそれを感じる間もないくらいの一瞬の後、ソシルミの体がセルに飛び込んで、足が跳ね上がる!!

「借^{シヤ}アアアツツツ!!!」

「!!!」

オレから引っこ抜いた気を、そのまま体に流し、流した部分を駆動させて加速へと回して……足へ!!

普段の気力大移動とは反対の順序、地面を蹴らないの以外は全く同じ、でも、桁違いの威力だ!

それを食らったセルの頭はまるで花みたいに弾けた!!

「敵を欺くにはまず味方から、気付かずに準備してもらおうのは骨が折れたが……功を奏したようだな」

「でも、ど、どうやってオレの気を……」

思わず口に出した言葉の答えは、言わなくてももうわかっている。認めたくないだけだ、……無意識へのテレパシーに応じて腕を上げて、気まで渡すほどべったりな自分を。

ソシルミは自分で答えが分かっている質問をしたオレに、視線を向けないままニヤつきを返して、トドメのためのパワーを……。

……その瞬間、セルの弾けた頭の真ん中の肉が裂けて、目が覗いた。

「——プリカツツツ!!!」

先に動いたのはソシルミだった。

次の瞬間、その『目』から飛び出すビームからオレをかばって、吹き飛んだのも……!

「ソシルミっ!!!」

「まさか……わたしが、予知能力を不安視しているというだけの情報から、ここまで仕込んでくるとは……」

セルがしゃべって、オレは一瞬本当に、恐ろしさじゃなく、気持ち悪さ、おぞましきでビビる。

一体どこから喋ったんだと思って見れば、セルの弾けた肉の首元が割れてできた穴……それが新しい口だ。

それからすぐ、みるみるうちにどんどん肉が膨らんで、びろっと垂れ下がっていた周りの肉や皮もまとまりはじめた。

緑色の粘液を垂れ流しながら粘土のように頭がこねられて……もとの形ができる。

……それを見て、やっとオレの胸に、おぞましき以外の感覚が戻ってきた。

ただでさえ圧倒的なパワーなのに、殺せるはずの方法で殺せない。オレは目の前が暗くなりながら、セルに聞く。

「コアを……隠したのか」

「やつの土壇場での逆転劇はあなどれん、警戒に警戒を重ねて損はあるまい……さして!!」

声を荒げると同時に、セルは爆発音じみた風音を立てて、ソシルミにトドメをさすため、地上に向かう!

駄目だ、ソシルミが殺されたら——

「ま、待てっ!!」

当然、セルは待たない。

オレのスピードじゃ、セルには追いつけないし、残ったスター・トライナリ・ケンタウリの気弾を発射しても……。

「ふん、こんなチンケな技でわたしを止めるつもりか?」

セルは速度を変えないまま向き直って……ソシルミの（本当はシユラの）衝撃波を撃つ!!

衝撃波は、オレの気弾の特徴を完全に捉えてはいないけど、ソシルミを遥かに越えるパワーは、気弾を消し飛ばして、オレまでその渦に巻き込んだ!!

「……………っ!!」

シヨックと同時に全身はめちやくちやな方向に引きずられて、皮膚は『かまいたち攻撃』でも食らったみたいに裂けていく。

でも、この痛みなんてどうでもいい。

オレにとって一番大事なのは——

「ソシルミっ!!!」

衝撃波の嵐の向こうに見えるソシルミの気は弱りきっていて、それでも立ち上がろうとしているけど、もう体を支えるだけの力も残っていない。

ソシルミを殺させるわけにはいかない、でも、もうセルは攻撃の準備を完了していて。

オレが目をつぶるのを必死にこらえながら見ている中——ソシルミに飛び込んだセルは、右脇腹、帯の部分を大きくえぐった!!

「~~~~ツツツ!!!」

「どこだ……どこに……あつたぞ!!!」

心臓でも頭でもなく、右脇腹をえぐったセルは叫ぶ。

オレは疑問を感じながらも、心の大半を、ソシルミが生きていてよかった、というだけの思考に奪われてしまう。

でも、その答えはすぐにわかった。

……血しぶきの中に散るのはソシルミの血肉と、服の切れ端、それに……仙豆だ。

セルはそのまま、仙豆に向けて噴射型の気功波を撃った!!!

「ああっ!!! く、くそっ、仙豆を!!!」

「……はあ……はあ……、やはり、そこにしまっていたか……!!!」

やはり、つまり、セルは仙豆の場所を知っていたのか……?

……そうか、セルはきつと、前の歴史からこの歴史まで観察したソシルミの行動パターンから、ソシルミがどこに仙豆をしまったのか、覚えていたんだ。

でもそんなことは重要じゃない、オレたちは……唯一の回復手段を失ってしまった。

重症のソシルミを治す、たった1つの手段を……。

「グ……せ、セル……!」

「やはりきさまは、これくらいではくたばらんか……!!!」

ソシルミは血を吹き出し、なんでかはわからないけど、左の、残った帯を抑えながら膝をつく。

……地球人の限界を遥かに超えたダメージだ。

目はうつろで、手足に力はなく、オーラすら、もう漏れていない。そんなソシルミを仕留めようとするセルの技は……ただの手刀でしかない。

でもそれは、自分の歴史改変をジャマするソシルミへの本気の鬱憤と恐怖と怒りが籠もった攻撃。

その全身全霊の攻撃は、間違いなく最高の威力だ……、今のソシルミには……。

いや、仙豆で回復した直後のソシルミにもそれを防ぐことはできない。

止めなくては、オレの命をかけてでも!!!

オレは二人の間に飛び込むため、全力の気を開放しようとして……。

「……………ッ」

……ソシルミの目が、赤く光るのを、見た。

見てしまつて……動けなくなった。

「死ねいっ!!!」

ソシルミに戦意がある、それを見守るのは、オレにとつてずっと、絶対のことであり続けたからだ。

だから、体が先に止まつてしまった。

……オレだけの幻覚かもしれない、とも思う。

そう……これは、オレがソシルミから吹き上がる意志を勝手に感じ取つて見た幻覚かもしれない、と！

「アッッッッ!!!」

「なっ!!!?」

ソシルミが、雄叫びですらない、肺から空気が漏れただけの声を上げて、それを追いこすように深く深く踏み込む。

オレの感覚でもわかるほどとてつもない気の……気とは少しだけズレた何かの、爆発。

それは……亀仙人と鶴仙人が昔使った魔封波や、鶴仙流との技術交流で見た気功砲……つまり、命を犠牲にする技が放つパワーだ。

「ソシルミ……!!!」

でも、オレはそれに不安を感じない。

ただただ、そうかやるのか、としか思えない。

ソシルミがやるなら、きつとどんな技でも、なにもかも投げ出すよ
うなものじゃない。!!

「極キイイアアア!!!」

踏み込みきつたソシルミが放つのは掌底、手の輝きは見たこともな
い形と色!!

「う、うおおおおっ!!!」

叫ぶセルに向けて、ソシルミの掌底が向かい——瞬間、太陽拳
以上の光と、感じたことのないほどの気の爆発が町を包む。

一瞬だけ、1秒にもならない短い間だけ、オレも意識が曖昧になっ
て……。

「ど……どうなった……」

目が働くようになるのと、衝突で起きた土煙が晴れるのは大体同じ
くらいで……。

煙の中、1つの影が、声にならない声を上げた。

「……ッ……」

……そこにいたのは、腕を振り抜き、そのまま倒れようとしている
ソシルミ。

そして、その掌底を防ぎきつた、腕をクロスさせたままのセル。

「あ、あの技を正面から……!!」

力への絶望、恐怖、理不尽への怒り……あらゆるものが混ざりあつ
た感情が、オレの中で駆け巡る。

あの技……ソシルミが使った技は多分、命がけで撃つ気功砲の気の
動きを、拳術として使ったものなんだろう。

ずっと格上の相手にも通じる、命がけの技、それをソシルミが使っ
てもだめなのか……!

オレがそう思った時、音が聞こえそうなほど大きく、セルの体が震
えた。

「……かはっ……」

続けて、吐血!!

人間とは違う色の体液が、口から飛び出して、全身の殻の隙間からもにじみ出た。

気持ち悪い、というより……わけがわからない、ソシルミの技が効いたのか!!!

「まさか……こんな技を持つているとは……だが……終わりだ!!」
セルはふらつきながら、ソシルミへと向かっていく。

止める……いや、このままオレがセルを倒す!!!

「セル!!!」

「まだきさまがいたか……く、使いたくはないが……!!! ふん!!!」

セルはオレを睨むと気合を込めて、真っ赤なオーラを拭き上げる。
界王拳のオーラ!!

ソシルミの技を防いだのはこれだ、オレがそう理解したときには、セルはオレに腕を向けて、衝撃波を放っていた!!!

「はあーっ!!!」

「ぐああっ!!!」 ソ、ソシルミーっ!!!」

衝撃波に飲み込まれながら……オレは思わず、その名前を呼んだ。
助けを求めたいのか?

違う……。

ただただ叫んだ声は、衝撃波の中に掻き消えて、オレは瓦礫に激突した。

動けない、頭をやられたのか、瓦礫を濡らしている血は、流しすぎて死ぬ量なのか。

骨も折れてる、筋肉も……無事なところがない。

……オレは立ち上がろうとして……無理だった。

セルも、オレを仕留めたと判断したんだろう、セルはソシルミに向き直って……。

また、血を吐いた。

「はあ……はあ……がはっ!!!」

界王拳の反動……繊細で負荷の大きい技だ、セルみたいな特殊な体で使えば、なにが起こるかかわかったもんじやない。

セルも必死だ。

「これで……終わりだ、歴史の変わり具合が多少気にかかるが……
あとは……後で……」

その必死を引き出すのが限界で、オレたちにはもう、手が無い。
セルは気功波をチャージして、完全にソシルミにトドメをさす気
だ。

オレは気を……ソシルミに向けて送ろうとする。

まともに残ってない気で、効率が悪くても……でも……。

「ソシ……ルミ……」

また、女々しく名前を呼ぶ。

好きだから、愛してるから死んでほしくないのか？

……それだけじゃ……ない。

血と気が足りなくて朦朧としてきた意識では、自問自答も、まとも
にできなくて……。

「死ね、ソシル——」

「——ソシルミさん!!!」

気功波に割り込んだ声、影!!!

「なっ……!!?」

「……!」

オレとセルが、同時に目を見開く。

普段のオレたちから見ればのろすぎるそれでも、疲れ果てたセルが
技を引っ込めるのには十分で。

影………サイボーグの人がソシルミを投げ上げて……そのまま
体を気功波で粉々にされるには、十分な時間が、あった。

胴体がなくなつて、首から先だけになった軍人のその顔は……ほっ
とするように、笑っていた。

オレはその人の顔を見て、ソシルミを救ってくれた感謝でも、セル
への怒りでもなく。

深い深い、共感を抱きながら、意識の限界を迎えて、まぶたが落ち

指先が、土をかいて。
頭に……自分の声がひびく。

母さん。

……落ちた意識が浮き上がる瞬間、オレは、そんな言葉を頭に浮かべていた。

オレが、母さんと呼ぶのはたった一人。

そもそも一度も話してないこの人生の母親じゃなくて……前の人生の、前のオレの、母親だ。

20年も使ってない言葉、なんでオレは、今……。

関係ない。

意識が戻ったなら、立ち上がらないと、ソシルミは無事か？

目が霞んで見えない、視界に見える髪の毛は黒、超サイヤ人は解けているんだ。

勝算は薄い。

でも、オレは土を握って、必死に体を持ち上げようとしていた。

ソシルミを助けられないといけないから、動いたんだ。

膝が震える、セルの叫び声が聞こえる。

ソシルミ……ソシルミはオレにいろんなことをしてくれたな。

ソシルミは、自分を閉じ込めながら大猿として暴れて鬱憤を晴らす歪んだ暮らしをしていたオレを、仲間として、迎え入れてくれた。

転生者なんだと確信を持つ前から、文明的な生活と、トレーニング環境、そして、たくさんの思いやりをくれた。

適切な呼吸を、ヨガを思い出す。

光が、段々と戻ってくる。

ソシルミは自分の親代わりのチャパさんとオレを引き合わせて、自分の家族同然の道場の、仲間にしてくれた。

そして、オレがわからなかったサイヤ人の内情、オレの知らない、TVスペシャルとは違う歴史を教えてくれて、オレに……家族がいるんだということ、教えてくれた。

自分は、家族に捨てられ、名字も名乗りたくないのに。見えるようになった目には……さっきのダメージを回復したセルと、ボロボロのソシルミが、映っていた。

セルはなにかを叫びながら、倒れたソシルミを蹴る、持ち上げて殴る。

オレが暴力だと思ったさっきの攻撃とも違って、もう抵抗もない……。

「……あの……機械……!! レッドリボン……百分の……なくせ……!!」

セルが言ってるのは多分、サイボーグの人のことだ。

あの人……あの人、ソシルミが救った人間だ。

セルはきつと、あの人がどうしてソシルミをかばったかなんて、考えもしないだろう。

弱っていたオレの心臓に、強い鼓動が戻ってきた。

気も、使える……。

「う、あ……ぐ……」

オレは気をためる、かき集めて、うなじに送っていく。

なったらさすがのセルも気づくはずだ、だから、やれることは一つ。

……決まってる!!

「つつああああ!!」

「!! プリカだと!! 貴様生きて——」

金色のオーラが出た瞬間、それを光に変えて太陽拳!!

しっかりと効くのは期待してない、オレは……セルの足元に倒れた、ソシルミの手を掴む。

体温の低い手をとって、体を引き上げて、抱きとめて。

……そういえば、母さんと出かける朝は、いつも。

いや、そんなことを思い出してる場合じゃない!!

「大丈夫か、ソシルミ!!」?

「は、はは……なるほど……さすがはアエ・ソシルミが選んだだけのことはある、だが、プリカ……ははは!!」

ソシルミをかつさらわれたセルは、それでも笑いながら、攻撃をし

かけてきた。

「っ!! なにが!!」

攻撃を避けながら、防ぎながら、オレは。

『なにがおかしい!』と言おうとするけど……オレにはもう、セルがなんで笑ってるのか、わかっていた。

「アエ・ソシルミは死んでいる!! 心臓は止まり、気もない、頼みの綱の仙豆もありはしないぞ!!」

「だ……だからっ!! どお……したあ!!」

わかっていた、オレだって、ソシルミほどじゃないけど、気のこと、体のこともよく知ってる。

……死んでるんだ、完全に。

でもオレは戦うのをやめられない、やめられない、やめたくない?

「哀れなやつだ……まあいい、すぐに終わるだろう……!」

セルにはさつきまでなかった余裕が、戻っている。

一方のオレは、なんで自分が戦っているのか、自分が何に突き動かされているのかも、わからなくなっていた。

そんな中、思い出せたことも、ある。

母さんと呼んだ、理由だ……。

オレの前世の母親……母さんは、少し体が弱い人だった。

体の弱さからこもりがちの母さんを見て、オレは、子供心に、母さんに外の色々なものを見せたいと思ったんだ。

だから、あちこち行きたいとねだっては、朝、渋る母さんをベッドから引っ張り出した。

でも、それは、母さんの体に負担をかけるだけ……。

……いや、母さんは楽しんでくれた、動くのが、いい方向に働くこともあった。

頭では、そうわかっている……。

それでも、それに気づいたとき、オレの心の一つの枝は、ぽつきりと折れてしまったんだ。

「まだ諦めんとはな、だが……」

その一件で、オレが自分をだめな人間だと思いだんだりしたわけ

じゃない。

でもあの頃から、オレは自分の意志で人に触れるのを、嫌がるようになった。

人に流されるわけでもなく、人を動かすことができるわけでもない。

ただただガンコなだけの人生、それは、ずっとずっと続いて、その人生が終わった後も……。

「……ミ……ソシルミい……!!!」

そうだ、それを、救ってくれたのが、ソシルミだったんだ。

「うおおっ!!!」

「叫んでも、もう気など残っていないはずだ!!!」

わかってない、人間の、武道家のことをなんにも!!

愛する人を思っただけで叫べば、そんなものはいくらでも湧いてくるんだ。

セルは、ソシルミがやってきたことを、単なるイレギュラーとしてしか見てないんだろう。

オレはソシルミを抱いたまま、片手でかめはめ波を作る!

「オレとこいつが初めて会った日、こいつはオレに地球の命運を託して大猿にした、どうなったと思う?!!」

「目論見通りルシフェルの野望を阻んだが、ルシフェルを取り逃がしたな」

「こいつは初対面の、狂った大猿に、情けを教えただ、敵まで……助けさせたんだ!!!」

地球の人間にとつては大迷惑な魔族、でも、ソシルミはあいつらでも殺したくないと、オレに漏らした。

部下を殺された悲しみと怒りのままに拳を振るうルシフェル。

あれを見て、殺したくないと思う心が湧いたのは、ソシルミの言葉を聞いて、オレを守るあの背中を見たからだ。

セルは……そんなこと、ちっとも思っっちゃいない。

「波あーッ!!!」

「効くか、そんなもの!!!」

セルはかめはめ波をかき消す、でもオレの技は終わらない。
オレはかめはめ波を打ちながら踏ん張るのをやめて、後ろへとすっ
飛ばす。

距離を取れば……なにか、なにかが見つかるはず。

そう思った時、背後から、セルの気配がした。

「っ!!!」

「古い手を使うが、まさか通じると思っていたんじゃないだろうな
!？」

オレは踏ん張りを取り戻してセルに正面を向けようとするけど
……その途中でセルに蹴られて、地面をはずんで、止まる。

「……………う……………」

かばいながら転がったソシルミの体にのしかかられると、その重み
がよく分かる。

鍛え上げた重い体、鍛練でも、それ以外でも何度も味わってきたそ
の重みに、オレは泣きそうだ。

何度も振り回されてきた、何度も助けられてきた。

一度は、取り返しがつかないほどに傷つけてしまった、オレの愛す
るひと。

でも、だからこうしてるんじゃないと、オレの中でなにかが叫ぶの
を聞きながら、オレは……。

オレは地面に潜り込ませていたかめはめ波を曲げて、セルを襲う!!

「なっ!!!?」
「ぐ、おお……………!!!」

駄目だ、浅い。

当たった瞬間、そう分かった。

セルは、ちよつとやけどとすり傷が出来たくらいだ。

「しょ……………しょせんはこの程度か……………だが、もう終わりだ、次はない
!!」

それでも、セルの声は動揺している。

ソシルミだけでじゃなく、オレにまで予想を裏切られて、焦って
いるんだ。

だけど、もうなにもできない。

気の技も、武道も、気合も発想も、なにを使ってもセルに届くものはなくて。

「……ふん、ようやく諦めたようだな!!」

でも、ただ一つ。

たった一人だけ、セルの後ろから、音もなく近付く影があった。

その人は、一度も見たことがなくて、でもオレには結構見覚えがあつて。

そいつは格闘家じゃないから、気合を入れる時に声なんて出さない。

ぎらりと抜いた白刃は、オレの最後の反撃ばかりを気にするセルの背中に――

「――な、誰だきさまは!!!!?」

「この町で雇われとる用心棒だきやあ!!!」

言ってることはわからないけど、ヤジロベエが、きてくれた。

↓つづく

最終話：転生地球人が宇宙最強になるまで

死体が、降ってくる。

真っ黒な空間を引き裂いて、死体が降ってくる。

その死体のほとんどは、俺にとって全く見覚えのない死体だ。

肌の色は、メラニンの多寡によって決まる白から黒……地球人の色だけではなく、この宇宙のあちこちから集められた、様々な色だった。

地球の軍隊、フリーザ軍、魔界の軍勢、有志の武道家たち……。

俺はしゃがみ込んで、そんな死体を見上げていた。

体を覆うのは偏袒右肩ではなくて、ただのシャツとGパン、手には……いつの間にか、千切れた鎖が握られている。

この鎖は……見覚えがある気がするが、全く、思い出せない。

セルに必殺の一撃を防がれ、反撃に倒れた俺は、いつのまにか、かつて範馬勇次郎と出会ったあの空間にいた。

そこに、この地球で死んでゆくたくさんの戦士たちの死体が降ってきている。

これは……少なくとも、ただのまぼろしじゃない、これは俺が、神の弟子としての力で認識した、真実の光景だ。

この地球で死んでゆく戦士たち、俺とプリカが変えた歴史に翻弄され、死んでいった戦士たち。

それを仰ぎ見る俺の姿は、あの日……ア工家を勘当された5歳のときに戻っていた。

……いや、俺はあの時から、何も変わっていないんだろう。

周囲に、世界に無邪気な期待を抱いて、無茶をして……当然のように裏切られた、無茶の報いを向けたあの日から、あの自分から、何も変わっていない。

俺は今も、世界を引つ掻き回しながらも、本当に迫る危機にはまともな目を向けることも、対処することもできず……。

拳げ句、このザマだ。

「……これまででも、同じか」

俺はずっと多くの命や、物語を壊してきた。

そして……、この死体の山は、間違いなく俺……『アエ・ソシルミ』が築いたものだ。

この臨死体験が、本当の死に向かっても、仕方ない。

いや、死ぬべきとすら言えるのかもしれない。

……別の世界から転生してきた人間は、転生者は、本当にあの世に行けるのだろうか。

今となつては、行ける方が怖い。

どんな顔をして、神様や閻魔様、敵や仲間達と会えばいいんだ。

仲間……。

「……皆は」

皆のことを思つて、俺は目を瞑る。

瞼の裏に映るのは……この地球全土で繰り広げられる戦いだ。

悟空達とフリーザの戦いは、もう始まっている。

カプセルコーポレーションの宇宙船は精鋭部隊を運んで宇宙に上がつて、フリーザ軍の司令船に向かって敵中突破。

宇宙からのレーザー砲火は……どこから発生した濃い暗雲が、受け止めてくれているらしい。

ピラフは、タンドール王国の首都防衛のため、改良されたピラフマシンを駆り、師匠とともに戦っている。

シユラをはじめとした魔界の魔族と、方々から集めた残党の魔族達は、フリーザ軍の最後の主力と今まさにぶつかろうとしていた。

これもまた、真実の光景だ。

「皆は、勝つ」

俺は信じている、地球はフリーザ軍を破り、武道家はフリーザを破り、平和は必ず取り戻される。

俺は信じている、皆の勝利を。

……まぶたを開いて、俺は、俺の作った死体の山を見る。

これが俺の最後に見る光景だとしても、俺はそれでいい。

だが、何度目を閉じても、プリカだけは、見ることができない。

それは……きつと――

ソシルミを背負って膝をついたオレの眼の前で、セルがたじろいでいる。

「なっ……あ!!? バカな、ただの鉄剣などがわたしの体に——」

「たあけたこと言うとつたらかんわ!! バケモンでも刀は刺さるもんでしょーよ!!!」

「くっ……!! このっ!!!」

ヤジロベーの刀が、セルの背中に、深く突き刺さっていた。

オレとセルは一瞬だけ、我を忘れるほどに驚いて——

慌てたセルがヤジロベーを殺しにかかるよりも、隙を伺っていたオレの口が開く方が、ほんのわずか、更に一瞬だけ、先だった!!

「——あが!!!」

オレの口から放たれたビームが直撃し、セルがうめき、しがみついていたヤジロベーが叫ぶ!

「ぐっ……!!」

「ぎゃあ!!」

セルは数十メートル先の瓦礫へ、ヤジロベーは近くの道路へと吹っ飛んだ。

荒っぽいやり方になったけど……命は救えた。

ヤジロベーは刀を握りしめたまま、小さく呻いている。

「用心棒……そーいうや、通信で聞いてたな」

ヤジロベーのことを、オレはほとんど、元の歴史の情報でしか知らない。

空も飛べない、ビームも打てない、でも……腕つぶしは一線級。

クリリンを殺した魔族を殺し、そいつを平気で食って、そのまま食いで魔族に戦いを挑める豪傑。

強大な敵を相手に逃げ腰になりながらも、最後は悟空たちを助けてくれる男。

……オレは、ソシルミのように、興奮して笑いたくなる、泣き笑いを浮かべたくなる。

元の歴史でも戦士たちの窮地を救ってきたこの男が、オレたちの前に、ソシルミの前に、きてくれたんだ。

「い、いちち……助けてくれたのはわかったけどよ、ちよう、やり方つてもんが……」

「用心棒の人!! 一個だけお願いがある、こいつを、ソシルミを頼む!!」

「……そこらに寝かしたるくらいならええが」

オレは頭を下げながらヤジロベーとかけよりあつて、ソシルミを預ける……。

そのとき、千切れた帯から、小さな鉄のかけらがこぼれた。

「おっと、危ない……」

そのかけらはそのまま、オレの手を介して、ジャージのポケットに収まった。

……いや、なにが危ないんだ？

オレはどうしてこんな小さなかけらを……。

それを問うより早く、向こうで瓦礫の吹き飛ぶ音!!

「ふ、ふふ……ここに来てデータにない強者が現れるとは、さすがにパワーはそこまでではないようだが、もう油断はせんで、ソシルミもろとも葬り去つてやる!!」

ぐちゃ、と嫌な音を立てて、セルの背中のキズが体液を吹き出しながら塞がる。

それを感じたヤジロベーは、ひどく怯えた顔をして、ソシルミを叩いた。

「わわっ!! お、おい、おみやーさん!! はよ起きやあ!! おみやーさんの親父も来とるんだぞ!! さつきは……いっ!!」

ヤジロベーの爆弾発言にオレが驚くまもなく、先にヤジロベーが驚きの声を上げながらソシルミを投げ出した!

ソシルミの体はぐにやりと曲がりながらやけに大きく転がって、音を立てて仰向けになる。

なんてことをするんだ、そう言いかけて、オレはすぐに自分の心がまともじゃないのを思い出して、黙ることにした。

「わ、悪り……でも、おい、こいつ死……」

そこまで言ったところでヤジロベエはオレの顔を覗き込んで……。それはほんの一瞬の出来事だけど、それだけで、多分ヤジロベエには、全部伝わったんだと思う。

「わかった、ピッコロん時もなんとかなったしな……おみやあさんのこと信じてみるわ、でも……」

「でも?」

「やつにやかなわん、ごぶれいさせてちよ」

「助かった、じゃあな、用心棒の人」

ヤジロベエがソシルミを寝かせて去っていくのを後ろで感じながら、オレはなにかを、ひしひしと感じていた。

来ている。

なにか……表現さえできないそのなにかはきつと……。

オレが次にすることを心に決めて体に力を込めると、セルがない鼻を鳴らして、オレを笑う。

「ふん、みすみす援軍を手放すとはな」

「待っててくれたのか、セル」

「後はきさまを殺せば終わりだ、少しくらい余裕に浸ってもバチはあたらないだろう?」

違う、セルは恐れている。

不意打ちで少し切り込まれただけでも、もうヤジロベエを警戒しきってしまうほどに。

人間というものを恐れているんだ。

そして……オレは、その恐れを真実に変えられる確信がある!!

オレはわざとらしくニヤッと笑ってやりながら……後ろへと、手放したばかりのソシルミのところへぶつ飛んだ。

「なっ!!」

「ははは! ビビってるな、セル!!」

そして、ソシルミをまた背負う。

馬鹿げてる、せっかく離れたなら、セルを弾き飛ばしてさらに遠くに逃げるのが普通のはずだ。

オレは金色の気がかすれるほど、力を使い果たしている、ソシルミ一人分だつて、抱えながら戦うにはあまりにも……。

でも、オレは……ソシルミから、離れるべきじゃない。

「ふざけた女だ、そんなに好きなら、早くソシルミのいるあの世に向かうんだな!!」

立て続けに気弾を撃ちながら、セルはいらだちを込めて叫ぶ。

そこから続くのは、ビームの連打、続けて、キックとパンチ、それらを織り交ぜた動きを、オレはなんとかかわして、弾いて、飛び退いて……

ジャンプの最中に足がもつれて、空中で動きを制御できなくなつた。

「あつ——」

かすんだ目に、ビームを蓄えたセルの指が映る。

ヤバい、舞空術じゃ回避が……。

……そう思った次の瞬間、うまく地面に足がついて、オレはそのビームをうまくかわしていた。

セルが目を見開いて、ぶつぶつと喋る。

「まさかあの状況から避けるとは、わざと誘ったか？ やはり、油断もスキもない……」

「……………」

セルはじつとオレを睨んで……にらみ合いの末、大玉の気弾を飛ばしてきた。

「……………!!」

気弾を避けたところにビーム、続けて本人……!

さつきと同じような、きついコンビネーション攻撃だ。

オレに体力の余裕はない、限界ギリギリの回避を選ばないといけなしチュエーションだけど……!!

それでも、オレは繰り返し飛び跳ねて、体を大きく揺らすような回避を選んでいく。

「どうした、ヤケになったか!! それとも、もはやゆつくりかわす余裕すらないか!!?」

「……………」

何度も何度も、繰り返す。

削れていく命と相談しながら、確かめるように。

「よし!!!」

最後に、オレは大きく声を上げて――

――ソシルミを背中からはがして、巴投げで飛ばした。

「えっ!!!?」

セルは口をだらしなく開けて驚くのを横目に、ソシルミを見れば……ソシルミの体は背中から落ちて、放り出された腕が地面を叩いた。

驚いたままのセルを放っておいて、オレはソシルミにかけよる。

「な、なにを……」

こればかりは答えられない、オレはソシルミの手を握って、手首を激しく半回転――

――オレの体が、空中で一回転して、ソシルミとともに着地した。

「は、ははは、はははははっ!!!」

オレは笑う、笑い出す、笑わずにいられるか。

かすれた気が戻ってきた、今ならこのまま自分で戦える気までしてきた。

セルもいよいよ、なにかヤバいことが起きていると気づいたらしい。

「この死にぞこないが……、なにができるとも思わんが、チリ一つ残さず消し飛ばしてやる!!」

わかりやすいセリフを吐いて、セルはかめはめ波を作り始めた、避けるのはムリ……でも。

でも、今のオレたちは、運が向いてる。

そうだ、ソシルミが作った運、ソシルミ自身の働きじゃない、だからこそ、純粹に、ソシルミの行いが帰ってきたといえるんだろう。

「喰らやあ、バケモンがあ!!!」

……そう、天高く飛び上がって、セルを狙うこのヤジロベエの姿も。

「気づいていないとでも思ったか、やはりただのど素人だつ——」

セルはそれ以上のことを言えなかった。

自分が撒き散らす気の奔流を遡って飛んでくる、小さなホイホイカプセルに、気づかなかつたからだ。

それは爆発音を立てて膨らみ、一個のエアカーになった。

押し出されて、踏ん張るまもなく打ち上がるセルと、ヤジロベーの軌道が交差する。

「ホ、ホイホイカプセ……ぐあっ!!!」

ヤジロベーの刀が、セルの体を貫いた!

「ちっ、やっぱ殺すにや足らんか、でもよ……!!!」

そのまま、二人の体は浮き上がったエアカーに向けて落下し……貫いた刀が、その座席に突き刺さる。

そして、無茶な姿勢のまま、ヤジロベーは片手でハンドルを掴んで、伸ばした足でアクセルを踏みしめた。

「オレがバケモンほかつたる! なんかすんなら、はよしやあ!!!」
強がりだ。

セルが正体を取り戻せば、一瞬で殺される実力差なのはヤジロベーもわかってはいるはず。

……それでもヤジロベーはイザというとき、打算があるのかないのか、命を賭けてでも矢面に立って人を救える男だ。

オレの男の部分が震える、いい男だ。

その男気に答えるため、オレは二人の行く先に目もくれず……ソシルミに向かう。

ソシルミの体は、揃って着地した時と同じ、立ったままの姿勢だった。

精密に力を制御して、オレは、ソシルミを殴る。

「だっ!」

拳が、受け止められた。

「ふんっ!!」

クローの手首が、弾かれた。

「しっ!!」

フックが、かわされた。

間違いない、ソシルミは、ソシルミの体は……。

意識がないまま、いや、もしかしたら本当に死んでいるまま、オレの技に、対応しているんだ。

「……体が技を覚える、それを信頼する……確か、あつたよな、刃牙に!!!」

オレは更に攻撃を仕掛ける、ソシルミはそれを捌く……繰り返されるサイクル。

その手が重なる瞬間に、オレの気を注ぎ込んでいく。

「なあ、ソシルミ」

そう、ソシルミの体が動く瞬間だけ、それができる。

オレの心を、つぎ込んでいく。

ヤジロベーの車が向かった先から爆発が起こって、……炎の中から、セルだけが現れた。

急がなくちや……なあ。

「まだ、そこにいるんだよな?」

ソシルミがゆっくりと手を広げていく。

死んだはずの体が、鍛え上げた『武』だけを、受け入れている。

オレよりずっと前から、ソシルミを支えてくれた相棒が、オレと触れ合う。

こいつならきつと知っている、あいつがどこにいるのか。

だから。

頼む。

「連れて行ってくれ——」

ひどい剣幕でなにやらまくし立てるセルを背に、オレは願う。

……ソシルミの手が願いに答えて、オレの頭を中心に音を立てて閉まった。

叩き潰された耳から血を吹き出すオレを、ソシルミの体は抱きしめた。

余計な音は、もう聞こえない。

もはや耳に入らない敵意に満ちた叫びと、必殺の意思の籠もった光のかたまりを背に受けながら。

オレは、最後かもしれない冷たい抱擁を楽しんだ。

落ちてくる死体の中に、一つだけ、目をひくものがあった。
見覚えがある。

それは、一度だけ見たことのある、旧型の戦闘服で。

「プッ………プ、プリカツツツ!!!」

死体の山の一つに墜落した人影! プリカを見て、俺は固まってしまった膝を、無理やり引き伸ばしながら、棒のような足を、棒として使って、歩いて……走る。

たどり着いた山に、飛び込むように乗って、俺はそれをよじ登り始めた。

罪悪感を思い出したのは、乗った後で、それでも、登るしか……見に行くしかどうしようもなく、俺は手と足を動かす。

「プリカ、よ………よせ、おい………」

たどり着く前から声が出ている、多分届いていない声でも、出すしなくて、出してしまう。

死んだのか、だから来たのか。

いや、そんなまさか。

巡る思考と焦って動く体のせいで息があがって、めまいがしてきた頃、山の頂上にたどり着いた。

「ハア………ハア………、プ………リカ………」

古い戦闘服を着たサイヤ人の女の子。

サイヤ人の年齢はわからないが、俺と出会った頃よりしばらく若くて……それでも、はっきりと分かる。

これはプリカだ。

世界中の戦士達を幻視することができた俺に、唯一見ることができなかった……見るのが恐ろしかった、プリカが、ここにいます。

その意味……死体の山にプリカが落ちてきたその意味は。俺がプリカを見るのを恐れ、見ることが出来なかった理由、そのもので……。

回っていた視界が黒くなりかけた時、その中心で、プリカの口が動いた。

「ん……」

プリカは……顔をしかめて、目を開けた。

「お……おい、プリカ!! プリカ!? 生きてるか!!?」

「え、えーつと?」

変な質問をした、そう思ったのと同時に、プリカも戸惑う声をあげた。

質問のせいかな、この空間にか。

いや、もつと、何を言ってるんだお前が殺したんだろうと言いつてもおかしくない。

俺は吐き気をこらえながら言葉を待つて——

「そ……そつか!! ソシルミだよな、やった!!! 着いた!!!」

喜色満面に俺に抱きついてきたプリカの行動だけで、何が起きたかほとんど完璧に教えられて、俺の思考は止まった。

「お前、どうやって、ここに……」

「あー、……ごめん、説明しにくい、それより、なんで若いんだ?

気というか、雰囲気でおまえだったのは、わかったけど、それにその鎖……」

「お前だって、最初に会ったときよりずっと若いだろ」

「え!? あ、ほんとだ」

プリカは自分の体や戦闘服をペタペタ触って、少しだけ目を細める。

立ち上がろうとしながら、足場の不安定さにぐらつくプリカに、俺は思わず手を差し伸べた。

プリカは、少し不安げにしながら、強く俺の手を握って、それを支えにゆっくりと立ち上がる。

しっかり直立したプリカの体は少し見上げるくらいで、繋いだまま

の手も、普段とは反対に俺の方が気持ち引つ張られるような感じだ。ふと足元を見ると、山頂から山腹にかけて、どこから来ているのかもわからない光が、少しだけ高さに差のある影を作っていた。

一度も、俺達にこんな身長差の時期はなかった、でも……。

「そうだなソシルミ、なんか、懐かしい感じだ、……いや、それよりここって、前も来た——」

ようやく落ち着いたプリカが周りを見回すと、当然、目には死体の山が写って、言葉が完全に失われる。

目を見開いて、乾いたつばを飲んで、震える口を開きかけて、閉じかけて。

プリカが何を言い出すか、判決を待つような気持ちでじっと見る俺の目を、プリカは睨み返して、鎖を持っていない方の腕を強く掴んだ。

「……………ッ」

俺が声を出すのをこらえて視線をかわしていると、プリカは更に顔をしかめて、強く目を瞑ってから開いて……。

俺の手を掴んだまま、死体の山の麓へと走り始めた。

「わツツツ!!? ツツツ!! くくくくツツツ!!?」

「……………行くぞ!!」

「どこに行くんだ!?!」

「……………知るか」

5歳の俺より大分背丈の高いプリカに引きずられて、転がり落ちるように山から降ろされた。

こんな乱暴なやり方をされた覚えは一度もない、一体どうしたんだ。

それを聞こうとするより前に、プリカは俺をこの死体の降る場所の外に引つ張ってゆく。

「待て、俺はここに居なきや——」

「知るか!!!」

俺はガラになく、まるで本当の5歳児のように気圧されてしまった。そのまま本当に何も無い場所へと連れてこられてしまった。

もう、あの死体の山は見えない。

豹変したプリカが少しだけ怖くて……でも、俺はその手を振りほどくことができない。

プリカは、歩く速度を落として、ゆっくりと息をととのえ始めた。

「……なあ、ソシルミ」

何を言うつもりだろうか、恐怖か期待か、ほとんど停止した思考を疑問で埋め尽くされて、相槌すら忘れてる間に、プリカが次の言葉を放つ。

「確かにさ、オレたちのやったことで、人は死んだよ、……もしこうやって歴史に混ざるとしても、もつといいやり方が、あつたのかもしれない……でもさ」

答えがなくて、俺は黙る。

昔なら冷静に考えてすぐに口を挟めたはずの問いに、何を割り込ませることもできない。

「でも、それはオレたちが、皆とか、世界中の人間や魔族に、死んでほしくないからやってきたこと……そうじゃないか？ だから……たくさんさんの絆を結べた、そのはずだよな」

プリカが、言いながらきよろきよろ首を動かすと……俺達の周りに、ぼやっとした影が浮かんできた。

それは、俺と対面してチャイを飲むルシフェルと、俺達に脅されるピラフと、胸に穴を開けたまま空を見るピッコロ大魔王と、いまいまいげな顔でこちらを睨むベジータと、笑顔の国王。

そして、今まさにフリーザと拳を交える、悟空とピッコロ、悟飯達の姿だ。

これは俺の……幸福だった時の記憶、そして……。

「オレたちは、セルが変えた歴史を、自分たちの歴史と勘違いしてたけど……それでも……」

「……俺達は、それでも、それと向き合って、なんとかより良い方向を目指そうとしてきた、……だな」

俺の言葉を前に、プリカは目を見開く。

そこに映るのは希望ではなく、沈み込んだままの俺が自嘲の一つとして、自分が持っていた希望を語ったことへの、絶望。

でも、俺の行いがこの破滅をもたらしたのも。

俺という『存在』が、セルを生み出したのも、覆しようのない、事実だ。

俺は……………。

……………。

「くそっ！ ま、また死体が……………」

プリカの言葉に顔をあげると、ここにまで死体が降ってきて……………周りの影は、その中に埋もれていく。

「すまん、俺にもこれは制御できなくて……………」

「じゃあ行くぞ!!」

プリカは、謝ろうとする俺を睨んで——強く、さつきよりも強く腕を引つ張った。

どこへ向かっているのか、と聞こうとしたが、それより早く俺自身の直感が答える。

さつきより、深いところだ。

プリカは広がりだした死体の山から離れた辺りで、また話し始めた。

「この地球には、まだおまえを信じてる仲間がたくさんいる、おまえと何度も戦った、ライバルってやつが、たくさんいる、おまえが勝つのを信じてるし、おまえとまた戦いたがってる」

「だが、俺は……………」

「黙って聞け」

俺に横取りされないよう、プリカは急いで言葉を放つ。

腕だけでなく、肩も掴んで、プリカが凄んだ。

「言つとくけどな、おまえと道場やZ戦士や、魔族たちとの絆つてやつは、おまえが鍛えた力と技と……………まごころで手に入れたものだ、歴史知識を使った、ズルなんかじゃない」

「それは……………」

俺の体を突き抜けて、プリカの言葉が空間を震わせる。

また、影が現れた。

天下一武道会の後、テーブルを囲んで食事するみんな。

ピッコロ大魔王を倒した後、キングキャツスルの瓦礫の上で戦後のことを話し合ったひととき。

興奮した様子の悟飯が、俺達のようになりたいと、ボロボロのみんなに語りかける光景。

陣地に戻った師匠が、繰り返しこの地域の戦闘情報を確認し、ピラフや門下の皆と励まし合う姿。

「忘れたはずないよな、今だって、おまえの……」

「……ああ、俺の腹の中に、全ては残っている」

でも、俺にはそれをつかむことは、できない。

死体は、降り続いているのだから。

「くそ、くそっ!! おまえ……!!!」

プリカが俺を睨んだ。

掴んだ肩を、指が白くなるまで握りこまれて……俺はうめき声を上げる。

「ツツ……!!!」

「なあ、ソシルミ……おまえと最初に会った次の日、一緒に鍛えようって言ってくれたよな、あの時、正直言うとオレは飯のことなんか引き合いに出されなくても話に乗っちゃうくらい、嬉しかったんだ」

あの日、あの朝の光景。

サイズの合わない俺のシャツを着たプリカと、俺。

何も知らないまま、それでも何かのシンパシーと善意に突き動かされて、俺達は共にいることを選んだ。

「オレの誕生日会するとき……、おまえが、オレと悟空は惑星ベジータから逃された子供なんだと言ってくれたとき、本当に嬉しかった、だから」

ポッドのコンピューターに無理を言っつて、プリカの誕生日を聞き出す俺。

それをもとに開催した、道場でのハデな誕生日会……。

プリカがこの世界に生まれ出たことを祝うことを願い、それが叶った日。

俺達はその時、ずっと一緒にいることを選んだ。

「前は聞かれなかったから、答えなかったけど……おまえをいつから好きになったかなんて決まってる！ 本当の、本当に最初だ！ 最初に会ったときにはもう、おまえをかつこいいやつだと思ってたし……しばらくしたら、女のまま生きるなら、おまえしかないと思うようになってたんだ!!」

出会った時、そして、神龍の前でプリカが口ごもって、『地球人の男に戻る』という願いを捨てた時。

俺はどうやらニブかったらしい。

でも、気持ちの量は、きつと同じだけあった。

「おまえと鍛えて戦って、ようやく、オレは戦闘民族サイヤ人としての人生を好きになれた、……そうだ、ソシルミ、おまえは……オレが嫌いだったオレの人生に答えをくれた、だから、オレはおまえと、一緒にいたい」

プリカは影を出さずに、ただ俺にまつすぐ語りかける。

プリカ、俺にとってのただ一人の同郷。

唯一、生死を確認することができなかつたほどに、愛している人。

そのプリカが、俺の瞳をまつすぐ見て……そして、俺の肩から手を離す。

「おまえという『転生者』がこの世界の主人公なら、オレは汚れ役の裏切り者でも、ただついていくだけのヒロインでもいい、それだけで十分人生に意味があるんだと、オレは信じてる」

プリカは、俺の手を、振りほどいた。

そして、涙を浮かべながら、表情のすべてを噛み殺して、自由になつた両手をこちらに差し出す。

淡く光る、それは……。

「なにもかもをおまえにやる、これまでのただオレの気を使うだけの技じゃない、おまえにならできる、超サイヤ人を、全部おまえが使えば、やつにだって届く!!!」

俺はなにもかも、わかつてるんだ、わかつていても。

お前の言葉に答えることはできない。

お前の手を取ることはできない。

目をじつと見ると、プリカの顔に噛み殺していた表情があふれた。

「おまえは……あの時、オレを連れ戻すとき、一番大事な人が自分を責めて引きこもるのが辛いからと言ったのに、おまえは……!!!」

その顔は、怒りだ。

こんな表情を見たのは——

「前も見たって、思ってるよな……！ そうだ、超神水を勝手に飲んで、死にかけて……いや、死んでたんだよな、オレがあの時どんな気持ちだったのかももうわかってるんだろ、わかってるのに!!!」

どうして立ち上がらないんだ。

止まった言葉の向こうにある心が、伝わる。

「オレにとつても、みんなにとつても、この地球にとつてもおまえはきつと、必要のはず、なのに……」

怒りが崩れて、プリカの目に溜まっていた涙が、ついにこぼれた。「どうしてこんなところで止まってるんだ、範馬勇次郎にあこがれるんだろ、じゃあ、なんでも踏み台にして、なんでも食っていつてくれよ、超サイヤ人の力も!! おまえは地上最強になるんだろ……!!!」

「……………駄目だ」

やつと、言葉が出た。

俺は言葉とともにプリカに背を向けて、元いた場所へと歩き出す。責めるように、手の鎖が音を立てた。

「ソシルミ!! 待て!!!」

プリカが俺の背に手を伸ばして……、その手は届かず、空をかく。死体は降り続いていて、影はすべて埋まった。

「すまん」

「違う!! 来い!!! おまえは、まだ……!!!」

俺を追うプリカの足音は、どんどん遠ざかっていく。プリカの荒れた息遣いが聞こえる、プリカは必死だ。

でも、俺は……。

「お前を巻き込めない」

「違うだろ!! オレはもう、おまえのものじゃないのか!!!」

わかってる、わかっている。
何もかもすべて分かっている。

でも、それでも……。

「夢も、責任も、愛も、受け入れるには、俺はあまりに。」

「待ってくれ、待て!! ソシ——うわっ!!」

プリカが、いきなり叫び声を上げた。

振り返ってから、諦めたはずの相手を案じてしまったことに気づく。

死体に足を取られたんだろう、大きくコケて宙に浮いたプリカのポケットからは……。

……小さな、鉄の鎖の欠片がこぼれていた。

「ソ、ソシルミの持ってた——このっ!!」

プリカはたたたらを踏みながら、鎖の欠片を空中でキャッチする。

……プリカの持つ鎖の欠片、俺の持つ、鎖の断片。

そうだ、これはどこかで……:……はるか昔の記憶にたどり着きかけた時、2つの鎖が強い輝きを放った。

俺はたまらず、目を閉じて——

「ツツツ!!」

「っ!!!」

開いたとき、目の前には鎖を握ったプリカがいて。

鎖は、俺達の手の間に、小さくたわんで居座っていた。

見覚えがある鎖、この、鎖は。

「……父さん」

「そうだ、ソシルミ!! おまえのお父さんが、この町に来てるんだよ

!!! ヤジロベーが、言ってたんだ!!!」

「は……?」

鎖、この鎖は。

『ごめん、父さん、母さん、せつかくのプレゼントなのに、もう壊しちゃって……』

『いいんだ、頑張って鍛えて、立派に強くなったんだろ? おまえの頑張りの証だ、ありがとなソシルミ、大事に使ってくれて』

『そうねあなた、せっかくだからちぎれたところだけでも——』
『それはいいな——』

この欠片は。

『……………心棒……………メシ……………まともに……………かなあ、こんくらはやったるのも……………だがよ……………』

『おみやあ……………これ……………いとくで、ったく……………ってなら、自分で渡しゃ……………んじゃ……………とは知ら……………早よ逃げ……………うなりしやあ……………』

そうだ。

『この歴史に降り立ってはじめて試みたのは、ソシルミ、きさまら親子の抹殺だ』

『ソシルミ、もうおまえをこの家においておくことはできない、おまえは……………強すぎるんだ』

『おまえに怯えるものは多い、いいか、二度と帰ってくるんじやない、だが、王都の道場でなら、もしかしたらおまえを受け入れてくれるかもしれん、そこを目指せ——』

まさか、そんなことが。

吹き上がった記憶がもたらす答えは、たったひとつ。

都合よく捻じ曲げたものかもしれない、でも、どうしようもなく信じたい、結論を前に。

俺は、どうすれば……………。

「ツツツツ……………!!!」

「ソシルミ」

プリカが、混乱する俺を優しく抱きしめた。

「オレには……………なにがどうなってるのか、わからないけど」

控えめな枕詞の後の言葉を、俺は既に、しっかり期待してしまっていた。

「おまえは、これからどうしたい？」

「俺は……………俺は」

顎が震える。

目は多分だいぶ前から涙をずっと流していて、くっついた戦闘服の

せいで広がって額と顎までぐちやぐちやになっていて。

「俺、父さんに会いたい」

「だよな、じゃあ、行かなきゃな」

プリカはゆっくりと後ずさって、俺の体を解放した。

そこ体の後ろに、……死体が、たくさんの、色々な形の鎖に引つ張り上げられて、どこかへ消えていく光景が見えた。

「あいつらは、自分のいるべき場所に帰るんだ」
だからお前も帰ってこい。

続くその言葉は、聞かなくてもわかった。

「帰り道はわかるか？」

「……丁度、見えてきた」

山が消えた場所に、まばゆく輝いた『門』がある。

あそこが、きつとこの出口だ。

俺が歩きだそうとすると、プリカはその背を叩く、小さな手だ……

いつの間にか俺の体は、元の姿に戻っていた。

「いつていつ」

「ああ」

その激励に振り向いて答えると、そこには誰もいない。

でも、不安はない、何もかも……すべて、俺の腹の中にあるからだ。

——光の門に駆け寄ると、2つの人影が、俺を向かえてくれた。

「よう、食あたりは治ったかい？」

「治ったよ」

「そいつは良かった」

勇次郎は笑って、俺の背に手を置く。

「見せてやれ、地上最強ってやつをな」

「ありがとう、範馬勇次郎、俺の三人目の父さん、俺が憧れた、強き人」

俺が範馬勇次郎にうなずくと、隣の男が俺の肩に手を置いた。

その顔は見慣れた顔で、声もまた、聞き慣れた……でも、いつも聞いているのはほんの少しだけ違う、はるか昔に聞いた声だ。

「へへ、オラから言うことはあんまねえけど、……おめえなら大丈夫」

夫だ、セルをぶつ倒して、皆を守れる！ がんばれよ!!」

「ありがとう、……悟空、俺の『友達』」

優しい声の中に、わずかに女性的な声色をのぞかせた『悟空』が、俺を励ましてくれた。

二人がここにいるのはきつと、奇跡でも、妄想でもない。

俺が生きてきたすべての、根源であり、結果。

なら、あとはそれを、証明するだけだ。

「行ってくる、……本当にありがとう」

俺は、俺の腹にある全てに感謝して……そこから、出るために、光の中に入る。

遠く彼方から、声が聞こえた気がした。

『白虎の方角ツ!! アエ・ソシルミ!! ……青龍の方角ツ——』

目を開けると、壊れた町と、舗装の剥がれた地面が見える。

俺は、ゆつくりと地面から頭を持ち上げ、続けて体を引き上げた。

「目覚めは、悪くない」

気絶明けの違和感すらない、清々しい寝起きだ。

なんと、隣にはプリカまでいる。

耳から血を流し、背中には焼け跡を作って……それでも俺を抱きしめ続けてくれた。

「……ありがとな、連れ戻しに来てくれて」

全く、こんなに優しい汚れ役が……こんなに押し強い『ついていだけのヒロイン』が、どこにいるっていうんだ。

でも、あの言葉は嘘にしない、お前がすべてを投げ出して与えて肥やした男は、かならず地上最強になる。

そして……眠ったままの俺の代わりに、その想いに答えてくれた存在にも、報いなくては。

俺は自分の、傷だらけの胸に手を当て、ゆつくりと言葉を放つ。

「プリカを連れてきてくれてありがとうとな、……さあ、もうひと働きだ！」

俺は、俺の相棒達に感謝を捧げて……。

そして、プリカのポケットからこぼれた鎖の欠片を手を取った。

一体どうして、父さんは今更、これを俺に？

そもそも持ってきたのは本当に父さんなのか？

……ああ。

「知りたきや、戦うしかないよな」

俺は鎖を腰に当てて、輝きを注ぐ。

それは音を立てながら元の形を取り戻し、千切れた帯と絡んで、俺の新しいベルトになった。

「よし、と——」

空模様はスペースデブリが作り出す流星群。

最終決戦日和だ。

遠くで、助けを求める彼の声がする。

……丁度、出番も来たらしい。

「——ッ」

俺は一息に、衝撃波を産まず進み、そして止まる。

腕を掲げ、振り下ろされつつある腕を受け止めた。

風景が止まったところで見えるのは焼け残った小さな路地裏。

俺の前にはセル、後ろには、ヤジロベー！

「ア、アエ・ソシルミ!!!」

「お、おみゃーさん!!」

「期待通り舞い戻ったぞ、お二人さんツツ!!!」

炎上するエアカー、折れた刀、散らばるセルと、ヤジロベーの血液。

……寝ていた時間は、案外短かったらしい。

「へへ……っ！ オレの見る目っちゆうんも、捨てたもんじゃな
かったっちゆうこった……っ！」

「守ってくれてありがとう、ヤジロベー、……さあ、後は俺の仕事だ
!!」

ヤジロベーは破顔し……ゆっくりと目を閉じる。

ああ、答えなくてはならない想いが増えてしまった。

俺は気を練り、高めてゆく。

「生きていたのかアエ・ソシルミ、だがこの力は……!!?」

「見せてやる……ハアツツツ!!!」

足元から吹き上がるのは金色の気。

これまでの継ぎ足し同然の取り込み方とは違う、100%俺の気として飲み干した、二人分の全身全霊だ!!

「超サイヤ人の気をすべて取り込んだだど!!? ありえん、地球人が

こんな……!!!」

「その地球人の遺伝子は、やり方を教えてくれないのかい?」

「ぐ……!!」

プリカが直感した(……と、何故か記憶に残っている)ように、やはり、セルは俺の持つ技術をすべてはコピーできていないようだ。

理性的に考えれば考えにくいことだが……それは当然のことのように感じられた。

さあ、どう出るセル。

どう出る、ソシルミ。

にらみ合いの答えを、俺は俺と敵両方に問う、それが終わったのは……流星群の一つが、町にほど近い荒野に激突した瞬間だった

「——ツツツ!!!」

「はっ!!!」

腕を介した押し合い——を、双方拒み、俺が蹴り上げ、セルがフック——

——俺の足にセルがカチ上げられる形で、にらみ合いは終わった。

「ぐ……っ、……むん!!!」

気合一閃、セルは空中で体勢を立て直し、戦いはドッグ・ファイトへと移行する。

戦闘機のそれとの違いは、一方的に攻撃するのが追う側の俺ではなく、追われる側のセルということだ。

「く……えっ!!!」

気弾とビーム、さらにはプリカの技を真似たであろう、回転軌道の技の混ざったエネルギーの乱舞。

そのエネルギーの質は、セル自身のキメラ的な性質を備え、更に俺への対策を兼ねて七変化を繰り返している。

セルなりに、俺のエネルギー技への対処技術を学習し、対策を進めたいらしい。

だが、それを前にしても、俺の速度は欠片も落ちてはいなかった。

「また猿真似か、こんなものでは、今の俺を止めることはできん!!」
プリカが俺に与えた気と、それを通じて注ぎ込まれたプリカ自身の戦闘経験。

そして、打撃、爆破、消去、回避……俺が積み重ねてきた対エネルギー攻撃技術のすべてをもつてすれば、今なおエネルギー量では格上であるセルの技をも、完璧に防ぎ切ることができる。

これは、最初から強者として生まれついていれば望むことすらなかった技術だ、それが、俺をここに立たせているのだ。

だが、セルはそれも予想済みとばかりにほくそ笑む。

「だろっうな、ではこんなのはどうだ？」

その一声とともに、セルが放つエネルギー弾の量が更に増した、だが、これでも俺に有効打を出すには余りにも——まさか!!

「気づいたようだな、だが、これを克服する手段などあるまい？」

セルは笑いを深め、増やしたエネルギー弾のいくらかを町のある下方へと送り込み始めた!!

ただでさえ破壊され、既に焼け野原に近づきつつある町の、生き残りを的確に狙ったそれは、紛れもなく……!!

「俺を釘付けにするために、ここまでするかツツツ!!」

「……意外だな、アエ・ソシルミがここまで怒るとは!」

「流儀に反していると思うか!!」

そうだ、俺はこれまで怒りを邪念、怒りによる行為を暴走と断じてきた。

だが、もはやそうは思わない。

「セル、俺は貴様をぶち殺す!!! クオオ……」

俺は気合を高め、全身から衝撃波を放ってエネルギーの奔流ごとセルを弾き飛ばす。

「嘖ッッッ!!!」

「くっ……なるほど、このまま戦えば私が不利か、ならば……!」
セルはぼやきながら速度を上げ、町を離れた遠くへと逃げようとする。

……向かう先にあるのは山岳地帯、避難民とも別の方角、人質狙いではない。

俺の体力が尽きるのを狙っているのか？

それとも……。

いや、何にしろ、ここまで陰謀を巡らせてきたセルのすることだ、見過ごすわけにはいかない!!

俺は速度を上げ、セルに迫る!!

「ハァーッッッ!!!」

「きさまと格闘する気は起きないなっ!!!」

両腕を掲げ、セルは筋肉を隆起させる、これは——衝撃波の構成か!!!

「流石覚えが早い、だがッッ!!!」

セルが蓄えた衝撃波は、たしかに出力は高いが……対処は容易だ。

衝撃波は防御するには難しいが、発射位置の成約が大きい以上、回避すればどうとでもなる。

つまり、立ち回りを考えず放つような技ではない、それを大出力でただぶちまけるといふことは……!

「そうまでして俺を遠ざけたいか!!!」

「格闘する気はないと言っただろう?」

セルは巨大な衝撃波を放ちながら、撒き散らしていたエネルギー弾によって追い込みをかけるように攻撃を重ねる。

全天を埋め尽くす、衝撃波と、無数のエネルギー弾とホーミング型のビーム。

だが……それは結局、これまでやってきた攻撃を、やり方を変えて繰り返すだけの行為だ。

俺に有効打を出すには足りず、これはむしろ……。

……これは、時間稼ぎか!!!?

「何をやる気だ、セ……ツツツツ!!!」

瞬間、セルの向かう先から、3つの小さな『気』、そして……その一つが抱えた、強烈な、極めて強烈なプレッシャーが迫ってきた。

気は未だ地平線を越えたばかりだが、プレッシャーだけはこの空域に向けて放たれ——

——俺が全力の防御姿勢を取った瞬間、その『プレッシャー』は、俺とセルの中間地点で100万度近い高熱へと変わる。

「——」
発生した高熱の塊は必然的に熱線と爆風を産み、防御姿勢を取ったままの俺とセルを弾き飛ばしながら、はげ山の数少ない針葉樹を焼き払ってゆく——

——熱線を防ぎ、爆風に翻弄される俺の意識の端に、稜線の影から飛び出し、セルへと近づく2つの気があった。

「ま……さか……!!!」

もうそれは、俺にもわかる。

向かわねば。

爆風をぬい熱に耐え息を止めて奴のもとへ——

「——まさか、こんな!!!」

すべてが陽動だった。

俺が目覚めてからの戦い、あるいは、町での戦い。

あるいは……この世界そのものが、奴にとっては陽動で、切り捨てても構わない一つの段階で。

そして、その果てに。

「遅かったな、アエ・ソシルミ」

余裕たっぷりのかすれた声の主は、俺の前に現れた。

河童と虫の間の子のような顔は、人間の顔、それもドロドロと崩れかけたそれに。

緑主体でオレンジに彩られていたボディからは、オレンジが消え……かかりながらも、随所に残り。

大幅に面積を増した黒は、どこか未発達で、緑を強く残している。

『セル』を見慣れた俺にとって、それは、いかにも——

「——不完全体、といったところか……なあ、おまえの意見を聞かせてくれ、おまえなら、本当の完全体を知っているんじゃないのか？」

「……………確かに、お前は不完全だ」

強がった言い返しの中で、2つの思考が巡る。

1。

この戦いにおけるセルの攻撃はすべて、小さな分身体を隠して放ち、ドクター・ゲロの研究所を襲撃して、実験中の機体と、目くらましのための爆弾を盗み出し、自らを進化させるためにあつたのだ。

2。

不完全な進化であってもセルのエネルギーの進化は圧倒的で、進化前後のパワールの倍率は、この俺が先程経験したそれよりもなお、大きい。

「また30年もおあずけとはな……それもこれもきさまらがことごとく邪魔を……だがまあいい、楽しませてもらうぞ!!!」

セルは叫びながら、俺へと迫る、それは避けていたはずの肉弾戦の合図!!

始まったのは、拳と拳、脚と脚、素直な殴り合い……セルの誘いで始まったそれは、ぶつかり合いのたびに、俺の四肢に傷を、内部に罅を刻む。

「どうだ、不完全ながら究極の戦士の力をご堪能いただけているようだな!!」

「そんなことはどうだっていい、セル、30年とはどういうことだ!!!?」

「きさまの知識と知性でわかっていないはずがあるまい、この歴史のわが創造主はもはやアテにならない、わたしは次の歴史に向かうのだよ!!!」

そうだ、セルには最初からその手があった。

セルにとっては、この歴史だけですべてのカタをつける必要はなかったのだ。

だが、そんな、そんなことが——

「そんなことが、許されていいわけないだろうがツツツ!!」

「ふふふ、どうしたソシルミィ！ きさまらしくない、怒鳴り声が続くな!!?」

「これを不純物とはもはや捉えんと言ったはずだ!!!」

「確かにその高ぶりで気は上がっている、だが、それは『内助の功』を食いつぶす速度に勝つてはいるまい、すでに戦いは終わったも同然だ！ はあっ!!」

軽い気合と共に放たれたセルの拳を受け止めた俺の手には金色の輝きがあり……点滅するように霞んで、肉の色がにじんでいる。

そして、セルのパワーと肉体強度は、進化の影響で高まった自己再生能力によって上がる一方。

だが、何度でも言うが、そんなことはどうでもいい、俺は薄れた輝きを自らの生命エネルギーで補い、更に拳を放つ。

「もらった命をずいぶんと粗末にするものだ!!」

「もらったなどとは思わん、これは俺の命、俺の力、俺の魂だ!!!」
破壊されきった体を支えるパワーまでもを拳に与え、俺はセルの頬を打ち据えた。

えぐれた脇腹を抑え込んでいた輝きが薄れ、鎖のベルトが血で錆びる。

セルは口から血を吐き散らし、俺をあざ笑う。

「べっ……愛の力か、くだらん!」

言葉とともに放たれた拳が頭をかすめ、骨をえぐり、赤と白が空を汚す。

「愛……それもあるかもしれんが、違うな……!!」

再び拳を叩きつければ、甲殻にぶち当たって、上腕の骨が悲鳴をあげる。

繰り返しの先に折れたそれを、輝きで抑えて更に叩きつける。

曲がった指の貫手を、読めぬ軌道に仕立てて攻撃となす。

「なにが違う？　すべてを使うとやらか、だが、きさまに残るすべてを足し合せても、わたしには届かんぞ?」

「合算などではない!!」

割れた内蔵に合わせ重心を再調整。

脳内麻薬を絞り出せ、ヨガを深めろ、限界の戦いの先にこそ悟りはある。

「では掛け算か、ふん、だがきさまは既に小数点以下だと教えてやろう!!」

「何もかも分かっているさ、だが、結果は誰にも分かるものか!!」

そうだ、考えろ、直感しろ、思い出せ、感じるろ!

奇跡とは限界に至って導き出すものだ。

俺には何が残っている、残った何を使って――

「仙豆も、女もない、頼るべき仲間はフリーザとの決戦中、きさまにはもはや勝機はない!!」

――思い描け。

「あ――」

その問いは、答えだった。

思わず漏れた間の抜けた声は……やっと気付いた自分への、呆れの感嘆だった。

その力は、ずっと側にあっただの。

ずっと俺の期待に答え続けて、俺に力を与え続けて……。

俺を憧れに引き合わせてきたその力にようやく気付いた時、俺は……。

俺は、セルの拳を、いつのまにか手で掴んでいた。

「き、きさま……な、にを……?」

「………そうか」

手から始まり、全身からエネルギーが……気が、立ち上る。

色を持たず陽炎のようにぐにやりと空間が曲がったようにだけ見えるそれは、まさしく範馬。

全身にみなぎる力を、まずは手にかけ、俺はセルの拳を強く、握る。

「は!!? くっ……!!!!」

未だ自分に劣るパワーにすらおののき、ビームを蓄えるセル……俺は手を通じて合気を仕掛け、セルのビーム攻撃を無関係な方向へとそらした。

セルの体の構造は、透けて見えるように分かっている。

格闘士ならば……力の流れを読み、操ることができるのだ。

「ぐああっ!!!」

セルは筋骨と口から悲鳴を上げながら、極めて強引に俺の合気から逃れる。

捉えたはずだが、パワーの差はやはり大きいか。

「……ど、どこからこんなパワーを……!!? いや、技術までもが高まっているだと……?」

未だ勝負はわからない、だがそれでも、セルは焦って俺に問いかけた。

答えてやろう。

「より素晴らしいものをイメージし続けることによって、それより素晴らしいものを見つけ出すことができる、これはその答えの一つだ」

「バカな、強さに完成以上などありはしない、完全を想定し、それを達成することによって得られるものだ!!」

強さだけではない、それによって切り開くべき道も、かき集めた仲間と好敵手たちも、抱くべき誇りも、すべての答えが、これなのだ。

だが、セルはその一つの意味のみを認識し……認識してもなお、理解には至らなかった。

そうか、だからセルは、俺の力を……。

もはや言葉は不要か、答えは、拳を持って叩きつけよう。

「カアーツツツ!!!」

「しいいっ!!!」

俺とセルは殴り合う。

その拳はほぼ互角、だが、先程までと違い、傷を癒やすのはセルではなく俺の方だった。

「自己再生……いや、神々やナメック星人の使う力!! きさま、どこまで……かくなる上は!!!」

俺との殴り合いを強引に振り払い、セルは上空へと飛び上がる。

この地域、このエリアごと何もかもを消し去り、俺を殺す気だ。

「させるかッッッ!!!」

「なっ………ごはっ!!!?」

成層圏付近で腕を掲げたセルを、そのままオゾン層を突き破り、熱圏まで蹴り上げる。

俺は、自ら蹴り上げたセルを追い……更に、飛行姿勢のまま、両拳で突撃。

更に、星空へと向かってゆく。

「きさま死ぬ気か!! 人間が宇宙に出て戦うなど……!」

「最早そんなもの関係ない!!」

気圧低下、酸素の不存在、宇宙線、苛烈な日光、太陽風——そんなものを物ともしないほどに、俺は常に最強だ。

……遠くから、声が聞こえた。

『怒ってるのか、ソシルミ』

声は、プリカだった。

(そうだ、俺は怒っている、お前は間違いだと思うか?)

『おまえはついに、守りたいという気持ちを受け入れたんだな、楽しんで戦って、自分に負けたくないよう鍛えて……最後に必要だったのが、きつとそれなんだ』

俺とセルはもみ合いながらも、更に、はるか上へと突き進む。

『あの鎖……おまえにはわかるよな、世界はオレたちの意思だけじゃない、たくさんの繋がりで動いてるんだ、おまえは世界と自分のために、精一杯戦って、精一杯関わってきたんだ、世界を食いつぶしていくだけのセルとは、全然違う』

このプリカの声がどこから来ているのかすら、俺にはどうでも良かった。

『途中までの地図とコンパスは持ってたかもしれないけど、おまえは自分の心と努力で、自分だけの道を作ってきた、どこかもわからない場所を目指して進んできた、なら、あんなやつには負けないはずだ、そうだろ?』

その通りだ。

これこそが俺にとって、真に

俺が心の中で頷いた時……俺とセルが向かう先には、青白いかたまり……月……が、ぼんやりと浮かんでいた。

「まさか、生身のままここまで来るとは……だが、丁度いい、わたしも余計な心配をせず、きさまを葬れるというわけだ!!」

「セル………」

強い力を持った敵が、正面戦闘に応じたというのに……俺の心は、喜びよりも怒りに満たされていた。

俺はレゴリスに脚をつけたまま脱力し——最高速度で、セルへと八手拳を叩きつけた!!

「ぐっ……!!」なにを今更怒ることがある、アエ・ソシルミという男はそこまで粘着質だったか!!?」

「……セル、お前は……」

初撃を防ぎ、セルは自らも八手拳を放ちながら、抵抗するかのようには減らず口を叩く。

それに答えるため、俺はついに、言葉をひねり出す。

セルの言葉の通りだ、俺の想いは、移り変わっていた。

「お前は、何故強さを望みながら、自ら技を作り上げなかった、……何故、自ら体を鍛え上げなかった!」

「は……?」

八手拳——最早、進化し続けるそれにいちいち名をつけることすらナンセンスとなった技——を交わしながら、俺の声は、テレパシーは次第に大きくなっていく。

そうだ、今俺が抱いているこの怒りは、セルにされたことへの怒り、セルがしようとしていることへの怒りではない。

「何故、有名無実と分かっているゲロの命令に従い続けた、何故高い知能で自らを改造しようとしなかったのだ、何故……お前は!!」

怒りのままに高まる気をぶつけながら、俺は叫ぶ。

叫びは最早止まらず、叫びとともに叩きつける拳は次第に、セルに打ち勝ちつつあった。

「……なにを今更、きさま——」

「うおおツツツツ!!!!!! セルツツツ!!!!!!」

何故、どうして、お前は。

お前は。

「何故、俺の力を使えないことを自覚しながら、俺に学ぼうとしなかった……!!!」

「だから、なにを言っているんだ!! きさまはわたしに、なにを……!!」

セルの顔が、単に理解不能な言葉を叩きつけられたということ以上の、疑問に包まれる。

だが……最早、その疑問は俺にとっても、セルにとっても手遅れだった。

八手拳が、その速度を更に高めると、セルの拳がふらつき、ついに……限界の時が、やってきのだ。

「——セルツツツツ!!! お前はアツツツツ!!!」
嘆きと共に放たれた俺の八手拳最後の一撃がセルを撃ち抜く。

抵抗する力を失ったセルは、月面の低い重力にただよいながら、……ただ、愕然とした表情をしていた。

「なんだこれは、きさまは……なにを……」
俺は両腕を上げ……背中を鬼を哭かせて。

「セル、お前は、お前は何故ツツツ!!!」
レゴリスを踏みしめ、月の石を踏み砕き、静かの海を割りながら、俺

はエネルギーを練り上げ、収束し——
「な、泣いているのか、きさま……!!!?」

「どうして、俺達の前に現れて、どうだ俺と競ってみると叫ばなかったツツツツ!!!」

「アエ・ソシルミ、一体どういう——」

セルは俺の拳によって、月の地平線の先、地球の方向へと突き進み……。

俺の怒りも、自らの動揺も理解出来ぬまま、最後の拳によって突き込まれたエネルギーの破壊的な作用によって……セルの肉体は、その体の混ぜ合わせた細胞の一片も残さず燃え上がり……宇宙と同じほどに黒いススとなった。

「……………終わりだ」

時を同じくして、地球から、青く大きな塊が持ち上がる。

元氣玉が、最終形態のフリーザを飲み込んで宇宙へと飛び出してゆき……そして、弾けた。

あれは、地球人が嘘偽りのない要請に答え、自ら元氣を差し出して作った、元氣玉だ。

「地球に……帰らないとな」

重力が低いさから流れ落ちず目尻に留まった涙は、真空状態によって沸騰する。

涙は俺にだけ聞こえる音を立てながら弾けて、宙へと漂い……。

ゆっくりと落ちてくるススと混ざり合いながら、月の地面へと積もってゆく。

俺は月面を静かに離れ、滲んだ視界に映る、平和を取り戻しつつある青い星へと飛び立った。

「また来いよ」

↓つづく

エピローグ

南国の晴天にかかる雲に混ざりこむように、色付きの煙が弾け、一瞬遅れて音が届く。

それが数回繰り返され、小太鼓と何か管楽器の織りなすけたたましいファンファーレが響き渡れば、宴の始まりだ。

四角い石畳の中心で、見慣れたアナウンサーがマイクをとった。

「われわれ人類……特に、格闘技を愛するひとびとは今、もつとも幸運な時代にいると言えるでしょう！ 地球最強の戦士とはすなわち、宇宙最強の戦士と豪語しても誰も文句を言わない時代です!!」

演説に答えて歓声上がる、俺も叫びたいほどだ。

だが、やってくる宴の興奮はこんなものでは足りない、俺が叫ぶべきは……その舞台の上だ。

自分の演説に湧き上がる歓声に張り合って、アナウンサーはぐつと息を吸い込んだ。

「すう……、宇宙最強の戦士を見たいかーっ!!!?」

「わーっ!!!」

観客達の多種多様な言葉はすべて、肯定だけを意味する雑音に溶けた。

アナウンサーもまた、意味をなさない叫びを上げたい衝動にかられているのだろう。

そんなわななきをこらえて、更に言葉が続ける。

待ち望んでいた言葉だ、俺ですら……その言葉の先に訪れる光景を知らない。

「全選手入場です!!」

また、観客が弾けると同時に、石畳……武舞台を踏みしめ、よく見た髪型が現れた。

惑星ポポルにいるカエルのフンの色、もとい、山吹色の道着。

「第23回天下一武道会優勝者!! 武天老師の一番弟子!! フリーザ撃破の立役者!! さっそく優勝候補の登場だ、孫悟空選手の入場で

す!!!」

悟空は気恥ずかしさにポリポリと頭をかきながら所在なげに武舞台をうろつき……係員にひっぱられて、武舞台の端に誘導される。

そのとき、続く選手は、既に武舞台の端に足をかけていた。

「第23回天下一武道会準優勝!! サイヤ人撃退、フリーザ戦役の英雄にして、ピッコロ大魔王の遺児……マジユニア選手の登場だーっ!!!」

どことなく不服そうな顔をしながら、悟空の隣に歩いていくピッコロ。

さてここまでは順当、次はいかに？

そんな観客や各選手の目に答えるように、次の男、大男が飛び込む。清潔感あふれるその佇まいはまさしく――

「次は知る人ぞ知る名選手、バクテリアン選手の入場です!!! かつてはヒール路線を歩んでいた彼ですが、突如路線変更、体格と生来の怪力を生かした王道のファイターへと変貌を遂げて各地を転戦、戦役時にはフリーザ軍の指揮官を倒したとの噂もあります!!!」

噂……あいつの体から立ち上るパワーを見て、その噂に信憑性を感じぬものがあるならば、モグリだろう。

ニカツと笑って女性ファンに答えるバクテリアンの、(差し歯で)歯並びバツチリの口元からあふれる光に対抗するように、次の輝く選手が現れた。

「この光はーっ!! クリリン選手です!! 孫悟空選手と同じく武天老師の直弟子! 第21、22、23回天下一武道会本戦出場、いずれも第二試合までに敗れつつも名試合を演じ、その技術力と戦略性に長けたバランスのよいスタイルには一定のファンが存在しております!!」

傍目にもそう評価できるのか、観客の目も、そこまで肥えてきたのか。

俺が目を細めると、それとは違う意味で……眩しさに目を細めながら、薄紫色の男があぐらをほどき、両足を揃えて武舞台へと降り立った。

「魔界の名士、シユラ選手!!! フリーザ軍戦役のために地上と同盟を結んだ彼は、かつて戦いを通じて友情を結んだという『ある戦士』の願いに答え、あまり得意ではないという太陽の元へとやってきました! 我々は人間のそれとは全く違う未知の格闘を見ることになるでしょう!!!」

観客達が、これまでに勝るほどの雄叫びを上げる、分かるぞ、未知の武道との遭遇は常に至上の喜びだ。

しかし、皆には悪いが、もう味見どころか、レシピの交換までさせてもらった。

だが、この俺が手を入れたことも含めて皆の衆の喜びとなるだろう。

俺は心の中で約束していると、次の選手が、シユラに対抗心を燃やすかのように小さくホバリングしながら現れ、音を立てて武舞台へと着陸した。

「空を飛ぶのは翼を持つものの専売特許だ!! とばかりに現れましたのは、ギラン選手!!! 彼も以前から名の知られた武道家でしたが、ここ数年の間に持ち技の『グルグルガム』に磨きがかかり、戦役時には多数の円盤をまとめて叩き落としたという情報も届いております!!!」

天下一武道会、予選落ち組二人目……彼もまた、いかなる理屈によつてか立ち上がった。

あの日の野蛮なる戦士のまま、俺にとっては全く未知の形で力を増した戦士の存在に胸が高鳴る。

一切の未知、俺がこのトーナメントに望むも喜びの一端がここにあるのだ!

そして、かつて俺達にとつて全く未知であったあの存在が、静かな駆動音とともに武舞台へと歩みを進めた。

「試合より戦を重んずる軍人なれど、武への想いへは武道家以上! 王立防衛軍のサイボーグ軍人、ガストリ選手、武装ユニットを取り外して登場だ!! お話によると彼は武道ファンであり、自らのプログラムにも武道の動きを取り込んでいるとのこと、それもまた武の形な

のかーっ!!?」

機械と一体化した兵士である彼は、あの戦いの後、なんと無事ボディを修復、強化改造されこの世に舞い戻ってきた。

格闘技こそ移植されたものだが、その戦術能力は戦争を通じて遥かに向上していることだろう、ついぞ名前を聞くことはできなかったが、サイボーグ軍人という肩書通りの戦い方を見せてもらいたいものだ。

……っつーか名前初めて聞いた。

「さあ、お次は本大会三人目の、武天老師の弟子、ヤムチャ選手です!! 同門の孫悟空選手がパワー、クリリン選手がテクニクなら、ヤムチャ選手の領分はとにかく鋭い動きと肉弾戦、そして奇襲攻撃にあるといえるでしょう! 本大会でも、その狼のような鋭さは炸裂することでしょう!!」

ヤムチャの力は、自ら語る狼のイメージに一致する。

素早い動き、群狼のごとき追い込み、喰らいつくあぎと。

常に最前線より遅れながらも『喰らいつき』続ける生き様もまた、飢えた肉食獣のごとく……。

などと浸っている間に、次の選手が既に現れて……いない。

少々もたついているようだ……。

しかし、これで亀仙流は揃ったことになる、お次は何だ?

鶴仙流はまだ一人もいないし、俺の期待する選手も数人残っている、だがそれより望ましいのはギランのような、俺達の仲間じゃない全く予想外の強者だ。

そしてそれはきつと……この大会に現れる!!

しばらくすると、アナウンサーが頭をかきながらすこしどもって、それからしつかりと声を張りだした。

「えー、続いて現れます選手は……あー、ご存知の方は驚かれることなきよう……元フリーザ軍幹部、ザーボン選手です!!! 戦役時に地球へ亡命した彼ですが、フリーザ軍時代は最高レベルの幹部であり、そのパワーはまさしく宇宙クラス!! 地球のテクニカルな武道家たちとの素晴らしい戦闘が期待されます!!!」

亡命……というのが降伏の言い換えであるのは言うまでもない。

現在は軍のオブザーバー兼戦闘指導に勤しんでいるらしい、あれから一年半……彼自身、どう仕上がっているのか、宇宙戦士が地球に馴染めば何が起るのか、楽しみだ。

一方、続けて現れた戦士は、俺にとって『楽しみ』の塊のような人物だった。

「鶴仙流門下、超能力戦士チャオズ選手です!!! 過去の武道会ではいずれも、一回戦で惜敗に終わった彼ですが、その後、心身ともに大幅にパワーアップを果たし、戦役時には宇宙空間のフリーザ軍機を引きずり下ろして破壊していたとの噂も……あ、はいチャオズ選手……噂じゃなく真実……!!!?」

映像でしか見られなかった第23回天下一武道会では、テクニカルさを増した戦いぶりを見せつけてくれたチャオズ。

本来の歴史とは全く違う戦いと敗北を繰り返し、本来は物別れとなるはずだった師に引き続きした実力、見せてもらおう。

……そんな成長株であるチャオズに続いて現れたのは、別の意味での成長株、まさしく成長の途上にある武道家だった。

「さあ、本大会最年少選手の登場です!! 孫悟飯選手!!! 孫悟空選手の息子である彼は、父親を始めとした多くの武道家による指導を受け、話によるとその一派の中でも既に頭角を表しつつあるとのこと、本大会の活躍はもちろん、今後の成長ぶりにも期待できる選手と
言う事ができるでしょう!!」

頭角どころか、既に素のパワーでは追い越されつつある、技術力での追い上げも圧倒的だ。

俺達が生み出した、鍛える孫悟飯という未知が生み出す凄まじいプレッシャーと、わくわく。

武道家は常に追いかけて、そして追いかけられる者、そして、追い抜いたからといって競争は終わるわけではなく……。

「鶴仙流指導者の一人にして鶴仙人の実弟、桃白白選手の入場です!!! 天下一武道会では弟弟子にあたる天津飯選手に破れましたが……なんと、今回は逆に天津飯選手を破り、鶴仙流門下二人目の本戦

出場を果たしました!!」

……追いつかれれば、かつて破った相手に、それも、その勝利に意味を見出した相手に敗れることにすらなりかねない。

武の道においては、兄弟子や師をライバルとしてもよいかもしれないが……俺は、ゴメンだ。

勝利で終わらせ、超えきって見せ、二度と追いつかれはしない。

それでも……天津飯には悪いが、表舞台でその顔と技術を見ることができるのは、俺にとって素晴らしい喜びだ。

「続けて、チャパ王選手!! 天下一武道会優勝者である彼は、なんと53歳、7年ぶりの公式試合となります、しかし、その身に纏う覇気は一切衰えておりません!! その瞳にともる闘志はかつて自らを破った弟子の背を叩くためか、あるいは、体ごと吹き飛ばして破るためか!!」

次は何を引つ提げてきたんだ、また俺に立ちふさがる気か、大人しく後進の育成に注力する気はないのか?

あの目はすべての問いに、雄弁に答えている。

つまり……俺は、なんて幸福なのだろう。

続けて現れた選手も、また俺に幸福をもたらしてくれた。

「本大会二人目の宇宙人選手の登場です!! ベジータ選手!! 彼もまた、地球へと亡命したフリーザ軍兵士のひとりであります……地球への到着が最近であったため情報は多くありません、ただ……戦闘民族サイヤ人のエリートである、とのことですよ!!」

最近なのは地球への到着ではなく、復活だ。

ドラゴンボールによつて『フリーザ達によつて殺された命を蘇らせてくれ』という願いを叶えたのが今からほぼ半年前。

銀河パトロールの追跡から逃れながら宇宙を放浪していたベジータ達にコンタクトを取り、地球に招いたのが二ヶ月前。

……大会に間に合つて、本当によかつた。

「続きましては、キャリア一切不明、……ブルー選手!! 予選での戦いから、超能力者ではないかと噂されておりますが……その戦いぶりについては、皆さま自身の目と感覚でお確かめいただきましょう!!」

ブルー……？
ブルー將軍!!!?

生きているのは知っていた、俺が生かした……だが、どこに潜んで、なんで大会に参加を……？

というか、勝ち抜くだけの実力を手にしたのか、嬉しいが……え？

「それでは、最後の選手に入場願いましたよう、本大会……『天下最大トーナメント』の提案者の一人にして、運営協力者であるあの人も、無事に予選を勝ち抜き、本戦へと出場を果たしました——」

混乱したままの俺に、係員が目配せしてくる、この心境で出るのは少し嫌だ……が。

何を隠そう、俺はヨガの達人！

この程度の困惑、おくびにも出さず、愛想を振りまいてくれよう。

俺はうす暗い入場口を飛び出し、一気に武舞台へと……!!

「——天下一武道会準優勝一回決勝戦ノーコンテスト一回、地球に迫る数々の危機を撃退してきた英雄の一人……アエ・ソシルミ選手、堂々の入場です!!!」

どつと歓声が吹き上がると、決意とヨガを突き破って額に汗が滲んできた。

興奮と羞恥に汗ばんだ腕を振り、笑顔で戦いを愛する人々の声援に答える。

5月とはいえ、南国の陽気も手伝って……試合前のコーラの本数を増やさねばならん。

「以上、本選手16名に加え、リザーバーとして選りすぐりの4選手を招待いたしました!!」

武舞台へと、3人の人影が登ってくる。

……一人足りない分、遅れて『未到着』と書かれた札を持った係員が現れた。

「孤高の用心棒、ヤジロベー!! チャパ王の二番弟子、ラパータ!!

タンドール王国の最新格闘兵器、鉄人拳28号!! ……!! 申し訳あ

りません、もう一選手は到着が遅れており、到着次第のご紹介となります!!」

あつてはならぬことだが、これで誰が戦闘不能となろうと、俺にとってソンはないのが保証されたわけだ。

だが、更に嬉しいことをアナウンサーが言うのも、既に俺は知っている！

アナウンサーは高所に配置された選手・関係者席の、ひとときわ豪華で隣り合った席に座る、二人の老人を手で指した。

「更に、本大会の二回戦終了時には、エキシビジョンマッチとして、なんと!! あの武天老師と呼ばれた亀仙人さまと、並び称された兄弟弟子である鶴仙人さまによる大会ルールでの試合が予定されております!!!」

自らも興奮を隠しきれないという様子のアナウンサー、だが、会場の熱気の上がりようはそれ以上!!

汗を震わせ、弾かんばかりに響き渡る観客の歓声、雄叫び、拍手。武というものを……武道家の戦いを愛する人々が、ここまで集まるとは……。

「それでは、国王陛下より、開会の挨拶を——」

選手控室のホワイトボードに丁寧に書きつけられた図形と、16の名前。

「素晴らしい……ッ」

思わず漏れた声は、心からの言葉だった。

このトーナメントは……一から十まで喜びの塊だ!!

Aブロック

第一試合：ソシルミVSクリリン

当然俺が戦うという時点で俺にとって興奮を禁じえない試合ではあるのだが、特筆すべきは誰かのはからいか、はたまた運命か、第一試合でクリリンとの試合ということだ。

クリリンと直接拳を交えるのは久々だが……クリリンは一体何を掴んできたのだろうか。

それに、クリリンのことだ、俺への対策も練ってきてくれてるに違いないぞ！

第二試合：チャパ王VS桃白白

師匠と桃白白の試合とあらば、実力もおそらく伯仲、更に、互いに長い格闘経験と老練さを持っている以上、派手さ以上に、幅広い技術と戦術を備えた者同士の深みのある試合を観ることができらるだろう。

師匠が俺や他の皆に隠れてコソコソと何かヤバげな技術を鍛え上げているのは察知している、天津飯を破ったという桃白白もそれは同じだろう。

そしてもしこの試合で師匠が勝ったとすれば、二回戦では再びの復讐戦となる、俺も、天津飯の二の舞いにならぬよう努力せねばなるまい。

第三試合：サイボーグVSバクテリアン

自分で言うのもアレだが、俺の影響を色濃く受けて運命が変わった二人の戦いだ。

数々の武道家の戦闘法を機械によって取り込み、それを兵士の頭脳で切り替える特殊な戦士と、かなり王道の肉弾戦ファイターであるバクテリアン。

それぞれの戦士の特徴や運命からすると異色だが、近接戦を好む物理重視の戦士同士の戦いだ、きっと楽しくなるだろう。

第四試合：マジユニアVS孫悟飯

………実はこの二人、この歴史においてはほとんど接点がない。悟飯にとつてピッコロへの感情は殆どないのだ。

ピッコロからも、せいぜい、自分を破った二人目の男である孫悟空の息子、という程度。

だが……だからこそ、その縁を結び直せるかもしれないこの戦いには、深い興味を抱かざるを得ない！

本質的には歳の近い二人だ、元の歴史とは違う絆というものがあり

うるのならば、俺は存分にそれを見守り、助けよう。

Bブロック

第五試合：チャオズVSブルー將軍

鶴仙流と在野(?)の超能力戦士対決であり、俺からすればかつて続けざまに戦った二人の男による戦い、だが……。

それがどういうものになるのか、一切見当もつかない。

二人の技量は？ エネルギーは？ すべてが闇の中だ。

だからこそ……面白い!!

戦いの全容を知れるのはおそらく感覚に優れた俺くらいだろうが、存分に楽しませてもらう。

ところで、ブルー將軍？ 元將軍？ はレッドリボン軍っぽいワツペンをつけているが、一体何なんだ？

レッドリボン軍への帰属意識を忘れていないのか、まだ残党でもいるのか？

第六試合：孫悟空VSギラン

いよいよ我等の悟空の登場だ。

本来の歴史よりはるか10年以上遅れての試合となる本試合……いかなる試合運びとなるのか？

ギランも大分腕を上げたようだが、それがいかなる手段、いかなる形によつてのものか？

一切不明極まる、本大会本命とダークホースの戦い。

悟空は友だが、大番狂わせを期待してもバチは当たるまい……!

第七試合：ベジータVSザーボン

これもまた奇妙な縁だ。

本来の歴史に存在していた戦い、だが……同じく時期が違うばかりか試合形式も異なる。

いや、何もかもが異なると言っていいたいだろう。

あの二人が地球の武道大会で戦うなど、誰が想像した？

未知の世界が今から始まるのだ。

第八試合：ヤムチャVSシユラ

一回戦最後の試合、この組み合わせは接点が……そう、俺しかない二人だ。

この歴史の中で、ヤムチャは俺に影響を受けて技術を進化させ……シユラは俺の技術に大きく影響を与えた。

色濃く影響を与えあつた戦士同士の戦いは、俺に、俺自身を見つめる機会を与えてくれるだろう。

友同士の戦いにはそれ以上の喜びもある。

全試合が喜びに満ちている、素晴らしい夢の時間……。

「……い……ソシル……」

更に、エキシビジョンマッチの亀仙人と鶴仙人の試合、これも最高だ。

今の武道界を牽引する巨大流派2つの始祖による決戦にして、武泰斗の兄弟弟子の因縁の対決。

俺が気絶して見れなかった『亀仙人、鶴仙人、桃白白によるピッコロ大魔王相手の防衛戦』の後悔を拭い去つてお釣りがくる。

登場を望んではいけないが、リザーバーの皆も素晴らしい（実のところ招待は俺が行つたので、これは自画自賛だが）。

野生の猛者ヤジロベエ、我が弟子ラパータ、地球の科学とプリカの努力の結晶たる鉄人拳28号、そして――

「ミーツーシールー!!!」

「うわツツツ!!!」

耳をつんざく爆音に振り向くと、悟空が俺の耳をつまんで不満げな顔を向けてきていた。

こ、これは……。

「んもー、ときどきこんな風にぼーっとするんだよなあ……」

「試合が楽しみすぎて、ちよつと……ハハ」

本当に悪い癖だが、こればかりはやめられない。

これこそが……。

「ま、ミソシルはぼーつとするくらい戦うのが好きだから、こんな強えんだろうな」

……………。

「……ああ、そうだとも、全くその通りだ、悟空」

「ん？ オラ変なこと言っちゃまったかな」

「い、いや……」

まさしくその通り過ぎて、理解されたのが嬉しくて、つい言葉がたどたどしくなってしまった……などと言えるはずもない。

我ながら少しキモいな、……一通りの緊急事態が終わってから、少し気が緩んでいる。

どう言い訳しようかと考えていると、後ろから力強く俺を押しつける手と、声。

「邪魔だ、ソシルミ、カカロット」

「おー、ベジータ！ おめえまでトーナメントに出てくれるなんて、オラちよつとびっくりしちまったぞ」

「誰が好き好んできさまらの馴れ合いの大会に参加するもんか、このベジータさまを差し置いて最強を名乗るのが許せんだけだ」

つまりそれは俺達の大会を認めているということじゃないか、と言えばやぶ蛇だろうな……。

口をもごもごさせた俺の横をさつさとすり抜けたベジータは、ホワイトボードを一瞥するとさつさと踵を返した。

「おいベジータ、他の試合は気にならんのか？」

「ふん、誰が上がってこようとやることは同じだ、ザーボンなど今のオレの相手にもならん、相手になるのはきさまらだけだ」

いや、地球にはまだまだたつぷり戦士がいる……と、ベジータに忠告してやろうとするが、その役目を買って出るように、後ろからベジータの肩に手を置く男がいた。

「そいつは聞き捨てならんな、おまえが来た頃から、地球人も大分進化してるんだぜ？」

「ヤムチャー！」

「ほう……なるほど、このベジータさまを相手に試合前に小手しら

べでもしたいというわけか？」

「そういふことにしてやってもいいぜ……!!」

肩に置かれた手を掴んでベジータが凄むと、ヤムチャも応じて静かに両者のエネルギーが膨れ上がる。

つまみ食いのな力比べ、これもまた一興。

ブリーフ博士に頼んで、控室の強度を上げてもらった甲斐があったというもの！

「ふん、なるほど、パワーだけならあの戦いの頃のオレを上回っているようだ……が!!」

……わずかに、手が肩から浮き始めた。

「なっ……!!?」

「ここから更に一撃……なんてな、おまえが勝てば二回戦で当たる、その時を楽しみにするんだな」

呆然としたヤムチャ、そして笑う俺と悟空が立ち去るベジータの背中を見送るのを見計らうように、『ちゃんと見てんじゃん……』とツツコミが上がった。

振り向くと光る頭、クリリンだ。

「むっ……、いまオレを頭で見分けやがったな!」

「いやあ、はは、……もつとハゲだらけの大会になると思ったが、肌色のハゲはお前だけになってしまった」

「くそ、直接言いやがったな……外で会ったけど、ナツパはギランに負けたってボヤいてたよ、ベジータに合わせる顔がないってさ」

さすがクリリン、一戦交えただけのナツパと話してそこまで聞き出すとは。

……じゃない!!

「え~~~~ツツツ!!」

「は、はは……驚くよな、オレたち以外にサイヤ人を倒すやつが育つてるなんてさ、でも、ほんどらしいぜ」

「あいつの気はそんなデカくなかったけど、へへ……わくわくしてきた、気もそこそこで、機械つてわけでもねえ強えやつもいるんだな!」

……ああ、その通りだ。

遙か未来、開かれるかもしれない『力の大会』のような興奮を、今地上で味わうことができるとは。

俺がまた興奮に浸ろうとするのを止めるように、俺の肩にそつと手が置かれた。

師匠の手だ。

「……いい大会だな」

「でしよう」

「二進一退だったおまえの理想も、ここに来て形になったというわけだ、だが、優勝のよろこびまで譲ってやるわけにはいかんな」

その師匠の肩に、また手が置かれた。

肌色のハゲ減少の原因の一人……桃白白の手だ。

「そやつが味わえんのは優勝のよろこびだけではない、師との再試合のよろこびもだよ、チャパくん」

「ほう、われわれも小手しらべと洒落こみますかな？」

またも始まりつつある場外戦を見守っていると、鶴仙人とチャオズ、それに付き添いの天津飯が来て仲裁したり更にケンカに発展したりしている。

師匠も老いることを知らないお方だ……。

そうこうしているうちに、ホワイトボードの前からは選手が引いて、代わりになんとなく立ち止まっていた俺と悟空、クリリンの周りに集まるように、亀仙人とヤムチャがやってきていた。

「亀仙流はこれで勢ぞろいというわけだ、……いや、悟飯はどうした？」

「ああ、悟飯のやつ、チチに捕まっちゃまってな、なんかすげえじつくり準備体操やらされてるんだよ」

「……なるほど」

頭をかく悟空に合わせて、俺は瞑目する。

どうやら、悟飯は戦いを生き方に組み込んでもお、過保護からは逃れられんらしい……。

そこから2、3世間話をしてしていると、ピッコロとシユラが連れ立つ

てなにやら辺りを見回しながらこちらへ近づいてくる。

あまり見ない組み合わせだ……という目で見たらすぐさまバレて、ピッコロに釘を刺された。

「なに、魔族独特の世間話もあるってことだ」

「ルシフェルのやつが魔凶星から帰ってくるのも遅れているが、あれにも結構魔族ならではの事情があつてね」

半年前、魔族の故郷である回遊惑星『魔凶星』が地球に接近したとき、ルシフェルは配下の生き残りを連れて魔凶星へと帰り、ダメージを受けた体の静養と5000年分の諸々の処理を行っていたのだ。

俺は前々から、あいつらの一派とも融和を進めたいと想っていた、だからこの大会への招待を行い……あいつも、渋々ながらそれに乗ってくれた、のだが……。

「なに、魔族選手は十分数がいるんだ、そう残念がることはない」

「とはいえ、きみはもうそろそろ魔族じゃなくなりそうだけどね」

確かにピッコロは最近、気配の禍々しさが落ち着き、すっかり神様のそれに近くなつてきている。

だが、やはりデリケートな問題なのだろう、生暖かい目で見られるのに反発するように、ピッコロは大声を上げた。

「うるさい！……そんなことより、ソシルミ……プリカはどうした？ まさか予選落ちでもしたと言うんじゃないだろうな」

「プリカは……」

顔を真剣なそれに変えて語りだす俺を前に、クリリンと亀仙人が、ゴクリとツバを飲む。

「な、なにか試合に出られない事情があつたのかの？」

「ああ、それは……」

俺はめいっぱい深刻な顔をして、意識を背後に向ける。

事態を飲み込めない様子の悟空がコテンと首をかしげた。

「……？」

そして、俺の呼びかけに答え……。

背後にある通路の向こうから、ゆつくりと、一人の影……ともう一人、あるいは解釈によつては更にもう一人が、姿を表した。

「いいっ!!?」

困惑の声の数は、思ったよりも大分少なく、亀仙人辺りは『やつとか』という眼差しを向けてくる始末だ。

ここまで来れば、プリカ不出場の理由は誰の目にも、明らかである。現れたのは、一人の子を抱き、お腹を大きくしたプリカだった。

「紹介しよう、我が息子『ヤマモ』だ、それともうひとり」

「まだ名前も考えてないけどな、……なあソシルミ、たったこれだけのために外に突っ立ってる必要あったか？」

プリカのジト目がしみる。

一方のヤマモは偉いものだ、こんなたくさんの見知らぬ大人に囲まれてもこゆるぎもしない、流星は俺達の……あ、いや、寝てるわコイツ。

だが、ヤマモは実際大したもので、エネルギー量も既にそこそのレベルに達している、才能をエネルギーで図ることはしないが、やはり嬉しくなってしまうのが親の情というもの。

「おいおい、こんなに大きくなるまでナイシヨだなんて水臭いぜ！」

「ここしばらくは忙しくてわざわざ会う時間も取れなかったからな……ま、それならせっかくだし、サプライズってな」

「へへ、オラとヤムチャは先に聞いてたけど、あらためておめでとな、ミソシル、プリカ！」

ぽつぽつと仲間が祝福してくれる中、ピッコロもまた納得を示しかけて、それはすぐに疑問へと変わった。

「な、なるほど……いや待て、一人産んでもう腹がでかいということは、きさまあの戦いからすぐ……」

「……ッ……」

「うっ……それは……」

あまりに的確な疑問!!

俺とプリカの顔は同時に赤くなり、足は同時に後ずさる。

「そ……そういやそうだな、おまえ……うらやましいやつ……!!」

「ほっほっほ、ちよつと話を聞かせてもらっても……」

即座に喰らいつくのは亀仙流師弟!!

……が、助けが来るのも早かった。

「まあまあ、いいじゃんかよ、結局なんだかわかんなかったけど、ミソシルもプリカも結構色々悩んでたみてえだし……あの戦いで、全部解決したんだよな？」

「……ああ、悟空、全部済んだよ、……ありがとう」

「本当かい？ きみはいつも秘密のうちにたくさんの問題を抱えるじゃないか」

シユラの言うことはもつともだ。

懸念事項自体は……山ほどある。

ドクター・ゲロは行方不明だし、こっそり捜索中の魔人ブウは見つからない。

地球上でも宇宙でも、変な連中がちらほら活動している。でも。

「全部終わった、そうだな、プリカ」

「ああ、終わった……だから、オレたちはこれでいいんだ」

控室の隅に並べたるは、タツパのおじや、炭酸抜きのコーラ、バナナ、梅干し。

それを一口自分で食っては、四分の一口、抱えたヤマモに食わせてゆく。

「ガプ……ムニョ……ムグ……」

「んちゅ……ん……む……」

うむ、大した食いつぶりだ。

「……本当は離乳食の時期なんだけどなあ」

「サイヤ人と範馬のハーフだ、胃袋に関しちや宇宙クラスの才能だろう」

「子供が育ってるのに文句言えないけどさ……、せっかく調べたつてのに」

いくら調べようとお前の料理を子供に食わすわけには蹴られた。膨れた自分の腹と俺の胸のヤマモ、そして飯の上空を避け、埃をは

じくエネルギーバリアまで張る素晴らしい技巧である、無駄すぎる。

「はあ……、そういやソシルミ、面会の話どうなった？」

「面会？ ああ、地獄のことだな」

「そうそう、セルと会うんだってはいやいでただろ、神様にムリ言つてさ」

「ああ、会えなかったよ」

俺の望みが叶わなかったことを聞いて、プリカは少しだけ顔を曇らせてくれた。

だが、俺は反対にほほえみ、それを見たプリカは訝しげな顔になる。「会えなかったと言っても、閻魔様を通してくれなかったわけじゃない、セルはもうどこにもいないから、会えなかったんだ」

「……いないって、まさか成仏したってことか？ あいつが？ あの執念深いセルが？」

すごい疑われっぷりだ。

目の前で俺が嬲られているのを見たプリカには相当深い感情があるんだろう。

とはいえ、俺もセルには色々思うところがあるから、わざわざ閻魔様を訪ねたんだ。

その思いは……もしかしたら、会う前に叶ったのかもしれない。

「ああ、妙に抵抗が薄くて鬼も皆混乱してたらしい、そしたら、収監後すぐに浄化が終わって、今は転生待ちなんだとか」

「あいつが……」

一瞬だけ沈黙が流れる。

「ん!!」

「ああ、すまん、手が止まってたな」

俺が再びヤマモに飯を食わせ始めても、プリカは神妙な顔でこっちを見たままだ。

その顔は、呑気に見惚れるにはあまりに意味ありげだった。

「……なにか……おまえのいつものなにかが通じたのかな、セルに「かもしれない」

「セルは、一体なにに生まれ変わるんだろうな、できれば……」

「俺は……セルがもう一度現れたなら、今度は仲間になりたい、あんな手遅れな状況になる前にしっかりとぶっ倒して、説得もして、一緒に鍛えて競い合いたい」

俺がそう言うと、プリカの神妙な顔から力が全部抜けた。

「はは……、おまえはそーいうやつだよ、うん」

褒め言葉と受け取っておこう。

「逆に……、ラディッツは実はまだ成仏してないらしくてな、あと数年は持つ、どうだ？」

「どうだって……オレに言うなよ、騙して殺したんだぞ、蘇ってほし
いなんて言えるわけないだろ」

「じゃあ俺任せってことだな、任せろ」

プリカはそこそこ本気でイヤそうな顔で、少しだけ頬を吊り上げて両手を挙げた。

「わかった、降参だ、おまえに任す、兄さんを頼んだ！」

「おう、その代わりと言っちゃなんだが、親父探しには付き合ってくれよ」

「親父さんに会いたいののはわかるけど、それこそ、神龍とか神様に頼めばいいのに」

「やり方はいくらでもあるが、自分の親だ、この手で探してみたい、……親父もそうしたんだろうしな」

俺がそう言うと、プリカはそっと微笑んで手を握ってくれた。

……食事が止まったヤマモが嫌そうな顔をするまで。

「あつ、ごめんなヤマモ！ ……ま、まあ……しばらく敵は来ないだろうし、ちよつとくらい欲張ってもいいよな？」

「……いや、それは違う」

「違う？」

「強くなる代わりに幸せになるんじゃない、俺は……それで強くなるんだ」

新たなものを得るだけじゃない、失ったものも拾い集めよう。

いくらでも欲張って、全部腹の中に入れて、それで強くなってやる。

範馬、強いんだ星人つてのは、そういうもんだ。

「……相変わらずだなあ、おまえは、会った時のまんま……いや、あの頃よりもっとだ」

「もつとどうなんだ？ 聞いても……いや、やめておこう」
蹴られそうだ。

顔を赤くしたプリカがじつところちらを睨む、ちよつとくらい堪能してもいいか。

なんて考えていたら、控室に係員がやってきた。

「ソシルミ選手、クリリン選手!! 試合開始5分前です!!」

さて、補給は既に万端、後はわずかにエネルギーを練り上げれば、試合に望むばかりである。

ヤマモを預けて立ち上がろうとすると、プリカに小さく裾を引っ張られた。

プリカは喜ばしそうに、しかし真面目に俺の顔を見て、言う。

「あとは、例の科学者をなんとかして、埋まつてるアレをなんとかすればしばらくは安心だ、……おまえの望んだ時代が来る」

「いや、科学者も一人じゃない、神々の問題も結構近いし、宇宙の悪党がいつ現れるかも分からん、ドラゴンボールの悪用の危険もある」

「……そうだな」

「ルシフェルだつてまだ侵略の意思を捨てたわけじゃない、俺達の知らないさらなる敵が出てくる可能性だつて消しきれない、でも……それもちよつと、わくわくするかもな」

プリカはいつも通り顔をしかめながらも、俺の能天気ぶりを楽しんでいるようだったが……。

「おまえなあ………ん？」

その顔は次第に、非難でも喜びでもなく困惑へと変わっていった。

「いや、待て、科学者と悪党はわかるけど、神々ってなんだっけ、そんなのあつたか」

「え？」

いやまて、神々の問題と言っても色々あるが。

思い当たる節がないはずはない、あれは……。

………まさか。

「なあ、プリカ……消費税って、何%？」

「ん？ 5%だけ……ど……」

俺の質問を聞いたプリカは首をくりくりとかしげた。かわいいい、が、そんな場合じゃない！

「……もしかして、もつと上がったのか？」

「そうだ」

まさか今更……こんな……。

思い当たるフシは……ある、そういえばという程度だが、たしかにある!!

……なんだか、笑えてきた。

「ハハ、ハーツハツハツハ!!」

「笑ってる場合じゃ……いや、笑うしかないか、へへ……はは……」

「ハツハツハツハ!! 俺達の仲間最強の道も、まだまだこれからつてことだな！」

ヤマモが何やってんだこいつらとばかりに、笑う俺達を冷えた目で見る。

「くだらないいいわけするなよ、ちよつと、なけてきた……」

「……俺もだ」

でも、先があるってのは本当に幸せなことなのだ。

だから、……蹴らないでくれ。

「天下最大トーナメント第一試合、アエ・ソシルミ選手、対、クリリン選手を開始いたします、両選手、前へどうぞ!!!」

南国の陽気と沸き立つ観客の中、俺とクリリンは再び向かい合う。

「よろしくお願いします」

「よろしく、ソシルミ」

手を合わせて、一礼。

「頑張れソシルミーっ!! ヤマモの前で一回戦落ちとか勘弁してくれよーっ!!?」

「くっそー……ずりいぜ、おまえだけ美人の嫁さんに応援してもら

えるなんて……」

「クリリーン！ わしらはおまえの味方じゃからのー!!」

クリリンが迷惑そうに睨む先には、亀仙流の仲間達、それに……選手・関係者席にあふれる沢山の仲間たちの姿がある。

「取りこぼしたものもあるが、……いい大会だ、存分に楽しもう」

「……やるぞ、ソシルミ」

「ああ」

「それでは第一試合……」

アナウンサーが息を吸い込むのに合わせて、俺達のエネルギーはトツプギアへと上昇する。

そして————号令の瞬間、輝きとナマの拳が激突した!!

↓おわり